

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

第一分冊

第85集

二〇〇四・三

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県教育委員会

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊

A・B区の調査

2004.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第1分冊

A・B区の調査

2004.3

高知県教育委員会

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は高知空港再拡張整備事業に伴う高知県南国市田村に所在する田村遺跡群の発掘調査報告書である。本報告書は「田村遺跡群Ⅱ」の第1分冊である。調査区A区からQ区の内A区、B区の調査成果報告である。

2. 発掘調査及び整理作業は高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局と委託契約を結び、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業を実施したものである。発掘調査は平成8年7月から平成13年12月迄行い、引き続き平成16年3月まで整理作業を行なった。

3. 報告書「田村遺跡群Ⅱ」の編集全般について、小野由香、坂本憲昭、筒井三菜、出原恵三、前田光雄、森田尚宏、吉成承三が協議し、方針を決定した。また宮地啓介、坂本憲彦の補助を得た。

本報告書第1分冊の執筆は坂本憲昭、浜田恵子、森田尚宏、山田和吉、吉成承三が行なった。本文中に各調査区の調査担当者、執筆担当者は記してある。編集実務は前田光雄が行なった。

4. 発掘調査・整理作業の参加者・協力者は以下の通りである(順不同)。また多くの研究者の方々、諸機関から協力、ご教授を賜った。ここでは逐一、芳名をあげないが感謝したい。

<調査員> 小野由香、出原恵三、吉成承三、坂本憲昭、坂本裕一、筒井三菜、浜田恵子、名木 郁、久家隆芳、小島恵子、三橋麻里、田坂京子、山田和吉、畠中宏一、松村信博、松田知彦、森田尚宏、山崎正明、廣田佳久、田中涼子、池澤俊幸、堅田 至、岩本繁樹、泉 幸代、宮地早苗、前田光雄
<調査補助> 川端清司、宮地啓介、坂本憲彦、松田重治、山本純代、武吉眞裕、大賀幸子、澤江和美、岩崎一步、西村譲二、森岡亜依子、小川麻矢、篠田智子、依光譲治、隅田容子、竹村文彦、杉籐伸広、池尻悦子、西内仁美、松本安紀彦、山崎真治

<整理作業> 山中美代子、山本裕美子、西内宏美、井澤久美、竹村延子、松山真澄、門田美知子、小林貴美、黒岩佳子、松村文枝、吉本由佳、吉本さつき、森本佐江子、入野光代、依光 文、池本千鶴、中東まり、和田千恵子、高橋由香、佐藤雅子、土居初子、弘光明子、岡林早苗、畑平裕美、岡崎正子、池本昌子、田村美鈴、大谷亜紀子、中村千代、岡林 光、竹本真紀、森田智恵、井上博恵、原美智代、飯田緑、益井和子、北村厚子、青木千登勢、大塚典子、樫尾達子、澤本知子、島崎美恵子、清水芳江、関田真由美、鍋島亜希子、長谷川佐智子、藤本智美、松木由紀子、松村みち子、宮地由佳、明神寿美、明神珠代、山崎美香、吉本加奈、浅井乙歌、石川正明、上田のぞみ、岡林理絵、末政淑子、竹本真紀、西村由里、野中朋子、山中康寛、山安智子、吉本 緑、依光真理、山口知子、松木富子、浜田雅代、橋田美紀、宮地佐枝、大原直美、元木恵利子、松田美香、森川 歩、横山めぐみ、山崎邦代、川添明美、土居江里子

<事務補助> 三谷実岐、鈴江安代、谷村容子、小松真由美、西川涼子、盛田和子

<発掘作業> (株)鴻池組、東海興業(株)、りんかい建設(株)、四国土建(株)、(株)浅沼組、鉄建建設(株)、(株)共運

<設計・施行管理> (社)高知県建設技術公社

<遺物実測・トレース> (株)アルカ、(株)大成エンジニアリング、(株)武蔵文化財研究所、(株)フジテクノ

＜遺構測量・トレース＞ アジア航測(株)、(株)四航コンサルタント

5. 出土遺物等の資料は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが保管している。また遺物の注記名は西暦の下二桁を頭に冠し、遺跡名略記号NTをつけている。調査は1996年から2001年迄実施しているところから、注記名は「96-9NT」、及び「97-1NT」から「02-1NT」となっている。
6. 遺物観察表は膨大な量のためデジタルデータとして本書に添付したCDに収録した。
7. 本書に添付したCDには、本書のPDF及び遺物観察表を収録している。

本文目次

調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
空港拡張事業の推移/高知空港と拡張事業	1
(2) 調査の経過	4
発掘調査の経過/発掘調査体制	4
2. 遺跡の位置と環境	
(1) 遺跡の位置と自然環境	7
遺跡の位置/自然環境/田村遺跡群周辺の地形	7
(2) 歴史的環境	12
(3) 田村遺跡群のこれまでの調査	15
3. 調査の概要	
(1) 調査の方法	17
調査区基準	18
(2) 調査の概要	21
試掘調査/本調査	21

A区の調査

A1区の調査

1. A1区の概要	35
2. A1区の遺構と遺物	36

A2区の調査

1. A2区の概要	39
2. A2区の遺構と遺物	41
(1) 溝跡	41

A3区の調査

1. A3区の概要	47
2. A3区中世以降の遺構と遺物	47
(1) 掘立柱建物跡	47
(2) 土坑	47
(3) 溝跡	58
(4) 柱穴	64
(5) 遺物包含層出土遺物	64

A4区の調査

1. A4区の概要	67
2. A4区中世の遺構と遺物	67
(1) 土坑	67
(2) 溝跡	76
(3) 自然流路	78
(4) 柵列	78
(5) 柱穴	79
(6) 遺物包含層出土遺物	80

A5～9区の調査

1. A5～9区の概要	83
2. A5区の調査	83
3. A6区の調査	83
(1) 遺構	83
(2) 遺物	84
4. A7区の調査	88
(1) 遺構	88
(2) 遺物	88
5. A8区の調査	89
6. A9区の調査	90

A10区の調査

1. A10区の概要	95
2. A10区弥生時代の遺構と遺物	95
(1) 竪穴住居跡	95
(2) 土坑	101
(3) 溝跡	110
3. A10区中世の遺構と遺物	112
(1) 土坑・性格不明遺構	112
(2) 溝跡	113
(3) 土塁	114
(4) 柱穴	115
4. A10区遺物包含層出土遺物	118

B区の調査

B1区の調査

1. B1区の概要	129
2. B1区弥生時代の遺構と遺物	130

(1) 土坑	130
(2) ピット	142
(3) 遺物包含層出土遺物とその遺物	142
3. B1区中世の遺構と遺物	146
(1) 掘立柱建物跡	146
(2) 土坑	167
(3) 溝跡	183
(4) ピット出土遺物と遺構外出土遺物	195
4. B1区近世・近代の遺構と遺物	196
(1) 土坑	196

B2区の調査

1. B2区の概要	227
2. B2区近世以降の遺構と遺物	227
(1) 掘立柱建物跡	227
(2) 土坑	229
(3) ピット	231
(4) 井戸跡	233

B3区の調査

1. B3区の概要	239
2. B3区弥生時代の遺構と遺物	240
(1) 竪穴住居跡	240
(2) 掘立柱建物跡	250
(3) 土坑	257
3. B3区中世以降の遺構と遺物	267
(1) 土坑	267
(2) 溝跡	269

B4区の調査

1. B4区の概要	281
2. B4区弥生時代の遺構と遺物	282
(1) 竪穴住居跡	282
(2) 土坑	301
(3) 溝跡	312
(4) ピット・遺物包含層出土遺物とその他の遺物	321
3. B4区古代の遺構と遺物	323
(1) 溝跡	323
4. B4区中世の遺構と遺物	325

(1) 土坑	325
(2) 溝跡	333
(3) ピット・土坑出土遺物とその他の遺物	335
5. B4区近世以降の遺構と遺物	337
(1) 土坑・性格不明遺構	337
(2) 溝跡	376

挿図目次

調査の概要

1-1図

1-2図

1-3図

1-4図

1-5図

1-6図

1-7図

1-8図

1-9図

1-10図

1-11図

1-12図

A1区

A1-1図 A1区遺構全体配置図

A1-2図 A1SD105出土石器

A2区

A2-1図 A2区遺構全体配置図

A2-2図 A2SK201・202、SD201~203

A3区

A3-1図 A3区遺構全体配置図

A3-2図 A3SB301

A3-3図 A3SK308

A3-4図 A3SK310

A3-5図 A3SK311

A3-6図 A3SK314

A3-7図 A3SK315

A3-8図 A3SK316

A3-9図 A3SK320

A3-10図 A3SK321

A3-11図 A3SK328

A3-12図 A3SK329

A3-13図 A3SK330

A3-14図 A3SD301

A3-15図 A3SD302

A3-16図 A3SD303

A3-17図 A3SD308

A3-18図 A3SD309

A3-19図 A3SD312

A3-20図 A3P3009

A4区

A4-1図 A4区遺構全体配置図

A4-2図 A4SK402・406・408・409

A4-3図 A4SK415・417・418

A4-4図 A4SK425・426・428・429

A4-5図 A4SD404~406

A4-6図 A4区自然流路

A4-7図 A4SA401、柱穴・遺物包含層出土遺物

A5~9区

A5-1図 A5区トレンチ

A6-1図 A6区トレンチ1

A6-2図 A6区トレンチ2

A7-1図 A7区トレンチ

A8-1図 A8区トレンチ

A9-1図 A9区トレンチ

A10区

A10-1図 A10区弥生時代遺構全体配置図

A10-2図 A10区中世遺構全体配置図

A10-3図 A10ST1001

A10-4図 A10ST1001-SK3

A10-5図 A10ST1002

A10-6図 A10ST1002、A10ST1002-SK2

A10-7図 A10SK1015・1016・1018

A10-8図 A10SK1020

A10-9図 A10SK1021

A10-10図 A10SK1023・1025

A10-11図 A10SK1028・1029

A10-12図 A10SK1033

A10-13図 A10SK1035・1038

A10-14図 A10SD1003

A10-15図 A10SK1013・1014、SD1001
A10-16図 A10SD1007
A10-17図 A10土塁 (1)
A10-18図 A10土塁 (2)
A10-19図 A10区遺物包含層出土遺物

B区の調査

B-1図 B区 弥生時代全体図
B-2図 B区 古代以降全体図

B1区

B1-1図 B1区遺構全体配置図
B1-2図 B1SK105
B1-3図 B1SK119 (1)
B1-4図 B1SK119 (2)
B1-5図 B1SK132・138
B1-6図 B1SK163・166・168
B1-7図 B1SK167
B1-8図 B1SK169
B1-9図 B1SK170・172
B1-10図 B1SK173・179・183
B1-11図 B1P1014
B1-12図 遺物包含層出土遺物 (1)
B1-13図 遺物包含層出土遺物 (2)
B1-14図 遺物包含層出土遺物 (3)
B1-15図 B1SB101~105
B1-16図 B1SB106~109
B1-17図 B1SB110・113~116・118
B1-18図 B1SB111・112
B1-19図 B1SB117・119~123
B1-20図 B1SB124~129
B1-21図 B1SB130~132・B1SA101~103
B1-22図 B1SB118・122・B1SA103
B1-23図 B1SK110・111
B1-24図 B1SK111・120・126・133・134・137
B1-25図 B1SK139・140・145-1・145-2・146
B1-26図 B1SK147
B1-27図 B1SK148・149
B1-28図 B1SK150・160・161・165・189
B1-29図 B1SK190・191
B1-30図 B1SK192・195・196

B1-31図 B1SD101~104
B1-32図 B1SD105 (1)
B1-33図 B1SD105 (2)
B1-34図 B1SD105 (3)
B1-35図 B1SD105 (4)
B1-36図 B1SD105 (5)
B1-37図 B1SD105 (6)
B1-38図 B1SD106
B1-39図 B1SD107~110・112
B1-40図 B1P1001・1010・遺物包含層出土遺物
B1-41図 B1SK101~103・107・109
B1-42図 B1SK113~118・144・152・153・155
B1-43図 B1SK113・114・116・118・144
B1-44図 B1SX102・104・113・115
B1-45図 B1SX102・115
B1-46図 B1SX113 (1)
B1-47図 B1SX113 (2)
B1-48図 B1SX113 (3)
B1-49図 B1SX113 (4)
B1-50図 B1SX113 (5)
B1-51図 B1SX113 (6)
B1-52図 B1SX113 (7)
B1-53図 B1SX113 (8)
B1-54図 B1SX113 (9)
B1-55図 B1SX113 (10)
B1-56図 B1SX113 (11)
B1-57図 B1SX113 (12)
B1-58図 B1SX113 (13)
B1-59図 B1SX113 (14)
B1-60図 B1SX113 (15)
B1-61図 B1SX113 (16)

B2区

B2-1図 B2区遺構全体配置図
B2-2図 B2SB201
B2-3図 B2SK215出土遺物
B2-4図 B2SE201側面図

B3区

B3-1図 B3区弥生時代遺構全体配置図

B3-2図	B3区中世以降遺構全体配置図	B4-22図	B4SK607・611・613・618・619
B3-3図	B3ST302	B4-23図	B4SD411 (1)
B3-4図	B3ST303~305	B4-24図	B4SD411 (2)
B3-5図	B3ST306・309 (1)	B4-25図	B4SD411 (3)
B3-6図	B3ST306・309 (2)	B4-26図	B4SD411 (4)
B3-7図	B3ST307・308	B4-27図	B4SD411 (5)
B3-8図	B3ST310	B4-28図	B4SD414・418・419・426・427
B3-9図	B3SB301~307	B4-29図	遺物包含層及びその他の遺物
B3-10図	B3SB308~314	B4-30図	B4SD415
B3-11図	B3SK303~305・311・333	B4-31図	B4SK408・412・413・424~426
B3-12図	B3SK316・317・330	B4-32図	B4SK463・469・479・513・541
B3-13図	B3SK317	B4-33図	B4SK585・587・597
B3-14図	B3SK328・345・357	B4-34図	B4SD403・405・SS401
B3-15図	B3SK310・334	B4-35図	B4P4025・4082・4103、その他の出土遺物
B3-16図	B3SK314・336	B4-36図	B4SK406・407・427・435
B3-17図	B3SD301 (1)	B4-37図	B4SK430
B3-18図	B3SD301 (2)	B4-38図	B4SK442・451・452・454
		B4-39図	B4SK442 (1)
B4区		B4-40図	B4SK442 (2)
B4-1図	B4区弥生時代遺構全体配置図	B4-41図	B4SK442 (3)
B4-2図	B4区古代以降遺構全体配置図	B4-42図	B4SK442 (4)
B4-3図	B4区南壁基本層準	B4-43図	B4SK442 (5)
B4-4図	B4ST401	B4-44図	B4SK442 (6)
B4-5図	B4ST402・406	B4-45図	B4SK442 (7)
B4-6図	B4ST403	B4-46図	B4SK457・462・471・492・504・505
B4-7図	B4ST404・407	B4-47図	B4SK462・471
B4-8図	B4ST405	B4-48図	B4SK478・480・495・497・507・508・515
B4-9図	B4ST408・409 (1)	B4-49図	B4SK517・520・522
B4-10図	B4ST408・409 (2)	B4-50図	B4SK521・531
B4-11図	B4ST410・SX408	B4-51図	B4SK523・525・529・536
B4-12図	B4ST410 (1)	B4-52図	B4SK527・528
B4-13図	B4ST410 (2)	B4-53図	B4SK530
B4-14図	B4SX408	B4-54図	B4SK534・535・538
B4-15図	B4SX409	B4-55図	B4SK554・556
B4-16図	B4SK446・544・545・547	B4-56図	B4SK565・566
B4-17図	B4SK547	B4-57図	B4SK593・SX403・404
B4-18図	B4SK546・550	B4-58図	B4SX402
B4-19図	B4SK550	B4-59図	B4SD402・406~410
B4-20図	B4SK551・553・555・557・559・562・591		
B4-21図	B4SK559・591		

表目次

A1区		B1-5表	B1区近世土坑一覧表
A1-1表	A1区土坑一覧表	B1-6表	B1区弥生土器観察表 (CD)
A1-2表	A1区溝跡一覧表	B1-7表	B1区弥生石器観察表 (CD)
A1-3表	A1区柱穴一覧表	B1-8表	B1区ガラス製品観察表 (CD)
A1-4表	A1区石器観察表 (CD)	B1-9表	B1区中近世遺物観察表 (CD)
		B1-10表	B1区中近世金属製品観察表 (CD)
A2区		B1-11表	B1区近世土錘観察表 (CD)
A2-1表	A2区土坑一覧表	B1-12表	B1区近世石器観察表 (CD)
A2-2表	A2区柱穴一覧表		
A2-3表	A2区土器観察表 (CD)	B2区	
A2-4表	A2区石器観察表 (CD)	B2-1表	B2区土坑一覧表
		B2-2表	B2区墓壙一覧表
A3区		B2-3表	B2区ピット一覧表
A3-1表	A3区土坑一覧表	B2-4表	B2SK215遺物観察表 (CD)
A3-2表	A3区弥生土器観察表 (CD)		
A3-3表	A3区古代・中近世陶磁器類観察表 (CD)	B3区	
A3-4表	A3区土製品観察表 (CD)	B3-1表	B3区竪穴住居跡一覧表
		B3-2表	B3区弥生掘立柱建物跡一覧表
A4区		B3-3表	B3区弥生土坑一覧表
A4-1表	A4区土坑一覧表	B3-4表	B3区中世土坑一覧表
A4-2表	A4区弥生土器観察表 (CD)	B3-5表	B3区弥生土器観察表 (CD)
A4-3表	A4区中近世遺物観察表 (CD)	B3-6表	B3区石器観察表 (CD)
		B3-7表	B3区中世遺物観察表 (CD)
A5~9区		B3-8表	B3区縄文土器観察表 (CD)
A6-1表	A6区弥生土器観察表 (CD)		
A6-2表	A6区中近世遺物観察表 (CD)	B4区	
A9-1表	A9区中近世遺物観察表 (CD)	B4-1表	B4区竪穴住居跡一覧表
A9-2表	A9区土錘観察表 (CD)	B4-2表	B4区弥生土坑一覧表
		B4-3表	B4区弥生溝跡一覧表
A10区		B4-4表	B4区中世土坑一覧表
A10-1表	A10区竪穴住居跡一覧表	B4-5表	B4区中世溝跡一覧表
A10-2表	A10区弥生土坑一覧表	B4-6表	B4区近世土坑一覧表 (CD)
A10-3表	A10区中世土坑一覧表	B4-7表	B4区近世溝跡一覧表 (CD)
A10-4表	A10区弥生土器観察表 (CD)	B4-8表	B4区弥生土器観察表 (CD)
A10-5表	A10区古代・中世遺物観察表 (CD)	B4-9表	B4区石器観察表 (CD)
		B4-10表	B4区ガラス製品観察表 (CD)
B1区		B4-11表	B4区銅製品観察表 (CD)
B1-1表	B1区弥生土坑一覧表	B4-12表	B4区古代以降遺物観察表 (CD)
B1-2表	B1区中世掘立柱建物跡一覧表	B4-13表	B4区中世石製品観察表 (CD)
B1-3表	B1区中世土坑一覧表	B4-14表	B4区近世金属製品観察表 (CD)
B1-4表	B1区中世溝跡一覧表	B4-15表	B4区近世古銭観察表 (CD)

調査の概要

1. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

空港拡張事業の推移

高知空港は、高知県の空の玄関として2,000m滑走路の拡張整備が行われ、昭和59年には長年の懸案であったジェット機の就航が実現された。その後も利用者は年々増加しており、輸送力の増強が望まれていた。これを受けて滑走路500m延長の拡張整備計画が持ち上がった。前回の空港拡張時と同様に、今回の再拡張範囲も高知県随一の水田地帯であり、滑走路拡張対象地の地権者の理解を得ることが必要であったが、再度の空港拡張により水田を奪われる地元では、空港拡張反対の意向が大勢を占めていた。しかしながら、再度の拡張による航空需要への対応は県政の重要課題として位置づけられており、高知空港拡張整備事業実施への努力が続けられていた。

平成3年度以降、空港拡張計画について運輸省、高知県、南国市等により、地権者の理解を求めするために事前の折衝も進められると同時に、埋蔵文化財の取り扱いについても協議がもたれた。今回の空港再拡張範囲には、前回拡張時に県内最初の大規模発掘調査が行われた田村遺跡群が広がっており、遺跡の内容からみても今回の拡張に関して埋蔵文化財の発掘調査が必要であることは事前に確認されていたため、この時点で埋蔵文化財発掘調査計画の素案が立てられた。調査の基本計画は、拡張対象範囲約24万㎡に対し、前回調査の結果等から判断して、約157,000㎡の発掘調査を行うものであり、現地発掘調査を平成5～7年度、整理作業等を平成8～10年度に行う6年間の計画であった。



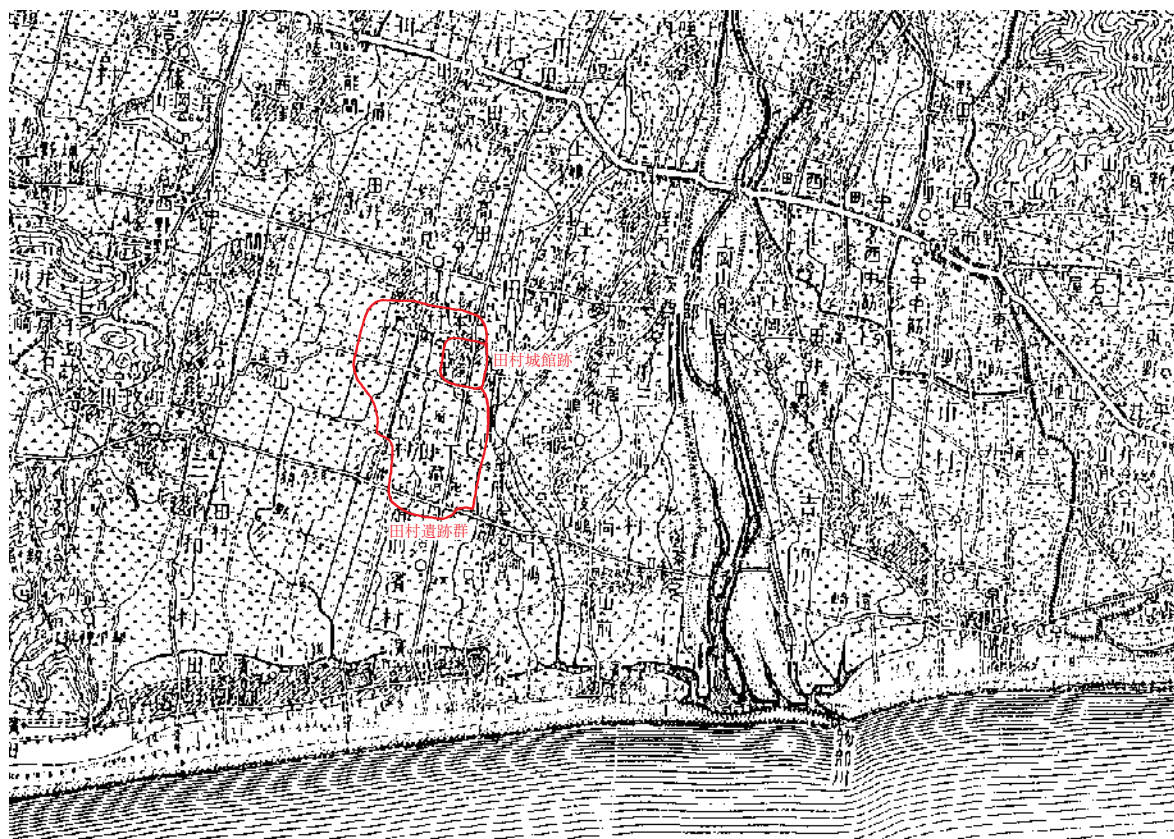
空港拡張範囲航空写真 (2001.12.12)

その後も拡張事業実施へ向けて高知県空港整備事務所を中心に協議を行い、状況の変化に応じて発掘調査計画も変更し、順延されていた。平成7年度には地元の理解も一定得られたことから、空港用途変更告示を受けて予算執行が開始され、県教育委員会でも田村遺跡群の発掘調査に着手すべく具体的な調査計画を策定した。発掘調査計画は平成7年度に試掘調査及び本調査の準備作業を行い、平成8～10年度に本調査、平成11～13年度に整理作業、報告書刊行の予定であり、調査面積は当初のまま157,000㎡であった。しかし、用地買収の遅れ等により現地調査着手には至らず、実際に発掘調査に着手したのは、翌年の平成8年度からであった。

また発掘調査は、運輸省第三港湾建設局（現国土交通省四国地方整備局、以後旧名称により記載）の依頼を受けた高知県教育委員会が調査主体となって委託契約を締結し、発掘調査の実施機関としては、高知県教育委員会より再委託を受けた（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターがその任にあたることとなった。

高知空港と拡張事業

高知空港は太平洋戦争の末期に本土防衛のため旧海軍航空隊によって建設され、偵察機訓練隊の基地であったが、終戦間際には特攻隊として出撃している。このため空港周辺にはアメリカ軍のグラマンの来襲があり、戦後も付近の水田には機銃掃射の薬莖が落ちていた。空港建設用地となったのは物部川右岸の旧三嶋村であり、空港建設のために多くの村人が強制立ち退きにより、移転を余儀なくされた。そして旧三嶋村の人々が物部川の氾濫時には避難し、命山と呼ばれた三嶋山も削り取

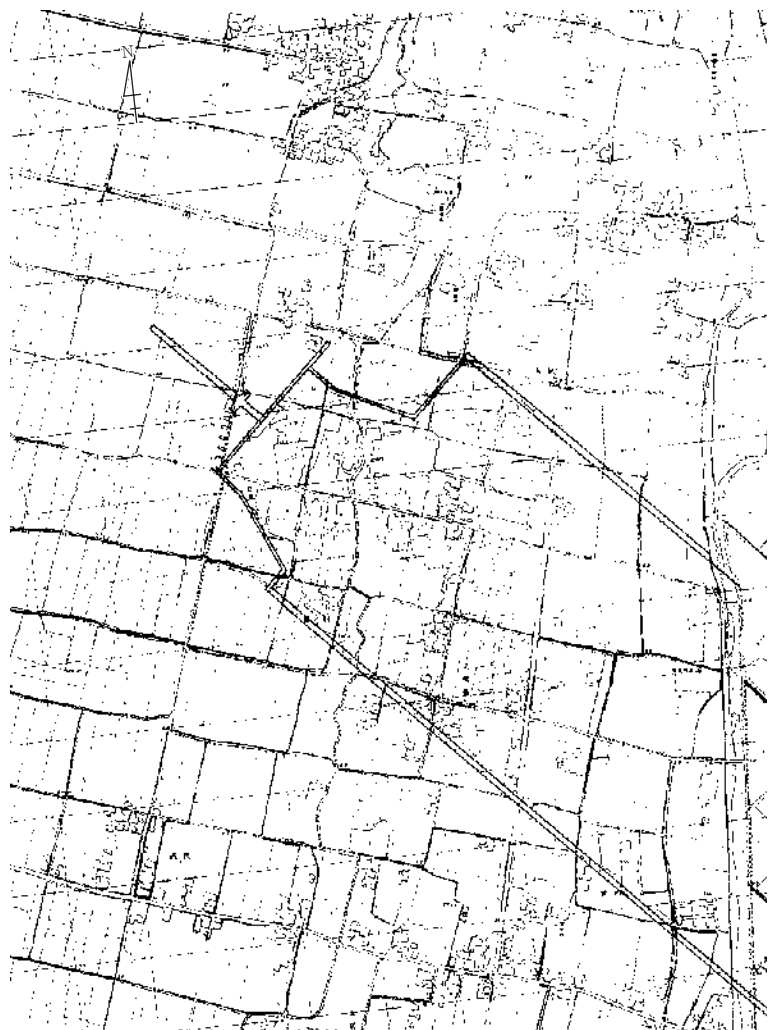


1-1図 明治40年測量地形図「高知」(S=1/50,000)

られ、戦前の姿は想像すべくもないが、戦時中に航空機格納用に建設された掩体が現在も水田の中に残されており、当時の面影を残している。

戦後、昭和29年には不定期ながら民間航空路線が開設され、昭和38年には、1,200mの滑走路も1,500mに拡張され航空便も増加されていった。昭和40年代以降になると、経済成長に伴い航空需要は拡大し、現況施設では対応の限界が近くなり、本格的な空港の拡張とジェット機の就航が望まれるようになった。この要望に対し、昭和47年には高知空港整備基本計画が決定され、現滑走路の南に2,000mの滑走路を新設することとなった。滑走路の新設に際し、東方への拡張は物部川の河口にあたることとなり、西方への拡張が決定された。空港は高知平野の南端に位置しているため、西方への拡張範囲はすべて水田地帯であり、県内有数の稲作地帯であったため、地元住民からは拡張反対の声があがり、拡張事業の推進は困難を極めた。また、空港の所在する南国市は、高知平野の中でも遺跡の集中地域であり、古来より土佐国の中心であった。そのため空港拡張に際しても、埋蔵文化財に対する調査の必要性が指摘され、文化庁の指導等により、発掘調査に対する体制も行われ、準備が進められた。調査着手時までは未買収地も多く残されており、現地立ち入りもままならない状況のため、遺跡の所在も含め埋蔵文化財の具体的な内容は不明であった。発掘調査は昭和55年の1月から試掘調査に入り、同年4月から本調査が開始された。用地買収が終わった場所から試掘調査を行い、遺構、遺物が発見された箇所を拡張し、調査が進められたが、予想を上回る出土状況であり、最終的にはジェット機の就航した昭和58年の8月まで現地調査が長引き、報告書が刊行されたのは昭和61年3月のことであった。

空港拡張に伴う田村遺跡群の発掘調査は高知県における最初の大規模調査であり、専門調査員も複数採用され、この調査を契機として県内の埋蔵文化財保護体制も整えられ、高知県における埋蔵文化財保護行政の本格的な開始を告げるものであった。



1-2図 前回空港拡張調査範囲図 (S=1/10,000)

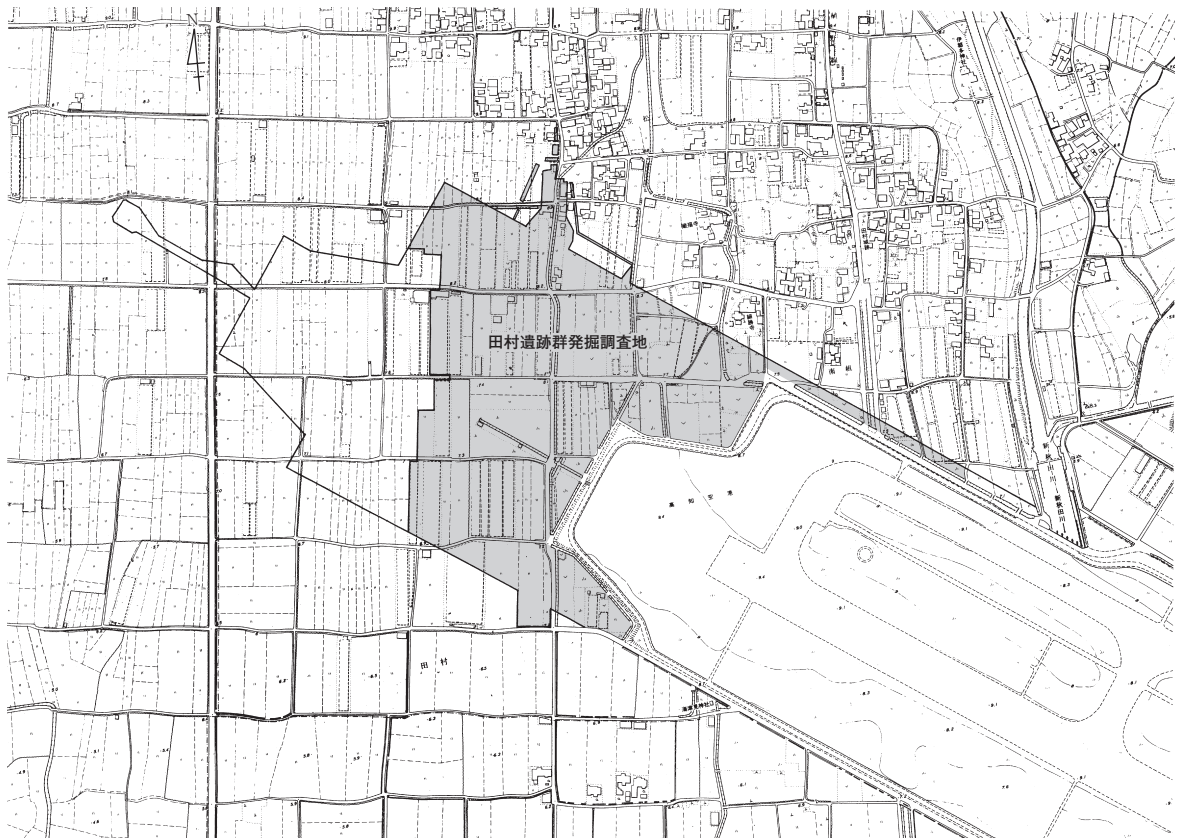
(2) 調査の経過

発掘調査の経過

先に述べたように、今回の拡張整備事業は前回拡張に続く再拡張であり、万全の体制により調査に臨むために検討、協議を重ねた。調査着手後も用地買収の遅れ等により種々の問題もあったが、事業者である運輸省第三港湾建設局高知港湾空港工事事務所及び高知県空港整備事務所の協力、また地権者を中心とした地元地区方々の理解を得ることにより発掘調査を完了することができた。

発掘調査の対象となった田村遺跡群は、前回拡張時の調査において弥生時代及び中世を中心とする広範囲にわたる大規模遺跡であることが判明しており、今回の500m拡張範囲には弥生時代の集落跡が全面的に含まれることが想定された。このため、発掘調査は空港拡張範囲東半部の全面調査を行うことを基本として全体計画を策定したが、やはり今回も当初の予測を越える遺構、遺物が検出され、現地の発掘調査は時間的にも厳しい状況の下に行われた。

調査は、平成8年度から開始されたが、まず運輸省用地（拡張以前に周辺対策として移転希望等による事前の買収用地）の試掘調査を7～9月に行った。試掘調査の範囲は限られていたが、試掘の結果、やはり東半部を中心に弥生時代の遺構、遺物が検出され、西半部の分布密度は低いことが確認されたことにより、当初の計画どおりに東半部の全面調査を実施することとした。本調査は先の運輸省用地を対象として同年11月から始められ、年度末の3月まで行われた。以後、平成9年4月から平成11年3月までの3年間にわたり、年間を通じての発掘調査が続いた。空港拡張という事業の性格か



1-3図 今回空港拡張範囲図 (S=1/10,000)

ら一気に現地調査を進めなければならず、この間整理作業は水洗、注記等の基礎作業を現場調査事務所で行ったが、本格的な整理作業は現地終了後にまとめて行われた。さらに、平成12・13年度には、残されていた未買収地、道路水路部分及び市道の地下工事範囲等の調査を工事と並行して行い、同時に本格的な整理作業を進めた。結果的には、平成8年度の発掘調査着手時の遅れが全体に影響し、平成14年度も整理作業を行い、発掘調査の最終年度である平成15年度に報告書を刊行し、通算8年間にわたる調査となった。

田村遺跡群の発掘調査は大規模であったため、多数の調査員を配置しなければならず、整理作業についても一定規模が必要であり、埋蔵文化財センターの施設では対応不可能と考えられたので、現地発掘作業及び整理作業も含めた高知空港発掘調査事務所を現地に設置し、調査を行うこととなった。

また、現地発掘調査作業を進めるにあたっては、調査の迅速・効率化を図り且つ調査員が調査に専念できるように、掘削作業等を工事請負方式により実施した。工事請負は用地買収の進捗状況に応じて、年間を前期と後期の2回に分けて実施した。発掘作業員の雇用、労務管理、掘削機械等の借上げ、仮設工等の面では効率化を図れた点もあるが、調査内容を理解し、現場作業をスムーズに進めるには請負業者との十分な意思疎通が必要であった。また工事請負に関しては、設計及び現地の施工・管理業務は社団法人高知県建設技術公社委託し、実施した。なお、工事請負業者は次のとおりである。

平成8年度 株式会社鴻池組 平成9年度前期 東海興業株式会社 平成9年度後期 りんかい建設株式会社 平成10年度前期 四国土建株式会社 平成10年度後期 株式会社浅沼組 平成11年度 鉄建建設株式会社

遺構等の測量は、調査面積も広いことから空中写真測量を行った。空中写真測量を実施するにあたっては、調査地が高知空港の航空機離発着空域の中であり、運輸省大阪航空局高知空港事務所の許可を得て、航空定期便の合間にヘリコプター実機により撮影を行った。また、図化は今後の保存、活用等を考えてデジタルマッピングによるデジタル図化とし、校正、編集を行った。さらに、現地での遺物の出土状態等の図化についてもデジタルカメラによる撮影、図化を行い、遺物の取り上げ作業等に活用した。なお、空中写真測量等はアジア航測株式会社への委託により実施されている。

発掘調査体制

調査は運輸省第三港湾建設局の委託を受けた高知県教育委員会が調査主体となり、文化財保護室（現文化財課）が担当した。発掘調査の実施機関としては、県教育委員会からの再委託を財団法人高知県文化財団（埋蔵文化財センター他、美術館等6施設の統合財団）が受託し、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターがすべての業務を行った。

県教育委員会及び(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの調査体制・人員は別表のとおりである。当初は、調査班4班体制で現地調査が開始されたが、やはり多量の遺構、遺物の検出により、平成10年度からは調査班6班体制となった。また、各年度の事業量に応じて、調査補助員、技術補助員、測量補助員等の雇用により調査対応を図った。発掘作業員は工事請負による請負業者雇用であるが、1班25名の作業員を基準とし、日平均100人、最大時には150人規模で作業が進められた。整理作業についても整理作業員は1班6名を基準として、基本的に各調査班の担当者が行う方針で進められた。

平成8年度	教育委員会		埋蔵文化財センター					
	教育長	吉良正人	理事長	千頭信也	調査第二班長	森田尚宏	調査員	吉成承三
	文化財保護室長	門田伍郎	所長	古谷硯志	専門調査員	田坂京子	調査員	坂本憲昭
	室長補佐	谷口敏郎	総務課長	田岡英雄	専門調査員	宮地早苗	調査員	坂本裕一
	埋蔵文化財班長	川添健市	主幹	吉岡利一	専門調査員	小島恵子	調査補助員	武吉眞裕
	社会教育主事	松田知彦	主事	石川 馨	主任調査員	前田光雄	調査補助員	松田重治
		調査課長	岩崎嘉郎	主任調査員	三橋麻里			
平成9年度	教育委員会		埋蔵文化財センター					
	教育長	吉良正人	理事長	佐竹紀夫	調査課長	西川 裕	調査員	吉成承三
	文化財保護室長	森本勉正	所長	古谷硯志	調査第二班長	森田尚宏	調査員	坂本憲昭
	室長補佐	谷口敏郎	次長兼総務課長	津野州夫	専門調査員	小島恵子	調査員	坂本裕一
	埋蔵文化財班長	川添健市	主幹	吉岡利一	主任調査員	前田光雄	調査員	小野由香
	社会教育主事	松田知彦	主幹	石川 馨	主任調査員	三橋麻里	調査補助員	川端清司
		調査課長	岩崎嘉郎	主任調査員	山田和吉			
平成10年度	教育委員会		埋蔵文化財センター					
	教育長	吉良正人	理事長	橋本大二郎	専門調査員	小島恵子	調査員	坂本憲昭
	文化財保護室長	浜崎 勲	所長	古谷硯志	専門調査員	泉 幸代	調査員	坂本裕一
	室長補佐	矢野川尚史	次長兼総務課長	津野州夫	専門調査員	三橋麻里	調査員	小野由香
	埋蔵文化財班長	川添健市	主幹	大原裕幸	主任調査員	前田光雄	調査員	畠中宏一
	社会教育主事	松田知彦	主幹	石川 馨	主任調査員	浜田恵子	調査補助員	川端清司
		調査課長	西川 裕	主任調査員	山田和吉			
		調査第二班長	森田尚宏	調査員	吉成承三			
平成11年度	教育委員会		埋蔵文化財センター					
	教育長	吉良正人	理事長	橋本大二郎	専門調査員	小島恵子	調査員	吉成承三
	文化財保護室長	浜崎 勲	所長	川崎正幸	専門調査員	泉 幸代	調査員	坂本憲昭
	室長補佐	矢野川尚史	次長兼総務課長	島内信雄	専門調査員	名木 郁	調査員	坂本裕一
	埋蔵文化財班長	中澤龍夫	主任	山本三津子	主任調査員	前田光雄	調査員	小野由香
	社会教育主事	松田知彦	主幹	大原裕幸	主任調査員	浜田恵子	調査補助員	川端清司
		調査課長	西川 裕	主任調査員	山田和吉			
		調査第二班長	森田尚宏	主任調査員	堅田 至			
平成12年度	教育委員会		埋蔵文化財センター					
	教育長	大崎博澄	理事長	橋本大二郎	調査第二班長	森田尚宏	主任調査員	山田和吉
	文化財保護室長	川島博海	所長	門田伍郎	専門調査員	小島恵子	主任調査員	堅田 至
	室長補佐	矢野川尚史	次長兼総務課長	島内信雄	専門調査員	泉 幸代	主任調査員	坂本憲昭
	埋蔵文化財班長	中澤龍夫	主任	山本三津子	専門調査員	名木 郁	調査員	吉成承三
	社会教育主事	松田知彦	主任	大原裕幸	専門調査員	前田光雄	調査員	坂本裕一
		調査課長	重森勝彦	主任調査員	浜田恵子	調査員	小野由香	
平成13年度	教育委員会		埋蔵文化財センター					
	教育長	大崎博澄	理事長	橋本大二郎	調査第二班長	森田尚宏	主任調査員	堅田 至
	文化財保護室長	川島博海	所長	門田伍郎	専門調査員	小島恵子	主任調査員	坂本憲昭
	室長補佐	矢野川尚史	次長兼総務課長	島内信雄	専門調査員	名木 郁	調査員	吉成承三
	埋蔵文化財班長	中澤龍夫	主任	山本三津子	専門調査員	前田光雄	調査員	小野由香
	社会教育主事	松田知彦	主幹	中条英人	専門調査員	浜田恵子		
		調査課長	重森勝彦	主任調査員	山田和吉			
平成14年度	教育委員会		埋蔵文化財センター					
	教育長	大崎博澄	理事長	橋本大二郎	調査課長	重森勝彦	専門調査員	松村信博
	文化財課長	戸梶幸雄	所長	島内 靖	調査第二班長	前田光雄	主任調査員	山田和吉
	室長補佐	森 茂久	次長兼総務課長	久川清利	専門調査員	小島恵子	主任調査員	坂本憲昭
	埋蔵文化財班長	森田尚宏	主幹	中条英人	専門調査員	名木 郁	主任調査員	吉成承三
		主幹	金子晃子	専門調査員	浜田恵子	調査員	小野由香	
平成15年度	教育委員会		埋蔵文化財センター					
	教育長	大崎博澄	理事長	橋本大二郎	主幹	金子晃子	主任調査員	吉成承三
	文化財課長	戸梶幸雄	所長	島内 靖	調査課長	横山耿一	調査員	小野由香
	埋蔵文化財班長	森田尚宏	次長兼総務課長	久川清利	調査第二班長	前田光雄	調査員	筒井三菜
		主任	池野かおり	主任調査員	坂本憲昭			

2. 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置と自然環境

遺跡の位置

田村遺跡群は、高知県の中央部に位置する南国市田村に所在する。高知県は北に四国山地、南は太平洋に面し、土佐湾を抱くように東の室戸岬から西の足摺岬まで弧状に広がっている。県土の90%近くは山林が占めており、平野部は東部の安芸川・伊尾木川流域、中央部では物部川流域の高知平野及び仁淀川流域、西部では四万十川と中筋川流域に存在する。平野部の中では高知平野が県内最大の平野であり、高知県は平野の少なく、古来より山と海の国と言える。



1-4図 南国市位置図

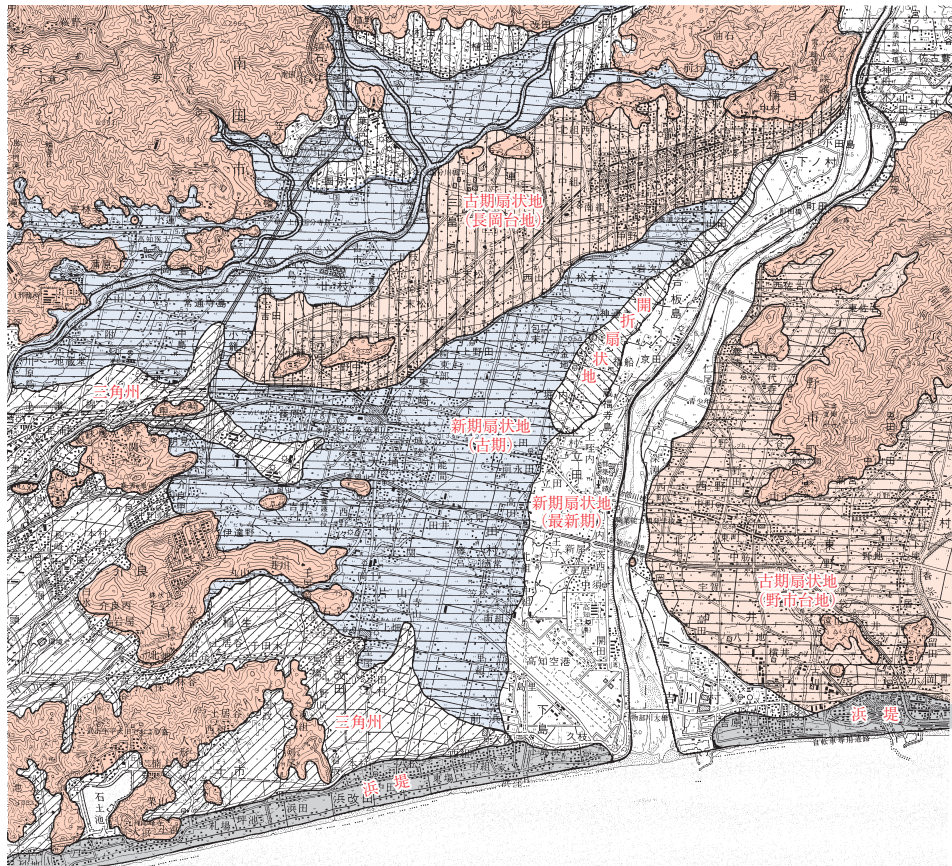


田村遺跡群航空写真（昭和39年撮影）

高知平野は物部川、国分川、鏡川、久万川等により形成された平野であり、高知市と南国市を中心に、土佐山田町、野市町も含め広がっているが、この中でも物部川と国分川により形成された高知平野の東部は香長平野と呼ばれ、水田地帯が広がる県内最大の穀倉地帯である。田村遺跡群は、この香長平野の南端近くに位置する。遺跡の立地は物部川の自然堤防上であり、物部川より西に約2km、海岸線からは約3kmに位置している。現地の標高は6～10mであり、北から南への緩やかな傾斜を持つが、ほとんど平坦な水田地帯である。航空写真等から現在の地形を見ると、平野部の中心は方形の水田区画が整然と並んでいるが、物部川沿いの右岸約1kmの幅で水田区画が乱れており、明らかな河川の氾濫原である。田村遺跡群は氾濫原の西に接しており、田村川等の小河川が遺跡の内外を流れている。

自然的環境

四国の地質構造は中央構造線により内帯と外帯に分かれており、南四国である高知県は外帯に含まれている。外帯は御荷鉾構造線と仏像構造線の2本の断層により、北から三波川変成帯、秩父累帯、四万十帯に分けられており、東西方向の帯状配列をなしている。高知県中央部は三波川変成帯、秩父累帯からなり、東南部と西部は四万十帯に含まれるが、地質構造の違いにより産出する岩石に違いがあり、物部川及び仁淀川流域ではチャートや緑色片岩が、西部では頁岩が多く見られ、北の吉野川流域では結晶片岩の産出地帯となっている。



1-5図 香長平野地形分類図 (S=1/100,000)

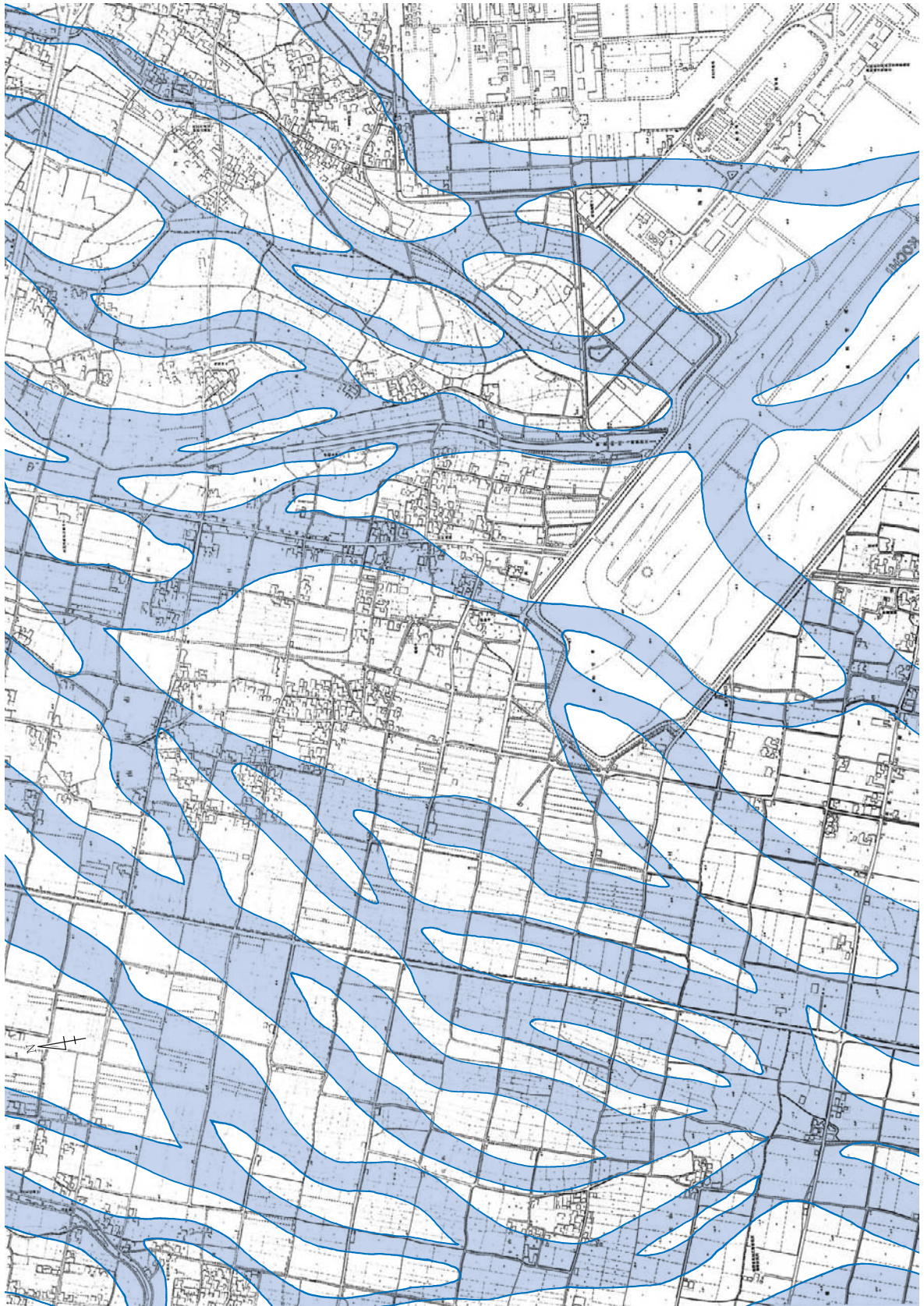
遺跡の所在する南国市は西に高知市、東に物部川を隔てて野市町、北は土佐山田町に接しており、高知平野の中心部を占めている。市域の地形は、北部に標高800m前後の山々が連なり、南方へと次第に標高を下げながら150mほどの丘陵地帯へと移行し、ついには平野部へ没する。高知平野の中心となる香長平野は物部川により形成されているが、その大半は扇状地であり、河口付近には三角州や海岸部の浜堤が見られる。香長平野の扇状地は古期扇状地と新期扇状地に分けられる。古期扇状地は河川沿いの河岸段丘を形成しており、物部川左岸の野市台地と右岸の長岡台地に代表される。長岡台地は長さ約8km、最大幅約2kmの古期扇状地であり、土佐山田町から西へ延び南国市と高知市の市境界である小籠付近で埋没している。標高は土佐山田町の最高部で約50mであり、西南部へ向けて高度を下げ末端では10m前後となる。台地上は段丘礫層に覆われており、さらに黒色土が厚く堆積しており、新期扇状地の境界には最高5mの段丘崖が見られる。これに対し野市台地は南北方向に広がっており、現在の物部川の流路も野市台地に沿っているが、東西方向に延びる長岡台地の地形を見れば、過去には物部川の流路は土佐山田町の平野部へ吐出口から西流し、浦戸湾へ流入していたと考えられ、航空写真等によっても古物部川の流路を示すと見られる水田地形や用水路が確認される。

新期扇状地は、田村遺跡群の北約5kmの土佐山田町岩積を扇頂とし、緩やかに高度を下げ香長平野の中心部を占める。扇状地には上岡川、香我美川、田村川、下田川、介良川、明見川等の放射状に派流する旧河道や凹地列が存在しており、近世に物部川の右岸堤防の構築により現河道に固定するまでは、香長平野の中を北東から南西へ幾筋の流路となり流れていたと考えられる。新期扇状地では河川堆積による礫層及び砂、シルト層の堆積が見られ、田村遺跡群においてもシルト、砂層が一般的堆積土層であり、浅いところでは地表直下に礫層が出土している。礫層は平均すると3~4m下に存在するが、伏流水もこの礫層中を流れており、現在も物部川流域では地下水の利用が多く、田村遺跡群の調査においても中世の井戸は深さ約4mで、伏流水を井戸水として利用している。

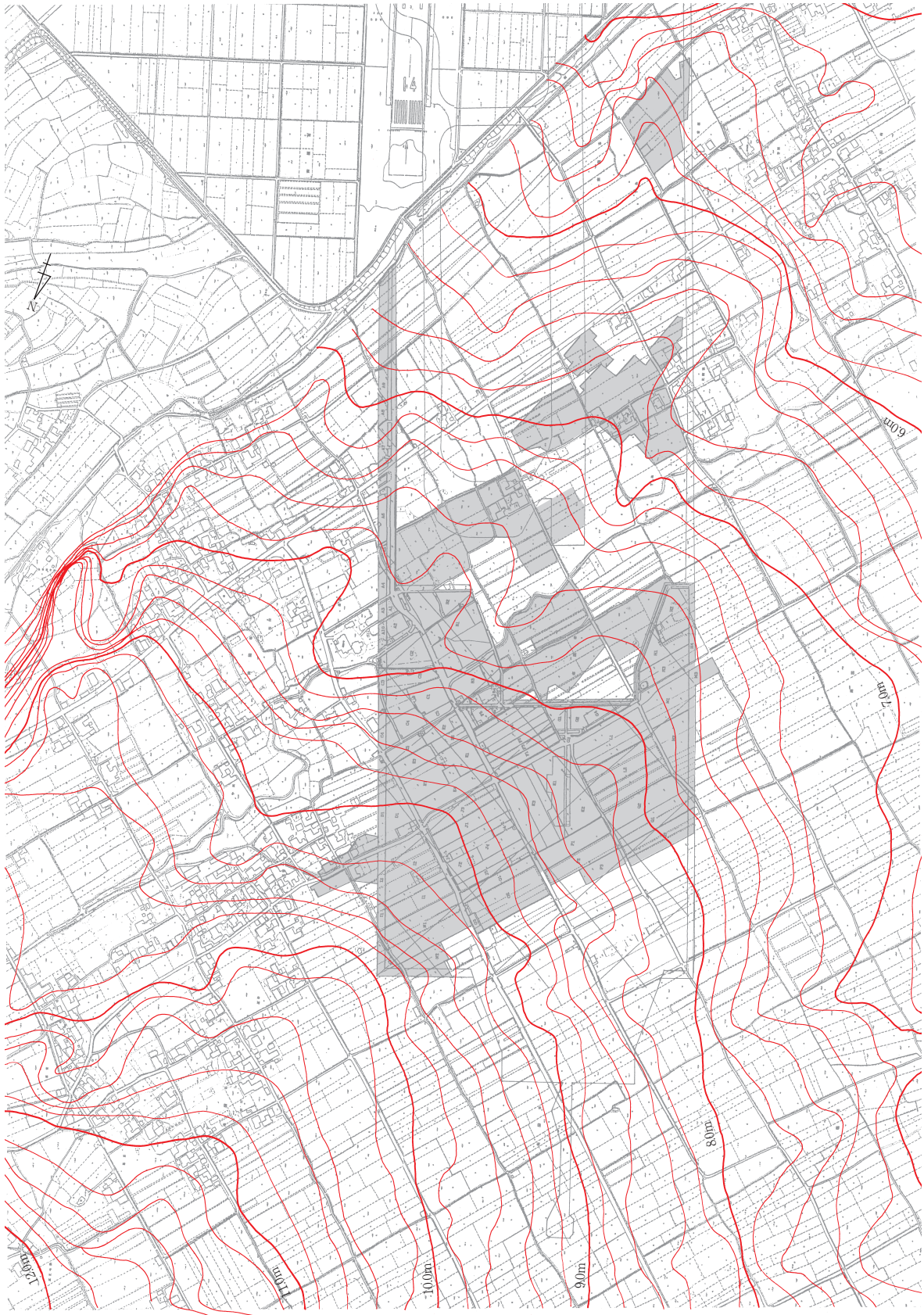
三角州は海岸線に近く、浜堤の北側標高5mラインに広がっており、東方は南に伸長して高知空港南縁に達する。特に西方部には、標高3mの閉曲線に囲まれた部分があり、かつての潟湖跡と見られる。地層は表層の砂質シルト下に泥炭化したアシ層、粘土層が確認されており、浜堤と扇状地の間に後背湿地が広がる景観であったと考えられる。

田村遺跡群周辺の地形

田村遺跡群は物部川により形成された扇状地の自然堤防上に立地するが、周辺には方形区画の水田が広範囲に広がっている。南国市では香長平野の圃場整備は行われておらず、方形地割りは条理制による地割りが一定残されていると考えられている。地割りの範囲は新期扇状地のほぼ全域に広がっており、田村遺跡群の西端から約500m西に建設されている広域農道が旧香美郡と長岡郡の郡境線にあたっている。方形地割りの南北基準ラインは真北より約12°東へ振っており、1町四方の区画は1辺109m前後である。このような地理的環境は遺跡の立地にも少なからず影響を与えていると考えられ、前回及び今回の調査で検出された古代の建物群は、1町四方の方形区画の中に収まっており、建物跡の方位も地割りの方位と同様にN-12°-Eを示している。

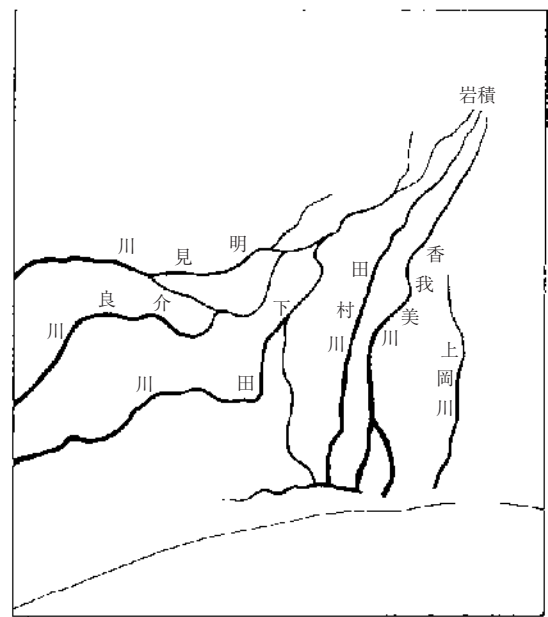


1-6图 遺跡周辺推定古河道図 (S=1/12,000)



1-7図 遺跡周辺微地形コンター図 (S=1/8,000)

また、発掘調査の一環として、遺跡の立地条件及び古地形の復元を目指し、赤外線航空写真及び地中レーダー探査を行った。赤外線航空写真では南国市から高知市へ向かって東西方向に撮影し、浦戸湾へ流入したと思われる物部川の旧流路の存在を検討した。写真からは、現在の舟入川や下田川沿いに物部川につながると考えられる古河道が判読でき、古物部川は中央構造線に沿って東西方向に走る褶曲山地に遮られ、かつては後免付近から西流していたと考えられ、空港の北側に東西に並んで見られる「高田」、「高見」等の地名からも、一定の高まりが存在していた可能性を示している。田村遺跡群周辺では広域農道の西側には北東から南西へ向かう古河道跡で占められており、自然堤防等のソイルマークは見られない。また、進入灯



1-8図 扇状地の旧河道
(浜田春水著「土佐日記と南国市」より)

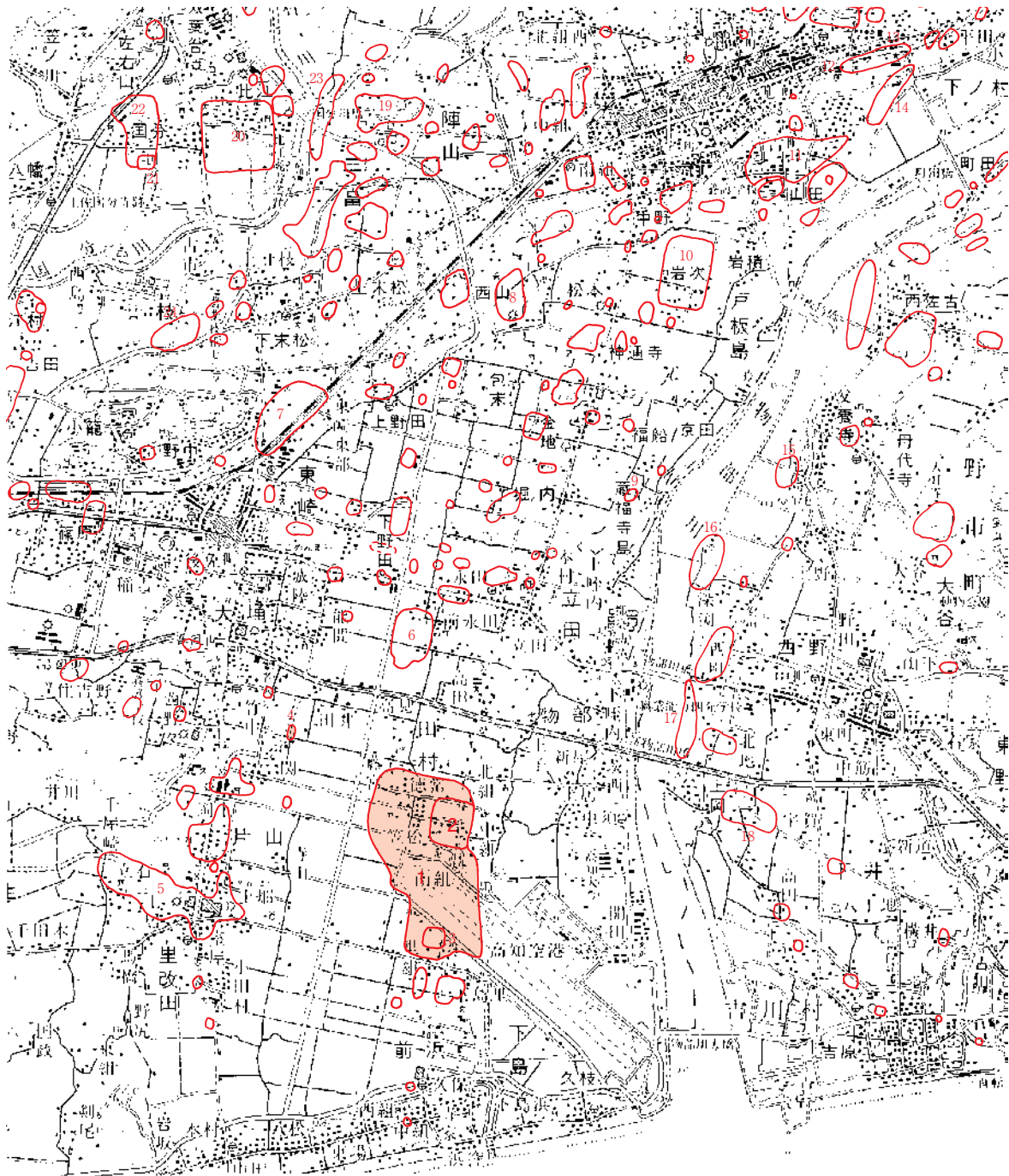
の西200mにも規模の大きい古河道跡が判読され、空港の滑走路はこれらの古河道と直交する位置となっている。現空港である旧三嶋村には、明治40年測量の地形図によれば「北嶋」、「向嶋」、「下嶋」といった地名が見られ、小丘陵である三嶋山や自然堤防が点在する地形が存在していたものである。

(2) 歴史的環境

南国市は、先に述べたように県内最大の平野部を有しており、高知県内でも最も多くの遺跡が存在している。時期的にも旧石器時代から近世まで各時代の遺跡が存在し、近世に山内氏が入国し、高知城と城下町を築くまでは、南国市の香長平野が古来より土佐国の中心地域であったと言える。

旧石器時代の遺跡は県内でもほとんど存在していなかったが、四国横断自動車道建設に伴う奥谷南遺跡の調査が行われ、ナイフ形石器、細石刃、さらには縄文時代草創期の遺物も出土しており、大きな成果が上げられている。土佐山田町の新改西谷遺跡でも小型のナイフ形石器がまとまって出土しており、また物部川中流域の香北町でも段丘上からナイフ形石器等が採集され、これまで高知市の高間原古墳出土の細石刃核1点のみの状況から大きく前進している。

縄文時代では、県西部の四万十川流域に多くの遺跡が発見されており、中央部においても数少ないが縄文時代の遺跡の調査が行われている。縄文時代草創期では先の奥谷南遺跡で隆帯文、隆起線文土器が発見され、さらに早期から後期の土器も出土している。また、奥谷南遺跡の前面では中期の貯蔵穴が確認され、南に隣接する栄エ田遺跡では後期の土器が出土している。田村遺跡群においても前回及び今回調査で後期のまとまった遺物が出土しており、打製石斧と石錘の分布範囲の違いなど、注目される資料となっている。県中央部における縄文時代の状況は遺跡数も少なく不明な点が多いが、遺跡の立地については、後期以前は山麓部を中心としており、後期になると県内全体で



1 田村遺跡群	5 里改田遺跡	9 岩村遺跡群	13 ひびのき遺跡	17 下ノ坪遺跡	21 土佐国分寺跡
2 田村城館跡	6 修理田遺跡	10 大領遺跡	14 稲荷前遺跡	18 高田遺跡	22 国分寺遺跡群
3 千屋城跡	7 東崎遺跡	11 原遺跡	15 深淵北遺跡	19 三島遺跡	23 比江廃寺跡
4 関町田遺跡	8 金地遺跡	12 楠目遺跡	16 深淵遺跡	20 土佐国衙跡	24 士島田遺跡

1-9図 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

も遺跡数は格段に増加し、平野部への進出が見られる。田村遺跡群における縄文時代後期の打製石斧と石錘の存在は、低地における栽培や漁労の盛行を物語っていると考えられる。

田村遺跡群周辺では、縄文時代晩期の遺跡は現在のところ発見されていないが、弥生時代に入ると、香長平野を中心に遺跡数が激増する。その中でも田村遺跡群は弥生時代前期から後期前半にかけての拠点集落として、中心的な役割を果たしたと考えられる。また、弥生時代前期では小籠遺跡、岩村遺跡群等で部分的ではあるが大溝や土坑群が検出されており、集落の拡散が見られる。また、物部川流域の東方になるが、香我美町下分遠崎遺跡では前期から中期の包含層が調査されており、木器等も出土している。弥生時代中期の遺跡は現在のところ数少ないが、奥谷南遺跡では丘陵斜面部に中期末の集落が検出されており、東部の野市町本村遺跡においても同様に丘陵上の集落が確認されている。弥生時代後期となり、田村遺跡群が衰退してくる時期には、長岡台地上を中心に南国市東崎遺跡、三島遺跡、土佐山田町ひびのき遺跡、林田遺跡、原遺跡、野市町下ノ坪遺跡などの出現が認められる。遺跡数は爆発的に増加しており、弥生時代後期後半における新たな集落の展開が見られる。また、弥生時代を通じて、県内では墓域は確認されておらず、田村遺跡群においても墓域と考えられる遺構は検出されていないが、奥谷南遺跡では丘陵頂部に弥生時代末の土坑墓群が検出されており、墓域の存在は今後の重要な課題となっている。

古墳時代には、南国市から土佐山田町の丘陵部に多くの古墳群が築造されるようになる。現在のところ県内には前方後円墳の存在は確認されておらず、大半は後期古墳であるが、長畝2・3号墳、狭間古墳は前・中期古墳にあげられている。後期古墳の中でも舟岩古墳群は22基からなる高知県最大の古墳群であり、小蓮古墳や朝倉古墳は高知県では大型の横穴式石室を持つ古墳として知られている。

古代に入り、香長平野の北部、比江地区には土佐国分寺跡が存在し、その東には比江廃寺跡の塔心礎が残されている。国分寺跡と比江廃寺跡の間には土佐国府跡が所在すると推定されており、古代土佐国の中心地域を形成していたものと考えられる。また、先に述べたように田村遺跡群や物部川左岸の下ノ坪遺跡でも古代の建物群が検出されており、荘園や津との関連も含め、官衙的な遺構群としてとらえられている。なお、下ノ坪遺跡の建物群の方位も田村遺跡群と同様に、ほぼN-12°-Eであり、条理と考えられる方形地割りと同じ基準を示す。古代における方向性はこの地割りに強く関連しており、この点からは現在の水田区画自体もひとつの遺跡であると言える。

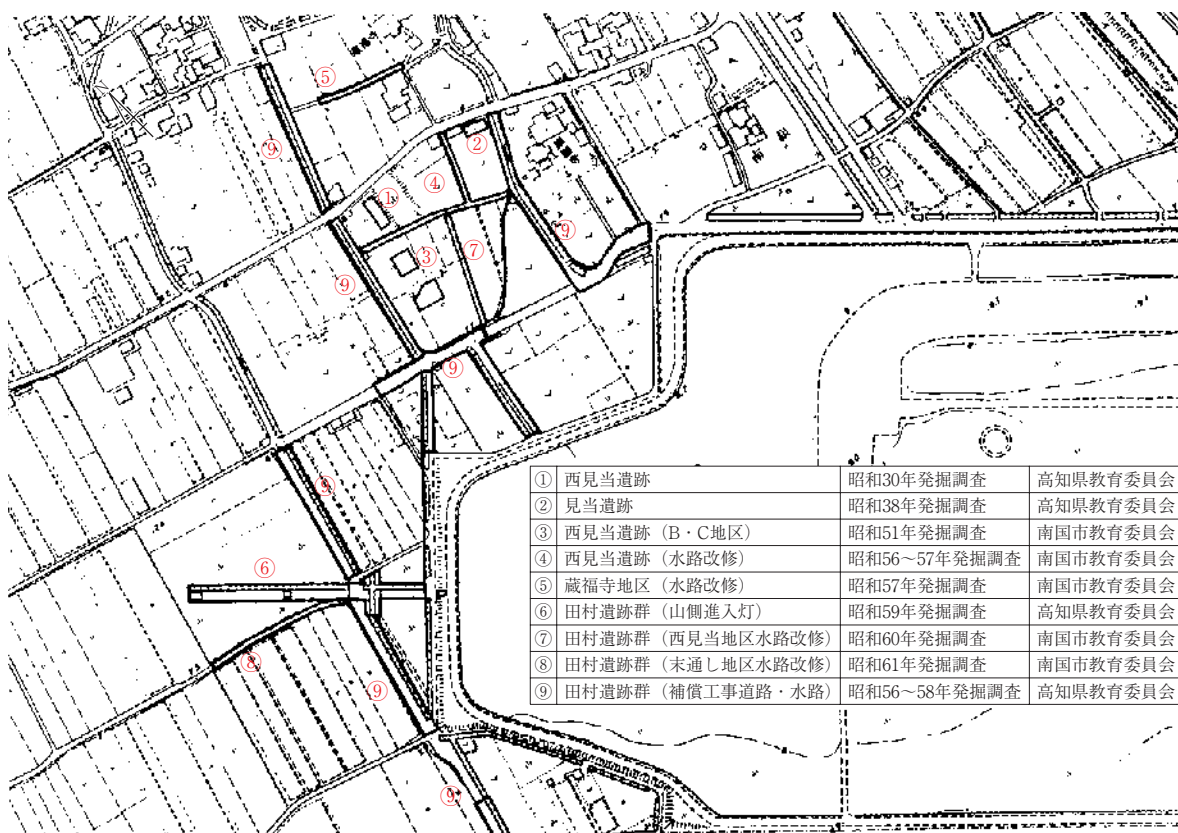
中世の田村遺跡群周辺では、土佐国守護代である細川氏の居館とされる田村城館が、空港の北に隣接して位置している。田村城館はこれまでの歴史地理研究により三重の堀に囲まれた3町四方の方形館と考えられており、県内最大の城館である。前回の調査では田村城館の西辺と南辺の堀の一部が調査されており、堀内からは大永年間の転読札が出土している。また、城館の南一帯は空港拡張範囲であり、調査の結果、33ヶ所にわたる方形館が検出されている。各方形館は14～16世紀にかけて存続時期しているが、出土遺物等により14世紀細川氏の入部以前、15世紀細川氏の時代、16世紀細川氏退出後の長宗我部時代の3時期に分けられている。田村城館の南約1kmには千屋氏の居館とされる方形館の千屋城跡も存在しており、やはり堀の一部が調査されている。香長平野北部の丘陵部には、長宗我部氏の居城である岡豊城跡をはじめとした城跡が点在している。岡豊城跡は山裾を流

れる国分川を自然の要害とし、長宗我部元親が居城を大高坂城跡（高知城跡）に移すまで使用されている。発掘調査によれば、詰、三ノ段等に礎石建物が検出され、土塁の内側には石積みを施しており、中世城館から近世城郭への変遷の始まりを示すものと考えられている。戦国時代の四国の覇者である長宗我部氏の衰亡以後は、代わって入国した山内一豊が浦戸城から高知城に居を移し、山内藩政はそれまでの香長平野を離れ、高知市の城下町を中心に展開されることになる。そして当地域は近世を通じ、農村集落として発展していくこととなる。

このように香長平野の歴史を見ると、弥生時代には田村遺跡群を中心として南部地域が歴史の舞台となり、弥生時代末から古墳時代にはその中心は北部地域へと移っていく。さらに、古代においても土佐国府跡、土佐国分寺跡等が北部に所在し、土佐国の中心となるが、南部地域にも重要な位置を占める古代の建物群が存在する。中世には再び南部地域に守護代である細川氏の居館が営まれ中心地域となるが、戦国時代には長宗我部氏の居城である岡豊城跡が北部に位置するようになる。このように香長平野を南北に移動しながら高知県の歴史は展開しており、南国市は高知県の歴史の大きな舞台であった。

(3) 田村遺跡群のこれまでの調査

田村遺跡群の発掘調査は空港拡張整備事業に伴い前回と今回の2回にわたる大規模な調査が行われ



1-10図 田村遺跡群のこれまでの調査位置図 (S=1/5,000)

たが、それ以前にも重要な遺跡として調査が行われている。田村遺跡群とその周辺では、古くは江戸時代にさかのぼり、田村遺跡群の西方約1.5kmの関町田遺跡において安永4年に扁平鈕銅鐸1個が出土したことが記録されている。また、明治15～16年には現在の空港から北約300mの正善（小字）から突線鈕銅鐸1個が発掘されており、空港拡張範囲からは外れているが、北に延びる田村遺跡群の集落範囲内での出土と考えられる。さらに、田村遺跡群の空港拡張範囲内に含まれるカリヤ（今回調査区E区）においても明治32年に広形銅矛5本が掘り出されている。銅矛は表土下約30cmの深さに袋部と鋒部を交互に並べ埋没しており、E区は住居跡の密集地区であることから、集落内でも中心部における銅矛の埋納が行われていたものと推定される。その後目立った発見はないが、昭和も戦後になると、初めての発掘調査が行われている。昭和30年には岡本健児氏により、当時、土器等が採集されていた西見当遺跡（今回調査区C区）の調査が行われ、弥生前期の土器と土坑が確認され、西見当遺跡は弥生前期の遺跡として位置付けられた。さらに、岡本健児氏の調査は続けられ、昭和38年には西見当遺跡の東、見当遺跡の調査、昭和51年には再び西見当遺跡B・C地点の調査が行われている。この調査では、弥生前期の貯蔵穴、小竪穴等とともに環濠の一部と見られる溝が検出されており、西見当遺跡は弥生時代前期の環濠集落であると考えられ、香長平野に早い段階で集落が成立していたことが確認された。また、出土土器により西見当Ⅰ式と西見当Ⅱ式の土器型式が設定され、弥生前期の土器編年が進められていった。この調査では銅鐸の舌も出土しており、出土地は離れてはいるが関町田遺跡出土銅鐸の舌ではないかとも考えられている。見当、西見当遺跡の周辺には、接近して城、カリヤ、カリヤ西、北カリヤ、北カリヤ第2遺跡（小字による名称）の遺跡が所在しており、前期から中期の遺物が多く採集されている。これらの出土土器を基準に田村式、城式、北カリヤ式等の弥生中期の土器形式も設定されており、弥生前期に続き中期においても遺跡の広がり確認されていた。これらの遺跡は、空港拡張に伴う調査により一大集落の中にも含まれるものであることが判明したので、田村遺跡群として一括して呼称することとなった。

前回の空港拡張に伴う調査では、西見当遺跡から南へ400mの地点で前期初頭の集落が検出され、西見当の環濠集落に先行する、県内最古の弥生集落として位置付けられた。集落は円形及び方形の竪穴住居と掘立柱建物からなり、U字形に配置されている。出土した突帯文系の土器は、西見当Ⅰ式に先行する弥生土器出現期の土器として東松木式と設定されている。また、前期初頭の集落から東400mには、前期後半期に分村により成立したと見られる大篠式の小集落も検出されている。さらに、同じく前期初頭の集落の北には、前期水田跡が発見されており、1辺2～4mの小区画水田が224枚検出されている。中期の遺構はほとんど検出されなかったが、調査区内を南北に流れる流路内には多量の中期の土器が含まれており、先に述べたカリヤ、城遺跡等の北に集落域の中心があるものと考えられた。空港拡張後に行われた周辺整備事業に伴う確認調査においても、やはり、空港北側300mほどの範囲では弥生中期を中心とする竪穴住居や土坑が検出されており、中期集落の北方への広がりが確認されている。中期末から後期前半にかけては、空港拡張範囲の西端部で竪穴住居が検出されている。密集した住居跡群はさらに西と北に続いており、拡張範囲先端部からさらに西に延びる進入灯部分においても住居跡が確認されており、再拡張範囲が集落の中心部分に位置すると考えられた。

3. 調査の概要

(1) 調査の方法

田村遺跡群の発掘調査は広範囲であり長期に及ぶため、調査の実施にあつたては、掘削作業は工事請負により行い、遺構測量は空中写真測量を導入した。現地発掘作業は用地買収が終了した地区から順次着手したため、隣り合う調査区においても調査年度を違えており、同一遺構においても分断された調査となり、困難な状況も発生した。基本的な手順としては、買収済みの用地ごとに全面的表土、無遺物層の掘削を重機で行い、遺物包含層及び遺構の掘削は人力により行った。なお遺物密度の低い包含層は一部重機を併用して掘削を行った。また調査終了後は基本的に掘削土で埋め戻しを行っている。

調査班は調査員2名、調査補助員等1～2名、発掘作業員25名体制を基本とし、調査状況に応じての移動、変更も行った。さらに、対応が困難な場合には埋蔵文化財センター及び県教育委員会からの応援を得て調査を進めた。調査の進行に従い、遺物出土状況等については委託によるデジタルカメラ撮影による図化を行い、遺物の取り上げにも使用した。遺構の全体測量はヘリコプター実機による写真撮影を行い、デジタルマッピングにより図化を行った。

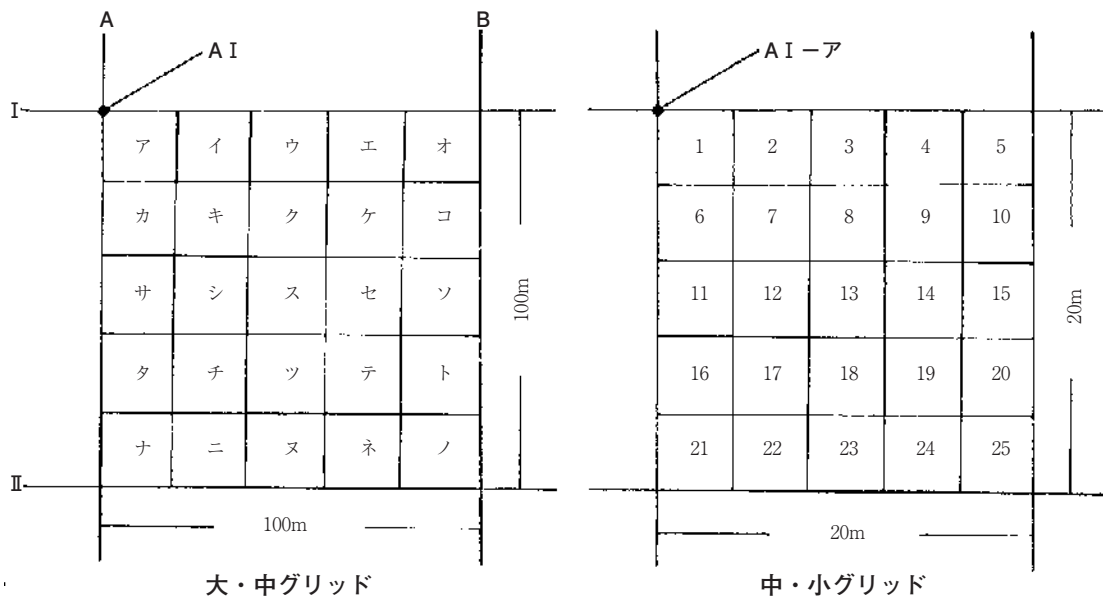


調査区全景航空写真（平成11年1月）

調査区基準

調査に着手するにあたり、測量等の基準を国土座標第IV系とした。第IV系の座標系を基に調査対象地を囲むグリッドを設定し、100mを単位として、東西ラインを北からローマ数字I～IX、(I-X座標61,400～IX-X座標60,600)、また南北ラインを西からA～J (A-Y座標14,600～J-Y座標15,500)までとした。調査グリッド全体の基点は西北角のAIであり、第IV系の座標はX座標61,400、Y座標14,600である。100mの基本大グリッド内はさらに20mの中グリッドとし、20mグリッド内も4mの小グリッドに分割した。中グリッドの呼称は北西角を起点とし、左上から平行式にア～ノのカタカナで示し、小グリッドも北西角を起点とし、左上から平行式に1～25のアラビア数字により表示した。現地での測量には4mグリッドを基準として行い、包含層の遺物等の取り上げにも4mグリッドを使用した。

第IV系によるグリッドとは別に調査区を明示するために、1町四方の範囲をひとつの調査区の単位として、空港拡張範囲全域にA区からU区までの調査区名を付けた。調査区名の配置は北東側から南北の順となっており、R～U区は拡張範囲の西部であり、今回の調査対象地からは外れている。発掘調査における調査区名称は、このアルファベットによる調査区名を使用しており、1町四方の調査区内で用地買収の順に応じた枝番号を付し、調査順にA1区からの呼称となっている。



大グリッド 100mグリッド (国土座標第IV系) A～J・I～IX

中グリッド 20mグリッド ア～ノ (100mグリッド中25個)

小グリッド 4mグリッド 1～25 (20mグリッド中25個)

1-11図 調査グリッド呼称図



1-13图 調査小区名称图 (S=1/4,000)

(2) 調査の概要

試掘調査

平成8年度に調査を開始するにあたっては、未買収地も多く具体的な遺構の広がり等も不明であったため、先行取得されていた運輸省用地を中心に未買収地においても調査の承諾が得られる用地に4mグリッドによる試掘調査が行われた。試掘調査は平成8年8・9月の第1次試掘と平成9年1・2月の第2次試掘の2回に分けて行われた。試掘グリッド数は第1次試掘125グリッド、第2次試掘23グリッドであり、合計148グリッド、面積にして2,368㎡であった。試掘調査の結果、空港拡張範囲の西半部では遺構、遺物ともに希薄であり、遺跡本体の広がりや東半部であることが確認され、当初計画157,000㎡を変更し、127,000㎡を対象とする本調査を開始することとなった。



試掘調査状況

本調査

平成8年度

試掘調査を受けて、平成8年11月から調査班4班による本調査が開始された。本調査の対象地はやはり運輸省用地を中心にB区、E区、F区、K区、H区等の10ヶ所の調査区が設定された。位置的には進入灯の周辺と現空港の北側部分及び南側一部対象となり、進入灯部分のK区では密集する住居跡群が検出され、一部は平成9年度の調査へ延長しなければならなかった。北側部分のB区では中世の方形館の一部が検出され、同時に弥生前期の遺構も確認されており、北部における弥生前期の遺構群の広がりが捉えられた。また、南部のH区では縄文後期の包含層が確認され、その広がりが注目された。検出遺構は竪穴住居跡69軒、掘立柱建物跡8棟、土坑351基等であり、出土遺物はコンテナケース410箱であった。調査面積は、年度末にかけての短期間の調査ではあったが、17,387㎡であり、次年度以降の調査に厳しい状況が想定された。



F1区 調査状況



現地説明会風景



1-14図 試掘グリッド位置図 (S=1/4,000)

平成9年度

平成9年度からは本格的な調査に入り、調査班4班体制で年度当初から通年の調査となった。調査区は用地買収も進み24ヶ所となり、検出される遺構、遺物ともに当初の想定量を大きく上回るものであった。調査の中心は弥生前期のC区、中・後期のE区、J区等であり、C区では前期の環濠とともに貯蔵穴が集中して検出された。E区では流路跡と西側の調査区では複数の住居跡の切り合いが見られた。検出された遺構は、竪穴住居跡120軒、掘立柱建物跡43棟、土坑642基等であり、遺物もコンテナケース1,400箱と多量に出土した。調査面積も46,959㎡と今までにない年間の調査量であった。



E4区 炎天下の発掘調査

平成10年度

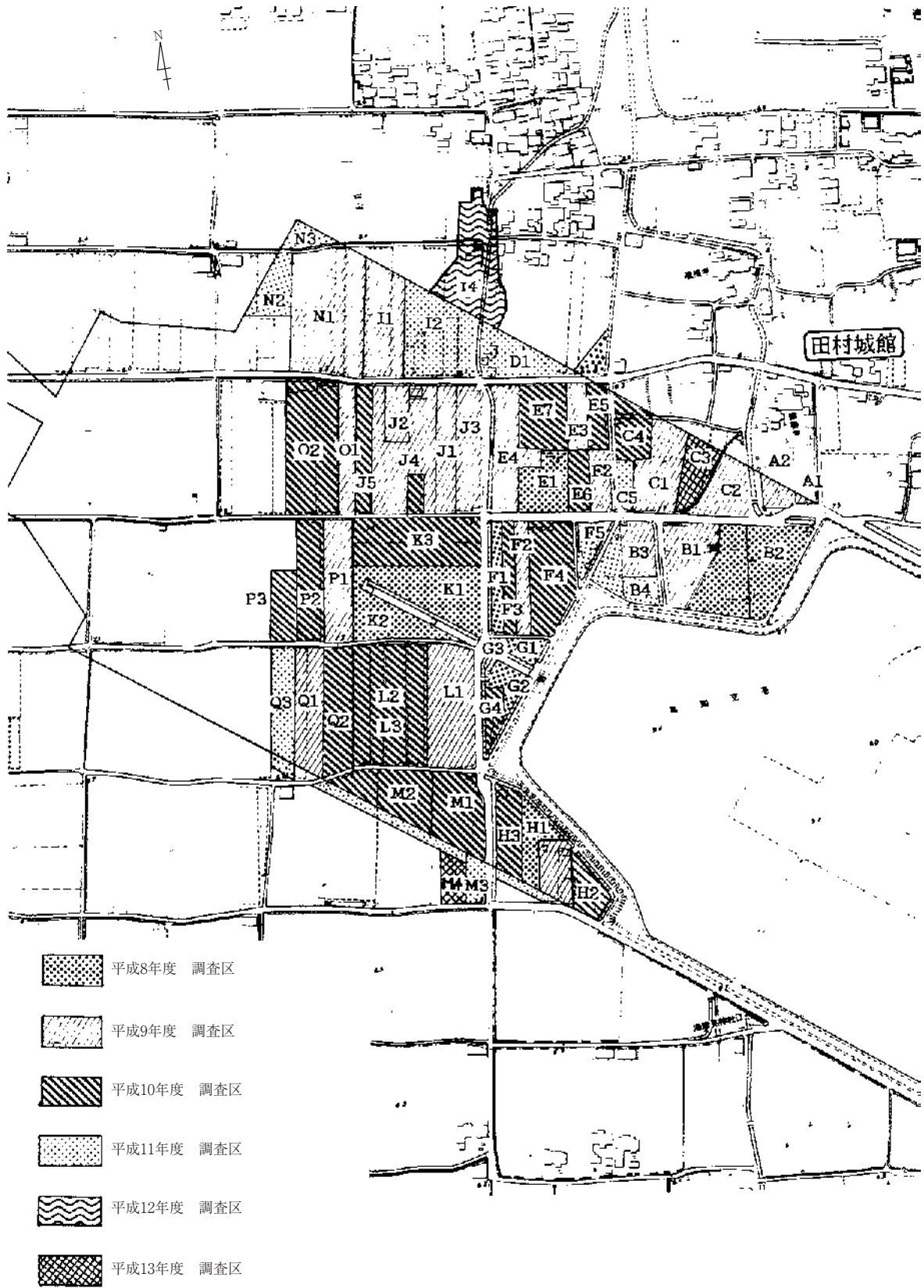
平成10年度も平成9年度に引き続き、広範囲にわたる通年の調査が行われた。昨年度の調査内容から見て、調査班4班体制では対応不可能であったため、急遽調査班2班を増強し6班体制とした。調査区は調査対象地全域に広がり、19ヶ所となった。調査区は用地買収に応じて大きくまとまっており、調査の最盛期を迎えた。着手した調査区の中でもE区、F区、K区、L区等ではこれまで以上に遺構の密度が高く、時間に追われての調査であった。検出された竪穴住居跡はさらに増加し144軒、掘立柱建物跡も121棟、土坑は839基等を数え、各調査に繋がる溝や流路跡も全体像が見えてきた。またF区では古代の建物群も検出され注目された。遺物はコンテナケース1,800箱と最大の出土量となった。調査面積も51,353㎡であり、当初よりの調査面積は10万㎡を越えることとなった。



L2・3区 広大な調査区



F4区 小学生の体験学習



1-15図 年度別調査区位置図 (S=1/5,000)

平成11年度

平成11年度の調査区は昨年度と同じく24ヶ所であったが、調査内容は平成9・10年度の最盛期を過ぎ、北部のD区、I区等を中心に終盤を迎えた。本年は当初より天候不順であり、降雨が多く発掘作業は大幅に遅れたが、遺構の検出密度は変わらず、やはり多数の竪穴住居跡等の遺構が検出された。またI区では調査区の壁から銅矛が出土し、集落内の埋納が確認されている。検出遺構は竪穴住居跡63軒、掘立柱建物跡50棟、土坑769基等であり、出土遺物は調査面積に比して多く、コンテナケース1,256箱である。調査面積は26,161㎡であり、工事請負による調査は12月に終了し、残された部分については直営による調査となった。



O2区 水没した調査区



C5区 空中写真測量

平成12年度

昨年度までの調査により拡張範囲の調査はほぼ終了したが、中央部南北に通る南国市道の地下道化工事が開始され、拡張範囲の北側へ調査区の拡大することとなった。また、現況道路、水路部分についても最終的に調査を行うこととなり、工事に並行するため、直営により調査が実施された。市道地下道化範囲のI区では中期の竪穴住居跡がまとまって検出され、北方への集落確認ができたが、古代の柱穴群が検出され、古代の遺構群の広がりも追跡された。検出された遺構は、竪穴住居跡50軒、掘立柱建物跡22棟、土坑210基等であり、出土遺物はコンテナケース376箱であった。調査面積は9,772㎡であり、ほぼ全域の調査を終了することができた。



D2区 道路・水路部分の調査



I4区 掘削工事に追われる調査

平成13年度

平成13年度は市道地下道化の南側部分の工事が対象となり、これまでの調査結果から遺構、遺物の存在は希薄と考えられたので、工事に伴う立会による確認を行うこととなった。立会の結果、縄文後期の包含層が検出され急遽調査を行ったが、同時に弥生前期初頭の土坑1基も検出され、弥生前期の広がりを追うことができた。また、C区流路跡も工事工程の関係から最後に残されており、最終底面までの調査が行われ、年末にはすべての現地発掘作業を終了することができた。調査面積は2,535㎡であるが、C区の流路からは大量の遺物が出土しており、コンテナケース373箱であった。

なお、本年度から本格的に整理作業に入ったが、年度には現地事務所を撤去し、新たに整備された埋蔵文化財センターにおいて平成14・15年度と整理作業を進めることとなった。



M4区 立会調査 縄文土器出土



C3区 最後の調査区 流路跡

以上が平成8年度から平成13年度における調査状況であるが、最終的な調査面積は総面積154.167㎡、平面積130.105㎡、重複面積24.062㎡、検出された主要な遺構は竪穴住居跡約440軒、掘立柱建物跡約240棟、土坑約2,800基となり、出土遺物はコンテナケース約5,200箱と、県内最大規模の発掘調査となっており、さらに北へ集落が広がっていることを考えれば、田村遺跡群自体の規模の大きさも判明するところである。

なお、上記の遺構数及び出土遺物数は各年度の概要報告による概数であり、最終的な確定数量は各調査区の報告を参照されたい。(森田尚宏)

調査区	年度	期間	平面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査担当者	工事区分
A1	9	5~6月	87	87	坂本憲昭・山田和吉	本体
A2	9	5~6月	476	476	坂本憲昭・山田和吉	本体
A3	11	1~3月	297	297	山田和吉	補償工事
A4	11	1~3月	320	320	山田和吉	補償工事
A5	11	1~3月	13	13	山田和吉	補償工事
A6	12	6~8月	305	305	山田和吉	補償工事
A7	11	1~3月	166	166	山田和吉	補償工事
A8	11	1~3月	15	15	山田和吉	補償工事
A9	11	1~3月	60	60	山田和吉	補償工事
A10	12	6~8月	630	630	山田和吉	補償工事
B1	8・9	12~8月	4,720	7,001	吉成承三・小島恵子	本体
B2	8・9	12~8月	2,490	4,980	坂本憲昭・三橋麻里	本体
B3	9	6~9月	1,055	1,055	吉成承三・三橋麻里	本体
B4	11	6~12月	1,721	1,721	吉成承三・泉幸代	本体
C1	9	5~9月	2,279	2,279	坂本憲昭・山田和吉	本体
C2	9	10~1月	1,757	1,757	坂本裕一・小野由香	本体
C2北	11	1~3月	147	147	坂本憲昭・小島恵子	補償工事
C3	9・11・12・13	6~12月	1,841	5,619	坂本憲昭・小島恵子	本体・補償工事
C4	10	5~7月	1,524	1,524	小島恵子・小野由香	本体
C4北	11・12	7~10月	629	629	坂本憲昭・小島恵子	補償工事
C5	11	6~8月	440	440	小野由香・小島恵子	本体
D1	11	9~12月	2,388	3,133	坂本裕一・名木郁	本体・補償工事
D2	12	7~9月	968	968	坂本憲昭・山田和吉	道路・水路
E1	8	12~3月	1,653	1,653	吉成承三・小島恵子	本体
E2	9	6~8月	921	921	出原恵三・浜田恵子	本体
E3	9	7~11月	1,002	1,002	吉成承三・三橋麻里	本体
E4	9	5~9月	2,494	2,494	坂本裕一・小野由香	本体
E5	10	5~11月	1,022	1,022	小野由香・小島恵子	本体
E6	10・11	5~8月	1,153	2,248	坂本裕一・泉幸代	本体
E7	10	8~11月	2,337	2,337	坂本裕一・泉幸代	本体
E8	12	7~9月	905	905	坂本憲昭・山田和吉	道路・水路
E9	12	10~11月	305	305	坂本憲昭	道路・水路
F1	8	11~3月	929	929	吉成承三・小島恵子	本体
F2	9	6~9月	756	756	前田光雄・小島恵子	本体
F3	10	5~11月	1,305	1,305	吉成承三・畠中宏一	本体
F4	10	5~2月	3,528	7,056	浜田恵子・山田和吉	本体
F5	11	6~9月	986	986	坂本憲昭・堅田至	本体
G1	8	12~3月	538	538	坂本憲昭・三橋麻里	本体
G2	8	12~3月	478	478	坂本憲昭・三橋麻里	本体
G3	8	12月	29	29	坂本憲昭・三橋麻里	本体
G4	10	6~7月	947	947	坂本憲昭・三橋麻里	本体
H1	8	12~3月	1,308	1,308	坂本憲昭・三橋麻里	本体
H2	9・10	12~10月	2,439	4,746	坂本憲昭・山田和吉	本体
H3	10	5~10月	1,552	1,552	坂本憲昭・三橋麻里	本体
H4	11	10~11月	481	481	坂本裕一・名木郁	補償工事
I1	9	11~3月	2,732	2,732	前田光雄・田坂京子	本体
I2	11	5~3月	5,186	7,479	山田和吉・坂本憲昭	本体・補償工事

調査区	年度	期間	平面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査担当者	工事区分
I3	12	10~11月	536	536	山田和吉・坂本憲昭	道路・水路
I4	12	6~3月	4,062	4,062	吉成承三・泉幸代	市道北部分
I4 (TR1~8)	11・12	9~10月	644	644	吉成承三	市道北部分
J1	9	6~9月	1,794	1,794	前田光雄・小島恵子	本体
J2	9	6月	810	810	森田尚宏	本体
J3	9	10~3月	2,143	2,143	前田光雄・小島恵子	本体
J4	9	10~3月	4,051	4,051	小島恵子・久家隆芳	本体
J4-1	11	7月	86	86	小島恵子	本体
J4-2	10	8~9月	340	340	前田光雄・田坂京子	本体
J5	10	6~9月	1,144	1,144	坂本憲昭・三橋麻里	本体
J6	12	7~9月	171	171	山田和吉	道路・水路
J7	12	10月	122	122	坂本憲昭	道路・水路
K1	8・9	11~9月	3,357	4,810	前田光雄・田坂京子	本体
K2	8	11~3月	1,885	1,885	坂本裕一	本体
K3	10	5~11月	4,290	4,290	前田光雄・田坂京子	本体
K4	12	10月	148	148	坂本憲昭	道路・水路
L1	9	6~1月	4,066	4,066	坂本裕一・小野由香	本体
L2	10	8~3月	2,544	2,544	小島恵子・小野由香	本体
L3	10	8~3月	3,730	6,867	坂本憲昭・三橋麻里	本体
L4	12	10月	90	90	坂本憲昭	道路・水路
M1	10	8~11月	2,485	2,485	山本哲也・小嶋博満	本体
M2	10	8~11月	2,483	2,483	山本哲也・小嶋博満	本体
M3	11	10~11月	1,647	1,647	前田光雄・川端清司	本体・補償工事
M4	13	5~7月	405	405	前田光雄	市道南部分
N1	9	11~3月	4,924	4,924	吉成承三・三橋麻里	本体
N2	11	7~9月	1,954	1,954	坂本裕一・小野由香	本体
N3	11	7~10月	931	931	坂本裕一・小野由香	本体・補償工事
O1	9	7~9月	1,278	1,278	吉成承三・三橋麻里	本体
O2	10・11	1~8月	4,522	5,477	坂本憲昭・浜田恵子	本体
O3	11	7~8月	312	312	坂本憲昭・堅田至	本体
O4	12	10~12月	205	205	坂本憲昭	道路・水路
P1	9	7~9月	1,926	1,926	前田光雄・小島恵子	本体
P2	10	8~11月	2,408	2,408	前田光雄・田坂京子	本体
P3	10	1~2月	1,277	1,277	前田光雄・田坂京子	本体
P4	12	6月	120	120	坂本裕一	道路・水路
P5	12	10月	52	52	坂本憲昭	道路・水路
Q1	9	12~2月	2,338	2,338	坂本裕一・小野由香	本体
Q2	10	12~2月	2,753	2,753	吉成承三・畠中宏一	本体
Q3	11	5~10月	2,758	2,758	坂本裕一・小野由香	本体・補償工事
合計			130,105	154,167		

※調査期間は複数年度に及ぶ調査区も着手年度の月から終了年度の月を記載している。

※調査面積は重複する遺構面も加えており、平面積に対して24,4062m²の増加となっている。

A区の調査

A1区の調査



1. A1区の概要

概要

今次調査では東端部に位置している。前回1次調査では調査区南側の道路から南西方向に延びる中世の田村城館の外濠とみられる溝跡が検出されている。当調査区は、田村城館の南西隅にあたと考えられ、田村城館に伴う施設の検出が期待された。

A1区は狭い調査区で検出できた遺構は、土坑3基、溝4条、ピット5個であった。中世の城館に伴うとみられる遺構は検出できなく、ほとんどの遺構が近世のものと考えられるが、SD105、溝状土坑SK105、ピットからは弥生土器が出土しており、弥生時代の遺構と考えられ、密度は低くなるものの弥生時代の遺構が調査対象地東端まで展開していることが確認された。

調査担当者 坂本憲昭、山田和吉

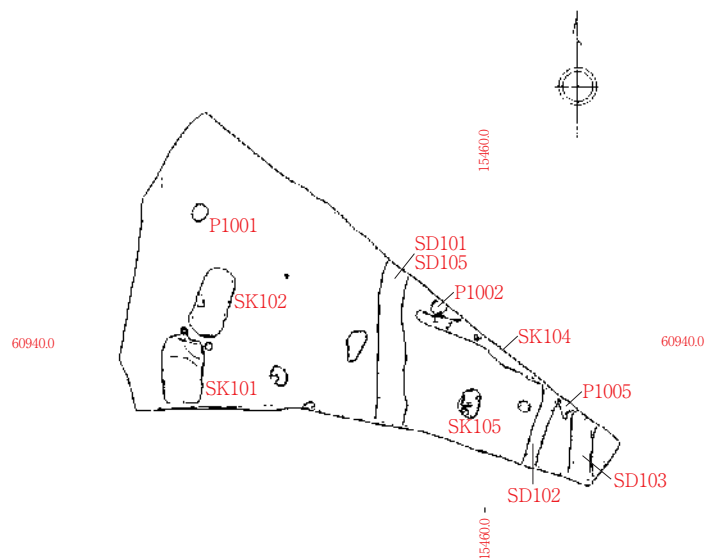
執筆担当者 坂本憲昭

調査期間 平成8年6月3日～平成8年6月12日

調査面積 87㎡

時代 弥生時代中期～後期、近世～現代

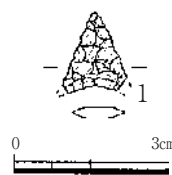
検出遺構 弥生時代溝跡1条。弥生時代土坑1、ピット4個、他は近世～近現代。



A1-1図 A1区遺構全体配置図 S : 1/250

2. A1区の遺構と遺物

A1区では遺構と遺物は極めて少なく、遺物はA1-2図1の石鏃のみを図示した。遺構についても土坑、溝跡、柱穴の遺構一覧表を下に提示するにとどめる。



A1-2図 A1SD105出土石器

A1-1表 A1区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
A1SK101	長方形	箱形	2.3	1.3	73	N-22°-E	灰色土		近現代	攪乱坑
A1SK102	長方形	箱形	2.3	1.1	18	N-0°-E	淡褐色土		近世以降	
A1SK103										消滅
A1SK104	溝状	U字状	4.8	0.5	16	N-67°-W	灰色土に砂礫入る		弥生時代	
A1SK105	楕円形	皿	91	65	12	N-21°-E	淡褐色土		弥生時代	時期不明

A1-2表 A1区溝一覧

遺構番号	断面形	床面標高(m)	延長(m)	幅(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
A1SD101							灰色粘土	SD105を切る	消滅	
A1SD102	皿状	7.1	2.6	0.45	10	N-18°-E	灰色粘土		近現代	瓦入る
A1SD103	箱形	6.9	2.0	0.75	23	N-8°-E	灰色粘土		近現代	瓦入る
A1SD104										欠番
A1SD105	箱形	7.1	9.0	0.9	10	N-0°-E	灰褐色砂質土	SD101に切られる	弥生	石鏃出土

A1-3表 A1区柱穴一覧

遺構番号	柱穴形	直径(cm)	深さ(cm)	埋土	柱根/有・無	出土遺物(点数)	遺物内容出土状況	時期	特記事項
A1P1001	円形	57	20	淡褐色粘砂土	無		同一個体片多く出土するか接合せず	弥生	
A1P1002	円形	48	18	淡褐色粘砂土	無		埋め壺状	弥生	
A1P1004	円形			灰色粘質土	無				
A1P1005	不整形	56×25		灰色粘質土	無				

A2区の調査



1. A2区の概要

概要

今次調査の中で東側部分に位置しA1区とは小道を挟んで隣接しており、A1区と同様に中世の田村城館内の南西隅にあたり、城館に伴う遺構の検出が期待された。

調査の結果、土坑10基、溝跡3条、ピット37個が検出されたが、遺構密度は低く、中央部と調査区北側には大きな近現代の攪乱土坑あり、SD201、202の一部を切っていた。検出された遺構は、城館跡に伴うものではなく、ほとんどが弥生時代の遺構であった。SK201、202はしっかりしたプランを持つ土坑で、弥生時代前期の可能性が考えられる。このことは、弥生時代前期中葉の集落の広がりがC3区で検出された流路跡の東側まで展開している可能性が考えられるとともに、前期集落の変遷を考える資料として重要である。

調査担当者 坂本憲昭

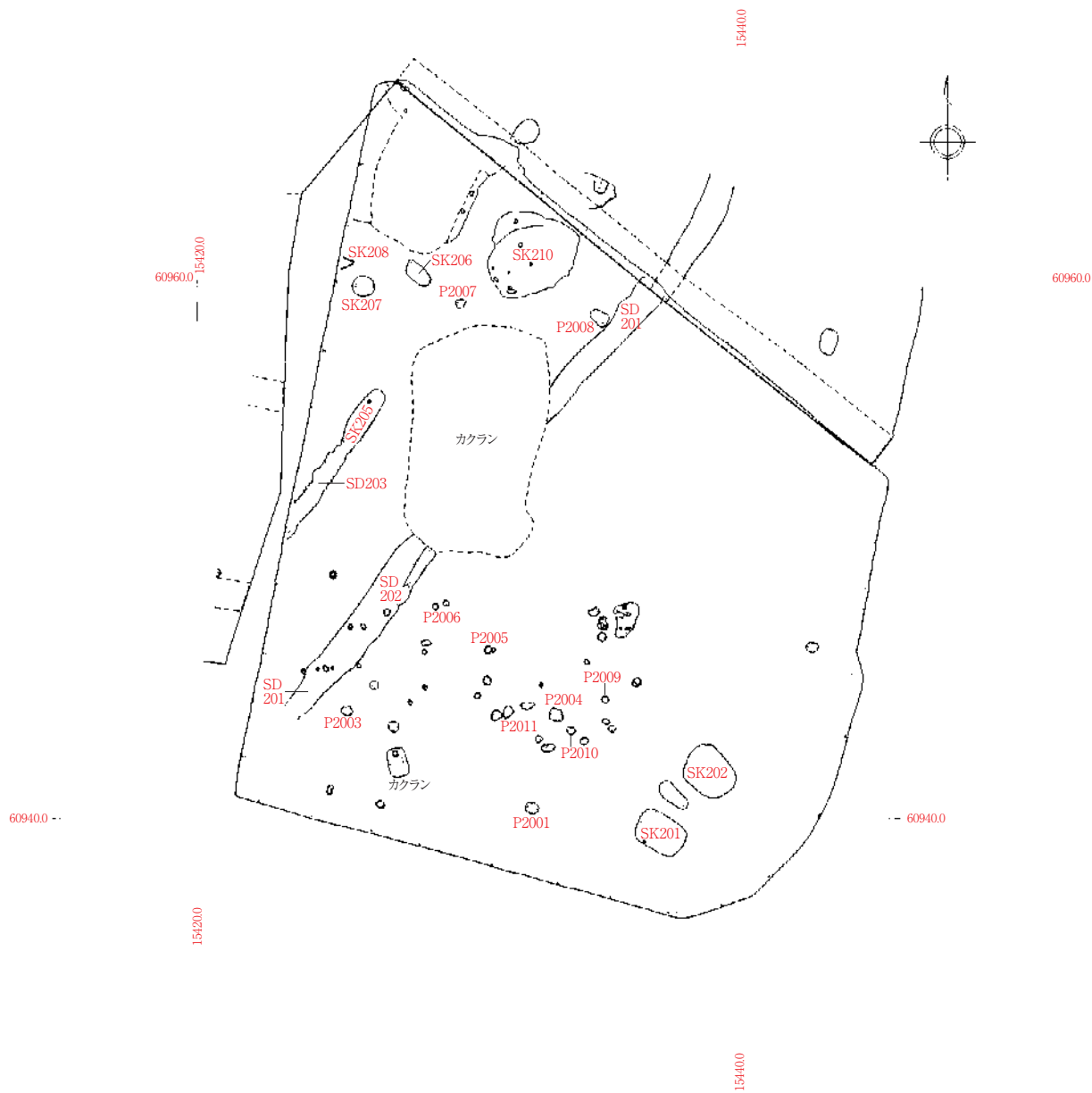
執筆担当者 坂本憲昭

調査期間 平成8年6月4日～平成8年6月12日

調査面積 476㎡

時代 弥生時代前期、近現代

検出遺構 本調査区での検出遺構は、土坑10基、溝3条、ピット37個、近現代攪乱土坑2基。



A2-1図 A2区遺構全体配置図 S : 1/250

2. A2区の遺構と遺物

A2区では遺構と遺物は極めて少なく、溝跡A2SD201～203のみ個別に取り上げたほかは、土坑、柱穴は計測表のみ提示した。

(1) 溝跡

A2SD201・202 (A2-2図)

時期；弥生V期 方向；N-40°-E

規模；(20) m×1.3m 深さ0.1m 断面形態；皿状

埋土；黒灰色土

床面標高；7.0m

接続；A3区

出土遺物；弥生土器、石斧、石鏃

所見；調査区を南北方向に横切る状態でSD203と並行し検出されたが、中央部分で近現代の攪乱坑によって切られる。検出時埋土が2重になった状態で、2条の溝が切り合った可能性が考えられ、遺構名が分けられたが、調査の結果同一遺構と考えられる。

埋土は上層が黒灰色土で下層は灰褐色土であった。残存状況は不良で最も残存の良好な部分で約20cmであり、調査区南側では堀方が消滅する状況であった。埋土中からは、弥生土器が出土しているが、図示できるものは少なく、胴部細片がほとんどであった。やや肥厚した口縁部に凹線文が施された2、素口縁の甕4が図示でき、中期末～後期初頭に属すると考えられる。

A2SD203 (A2-2図)

時期；弥生V期 方向；N-35°-E

規模；0.6m×6.0m 深さ0.15m 断面形態；皿状

埋土；灰褐色土

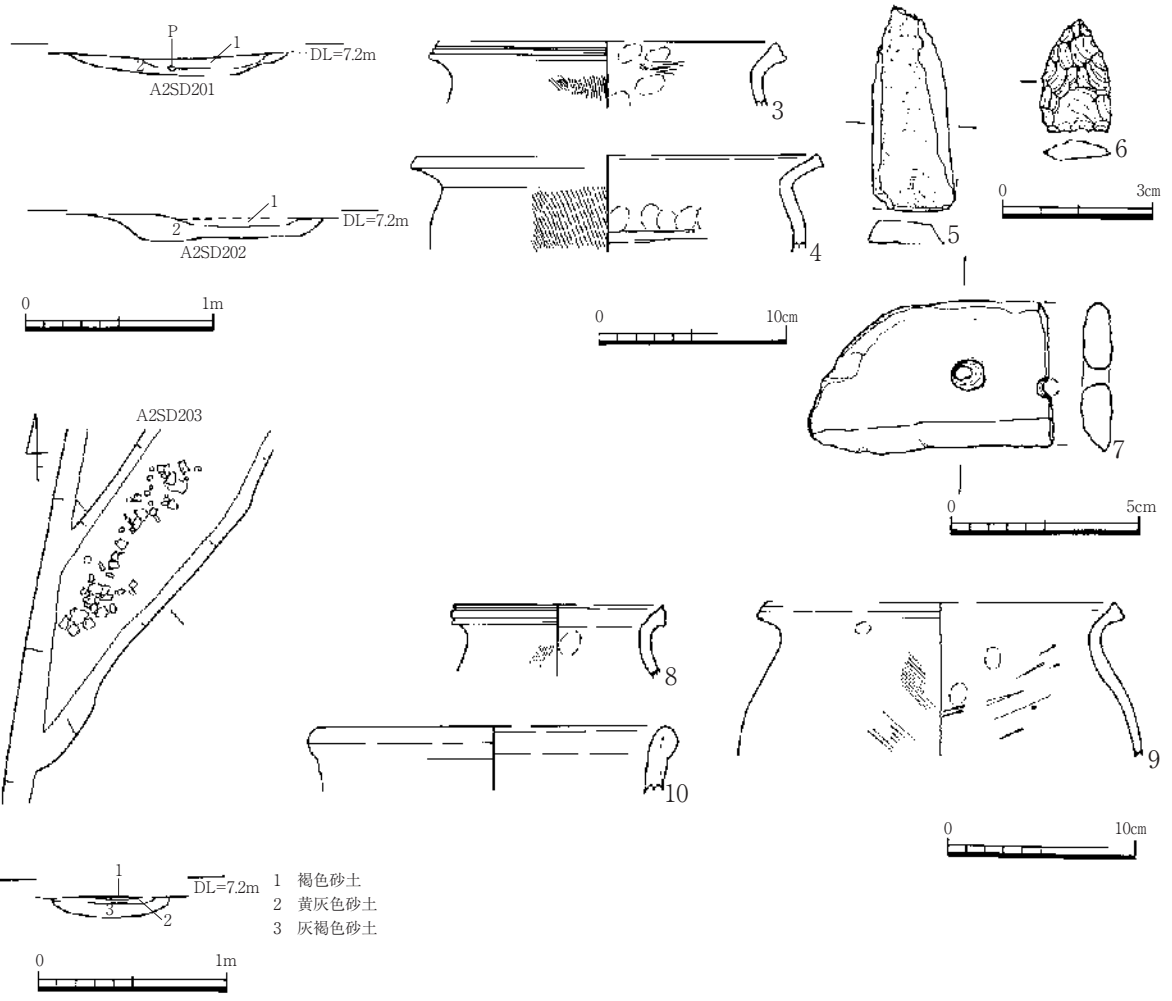
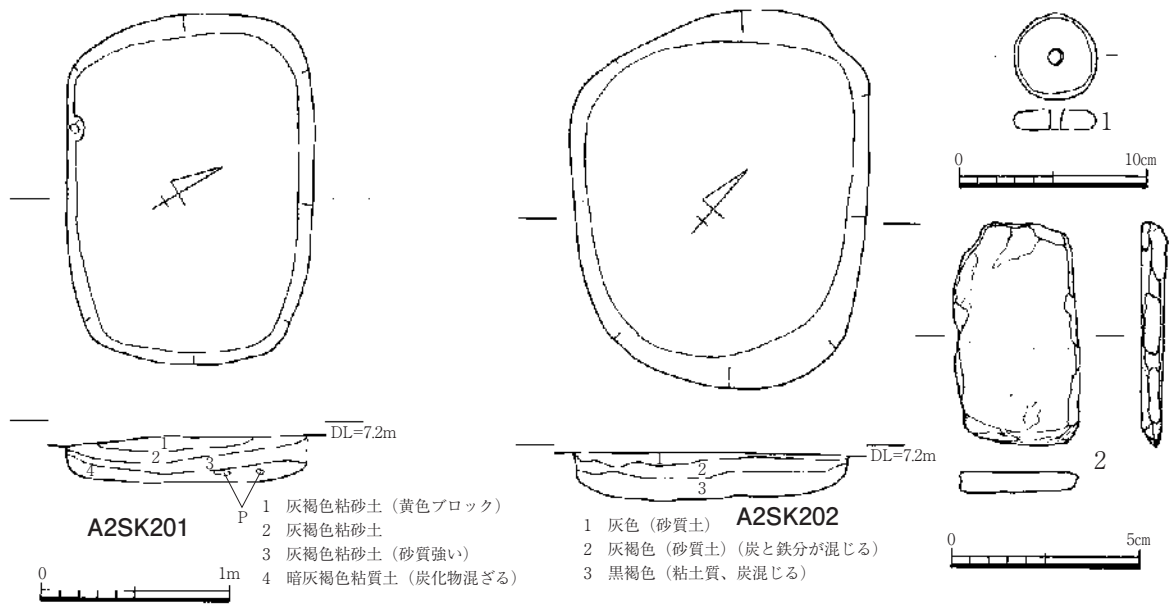
床面標高；7.07m

接続；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区西側で、SD201とは並行した状態で検出された。検出長は約6mで、南西側は調査区によって切られ、北東部は削平によって堀方が消滅している。

遺構埋土は灰褐色土が中心で、残存状況の良好な部分で約10cmが残存していた。埋土中から出土した土器は残存に比して多く、遺物が集中して出土した部分もみられた。出土した土器では、口縁部が5点確認されており、いずれも凹線文が施されており、中期末～後期初頭に属するものと考えられる。



A2-2図 A2SK201・202、SD201~203

A2-1表 A2区土坑一覧

遺構番号	形態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	付属遺構	切合関係	出土遺物(点数)	遺物内容	時期	特記事項(機能)
A2SK201	長方形	1.9	1.3	18				前期壺胴部 口縁部無し	弥生前期の 可能性	
A2SK202	長方形	2.0	1.6	2				胴部のみ出土	弥生前期の 可能性	炭化物多く出土
A2SK203										消滅
A2SK204	楕円	2.5	0.75	3		SD203を 切る				
A2SK205										消滅
A2SK206	楕円	1.7	0.6	14				胴部細片5点 のみ		
A2SK207	楕円	0.8	0.75	27				如意形口縁1		
A2SK208	不整形	0.4	0.55	11						
A2SK209										消滅
A2SK210	不整形	3.12	3.5	118						前期土坑を現代 攪乱坑が切る可 能性

A2-2表 A2区柱穴一覧

遺構番号	柱穴形	直径 (cm)	深さ (cm)	埋土概要	柱根/ 有・無	出土遺物 (点数)	遺物内容出土状況	時期	特記事項
A2P201	円形	50	12	灰褐色粘砂土	無	1	弥生土器細片	弥生時代	
A2P202	円形	28	13	灰褐色粘砂土	無	1	弥生土器	弥生時代	
A2P203	円形	40	20	灰色粘質土	無		中世褐釉壺	中世以降	
A2P204	方形	42	6	灰色粘質土	無		播り鉢	近世	
A2P205	円形	27	10	灰褐色粘砂土	無	2	弥生土器細片	弥生時代	
A2P206	円形	25	15	灰褐色粘砂土	無		弥生土器 土師器	弥生時代	
A2P207	不整形	32×34	10	淡褐色粘砂土	無	1	弥生土器細片	弥生時代	
A2P208	楕円形	70×47	10	暗灰褐色粘砂土	無	13	弥生土器細片	弥生時代	
A2P209	円形	27	12	灰褐色粘砂土	無	1	弥生土器細片	弥生時代	
A2P210	円形	31	8	灰褐色粘砂土	無	1	弥生土器細片	弥生時代	
A2P211	楕円形	43×33		灰色粘土	無		陶磁器	近現代	

A3区の調査



1. A3区の概要

概要

本調査区は、高知空港滑走路のほぼ北側に位置し、特にA3区は中世の遺構群が密集していると思われる細勝寺の南東に隣接している。特に重要と思われる遺構は認められないが、特徴としては、中世の掘立柱建物跡1棟がほぼ南北に走っている溝に沿って、調査区西部に掘られており、調査区中央部に水貯めと思われる土坑が、ほぼ南北に走る溝を切る様に掘られている。

調査担当者 山田和吉、泉幸代、坂本裕一

執筆担当者 山田和吉

調査期間 平成12年2月14日～平成12年3月10日

調査面積 297㎡

時代 弥生、古代、中世、近世

検出遺構 中世の土坑28基、溝12条、ピット50個、掘立柱建物跡1棟。

2. A3区中世以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

A3区では掘立柱建物跡は1棟のみ検出し、調査区西部に位置している。

A3SB301 (A3-2区)

時期；中世以降 **棟方向**；N-7°-W

規模；梁間2間×桁行4間 梁間2.4m×桁行5.34m 面積12.8㎡

柱間寸法；梁間1.08～1.32m 桁行1.10～1.60m

柱穴数；— **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

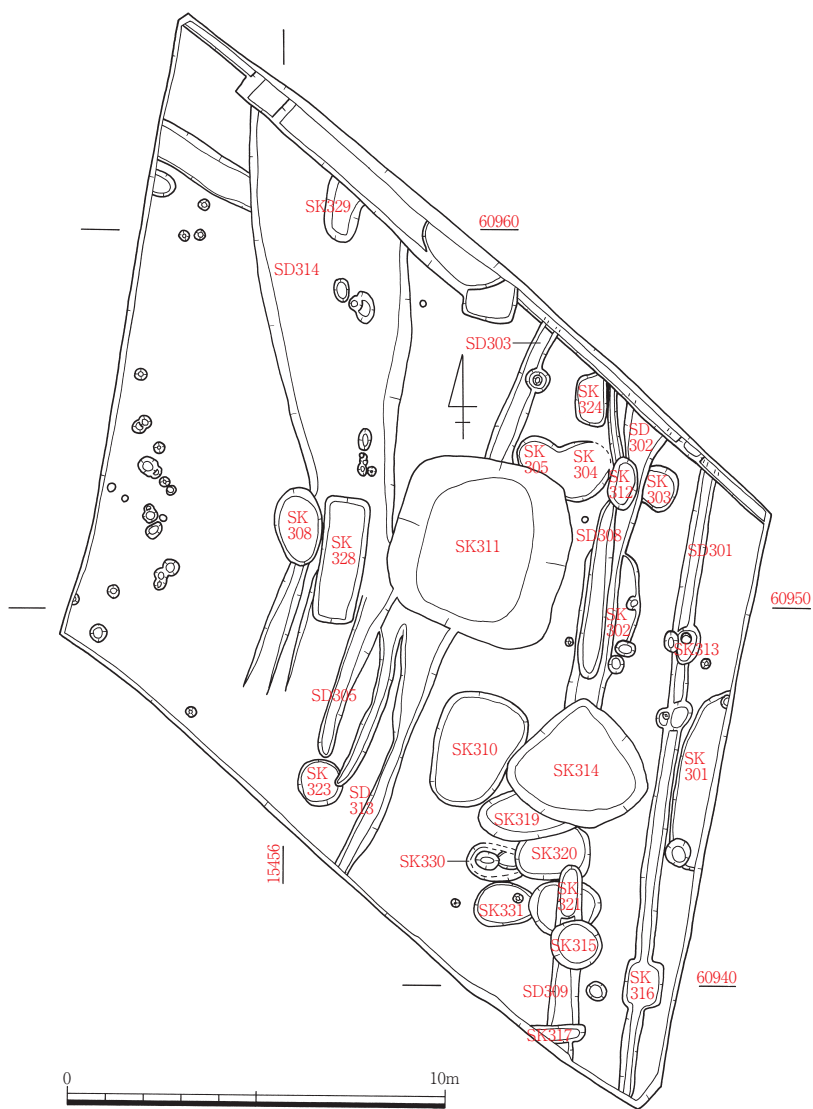
出土遺物；弥生土器

所見；調査区西部に位置し、SD305、306、314に沿って建てられている。梁間2間、桁行4間のものである。

出土遺物は弥生時代のものしか出土していないが、遺構埋土が中世のものであったことと、弥生時代の遺物に実測遺物が見当たらなかったことから判断して、この掘立柱建物跡は中世のものと思われる。柱穴の平面プランは全て円形であり、ほぼ南北に走る溝にそっている。出土遺物としては弥生土器が29点、チャート剥片4点が出土しているものの、中世以降のものと考えられる。

(2) 土坑

中世以降の土坑は31基程確認している。中近世の遺物が出土したもので占められ、中には弥生土器が混入するものも認められる。



A3-1図 A3区遺構全体配置図

A3SK308 (A3-3図)

時期；15世紀後半～16世紀初め頃 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-10°-W

規模；2.04×1.26m **深さ**0.15m **断面形態**；U字状

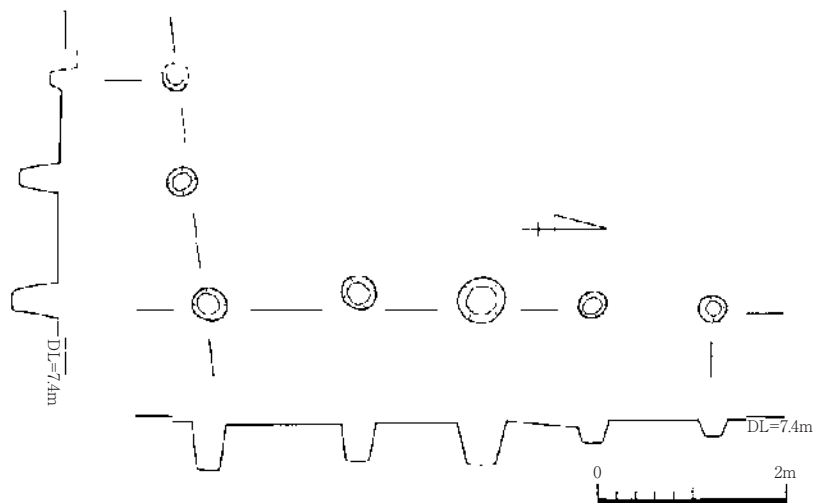
埋土；灰黄色土（シルト、褐色粒多量に含む）

付属遺構；— **機能**；不明

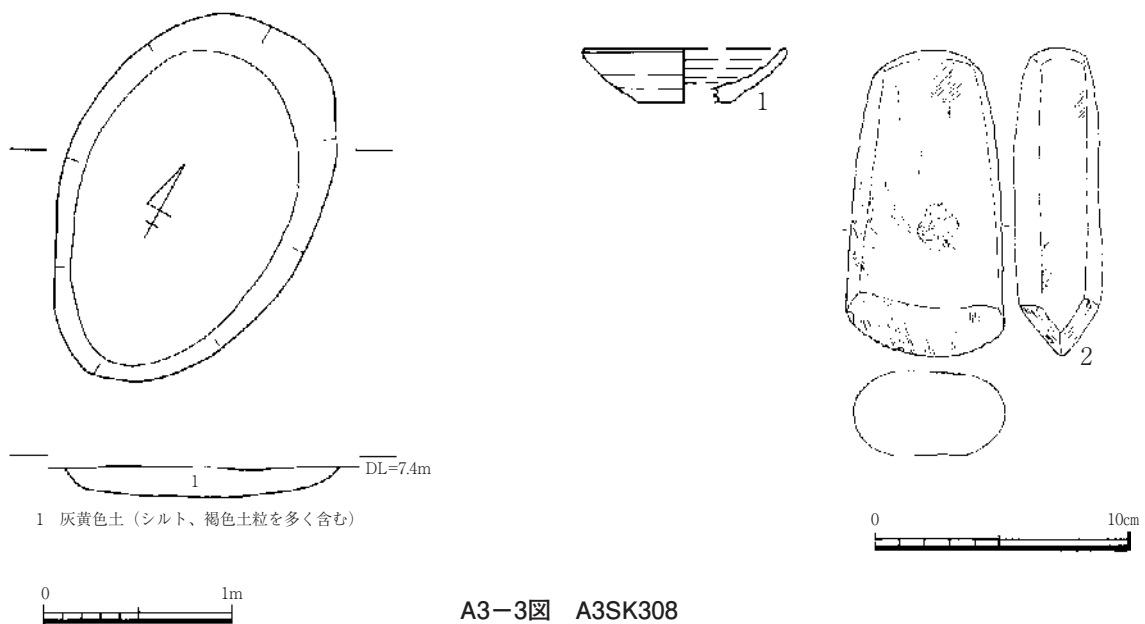
出土遺物；土師器小杯、太型蛤刃石斧

所見；調査区西部の中央寄りに位置し、SD306を切っている。

出土遺物は15世紀後半～16世紀初め頃の土師器小杯1点（1）、太型蛤刃石斧1点（2）出土している。その他の遺物は、土師器口縁が4点である。



A3-2図 A3SB301



1 灰黄色土（シルト、褐色土粒を多く含む）

A3-3図 A3SK308

A3SK310 (A3-4図)

時期：15世紀後半～16世紀初め頃 **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-19°-E

規模：3.06×(1.9) m **深さ**0.08m **断面形態**：U字状

埋土：黄灰色土（砂質シルト、褐色土粒を含む）

付属遺構：— **機能**：不明

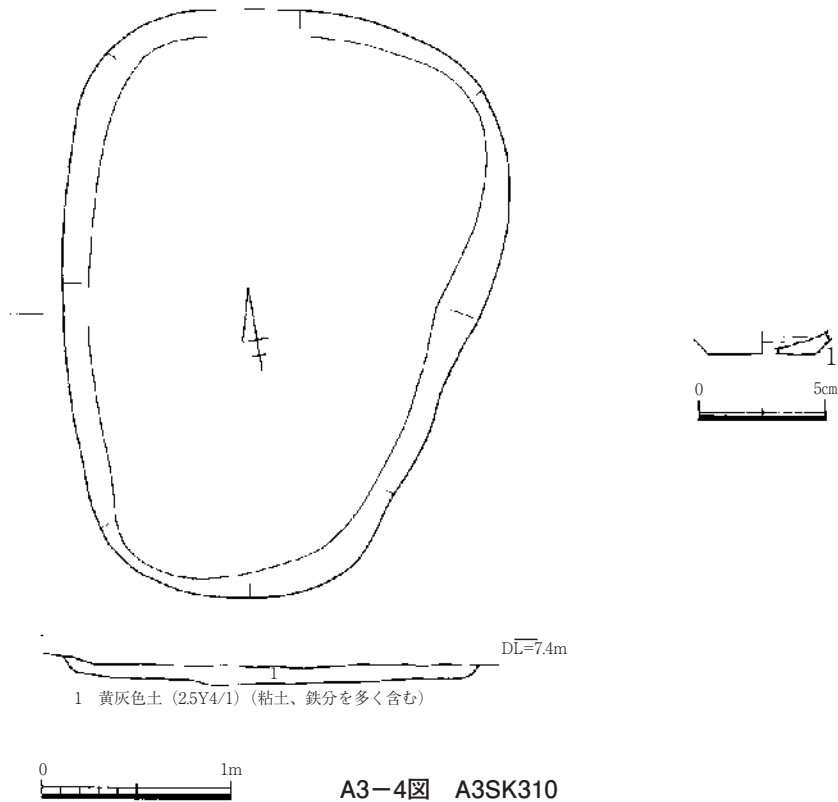
出土遺物：土師器杯

所見：調査区南東部中央寄りに位置しており、SK314を切っている。

出土遺物は15世紀後半～16世紀初め頃の土師器杯の底部1点（1）出土している。

A3-1表 A3区土坑一覧

遺構名	長径×短径×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	付属遺構	時期	備考
A3SK301	4.82×(0.94)×0.18	不明	U字状	不明	ビット2個	中世以降	
A3SK302	(2.70)×0.60×0.08	楕円形	不明	N-6°-E		中世以降	
A3SK303	1.18×(0.86)×0.18	隅丸方形	U字状			中世以降	
A3SK304	(1.60)×(1.18)×0.05	不整形	皿状			中世以降	
A3SK305	1.36×0.80×0.07	楕円形	U字状	N-68°-W		中世以降	
A3SK307	2.60×(0.88)×0.56	楕円形	箱形	N-49°-W		中世以降	
A3SK308	2.04×1.26×0.15	楕円形	U字状	N-10°-W		中世以降	
A3SK309	0.66×(0.60)×0.15	不明	U字状	N-76°-W		中世以降	
A3SK310	3.06×(1.90)×0.08	隅丸方形	U字状	N-19°-E		中世以降	
A3SK311	4.66×4.6×3.1	正方形	U字状			中世以降	水貯めの可能性あり
A3SK312	1.38×0.74×0.13	楕円形	U字状	N-12°-E		中世以降	
A3SK313	1.02×0.56×0.28	楕円形	U字状	N-10°-E		中世以降	
A3SK314	3.40×3.38×0.45	不整形	U字状			中世以降	
A3SK315	1.38×1.30×0.26	円形	箱形			中世以降	
A3SK316	1.22×1.00×0.34	隅丸方形	箱形	N-7°-E		中世以降	ごみ捨て場の可能性あり
A3SK317	(1.16)×0.46×0.48	溝状	U字状	N-90°-E		中世以降	
A3SK318	1.92×(1.26)×0.15	楕円形	逆台形	N-90°-E		中世以降	
A3SK319	2.84×(1.12)×0.29	不明	U字状			中世以降	
A3SK320	1.96×(1.14)×0.26	不明	U字状			中世以降	
A3SK321	1.46×0.64×0.27	溝状	U字状	N-5°-E		中世以降	床面に木材が検出された
A3SK322	(1.74)×0.88×0.40	溝状	箱形	N-15°-E		中世以降	
A3SK323	1.22×1.22×0.04	円形	皿状			中世以降	
A3SK324	1.32×0.84×0.11	隅丸方形	U字状	N-90°-E		中世以降	
A3SK325	1.44×(0.92)×0.35	隅丸方形	箱形	N-12°-E		中世以降	
A3SK328	3.38×1.18×0.45	長方形	箱形	N-8°-E		中世以降	
A3SK329	(1.44)×1.04×0.20	溝状	箱形	N-16°-E		中世以降	
A3SK330	(1.28)×1.00×0.08	楕円形	逆台形	N-87°-W		中世以降	
A3SK331	(1.44)×1.12×0.15	不整形	U字状	N-90°-E		中世以降	



A3SK311 (A3-5図)

時期；15世紀後半～16世紀初め頃 **形状**；正方形 **主軸方向**；—

規模；4.6×4.66m 深さ3.1m **断面形態**；U字状

埋土；黄灰色シルトと灰黄色シルトを主体に、最下層は還元層を含む。

付属遺構；— **機能**；水貯め

出土遺物；土師器杯、備前焼播鉢、磁器染付皿、青磁鉢

所見；調査区中央部に位置し、SK304、305、SD303、305、312、313を切っている。最下層に還元層があるので、溜め池にして、生活用水にしていたのではないだろうか。

出土遺物は15世紀後半～16世紀初め頃の土師器杯1点 (1)、15世紀後半頃の備前焼播鉢の口縁1点 (4)、近世の磁器染付皿の口縁1点 (2)、近世の青磁鉢の口縁1点 (3) 出土している。その他の出土遺物は土師器の口縁15点、底部4点、備前焼の底部2点である。

この土坑は15世紀後半～16世紀初め頃のものと考えられる。

A3SK314 (A3-6図)

時期；15世紀後半～16世紀初め頃 **形状**；不整形 **主軸方向**；—

規模；3.38×3.4m 深さ0.45m **断面形態**；U字状

埋土；灰黄色土（粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト、鉄分を含む）

付属遺構；— **機能**；不明—

出土遺物；土師器杯、土師器鍋、弥生土器

所見；調査区南東部に位置し、SK310に切られており、SK319、322を切っている。平面プラン状はSD302を切っている。

出土遺物は15世紀後半～16世紀初め頃の土師器杯の底部～体部1点 (1)、15世紀後半～16世紀初め頃の土師器杯の底部1点 (2)、15世紀後半頃の土師器鍋の口縁～胴部1点 (3)、15世紀後半～16世紀初め頃の土師器茶釜の口縁～胴部1点 (4) 出土している。その他の出土遺物は、弥生土器の底部2点、陶器の口縁1点、石器としては、チャート原石2点、石包丁の欠損品1点である。

A3SK315 (A3-7図)

時期；中世形状；円形 **主軸方向**；—

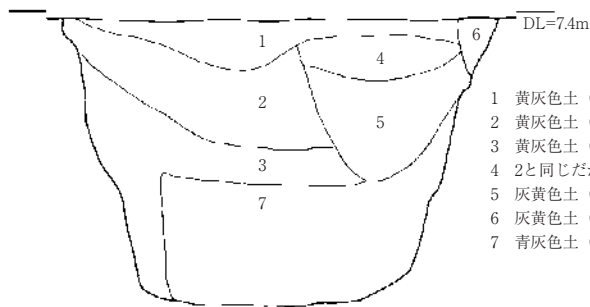
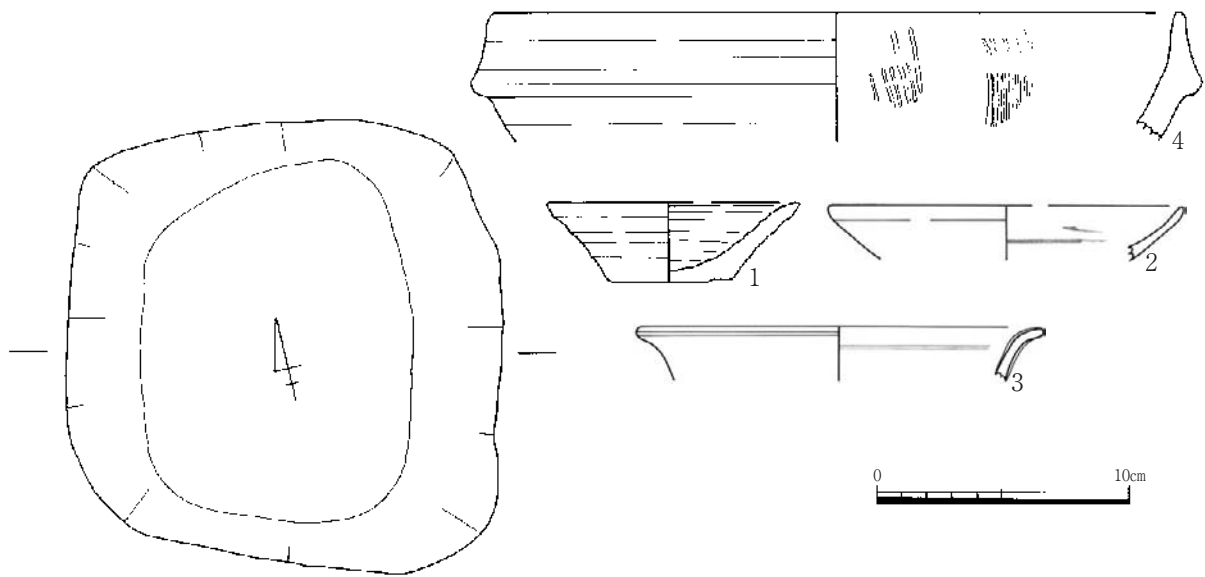
規模；1.38×1.30m 深さ0.26m **断面形態**；箱形

埋土；暗灰黄色土（シルト、鉄分を多く含む）

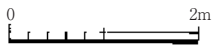
付属遺構；— **機能**；不明

出土遺物；陶器碗

所見；調査区南東部に位置し、SK318、SD309を切っている。17世紀後半～18世紀初め頃の陶器碗の底部1点 (1) 出土しており、その他の出土遺物としては、石器がチャート剥片1点出土している。埋土から判断しても中世の土坑と考えられる。

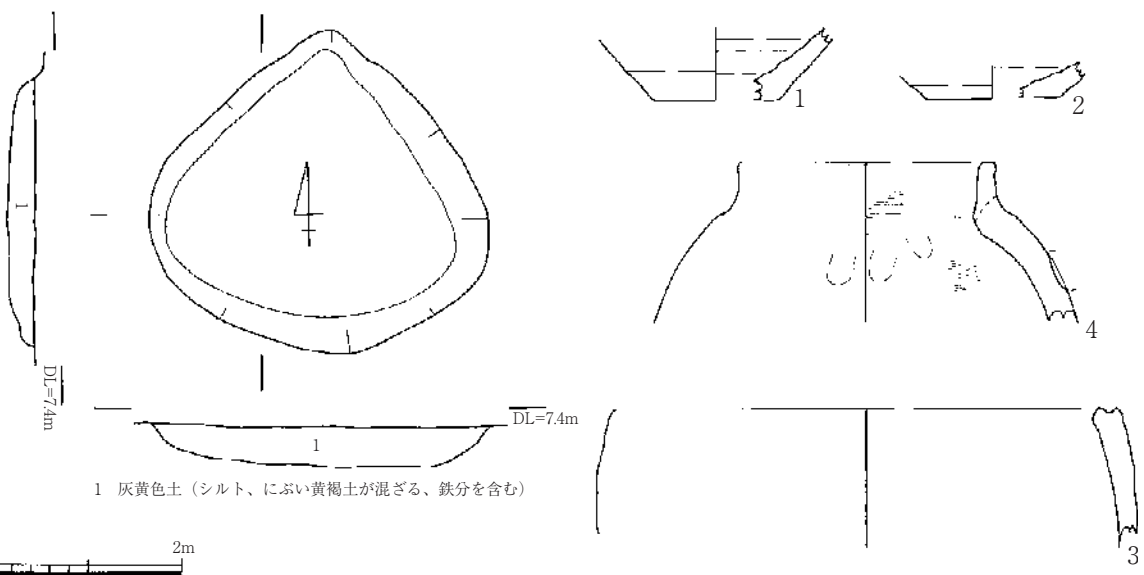


- 1 黄灰色土 (シルト)
- 2 黄灰色土 (シルト、レキを多く含む)
- 3 黄灰色土 (粘土質シルト)
- 4 2と同じだがレキが少ない
- 5 灰黄色土 (粘土質シルト、レキを含む)
- 6 灰黄色土 (シルト、褐色土ブロックを少量含む、鉄分を含む)
- 7 青灰色土 (粘土、還元層)



A3-5図 A3SK311

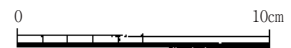
1 暗灰黄色土 (粘土質シルト、黒褐色土・赤褐色土シルトが多く混ざる)

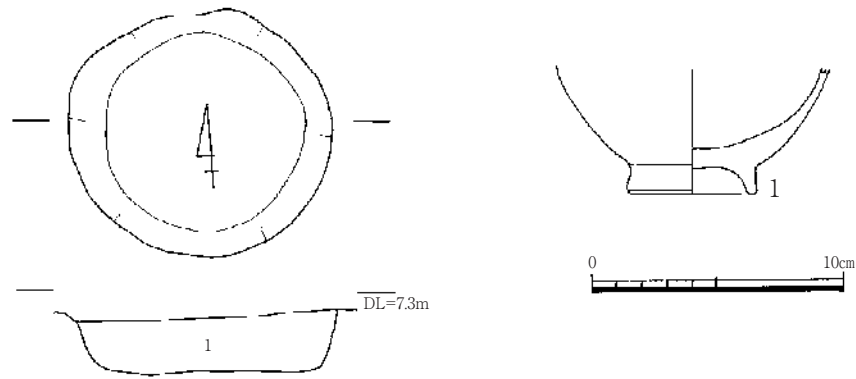


- 1 灰黄色土 (シルト、にぶい黄褐色土が混ざる、鉄分を含む)

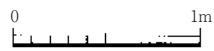


A3-6図 A3SK314

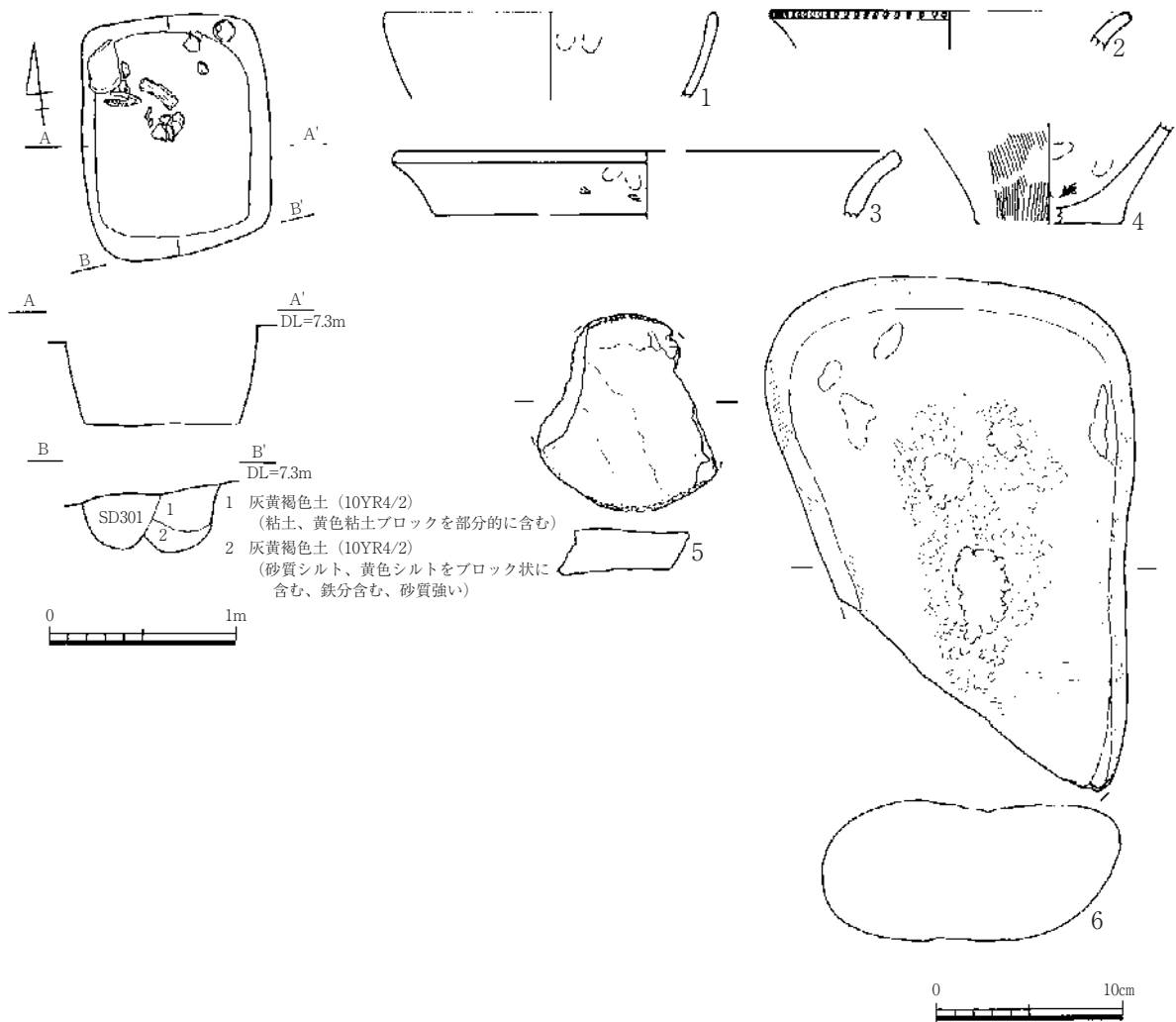




1 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) (シルト、鉄分が多く入る)



A3-7図 A3SK315



1 灰黄褐色土 (10YR4/2)
(粘土、黄色粘土ブロックを部分的に含む)
2 灰黄褐色土 (10YR4/2)
(砂質シルト、黄色シルトをブロック状に
含む、鉄分含む、砂質強い)

A3-8図 A3SK316

A3SK316 (A3-8図)

時期；中世 形状；隅丸方形 主軸方向；N-7°-E

規模；1.22×1m 深さ0.34m 断面形態；箱形

埋土；灰黄褐色土（砂質シルト）と灰黄褐色土（粘土）

付属遺構；— 機能；ゴミ捨て場

出土遺物；獣骨、弥生土器、凹石

所見；調査区南東部に位置し、SD301に上から切られており、断面形は西側に向けて浅くなっていている。弥生土器等が出土し中世のものはないものの、遺構埋土から判断して、この土坑は中世のものと考えられる。

A3SK320 (A3-9図)

時期；15世紀後半～16世紀初め頃 形状；不明 主軸方向；—

規模；1.96×(1.14) m 深さ0.26m 断面形態；U字状

埋土；灰黄褐色土（砂質シルト、礫散在）

付属遺構；— 機能；不明

出土遺物；土師器皿、杯、土錘

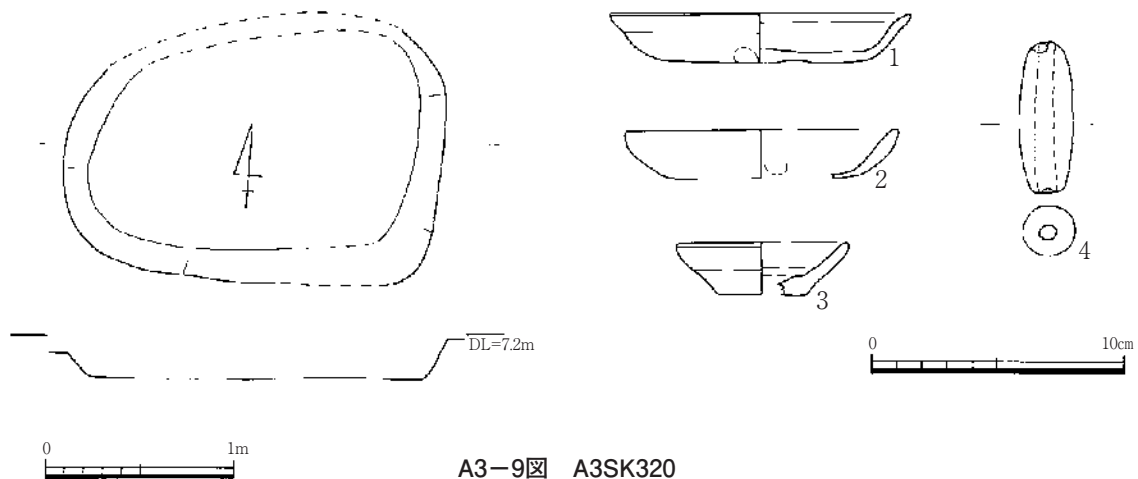
所見；調査区南東部に位置し、SK330とP3037を切っており、SK321に上から切られている。またSK319にも切られている。他の遺構との切り合いで形状は不明となっている。

出土遺物は15世紀後半頃の土師器皿1点（1）、15世紀後半頃の土師器杯1点（2）、15世紀後半～16世紀初め頃の土師器小杯（3）、土師器土錘1点（4）出土している。その他の出土遺物は土師器の口縁6点、石器としては、被熱した砂岩1点である。

A3SK321 (A3-10図)

時期；中世 形状；溝状 主軸方向；N-5°-E

規模；1.46×0.64m 深さ0.27m 断面形態；U字状



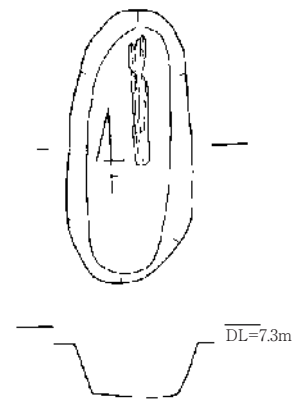
A3-9図 A3SK320

埋土：灰黄色土（シルト、褐色土を粒状に含む）

付属遺構：— 機能：不明

出土遺物：土師器口縁5点

所見：調査区南東部に位置しSK318、320を上から切っている。また軸方向に沿って、床面に木材が検出された。検出された木材は腐敗が激しく持ち帰り不可能であった為、写真と実測図で記録するのみに留めた。



0 1m
A3-10図 A3SK321

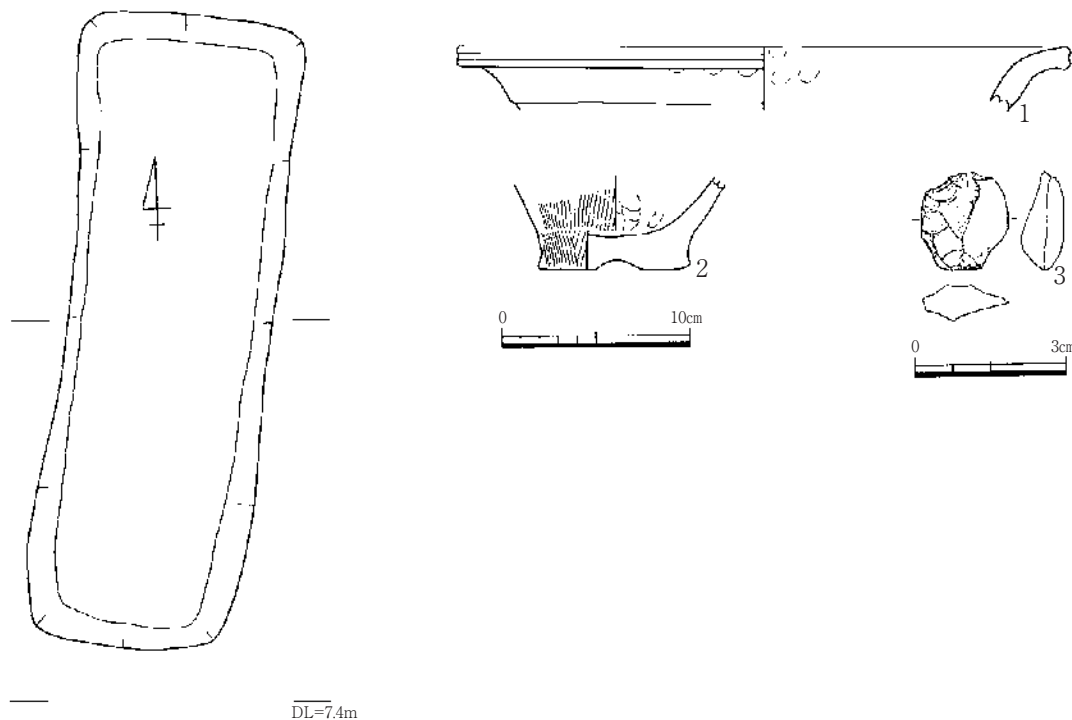
A3SK328 (A3-11図)

時期：中世以降 形状：長方形 主軸方向：N-8°-E

規模：3.38×1.18m 深さ0.45m 断面形態：箱形

埋土：にぶい黄褐色粘土質シルトと暗褐色粘土質シルト主体

付属遺構：— 機能：不明



- 1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) (シルト、暗褐色土と黄色土がブロック状に含まれる)
 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) (粘土質シルト、暗褐色土がブロック状に少量含まれる)
 3 暗褐色土 (10YR3/3) (粘土質シルト、うっすらと灰色ががかり2層よりも粘りが有る)
 4 黒褐色土 (10YR2/3) (粘土、粘質が強い)

0 1m

A3-11図 A3SK328

出土遺物：弥生土器

所見：調査区中央部西寄りに位置し、SD314の床面に掘り込まれている。尚実測遺物として上げられているのは弥生土器しかないが、何れも遺構の上面及び検出面からの出土遺物なので、この土坑の時期設定の材料としては説得力に欠ける。その為予想の域を出ないが、遺構埋土から中世の溝と思われるSD314の床面に掘り込まれていることから、この土坑は中世以降のものと考えられる。

A3SK329 (A3-12図)

時期：中世 **形状：**溝状 **主軸方向：**N-16°-E

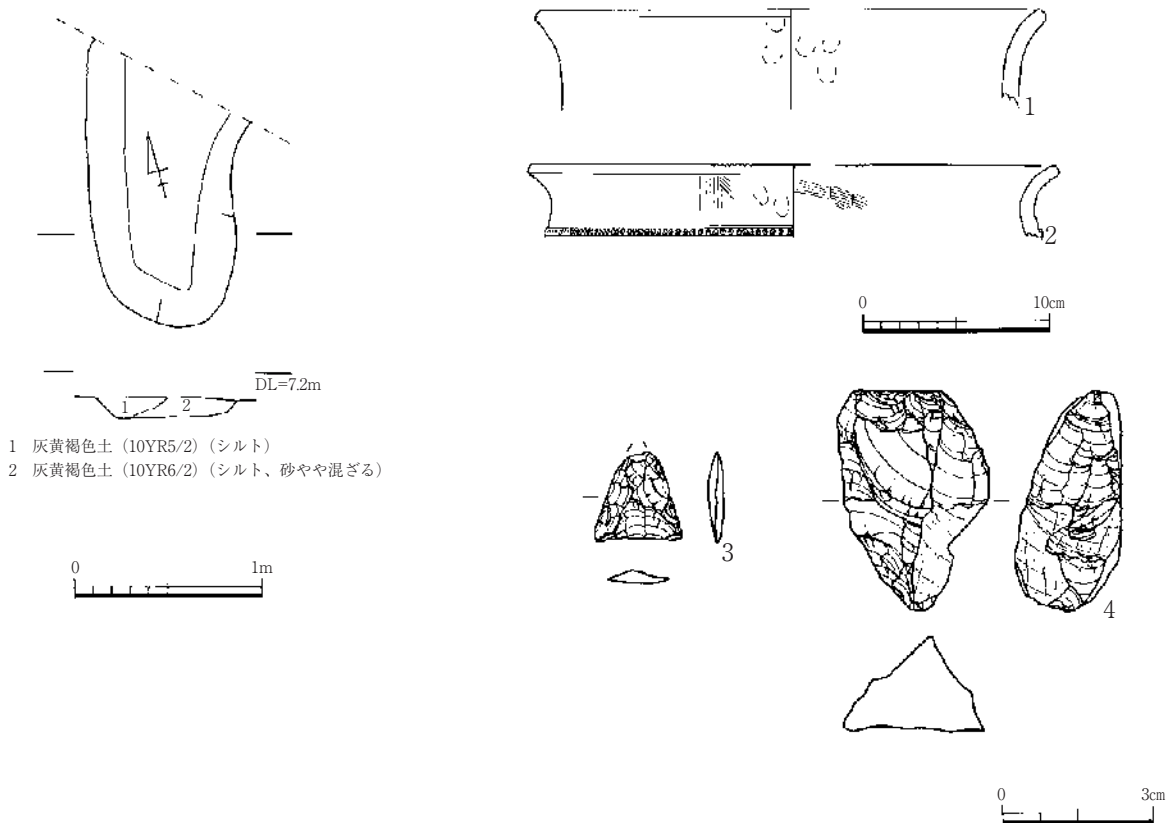
規模：(1.44) × 1.04m **深さ**0.2m **断面形態：**箱形

埋土：灰黄褐色シルト主体。

付属遺構：— **機能：**不明

出土遺物：弥生土器、石鏃

所見：調査区北部北西寄りに位置し、SD314の床面から検出された。出土遺物としては弥生時代のものしか出土しなかったが、中世の溝と思われるSD314の床面に掘り込まれていることと遺構埋土から判断して、この土坑は中世のものと考えられる。



A3-12図 A3SK329

A3SK330 (A3-13図)

時期；中世 形状；楕円形 主軸方向；N-87°-W

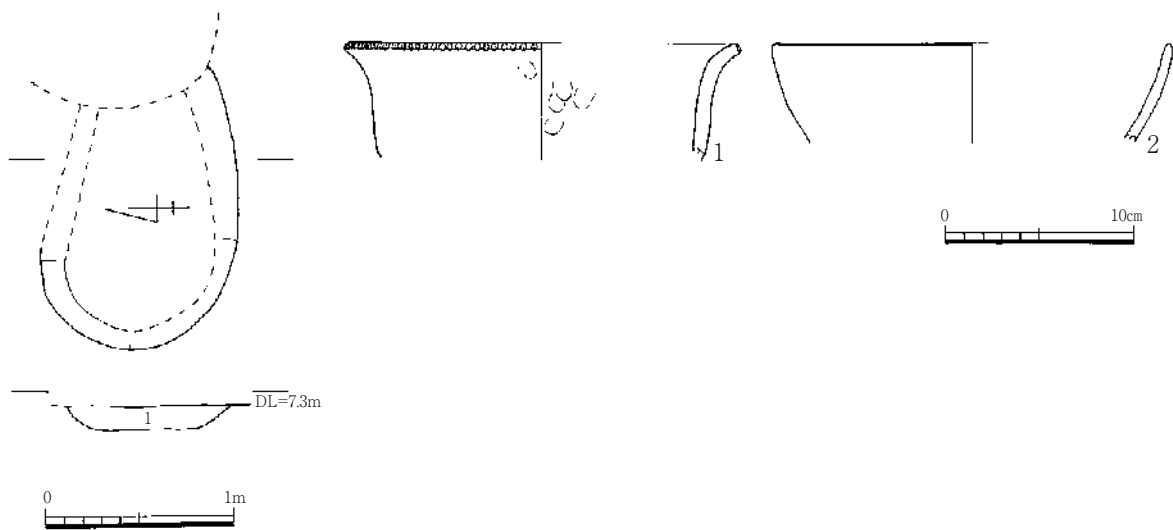
規模；(1.28) × 1m 深さ0.08m 断面形態；逆台形

埋土；灰黄褐色土（シルト、黄色シルトを粒状に、褐色土をブロック状に多量に含む）

付属遺構；— 機能；不明

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南部南東寄りに位置し、SK320に切られ、3個のピットを切る。出土遺物は弥生時代のものしか出土していないが、15世紀後半～16世紀初め頃の土坑と思われるSK320に切られていることから、この土坑はおそらくその頃のものではなかろうか。



A3-13図 A3SK330

(3) 溝跡

A3区では溝は12条検出されており、SD307以外はほぼ南北方向に走っている。ただし詳しい軸方向に関しては、各遺構の説明に譲る。また、SD305、306、314の軸方向はSB301とほぼ一致し、調査区南東部においては、溝が10基程の土坑に切られた様に掘られている。尚、このことに関しても、詳細を各遺構の説明にゆだねることとする。

出土遺物としては弥生土器が13点、須恵器が7点、土師器が13点、肥前系磁器が1点、青磁が1点、瓦質土器1点、石器が叩石1点、石斧1点、チャート剥片2点出土している。

A3SD301 (A3-14図)

時期；中世以降 **方向**；軸方向N-7°-E

規模；(16.56) × 0.48m 深さ0.28m **断面形態**；U字状

埋土；褐灰色シルトの部分と黄灰色粘土と灰黄褐色シルトの部分に分かれる。共に鉄分を含む

床面標高；北東端 (7.111m)、南西端 (6.937m)

接続；—

出土遺物；須恵器蓋、甕、土師器碗

所見；調査区東部に位置し、ほぼ南北に走っており、SK313とP3001を含めた3個のピットに切られている。またSK316を切っている。尚実測遺物は古代のものであるが、中世の土坑と思われるSK316を切っていることから、この溝は中世以降のものと思われる。

出土遺物は8世紀後半前後の須恵器蓋1点 (1)、8世紀後半～9世紀初めの須恵器甕の口縁1点 (2)、土師器碗の口縁～体部1点 (3) 出土している。その他の出土遺物は、須恵器の口縁1点、底部3点、土師器の口縁6点、底部5点である。

A3SD302 (A3-15図)

時期；14～15世紀頃 **方向**；軸方向N-7°-E

規模；(7.68) × 0.84m 深さ0.17m **断面形態**；逆台形

埋土；灰黄褐色土 (粘土質シルト、鉄分含む)

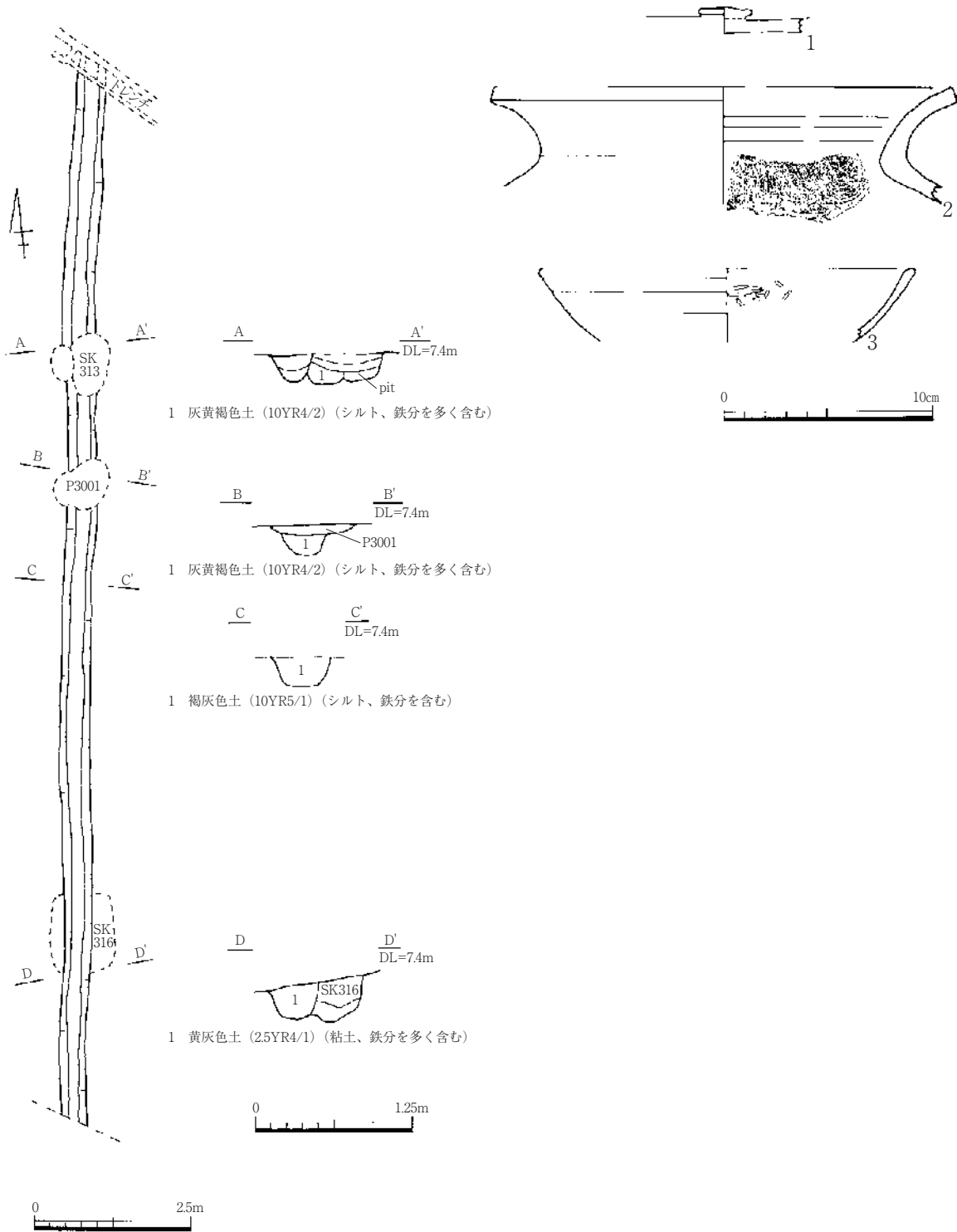
床面標高；南西端 (7.210m)、北東端 (7.132m)

接続；—

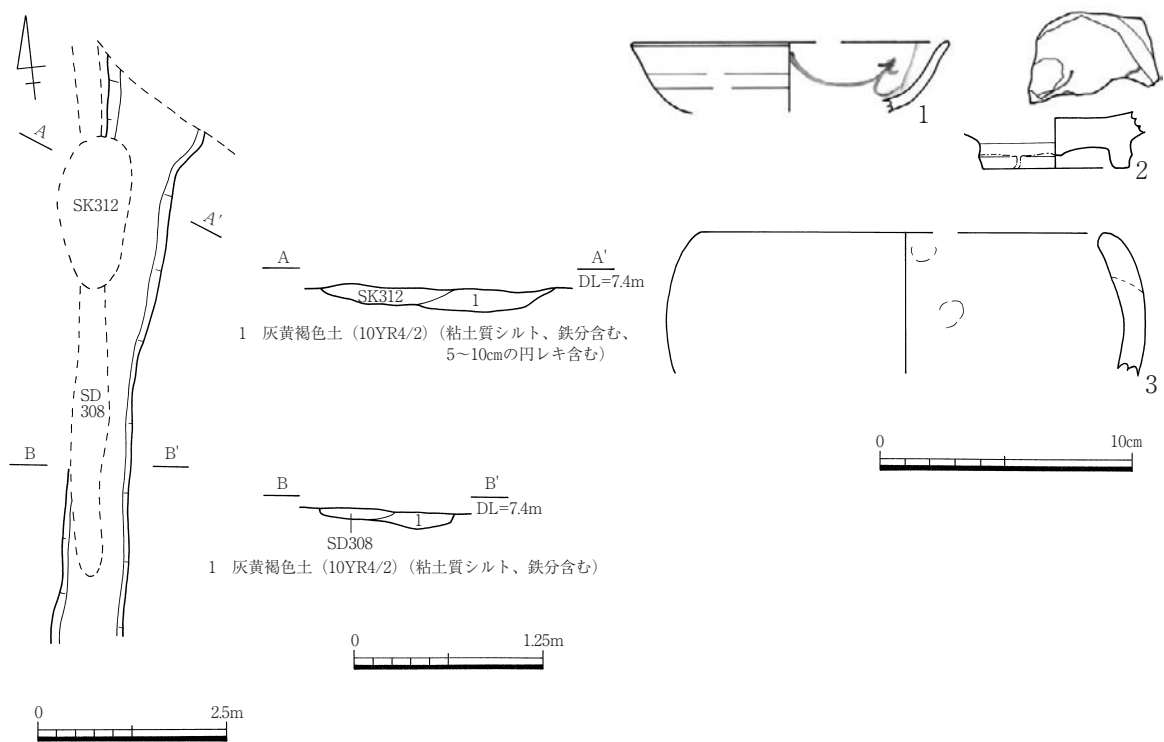
出土遺物；染付、青磁碗、瓦質土器浅鉢

所見；調査区東部に位置し、ほぼ南北に走っており、SD308、SK312に切られている。またSK302、303を切っている。尚、平面プラン状はSK314に切られている。

出土遺物は近世の肥前系磁器染付小皿の口縁～体部1点 (1)、14～15世紀頃の青磁碗の底部1点 (2)、14～15世紀頃の瓦質土器鍋の口縁～体部1点 (3) 出土している。その他の出土遺物は、土師器の口縁1点である。出土遺物及び遺構埋土から判断して、この溝は14～15世紀頃のものと考えられる。



A3-14図 A3SD301



A3-15図 A3SD302

A3SD303 (A3-16図)

時期；中世 方向；軸方向N-25°-E

規模；(3.84) × 0.72m 深さ0.21m 断面形態；U字状

埋土；灰黄色土（シルト）

床面標高；北東端（7.121m）、南西端（7.110m）

接続；—

出土遺物；須恵器壺

所見；調査区中央部に位置し、東寄りに傾いてはいるが、ほぼ南北に走っている。またSK311とピット1個に切られている。平安時代のもと思われる須恵器壺が出土しているが、1点のみしか遺物が出土していないことと遺構埋土から判断して、この溝は中世のものと考えられる。

A3SD308 (A3-17図)

時期；中世 方向；軸方向N-7°-E

規模；(6.88) × 0.50m 深さ0.13m 断面形態；U字状

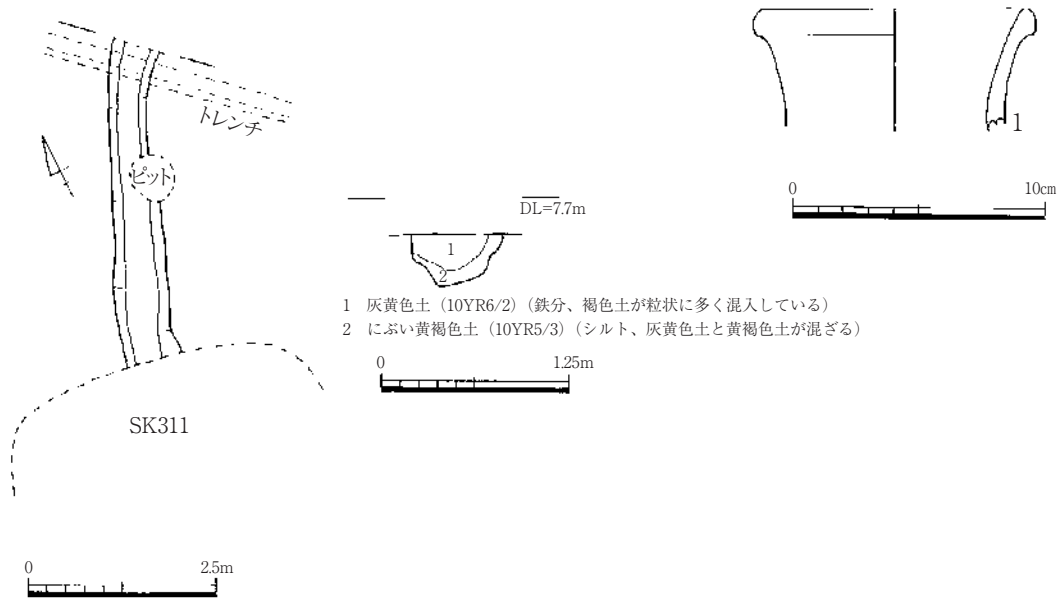
埋土；暗灰黄色土（砂質シルト、礫多く含む）

床面標高；南西端（7.149m）、北東端（7.105m）

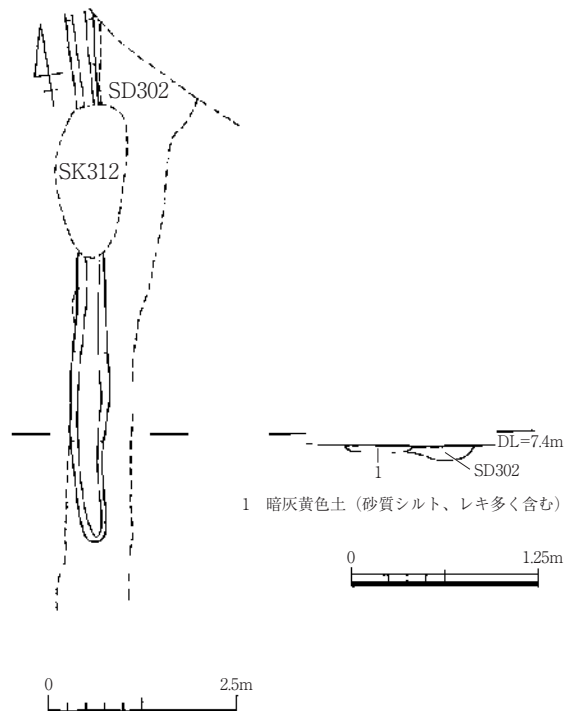
接続；—

出土遺物；—

所見：調査区東部に位置し、ほぼ南北方向に走っており、SD302、309を切っている。またSK312に切られている。断面形は浅い所では皿状になっている。



A3-16図 A3SD303



A3-17図 A3SD308

A3SD309 (A3-18図)

時期；中世 **方向**；軸方向N-7°-E

規模；(2.08) × 0.64m **深さ**0.43m **断面形態**；箱形

埋土；黄灰色土（粘土、鉄分を含む）

床面標高；南西端（6.817m）、北東は不明

接続；A1SD103と接続している

出土遺物；—

所見；調査区南東部に位置し、ほぼ南北方向に走っている。また、SK315、317、318に切られている。ただし、SK314、319、320の南北方向の断面とSK314の東西方向の断面にはSD309の断面が確認できないので、SD308とSD302の下層に存在する溝状の遺構はSD309とは別遺構と考えられる。SD309は断面図から判断して、SK315の南端から北西に向きを変えて、幅が狭くなっていっていることは確認できた。

A3SD312 (A3-19図)

時期；中世 **方向**；軸方向N-17°-E

規模；(1.76) × 1.12m **深さ**0.16m **断面形態**；U字状

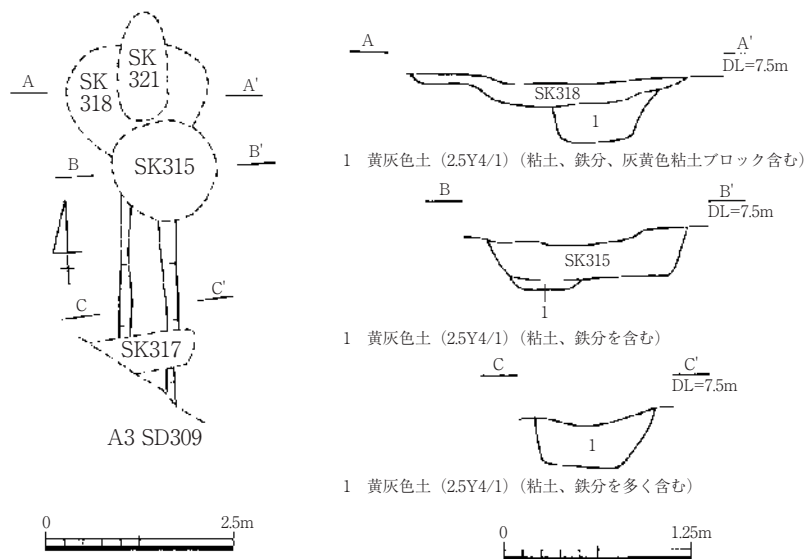
埋土；灰黄褐色土（砂質シルト、褐色土を粒状に多量に含む）

床面標高；北東端（7.165m）、南西端（7.136m）

接続；A1SD105と接続する

出土遺物；弥生土器、須恵器

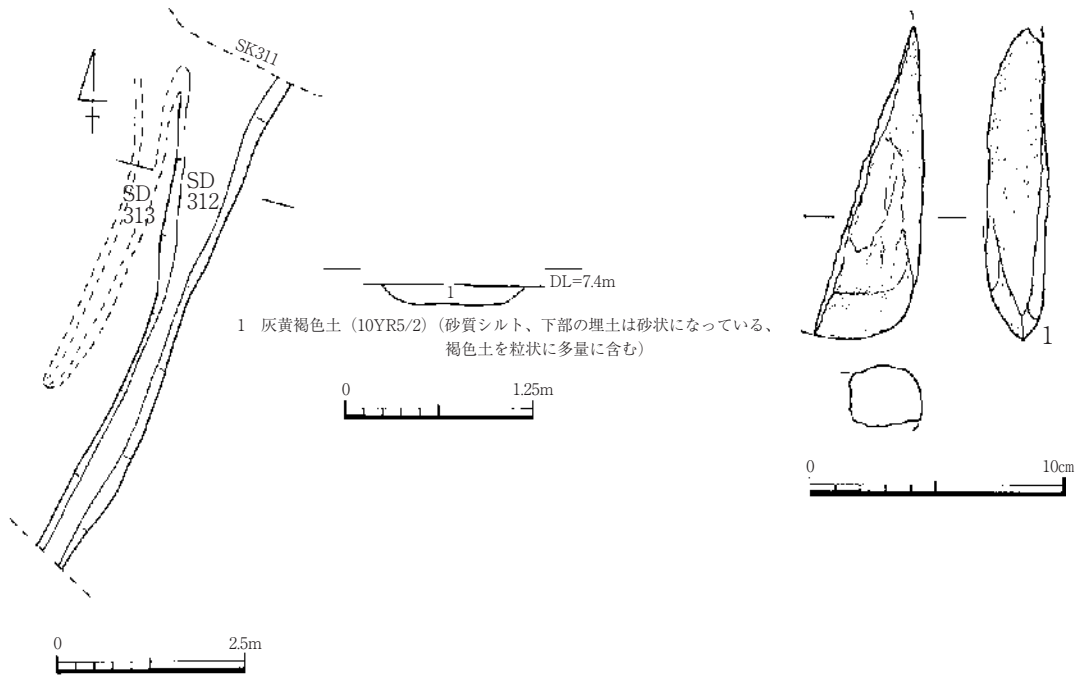
所見；調査区中央部に位置し、SK311に切られている。また、I5ス-15グリッド付近でSD313と合流する。



A3-18図 A3SD309

A1SD105と接続すると思われるが、幅に相違があるので、はっきりとは言いきれない。

出土遺物は石斧1点(1)出土している。弥生土器甕の口縁1点壺の底部2点、その他口縁1点、底部1点、破片55点、須恵器の破片1点、土師器の破片4点である。弥生時代のものが多いが、遺物の出土状況及び遺構埋土から判断して、この溝は中世のものと考えられる。

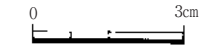


A3-19図 A3SD312

(4) 柱穴

概要でも述べた様にピット数は50個であるが、調査区中央部にはそのうち8個程しか検出されず、調査区の西側と東側に集中している。西側のピットは掘立柱建物の柱を支えるものになっているが、東側のピットは特徴がなく、特筆すべきものがない。

出土遺物としては、弥生土器破片94点、底部1点、須恵器破片4点、石器がチャート剥片18点サヌカイト剥片1点、根石1点である。



A3-20図 A3P3009

(5) 遺物包含層出土遺物

遺物包含層は調査区基本層序の第Ⅲ、Ⅳ層に相当し。出土遺物及び土色、土質から何れも中世の遺物包含層と思われる。

出土遺物としては、須恵器破片1点、土師器口縁1点のみである。

A4区の調査



1. A4区の概要

概要

本調査区は、高知空港滑走路のほぼ北側に位置し、特にA4区は中世の遺構群が密集していると思われるA3区の南東に隣接している。特に重要と思われる遺構は、15世紀頃機能していたと思われる守護代細川勝益及び持益の構えた田村城館の外堀で、ちょうど調査区の南端に位置している。また、この外堀の内側には、南北と東西方向に直角をなす形で溝が走っており、調査区の北西部分に土坑が集中している。尚、柵列も南北方向の溝に沿って、2条の溝に囲まれる様な状態で掘られており、自然流路は西肩部分のみ平面プランとして検出された。

調査担当者 山田和吉、泉幸代、坂本裕一

執筆担当者 山田和吉

調査期間 平成12年2月3日～平成12年3月17日

調査面積 320㎡

時代 弥生、中世、近世

検出遺構 中世の土坑26基、溝6条、自然流路1条、ピット44個、柵列1

2. A4区中世の遺構と遺物

(1) 土坑

A4区では土坑は26基検出されており、調査区北西部に集中している。特に南北と東西に直角に走る溝に囲まれた場所に、集中している。その中には、3ヶ所程複数の溝が切り合っって掘り込まれている。また調査区中央部には、東西に走る溝を切る形で隅丸方形の大型の土坑が、溝と同一軸方向で、掘り込まれている。

出土遺物としては、弥生土器が510点、須恵器が17点、土師器が69点、備前焼が8点、瓦質土器が3点、陶器が13点、磁器が8点、石器がチャート剥片5点、台石1点、石錘1点出土している。

A4SK402 (A4-2区)

時期；15～16世紀頃 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-79°-W

規模；1.66×1.00m **深さ**0.29m **断面形態**；逆台形

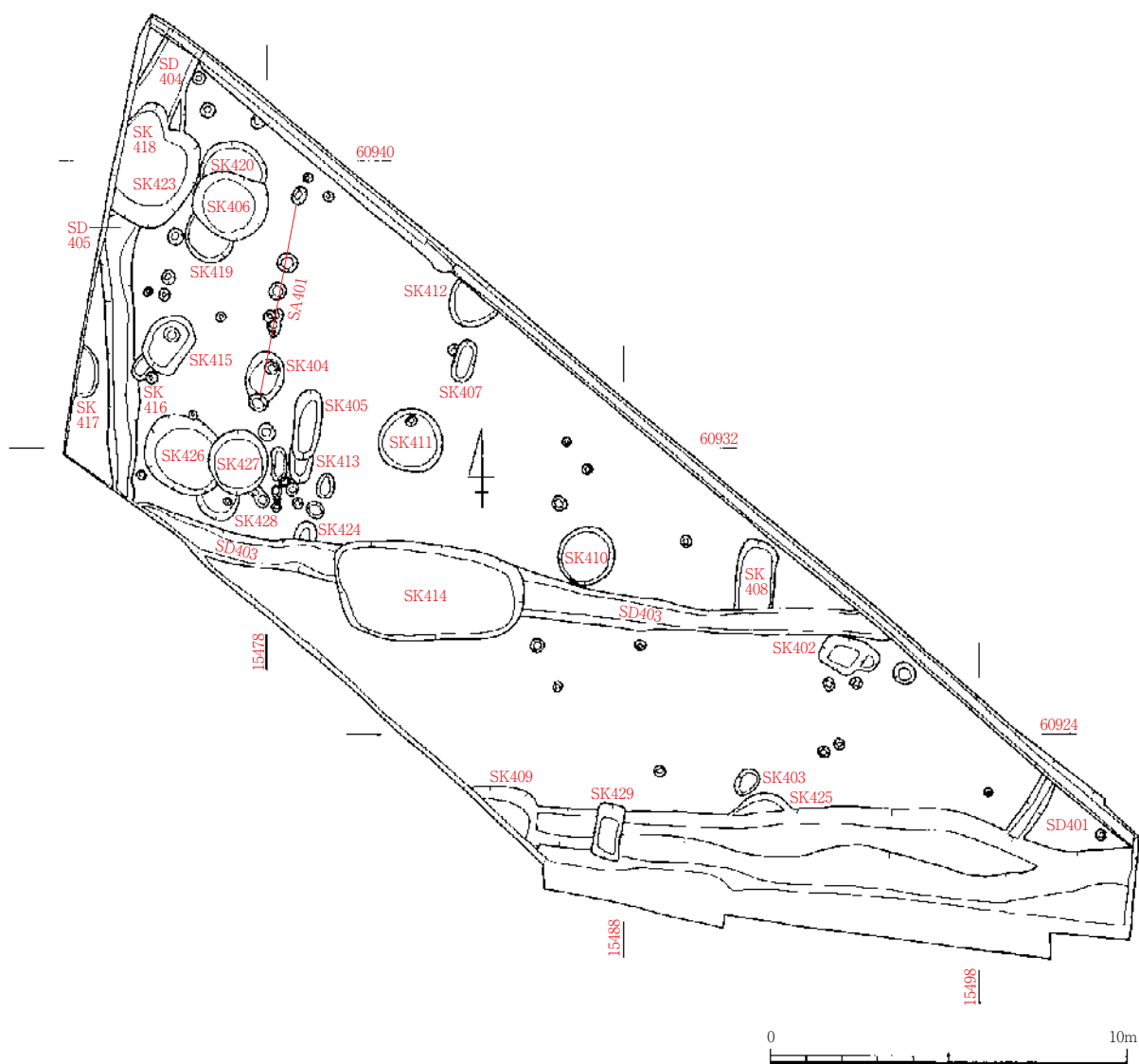
埋土；褐灰色土（シルト、褐色土粒を含む）

付属遺構；— **機能**；不明

出土遺物；瓦質土器羽釜、須恵器、土師器

所見；調査区東部中央寄りに位置し、断面は北側がテラス状に掘り込まれている。5個の礫が南北方向にほぼ1列に並んでおり、その西隣りに1個礫が出土し、何れも床面より出土している。6個共大きな礫で、大きさは40cm大の礫が南北方向に3個、20cm大の礫が南北方向に2個、あと1個は40cm大である。

遺物は15～16世紀初め頃の瓦質土器羽釜の口縁1点(1)が出土している。その他の出土遺物は、



A4-1図 A4区遺構全体配置図

須恵器の破片1点、土師器の破片3点、瓦質土器の破片1点である。

A4SK406 (A4-2図)

時期；中世 形状；円形 主軸方向；—

規模；2.07×1.80m 深さ0.24m 断面形態；箱形

埋土；灰黄色土（シルト、褐色土ブロック、鉄分粒を多く含む）

付属遺構；— 機能；不明

出土遺物；弥生土器、土師器杯、須恵器

A4-1表 A4区土坑一覧

遺構名	長径×短径×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	付属遺構	時期	備考
A4SK402	1.66×1.00×0.29	不整形	逆台形	N-79°-W		中世	
A4SK403	0.76×0.58×0.04	楕円形	皿状	N-26°-E		中世	
A4SK404	(1.20)×1.06×0.40	楕円形	箱形	N-14°-E		中世	
A4SK405	1.72×0.70×0.09	楕円形	U字状	N-9°-E		中世	
A4SK406	2.07×1.80×0.24	円形	箱形			中世	
A4SK407	1.16×0.60×0.12	楕円形	逆台形	N-19°-E	ピット1	中世	
A4SK408	(1.94)×1.06×0.07	隅丸方形	皿状	N-90°-E		中世	
A4SK409	(1.00)×(0.90)×0.88	隅丸方形	箱形	N-180°-E		中世	
A4SK410	1.62×1.54×0.18	円形	箱形			中世	
A4SK411	1.78×1.72×0.34	円形	箱形		ピット1	中世	
A4SK412	1.44×(0.94)×0.07	不明	皿状			中世	北西部調査区外の為平面形不明
A4SK413	(0.88)×0.66×0.21	溝状	U字状	N-9°-E		中世	
A4SK414	5.20×2.70×0.18	隅丸方形	皿状	N-84°-W		中世	
A4SK415	1.62×1.23×0.24	不整形	箱形	N-45°-E	ピット1	中世	
A4SK416	(0.60)×(0.57)×0.23	不明	U字状	N-45°-E		中世	SK415に切られて平面形不明
A4SK417	深さ0.10	不明	逆台形			中世	西部調査区外の為平面形、規模不明
A4SK418	3.50×(1.12)×0.21	不整形	逆台形	N-8°-E		中世	
A4SK419	1.41×(0.81)×0.23	円形	箱形			中世	
A4SK420	1.83×(0.84)×0.21	円形	箱形			中世	
A4SK423	2.76×(0.87)×0.32	不明	箱形			中世	SK418に切られて平面形不明
A4SK424	(0.99)×0.60×0.13	楕円形	U字状	N-16°-E		中世	
A4SK425	7.40×2.40×0.18	不整形	U字状	N-84°-W		中世	
A4SK426	2.01×(1.92)×0.42	楕円形	箱形	N-65°-W		中世	
A4SK427	1.80×1.68×0.42	円形	逆台形			中世	
A4SK428	(0.90)×(0.84)×0.12	不明	箱形			中世	SK426、427に切られて平面形不明
A4SK429	1.48×0.70×0.68	長方形	箱形	N-6°-E		中世	

所見：調査区北西部に位置し、SK419、420を切っている。

出土遺物は土師器杯の底部1点(2)出土している。その他の出土遺物は、弥生土器甕の口縁1点、その他破片70点、須恵器の破片1点である。

A4SK408 (A4-2図)

時期：中世 形状：隅丸方形 主軸方向：N-90°-E

規模：(1.94)×1.06m 深さ0.07m 断面形態：皿状

埋土：灰黄色土(シルト、鉄分、褐色土粒を多く含む)

付属遺構：— 機能：不明

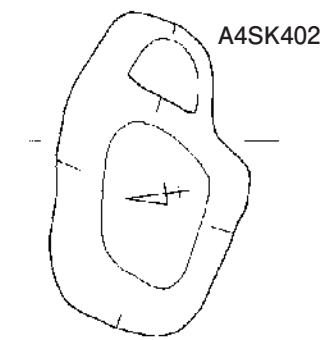
出土遺物：弥生土器、土師器杯

所見：調査区東部中央寄りに位置し、SD403に切られている。

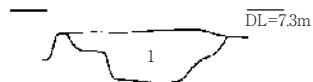
出土遺物は中世の土師器杯の底部1点(3)出土している。その他の出土遺物は、弥生土器の破片4点、土師器の破片9点である。

A4SK409 (A4-2図)

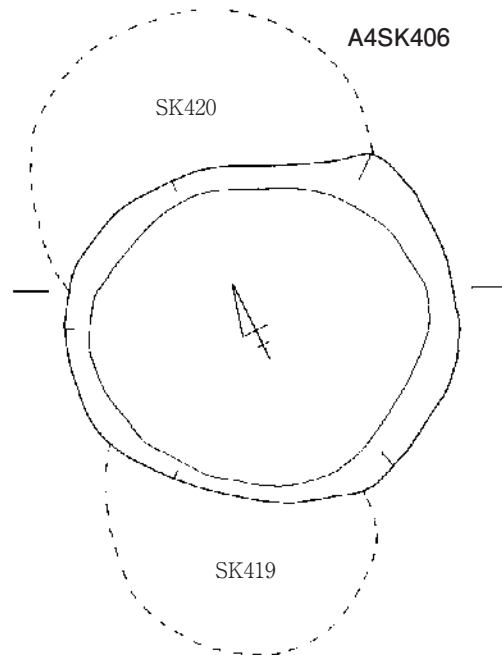
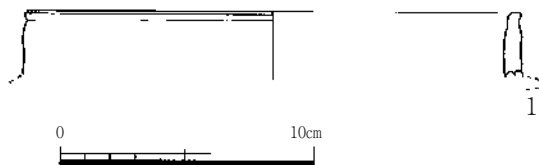
時期：中世～近世 形状：隅丸方形 主軸方向：N-180°-E



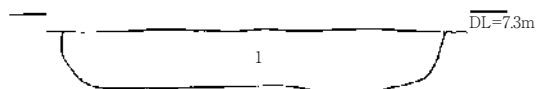
A4SK402



1 褐灰色土 (シルト、下部を灰色が占める、褐色土を粒状に含む)



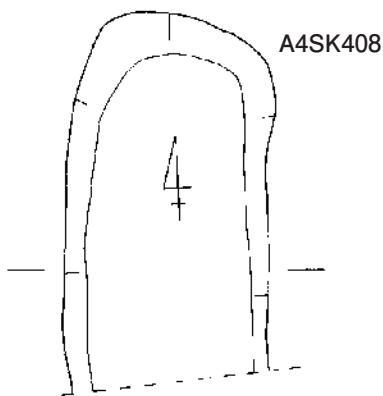
A4SK406



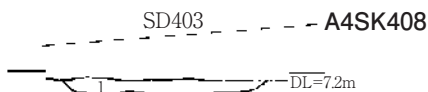
1 灰黄色土 (シルト、褐色土ブロック、鉄分粒を多く含む)



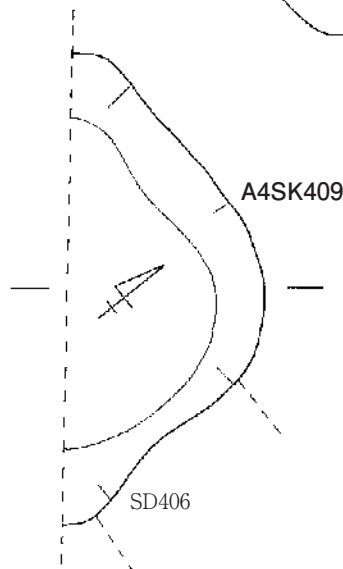
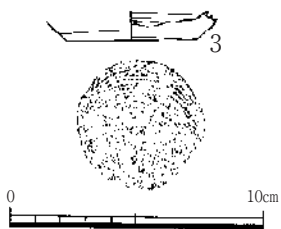
A4SK406



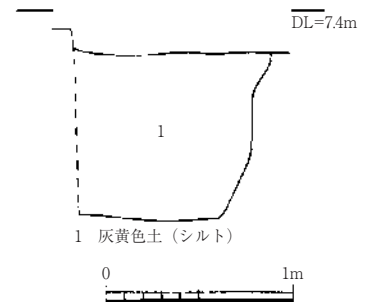
A4SK408



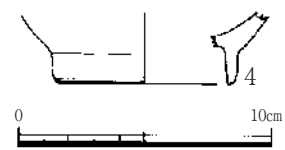
1 灰黄色土 (シルト、鉄分粒、褐色土粒を多く含む)



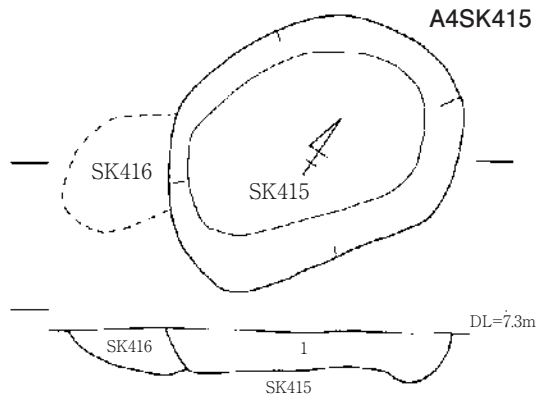
A4SK409



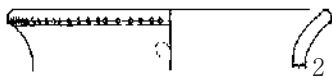
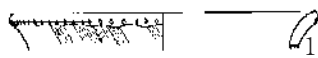
1 灰黄色土 (シルト)



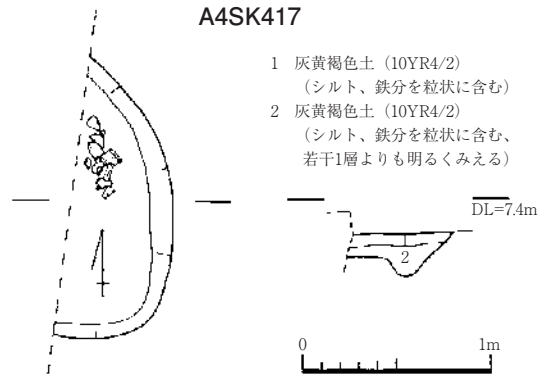
A4-2図 A4SK402・406・408・409



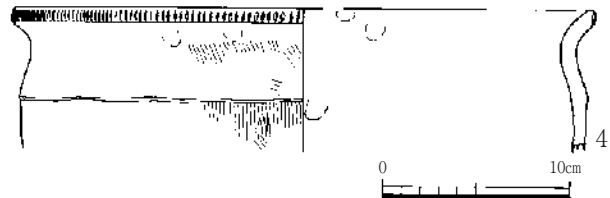
1 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) (シルト)



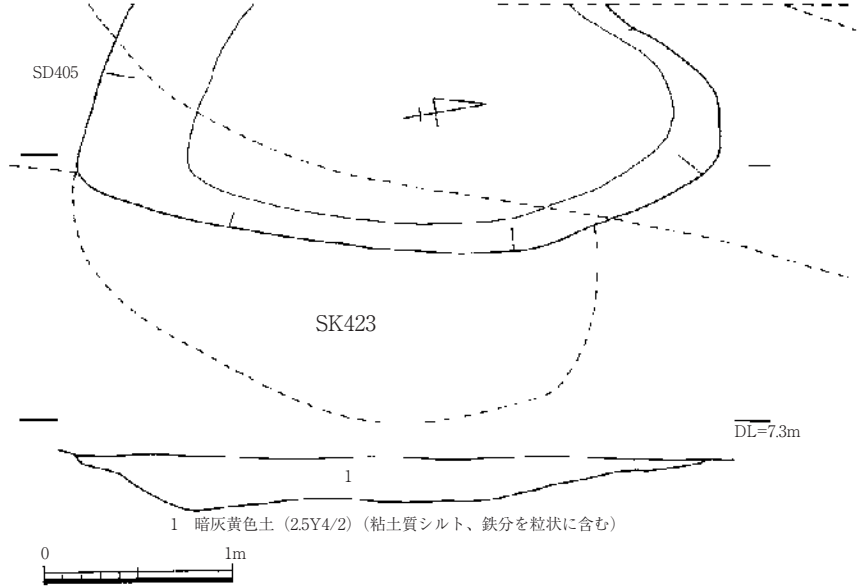
A4SK417



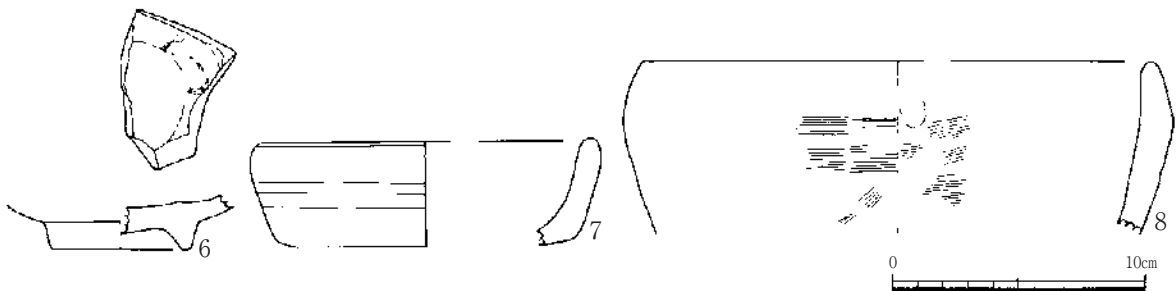
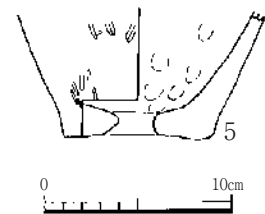
- 1 灰黄褐色土 (10YR4/2)
(シルト、鉄分を粒状に含む)
- 2 灰黄褐色土 (10YR4/2)
(シルト、鉄分を粒状に含む、
若干1層よりも明るくみえる)



A4SK418



1 暗灰黄色土 (2.5Y4/2) (粘土質シルト、鉄分を粒状に含む)



A4-3図 A4SK415・417・418

規模；(1.00) × (0.90) m 深さ0.88m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄色土（シルト）

付属遺構；— **機能**；不明

出土遺物；、弥生土器、須恵器、陶器碗

所見；調査区南部に位置し、断面からは判断できないがおそらくSD402、406を切っている。南西部分は調査区外なので、不明である。また12cm大の礫が3個、床面より10cm上面で出土した。

出土遺物は18世紀末～19世紀頃の陶器碗の底部1点（4）出土している。その他の出土遺物は、弥生土器の破片2点、須恵器の破片1点、陶器の口縁1点、破片7点、磁器の口縁6点、破片2点である。

埋土及び出土遺物から判断して、この土坑の時期は中世から近世ではなかろうか。

A4SK415（A4-3図）

時期；中世 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-45°-E

規模；1.62×1.23m 深さ0.24m **断面形態**；箱形

埋土；にぶい黄褐色土（シルト）

付属遺構；床面にピット1個が掘り込まれている **機能**；不明

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北西部に位置し、SK416を切っている。また埋土中にピットが掘り込まれていた。

出土遺物はI-2～3様式の弥生土器甕の口縁～胴部1点（1）、I-2様式と思われる弥生土器甕の口縁1点（2）出土している。その他の出土遺物は、弥生土器壺の口縁2点、その他底部1点、破片50点、石器がチャート剥片2点である。

出土遺物は弥生時代の遺物しか出土しなかったが、遺物に一括性がないことから、遺構埋土から判断して、この土坑は中世のものと考えられる。

A4SK417（A4-3図）

時期；中世 **形状**；不明 **主軸方向**；—

規模；(1.48) × (0.56) 深さ0.10m **断面形態**；逆台形

埋土；灰黄褐色シルトが主体、鉄分を粒状に含む

付属遺構；— **機能**；不明

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北西部に位置し、西側が調査区外になっており不明である。その影響で遺構の形状も不明である。断面形はピット状の掘り込みがあるが、別遺構の可能性はある。

出土遺物はI-2様式の弥生土器甕の口縁～胴部1点（3）、I-2様式の弥生土器甕の口縁～胴部1点（4）が出土している。その他の出土遺物は、弥生土器甕の口縁2点、底部1点、その他破片40点である。

出土遺物は弥生時代のものしか出土しなかったが、小規模な弥生土器の土器溜りは出土したが破片に近い甕の口縁が2点実測遺物として取り上げられただけで、一括性に乏しいのと、遺構埋土から

判断して、この土坑は中世のものと考えられる。

A4SK418 (A4-3図)

時期；15～16世紀頃 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-8°-E

規模；3.50×(1.12) m **深さ**0.21m **断面形態**；逆台形

埋土；暗灰黄色土（粘土質シルト、鉄分粒を含む）

付属遺構；— **機能**；不明

出土遺物；弥生土器、土師器、須恵器、陶器小皿墨書

所見；調査区北西部に位置し、SD404に切られていると思われる。また、SK423、SD405を切っている。この遺構の西側及び、北側、南側の3ヶ所に、埋土中及び遺構上面に大きな礫の集合体が検出された。

出土遺物はI-2様式の弥生土器甕の底部～胴部1点(5)、中世の土師器杯1点(7)、15～16世紀頃の土師器鉢の口縁～体部1点(8)、近世の陶器小皿墨書の底部1点(6)出土している。その他の出土遺物は、弥生土器壺の底部1点、その他破片8点、須恵器の破片3点、土師器の破片19点、備前焼の底部1点、破片3点、陶器の破片2点である。

A4SK425 (A4-4図)

時期；中世 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-84°-W

規模；7.40×2.40m **深さ**0.08m **断面形態**；皿状

埋土；暗黄灰土（シルト）

付属遺構；— **機能**；不明

出土遺物；弥生土器、土師器、須恵器、石錘

所見；調査区南部に位置し、SD402の北側にはみ出ている部分は別遺構の可能性はある。尚、SD402の床面に掘り込まれている。

出土遺物は石錘1点が出土している。その他の出土遺物は、弥生土器の破片31点、須恵器の口縁1点、底部1点、破片7点、土師器の口縁1点、破片13点、石器がチャート剥片1点である。

弥生土器は紛れ込みと判断し、その他の出土遺物と遺構埋土から判断して、この土坑は中世のものと考えられる。

A4SK426 (A4-4図)

時期；中世 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-65°-W

規模；(1.92)×2.01m **深さ**0.42m **断面形態**；箱形

埋土；暗灰黄色土（シルト、黄灰色土と鉄分が混ざる。礫が多く入る）

付属遺構；— **機能**；不明

出土遺物；弥生土器、土師器播鉢、須恵器、瓦質土器

所見；調査区北西部南端に位置し、SK427とP4013に切られており、SK428を切っている。また、5～15cm大の礫が多数埋土中に入り込んでいた。

出土遺物はI-2～3様式の弥生土器壺の口縁～胴部1点(2)、中世の土師器播鉢の底部1点(3)、

I-2様式と思われる弥生土器甕の底部1点（4、底部に穿孔有り）が出土している。その他の出土遺物は、弥生土器の破片22点、須恵器の破片1点、土師器の破片5点、備前焼の破片1点、瓦質土器の破片1点である。

実測遺物の中には、弥生土器が2点含まれているが、かけらに近いものであり、その他の弥生土器は紛れ込みと判断し、出土遺物及び遺構埋土から判断して、この土坑は中世のものと考えられる。

A4SK428（A4-4図）

時期；中世 **形状**；不明 **主軸方向**；—

規模；(0.84) × (0.90) m **深さ**0.12m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄色土（シルト、褐色土が混ざる）

付属遺構；床面にピットが1個掘り込まれている **機能**；不明

出土遺物；弥生土器

所見；調査区北西部南端に位置し、SK426、427に切られている。二つの土坑に切られている為、形状は不明である。埋土中及び床面直上から土器集中、及び炭化物、焼土が出土し、床面検出ピットからは礫が2個出土した。

出土遺物はI-2様式の弥生土器壺の口縁～頸部1点（5）が出土している。その他出土遺物は、弥生土器甕の底部1点、その他破片50点である。

出土遺物は弥生時代のものしか出土しなかったが、小規模な弥生土器の土器溜りは出土したが、破片に近い壺の口縁が1点実測遺物として取り上げられただけで、一括性に乏しいのと、遺構埋土から判断して、この土坑は中世のものと考えられる。

A4SK429（A4-4図）

時期；15世紀後半～16世紀頃 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-6°-E

規模；1.48×0.70m **深さ**0.68m **断面形態**；箱形

埋土；黄灰色土（シルト、灰色土、黄色土ブロックが散在する）

付属遺構；— **機能**；不明

出土遺物；弥生土器、土師器

所見；調査区南部に位置し、SD402の床面より検出した。

出土遺物は15世紀後半～16世紀初め頃の土師器杯の底部1点（6）出土している。その他の出土遺物は、弥生土器の破片3点、石器がチャート剥片2点である。

(2) 溝跡

A4区では溝は6条検出している。概要でも述べたが、調査区の南端には15世紀頃機能していたと思われる守護代細川勝益及び持益の構えた田村城館の外堀の中央部から北肩部分にかけて検出した。しかし、残念ながら中央部から南肩部分は公道によって遮断されてしまい調査不能となってしまった。また土坑が集中している調査区北西部には、土坑の密集地帯を囲む様に溝が南北と東西に走っている。尚、東西の溝は調査区中央部を走り、大型の隅丸方形の形状をした土坑に切られた形になっている。

出土遺物としては弥生土器142点、須恵器21点、土師器91点、備前焼13点、瓦質土器1点、瓦器4点、陶器6点、磁器1点、煙管1点、石器がチャート剥片1点、チャート石核1点、小型石斧1点、砥石1点が出土している。

A4SD404 (A4-5図)

時期；15世紀半ば～16世紀頃 **方向**；軸方向N-30°-E

規模；(3.64) × 1.28m 深さ0.13m **断面形態**；箱形

埋土；暗灰黄色土（シルト、鉄分と暗褐色土粒を含む）

床面標高；北東端（7.108m）、南西端（7.127m）

接続；—

出土遺物；土師器鍋、播鉢

所見；調査区北西部北端に位置し、SK418を切っている。床面標高の南西端は、SK418に掘り飛ばされてしまったので、SK418の北西側でしか測定できなかった。故に信用性に欠ける。

出土遺物は15世紀後半頃の土師器鍋の口縁～胴部1点（1）、15世紀半ば以降のものと思われる備前焼播鉢の底部1点（2）が出土している。その他の出土遺物は、土師器の破片2点である。

SK418との切り合い関係及び出土遺物から判断して、この溝は15世紀半ばから16世紀頃のものと考えられる。

A4SD405 (A4-5図)

時期；15世紀～16世紀頃 **方向**；軸方向N-0°-E

規模；(7.68) × 0.84m 深さ0.36m **断面形態**；U字状

埋土；褐色系及び灰褐色シルト系を主体

床面標高；北端（6.888m）、南端（6.897m）

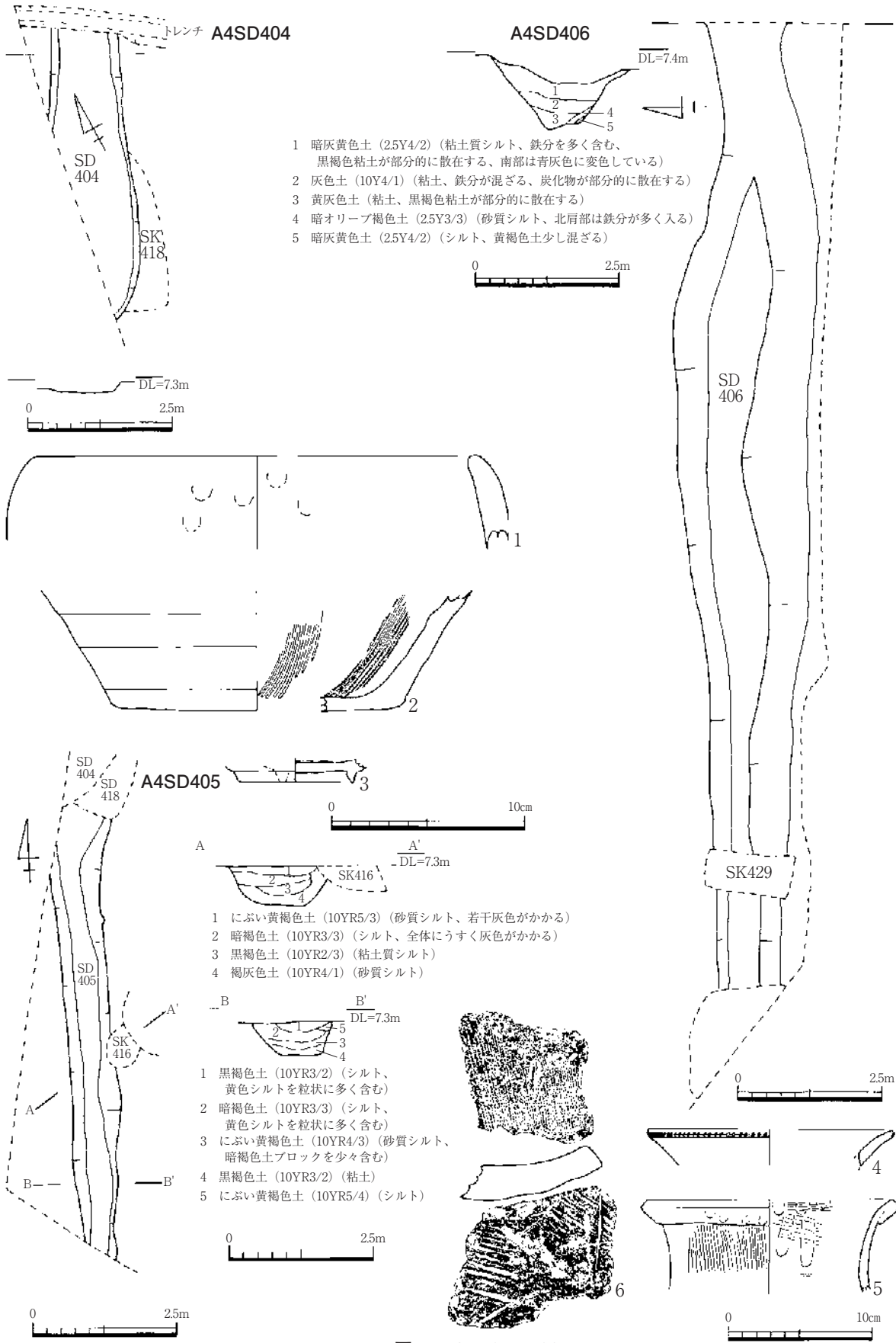
接続；—

出土遺物；弥生土器、白磁小皿、須恵器、土師器

所見；調査区北西部に位置し、SK416、418、SD404に切られている。

出土遺物は白磁小皿の底部1点（3）が出土している。その他は弥生土器の破片15点、須恵器の破片1点、土師器の破片1点、備前焼の破片1点、陶器の破片1点である。

他の遺構との切り合い関係から判断しても15世紀～16世紀頃の溝と考えられる。



A4-5図 A4SD404~406

A4SD406 (A4-5図)

時期：15世紀頃 方向：軸方向N-84°-W

規模：(16.35) × 2.40m 深さ1.06m 断面形態：U字状

埋土：暗灰黄色シルト及び暗オリーブ褐色砂質シルトが主体

床面標高：北西端 (6.980m)、南東端 (6.069m)

接続：—

出土遺物：弥生土器、瓦、須恵器、土師器

所見：調査区南部に位置し、断面形は北側しか掘り下げられなかったため、推定でしか分からない。またSK409に切られており、SK429がSD402の床面から掘り込まれている。尚、この溝はSD402の床面より検出され、断面及び位置から判断して、溝概要でも述べた様に、15世紀頃機能していたと思われる守護代細川勝益及び持益の構えた田村城館の外堀の可能性が高い。

出土遺物はⅡ様式と思われる弥生土器甕の口縁1点 (4)、Ⅳ様式と思われる弥生土器壺の口縁～頸部1点 (5)、古代の瓦の破片1点 (6) が出土している。その他は弥生土器甕の口縁1点、底部1点、壺の底部1点、その他口縁4点、破片72点、須恵器の底部1点、破片3点、土師器の破片5点、陶器の破片2点である。

(3) 自然流路 (A4-6図)

A4区では自然流路は1条確認されており、本調査で自然流路の東肩部分が平面プランとして検出不可能だったため、断面確認のみに留まった。尚、西肩部分の平面プランは北西部の土坑群をほぼ南北に切った方向に走っていると思われるが、平面プランとして確認できたのはSD404東肩とSK423の間のみである。

出土遺物としては、弥生土器甕の口縁1点、底部1点、壺の口縁1点、底部1点、その他口縁3点、底部3点、破片250点、土師器の口縁1点、破片2点、石器は棒状叩石1点が出土している。

(4) 柵列

A4区では柵列は1検出されており、概要でも述べた様に北西部の土坑群の中に、南北方向の溝に沿って、南北と東西に交差している溝に囲まれる様に掘られている。

出土遺物としては、弥生土器が19点、土師器が3点出土している。

A4SA401 (A4-7図)

時期：中世 棟方向：N-2°-E

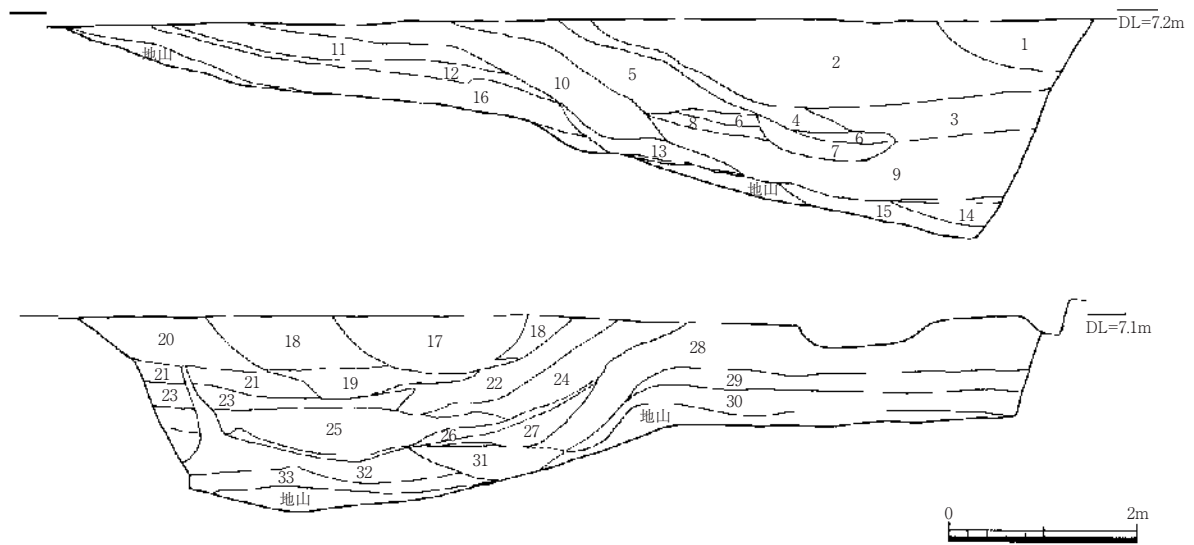
規模：南北方向5.93m

柱間寸法：1.80~2.18m

柱穴数：4個 柱穴形：円形

性格：柵列 付属施設：—

出土遺物：弥生土器、土師器



- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1 砂礫 | 13 砂礫 | 25 小砂礫 |
| 2 暗褐色シルト | 14 砂礫 | 26 灰褐色シルト |
| 3 暗褐色シルト | 15 黒色粘土 | 27 黄褐色シルト |
| 4 暗灰褐色 | 16 黒色粘土 | 28 灰褐色シルト |
| 5 黄褐色シルト | 17 砂礫 | 29 黄褐色シルト |
| 6 砂礫 | 18 黄褐色シルト | 30 黒褐色粘土 |
| 7 暗灰褐色 | 19 暗褐色シルト | 31 中砂層 |
| 8 暗灰褐色シルト | 20 暗褐色シルト | 32 砂礫層 |
| 9 砂礫互層 | 21 暗灰褐色シルト | 33 砂礫層 |
| 10 灰褐色砂質 | 22 暗灰褐色シルト | |
| 11 暗灰褐色砂質 | 23 灰褐色砂質 | |
| 12 黄褐色シルト | 24 暗灰褐色シルト | |

A4-6図 A4区自然流路

所見：調査区北西部に位置し、P1は2個のピットを切っており、P2はSK404を上から切っている。尚、P2、4からは柱痕が検出され、P3からは大きな礫が2個出土した。出土遺物は弥生土器の口縁1点、破片18点、土師器の破片3点が出土している。各柱穴の埋土から判断しても、この柵列は中世のものと思われる。

(5) 柱穴 (A4-7図)

概要でも述べた様にピット数は44個であるが、調査区北西部は密集しており、中央部南東部は散在している。北西部のピットは柵列を形成するものを含むが、中央部南東部のものは特徴がなく、特筆すべきものがない。

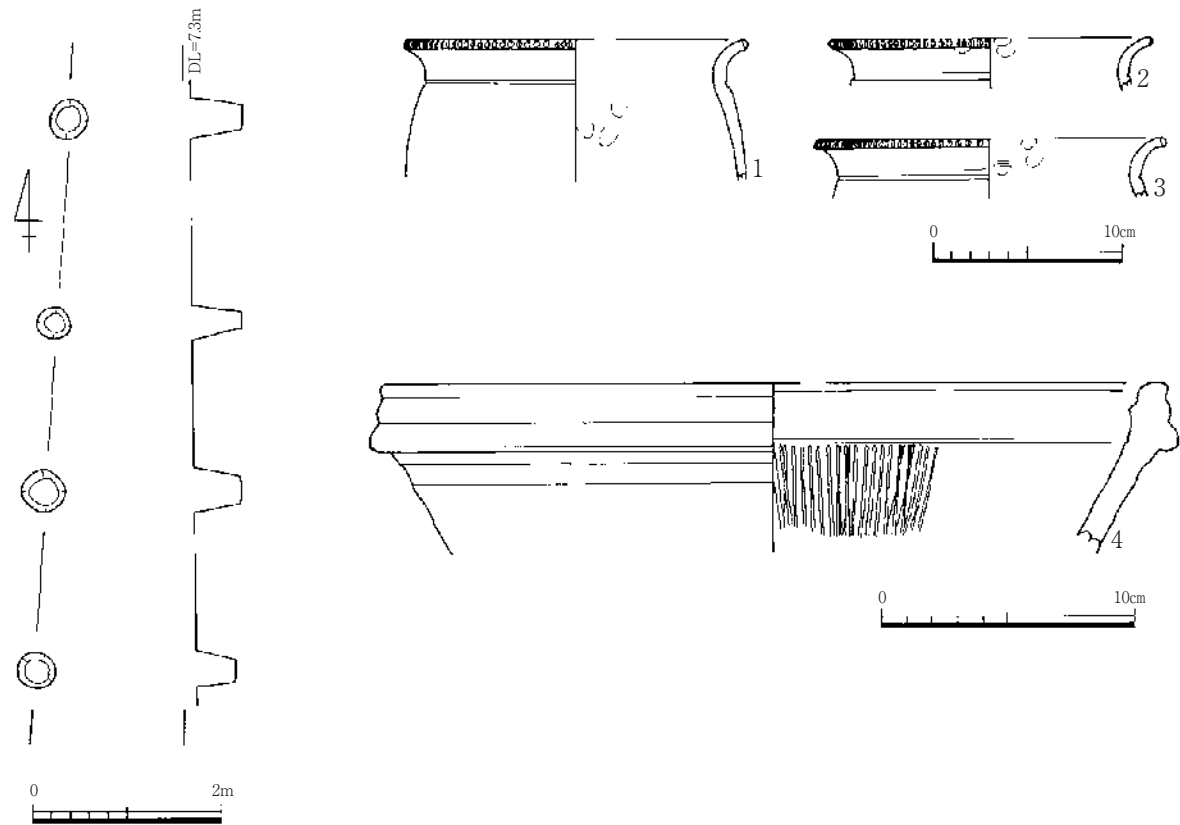
出土遺物としては、実測遺物がI-3様式の弥生土器甕の口縁～胴部1点 (P4002出土：1)、I-3

様式の弥生土器甕の口縁～胴部1点 (P4003出土:2)、I-3様式の弥生土器甕の口縁～胴部1点 (P4005出土:3) が出土している。その他の出土遺物は、弥生土器口縁1点、破片109点、須恵器破片2点、土師器破片5点、備前焼破片1点、根石1点である。弥生土器に関しては紛れ込みと判断し、各ピットの埋土から判断して、これらのピットは中世のものと考えられる。

(6) 遺物包含層出土遺物 (A4-7図)

遺物包含層は調査区基本層序の第Ⅱ、Ⅲ層に相当し、弥生土器は紛れ込みと考えられるので、出土遺物及び土色、土質から何れも中世の遺物包含層と考えられる。

出土遺物としては、15世紀後半頃の備前焼播鉢の口縁1点(4)が出土している。その他の出土遺物は、弥生土器口縁2点、破片54点、須恵器破片7点、土師器口縁3点、破片13点、備前焼破片6点、瓦質土器破片6点、陶器破片4点、磁器破片4点である。



A4-7図 A4SA401・柱穴、遺物包含層出土遺物

A5~9区の調査



1. A5～9区の概要

概要

A5～9区は高知空港滑走路のほぼ北側に位置し、細勝寺の南側を南東に約350mの地点の補償工事部分をA9区とし、そこを起点としてN-52°-Wの軸方向に沿って北西方向に、A8、7、6、5と順番に補償工事部分に調査区を設けて、それぞれ基本的にトレンチ調査を行った。ちなみにA5区の北西に隣接している調査区はA4区である。遺構が確認された調査区はA6、7、9区の3区のみで、その他の調査区は確認できなかった。

調査担当者 山田和吉

執筆担当者 山田和吉

調査期間 A5、7、8、9区（平成12年1月24日～平成12年2月9日）、A6区（平成12年6月7日～平成12年6月15日）

調査面積 A5（13m²）、A6（TR1-143.8m²、TR2-143.7m²）、A7（166m²）、A8（15m²）、A9（60m²）

検出遺構 A6区（性格不明遺構4基、溝2条、柱穴59個）、A7区（土坑2基、柱穴11個）、A9区（溝5条）

2. A5区の調査

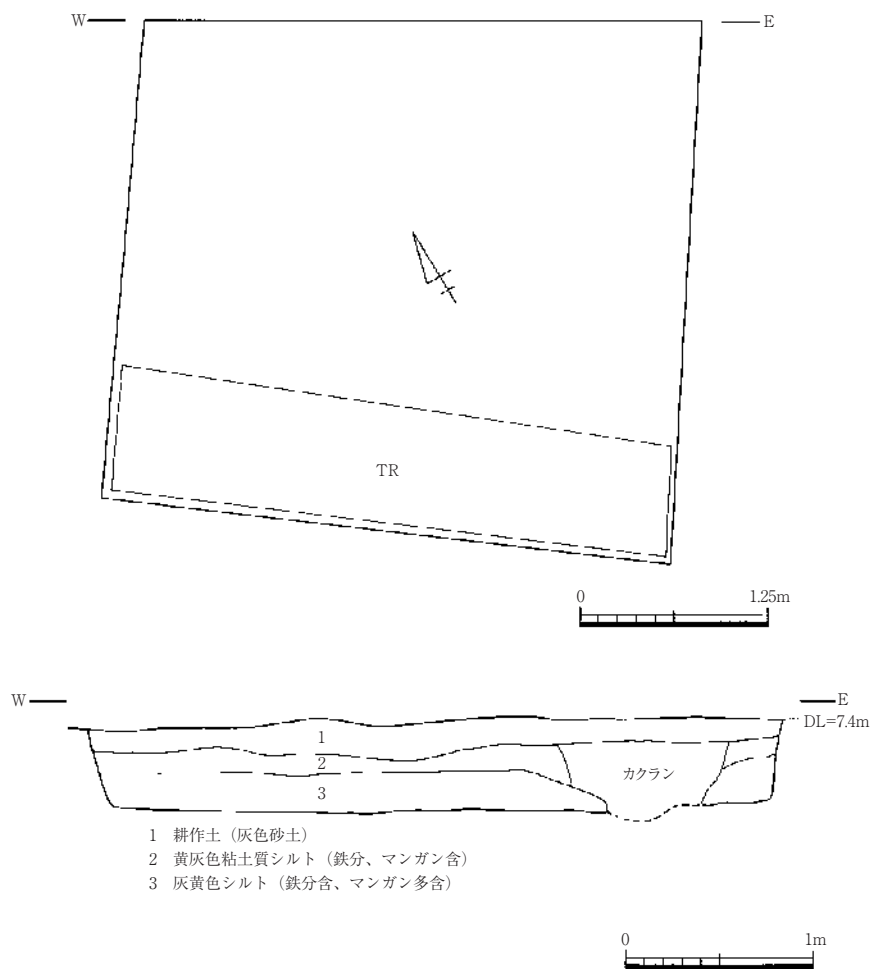
A5区（A5-1図）では概要でも述べた様にトレンチ調査を行った結果、遺構は確認できず、遺物も弥生土器の口縁が1点のみ出土しただけに留まった。また、念の為にトレンチの南西部分にサブトレンチを掘ったところ、床面に弥生時代の遺物包含層と思われる土層の確認をみたが、遺物も出土せず、土層そのものが攪乱を受け、遺物包含層と確定するには資料不足であった為、単なる土層の潜り込と判断して調査を終了した。

3. A6区の調査

(1) 遺構（A6-1・2図）

A6区では、概要でも述べた様に最初トレンチ調査を行った。その結果、TR1においては、東壁セクションに弥生時代の遺物包含層と思われる土層が北東方向に落ち込みながらもぐり込んでいたので、長さ4.8m、幅0.7mのサブトレンチを北東方向に向けて掘削した。その結果落ち込みが途切れ、遺物そのものもまばらにしか出土せず、断面から判断しても遺構の存在をかいま見ることができなかったため、トレンチ拡張を断念した。TR1においては、性格不明遺構1基と柱穴13個が北西部分のみで検出した。

TR2（拡張後調査区となったが便宜上TR2とした）においては、細川氏の建立した田村城館の外堀の確認の為、北東方向にトレンチを拡張し、その北側にサブトレンチを掘削したが、外堀の断面



A5-1図 A5区トレンチ

は確認できなかった。また、確認された遺構としては、性格不明遺構3基が南東部付近に、溝が2条北西部付近に、柱穴46個を調査区全域にわたって検出した。柱穴は南東部付近に集中していたが、なんら特徴がなく特筆すべきものがなかった。

(2) 遺物 (A6-2図)

SX601-陶器碗の口縁1点 (1)、17世紀後半～18世紀前半の陶器碗の底部1点 (2)、土師器小皿1点 (3) 出土しており、その他の出土遺物は弥生土器破片7点、須恵器破片3点、土師器破片3点、陶器破片2点である。

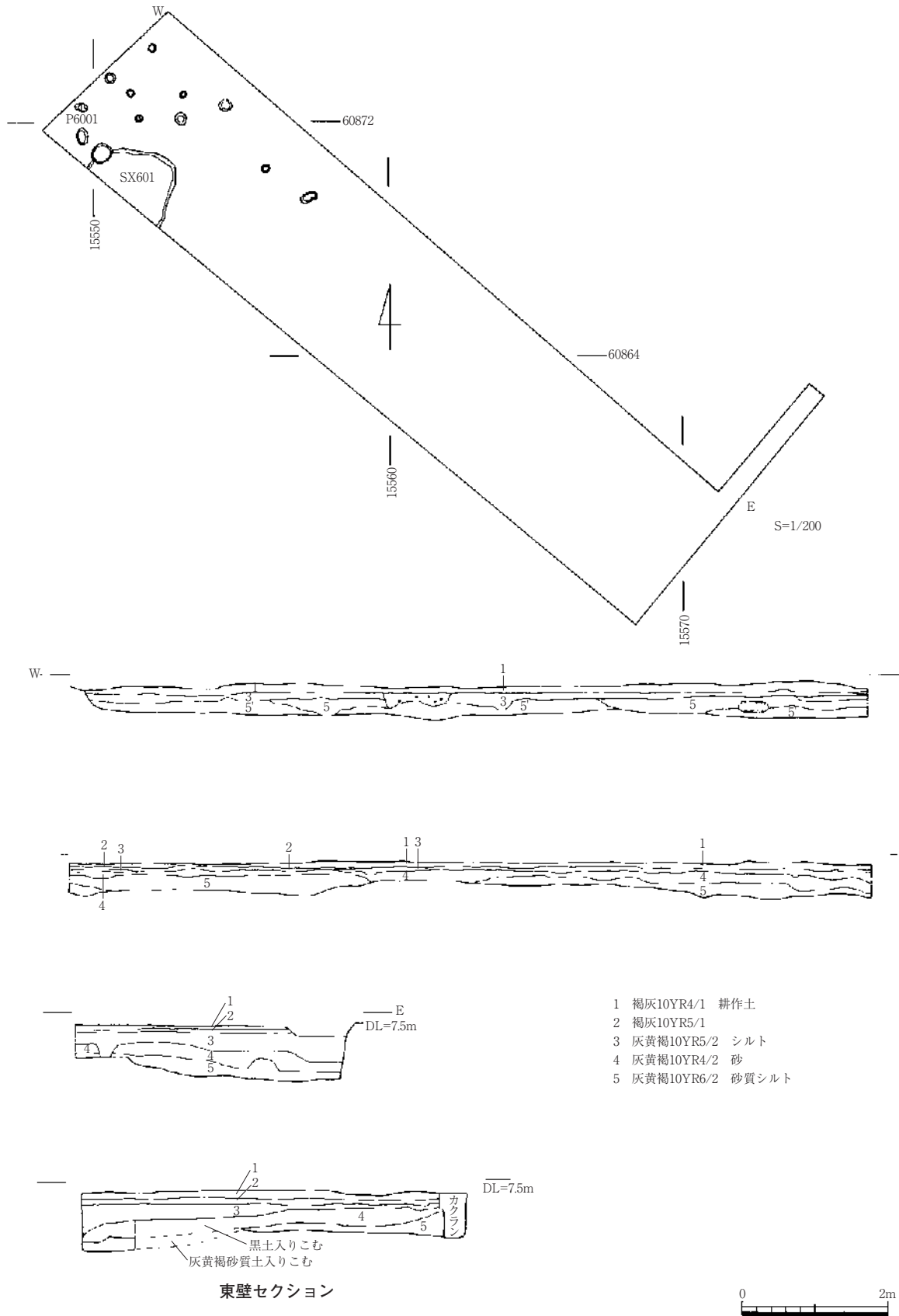
SX602-土師器破片1点、陶器破片2点のみである。

SX604-弥生土器破片25点のみである。

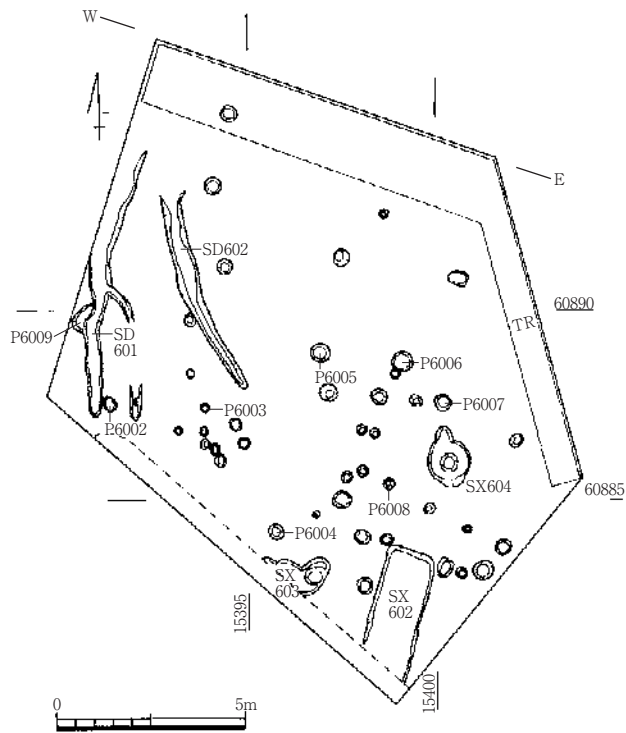
SD601-11世紀後半～12世紀頃の白磁碗の口縁1点 (4)、I-2～3の弥生土器蓋1点 (5) 出土している。

SD602-弥生土器破片5点のみである。

柱穴-弥生土器口縁1点、底部1点、破片11、土師器破片1点である。

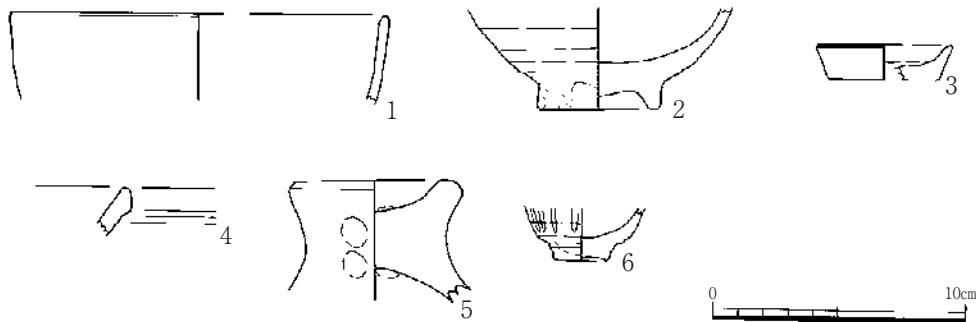
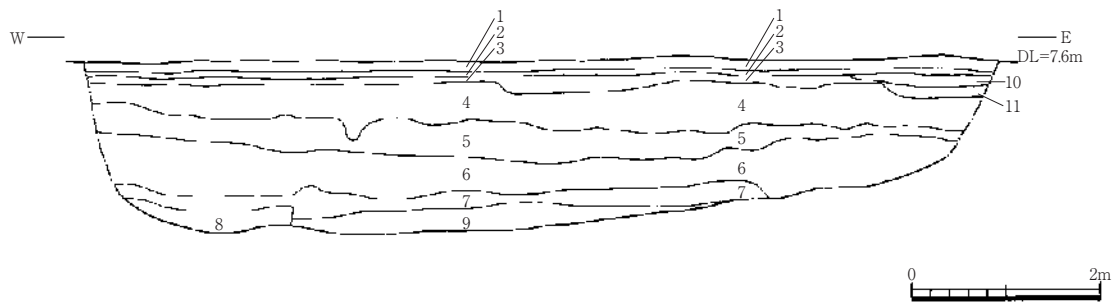


A6-1図 A6区トレンチ1



- 1 褐灰色粘土 (10YR5/1) 耕作土
- 2 褐灰色粘土質シルト (10YR5/1) 床土
- 3 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)
- 4 灰黄褐色細砂層 (10YR5/2) 砂粒が細かい
- 5 にぶい黄褐色細砂混じりシルト (10YR5/4)
- 6 にぶい黄褐色粘質シルト (10YR5/4) Mgが粒状に入る
- 7 にぶい黄褐色粘質シルト (10YR5/4) 6層に比べ粘り
- 8 にぶい黄褐色粘質シルト (10YR5/4) 粘りが強い
- 9 暗灰黄色中砂層 (2.5Y5/2)
- 10 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 砂粒がこまかい
- 11 黒褐色シルト (10YR3/1)

※9層より下は礫層



A6-2図 A6区トレンチ1・2、SX601、SD601

遺物包含層出土遺物

実測遺物が17世紀中頃の白磁小杯底部1点（6）出土しており、その他の出土遺物は弥生土器底部1点、破片104点、須恵器破片3点、土師器破片25点、備前焼破片2点、陶器破片9点、磁器破片4点、瓦質土器破片1点、瓦破片2点である。

4. A7区の調査

(1) 遺構

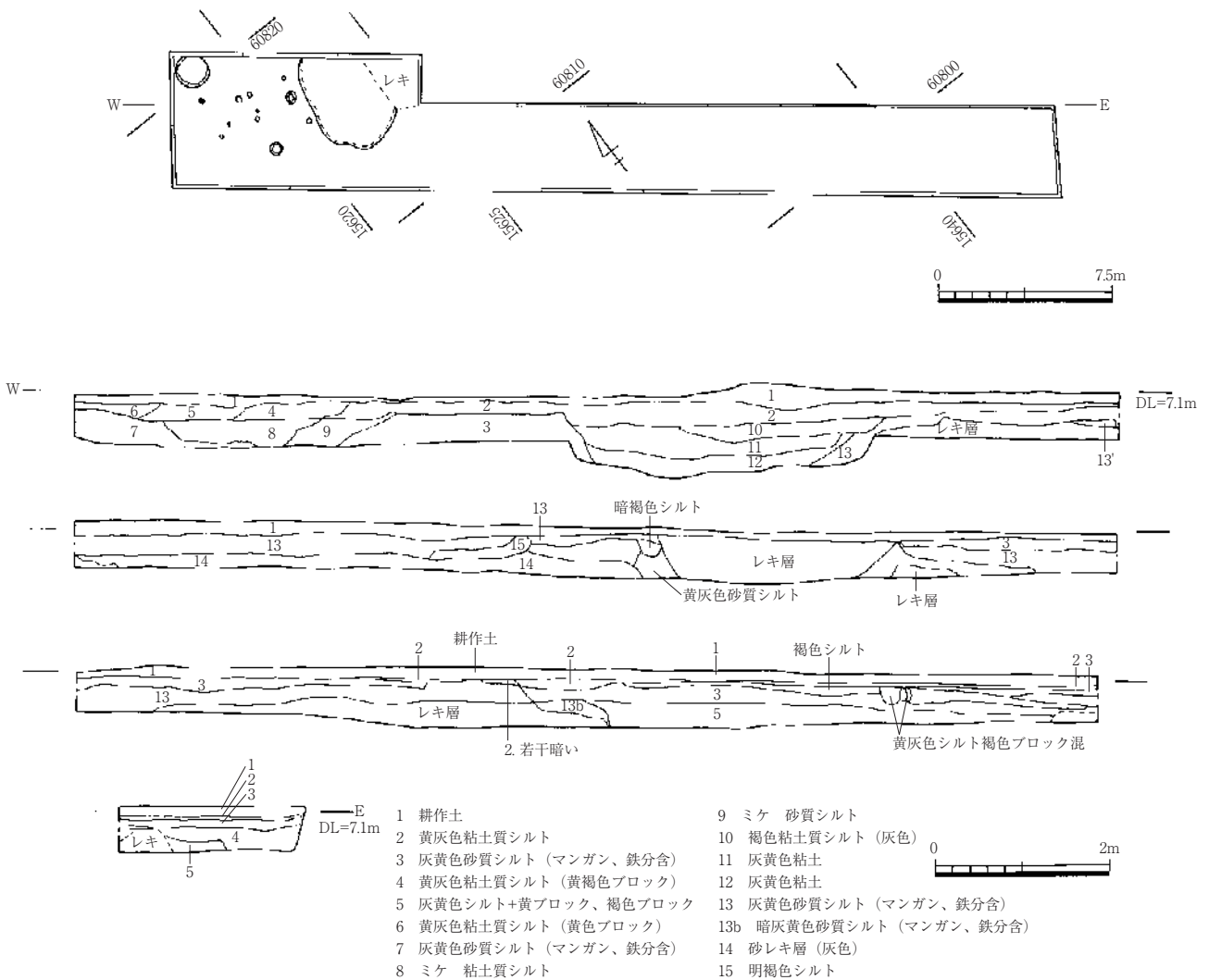
A7区 (A7-1図) では概要でも述べた様にトレンチ調査を行ったが、北西部にSK701の一部を検出した為、北東方向に長さ2.1m、幅10.7m拡張した。ただし、SK701の全容が明らかになっていないのは、補償工事部分の特質上これ以上北東方向に拡張困難であったことと、礫によって攪乱を受けていたことが原因となっている。また、確認された遺構は全て北西部分に集中している。

(2) 遺物

SK701-弥生土器の破片23点、古銭1点のみである。

柱穴-青磁破片1点のみである。

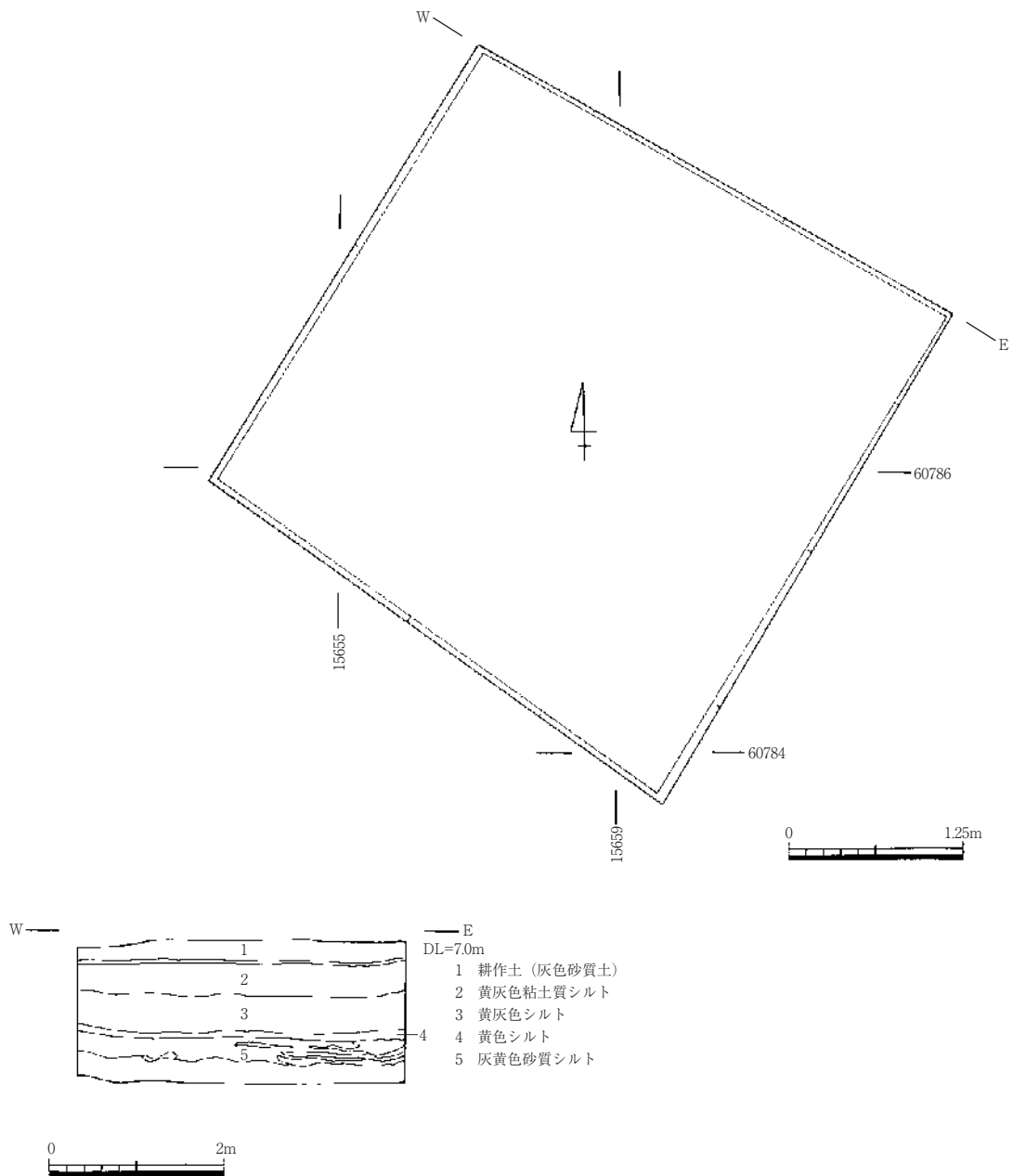
遺物包含層出土遺物-弥生土器破片11点、須恵器破片16点、土師器破片12点備前焼破片1点である。



A7-1図 A7区トレンチ

5. A8区の調査

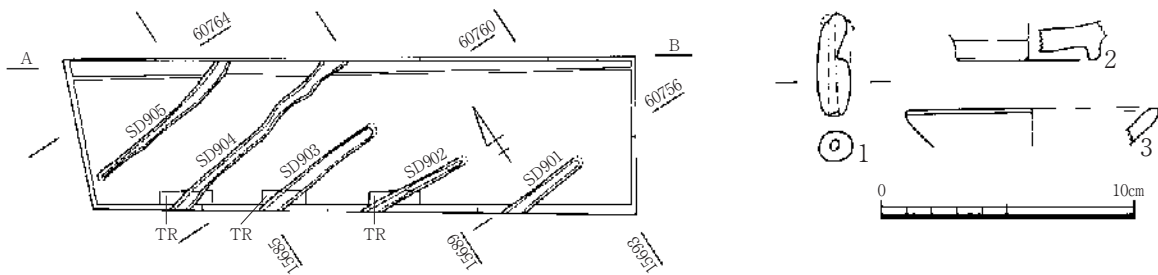
A8区（A8-1図）では概要でも述べた様にトレンチ調査を行った結果、遺構は確認できなかった。弥生土器破片が5点、須恵器破片9点、土師器破片10点、瓦質土器破片1点が出土した。



A8-1図 A8区トレンチ

6. A9区の調査

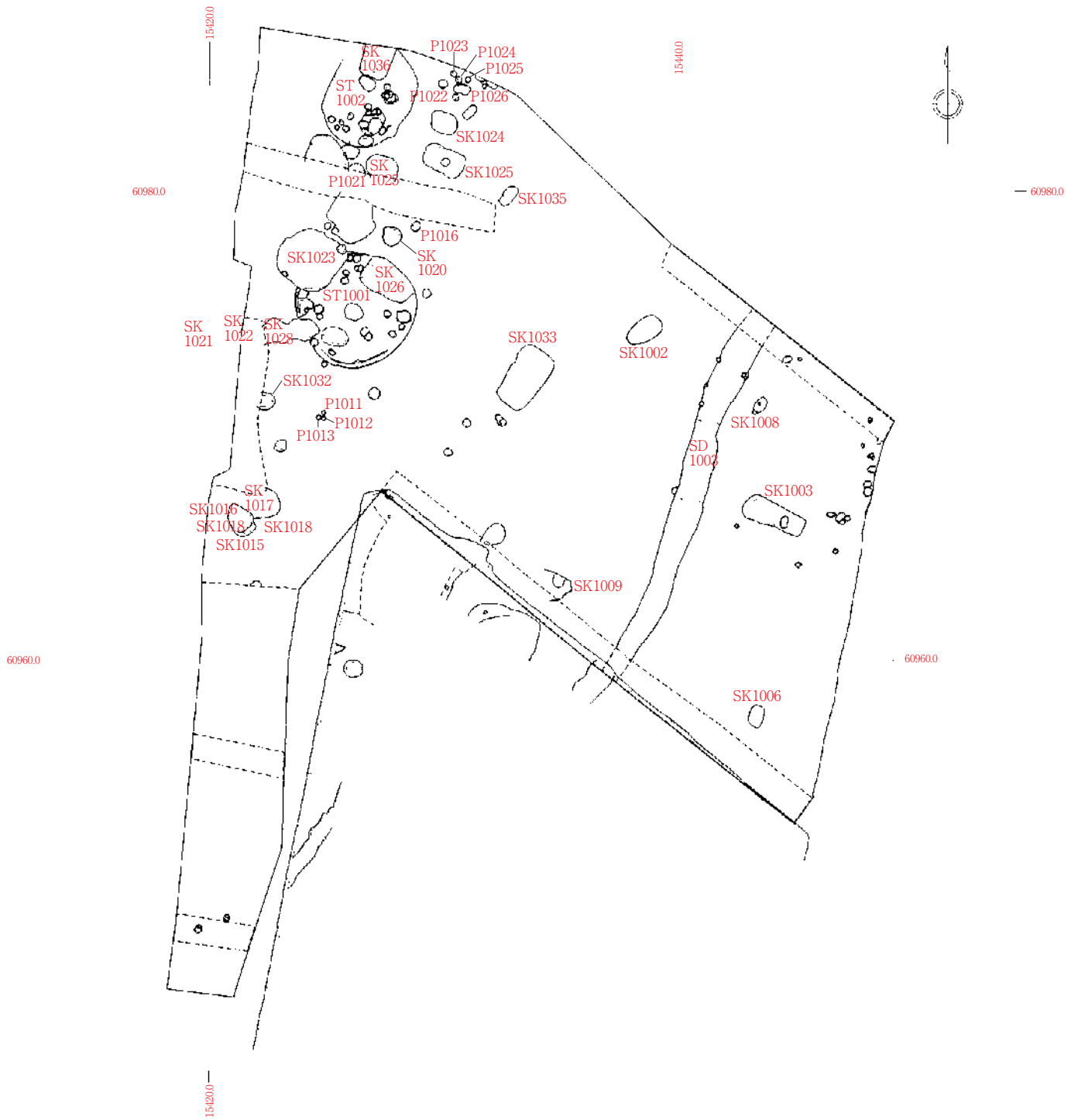
A9区（A9-1図）では概要でも述べた様にトレンチ調査を行った。その結果、遺構として溝が5条検出したが、遺構そのものからは遺物は出土せず、遺物包含層から遺物の出土が認められた。その内訳は実測遺物が、土師器の土錘1点（第Ⅱ層：1）、青磁碗1点（第Ⅱ～Ⅲ層：2）、土師器杯の口縁1点（第Ⅱ層：3）出土し、その他の遺物としては、弥生土器破片7点、須恵器破片11点、土師器破片41点、陶器破片13点、磁器破片6点、石器破片2点が出土した。5条の溝はほぼN-73°-Eの軸方向に沿って掘られていると考えられる。



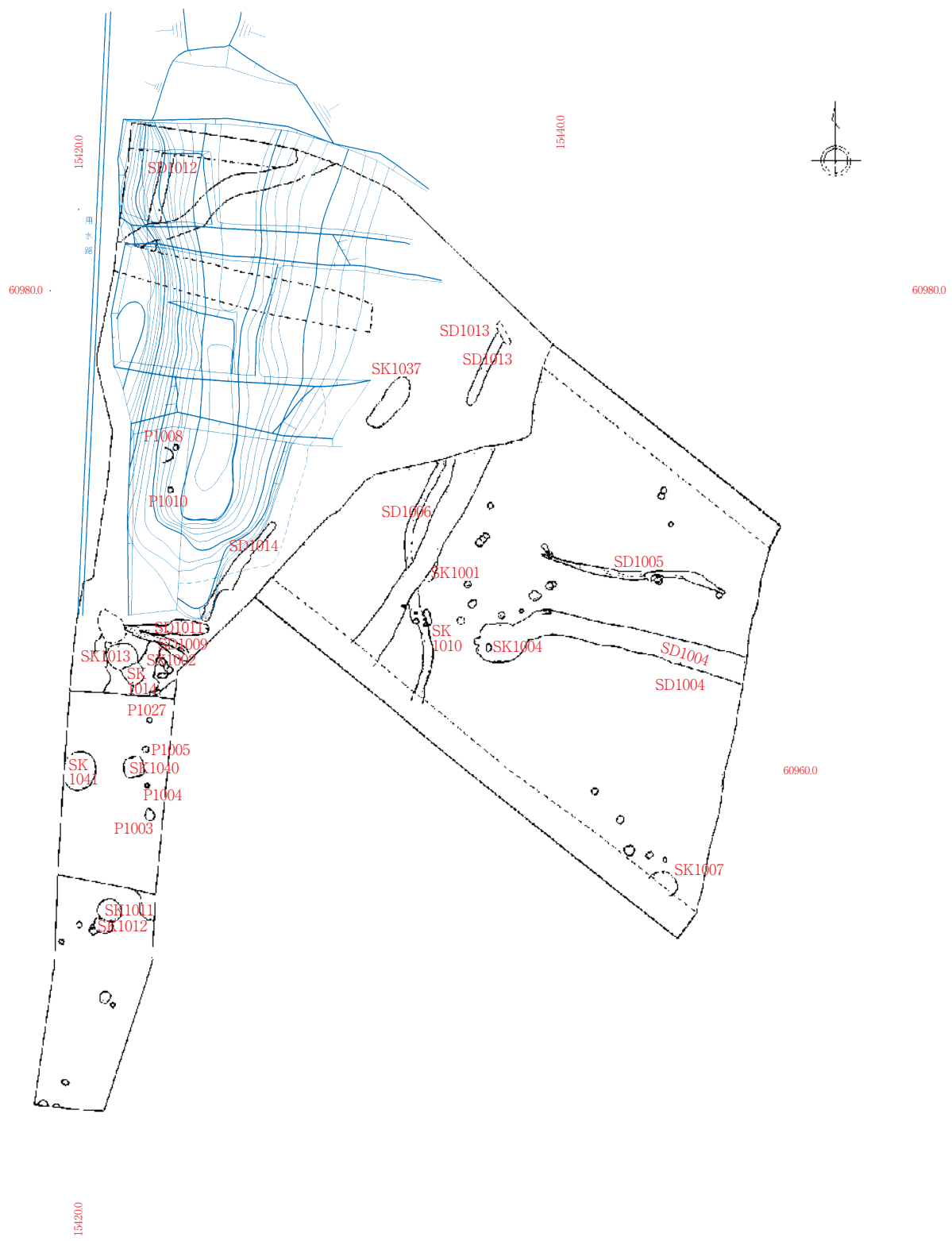
A9-1図 A9区 S : 1/200

A10区の調査





A10-1図 A10区弥生時代遺構全体配置図 S : 1/250



A10-2図 A10区中世遺構全体配置図 S : 1/250

1. A10区の概要

概要

本調査区は、高知空港滑走路のほぼ北側に建立している細勝寺の南側に隣接しており、A4区で発掘された田村城館の外堀から北西に50m程隔てた場所に位置している。調査区としては、大きく分けて中世面と弥生面の2面が存在している。中世面においては、調査区北西部に土塁が盛られ、南西部に土坑が、東部に溝が主に集中している。また、性格不明遺構が3基南西部に検出された。弥生面においては、調査区北西部に竪穴住居跡が2軒と土坑が集中しており、東部には溝が1条と土坑がまばらに掘り込まれている。弥生時代の包含層が調査区北西部から南西部にかけて厚く堆積していた為、竪穴住居を初めとする弥生時代の遺構を完掘した後、確認の為北西部の包含層を掘り下げ遺構確認を行なうと、土坑2基とまばらに分散されたピットを16個程の確認に留まった。南西部に関しては、中世面の段階で北西部より30cm程生活面レベルが低かったことと、弥生時代の生活面と思われる黄色シルト層まで掘り下げて、初めて弥生時代の遺構が検出できたので、包含層の掘り下げ確認作業は行わずに済んだ。

調査担当者 山田和吉、堅田至

執筆担当者 山田和吉

調査期間 平成12年7月13日～平成12年8月25日

調査面積 630㎡

時代 中世、弥生時代

検出遺構 弥生時代竪穴住居跡2軒、土坑27基、溝1条、ピット74個。中世土坑11基、性格不明遺構3基、溝11条、ピット48個、土塁1

2. A10区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

A10区では竪穴住居跡は2軒検出している。概略でも述べた様に、2軒とも調査区北西部で検出され、内1軒は土坑と切り合っている。平面プランは1軒が円形でもう1軒が楕円形である。円形のもの直径5m前後で、楕円形のは長径が4.40m、短径が3.56mで、いずれも竪穴住居としては中規模のものと思われる。付帯施設として中央ピット（炉跡）が2軒とも検出されている。壁溝が検出されたのは1軒のみである。

遺物は弥生土器が2236点、備前焼1点、石器がチャート剥片5点、チャート原石2点、サヌカイト剥片2点が出土している。

A10-1表 A10区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(㎡)	平面形	主軸方向	時期	備考
A10ST1001	5.12×4.92	0.157	19.78	円形		弥生I-2~3	
A10ST1002	(4.40)×3.56	0.46	12.3	楕円形	N-37°-E	弥生I-2~3	

A10ST1001 (A10-3図)

時期；弥生 I - 2~3 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；5.12×4.92m 深さ0.157m 面積19.78㎡

埋土；にぶい黄褐色シルトと褐色シルト

ピット数；17 **主柱穴数**；4 **主柱穴**；P4~7

床面；1面 **貼床**；なし **焼失**；なし

中央ピット；不整形に近い円形 規模80×72cm 深さ34.5cm 埋土褐色系のシルトが主体

壁溝数；1 幅26cm 深さ5.9cm

遺物；弥生土器、柱状片刃石斧、石鏃、チャート剥片、サヌカイト剥片

所見；調査区北西部南端に位置する中型竪穴住居跡。柱穴は17個検出しているものの主柱穴と思われるものは位置的にいて4個しかなく、その他の柱穴の中には深さ大きさ共に主柱穴として十分なものはあるが、位置的に主柱穴と考えるには無理があるので主柱穴とみなさなかった。壁溝は南部に一部分認められるのみで全周はしない。炉跡はほぼ中央部に位置しており、炉跡を囲む様な範囲(長径2.24m、短径1.84mで平面形は楕円形に近い不整形)で炭化物が床面から検出された。また、住居に伴う土坑が住居内北東部、南部、西部にそれぞれ1基ずつの計3基掘り込まれている。他の遺構との切り合い関係はSK1023を切っており、SK1028との切り合い関係は不明である。

遺物はⅢ-3様式と思われる壺(1)、I-2様式の甕(5、7)、紡錘車1点(9)、Ⅲ様式の長頸壺(3)、I-2様式の蓋1点(8、SK1出土)、I-2~3様式の甕(6)、I-3様式と思われる壺(2)、甕(4)、柱状片刃石斧1点(12)、石鏃2点(10、11)が出土している。その他に甕の口縁22点、底部1点、壺の底部1点、器種不明口縁52点、底部19点、破片1294点、石器としては、チャート剥片5点、サヌカイト剥片1点である。

A10ST1001-SK3 (A10-4図)

時期；弥生 I - 3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-55°-W

規模；2.32×1.44m 深さ0.42m **断面形態**；箱形

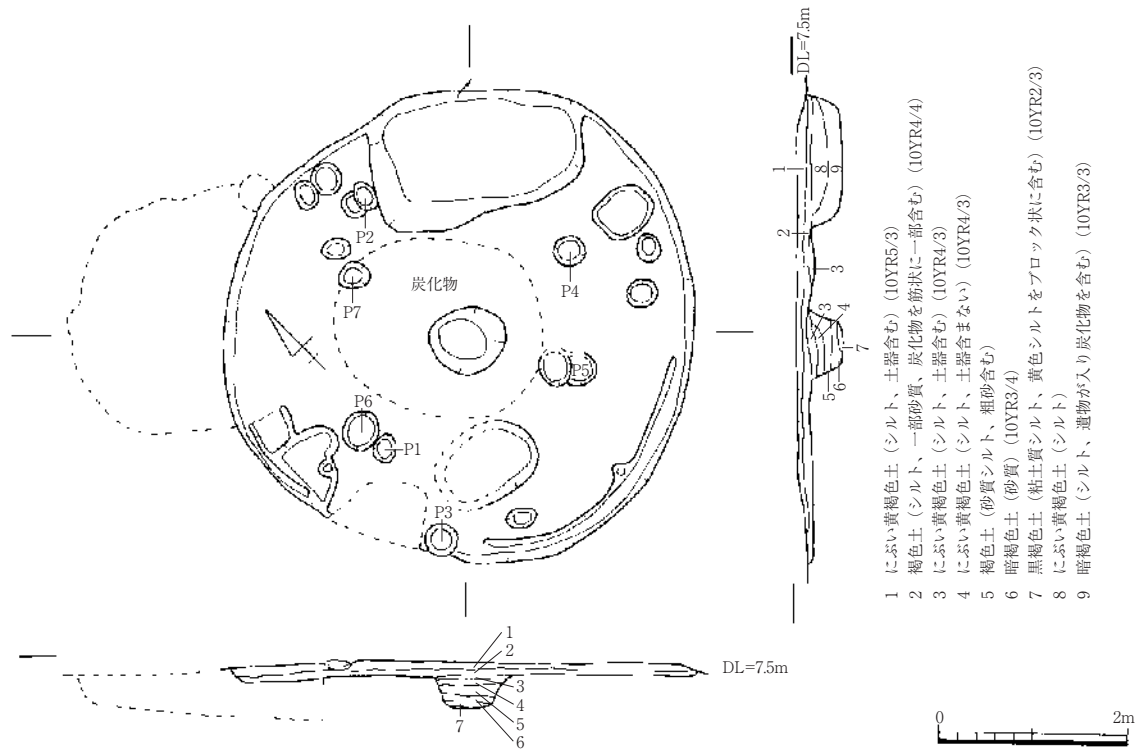
埋土；にぶい黄褐色シルトと暗褐色シルト

付属遺構；— **機能**；不明

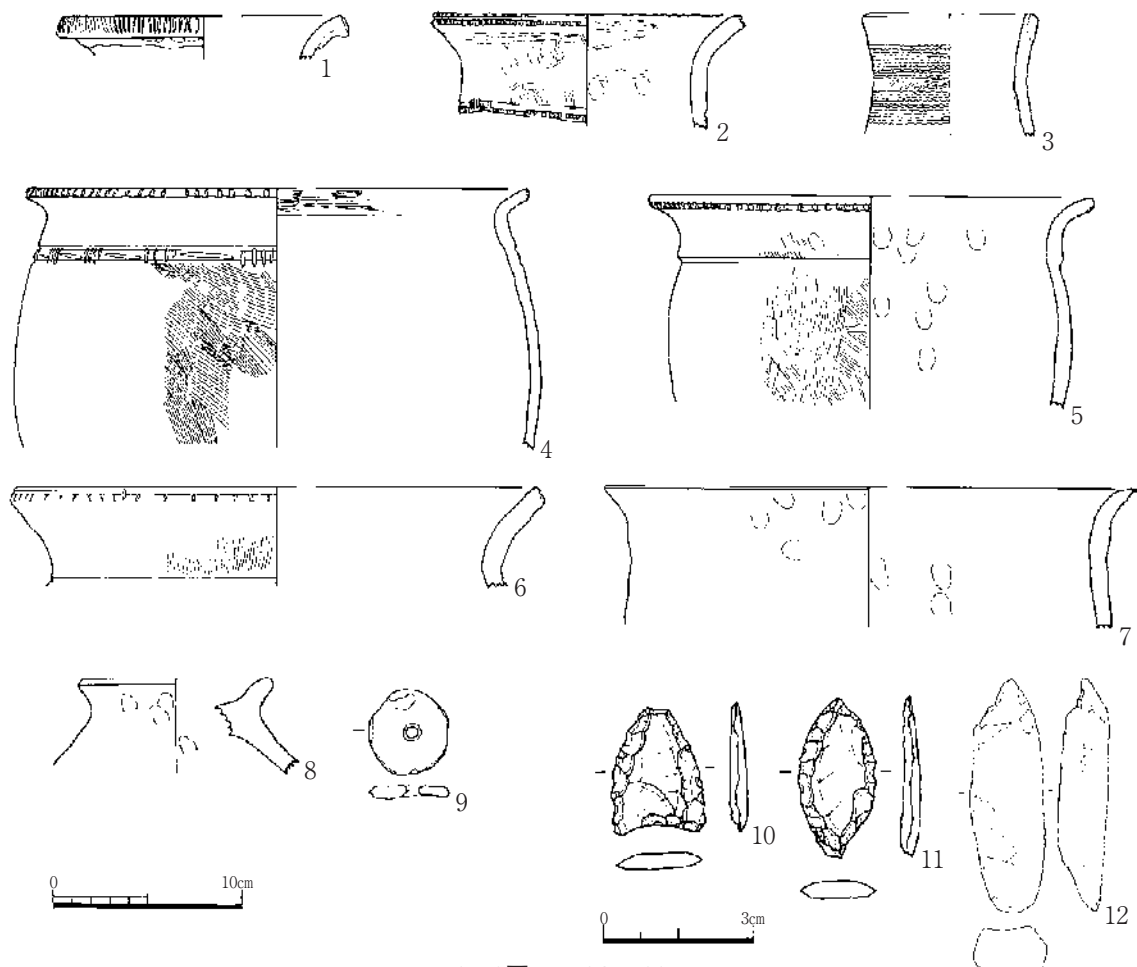
遺物；弥生土器(甕、壺)

所見；調査区北西部に位置し、ST1001の床面から掘り込まれているので、ST1001に伴う土坑と考えられる。

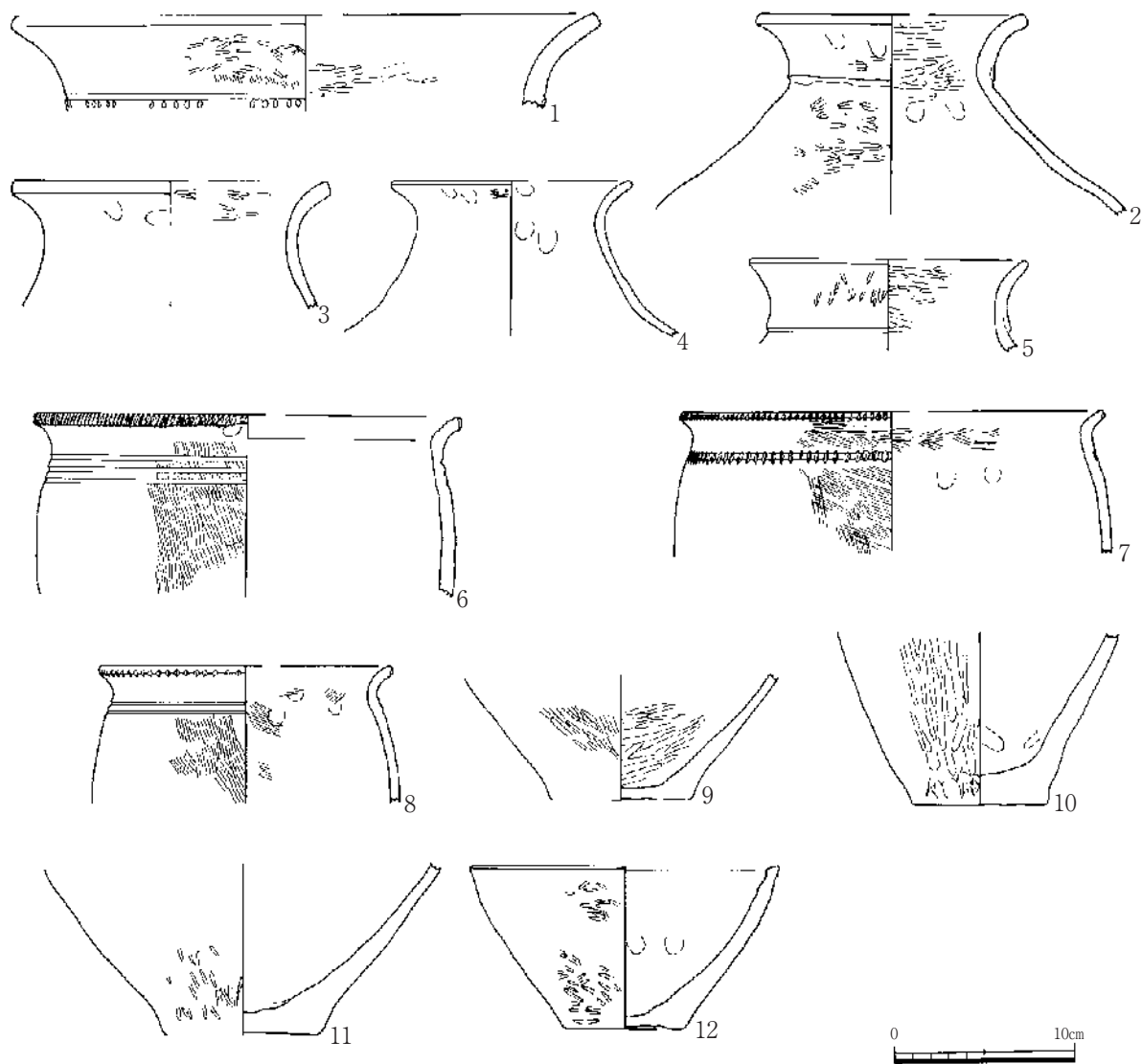
甕2点(9、10)、I-2~3様式と思われる鉢1点(12)、Ⅲ-3様式と思われる壺(3、11)、I-3様式と思われる甕(6~8)、壺(1、4)、I-2様式の壺(2、5)が出土している。その他に甕の口縁21点(I-2が1点、I-3が20点)、底部2点、器種不明口縁35点、破片650点である。



- 1 にぶい黄褐色土 (シルト、土器含む) (10YR5/3)
- 2 褐色土 (シルト、一部砂質、炭化物を筋状に一部含む) (10YR4/4)
- 3 にぶい黄褐色土 (シルト、土器含む) (10YR4/3)
- 4 にぶい黄褐色土 (シルト、土器含まない) (10YR4/3)
- 5 褐色土 (砂質シルト、粗砂含む)
- 6 暗褐色土 (砂質) (10YR3/4)
- 7 黒褐色土 (粘土質シルト、黄色シルトをブロック状に含む) (10YR2/3)
- 8 にぶい黄褐色土 (シルト)
- 9 暗褐色土 (シルト、遺物が入り炭化物を含む) (10YR3/3)



A10-3図 A10ST1001



A10-4図 A10ST1001-SK3

A10ST1002 (A10-5・6図)

時期；弥生 I - 2~3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-37° - E

規模；(4.40) × 3.56m **深さ**0.46m **面積**12.30㎡

埋土；褐色砂質シルトと黄褐色シルトを主体とし、2層目に炭化物を含む。

ピット数；15 **支柱穴数**；4 支柱穴P1、2、5、7

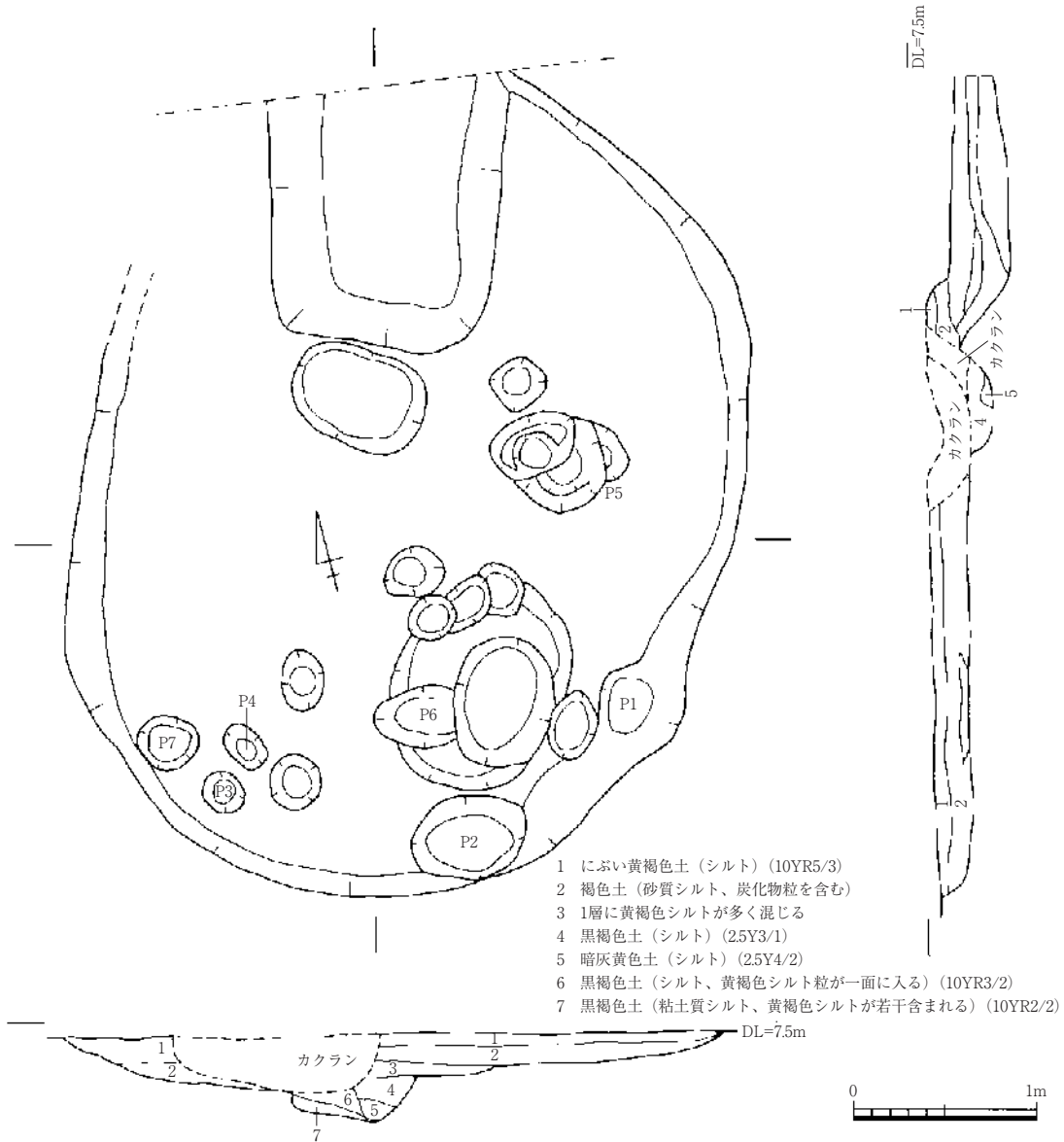
床面；1面 **貼床**；なし **焼失**；なし

中央ピット；楕円形 **規模**76×52cm **深さ**13.7cm **埋土**黒褐色シルトと暗灰黄色シルトが主体

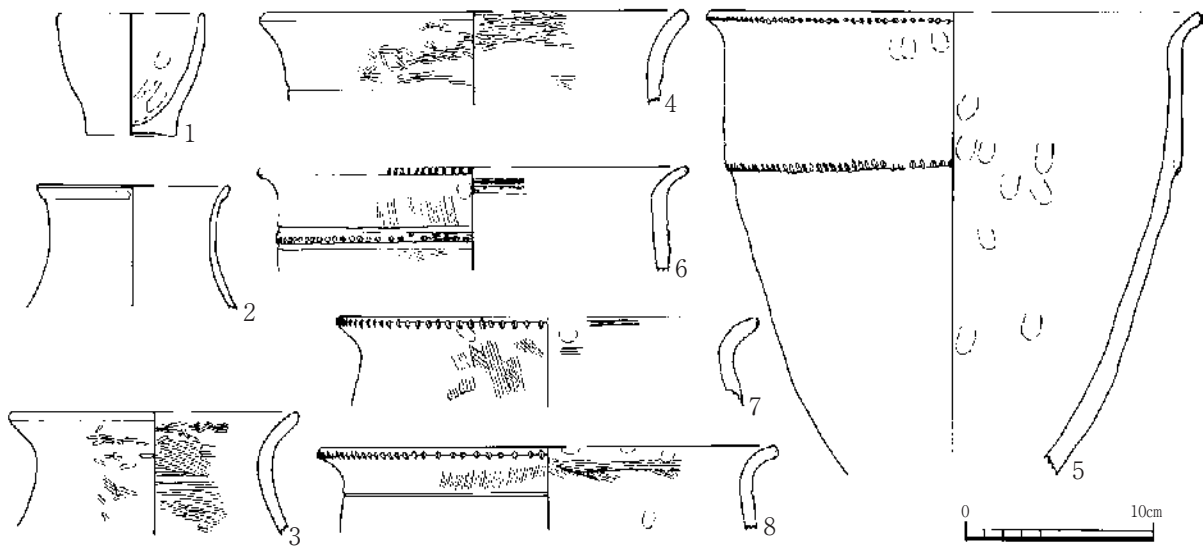
壁溝；なし

遺物；弥生土器（甕、壺、小型土器）、石鏃、サヌカイト剥片

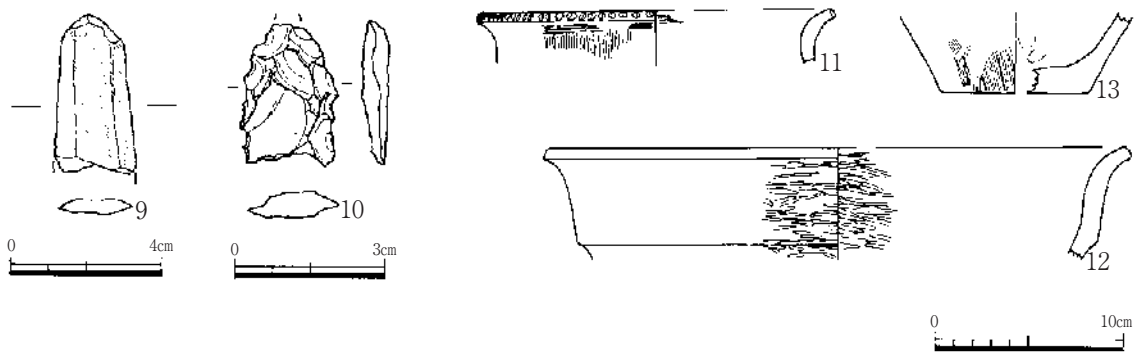
所見；調査区北西部北端に位置する中型竪穴住居跡。柱穴は15個検出しているものの、支柱穴と思われるものは、位置的にあって4個しかなく、その他の柱穴の中には、深さ、大きさ共に支柱穴とし



- 1 にぶい黄褐色土（シルト）（10YR5/3）
- 2 褐色土（砂質シルト、炭化物粒を含む）
- 3 1層に黄褐色シルトが多く混じる
- 4 黒褐色土（シルト）（2.5Y3/1）
- 5 暗灰黄色土（シルト）（2.5Y4/2）
- 6 黒褐色土（シルト、黄褐色シルト粒が一面に入る）（10YR3/2）
- 7 黒褐色土（粘土質シルト、黄褐色シルトが若干含まれる）（10YR2/2）



A10-5図 A10ST1002



A10-6図 A10ST1002、ST1002-SK2

て十分なものはあるが、位置的に支柱穴として考えるには無理があるので支柱穴と見なさなかった。壁溝はなく、炉跡は中央よりやや北よりに位置している。軸方向から考えて、北東及び南西方向に入口があった様に思われる。ただし入口らしきものは検出されていない。住居内南部に切り合った状況で、住居に伴う土坑が2基検出されている。ちなみに他の遺構との切り合い関係は、SK1036に切られている。

遺物はI様式の小型土器1点(1、P2出土)、II様式と思われる甕(2)、I-2~3様式の壺(3)、I-2様式の壺(4、SK1出土)、I-3様式の甕(6)、I-2~3様式の甕(7)、I-2様式の甕(8、SK1-P2出土)、I-2様式の甕(5)、石槍状石器1点(9)が出土している。その他に甕の口縁1点、底部2点、器種不明口縁24点、底部50点、破片753点、石器としては、チャート原石2点、サヌカイト剥片1点である。

A10ST1002-SK2 (A10-6図)

時期：弥生I-2~3 **主軸方向**：N-19°-E

規模：(1.40) × 1.22m **深さ**0.30m **断面形態**：U字状

埋土：にぶい黄褐色シルト及び灰黄褐色シルト

付属遺構：— **機能**：不明

遺物：弥生土器(甕、鉢)

所見：調査区北西部北端に位置し、ST1002の床面で検出されたのでST1002に伴う土坑とみなされる。また、北部は調査区外になっている。時期としては、ST1002がI-2~3様式なので、おそらく同時期ではなかろうか。

遺物はI-2様式の甕(11、SK2出土)、I様式の甕の底部1点(13)、I様式の鉢(12)出土しており、その他の遺物としては口縁1点、底部2点、破片65点が出土している。

(2) 土坑

約30基余り検出しているが、主だった12基についてここでは取り上げる。

A10-2表 A10区弥生土坑一覧

遺構名	長径×短径×深さ (m)	平面形	断面形	主軸方向	付属遺構	時期	備考
A10SK1002	1.62×0.92×0.24	楕円形	U字状	N-57°-E		弥生	
A10SK1003	2.70×1.10×0.55	隅丸方形	U字状	N-65°-W		弥生	
A10SK1006	0.92×0.62×0.08	隅丸方形	皿状	N-18°-E		弥生	
A10SK1008	0.84×0.46×0.22	不整形	U字状	N-39°-E		弥生	平面形は楕円形に近い。ピット状の掘り込みが有る。
A10SK1009						弥生	トレンチなどで壊され計測不能。ピット状の掘り込みが有る。
A10SK1015	深さ0.26		箱形			弥生	SK1016に切られて、平面形等不明な点が多い
A10SK1016	(1.02)×1.00×0.58	不整形	箱形	N-32°-W		弥生 I-3	北側がトレンチにより壊されている
A10SK1017	(1.00)×1.12×0.29		U字状			弥生	南側をSD1011に切られている。トレンチにより西側が壊されている。
A10SK1018			逆台形			弥生	SK1016の埋土中に掘り込まれている
A10SK1020	(0.56)×0.82×0.12	円形	U字状			弥生 I-3	断面形は東側がテラス状になっている。
A10SK1021	(1.16)×1.04×0.47	不整形	U字状	N-90°-E		弥生 I-2	西側はトレンチにより壊されている
A10SK1022						弥生	SK1021と1028に切られている
A10SK1023	2.56×2.44×0.55	不整形	箱形		ピット1個	弥生 I-2~3	
A10SK1024	1.12×0.90×0.15	隅丸方形	箱形	N-76°-W		弥生 I-2~3	
A10SK1025	1.78×1.04×0.33	隅丸方形	U字状	N-63°-W	床面にピット1個有り	弥生	
A10SK1027	1.38×(0.86)×0.09	不明	皿状	不明		弥生	南側がトレンチで切られている。
A10SK1028	1.18×0.94×0.30	楕円形	箱形	N-90°-E		弥生 I-2~3	
A10SK1029	1.84×1.10×0.50	不整形	U字状	N-87°-E		弥生 I-2~3	北側がテラス状になっている
A10SK1030	2.08×1.06×0.28	楕円形	不明	N-62°-W		弥生	SK1029、1031に切られている為断面形は不明
A10SK1031						弥生	トレンチとSK1030との切り合いにより計測不能
A10SK1032	(0.58)×0.74×0.13	不明	U字状	不明		弥生	西側をトレンチで切られている為平面形、主軸方向は不明
A10SK1033	2.70×1.58×0.40	隅丸方形	U字状	N-35°-E		弥生 I-3	
A10SK1035	0.96×0.52×0.22	楕円形	箱形	N-39°-E		弥生 I-2	
A10SK1038	1.32×0.80×0.40	楕円形	箱形	N-6°-E		弥生 I-2	
A10SK1039	1.16×0.52×0.08	不整形	箱形	N-26°-E		弥生	
A10SK1042	1.90×(1.16)×0.17	不整形	不明			弥生	
A10SK1043	(0.94)×0.82×(0.29)	楕円形	U字状	N-47°-E		弥生	

A10SK1015 (A10-7図)

時期；弥生 I-2~3 形状；不明 主軸方向；不明

規模；不明 深さ；0.26m 断面形態；箱形

埋土；にぶい黄褐色シルトとにぶい黄褐色砂質シルト

付属遺構；— 機能；不明

遺物；弥生土器（甕、ミニチュア土器）

所見；調査区北西部南端に位置し、SK1016に切られている関係上、形状及び規模等は不明である。

実測遺物がⅢ-2~3様式と思われる甕(2)、手捏ね(ミニチュア)土器1点(1)である。時期判定可能な遺物はないがSK1016との切り合い関係から考えてⅠ-2~3様式の土坑ではなかろうか。

A10SK1016 (A10-7図)

時期；弥生Ⅰ-3 **形状**；不整形 **主軸方向**；N-32°-W

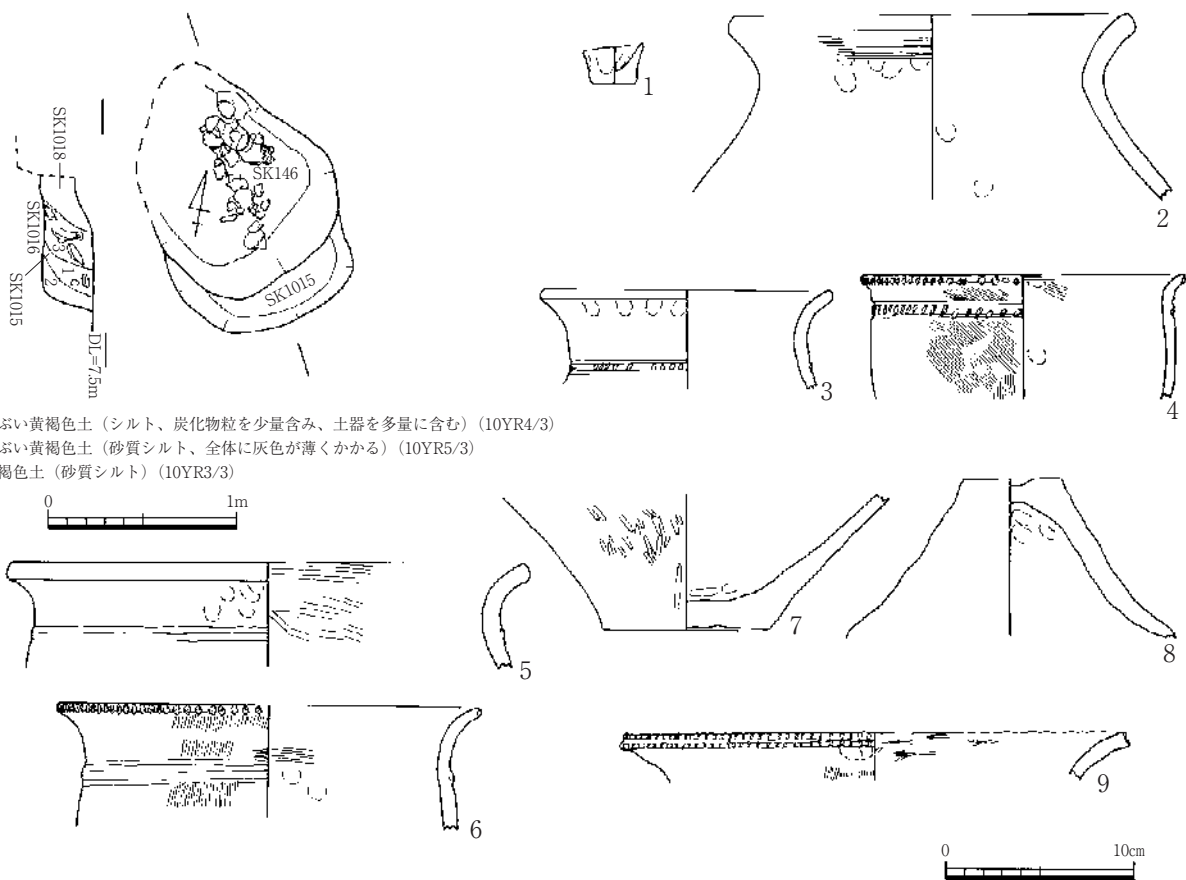
規模；(1.02) × 1.00m **深さ**0.26m **断面形態**；箱形

埋土；暗褐色砂質シルトが主体

付属遺構；— **機能**；不明

遺物；弥生土器(甕、壺、蓋)、軽石1点である。

所見；調査区北西部南端に位置し、SK1018に上から切られており、SD1011と攪乱に切られている。またSK1015を切っている。北側がトレンチにより壊されており、その影響で完掘平面図は復元を載せている。ただし、SK1018に関してはSK1016に含まれる可能性が大であるが、別遺構としたのは、断面確認をとった際にSK1018の立ち上がりの下に、黄色シルトが帯状に入り込んでいたからである。このことに関しては検討の余地がある。また床面に別遺構があったが、SK1016の埋土と考えて掘り抜いてしまった可能性がある。何れにしても、この土坑の近辺は土塁を掘削する際のトレンチ等により壊されているので、調査結果は予想の範疇を越えない。



- 1 におい黄褐色土(シルト、炭化物粒を少量含み、土器を多量に含む)(10YR4/3)
- 2 におい黄褐色土(砂質シルト、全体に灰色が薄くかかる)(10YR5/3)
- 3 暗褐色土(砂質シルト)(10YR3/3)

A10-7図 A10SK1015・1016・1018

遺物は甕(7)、I-2~3様式の甕(6)、I-3様式の壺(3)、I様式と思われる蓋(8)、I-3様式の甕(4)、Ⅲ-2~3様式と思われる甕(5)が出土している。その他に甕の底部1点、壺の底部1点、器種不明口縁30点、底部16点、破片1137点、軽石1点である。

A10SK1018 (A10-7図)

時期；弥生I-3 形状；— 主軸方向；—

規模；— 深さ— 断面形態；逆台形

埋土；黒褐色土（シルト）

付属遺構；— 機能；不明

遺物；弥生土器（甕、壺）

所見；調査区北西部南端に位置し、SK1016の埋土中に掘り込まれており、掘り飛ばしてしまった関係上データがない。また、北側がトレンチにより飛ばされている。この遺構はSK1016の埋土の可能性が高いが、詳細はSK1016の本文の中で述べているので、ここでは割愛させて頂く。時期判定に関しては、SK1016を上から切っている関係上、もしこの土坑がSK1016と別遺構の場合、SK1016より新しいか同時期と考えられる。

遺物はⅢ様式の壺(9)が出土している。その他の遺物は甕の口縁2点、破片30点である。

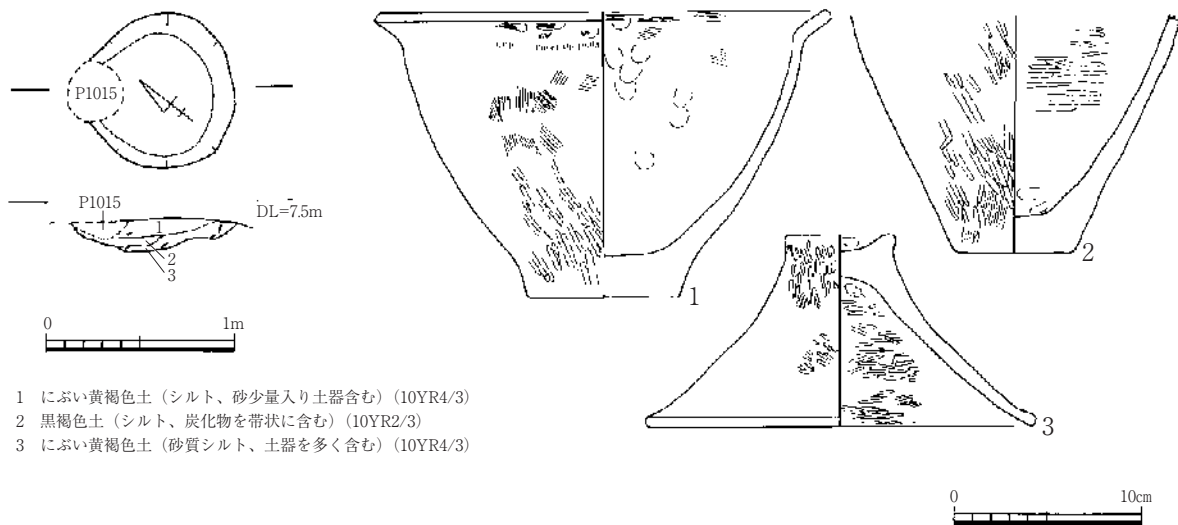
A10SK1020 (A10-8図)

時期；弥生I-3 形状；円形 主軸方向；—

規模；0.82×(0.56)m 深さ0.16m 断面形態；U字状

埋土；褐色系のシルト及び砂質シルト

付属遺構；— 機能；—



- 1 にぶい黄褐色土（シルト、砂少量入り土器含む）(10YR4/3)
- 2 黒褐色土（シルト、炭化物を帯状に含む）(10YR2/3)
- 3 にぶい黄褐色土（砂質シルト、土器を多く含む）(10YR4/3)

A10-8図 A10SK1020

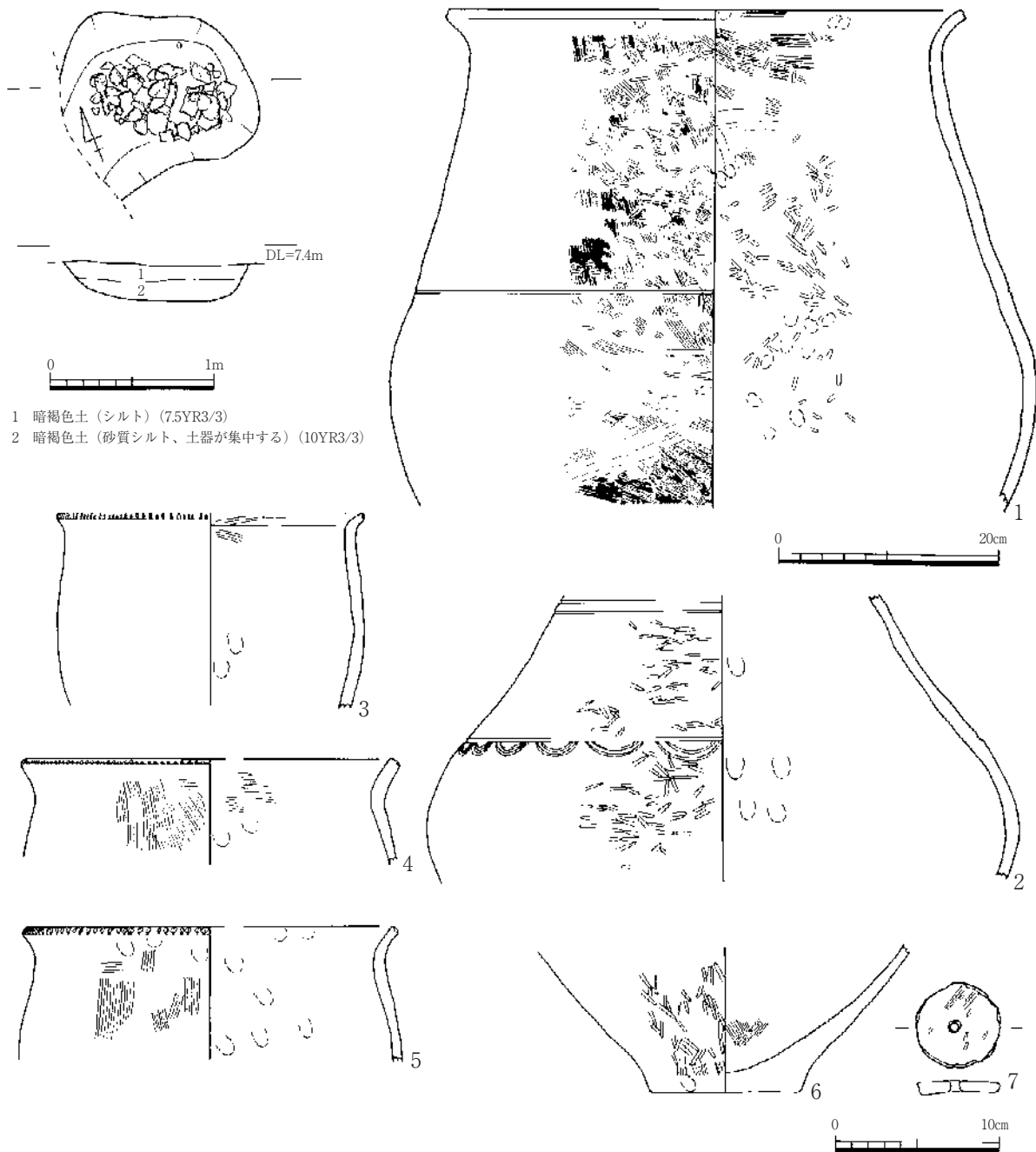
遺物：弥生土器（甕、鉢、蓋）

所見：調査区北西部に位置し、ST1001の北部に掘り込まれている。また、P1015に切られており、断面形態は東側がテラス状になっている。

遺物はI-3様式の鉢1点（1）、I-3様式の甕の蓋1点（3）、甕（2）出土している。

A10SK1021（A10-9図）

時期：弥生I-2 形状：不整形 主軸方向：N-90°-E



A10-9図 A10SK1021

規模：(1.16) × 1.04m 深さ0.47m **断面形態**：U字状

埋土：暗褐色シルトと暗褐色砂質シルト

付属遺構：— **機能**：不明

遺物：弥生土器（甕、壺）、紡錘車

所見：調査区北西部に位置し、SK1022を切っている。西側はトレンチにより壊されている。

遺物はI-2様式の壺(1)、甕(3~5)、I-2~3様式の壺(2、6)、紡錘車1点(7)が出土している。その他の遺物は甕の口縁6点、壺の底部5点、器種不明口縁26点、底部8点、破片400点である。

A10SK1023 (A10-10図)

時期：弥生I-2~3 **形状**：不整形 **主軸方向**：—

規模：2.56×2.44m 深さ0.55m **断面形態**：箱形

埋土：褐色系及びにぶい黄褐色シルトが主体

付属遺構：ピットが1個 **機能**：不明

遺物：弥生土器（甕、壺）、石鏃

所見：調査区北西部に位置し、ST1001とP1017に切られているので、時期判定に関しては、ST1001より古いかほぼ同時期と思われる。

遺物はⅢ-3様式と思われる壺(3)、Ⅲ-3~Ⅳ-1様式の壺(2)、I様式の壺(4)、石鏃1点(1)が出土している。その他の遺物は甕の口縁(I-3)2点、壺の口縁1点、器種不明口縁22点、底部11点、破片180点である。

A10SK1025 (A10-10図)

時期：弥生I-2~ **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-63°-W

規模：1.78×1.04m 深さ0.46m **断面形態**：逆台形

埋土：黄褐色及び黒褐色シルトが主体

付属遺構：床面にピットが1個 **機能**：不明

遺物：弥生土器（甕）、チャート

所見：調査区北西部に位置し、床面中央部にピットが1個掘り込まれている。断面形は東側がテラス状になっている。

遺物はI-3様式の甕(5、7、8)、I-2様式の甕(6)が出土している。その他の遺物は甕の口縁6点(I-2が4点、I-3が2点)、器種不明口縁7点、底部20点、破片250点、チャートの原石1点である。

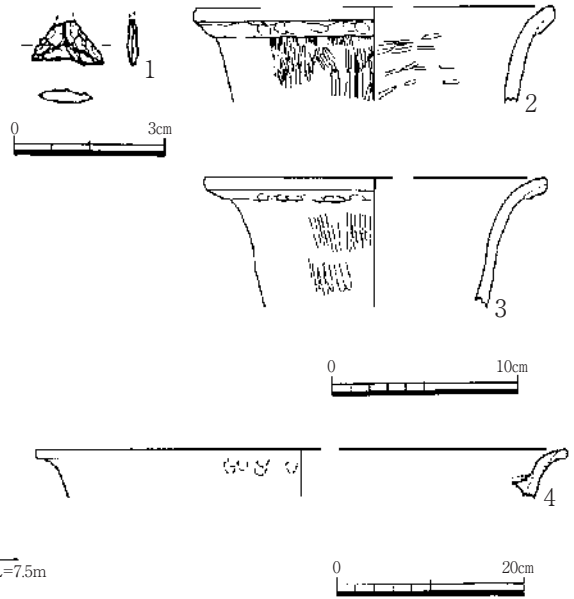
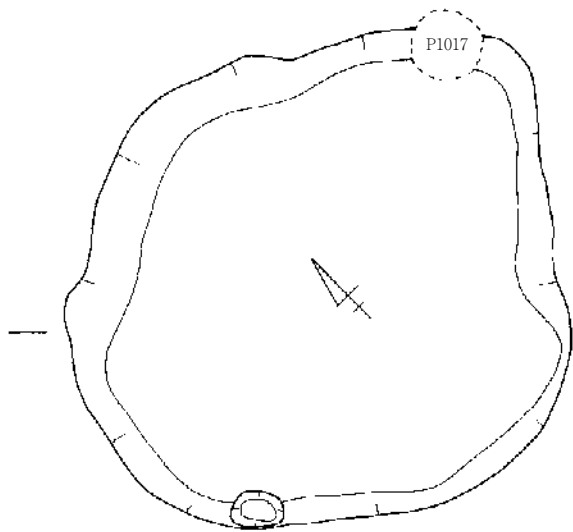
A10SK1028 (A10-11図)

時期：弥生I-2~3 **形状**：楕円形 **主軸方向**：N-90°-E

規模：1.18×0.94m 深さ0.30m **断面形態**：箱形

埋土：黒褐色シルトが主体

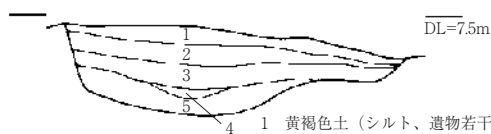
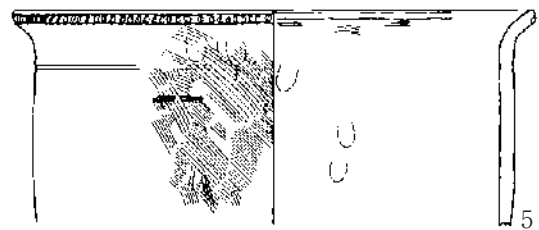
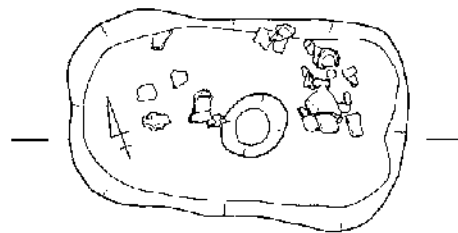
付属遺構：— **機能**：不明



A10SK1023



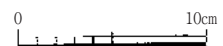
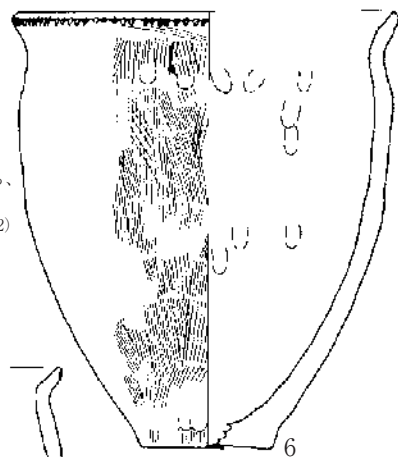
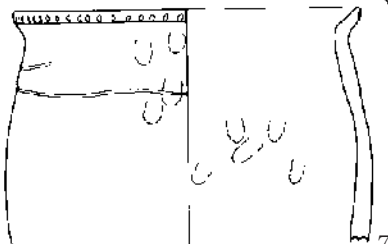
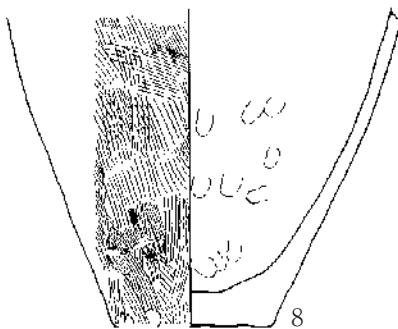
- 1 にぶい黄褐色土 (シルト、細砂を含み、土器を含む) (10YR4/3)
- 2 褐色土 (シルト) (10YR4/4)
- 3 にぶい黄褐色土 (シルト) (10YR4/3)
- 4 黒褐色土 (粘土質シルト) (10YR3/2)
- 5 暗褐色土 (シルト) (10YR3/3)
- 6 にぶい黄褐色土 (砂質シルト) (10YR5/3)
- 7 黒褐色土 (砂質) (10YR3/2)



A10SK1025



- 1 黄褐色土 (シルト、遺物若干含む、赤褐色シルト少し混じる、黄灰色シルト粒が入る) (2.5Y5/4)
- 2 黄褐色土 (シルト、黄灰色シルト粒、黒褐色シルトが入る、遺物多く含む) (2.5Y5/4)
- 3 黒褐色土 (シルト、炭化物を含む、遺物を含む) (2.5Y3/2)
- 4 黄褐色土 (粘土) (2.5Y5/3)
- 5 黄褐色土 (砂質シルト、粗砂を含む) (2.5Y5/4)



A10-10図 A10SK1023・1025

遺物：弥生土器（甕、鉢）、紡錘車

所見：調査区北西部に位置し、切り合い関係は確認取れなかったが、ST1001を床面まで掘り下げてから検出できた。SK1022を切っている。

遺物はI-2~3様式の鉢（2）、I様式の紡錘車（3）、I-2様式の甕（1）が出土している。その他に甕の口縁2点、器種不明口縁7点、底部12点、破片120点である。

A10SK1029 (A10-11図)

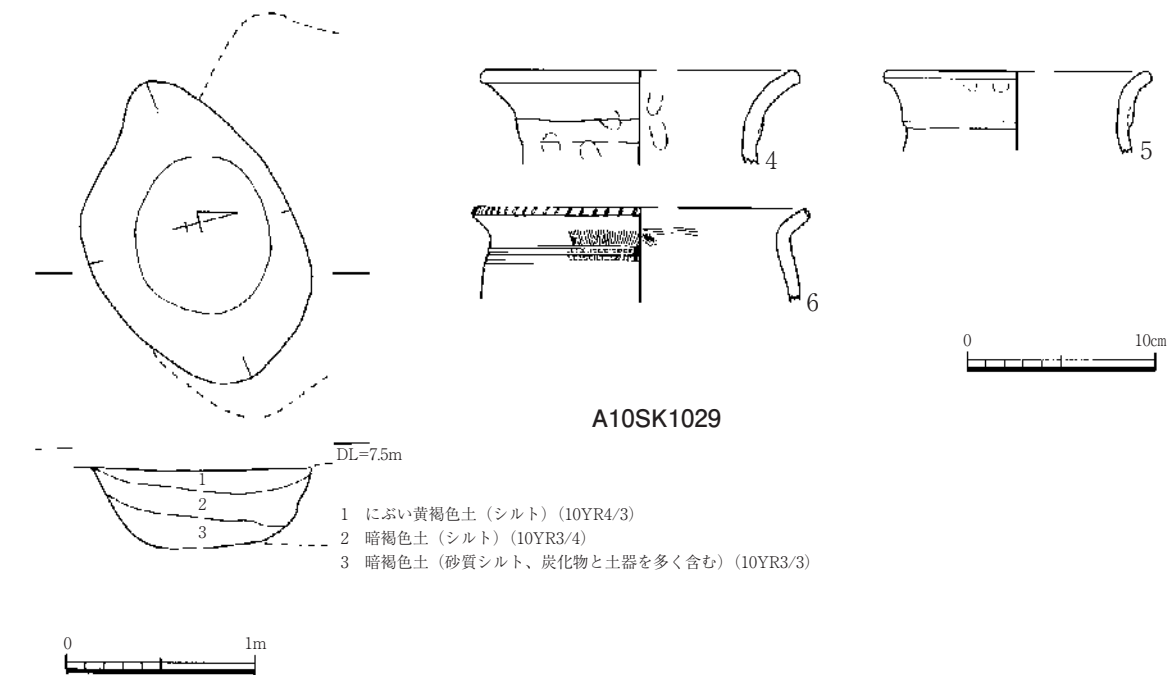
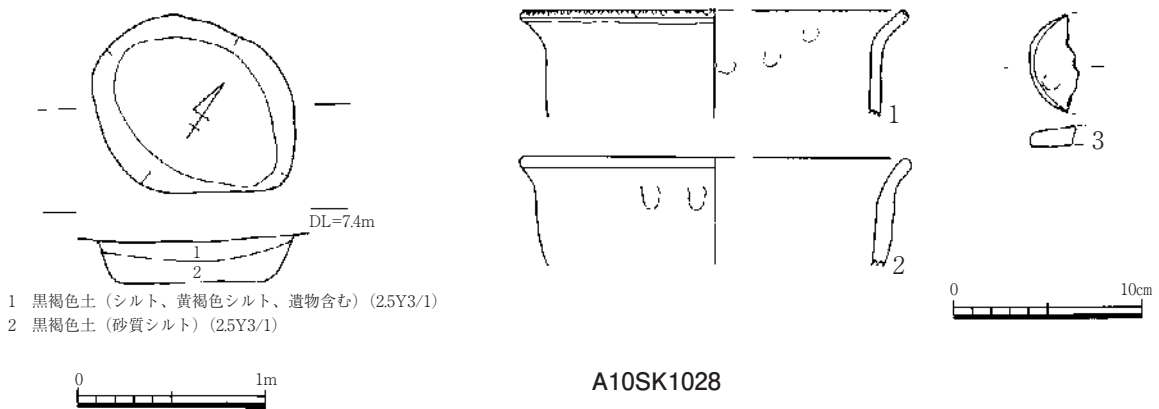
時期：弥生 I-2~3 形状：不整形 主軸方向：N-87°-E

規模：1.84×1.10m 深さ0.40m 断面形態：U字状

埋土：にぶい黄褐色及び暗褐色シルトが主体

付属遺構：— 機能：不明

遺物：弥生土器（甕、壺）、緑色岩未製品



A10-11図 A10SK1028・1029

所見；調査区北西部に位置し、SK1030を切っている。また、断面形は北側がテラス状になっている。

遺物はI-2様式の壺(4,5)、I-3様式の甕(6)が出土している。その他に甕の口縁5点、底部1点、壺の口縁2点、底部4点、器種不明口縁26点、底部9点、破片500点、加工途中の緑色岩1点である。

A10SK1033 (A10-12図)

時期；弥生I-3 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-35°-E

規模；2.70×1.58m 深さ0.40m **断面形態**；U字状

埋土；褐色シルト系の埋土が主体

付属遺構；— **機能**；不明

遺物；弥生土器(甕、壺)、叩石、チャート、緑色片岩

所見；調査区東部西端に位置するが、ちょうど調査区全体の真ん中に意味ありげに掘られている。

遺物はI-2~3様式の壺(4)、I-3様式の壺(1~3)、I-2様式の壺(16)、I様式の甕(14、15)、I-3様式の甕(8~12)、I様式の壺(5)、壺の底部~胴部1点(6)、I-2~3様式の甕(7)が出土している。その他に甕の口縁13点、底部2点、壺の口縁4点、底部4点、器種不明口縁33点、底部27点、破片630点、叩石2点、チャートの原石1点、加工途中の緑色片岩1点である。

A10SK1035 (A10-13図)

時期；弥生I-2 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-39°-E

規模；0.96×0.52m 深さ0.22m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色土(シルト)

付属遺構；— **機能**；不明

遺物；弥生土器(甕、壺)

所見；調査区北西部北東端に位置している。

遺物はI-2様式の甕1点(1)が出土しており、その他の遺物としては壺の底部2点、器種不明口縁1点、破片60点が出土している。

A10SK1038 (A10-13図)

時期；弥生I-2 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-6°-E

規模；1.32×0.80m 深さ0.40m **断面形態**；箱形

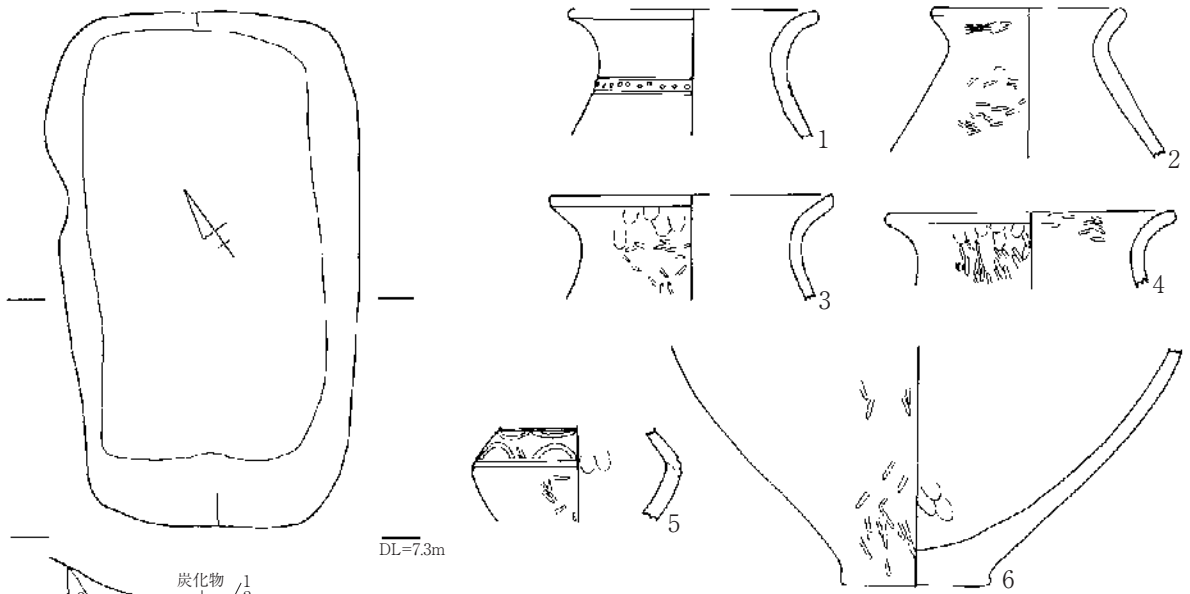
埋土；褐色系シルトが主体

付属遺構；— **機能**；不明

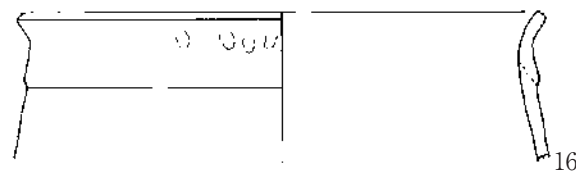
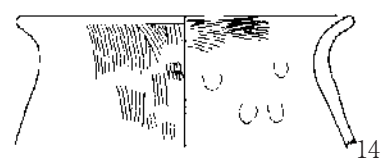
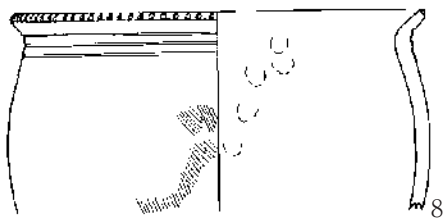
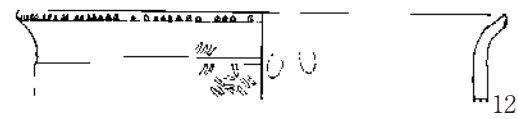
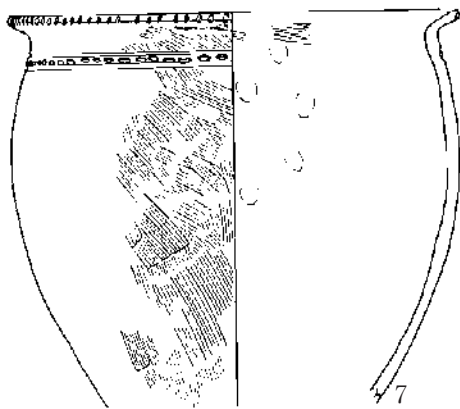
遺物；弥生土器(甕、鉢)

所見；調査区北西部西端に位置し、弥生時代の包含層を全て掘削後検出された土坑である。また、切り合い関係は定かでないが、SK1039と切り合っている。

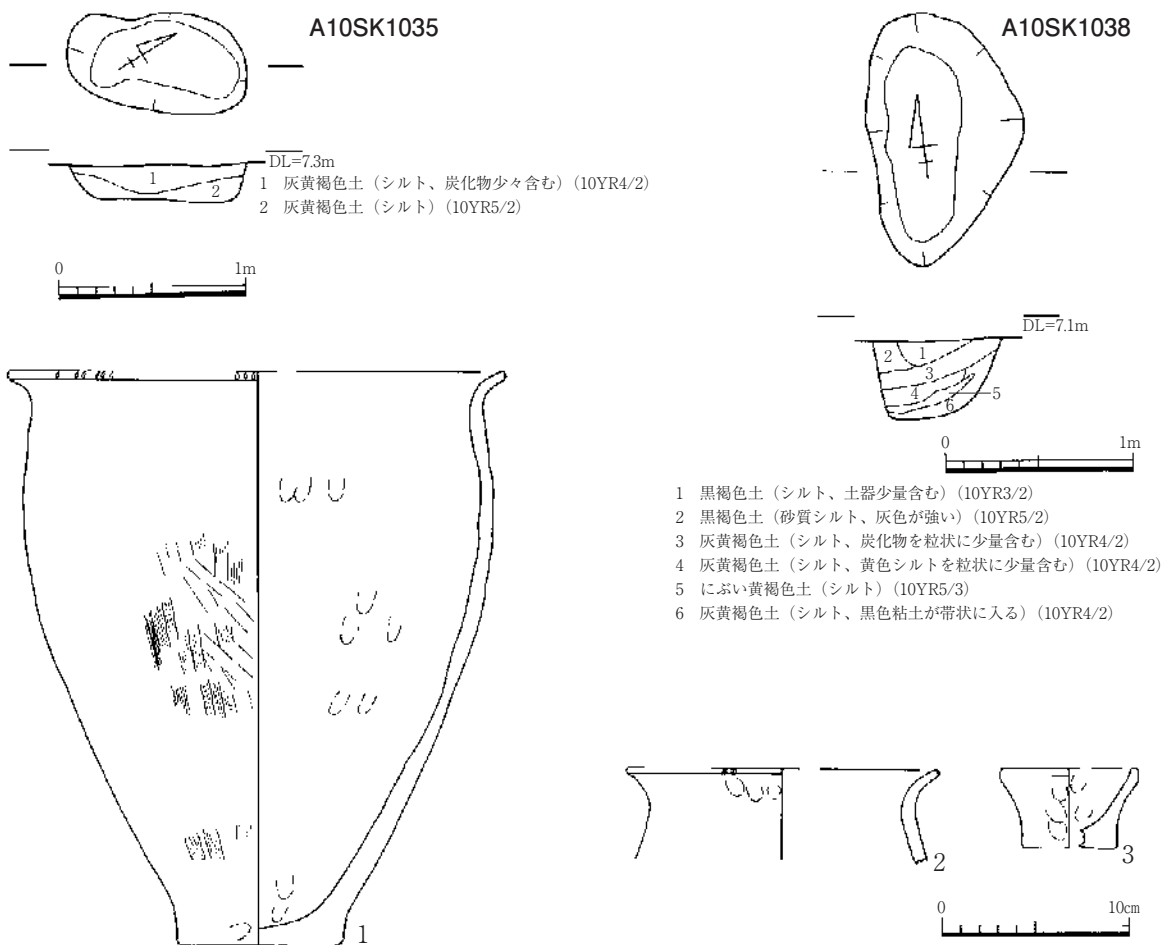
遺物はI様式の鉢1点(3)、I-2様式の甕(2)が出土しており、その他に口縁3点、底部5点、破片230点が出土している。



- 1 におい黄褐色土 (シルト、黄褐色土と黒褐色土がまだらに入る) (10YR4/3)
- 2 褐色土 (シルト、灰黄褐色土が混じる) (10YR4/4)
- 3 2層に暗褐色粘土ブロックが混じる (埋没時の崩れ込み)
- 4 灰黄褐色土 (シルト、土器片、炭化物含む、暗褐色土が粒状に混じる) (10YR4/2)
- 5 灰黄褐色土 (シルト) (10YR5/2)



A10-12図 A10SK1033



A10-13図 A10SK1035・1038

(4) 溝跡

A10SD1003 (A10-14図)

時期；弥生 方向；軸方向。N-22°-E

規模；18×1.40m 深さ0.37m 断面形態；U字状及び箱形

埋土；褐色シルト及び褐色砂質シルト系の埋土

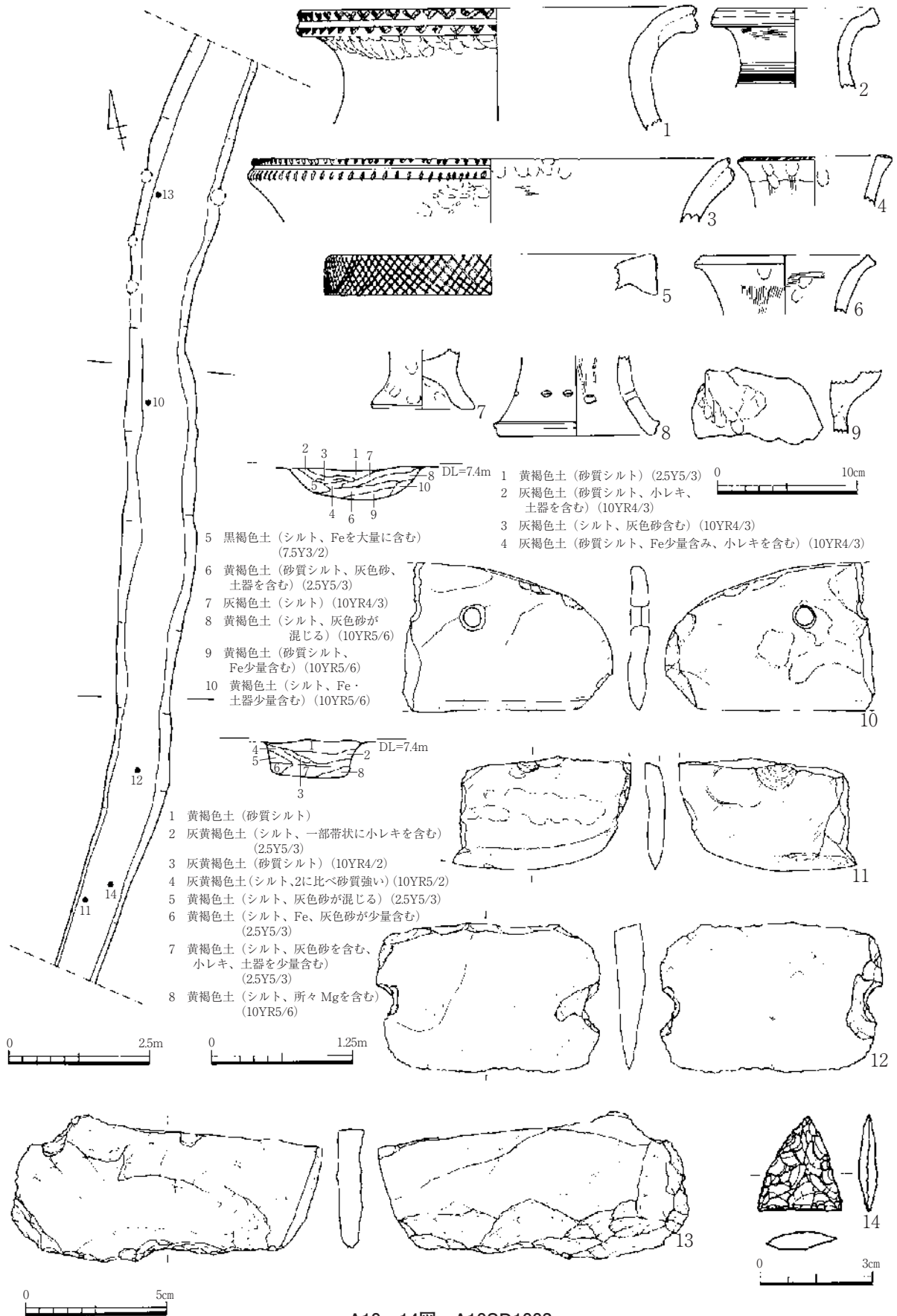
床面標高；北東端 (7.118m)、南西端 (7.097m)

接続；A2SD201と接続している。

遺物；弥生土器 (甕、壺、鉢)、石鏃、石包丁、石斧、チャート

所見；調査区東部に位置し、北東部分は4個のピットに切られている。遺物がI様式からV様式までさまざまな為、時期設定は困難を究める。

遺物はI様式の壺 (6)、鉢の底部 (7)、IV様式と思われる高杯の脚部 (8)、IV-2~V-1と思われる壺 (2)、IV-1~2様式の壺 (4)、V-1様式と思われる壺 (3)、III様式の壺 (5)、IV様式と思われる把手1点 (9)、III-3様式と思われる壺 (1)、磨製石包丁 (10、11)、打製石包丁1点 (12、13)、石鏃1点 (14) が出土している。その他に壺の口縁8点、底部5点、口縁55点、底部41点、石斧1点、チャート原石1点、加工途中の粘板岩2点である。



A10-14図 A10SD1003

3. A10区中世の遺構と遺物

(1) 土坑・性格不明遺構

A10区では中世の土坑は11基、性格不明遺構は3基検出されている。調査区南西部のSK1013、1014、SX1002、1003より南の部分は生活面レベルが30cm程下がって検出されたので、おそらく上面部分は何らかの影響で削平されたのではなかろうか。また、概要でも述べた様に、調査区南西部に土坑が集中しており、性格不明遺構も合わせると、14基中9基が検出された。性格不明遺構に関しては、形状及び断面などがはっきりしていないので、ここでの紹介程度に留めることとする。

遺物としては、弥生土器が481点、煙管が1点出土しているが、遺構埋土が中世のものであったことと、弥生土器に実測遺物が見当たらなかったことから判断して、以下一覧表に載せた土坑は中世のものとして掲示した。その中でも他の土坑等の遺構との切り合い関係の複雑な土坑を1基詳述することとする。

A10-3表 A10区中世土坑一覧

遺構名	長径×短径×深さ(m)	平面形	断面形	主軸方向	付属遺構	時期	備考
A10SK1001	(0.56)×(0.28)×0.14	不明	不明			中世	
A10SK1004	(1.95)×1.62×0.11	楕円形	皿状	N-90°-E	床面にピット1個	中世	
A10SK1007	1.22×(0.56)×0.08	楕円形	皿状	N-51°-W		中世	
A10SK1010	0.66×0.27×0.24	溝状	箱形	N-18°-W		中世	
A10SK1011	1.02×0.92×0.37	楕円形	箱形	N-50°-W		中世	
A10SK1012	0.82×(0.52)×0.38	楕円形	箱形	N-64°-W		中世	
A10SK1013	1.20×(1.08)×0.49	不整形	U字状	N-31°-W		中世	
A10SK1014	0.82×(0.80)×0.42	不整形	U字状	N-31°-W		中世	
A10SK1037	2.48×0.94×0.08	溝状	皿状	N-39°-E		中世	
A10SK1040	0.84×0.82×0.09	不整形	皿状			中世	
A10SK1041	1.62×(1.38)×0.10	楕円形	皿状	N-30°-E		中世	

A10SK1013 (A10-15図)

時期；中世 形状；不整形 主軸方向；N-31°-W

規模；1.20×(1.08) m 深さ0.49m 断面形態；U字状

埋土；灰黄色土（シルト、褐色ブロックを少量含む）

付属遺構；— 機能；不明

遺物；弥生土器口縁1、弥生土器底部2、弥生土器片65

所見；SK1014に切られている可能性がある。また、SX1002・1003を切っている可能性もある。ただし、あくまで可能性であって切り合い関係は不明である。

遺物は弥生土器しか出土していないが、概要でも述べた様に埋土等の根拠により中世の土坑と判断した。

A10SK1014 (A10-15図)

時期；中世 形状；不整形 主軸方向；N-31°-W

規模；0.82×(0.80) m 深さ0.42m 断面形態；U字状

埋土：灰黄色土（シルト、褐色ブロックを含む）

付属遺構：— 機能：不明

遺物：—

所見：SK1013、SX1002・1003を切っている可能性がある。

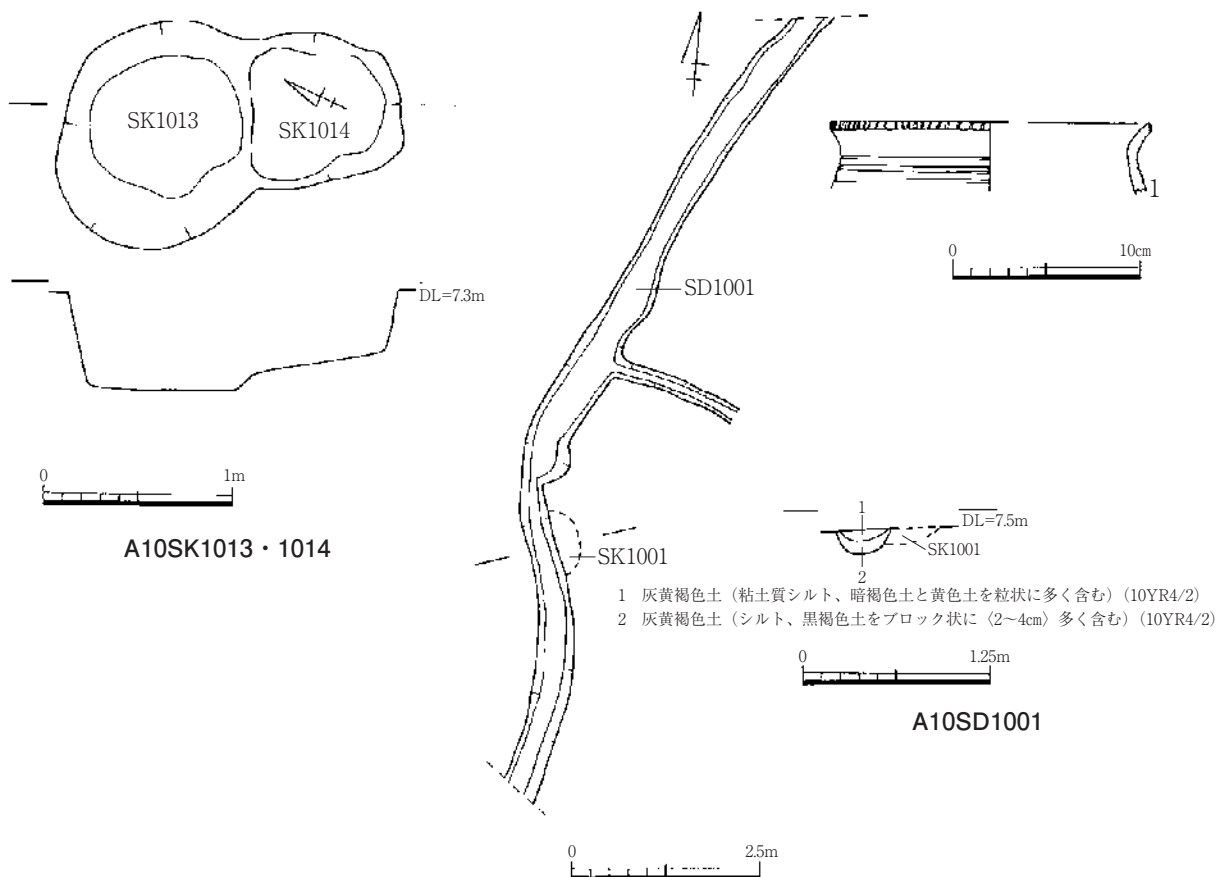
(2) 溝跡

A10区では中世の溝は11条検出されており、概要でも述べた様に調査区東部に集中しており、11条中6条を確認することができた。SDと命名した溝の内SD1009～1011、1014はそれぞれ溝状土坑の可能性もある。また、本調査区南側に位置するA2区には本調査区の中世の溝と接続する溝が存在しないことから、本調査区の南西部同様、何らかの影響で中世面が削平を受けたのではなかろうか。

遺物は弥生土器が855点、石器がサヌカイト剥片1点、チャート原石1点、石鏃1点が出土しているが、遺構埋土及び深さから判断して、これらは皆紛れ込みと考え、中世のものとしなした。

A10SD1001 (A10-15図)

時期：中世 方向：軸方向N-29°-E、N-3°-W



A10-15図 A10SK1013・1014、SD1001

規模：軸方向N-29°-Eでは(6.80)×0.40m、軸方向N-3°-Wでは(4.60)×0.52m

深さ：軸方向N-29°-Eでは0.14m、軸方向N-3°-Wでは0.17m

断面形態：U字状

埋土：灰黄褐色粘土質シルトと灰黄褐色シルト

床面標高：軸方向N-29°-Eでは北東端(7.320m)、南西端(7.250m)、軸方向N-3°-Wでは北西端(7.250m)、南東端(7.235m)

接続：—

遺物：弥生土器(甕口縁～胴部1、口縁5、底部2)、石器(サヌカイト剥片1、チャート原石1)

所見：SK1001・1010を切っており、SD1007の上面東肩部分に掘り込まれていた。また、グリッドI5キ-19付近でSD1006を切っている。軸方向はグリッドI5キ-19付近で、N-29°-EからN-3°-Wに変化している。中央部付近で東西方向に枝分かれしている溝は、別遺構の可能性がある。

遺物の中にI-3様式の甕(1)が入っていたが、時代判定ができる遺物はこの遺物1点しかなく、また、遺構埋土及び深さから考えて中世の溝と思われる。

A10SD1007 (A10-16図)

時期：中世 **方向**：軸方向N-31°-E

規模：(9.60)×1.23m 深さ0.24m **断面形態**：逆台形

埋土：灰黄色シルトと灰黄色砂質シルト

床面標高：北東端(7.152m)、南西端(7.165m)

接続：—

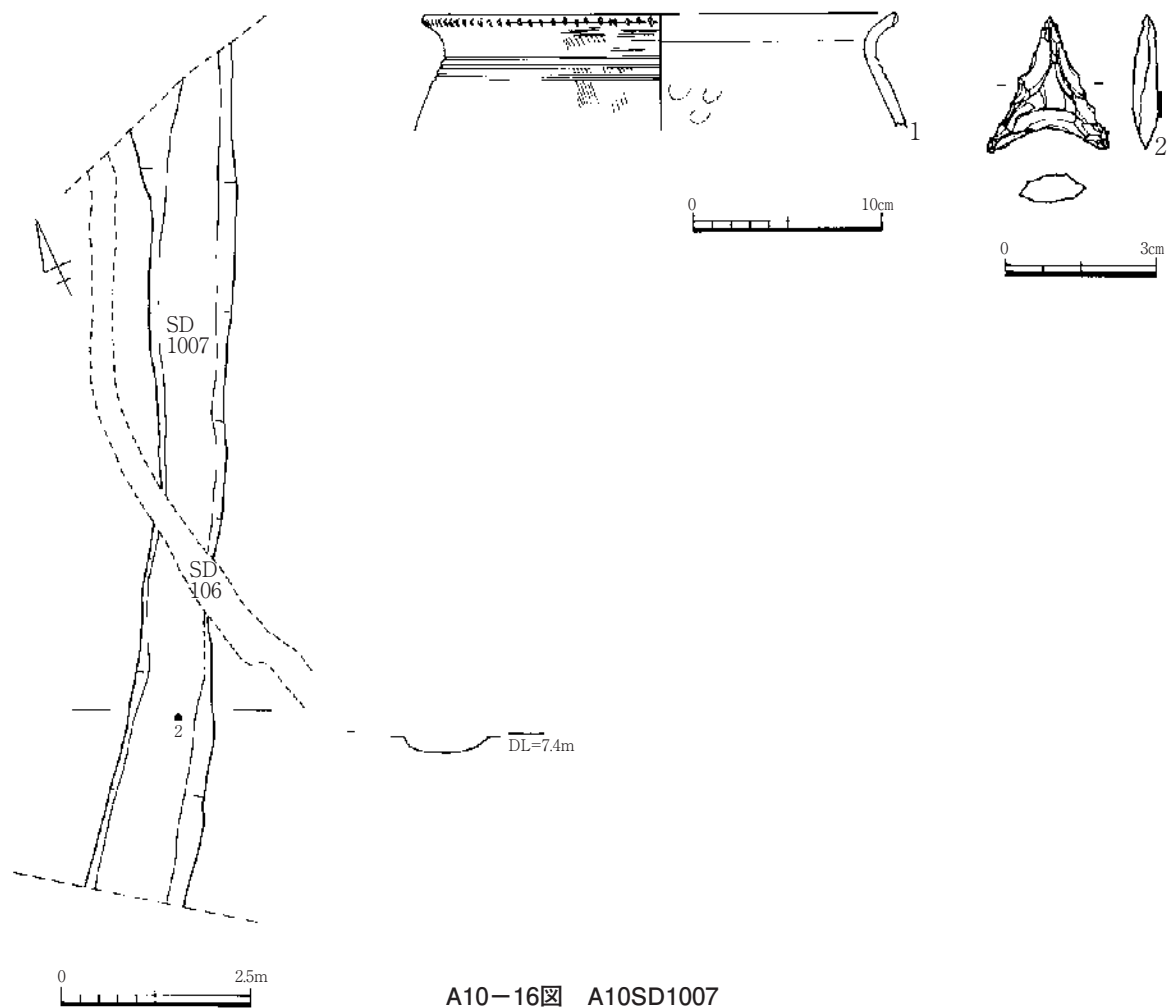
遺物：弥生土器(甕1、壺口縁1、鉢口縁3、底部1)、石器(石鏃1)

所見：SD1001が東肩上面に掘り込まれており、SD1006に切られている。また、床面にピットが1個掘り込まれている。

遺物として、I-3様式の甕1点(1)と石鏃1点(2)が出土しているが、遺構埋土及び深さから判断して中世の溝と思われる。

(3) 土塁 (A10-17・18図)

A10区では土塁が調査区北西部殆どを埋め尽くす様な範囲で盛られていた。おそらく、A4区で検出されたA4SD406との位置関係から考えて、15世紀頃機能していた守護代細川勝益及び持益が構えた田村城館の堀を掘る際に盛られた盛土であろう。さらに詳しく記述すると本調査で検出された部分は土塁全体から考えると、細勝寺の南西部に当る部分で、土塁全体の一部分にすぎず、本調査区内での土塁延長北端から南端まで20.5m、基底部は5.5～11m、上場の幅が2.0～3.0m、高さ1.54～2.78mの規模である。この土塁は前回の発掘調査で検出されたLoc.43-SD1の南北方向の南半分の東側に隣接しており、軸方向は本調査での土塁はN-7°-E、SD1の南北方向の南半分がN-10°-Eとほぼ一致しており、この土塁が田村城館の外堀であるSD1の南北方向の南半分に伴うものであると言える。また予想の域を越えないが、本調査で検出した土塁はSD1の東岸に沿って少なくとも南北方向に延び



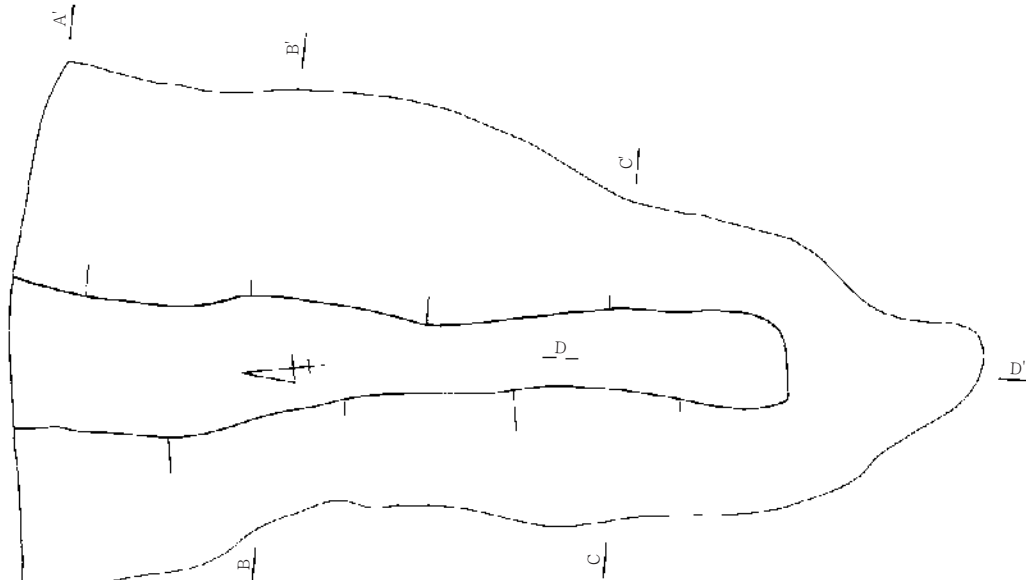
A10-16図 A10SD1007

ていたと思われる。

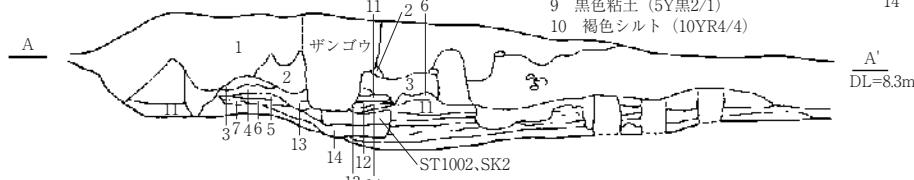
遺物としては、I-3様式の壺(1)、I-3様式の甕(2、4、6)、I様式の甕(3)、V-1様式と思われる鉢(5)、9世紀頃の須恵器の蓋つまみ部1点(7)、9世紀頃の須恵器杯の底部～体部1点(8)、15世紀後半頃の土師器の小杯1点(10)、15世紀前半頃の備前焼甕の底部1点(15)、14～15世紀頃の瓦質土器鍋(16)、15世紀前半頃の備前焼播鉢(12)、15世紀後半頃の備前焼播鉢(13)、15世紀前半頃の土師器杯(11)、15世紀後半頃の土師器杯(9)、15世紀前半頃の瓦質土器羽釜(14)、近世～近代のものと思われる陶器こね鉢(18)、近世の肥前三川内産青磁香炉1点(17)、時代判定不明の土師器土錘1点(19)、石鏃1点が出土している。その他の遺物は弥生土器が口縁96点(甕31、壺10)、底部55点(壺8、鉢1)、破片400点、須恵器破片が45点、土師器が底部9点、破片60点、備前焼破片が11点、青磁破片が1点、瓦器破片が20点、陶磁器破片が24点、石器がチャート剥片2点、石錘1点、石剣1点である。

(4) 柱穴

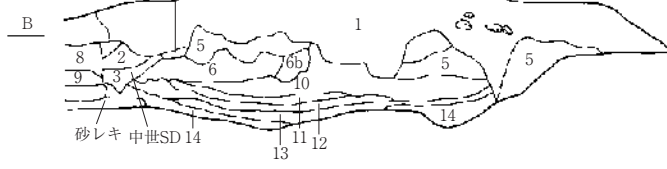
A10区では概要でも述べた様に、48個の中世のピットが確認されたが、30個程が調査区東部に集中しており、その配置において規則性は見当たらない。ただ、調査区南西部のP1003～1005、1027に



- | | | |
|--------------------------------------|------------------------------------|--------------------------------|
| 2 明灰褐色シルト (10YR灰黄褐色5/2) 土師質土器細片含 | 6 黒褐色粘性土 (弥生埋土) | ST1002 |
| 3 黒褐色シルト (10YR黒褐色3/2) 黄褐色シルトブロック含 | 7 暗褐色砂質シルト (10YR3/3) 砂質強い | 11 におい黄褐色シルト (10YR4/3) |
| 4 褐灰色粘性シルト (10YR褐色5/1) 下部粘性有、中世ピット埋土 | 8 黒褐色粘土 (5Y黒2/1に2.5Y7/8 黄色ブロック混じる) | 12 暗褐色シルト (10YR3/3) 砂質強い |
| 5 褐灰色砂質土 (10YR灰黄褐色4/2) 弥生土器細片含む砂質が強い | 9 黒色粘土 (5Y黒2/1) | 13 黒褐色シルト (7.5YR3/2) 砂質強い |
| | 10 褐色シルト (10YR4/4) | 14 におい黄褐色シルト (10YR5/3) SD102埋土 |



- | | |
|--|---|
| 1 黄灰褐色シルト (10YR灰黄褐6/2) 5~10cm大礫混 | 5 明灰褐色シルト (10YR灰黄褐色5/2) 土師質土器細片含 |
| 2 明灰褐色シルト (10YR灰褐色5/2) 土師質土器細片含 | 6 黒褐色シルト (10YR黒褐色3/2) 黄褐色シルトブロック含 (弥生包含層) |
| 3 褐灰色粘性シルト (10YR褐色5/1) 下部粘性有、中世埋土 (SD1012) | 6b 灰黒褐色シルト (5層に比べやや砂質) |
| 4 明灰褐色シルト (10YR灰黄褐色5/2) 土師質土器細片含 | 7 暗褐色シルト |
| | 8 明黄褐色シルト黒褐色ブロック含 |
| | 9 暗黄褐色粘性シルト |

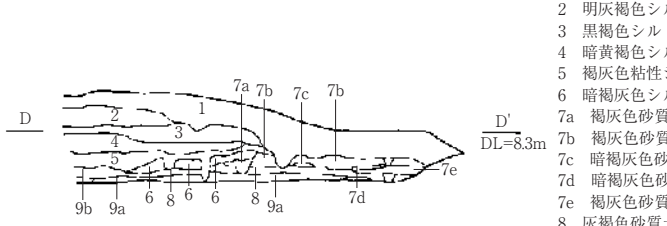


- | |
|-------------------------------------|
| 10 明黄褐色砂質シルト (5Y灰オリーブ6/2) |
| 11 黒褐色黄色粘土 (5Y黒2/1, 2.5Y黄7/8) ブロック土 |
| 12 黒褐色粘土 (5Y黒2/1~下部は5Y黒3/2) |
| 13 黒褐色粘土 (5Y黒3/2) |
| 14 黄色シルト (5Y黄7/6) |

- | | |
|---|--|
| 1 黄灰褐色シルト (10YR灰黄褐6/2) 5~10cm大礫混 | 9b 暗灰褐色砂質シルト (10YR暗褐3/3) 弥生土器片を含む |
| 2 明灰褐色シルト (10YR灰黄褐5/2) 土師質土器細片含む | 10 暗褐色シルト (10YRにおい黄褐4/3) |
| 3 黒褐色シルト (10YR黒褐3/2) 黄色シルトブロック含む | 11a 黄灰褐色大礫 (10YR灰黄褐5/2) 1~10cm大の礫多量に含む |
| 4 暗黄褐色シルト (10YRにおい黄褐5/3) 土師質土器細片 | 11b 黄灰褐色砂礫 (10YR灰黄褐5/2) 約3cmの円礫を多く含む |
| 4b 黄灰褐色シルト、土師質土器細片含む | 11c 黄灰褐色砂礫 (10YR灰黄褐5/2) 約3~10cmの礫が少量含む |
| 5 褐灰色粘性シルト (10YR褐灰5/1) 下部粘性あり、土壘基底部、中世ピット埋土 | 12 黄灰褐色砂質土 (10YR黄におい黄褐5/3) 5cm程度の礫がごく僅かに含む |

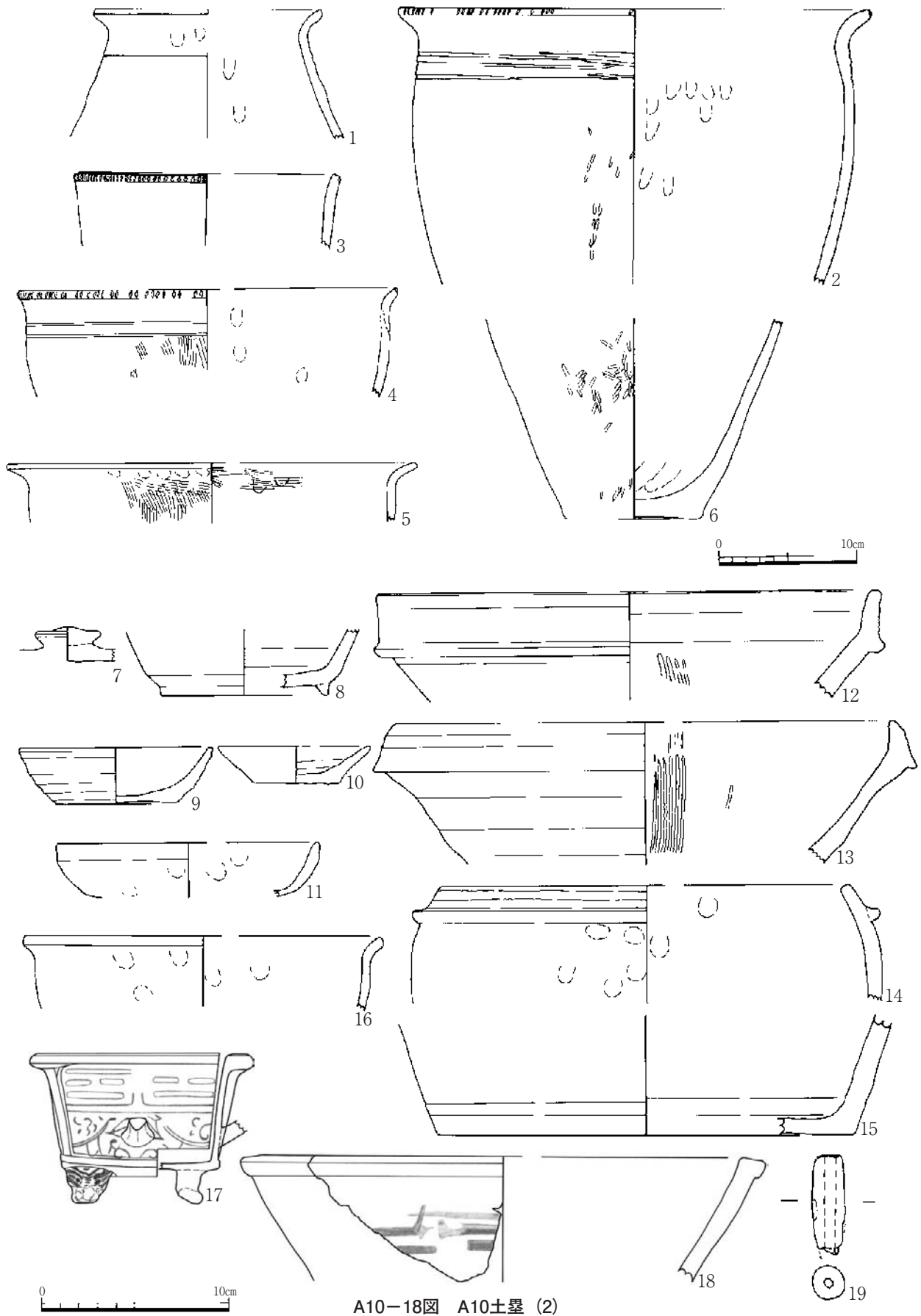


- | |
|--|
| 13a 暗黄褐色シルト (灰黄褐色4/2) 砂質が入る |
| 13b 黄褐色シルト (10YRにおい黄褐5/4) |
| 13c 暗灰褐色砂質シルト (砂礫層) (10YR褐灰4/1) 細礫が多量に含む |



- | |
|---|
| 1 黄灰褐色シルト (10YR灰黄褐6/2) 5~10cm大礫混 |
| 2 明灰褐色シルト (10YR灰黄褐5/2) 土師質土器細片含む |
| 3 黒褐色シルト (10YR黒褐3/2) 黄色シルトブロック含む |
| 4 暗黄褐色シルト (10YRにおい黄褐5/3) 土師質土器細片 |
| 5 褐灰色粘性シルト (10YR褐灰5/1) 下部粘性あり、土壘基底部、中世ピット埋土 |
| 6 暗褐色シルト (10YR暗褐色3/4) 下部に土器片少量含む |
| 7a 褐灰色砂質シルト (10YRにおい黄褐4/3) |
| 7b 褐灰色砂質シルト (10YRにおい黄褐4/3) aの土に5mm程度の暗褐色が粒状に入る |
| 7c 暗褐色砂質土 (10YR灰黄褐4/2) ほぼ土器を含まない |
| 7d 暗褐色砂質土 (10YR灰黄褐4/2) |
| 7e 褐灰色砂質土 (10YRにおい黄褐4/3) 砂質が強い |
| 8 灰褐色砂質土 (10YR灰黄褐4/2) 弥生土器細片を含む、砂質が強い |
| 9a 褐灰色砂質土 (10YR灰黄褐4/2) 土器を全く含まず、砂質がきわめて強く、砂層と言ってもよい |
| 9b 暗灰褐色砂質シルト (10YR暗褐3/3) 弥生土器片を含む |

A10-17図 A10土壘 (1)



A10-18図 A10土壘 (2)

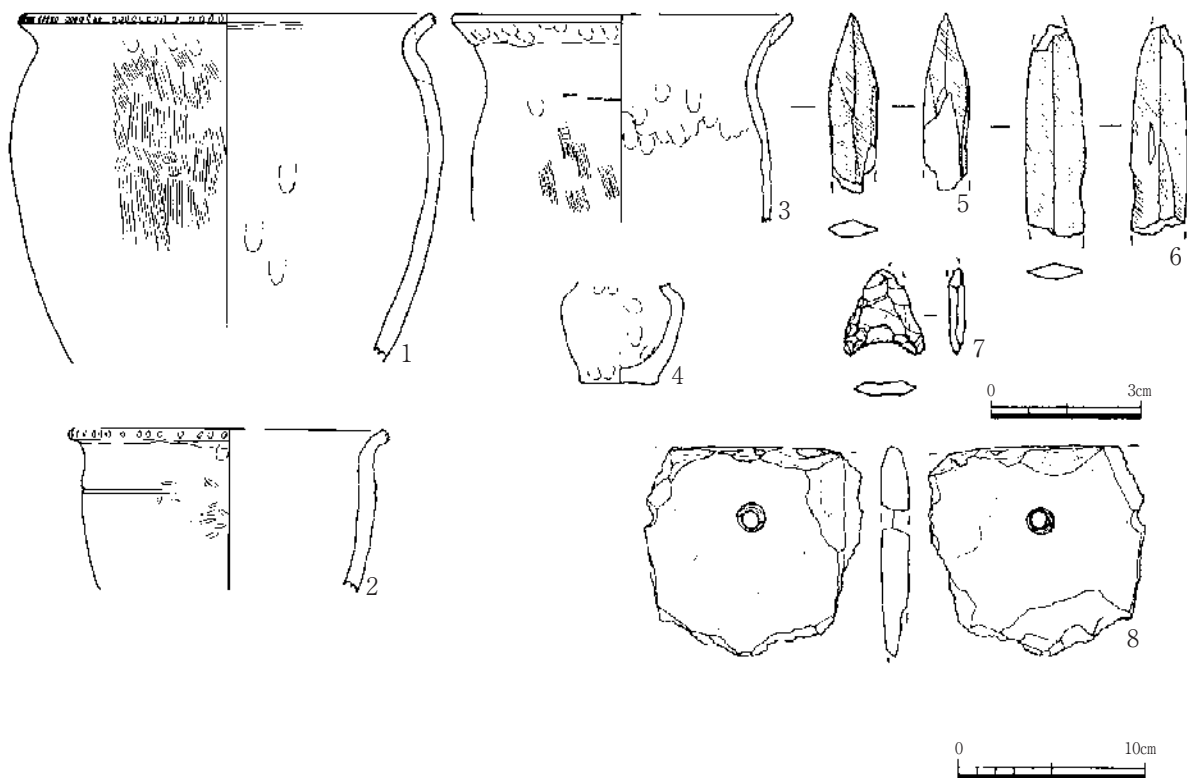
関して言えば、柵列の可能性を上げることができる。しかし、あえて柵列にしなかったのは、4個のピットの軸方向が多少ずれていることとP1003の平面の規模が他のピットより大きかったことが原因に上げられる。遺物としては底部1点、破片10点しか出土していないが、埋土から判断して中世のピットと判断した。

4. A10区遺物包含層遺物

遺物包含層は調査区東部の基本層序第Ⅱ層、Ⅲ層が中世の遺物包含層になっており、調査区南西部のトレンチ1のセクション第Ⅴ～Ⅶ層とトレンチ2のセクション第Ⅵ層が弥生時代の遺物包含層になっている。また調査区東部においては中世面と弥生面が同レベルになっていることから、弥生時代の遺物包含層が流されるか削平されてしまったのではなかろうか。

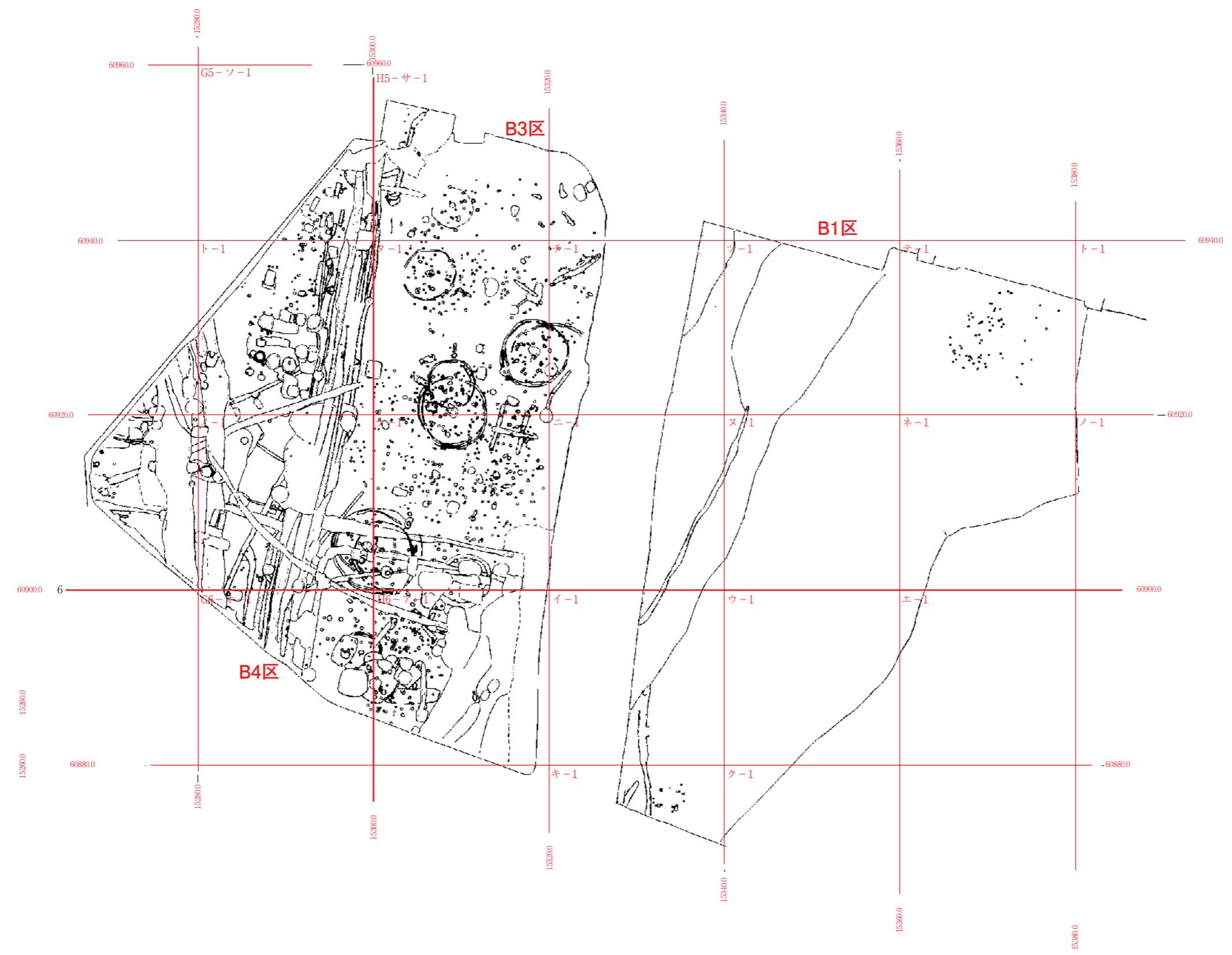
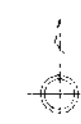
遺物（A10-19図）としてはⅠ-3様式の甕（2）、Ⅰ様式の小型壺1点（4）、Ⅰ-2様式の甕（1）、Ⅲ-3様式の甕（3）、磨製石鏃2点（5、6）、打製石鏃1点（7）、磨製石包丁1点（8）、煙管1点が出土している。

その他の遺物としては、口縁111点、底部73点、破片2300点、土師器口縁底部8点、中世陶磁器口縁、底部15点、近世陶磁器口縁、底部21点、磨製石鏃2点、磨製石包丁1点、サヌカイト剥片16点、チャート剥片6点、チャート原石1点、古銭3点、鉄鏃2点、煙管1点、獣歯1点である。

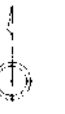


A10-19図 A10区遺物包含層出土遺物

B区の調査

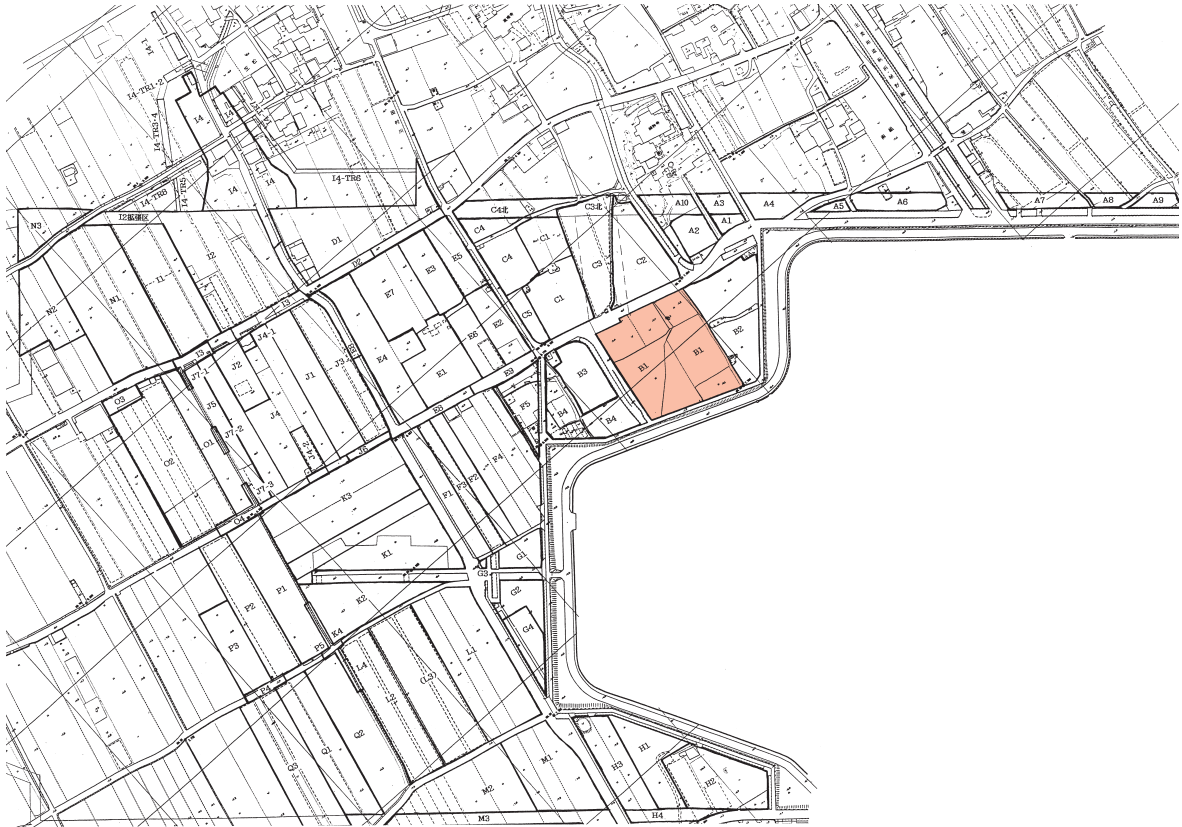


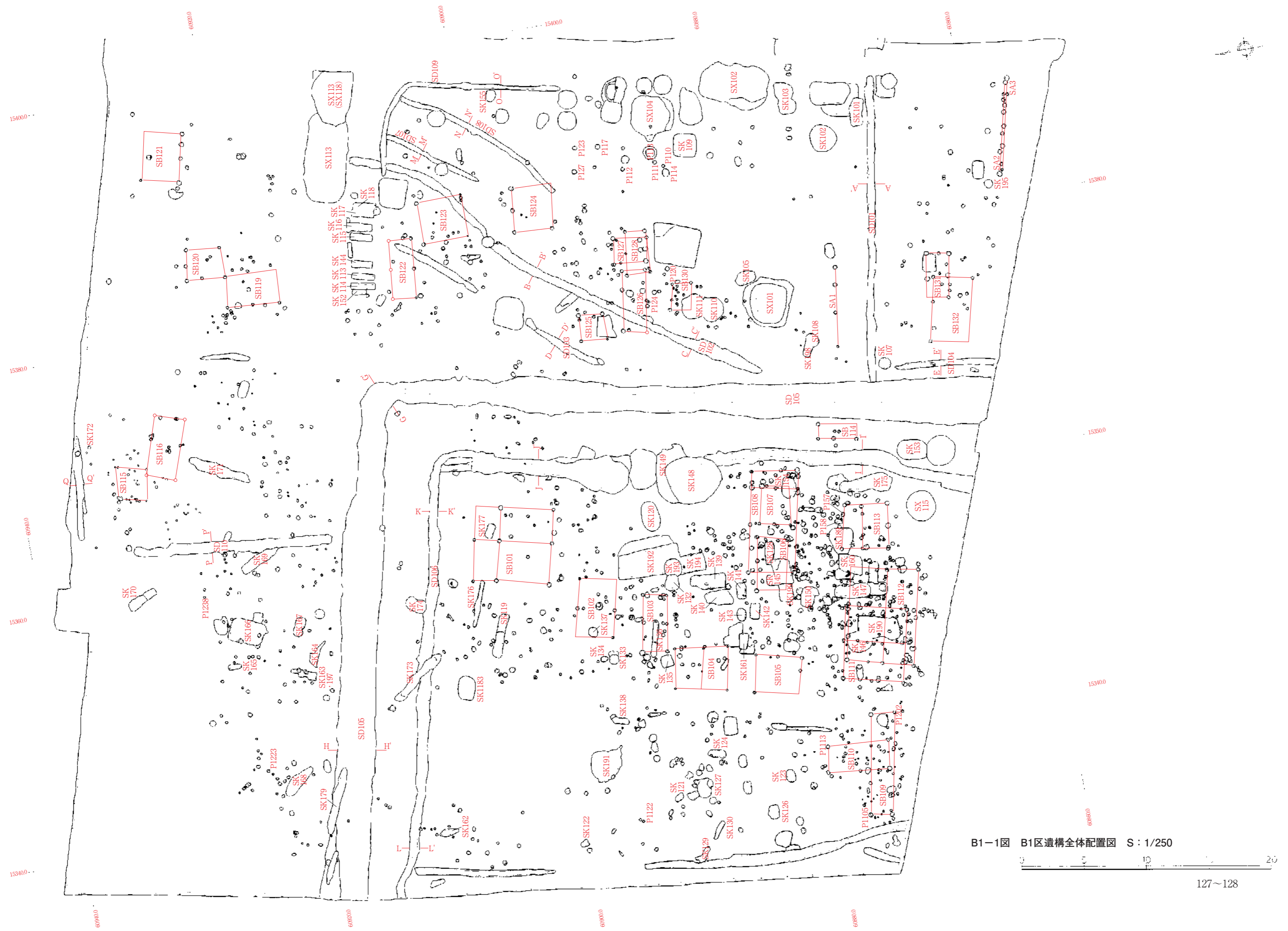
B-1図 B区弥生時代全体図 S : 1/500



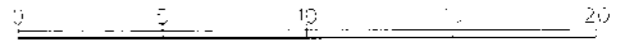
B-2図 B区古代以降全体図 S : 1/500

B1区の調査





B1-1图 B1区遺構全体配置図 S : 1/250



1. B1区の概要

概要

B1区は今次調査区間の南端部分に位置している。

弥生時代の検出遺構は、調査区の西部を南北方向に走る自然流路B1SR101、及び流路の東岸に沿って散在的に分布する土坑30基である。これらの土坑は大きく、弥生前期（弥生Ⅰ-2期）と、弥生中期末から後期初頭の2時期のものに分けられる。しかし、各期土坑の分布状況をみると、中期末から後期初頭の土坑が調査区西部全域に広がるのに対し、前期の土坑は調査区北西部に偏在するなど、やや違いが認められる。弥生時代の遺構はB1区東部側では殆ど検出されておらず、本調査区が弥生集落の東端にあたるものとみられる。

中世については、調査区を縦横に走る中世の区画溝によって区画された複数の中世屋敷地（A～D）が確認でき、ここから32棟を越える中世掘立柱建物跡と土坑20基、多量のピットが検出された。各屋敷地の規模は屋敷地Bで南北23m×東西約39m、屋敷地Cで南北39m×東西23mであり、ともに敷地面積が約900㎡前後となる。こうした敷地面積と遺構規模は前回田村遺跡調査にて確認された区画溝をもつ中世屋敷群ともほぼ共通していることから、屋敷地B～Dについては当地域に展開する一般的な家臣団屋敷地に該当するものと考えられる。一方、二重の大溝B1SD105・106によって囲まれた屋敷地Aは、区画溝が西に隣接するB4区まで広がりを見せており、B4区側での検出長も含めると外溝の東西検出規模は約80mを測る。これら屋敷地からの出土遺物は15世紀から17世紀初頭までのもので構成されており、主たる機能時期は15～16世紀末の間におくことができる。

近世から近代の遺構は調査区東部に集中しており、ここでは近世から近代の墓8基、19世紀中葉の大型の遺物廃棄土坑等が検出されている。

調査担当者 三橋真理（平成8年度）、吉成承三（平成9年度）

執筆担当者 浜田恵子

調査期間 平成8年12月～平成9年3月、平成9年5月～平成9年8月

調査面積 7,001㎡

時代 弥生時代前期～後期、中世、近世

検出遺構 弥生時代土坑30基。中世土坑20基、溝12条、掘立柱建物跡32棟以上。近世～近代土坑18基、性格不明遺構18基。ピット約1000個。

2. B1区弥生時代の遺構と遺物

(1) 土坑

B1区では弥生時代の土坑30数基を検出した。これらは調査区西部を南北方向に走る自然流路B1SR101の東岸に沿って分布しているが、遺構の分布密度は弱く散在的である。

弥生前期の土坑はB1SK119・132・163・172・183、弥生中期末から後期の土坑はB1SK124・127・138・167～170・173・179・180・182を確認している。その他については遺物量も少なく時期の詳細は不明である。

B1SK105 (B1-2図)

時期；弥生 形状；楕円形 主軸方向；N-7°-W

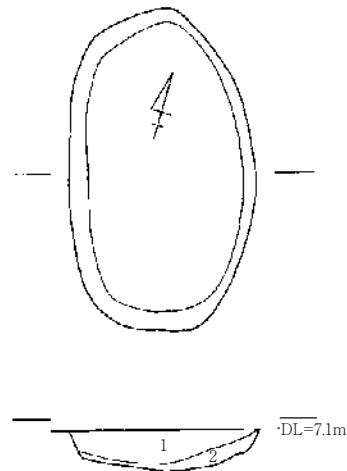
規模；1.70×1.00m 深さ0.22m 断面形態；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 機能；不明

出土遺物；弥生土器（底部-鉢1）

所見；調査区南東部に位置する土坑である。出土遺物は埋土中より出土した鉢(1) 底部1点と胴部細片のみである。



1 灰黄褐色土(粘土質シルト)
2 黒褐色土(粘土質シルト)

B1SK119 (B1-3・4図)

時期；弥生I-2 形状；長楕円形 主軸方向；N-68°-W

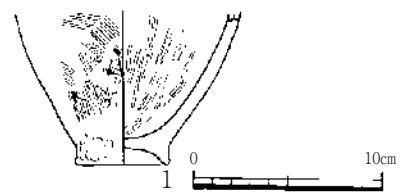
規模；3.55×0.63m 深さ0.50m 断面形態；U字状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 機能；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺3・甕15・鉢1、底部-8）

所見；調査区中央部東よりに位置する土坑である。断面形態はU字状で、床面から完形に近い形状を保った多量の土器片がまとまって出土している。



B1-2図 B1SK105

出土遺物は壺・甕・鉢であり、壺は口縁部下に段をなすもの(1・2)、口縁部下に2条のヘラ描沈線を施すもの(3)、上胴部にヘラ描きによる重弧文を施すもの(4)がある。甕は全て遠賀川式土器甕からなり、口縁部下まで残存するものには口縁部下有段のもの(5・6)が2点含まれる。又、甕は全て無文で口縁部下にヘラ描沈線を施すものは認められない。図示したものは壺(1~4)、甕(5~10)、底部(11)である。

B1-1表 B1区弥生土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
B1SK105	楕円形	皿状	1.70	1.00	22	N-7°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK119	長楕円形	U字状	3.55	0.63	50	N-68°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生 I-2	
B1SK121	楕円形	皿状	0.85	0.50	14	N-39°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK122	楕円形	皿状	0.65	0.45	6	N-30°-W	黒褐色粘土質シルト	Pに切られる	弥生	
B1SK123	楕円形	皿状	1.05	0.75	24	N-88°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK128	楕円形	皿状	1.80	0.72	15	N-81°-W	黒褐色粘土質シルト	B1SK145に切られる	弥生	
B1SK129	楕円形	皿状	1.25	0.35	6	N-49°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK130	楕円形	皿状	2.00	0.35	13	N-49°-W	黒褐色粘土質シルト	Pに切られる	弥生	
B1SK132	楕円形	皿状	1.30	1.00	40	—	黒褐色粘土質シルト	B1P210に切られる	弥生 I-2・3	
B1SK135	方形	箱形	0.95	0.95	16	N-5°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK136	長楕円形	U字状	3.60	0.42	33	N-75°-W	黒褐色粘土質シルト	Pに切られる	弥生	
B1SK138	楕円形	U字状	1.33	0.40	33	N-26°-E	黒褐色粘土質シルト	B1P147に切られる	弥生 V	
B1SK141	長方形	箱形	1.30	0.75	26	N-84°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK143	楕円形	皿状	1.00	0.70	15	N-82°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK162	楕円形	皿状	1.65	0.60	12	N-8°-W	黒褐色粘土質シルト	B1SD105に切られる	弥生	
B1SK163	楕円形	皿状	1.28	0.36	7	N-11°-E	黒褐色粘土質シルト	B1SK197・B1P1240に切られる	弥生 I-2	
B1SK164	楕円形	皿状	0.85	0.65	9	N-70°-W	黒褐色粘土質シルト	SKに切られる	弥生	
B1SK166	長方形	箱形	2.76	1.94	20	N-25°-E	灰褐色砂質シルト	なし	不明	
B1SK167	隅丸方形	箱形	1.60	0.81	30	N-65°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生 IV~V-1・2	
B1SK168	楕円形	U字状	3.05	0.94	58	N-38°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生 IV~V-1・2	
B1SK169	長楕円形	逆台形	3.40	0.79	39	N-28°-W	黒褐色粘土質シルト	B1SD110に切られる	弥生 IV~V-1・2	
B1SK170	長楕円形	逆台形	2.52	0.77	38	N-20°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生 IV~V-1・2	
B1SK171	楕円形	皿状	5.20	0.90	18	N-28°-E	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK172	楕円形	皿状	1.54	0.84	8	N-56°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生 I-2	
B1SK173	溝状	V字状	5.15	0.68	57	N-37°-W	暗褐色粘土質シルト	なし	弥生 IV~V-1・2	
B1SK174	楕円形	U字状	残 1.75	1.00	44	N-26°-E	黒褐色粘土質シルト	B1SD106に切られる	弥生	
B1SK176	溝状	皿状	3.80	0.45	11	N-69°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK177	楕円形	皿状	1.25	0.52	13	N-62°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生	
B1SK179	溝状	V字状	5.52	0.64	44	N-68°-W	黒褐色シルト	なし	弥生 IV~V-1・2	
B1SK183	楕円形	皿状	1.95	1.38	40	N-76°-W	黒褐色シルト質砂	なし	弥生 I-2・3	

B1SK132 (B1-5図)

時期；弥生 I-2・3 形状；楕円形 主軸方向；—

規模；1.30×1.00m 深さ0.40m 断面形態；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 機能；不明

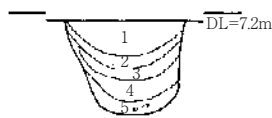
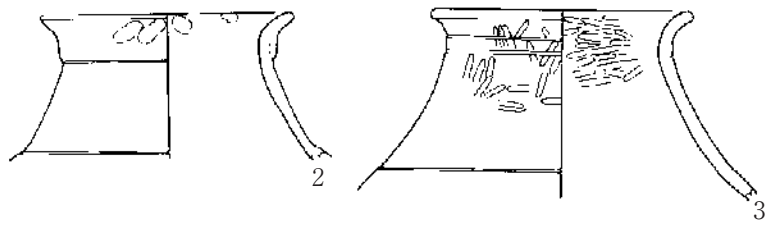
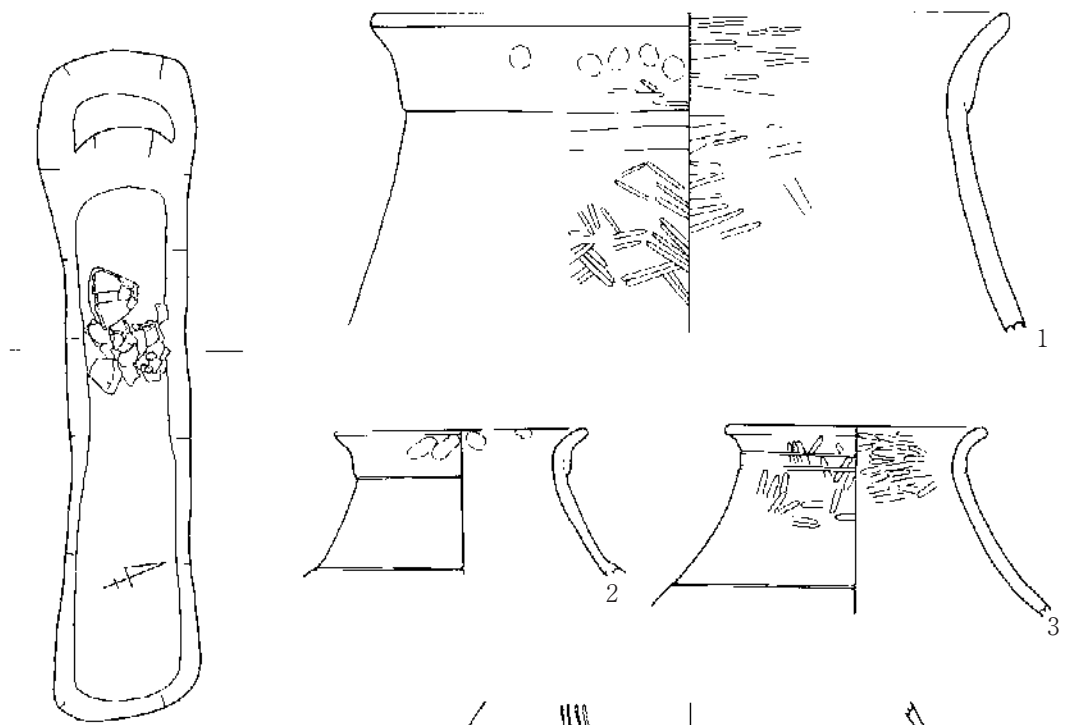
出土遺物；弥生土器（口縁部-壺2・甕6、底部-4）

所見；調査区中央部HVIウ-14グリッドに位置する土坑で、B1P210に切られる。

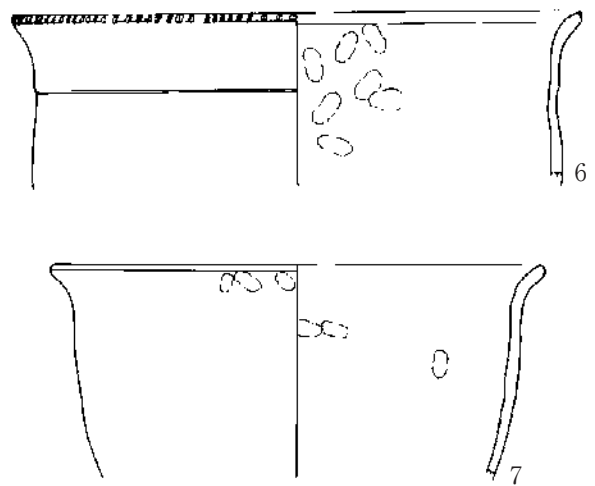
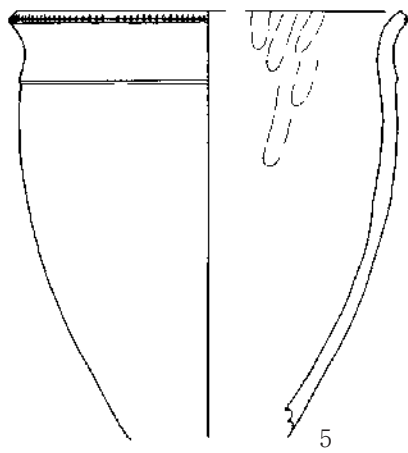
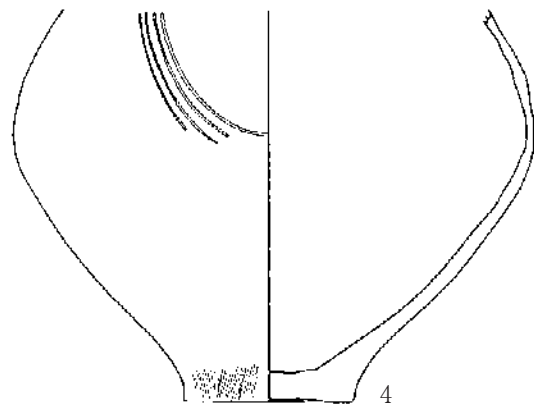
出土遺物は壺、甕であり、全て遠賀川式土器で構成される。このうち壺は上胴部に3条と2条を1単位とするヘラ描沈線を施すもの（1）と口縁端部片1点からなり、甕は口縁部下無文もので占められる。

B1SK138 (B1-5図)

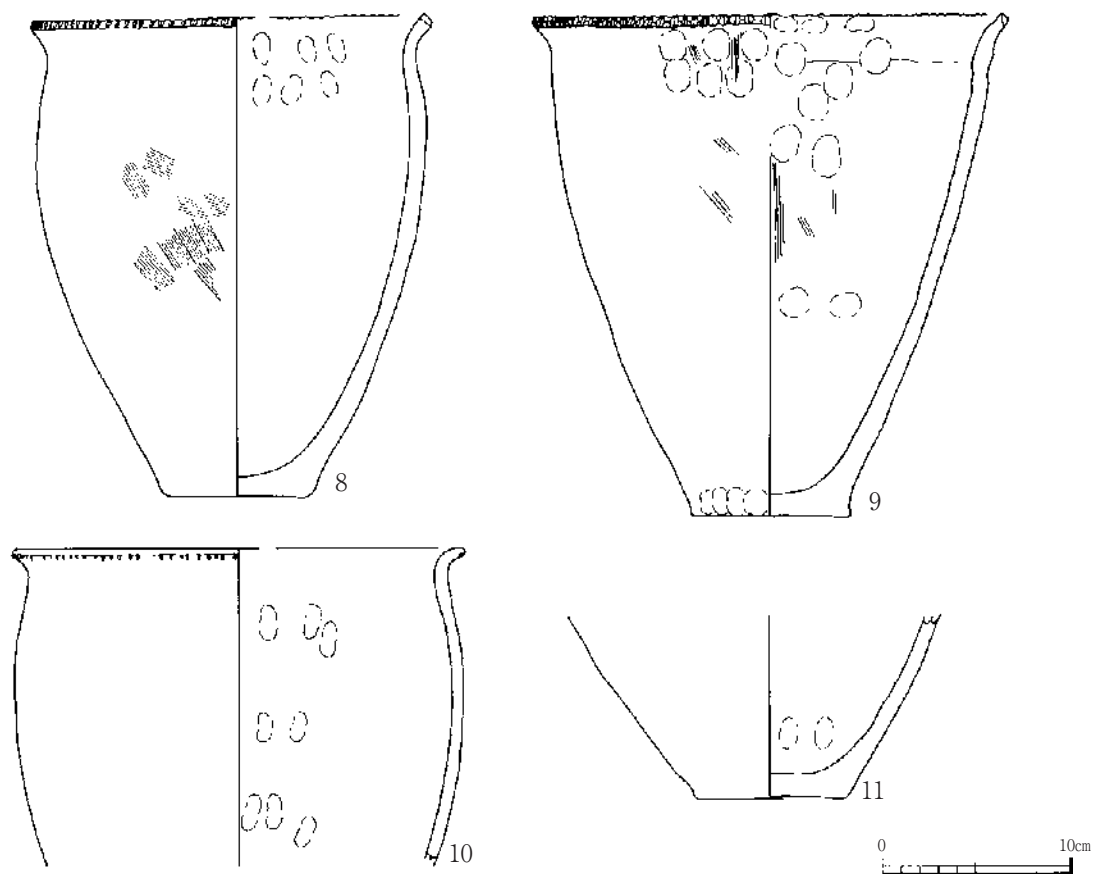
時期；弥生 V 形状；楕円形 主軸方向；N-26°-E



- 1 灰褐色土（粘土質シルトに砂が混じる、炭化物を多量に含む）
- 2 黒褐色土（シルト、炭化物を含む）
- 3 灰褐色土（粘土質シルト）
- 4 黒褐色土（シルト）
- 5 褐色土（粘土質シルト、炭化物を多量に含む）



B1-3図 B1SK119 (1)



B1-4図 B1SK119 (2)

規模；1.33×0.40m 深さ0.33m **断面形態**；U字状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺1・甕12・鉢1、底部-3）

所見；調査区中央部に位置する土坑で、B1P147に切られる。又、時期不明のB1SK138-2との前後関係は不明である。断面形態はU字状で、埋土中より多量の土器片がまとまって出土している。出土遺物は壺、甕、鉢である。このうち壺は広口壺で口唇部を面取るもの1点。甕は口唇部凹線文のもの2点、口唇部を上下に拡張させるもの3点、面取るもの7点からなる。図示したものは、甕 (2)、鉢 (3) である。

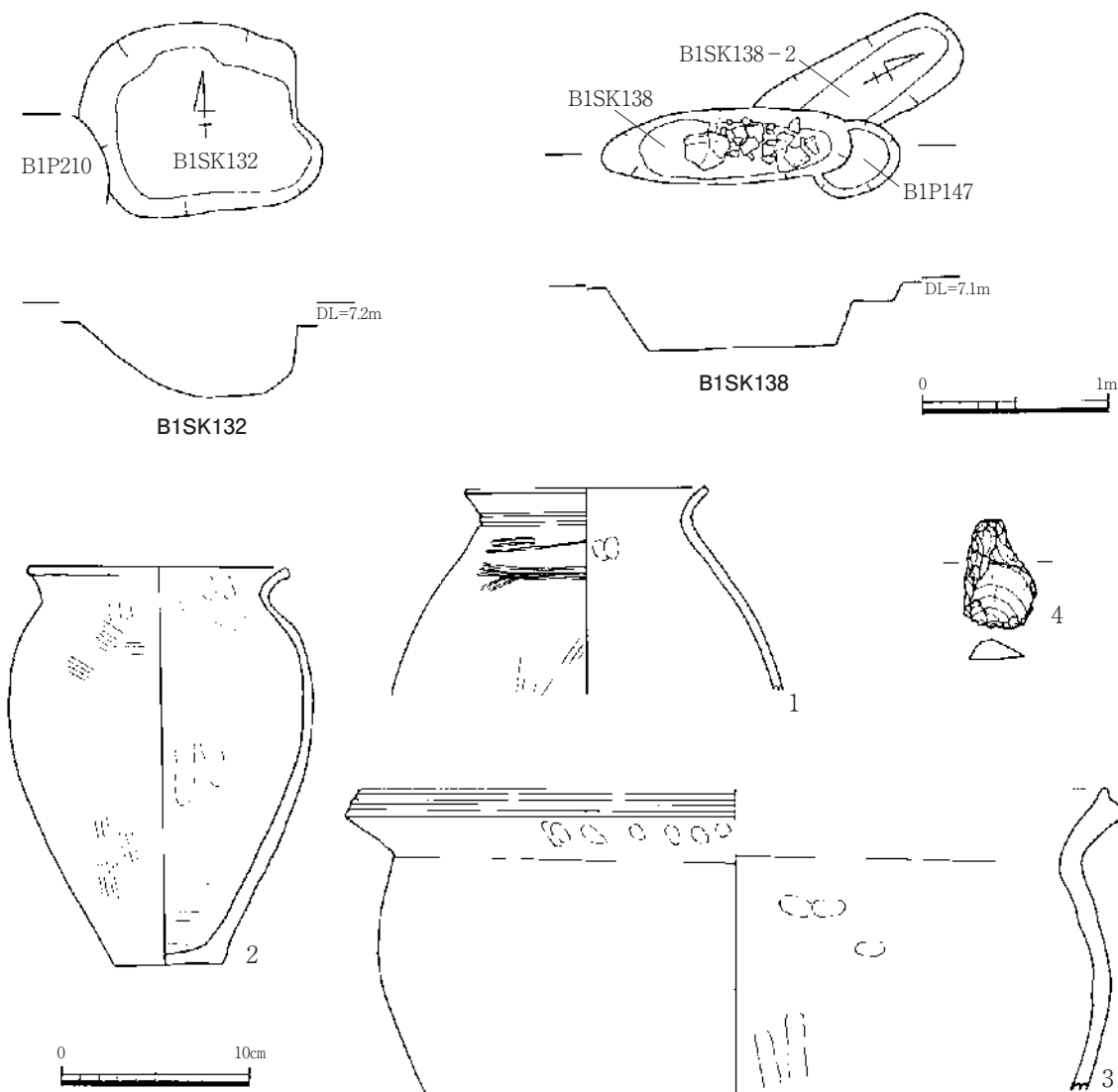
B1SK163 (B1-6図)

時期；弥生 I - 2 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-11° - E

規模；1.28×0.36m 深さ0.07m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明



B1-5図 B1SK132・138 (B1SK132:1・4, B1SK138:2・3) (4は2/3)

出土遺物；弥生土器（口縁部-甕4・鉢3、底部-1）

所見；調査区北部に位置する土坑で、時期不明のB1SK189・BIP1240に切られる。出土遺物は甕、鉢である。甕は全て遠賀川式土器甕からなり、口縁部下無文のもので占められる。このうち口縁部下に段を有するもの（1・3）は2点、無段のもの2点である。又、鉢には口縁部下に1条のヘラ描沈線を施し、体部上位に段を有するもの（2）がある。

B1SK166 (B1-6図)

時期；弥生IV～V-1・2 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-25°-E

規模；2.76×1.94m 深さ0.20m **断面形態**；箱形

埋土；灰褐色砂質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物：弥生土器（口縁部－壺1・甕1、底部－4）

所見：調査区北部に位置する土坑である。遺物は口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付する壺1点、口唇部を面取る甕1点、及び底部が出土している。

B1SK167（B1-7図）

時期：弥生Ⅳ～Ⅴ-1・2 **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-65°-W

規模：1.60×0.81m 深さ0.30m **断面形態**：箱形

埋土：黒褐色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：弥生土器（口縁部－壺2・甕8、底部－3）

所見：調査区北部に位置する土坑である。出土遺物は壺・甕である。壺は口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付するもの（1・2）、甕は口縁部が外反し口唇部を面取るもの（4）1点、南四国型甕（3・5）2点からなり、他は前期遺構からの混入（6）である。図示したものは壺（1・2）、甕（3～6）、底部（7・8）である。

B1SK168（B1-6図）

時期：弥生Ⅳ～Ⅴ-1・2 **形状**：楕円形 **主軸方向**：N-38°-W

規模：3.05×0.94m 深さ0.58m **断面形態**：U字状

埋土：黒褐色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：弥生土器（口縁部－壺4・甕12・鉢2、底部－14）

所見：調査区北部に位置する土坑である。出土遺物は壺、甕、鉢であり、壺は広口壺で口唇部凹線文のもの2点、面取るもの（4）2点。甕は口唇部凹線文のもの2点、擬凹線文のもの（6）1点、口唇部を僅かに拡張させるもの4点、面取るもの（5）2点、口縁部外面に粘土帯を貼付するもの3点からなる。

B1SK169（B1-8図）

時期：弥生Ⅳ～Ⅴ-1・2 **形状**：長楕円形 **主軸方向**：N-28°-W

規模：3.40×0.79m 深さ0.39m **断面形態**：逆台形

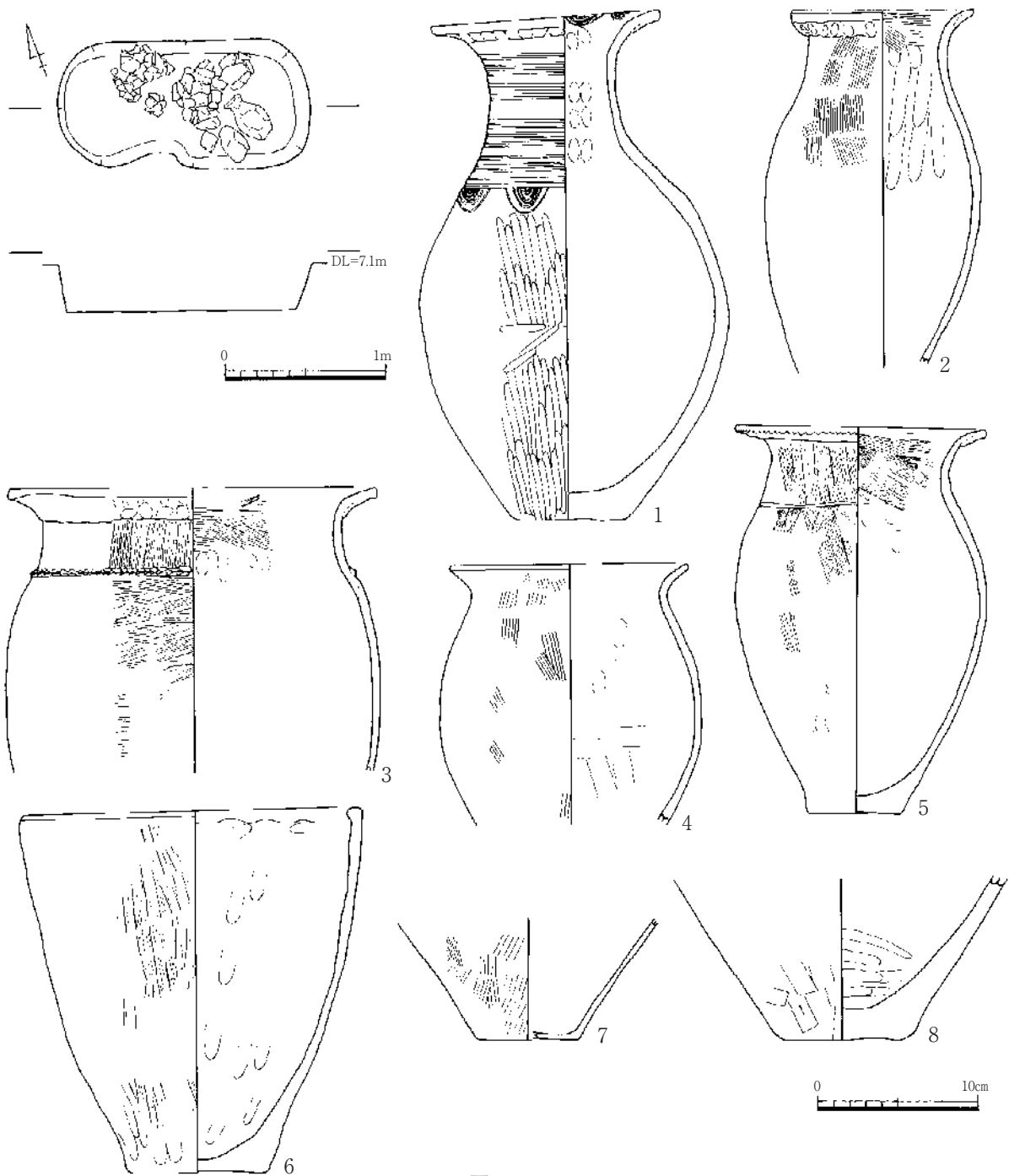
埋土：黒褐色シルト・黄灰色シルト・暗褐色シルト・黒褐色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：弥生土器（口縁部－壺4・甕18・鉢1・高杯1、底部－12・高杯脚2）

所見：調査区北部に位置する土坑で、中世のB1SD110に切られる。断面形態は逆台形で、下層から多量の土器片が一括廃棄の状況を呈して出土している。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯である。壺は広口壺で口唇部に凹線文を施すもの（4）1点、長頸壺（1）、壺（2・3）2点。甕は口縁部が「く」の字状に外反するもので口唇部凹線文のもの（5）5点、僅かに拡張するもの（6）4点、面取るもの（7）8点、口縁部外面に粘土帯接合痕を残すもの1点からなる。又、



B1-7図 B1SK167

高杯 (8) は杯底部に粘土盤を充填する。

図示したものは壺 (1~4)、甕 (5~7)、鉢 (11)、高杯 (8・12)、胴~底部 (9・10) である。

B1SK170 (B1-9図)

時期：弥生IV~V-1・2 形状：長楕円形 主軸方向：N-20°-W

規模：2.52×0.77m 深さ0.38m 断面形態：逆台形

埋土；黒褐色シルト・灰黄褐色シルト・暗褐色砂質シルト・黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部－壺2・甕12、底部－4、器台脚1）

所見；調査区北部に位置する土坑である。出土遺物は壺・甕・器台で、壺は広口長頸壺で口唇部に凹線文を施すもの（1）、擬凹線文のもの（2）。甕は口縁部が「く」の字状に外反するもので、口唇部凹線文のもの1点、口唇部を僅かに拡張させるもの（3）3点、面取るもの8点からなる。この他、山形文と刺突文を連続的に配する高坏脚部（4）1点が出土している。

B1SK172（B1-9図）

時期；弥生Ⅰ-2 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-56°-W

規模；1.54×0.84m **深さ**0.08m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部－壺1・甕6・鉢1）

所見；調査区北部に位置する土坑である。出土遺物は壺・甕・鉢で、ともに遠賀川式土器で構成される。このうち壺は口縁部下有段のもの（5）1点からなり、甕は口縁部下まで残存するもののうち上胴部有段のもの（6）が1点含まれる。又、甕は全て口縁部下無文のもので占められている。この他、口縁部下に段を有する大型の鉢（7）が出土している。

B1SK173（B1-10図）

時期；弥生Ⅳ～Ⅴ-1・2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-37°-W

規模；5.15×0.68m **深さ**0.57m **断面形態**；V字状

埋土；黒褐色シルト・灰褐色シルト・暗褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部－壺3・甕25、底部－15）

所見；調査区北部寄りに位置する溝状の土坑である。出土遺物は壺・甕であり、壺は広口壺で口唇部凹線文のもの1点、口唇部に刻み目を施すもの1点、口唇部を面取るもの（1）1点からなる。甕は口唇部凹線文のもの（2）10点、口唇部を拡張するもの（3）9点、面取るもの5点、口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付するもの1点からなる。

B1SK179（B1-10図）

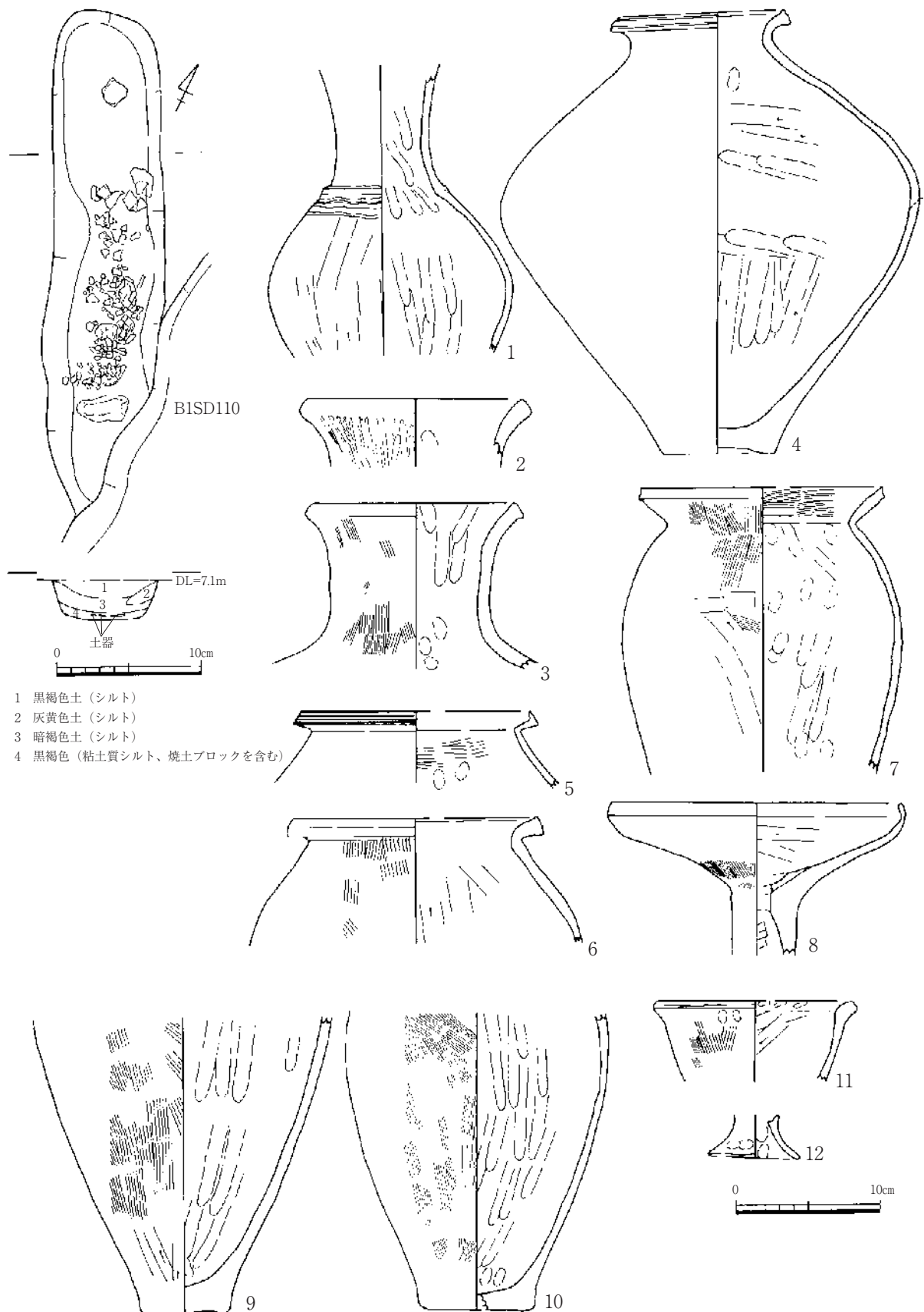
時期；弥生Ⅳ～Ⅴ-1・2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-68°-W

規模；5.52×0.64m **深さ**0.44m **断面形態**；V字状

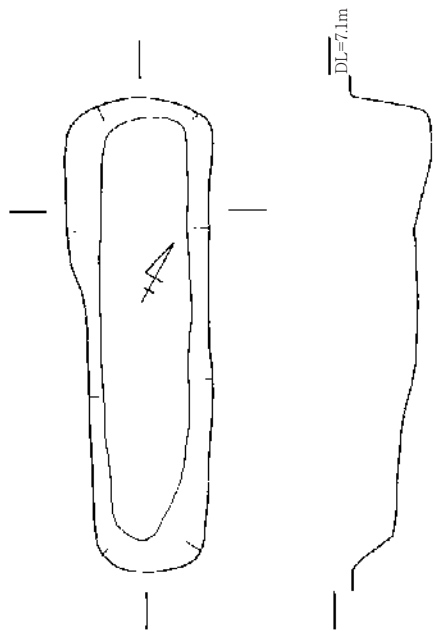
埋土；黒褐色シルト・灰黄褐色シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

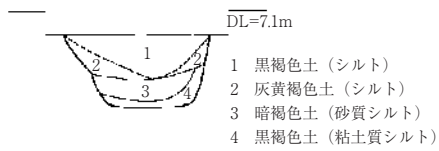
出土遺物；弥生土器（口縁部－壺1・甕22、底部－10）



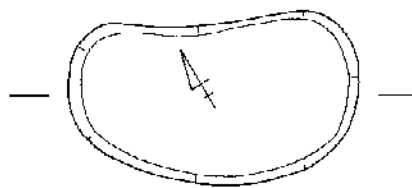
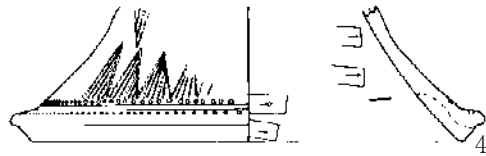
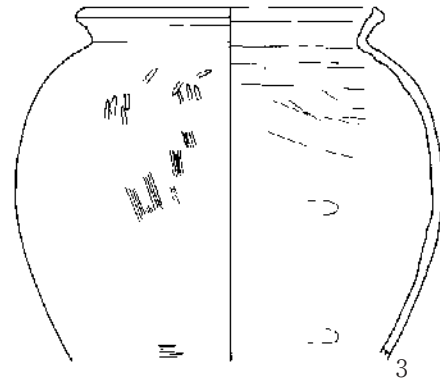
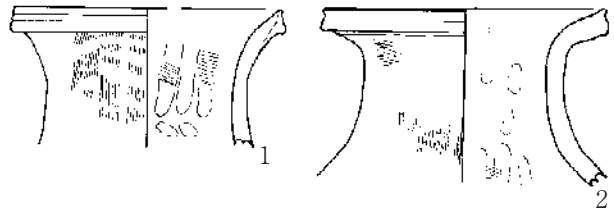
B1-8図 B1SK169



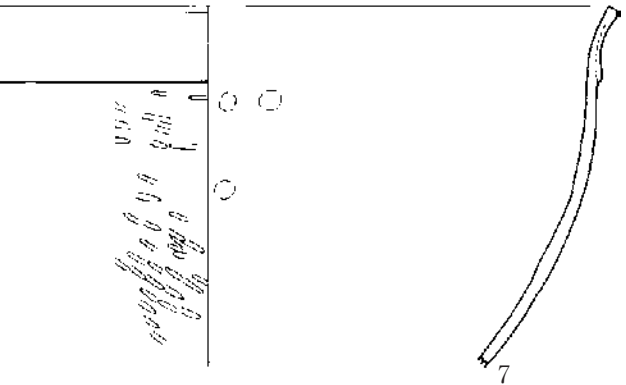
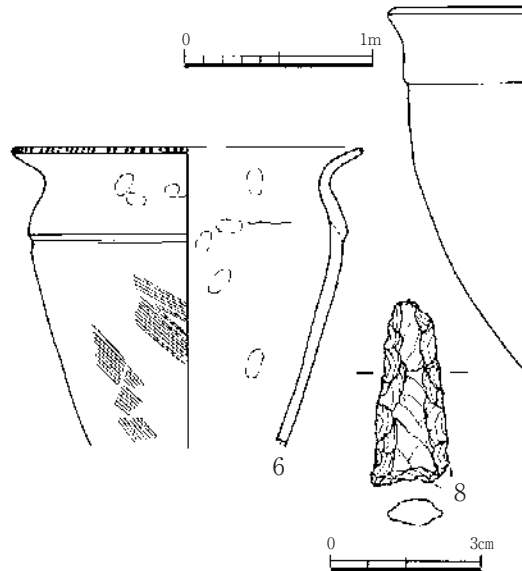
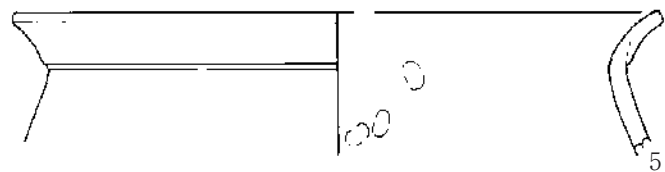
B1SK170



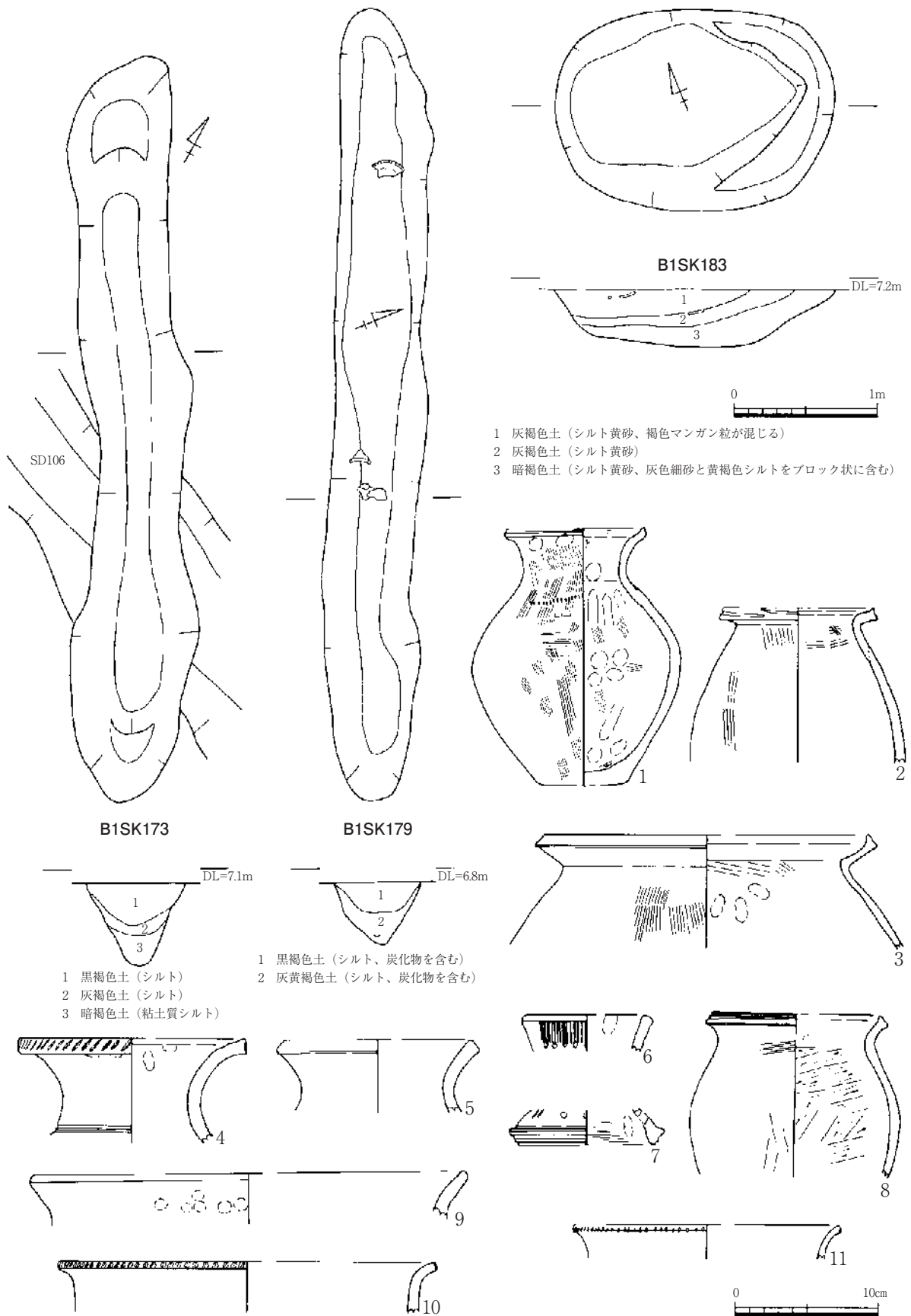
- 1 黒褐色土 (シルト)
- 2 灰黄褐色土 (シルト)
- 3 暗褐色土 (砂質シルト)
- 4 黒褐色土 (粘土質シルト)



B1SK172



B1-9図 B1SK170・172 (B1SK170: 1~4・8, B1SK172: 5~7)



B1-10図 B1SK173・179・183 (B1SK173: 1~3, SK179: 4~8, SK183: 9~11)

所見；調査区西部に位置する溝状の土坑である。出土遺物は壺、甕である。壺は口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付するもの1点、甕は口唇部凹線文のもの16点、口唇部を拡張させるもの1点、面取るもの4点、口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付するもの1点からなる。

図示したものは、壺（4・5・6）、甕（8）、高杯（7）である。

B1SK183（B1-10図）

時期；弥生Ⅰ-2・3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-76°-W

規模；1.95×1.38m 深さ0.40m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色シルト質砂・暗褐色シルト質砂

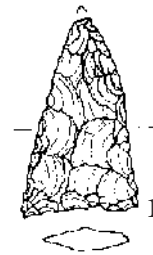
付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-甕18、底部-5）

所見；調査区中央部に位置する土坑である。出土遺物は甕で、全て遠賀川式土器甕で構成される。このうち口縁部下に1条のへら描沈線を施すものは1点のみであり、他は無文である。図示したものは、甕（9～11）である。

(2) ピット（B1-11図）

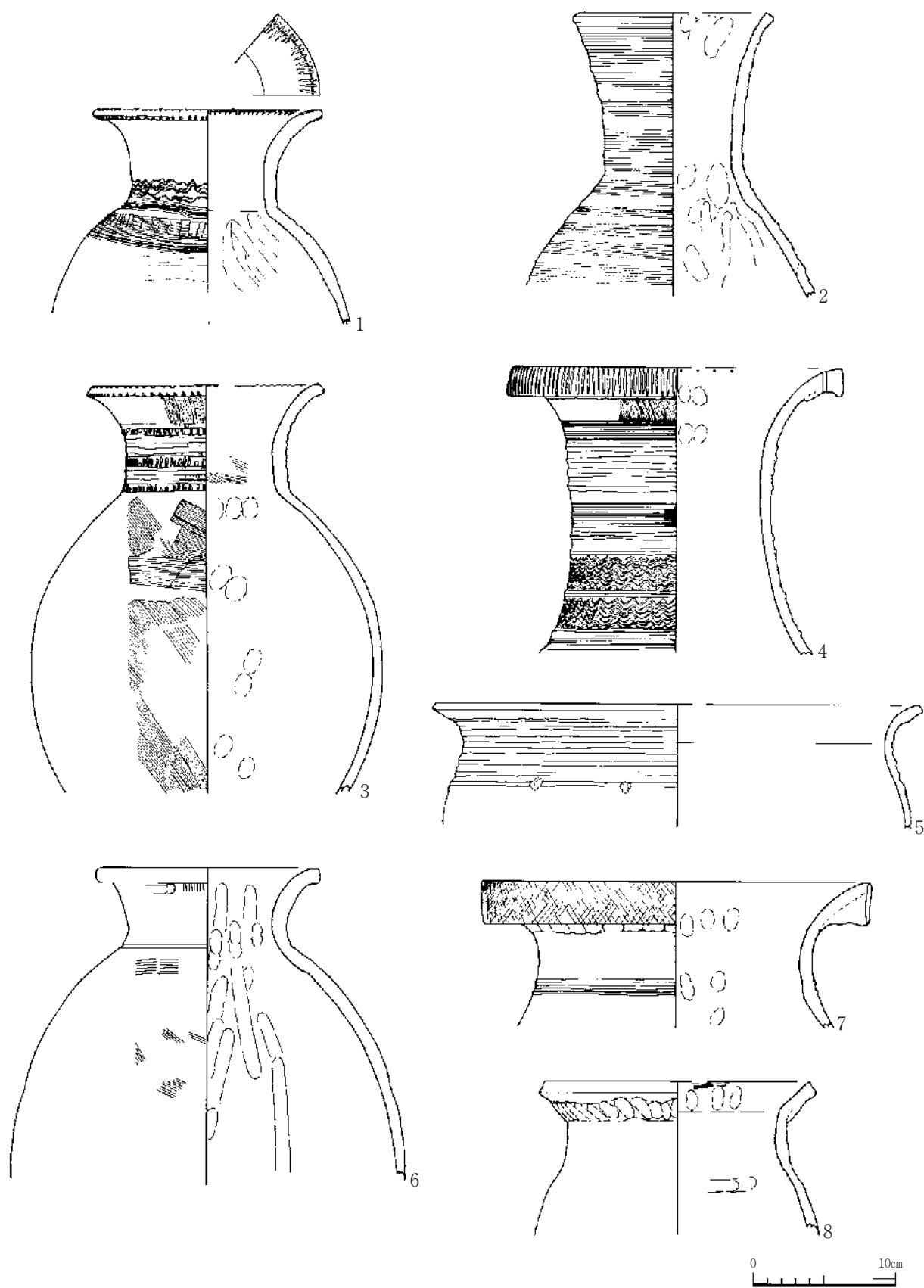
図示したものはB1P1014出土の打製石鏃（1）である。



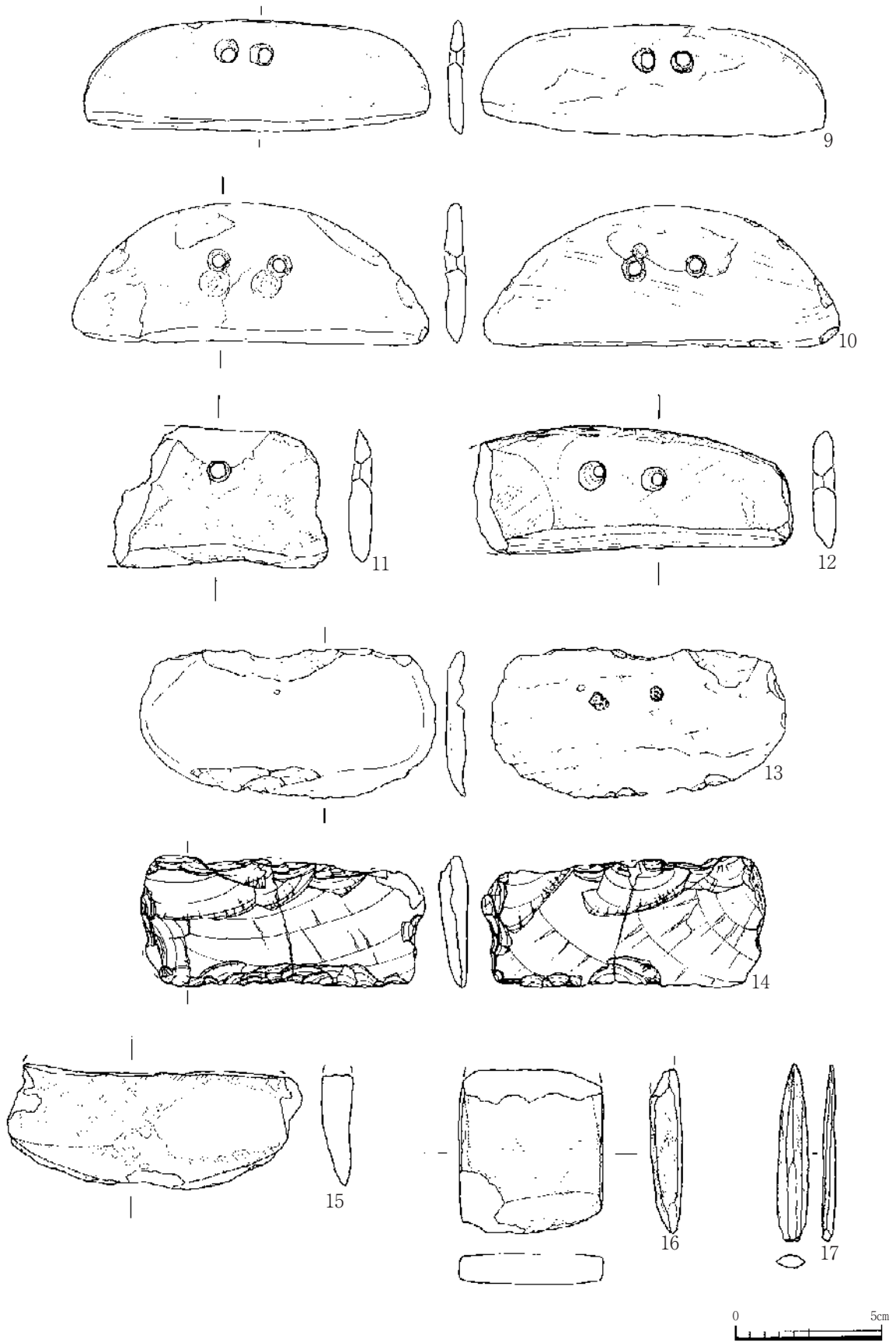
B1-11図 B1P1014（S：2/3）

(3) 遺物包含層出土遺物とその他の遺物（B1-12～14図）

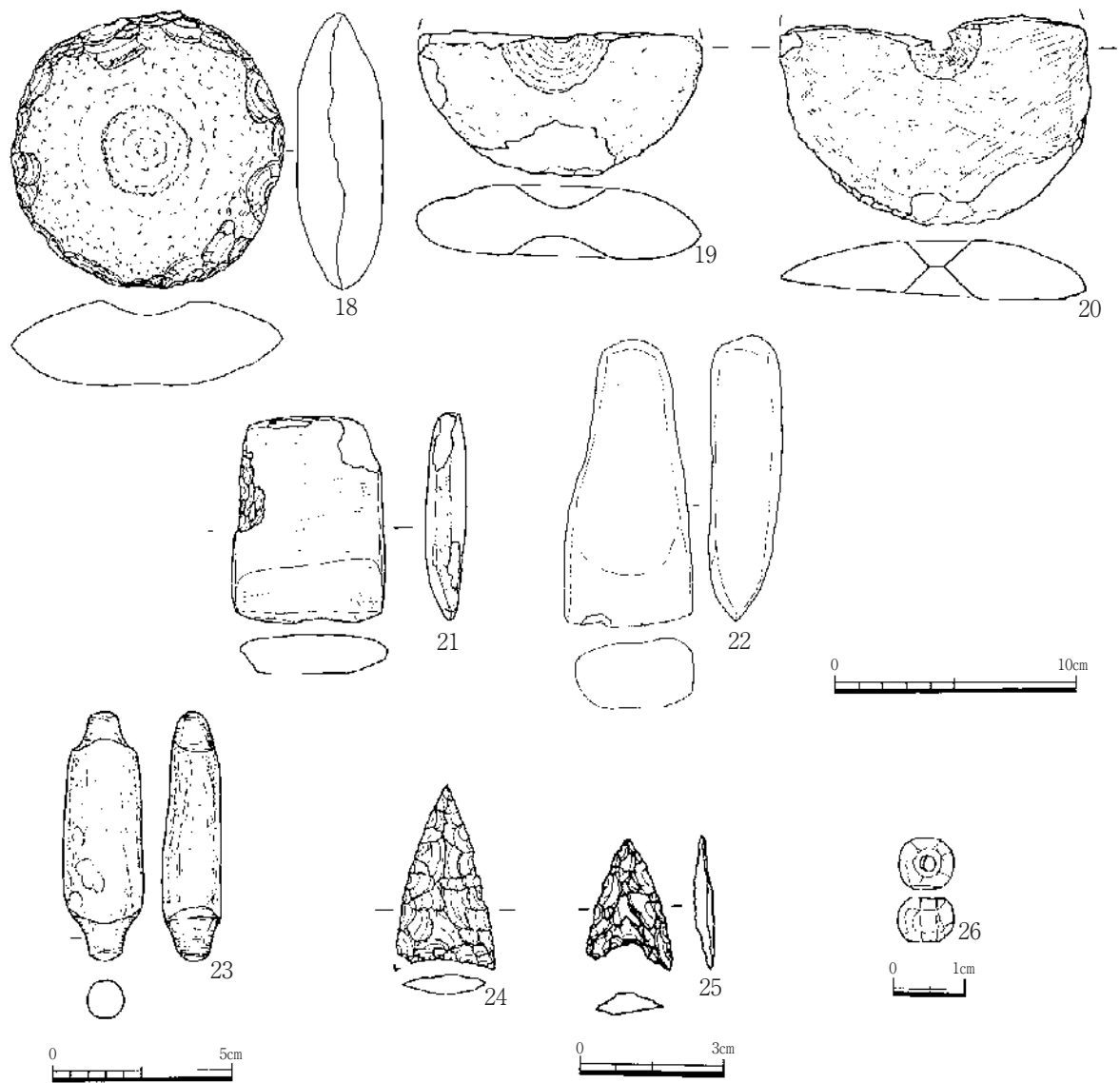
図示したものは遺物包含層出土の壺（1～4・6～8）・甕（5）、石包丁（9～14）、石鎌（15）、磨製石鏃（17）、環状石斧（18～20）、石斧（21～22）、ガラス玉（26）、中世の溝B1SD105への混入とみられる石斧（16）、石鏃（24）、同B1SD102出土の穿孔具（23）・石鏃（25）である。



B1-12図 遺物包含層出土遺物 (1)



B1-13図 遺物包含層出土遺物 (2)



B1-14図 遺物包含層 他 (3)

3. B1区中世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

B1区では、区画溝によって分割された複数の中世屋敷地、すなわち調査区の南西部分を占め二重の区画溝B1SD105・106によって囲まれた屋敷地A、調査区の北東部分を占め区画溝B1SD110・112・101によって囲まれた屋敷地B、区画溝B1SD109とB1SD101によって囲まれた屋敷地C、南東端に位置し区画溝B1SD101・104によって囲まれた屋敷地Dが確認できる。こうした中で、掘立柱建物跡は32棟、柱穴列は3棟を確認した。建物跡の分布をみると、屋敷地AではB1SB101～114、屋敷地BではB1SB115～121、屋敷地CではB1SB122～130と柱穴列SA101を、屋敷地DではB1SB131・132とB1SA102・103が確認される。なお、今回提示したもの以外にもさらに多くの建物が存在した可能性が高いが、ピットの密集が著しく同時期に機能する柱穴列の抽出が非常に困難であったため、ここでは特に軸方向が区画溝に共通し、且つ柱穴の規模・柱間寸法に一定の規格性が認められるもののみを提示している。

建物の軸方向は南北棟建物でN-4～13°-E、東西棟建物で棟方向N-76～88°-Wである。これらは幾分のばらつきを示すものの、何れも真北から東に5～10°前後ずれる棟方向をもち、屋敷地区画溝の軸方向にほぼ合致している。柱間寸法は2m・2.5m・3m・4mの4タイプを認め、2.5mのものが主体をなしている。建物の規模をみると、屋敷地B・C・Dでは1間×1間、1間×2間、2間×2間のものが主体を占め小型規模の建物によって構成される。一方、屋敷地Aでは1間×2間、2間×2間の建物の他に、1間×3間のものや1間×3間に庇が付くものなど大型のものが含まれる。

なお、屋敷地Aにおいては、建物の切り合いからみて、およそ2段階の建て替えがあったものとみられる。又、特に屋敷地Aの南東部には遺構が密集し、大型規模の建物が集中する傾向が認められたため、この地点が屋敷地Aの中心的位置を占める空間であったものと推察される。

B1SB101 (B1-15図)

時期；15C～16Cか 棟方向；N-12°-E

規模；梁間2間×桁行2間 梁間6.13m×桁行6.13m 面積37.58㎡

柱間寸法；梁間 2.73m・3.34m×桁行1.9m・4.21m

柱穴数；9 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；無

所見；調査区中央部に位置する南北棟2×2間の総柱建物跡である。本SBは屋敷地Aの北東端にあたり、軸方向が区画溝のそれにほぼ一致している。切り合い関係ではPハ3が時期不明の浅い落ち込み状の遺構に上面を切られている。柱穴規模は径22～38cm、深さ6～26cmを測る。埋土はPハ1が黄灰色粘土質シルト、P口1が黒褐色粘土質シルト、その他は暗灰色粘土質シルトからなる。出土遺物は皆無であるが、軸方向及び位置関係より二重の区画溝に囲まれた屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1-2表 B1区中世掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	主軸方向	付属遺構	時期	備考
B1SB101	2×2	6.13×6.13	2.73~3.34×1.90~4.21	N-12°-E	なし	15~16Cか	
B1SB102	1×2	3.00×4.60	3.00×2.29	N-76°-W	なし	15~16Cか	
B1SB103	1×1	1.92×2.31	1.95×2.35	N-81°-W	なし	15C	
B1SB104	1×2	3.36×4.20	3.36×1.94~2.27	N-9°-E	なし	15~16Cか	
B1SB105	1×2	3.03×3.75	3.03×1.82	N-13°-E	なし	15~16Cか	
B1SB106	1×2	2.40×4.35	2.40×1.89~2.40	N-78°-W	なし	15C	
B1SB107	1×2	3.02×2.50	1.26×3.02	N-14°-E	なし	15~16Cか	
B1SB108	1×4	3.72×8.17	3.71×1.29·2.89·1.94·2.06	N-78°-W	なし	15~16Cか	
B1SB109	1×3	1.77×8.12	1.78×2.52·3.09·2.52	N-80°-W	なし	15~16Cか	
B1SB110	1×2	2.14×4.93	2.14×2.37·2.57	N-4°-E	なし	15~16Cか	
B1SB111	2×2	4.98×5.85	2.43·2.55×2.68·3.14	N-76°-W	なし	15~16Cか	
B1SB112	2×2	5.5×7.65	2.5·2.9×3.83	N-79°-W	なし	15~16Cか	
B1SB113	2×2	3.72×3.75	1.85×1.73·2.08	N-8°-E	なし	15~16C	
B1SB114	1×2	1.15×3.10	1.15×1.25·1.86	N-10°-E	なし	15~16Cか	
B1SB115	1×1	2.20×2.42	2.20×2.42	N-81°-W	なし	中世	
B1SB116	1×2	2.57×4.68	2.60×2.46	N-78°-W	なし	中世	
B1SB117	1×2	2.89×5.09	2.89×2.55	N-14°-E	なし	中世	
B1SB118	1×1	2.64×3.42	2.64×3.42	N-73°-W	なし	15~16C	
B1SB119	1×2	2.00×4.20	2.00×2.10	N-5°-E	なし	中世	
B1SB120	1×1	2.48×3.02	2.48×3.02	N-6°-E	なし	中世	
B1SB121	1×2	2.56×4.0	2.56×2.00	N-77°-W	なし	中世	
B1SB122	1×2	1.70×4.76	1.70×2.38	N-85°-W	なし	15C	
B1SB123	2×2	3.40×3.60	1.70×1.80	N-1°-E	なし	15~16C	
B1SB124	1×2	3.04×3.52	3.04×1.76	N-85°-W	なし	中世	
B1SB125	1×1	2.10×2.10	2.10×2.10	N-6°-E	なし	中世	
B1SB126	1×3	1.94×4.86	1.94×1.42·1.84	N-82°-W	なし	中世	
B1SB127	1×1	2.00×2.66	2.00×2.66	N-5°-E	なし	中世	
B1SB128	1×2	1.88×3.50	1.88×1.75	N-83°-W	なし	中世	
B1SB129	2×2	3.51×3.88	1.71·1.87×1.83·2.05	N-10°-E	なし	15~16C	
B1SB130	1×1	1.92×2.14	1.92×2.14	N-2°-E	なし	中世	
B1SB131	1×2	1.80×3.53	1.80×1.76·2.02	N-81°-W	なし	15C	
B1SB132	1×2	3.13×4.15	3.13×2.08	N-80°-W	なし	中世	
BISA101		7.37	0.97	N-81°-W	なし	中世	
BISA102		7.41	0.97~1.79	N-77°-W	なし	15C	
BISA103		6.97	0.88~1.77	N-77°-W	なし	15~16C	

B1SB102 (B1-15図)

時期：15C~16Cか 棟方向：N-76°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間3.0m×桁行4.6m 面積13.8㎡

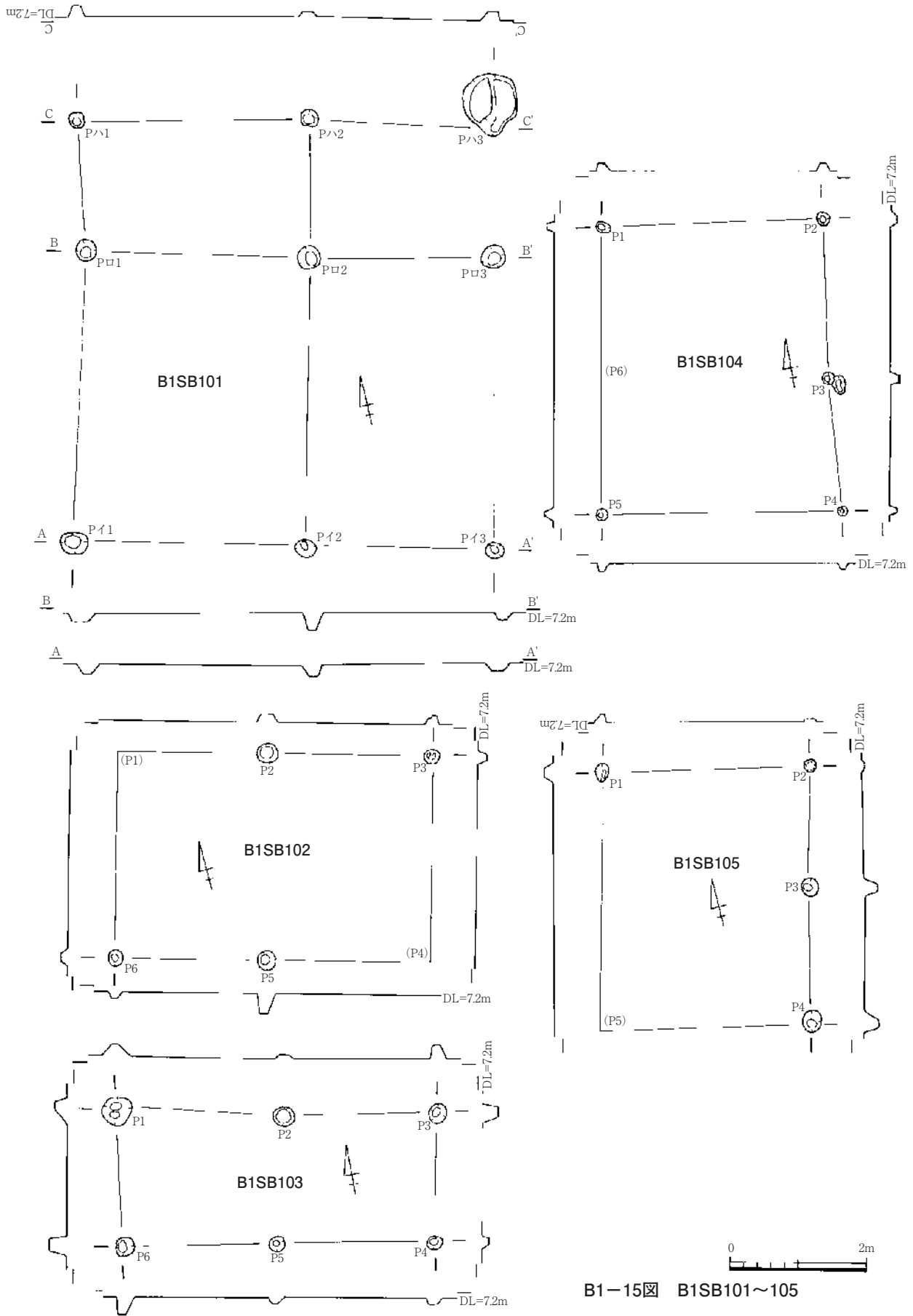
柱間寸法：梁間3.0m×桁行2.29m

柱穴数：6 柱穴形：円形

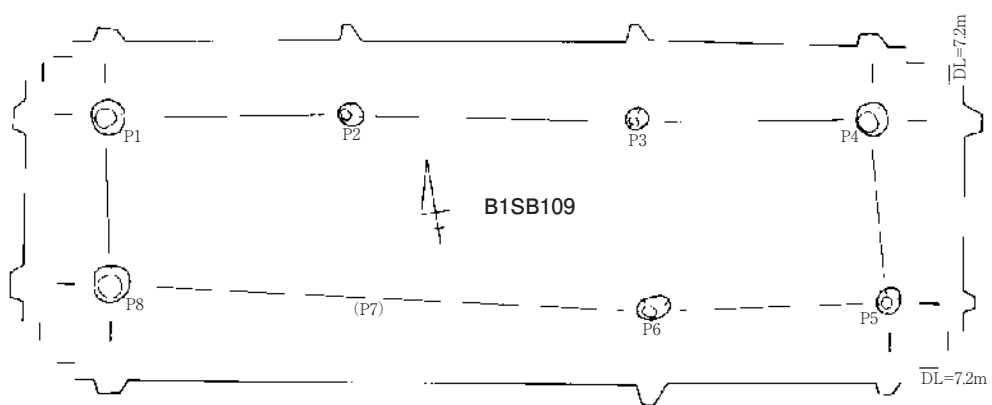
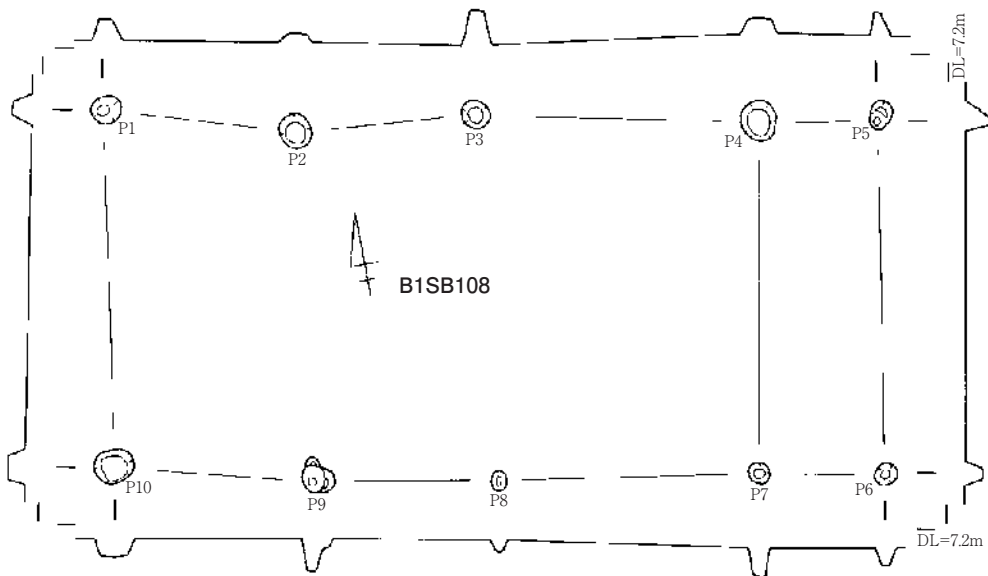
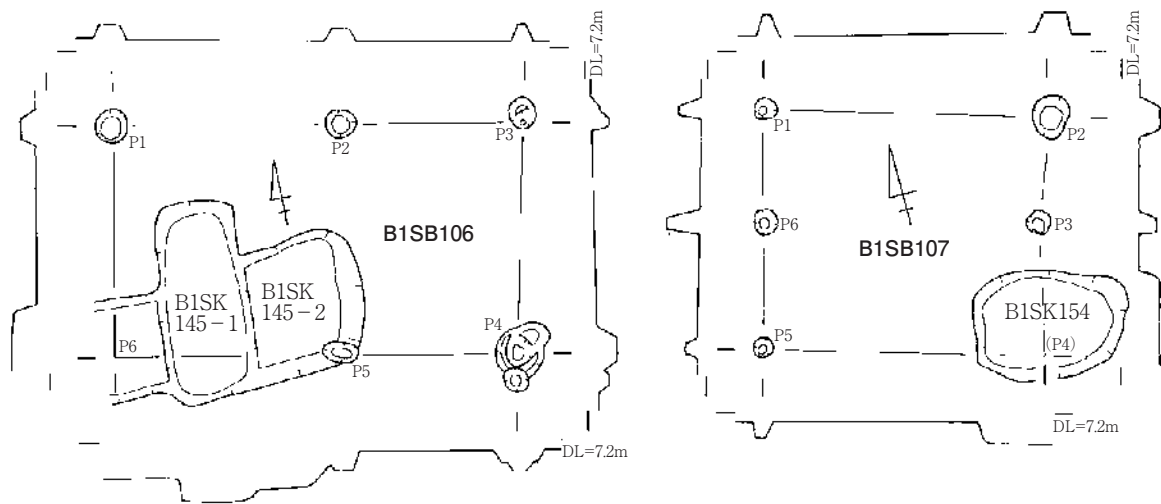
性格：— 付属施設：—

出土遺物：無

所見：調査区中央部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡である。B1SB102は屋敷地Aの北東部分にあたり、北側にB1SB101、南にB1SB103が約2.4mの距離を空けて近接する。又、各々の軸方向とも区画溝のそれにほぼ一致している。中世のSK137と立地点が重なり前後するが直接的な遺構の切り合いはなく、前後関係は不明である。柱穴は4基を検出し、P1・P4は未検出である。柱穴規模は径



B1-15 図 B1SB101~105



B1-16図 B1SB106~109

20～30cm、深さ10～29cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は皆無であるが、軸方向及び位置関係より2重の区画溝に囲まれた屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB103 (B1-15図)

時期；15C **棟方向**；N-81°-W

規模；梁間1間×桁行1間 梁間1.92m×桁行2.31m 面積4.23㎡

柱間寸法；梁間1.95m 桁行2.35m 梁間1.95m 桁行2.27m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；土師質土器（口縁部-皿1）

所見；調査区中央部に位置する東西棟1×1間の掘立柱建物跡である。B1SB102は屋敷地Aの北東部分にあたり、北側にB1SB102が南側にB1SB104が近接する。又、軸方向は区画溝のそれにほぼ一致している。柱穴規模は径22～44cm、深さ6～26cmを測る。埋土はP3が黄灰色粘土質シルト、他は何れも暗灰色粘土質シルトである。

遺物はP3（P1215）から手捏ね成形による京都系土師質土器小皿口縁部片1点が出土している。出土遺物は僅少であるが、軸方向及び位置関係からみて、本SBは屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB104 (B1-15図)

時期；15C～16Cか **棟方向**；N-9°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間3.36m×桁行4.20m 面積14.11㎡

柱間寸法；梁間3.36m 桁行1.94～2.27m

柱穴数；6 **柱穴形**；円

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；無

所見；調査区中央部に位置する南北棟1×2間の掘立柱建物跡である。B1SB104は屋敷地Aの東部分にあたり、北側にB1SB103、南側にB1SB105が近接する。又、軸方向も区画溝のそれにほぼ一致している。柱穴は5基を検出し、P6は未検出である。柱穴規模は径14～20cm、深さ12～14cmを測る。埋土はP5が黄灰色粘土質シルト、他は何れも暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は皆無であるが、軸方向及び位置関係より2重の区画溝に囲まれた屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB105 (B1-15図)

時期；15C～16Cか **棟方向**；N-13°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間3.03m×桁行3.75m 面積11.36㎡

柱間寸法；梁間3.03m 桁行1.82

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格：— **付属施設：**

出土遺物：無

所見：調査区南部に位置する南北棟1×2間の掘立柱建物跡である。B1SB105は屋敷地Aの東部分にあたり、北側にB1SB104が近接する。又、軸方向も区画溝のそれにほぼ一致している。柱穴は4基を検出し、P5・P6は未検出である。柱穴規模は径14～32cm、深さ4～22cmを測る。埋土は何れも暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は皆無であるが、軸方向及び位置関係より2重の区画溝に囲まれた屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB106 (B1-16図)

時期：15C **棟方向：**N-78°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.40m×桁行4.35m 面積10.44㎡

柱間寸法：梁間2.4m 桁行1.89～2.4m

柱穴数：6 **柱穴形：**円形・楕円形

性格：— **付属施設：**—

出土遺物：瓦質土器（体部-鍋1）、須恵器（体部-播鉢1）

所見：調査区南部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡である。B1SB105は屋敷地Aの東部分にあたり、軸方向も区画溝のそれにほぼ一致している。東西棟の大型建物B1SB108と前後して立地していたとみられるが、柱穴の直接的な切り合いがないため両者の前後関係は明らかでない。又、P5・P6が円礫の集中廃棄を伴う中世末のB1SK145-1・B1SK145-2に切られている。柱穴規模は径22～70cm、深さ14～22cmを測る。埋土はP1が黄灰色粘土質シルト、P2～P4は暗灰色粘土質シルトである。

出土遺物はP4（P1061）から瓦質鍋の体部片1点、須恵器質の備前播鉢体部片1点が出土している。出土遺物は少量で時期の特定は困難であるが、切り合い関係、軸方向及び位置関係からみて、屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB107 (B1-16図)

時期：15C～16Cか **棟方向：**N-76°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間3.02m×桁行2.50m 面積7.55㎡

柱間寸法：梁間3.02m 桁行1.26m

柱穴数：6 **柱穴形：**円形・楕円形

性格：— **付属施設：**—

出土遺物：無

所見：調査区南部に位置する南北棟1×2間の掘立柱建物跡である。B1SB107は屋敷地Aの東部分にあたり、軸方向も区画溝のそれにほぼ一致している。東西棟の大型建物B1SB108と前後して立地していたとみられるが、柱穴の直接的な切り合いがないため両者の前後関係は明らかでない。又、P4が中世のB1SK154に切られている。柱穴規模は径20～39cm、深さ12～34cmを測る。埋土は何れも暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は皆無であるが、B1SB407は切り合い関係、軸方向及び位置関

係からみて屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB108 (B1-16図)

時期；15C～16Cか **棟方向**；N-78°-W

規模；梁間1間×桁行4間 梁間3.72m×桁行8.17m 面積11.89㎡

柱間寸法；梁間3.71m 桁行1.29m・2.89m・1.94m・2.06m

柱穴数；10 **柱穴形**；

性格；— **付属施設**；円形

出土遺物；無

所見；調査区南部に位置する東西棟1×4間の大型の掘立柱建物跡である。中間寸法は均等でなく、東端の1間が特に狭いことから東側に庇を伴う建物であった可能性がある。B1SB108は屋敷地Aの東部分にあたり、軸方向も区画溝のそれにはほぼ一致している。B1SB106・B1SB107と前後して立地していたとみられるが、柱穴の直接的な切り合いがないため両者の前後関係は明らかでない。柱穴規模は径14～40cm、深さ8～34cmを測る。埋土はP1が黒褐色粘土質シルト、P5が灰色粘土質シルト、その他は暗灰色粘土質シルトである。

出土遺物は皆無であるが、B1SB408は軸方向及び位置関係からみて2重の区画溝に囲まれた中世の屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB109 (B1-16図)

時期；15C～16Cか **棟方向**；N-80°-W

規模；梁間1間×桁行3間 梁間1.77m×桁行8.12m 面積14.4㎡

柱間寸法；梁間1.78m 桁行2.52m・3.09m・2.52m

柱穴数；8 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；土師質土器（底部-Ⅲ1）

所見；調査区南西部に位置する東西棟1×3間の掘立柱建物跡である。B1SB109は屋敷地Aの中央部分にあたりと考えられ、軸方向も区画溝のそれにはほぼ一致している。B1SB110と前後して立地していたとみられるが、柱穴の直接的な切り合いがないため両者の前後関係は明らかでない。柱穴は7基を検出しており、P7が未検出である。柱穴規模は径24～36cm、深さ12～16cmを測る。埋土はP3が黒褐色粘土質シルト、その他は暗灰色粘土質シルトである。

遺物はP1（P1105）から土師質土器皿の底部1点が出土している。出土遺物は少量で時期の特定は困難であるが、切り合い関係、軸方向及び位置関係からみて、B1SB109は屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB110 (B1-17図)

時期；15C～16Cか **棟方向**；N-4°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.14m×桁行4.93m 面積10.55㎡

柱間寸法；梁間2.14m 桁行2.37～2.57m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形・楕円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器混入のみ

所見；調査区南西部に位置する南北棟1×2間の掘立柱建物跡である。B1SB109と前後して立地していたとみられるが、柱穴の直接的な切り合いがないため両者の前後関係は明らかでない。柱穴はP3が未検出である。柱穴規模は径16～34cm、深さ6～30cmを測る。埋土はP2が黒褐色粘土質シルト、P5が灰色粘土質シルト、P1・P4・P6は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器混入のみであり時期の特定は困難であるが、切り合い関係、軸方向及び位置関係からみて、屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB111 (B1-18図)

時期；15C～16Cか **棟方向**；N-76°-W

規模；梁間2間×桁行2間 梁間4.98m×桁行5.85m 面積29.13㎡

柱間寸法；梁間2.43～2.55m 桁行2.68～3.14m

柱穴数；9 **柱穴形**；円形・楕円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器混入のみ

所見；調査区南部、屋敷地Aの東部分に位置する東西棟2×2間の掘立柱建物跡である。B1SB112と前後して立地していたとみられるが、両者の前後関係は明らかでない。その他の遺構ではPイ1とPイ2が埋土から中世とみられるピットを切っている。柱穴はPロ3が未検出である。柱穴は円形又は楕円形を呈し、柱穴規模は径20～46cm、深さ6～34cmを測る。埋土はPハ1が黒褐色粘土質シルト、その他は何れも暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器片の混入のみで時期の特定は困難であるが、軸方向及び位置関係からみて、SB111は屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB112 (B1-18図)

時期；15C～16Cか **棟方向**；N-79°-W

規模；梁間2間×桁行2間 梁間5.5m×桁行7.65m 面積42.08㎡

柱間寸法；梁間2.5～2.9m 桁行3.83m

柱穴数；9 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；無

所見；調査区南部、屋敷地Aの東部分に位置する東西棟2×2間の掘立柱建物跡である。B1SB111と前後して立地していたとみられるが、柱穴の直接的な切り合いがないため両者の前後関係は明らかでない。柱穴はPハ3が未検出である。柱穴規模は径16～34cm、深さ10～38cmを測る。埋土は暗灰色

粘土質シルトである。出土遺物はないが、軸方向及び位置関係からみて、B1SB112は屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB113 (B1-17図)

時期；15C～16C **棟方向**；N-8°-E

規模；梁間2間×桁行2間 梁間3.72m×桁行3.75m 面積13.95㎡

柱間寸法；梁間1.85m 桁行1.73～2.08m

柱穴数；8 **柱穴形**；円形・楕円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；土師質土器（細片-2）

所見；調査区南部、屋敷地Aの東部分に位置する南北棟2×2間の掘立柱建物跡である。P1・P2が中世末から近世初頭のB1SK189に、P8が時期不明のピットに切られている。

柱穴はP3が未検出である。柱穴規模は径28～40cm、深さ14～44cmを測る。埋土はP4が黒褐色粘土質シルト、P5が黄灰色粘土質シルト、P1・P2・P6～P8が暗灰色粘土質シルトである。遺物はP6（P1154）から土師質土器細片2点が出土している。出土遺物は僅少であるが、切り合い関係、軸方向及び位置関係からみて、B1SB113は屋敷地Aに伴う建物であった可能性が高い。

B1SB114 (B1-17図)

時期；15C～16Cか **棟方向**；N-10°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間1.15m×桁行3.10m 面積3.57㎡

柱間寸法；梁間1.15m 桁行1.25～1.86m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；無

所見；調査区南部に位置する南北棟1×2間の小型の掘立柱建物跡である。本SBは屋敷地Aの外溝と内溝に挟まれた地点に立地しており、軸方向も一致していることから、屋敷地Aに伴う付属施設であった可能性が高い。柱穴は4基を検出しており、P3・P4は未検出である。柱穴規模は径26～32cm、深さ20～26cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

B1SB115 (B1-17図)

時期；中世 **棟方向**；N-81°-W

規模；梁間1間×桁行1間 梁間2.20m×桁行2.42m 面積5.32㎡

柱間寸法；梁間2.2m 桁行2.42m

柱穴数；4 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；無

所見：調査区北部に位置する東西棟1×1間の小型規模の掘立柱建物跡である。本SBは中世の区画溝B1SD110・112によって囲まれた中世屋敷地Bの敷地内に立地し、南にB1SB116が近接する。P1が同質の埋土をもつピットと切り合うが、前後関係は明らかでない。柱穴規模は径20～30cm、深さ6～34cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

B1SB116 (B1-17図)

時期：中世 **棟方向**：N-78°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.57m×桁行4.68m 面積12.03㎡

柱間寸法：梁間2.60m 桁行2.46m

柱穴数：6 **柱穴形**：円形

性格：— **付属施設**：—

出土遺物：無

所見：調査区北部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡である。本SBは屋敷地Bの敷地内に立地し、北にB1SB115が近接する。柱穴は4基を確認しており、P1・P2は未検出である。柱穴規模は径18～21cm、深さ10～16cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

B1SB117 (B1-19図)

時期：中世 **棟方向**：N-14°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.89m×桁行5.09m 面積14.71㎡

柱間寸法：梁間2.89m 桁行2.55m

柱穴数：6 **柱穴形**：円形

性格：— **付属施設**：—

出土遺物：弥生土器混入のみ

所見：調査区に位置する南北棟1×2間の掘立柱建物跡である。本SBは屋敷地Bの敷地内に立地し、東にB1SB118が近接する。柱穴は4基を確認しており、P2・P3が未検出である。柱穴規模は径22～36cm、深さ10～19cmを測る。埋土はP4が暗褐色粘土質シルト、P1・P5・P6が暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器細片のみである。

B1SB118 (B1-17・22図)

時期：15C～16C **棟方向**：N-73°-W

規模：梁間1間×桁行1間 梁間2.64m×桁行3.42m 面積9.03㎡

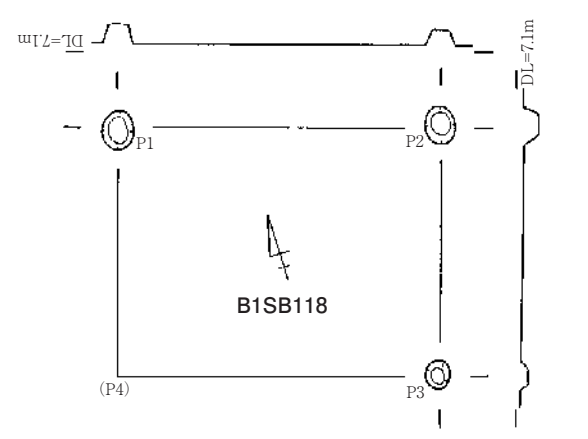
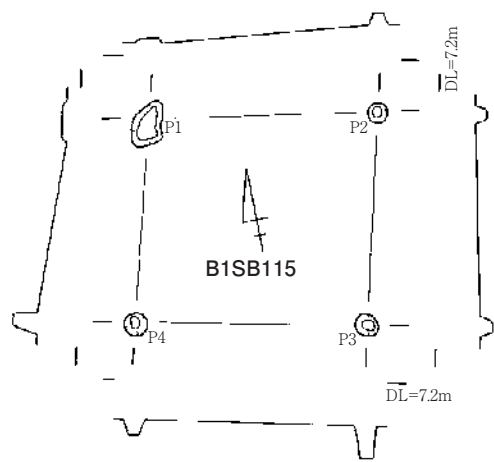
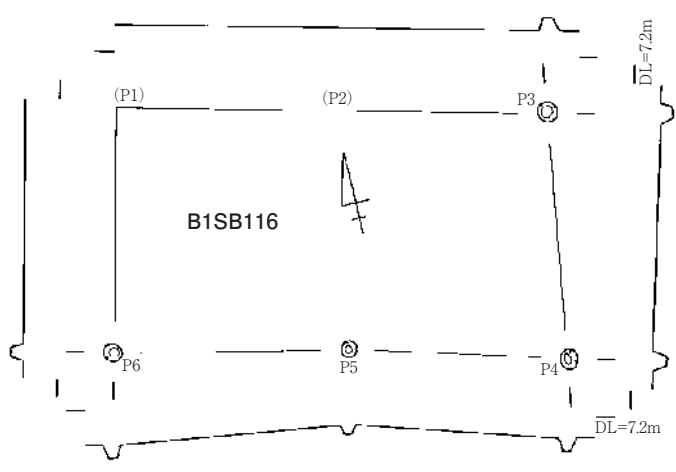
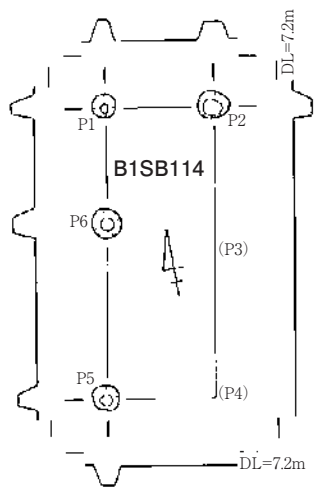
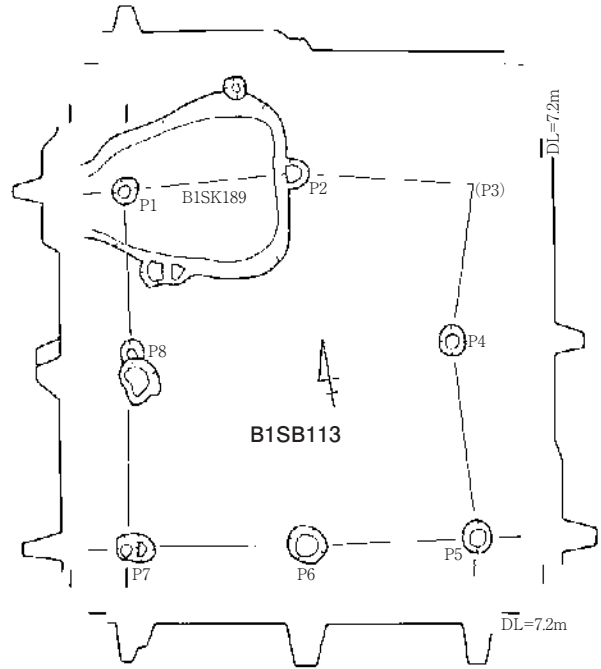
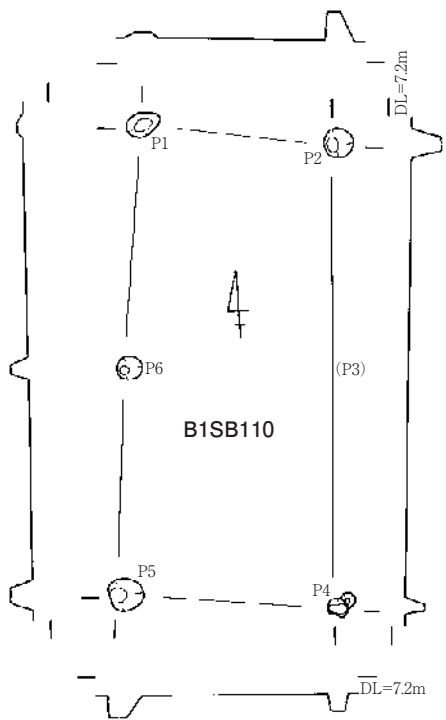
柱間寸法：梁間2.64m 桁行3.42m

柱穴数：4 **柱穴形**：円形

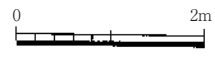
性格：— **付属施設**：—

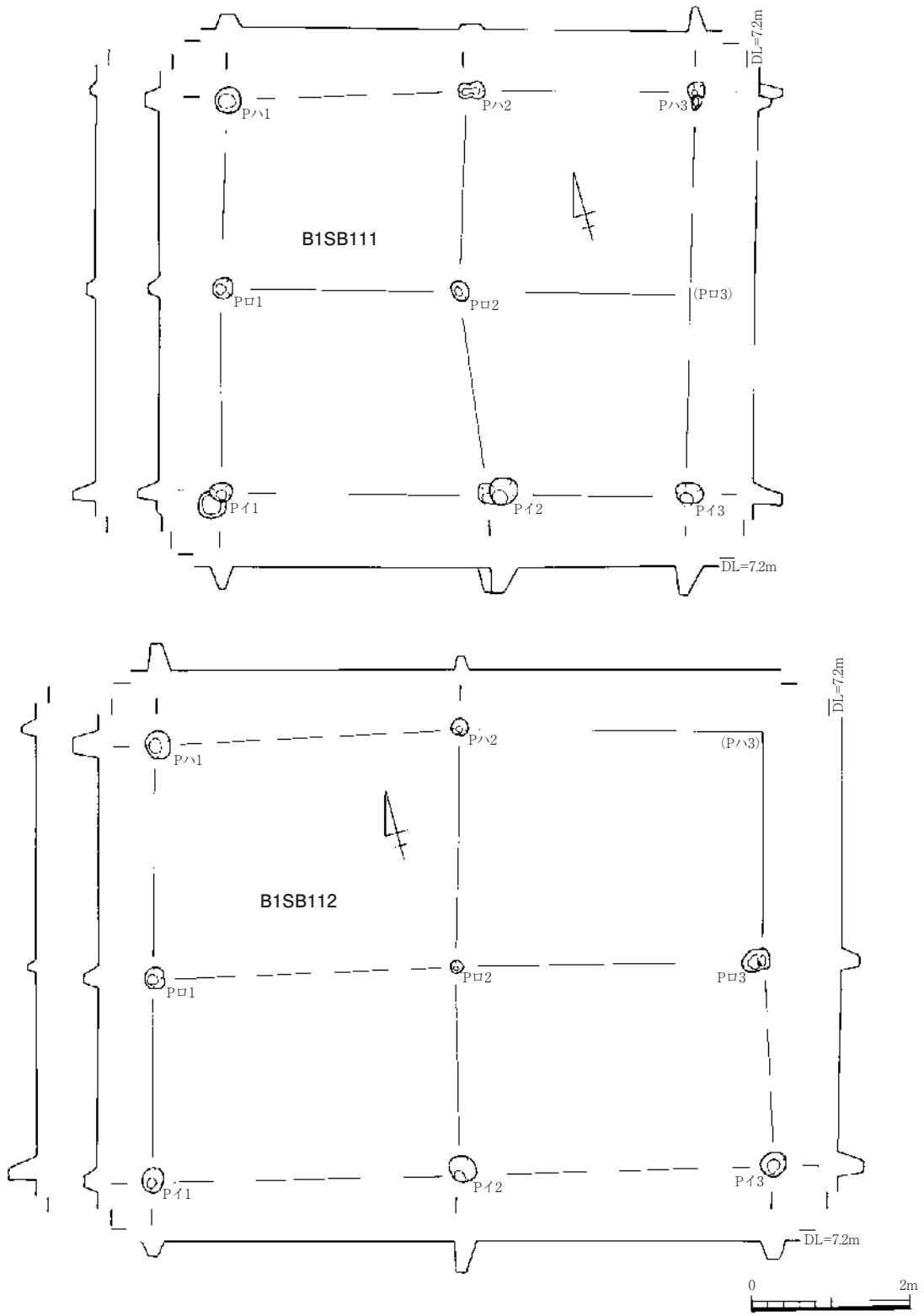
出土遺物：土師質土器（口縁部-杯1、底部-杯1）

所見：調査区に位置する東西棟1×1間の小型規模の掘立柱建物跡である。本SBは屋敷地Bの敷地内

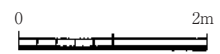
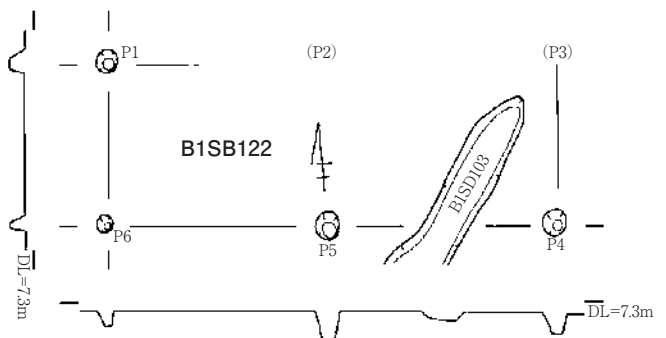
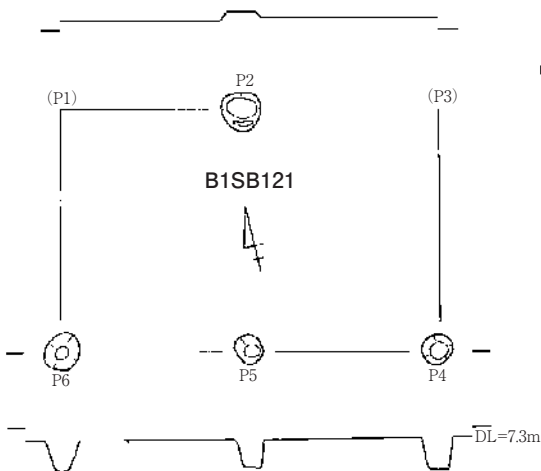
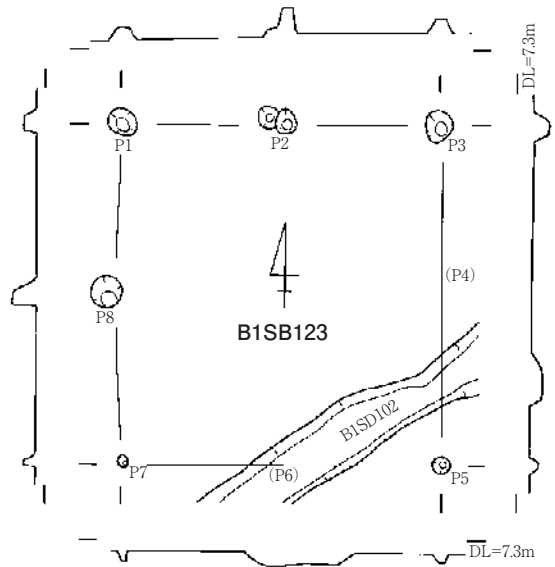
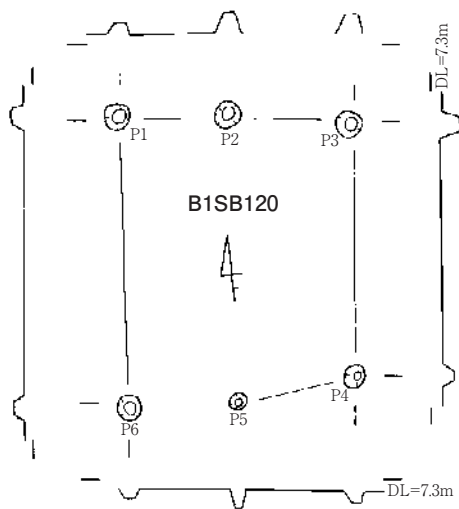
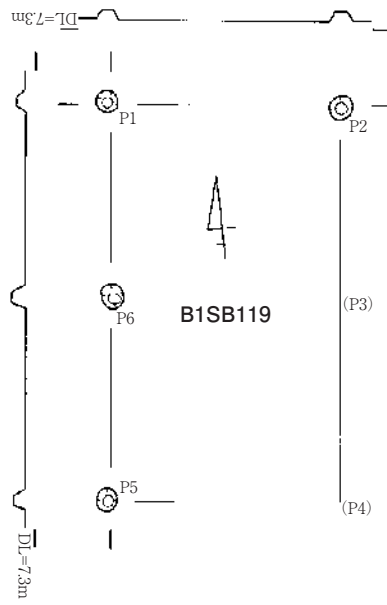
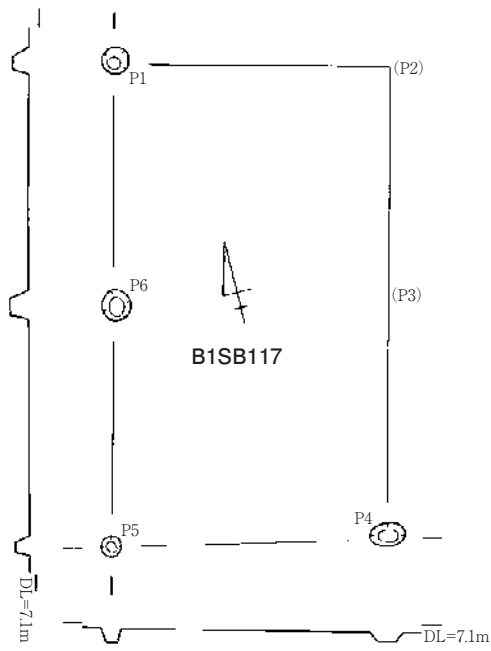


B1-17 図 B1SB110・113~116・118





B1-18 図 B1SB111・112



B1-19 图 B1SB117 · 119~123

に立地し、西にB1SB117が近接する。柱穴は3基を確認しており、P4は未検出である。柱穴規模は径30～42cm、深さ9～20cmを測る。埋土は何れも暗灰色粘土質シルトで、P1埋土中には炭化物が多く含まれる。出土遺物はP1 (P1241) から在地系の土師質土器杯口縁部と底部各1点 (1・2) が出土している。

B1SB119 (B1-19図)

時期；中世 棟方向；N-5°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.00m×桁行4.20m 面積840㎡

柱間寸法；梁間2.00m 桁行2.10m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；無

所見；調査区北東に位置する南北棟1×2間の掘立柱建物跡である。本SBは中世屋敷地Bの敷地内に立地する。又、P2がB1SB120のP4と切り合うが、前後関係は不明である。柱穴は4基を確認しており、P3・P4は未検出である。柱穴規模は径24～26cm、深さ10～26cmを測る。埋土はP2が黄灰色粘土質シルト、その他は暗灰色粘土質シルトである。

B1SB120 (B1-19図)

時期；中世 棟方向；N-84°-E

規模；梁間1間×桁行1間 梁間2.48m×桁行3.02m 面積7.49㎡

柱間寸法；梁間1.14～1.34m 桁行2.70～3.02m

柱穴数；4 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；無

所見；調査区北東部に位置する1×1間の小型規模の掘立柱建物跡である。本SBは中世屋敷地Bの敷地内に立地する。又、P3がB1SB120のP4と切り合うが、前後関係は不明である。柱穴規模は径17～29cm、深さ10～28cmを測る。埋土はP3・P4・P6が黄灰色粘土質シルト、P1・P2・P5は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

B1SB121 (B1-19図)

時期；中世 棟方向；N-77°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.56m×桁行4.0m 面積10.24㎡

柱間寸法；梁間2.56m 桁行2.00m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；無

所見：調査区北東部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡で、屋敷地Bの敷地内に立地している。柱穴は4基を検出しており、P1・P3が未検出である。柱穴規模は径32～42cm、深さ9～34cmを測る。埋土は何れも暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

B1SB122 (B1-19・22図)

時期：15C 棟方向：N-85°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間1.70m×桁行4.76m 面積8.09㎡

柱間寸法：梁間1.70m 桁行2.38m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：土師質土器（口縁部-皿1、細片-1）

所見：調査区東部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡である。中世末の溝B1SD103との直接的な遺構の切り合いは認められないが、出土遺物からみてB1SB122が溝に先行するものと考えられる。柱穴は4基を検出し、P2・P3は未検出である。柱穴規模は径17～28cm、深さ16～17cmを測る。埋土はP6が黄灰色粘土質シルト、P1・P4・P5が暗灰色粘土質シルトである。遺物はP4（P1039）から土師質土器杯又は皿の口縁部1点と底部1点。P5（P1043）から、京都系土師質土器小皿1点（3）と土師質土器細片1点が出土している。

B1SB123 (B1-19図)

時期：15C～16C 棟方向：N-1°-E

規模：梁間2間×桁行2間 梁間3.40m×桁行3.60m 面積12.24㎡

柱間寸法：梁間1.70m 桁行1.80m

柱穴数：8 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：土師質土器（底部-杯1）

所見：調査区東部に位置する2×2間の掘立柱建物跡である。切り合い関係ではP6が中世末の溝B1SD102に切られている。柱穴規模は径12～30cm、深さ8～31cmを測る。埋土はP7・8が黄灰色粘土質シルト、その他は暗灰色粘土質シルトである。遺物はP1（P1036）から在地系の土師質器杯底部1点が出土している。

B1SB124 (B1-20図)

時期：中世 棟方向：N-85°-W

規模：梁間1間×桁行2間 梁間3.04m×桁行3.52m 面積10.70㎡

柱間寸法：梁間3.04m 桁行1.76

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：無

所見：調査区東部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡である。切り合い関係ではP4が中世末の溝B1SD108に切られている。柱穴は4基を確認し、P4・P5が未検出である。柱穴規模は径29～39cm、深さ14～30cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

B1SB125 (B1-20図)

時期：中世 **棟方向：**N-6°-E

規模：梁間1間×桁行1間 梁間2.10m×桁行2.10m 面積4.41㎡

柱間寸法：梁間2.10m 桁行2.10m

柱穴数：4 **柱穴形：**円形

性格：— **付属施設：**—

出土遺物：弥生土器混入のみ

所見：調査区東部に位置する1×1間の小型規模の掘立柱建物跡である。柱穴規模は径18～36cm、深さ15～34cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器細片の混入のみである。

B1SB126 (B1-20図)

時期：中世 **棟方向：**N-82°-W

規模：梁間1間×桁行3間 梁間1.94m×桁行4.86m 面積9.43㎡

柱間寸法：梁間1.94m 桁行1.42～1.84m

柱穴数：8 **柱穴形：**円形

性格：— **付属施設：**—

出土遺物：弥生土器混入のみ

所見：調査区東部に位置する東西棟1×3間の掘立柱建物跡である。切り合い関係ではP2・P8が中世末の溝B1SD102に切られている。柱穴は6基を検出しており、P6・P8が未検出である。柱穴規模は径27～32cm、深さ17～43cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器細片の混入のみである

B1SB127 (B1-20図)

時期：中世 **棟方向：**N-5°-E

規模：梁間1間×桁行1間 梁間2.00m×桁行2.66m 面積5.32㎡

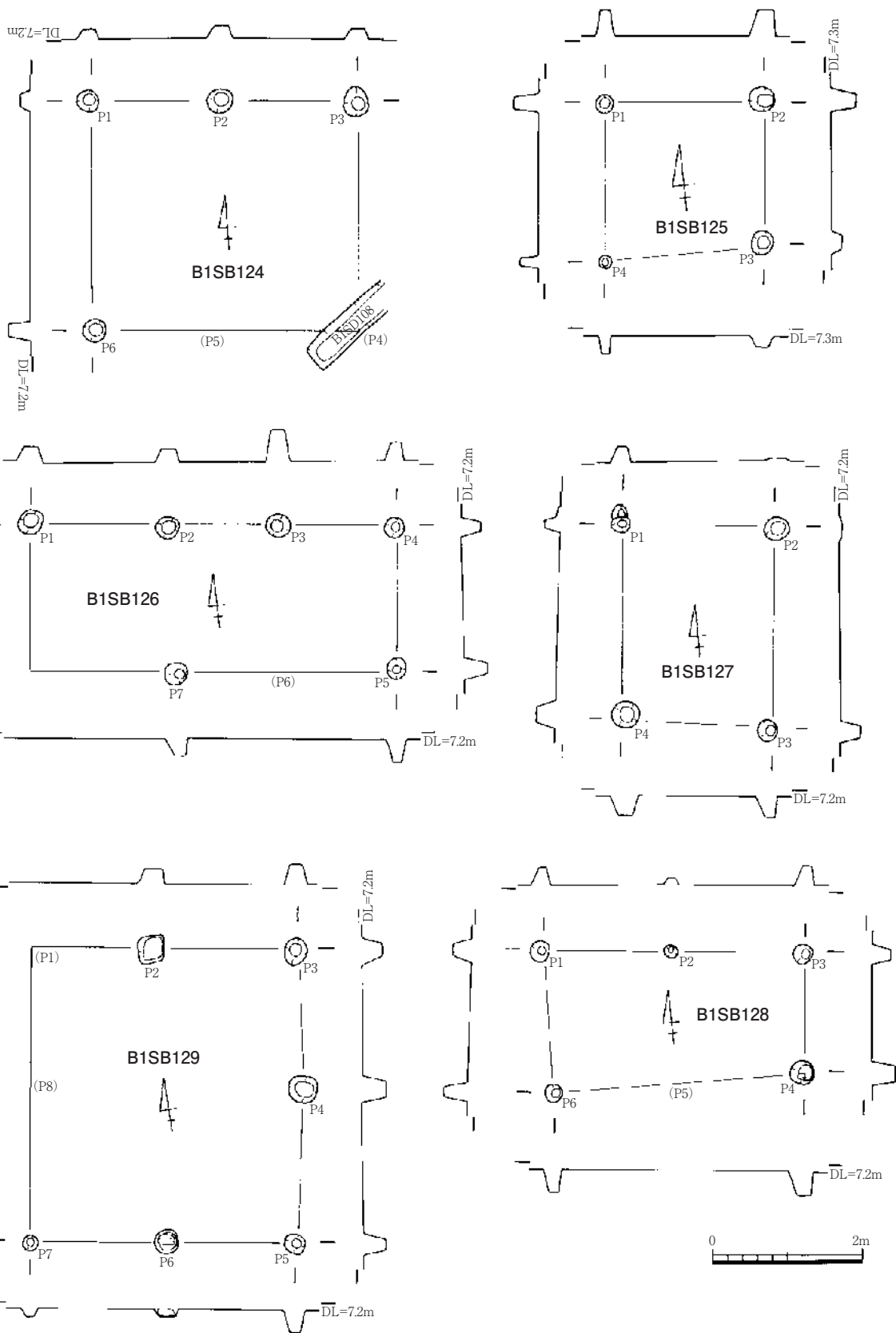
柱間寸法：梁間2.00m 桁行2.58～2.66m

柱穴数：4 **柱穴形：**円形

性格：— **付属施設：**—

出土遺物：弥生土器混入のみ

所見：調査区東部に位置する1×1間の小型規模の掘立柱建物跡である。本SBは位置関係からみてB1SB128と前後するとみられるが、直接的な遺構の切り合い関係はなく前後関係は不明である。柱



B1-20 図 B1SB124~129

穴規模は径27～38cm、深さ26～32cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器細片の混入のみである。

B1SB128 (B1-20図)

時期；中世 棟方向；N-83°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間1.88m×桁行3.50m 面積6.58㎡

柱間寸法；梁間1.88m 桁行1.75m

柱穴数；6 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；無

所見；調査区東部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡である。本SBは位置関係からみてB1SB127と前後するとみられるが、直接的な遺構の切り合い関係はなく前後関係は不明である。

柱穴規模は径19～32cm、深さ9～32cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

B1SB129 (B1-20図)

時期；15C～16C 棟方向；N-10°-E

規模；梁間2間×桁行2間 梁間3.51m×桁行3.88m 面積13.62㎡

柱間寸法；梁間1.71～1.87m 桁行1.83～2.05m

柱穴数； 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；土師質土器（体部-茶釜1、細片-2）

所見；調査区東部に位置する南北棟2×2間の掘立柱建物跡である。柱穴規模は径21～39cm、深さ9～33cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトで、P6埋土内には大型の砂岩礫が入れられている。P1・P8は未検出である。出土遺物はP4（P1017）から土師質土器茶釜の体部片、P5（P1030）から土師質土器細片2点が出土している。

B1SB130 (B1-21図)

時期；中世 棟方向；N-2°-E

規模；梁間1間×桁行1間 梁間1.92m×桁行2.14m 面積4.11㎡

柱間寸法；梁間1.92m 桁行2.14m

柱穴数；4 柱穴形；円形

性格；— 付属施設；—

出土遺物；弥生土器混入のみ

所見；調査区東部に位置する1×1間の掘立柱建物跡である。切り合い関係ではP4が中世末から近世初頭のB1SK111に切られている。柱穴規模は径20～30cm、深さ20～32cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は弥生土器の混入のみである。

B1SB131 (B1-21図)

時期；15C **棟方向**；N-81°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間1.80m×桁行3.53m 面積6.35㎡

柱間寸法；梁間1.80m 桁行1.76～2.02m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；土師質土器（体部-杯2）、瓦質土器（体部-鍋1）、陶器（体部-甕1）

所見；調査区南東部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡である。切り合い関係ではP3が暗灰色粘土質シルトの埋土をもつ方形土坑を切っている。本SBは位置関係からみてB1SB132と前後するとみられるが、直接的な遺構の切り合い関係はなく前後関係は不明である。柱穴は5基を確認し、P1は未検出である。柱穴規模は径27～43cm、深さ31～44cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はP4（P1007）から常滑焼甕の体部片1点、瓦質土器鍋体部片1点、土師質土器杯体部片2点が出土している。

B1SB132 (B1-21図)

時期；中世 **棟方向**；N-80°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間3.13m×桁行4.15m 面積12.99㎡

柱間寸法；梁間3.13m 桁行2.08m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；無

所見；調査区南東部に位置する東西棟1×2間の掘立柱建物跡である。本SBは位置関係からみてB1SB132と前後するとみられるが、直接的な遺構の切り合い関係はなく前後関係は不明である。

柱穴は4基を確認しており、P5・P6は未検出である。柱穴規模は径22～26cm、深さ12～30cmを測る。埋土は暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。

B1SA101 (B1-21図)

時期；中世 **棟方向**；N-81°-W

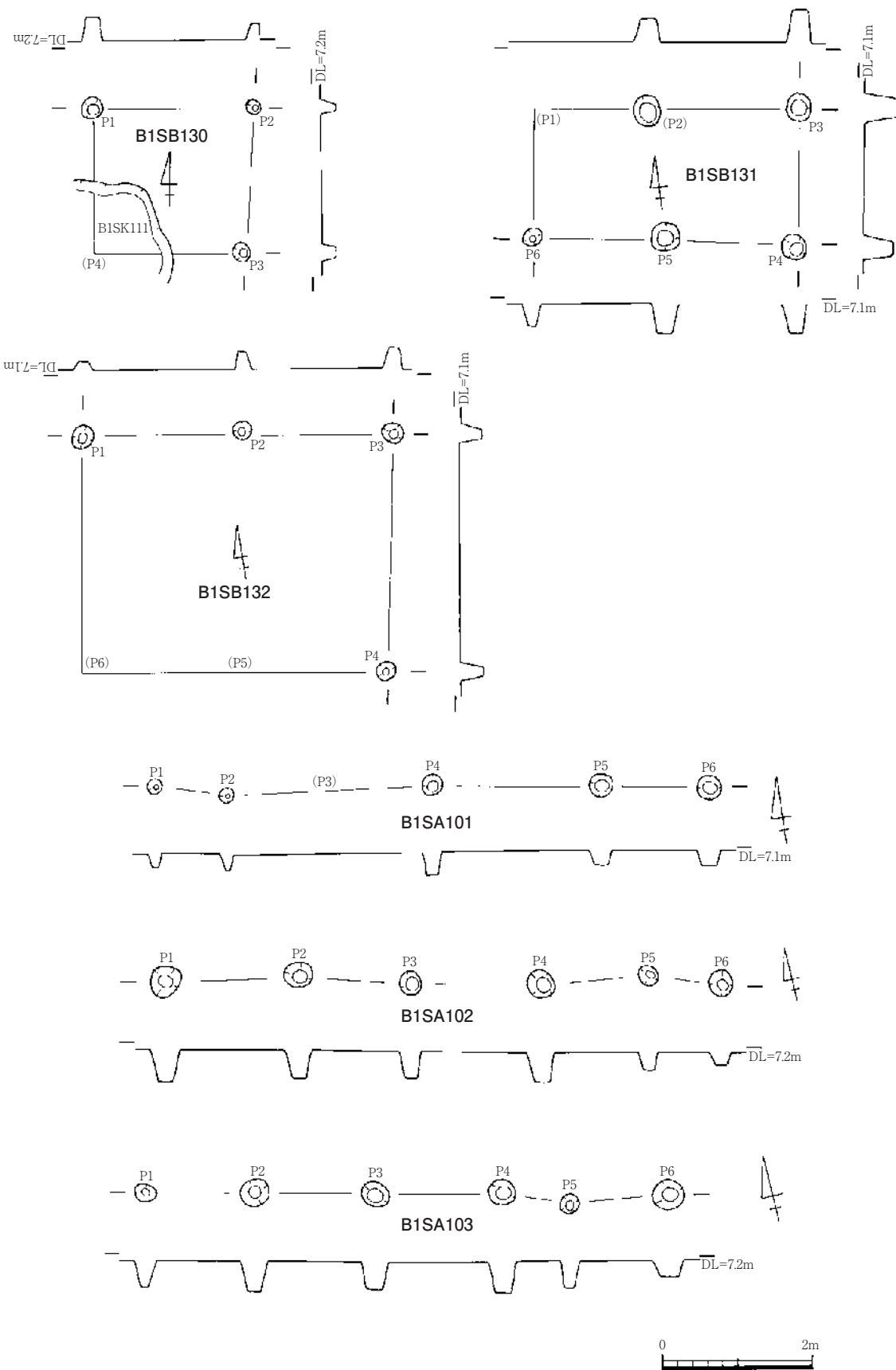
規模；確認長7.37m **柱間寸法**；0.97m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

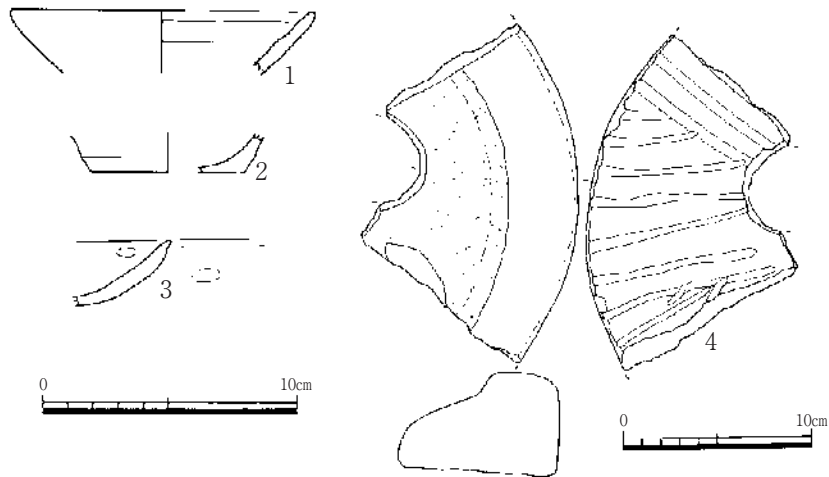
性格；— **付属施設**；—

出土遺物；無

所見；調査区南東に位置する柱穴列である。本遺構は区画溝B1SD101によって区画された屋敷地の南端部に立地している。建物跡になる可能性があるが、対向する柱穴が未検出であったここでは柱穴列として取り扱っている。柱穴規模は径19～32cm、深さ18～30cmを測る。埋土は何れも暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はない。



B1-21 図 B1SB130~132・B1SA101~103



B1-22図 B1SB118・122・B1SA103 (B1SB118:1・2, B1SB122:3, B1SA103:4)

B1列102 (B1-21図)

時期：15C 棟方向：N-77°-W

規模：確認長7.41m 柱間寸法：0.97~1.79m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：土師質土器（底部-杯1、体部-鍋1、細片-1）

所見：調査区南東部に位置する柱穴列である。本SBはB1SD101によって区画された屋敷地の北端部に位置している。東西棟の建物跡になる可能性があるが、対向する柱穴が未検出のためここでは柱穴列として取り扱っている。B1列102は位置関係からみてB1列103と前後するとみられるが、直接的な遺構の切り合いはなく前後関係は不明である。柱穴規模は径26~43cm、深さ17~42cmを測る。埋土は何れも暗灰色粘土質シルトである。出土遺物はP2 (P1005) から播磨型鍋の体部片1点、土師器杯底部1点。P5 (P1003) から土師器細片1点が出土している。

B1SA103 (B1-21・22図)

時期：15C~16C 棟方向：N-77°-W

規模：確認長6.97m 柱間寸法：梁間0.88~1.77m

柱穴数：6 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：—

出土遺物：土師質土器（体部-鍋1）、石製品（石臼1）

所見：調査区南東部に位置する柱穴列である。本柱穴列はB1SD101によって区画された屋敷地の北端部に位置している。B1列103は位置関係からみてB1列102と前後するとみられるが、直接的な遺構

の切り合いはなく前後関係は不明である。柱穴規模は径30～42cm、深さ22～40cmを測る。埋土は何れも暗灰色粘土質シルトである。出土遺物は、P3 (B1P1002) から砂岩製石臼 (4)、P4 (B1P1008) から土師質土器鍋の体部片1点が出土している。

(2) 土坑

中世の土坑は27基を確認した。この他に、屋敷地Aの敷地内においては埋土に共通性を示し中世の可能性をもつ土坑が多数検出されているが、無遺物で時期の特定ができないものが殆どであった。出土遺物からみると、土坑は遺構廃絶時期を15Cから16Cの間における一群 (B1SK108・139・196他) と、16C末から17C初頭頃の屋敷地廃絶に伴ったとみられる廃棄土坑群 (B1SK110・111・120・145-1・145-2・148・149・160・161・189～192・195) に大きく分かれる。このうち後者については、大型規模で、埋土中に拳大から人頭大の円礫を多量に投げ入るもの (B1SK110・111・145-1・145-2・149・189～192) が多いなどの特徴がみられる。

B1-3表 B1区中世土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
B1SK108	不整形	U字状	1.15	1.00	1.05		灰褐色粘土質シルト	不明	15C	
B1SK110	楕円形	逆台形	1.98	1.74	26		灰褐色粘土質シルト	なし	16C末から17C前葉	円礫廃棄
B1SK111	楕円形	逆台形	1.90	1.80	24		灰褐色粘土質シルト	なし	17C前葉	円礫廃棄
B1SK120	楕円形	皿状	2.44	1.44	30	N-86°-E	灰黄褐色シルト	なし	17C初頭～前葉	
B1SK126	隅丸方形	箱形	1.12	0.85	8	N-88°-W	灰黄褐色シルト	なし	中世	
B1SK133	円形	U字状	0.78	0.76	46		灰黄褐色シルト	不明	中世	
B1SK134	楕円形	U字状	0.59	0.45	26		灰黄褐色シルト	なし	中世	
B1SK137	円形	皿状	0.80	0.72	19		灰黄褐色シルト	なし	中世	
B1SK139	長方形	皿状	2.84	1.18	23	N-10°-E	褐灰色粘土質シルト	なし	15C～16C前半	
B1SK140	長方形	皿状	2.00	0.90	8	N-2°-W	褐灰色粘土質シルト	なし	15C～16C	
B1SK145-1	長方形	箱形	2.14	0.94	48	N-7°-E	灰褐色粘土質シルト	B1SK145-2	15C～16C	円礫廃棄
B1SK145-2	隅丸方形	逆台形	残1.14	1.32	34	N-82°-E	灰褐色粘土質シルト	B1SK145-1	15C～16C	円礫廃棄
B1SK146	隅丸方形	皿状	2.04	1.65	20	N-2°-E	灰褐色粘土質シルト	B1SK190に切られる	15C～16C	
B1SK147	長方形	U字状	2.92	1.08	36	N-7°-E	灰褐色粘土質シルト	なし	15C～16C	
B1SK148	不整形	皿状	4.58	3.82	70		褐灰色シルト	B1SD106を切る。B1SK149に切られる。	16C末～17C初頭	砂礫多量
B1SK149	隅丸方形	皿状	4.40	2.70	30		暗灰色粘土質シルト	B1SK148を切る。	16C末～17C初頭	円礫廃棄
B1SK150	隅丸方形	箱形	1.68	1.10	32	N-76°-W	黒褐色粘土質シルト	なし	15C～16C	
B1SK154	楕円形	皿状	1.60	1.10	21	N-72°-W	灰褐色粘土質シルト	なし	中世	
B1SK160	隅丸方形	逆台形	2.00	1.50	33	N-24°-E	灰褐色粘土質シルト	B1SK190に切られる。	16C末～17C初頭	
B1SK161	長方形	箱形	1.28	0.70	16	N-70°-W	灰褐色粘土質シルト	なし	16C末～17C前葉	
B1SK165	楕円形	U字状	1.08	0.42	22	N-0°-E	灰黄褐色粘土質シルト	なし	中世	
B1SK189	不整形	箱形	2.18	1.98	24		灰黄褐色シルト	B1SK160を切る。	16C末～17C初頭か	円礫廃棄
B1SK190	長方形	箱形	3.45	1.60	20	N-16°-E	灰褐色砂質シルト	B1SK146を切る。	16C末～17C初頭か	円礫廃棄
B1SK191	円形	皿状	2.30	2.04	18		暗灰色粘土質シルト	なし	16C末～17C初頭か	円礫廃棄
B1SK192	隅丸方形	箱形	5.10	2.06	18	N-3°-E	灰黄褐色シルト	B1SK194・SK193	16C末～17C初頭か	円礫廃棄
B1SK195	円形	逆台形	0.70	0.68	6		褐灰色粘土質シルト	なし	16C末～17C前葉	
B1SK196	隅丸方形	箱形	1.52	1.20	22	N-19°-E	灰褐色粘土質シルト	不明	15C	

B1SK110 (B1-23図)

時期；16C末～17C前葉か **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

規模；1.98×1.74m 深さ0.26m **断面形態**；逆台形

埋土；灰褐色粘土質シルト（円礫を多量に含む）

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；弥生土器細片のみ

所見；調査区東部に位置する楕円形土坑で、北側に中世の土坑B1SK111が隣接する。床面は平坦で、床面から埋土中位にかけて拳大から人頭大の円礫が多量に廃棄されている。出土遺物は弥生土器細片のみであり時期の詳細は不明であるが、埋土と円礫廃棄状況が隣接するSK111に共通することから、時期を同じくして中世末から近世前葉頃に遺構廃絶された可能性が高い。

B1SK111 (B1-23・24図)

時期；17C前葉 **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

規模；1.90×1.80m 深さ0.24m **断面形態**；逆台形

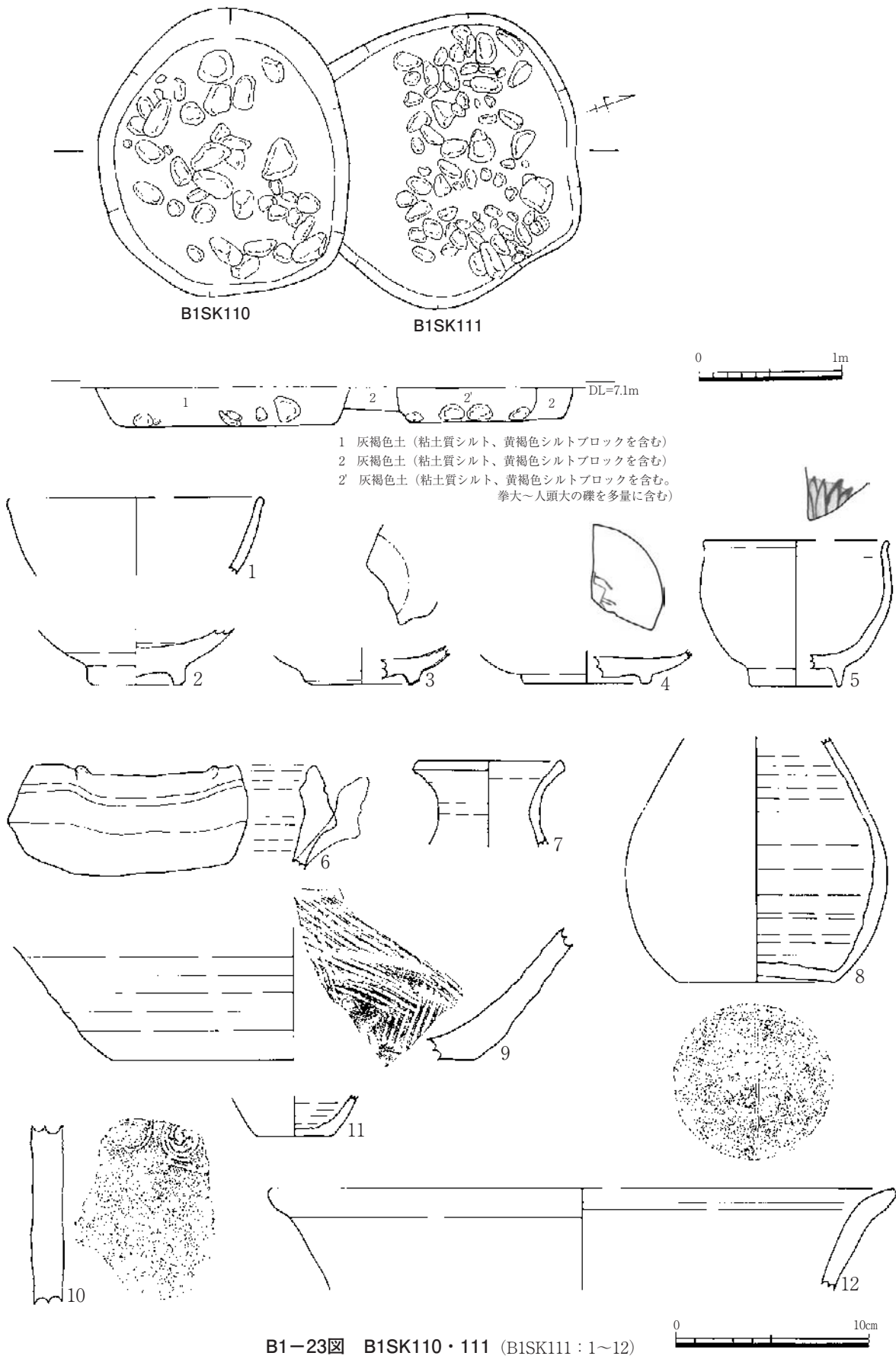
埋土；灰褐色粘土質シルト（円礫を多量に含む）

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；青磁（口縁部－碗1、底部－碗2・皿1、体部－香炉1）、磁器染付（口縁部～底部－碗、体部－碗1）、陶器（口縁部－播鉢1・壺1、底部－播鉢1・壺1、体部片－甕1）、土師質土器（口縁部－杯1、鍋4、底部－杯1、体部－杯15・鍋14）、瓦片1

所見；調査区東部に位置する楕円形土坑で、南側に中世の土坑B1SK110が隣接する。床面は平坦で床から埋土中層にかけて拳大から人頭大の円礫が多量に廃棄されている。

出土遺物は、龍泉窯系の青磁碗と皿（3）、龍泉窯系の青磁香炉、福建・広東系青磁碗（1・2）、中国産の青白磁皿（4）、華南産の褐釉壺（7）、肥前産の染付碗（5）、瀬戸美濃産の天目形碗、備前焼播鉢（6・9）・壺（8）・甕、外面に巴文を刻印する焼締陶器火鉢（10）、在地系の土師質土器杯（11）、在地系の土師質土器鍋（12～14）、関西系鍋である。図示したものは1～15である。このうち福建・広東系の青磁碗（1・2）は酸化焼成気味で胎土はにぶい橙色、釉は黄橙色を呈するもので、内底の釉を円形に拭き取っている。初期伊万里碗（5）は見込に菊花文を描き、畳付に粗い砂が付着するもので、肥前1630～40年代に比定される。これらの廃棄遺物には16世紀代から17世紀前葉までの年代幅のものが認められるが、（5）の出土等からみてB1SK411の遺構廃絶時期は17世紀前葉頃に位置付けることができる。



B1-23図 B1SK110・111 (B1SK111 : 1~12)

B1SK120 (B1-24図)

時期；17C初頭～前葉 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-86°-E

規模；2.44×1.44m 深さ0.30m **断面形態**；皿状

埋土；灰黄褐色シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁部-皿1、体部-甕1）、土師質土器（底部-杯4、体部-鍋4）、瓦質土器（体部-鍋2）

所見；調査区中央部に位置する楕円形土坑である。床面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は唐津系灰釉陶器小皿、備前焼胴部細片、在地系の土師質土器杯、土師質土器鍋体部片、瓦質鍋体部片である。このうち、在地系の土師質土器杯は外底に回転糸切り痕を残すもので15世紀代に比定される。廃棄遺物には15世紀代から17世紀初頭頃までの年代幅のものが認められるが、唐津系灰釉陶器の出土等からみて、遺構廃絶時期は17世紀初頭から前葉頃に位置付けることができる。

B1SK126 (B1-24図)

時期；中世か **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-88°-W

規模；1.12×0.85m 深さ0.08m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；土師質土器（細片-1）

所見；調査区南部に位置する土坑である。床面はほぼ平坦で壁は直立気味に立ち上がる。出土遺物は土師質土器細片1点のみである。

B1SK133 (B1-24図)

時期；中世 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；0.78×0.76m 深さ0.46m **断面形態**；U字状

埋土；灰黄褐色シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；土師質土器（体部-杯1）

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、時期不明の土坑と切り合うが前後関係は不明である。出土遺物は中世の土師質土器杯体部片のみである。

B1SK134 (B1-24図)

時期；中世 **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

規模；0.59×0.45m 深さ0.26m **断面形態**；U字状

埋土；灰黄褐色シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

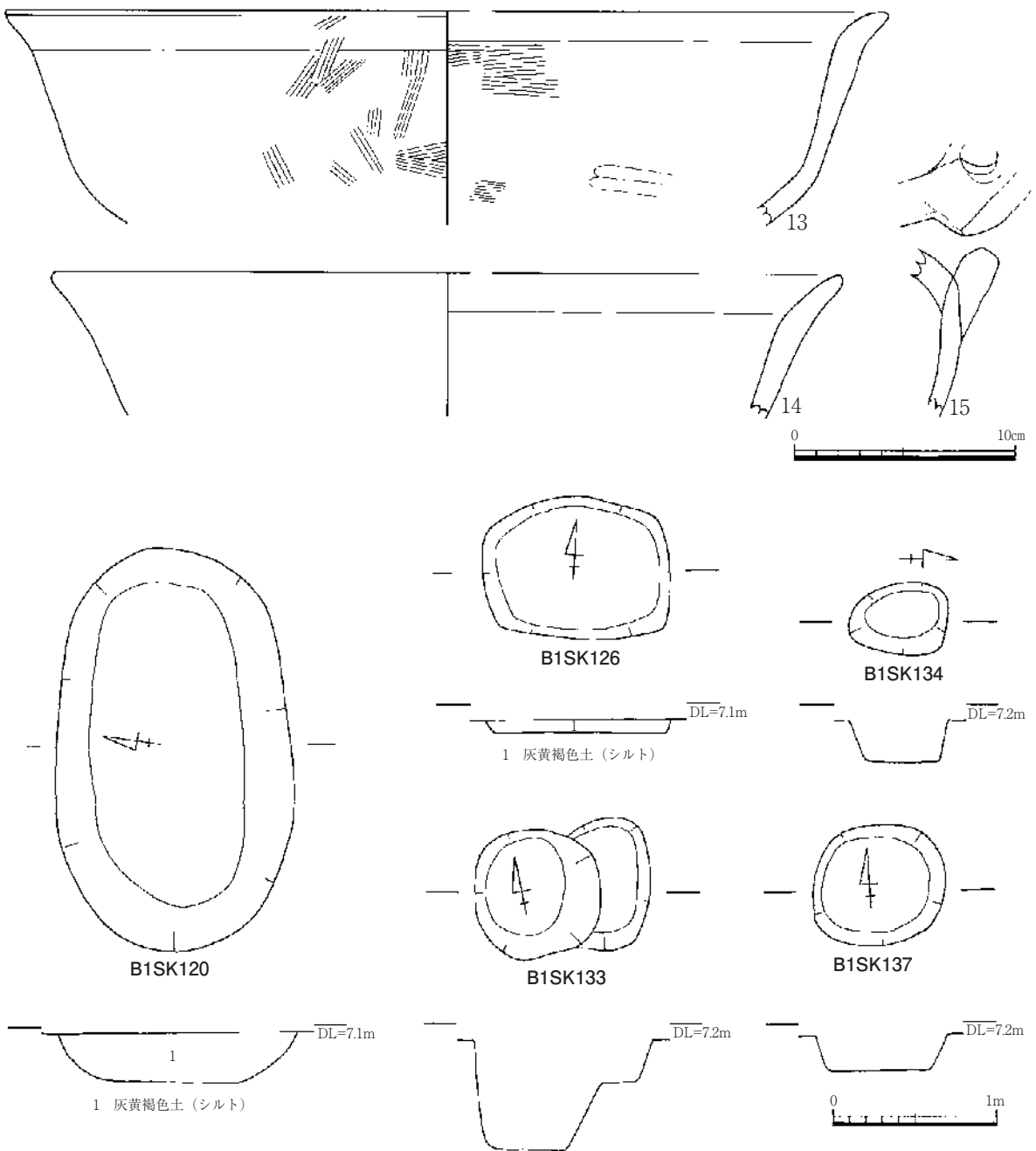
出土遺物：土師質土器（細片-1）

所見：調査区中央部に位置する小型の楕円形土坑である。出土遺物は中世の土師質土器細片のみである。

B1SK137 (B1-24図)

時期：中世 形状：円形 主軸方向：—

規模：0.80×0.72m 深さ0.19m 断面形態：皿状



B1-24図 B1SK111・120・126・133・134・137 (B1SK111：13~15)

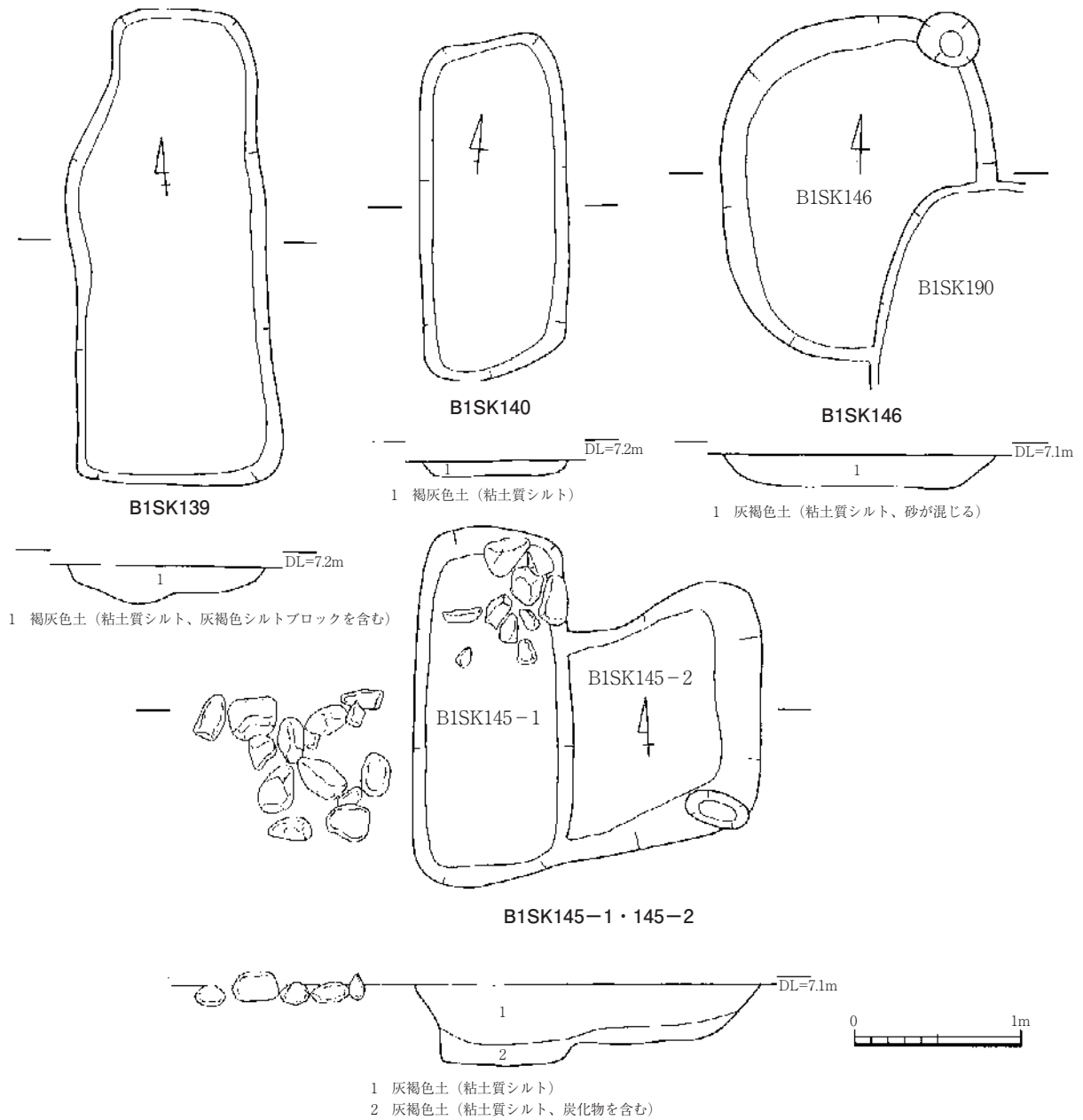
埋土：灰黄褐色シルト

付属遺構：無 機能：不明

出土遺物：土師質土器（口縁部-皿1、細片-1）

所見：調査区中央部に位置する円形土坑である。出土遺物は中世の土師質土器皿口縁部と細片のみである。

B1SK139 (B1-25図)



B1-25図 B1SK139・140・145-1・145-2・146

時期：15C～16C前半 **形状**：長方形 **主軸方向**：N-10°-E

規模：2.84×1.18m 深さ0.23m **断面形態**：皿状

埋土：褐灰色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：陶器（口縁部-播鉢1、体部-甕1）土師質土器（底部-杯1、細片-12）、瓦質土器（体部-鍋1）

所見：調査区中央部に位置する長方形土坑で、西に中世のSK140が隣接する。出土遺物は16世紀前半代に比定できる備前焼播鉢、常滑焼甕胴部細片、15C代に比定できる在地系の土師質土器杯、その他瓦質土器鍋の体部細片、土師質土器細片である。

B1SK140 (B1-25図)

時期：15C～16C **形状**：長方形 **主軸方向**：N-2°-W

規模：2.00×0.90m 深さ0.08m **断面形態**：皿状

埋土：褐灰色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：瓦質土器（体部-鍋1）、鉄片1

所見：調査区中央部に位置する長方形土坑で、東に中世のSK139が隣接する。出土遺物は瓦質土器鍋の体部片と鉄片のみである。

B1SK145-1 (B1-25図)

時期：15C～16C **形状**：長方形 **主軸方向**：N-7°-E

規模：2.14×0.94m 深さ0.48m **断面形態**：箱形

埋土：灰褐色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：陶器（底部-播鉢1）、土師質土器（細片-1）、瓦質土器（口縁部-鍋1）、鉄片1

所見：調査区南部に位置する長方形土坑である。切り合うB1SK145-2とは埋土が酷似するため前後関係は明らかに出来ていない。床面はほぼ平坦で壁は直高気味に立ち上がる。北部床面には拳大から人頭大の円礫が廃棄されている。出土遺物は備前焼播鉢底部、瓦質土器鍋、土師質土器細片、鉄片である。B1SK145-1は埋土と円礫廃棄状況が周辺の中世遺構群に共通することから、ほぼ時期を同じくして16C末から17C初頭頃に廃絶された可能性が高い。

B1SK145-2 (B1-25図)

時期：15C～16Cか **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-82°-E

規模：残存1.14×1.32m 深さ0.34m **断面形態**：逆台形

埋土：灰褐色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：無

所見：調査区南部に位置する方形土坑である。切り合うB1SK145-1とは埋土が酷似するため前後関係は明らかに出来ていない。出土遺物は無く時期の特定は困難であるが、B1SK145-2は埋土と円礫廃棄状況が周辺の中世遺構群に共通することから、ほぼ時期を同じくして16C末から17C初頭頃に廃絶された可能性が高い。

B1SK146 (B1-25図)

時期：15C～16C **形状**：隅丸方形 **主軸方向**：N-2°-E

規模：2.04×1.65m **深さ**0.20m **断面形態**：皿状

埋土：灰褐色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：陶器（体部-甕2）、土師質土器（細片-4）

所見：調査区南部に位置する土坑で、円礫廃棄を伴うB1SK190に切られる。床面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は備前焼の甕胴部片と土師質土器細片のみである。

B1SK147 (B1-26図)

時期：15C～16C **形状**：隅丸長方形 **主軸方向**：N-7°-E

規模：2.92×1.08m **深さ**0.36m **断面形態**：U字状

埋土：灰褐色粘土質シルト

付属遺構：無 **機能**：不明

出土遺物：青磁（体部-碗1）、白磁（体部-皿1）、陶器（口縁部-播鉢1、底部-甕1、体部-甕2）、土師質土器（口縁部-杯又は皿4・鍋1・茶釜2、底部-杯2、体部-鍋1、細片-多量）、土錘2、鉄釘1

所見：調査区南部に位置する大型土坑である。

出土遺物は龍泉窯系青磁碗の体部片、白磁D類皿の体部片、備前焼甕の底部と胴部片、備前焼播鉢、播磨型鍋、在地系の土師質土器杯、土師質土器鍋（3）、土師質土器茶釜（1）、土錘（2）、鉄釘である。

B1SK148 (B1-27図)

時期：16C末～17C初頭 **形状**：不整形 **主軸方向**：—

規模：4.58×3.82m **深さ**0.70m **断面形態**：皿状

埋土：褐灰色シルト（砂礫を多量に含む）・褐灰色シルト

付属遺構：無 **機能**：廃棄土坑か

出土遺物：青磁（口縁部-碗1、体部-碗1）、白磁（口～底部-皿1）、青花（口縁部-碗1）、陶器（口縁部-甕1、体部-播鉢1・甕1）、土師質土器（口縁部-杯1・皿1、底部-杯1体部-鍋8）、鉄片1

所見：調査区中央部に位置する大型土坑で、中世屋敷地の環濠にあたるB1SD106を切る。又、北側を大型土坑B1SK149に切られる。断面形態は皿状で壁の立ち上がりは緩やかである。埋土下層は灰褐色シルトが堆積し、床面近くでは砂質が強まり0.5～10cm大の礫が混じる。又、埋土中層から上層

では灰褐色シルトに砂礫が多量に含まれる。

出土遺物は龍泉窯系青磁碗(2)、白磁E類皿(3)、景德鎮窯系青花碗(1)、間壁編年ⅢB～ⅣA期の備前焼甕口縁部(4)と体部、備前焼播鉢体部、京都系の土師質土器皿(5)、在地系の土師質土器杯(6)、土師質土器鍋、及び鉄片である。

SK148内には15世紀から17C初頭頃までの年代幅をもつ遺物群が廃棄されるが、環濠SD106との切り合い関係からみて、その時期は16世紀末から17世紀初頭頃に位置付けられる。

B1SK149 (B1-27図)

時期：16C末～17C初頭 形状：隅丸方形 主軸方向：—

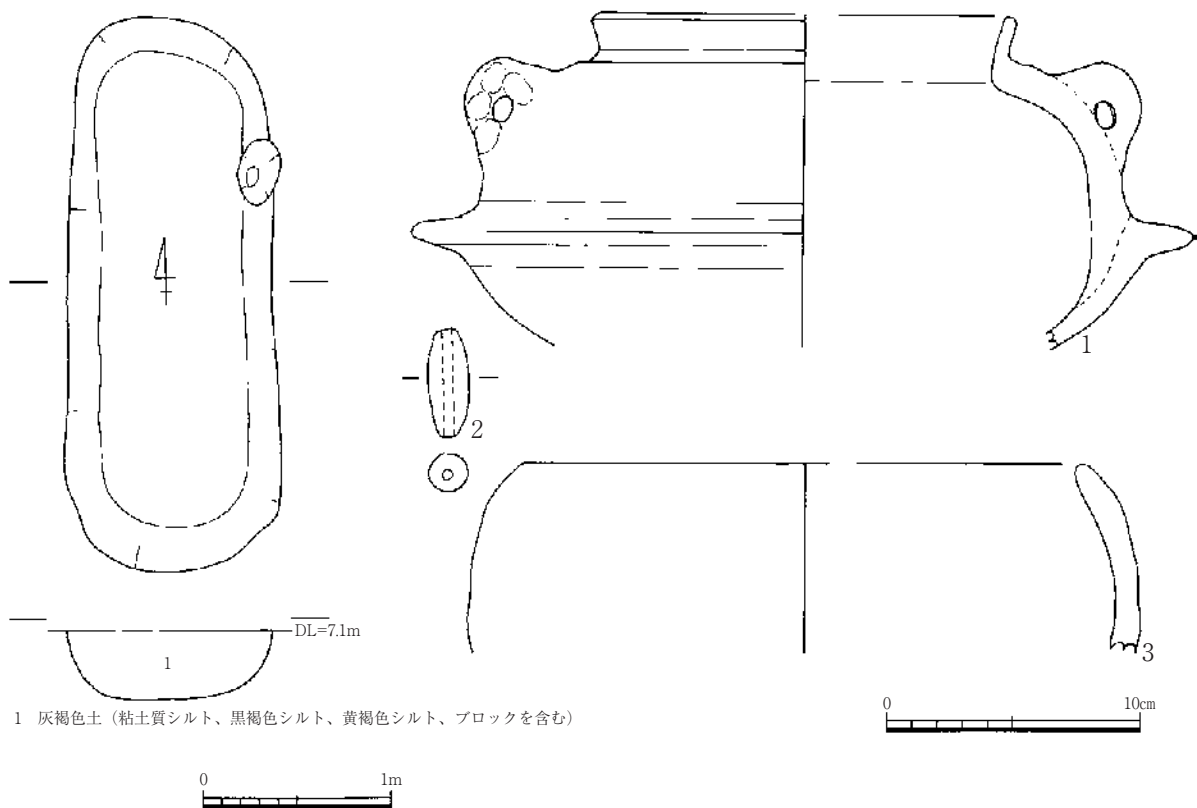
規模：4.40×2.70m 深さ0.30m 断面形態：皿状

埋土：礫混じり暗灰色粘土質シルト

付属遺構：無 機能：廃棄土坑か

出土遺物：青磁（口縁部－碗1・皿1）、陶器（口縁部－播鉢1、底部－皿1、体部－小壺1）、土師質土器（口縁部－捏鉢1、底部－杯2・皿1、体部－鍋・釜5、細片－10）、瓦質土器（体部－鍋1）

所見：調査区中央部HVI-エ-11グリッドに位置する大型土坑で、大型土坑B1SK148を切る。面形態は皿状で壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は暗灰色の粘土質シルトで、円礫を多量に含んで

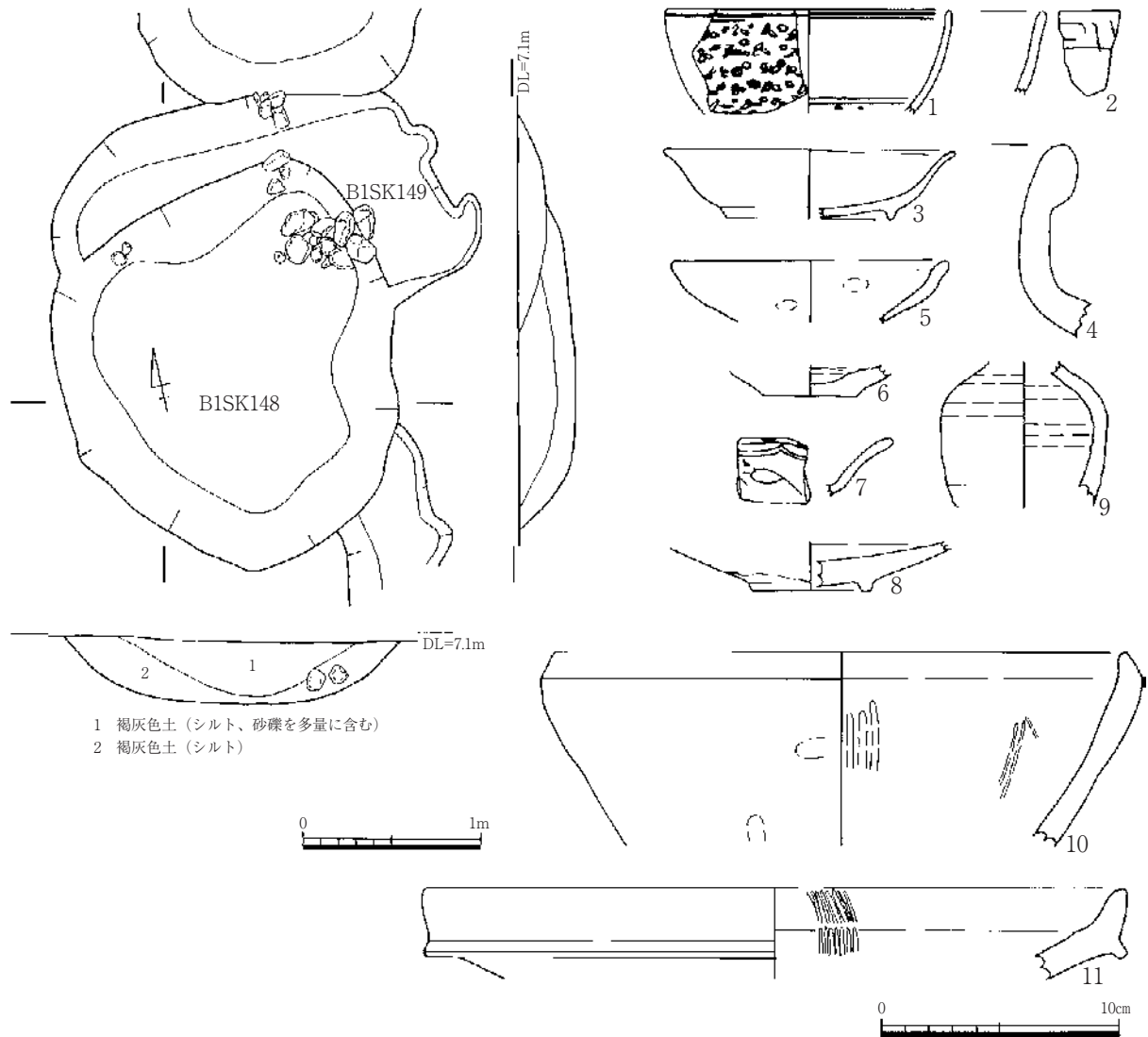


B1-26図 B1SK147

いる。又、肩部から床面にかけて拳大から人頭大の円礫が廃棄されている。

出土遺物は龍泉窯系の稜花形青磁皿（7）と碗、肥前16C末～17C初頭の唐津系灰釉陶器小皿（8）、15C後半頃に比定される間壁IVB期の備前焼播鉢（11）、備前焼小壺（9）、備前焼甕体部片、土師質土器杯と皿、土師質土器捏鉢（10）、土師質土器鍋と釜体部片、瓦質土器鍋体部片である。

SK149内には15世紀から17C初頭頃までの年代幅をもつ遺物群が廃棄されるが、B1SD106及びB1SK148との前後関係からみて、その時期は16世紀末から17世紀初頭頃に位置付けられる。



B1-27図 B1SK148・149 (B1SK148：1～6, B1SK149：7～11)

B1SK150 (B1-28図)

時期；15C～16C **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-76°-W

規模；1.68×1.10m 深さ0.32m **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁部-甕1、底部-甕1）、須恵器（口縁部-鉢1・体部-鉢1）、土師質土器（口縁部-杯又は皿3、体部-鍋19、細片-3）

所見；調査区南部に位置する土坑である。出土遺物は間壁ⅢB期～ⅣA期の備前焼壺又は甕の口縁部（3）と底部、東播系須恵器鉢（2）、土師質土器杯と皿、土師質土器鍋体部片である。

B1SK160 (B1-28図)

時期；16C末～17C初頭 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-24°-E

規模；2.00×1.50m 深さ0.33m **断面形態**；逆台形

埋土；灰褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；青磁（口縁部-鉢1）、青花（口縁部-皿1）、陶器（体部-壺1）、土師質土器（口縁部-皿1、底部-杯4、体部-鍋3、細片-20）、瓦質土器（口縁部-鍋1）

所見；調査区南部に位置する土坑で、B1SK190に切られる。

出土遺物は龍泉窯系青磁鉢（6）、景德鎮窯系青花碗（1）、瀬戸美濃産灰釉壺の体部片、在地系の土師質土器杯（4）底部、皿口縁部、土師質土器鍋、瓦質土器鍋である。景德鎮窯系青花碗（1）等廃棄遺物の年代観からみて、SK160の廃絶年代は16C末～17C初頭頃に位置付けられる。

B1SK161 (B1-28図)

時期；16C末～17C前葉 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-70°-W

規模；1.28×0.70m 深さ0.16m **断面形態**；箱形

埋土；灰褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；青花（口縁部-皿1）

所見；調査区中央部に位置する長方形土坑である。遺物は埋土中より青花皿（5）が出土している。景德鎮窯系青花皿（5）は口縁端部の釉が虫食い状に剥げる。B1SK161の廃絶年代は16C末～17C前葉頃に位置付けられる。

B1SK165 (B1-28図)

時期；中世 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-0°-E

規模；1.08×0.42m 深さ0.22m **断面形態**；U字状

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構：無 機能：不明

出土遺物：土師質土器（底部－鍋1、細片－2）

所見：調査区北部に位置する小型の楕円形土坑である。出土遺物は埋土中出土の土師質土器鍋の底部、土師質土器細片である。

B1SK189 (B1-28図)

時期：16C末～17C初頭か 形状：不整形 主軸方向：—

規模：2.18×1.98m 深さ0.24m 断面形態：箱形

埋土：灰黄褐色シルト・暗褐色シルト

付属遺構：無 機能：不明

出土遺物：石製品（石臼1）

所見：調査区南部に位置する土坑で、中世末から近世初頭のB1SK160を切る。床面はほぼ平坦で、埋土中位から上層にかけて拳大から人頭大の円礫が集中廃棄されている。出土遺物は皆無であるが、埋土と円礫廃棄状況が周辺の中世遺構群に共通することから、ほぼ時期を同じくして中世末から近世初頭頃に廃絶された可能性が高い。図示したものは、砂岩製石臼（7）である。

B1SK190 (B1-29図)

時期：16C末～17C初頭 形状：長方形 主軸方向：N-16°-E

規模：3.45×1.60m 深さ0.20m 断面形態：箱形

埋土：灰褐色砂質シルト

付属遺構：無 機能：不明

出土遺物：青磁（底部－碗1）、青花（口縁部～底部－皿1）、陶器（口縁部－甕1）

所見：調査区南部に位置する土坑で、中世のB1SK146を切る。床面はほぼ平坦で壁は直立気味に立ち上がる。又、埋土中には拳大から人頭大の円礫が多量に廃棄されている。

出土遺物は漳州窯系青花皿（2）、青磁碗（1）、備前焼甕（3）である。B1SK190の廃絶年代は16C末から17C初頭頃に位置付けられる。

B1SK191 (B1-29図)

時期：16C末～17C初頭か 形状：円形 主軸方向：—

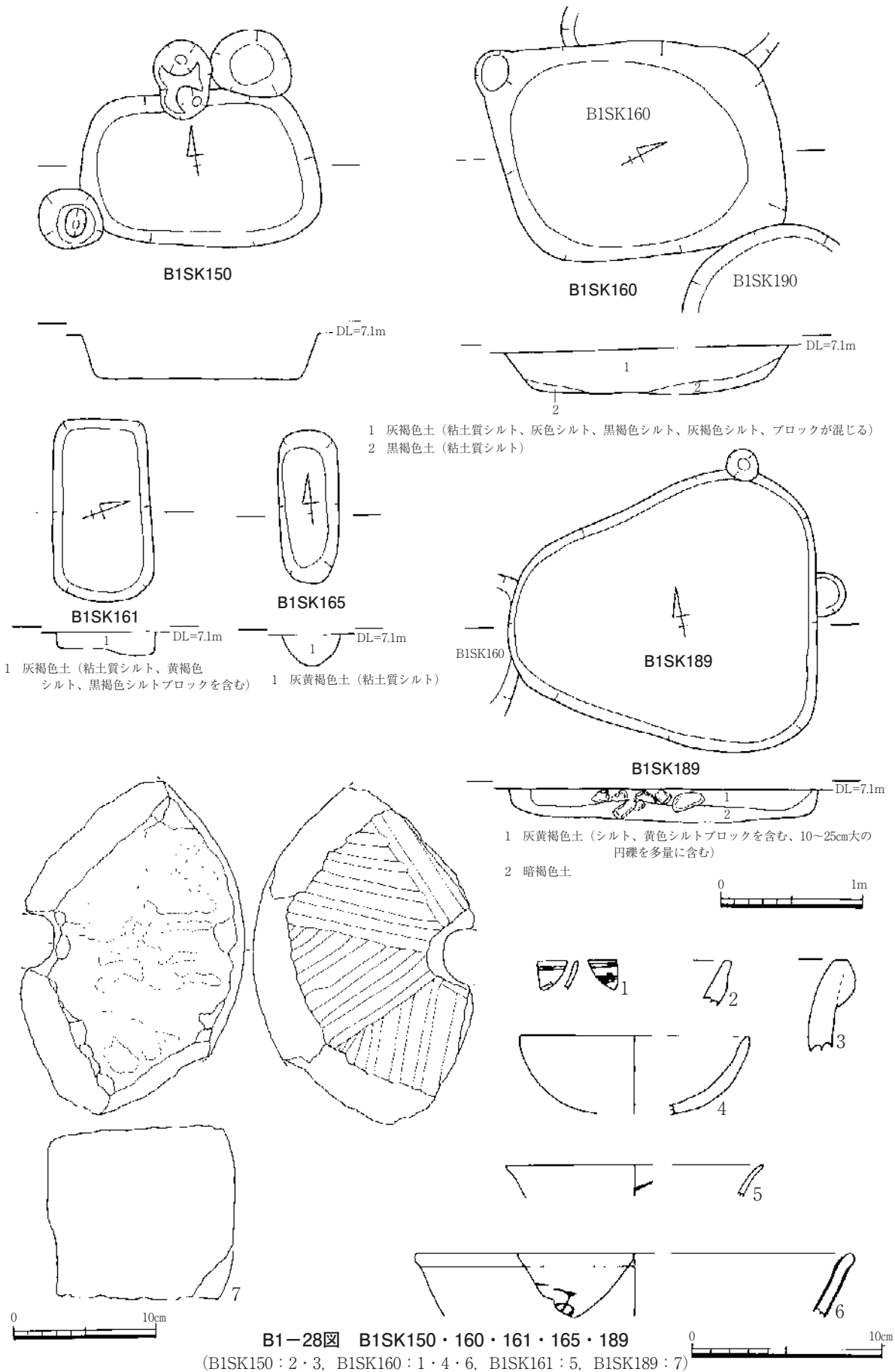
規模：2.30×2.04m 深さ0.18m 断面形態：皿状

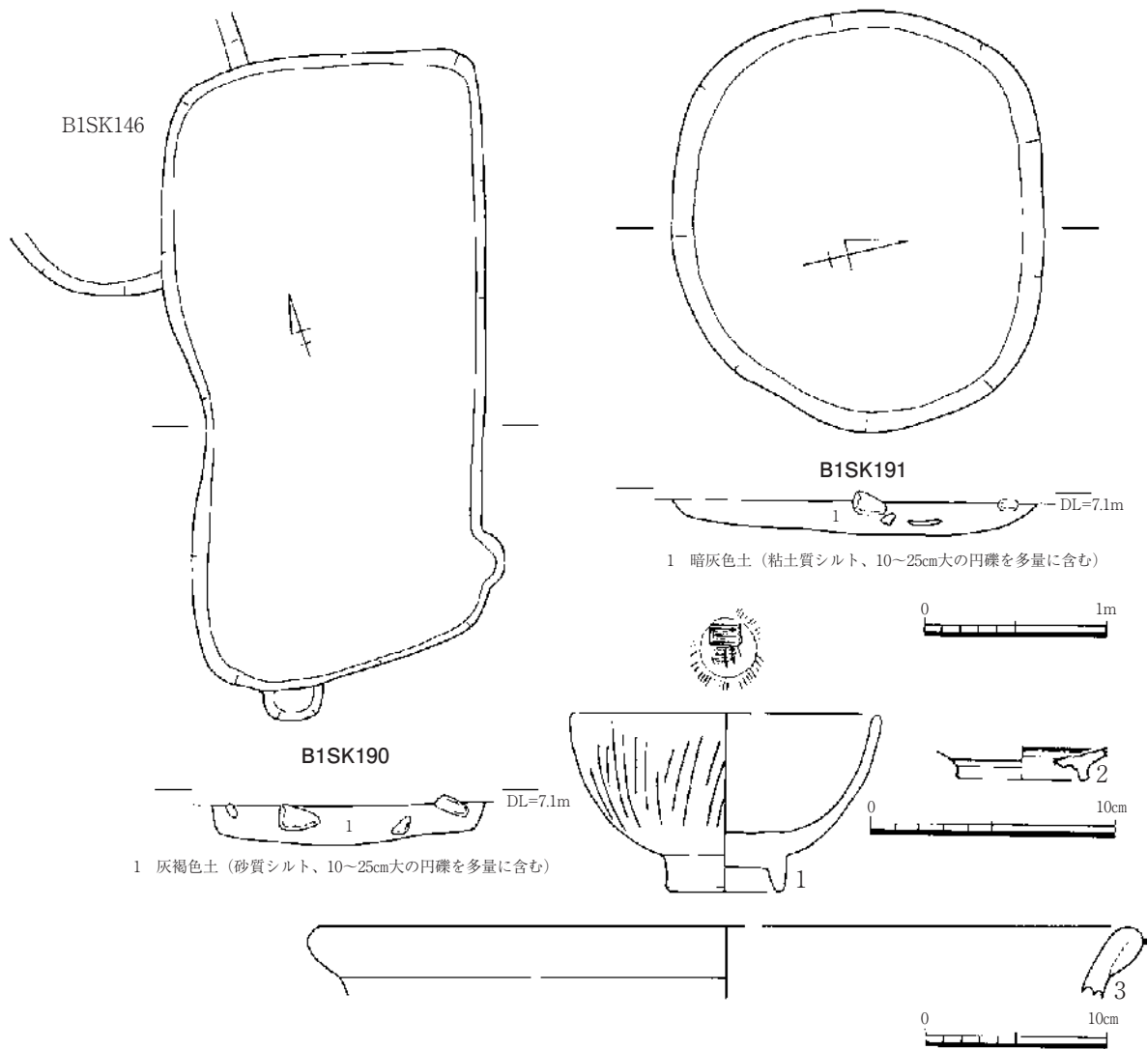
埋土：暗灰色粘土質シルト

付属遺構：無 機能：不明

出土遺物：無

所見：調査区西部に位置する土坑である。断面形態は皿状で壁は緩やかに立ち上がる。又、埋土中には拳大から人頭大の円礫が多量に廃棄されている。出土遺物は皆無であるが、埋土と円礫廃棄状況が周辺の中世遺構群に共通することから、ほぼ時期を同じくして16C末から17C初頭頃に廃絶され





B1-29図 B1SK190・191 (B1SK190 : 1~3)

た可能性が高い。

B1SK192 (B1-30図)

時期；16C末~17C初頭か **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-3°-E

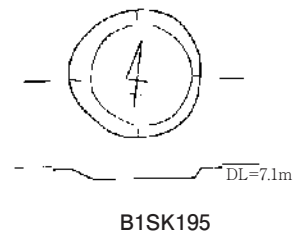
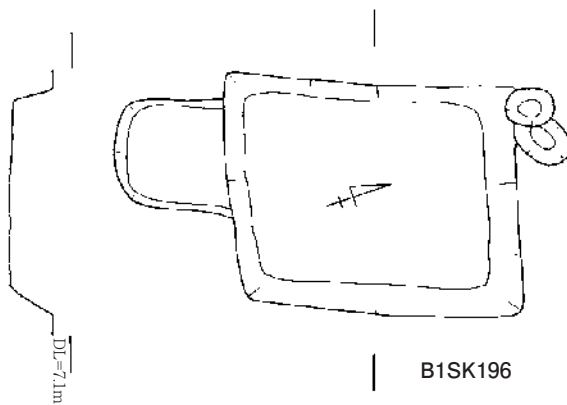
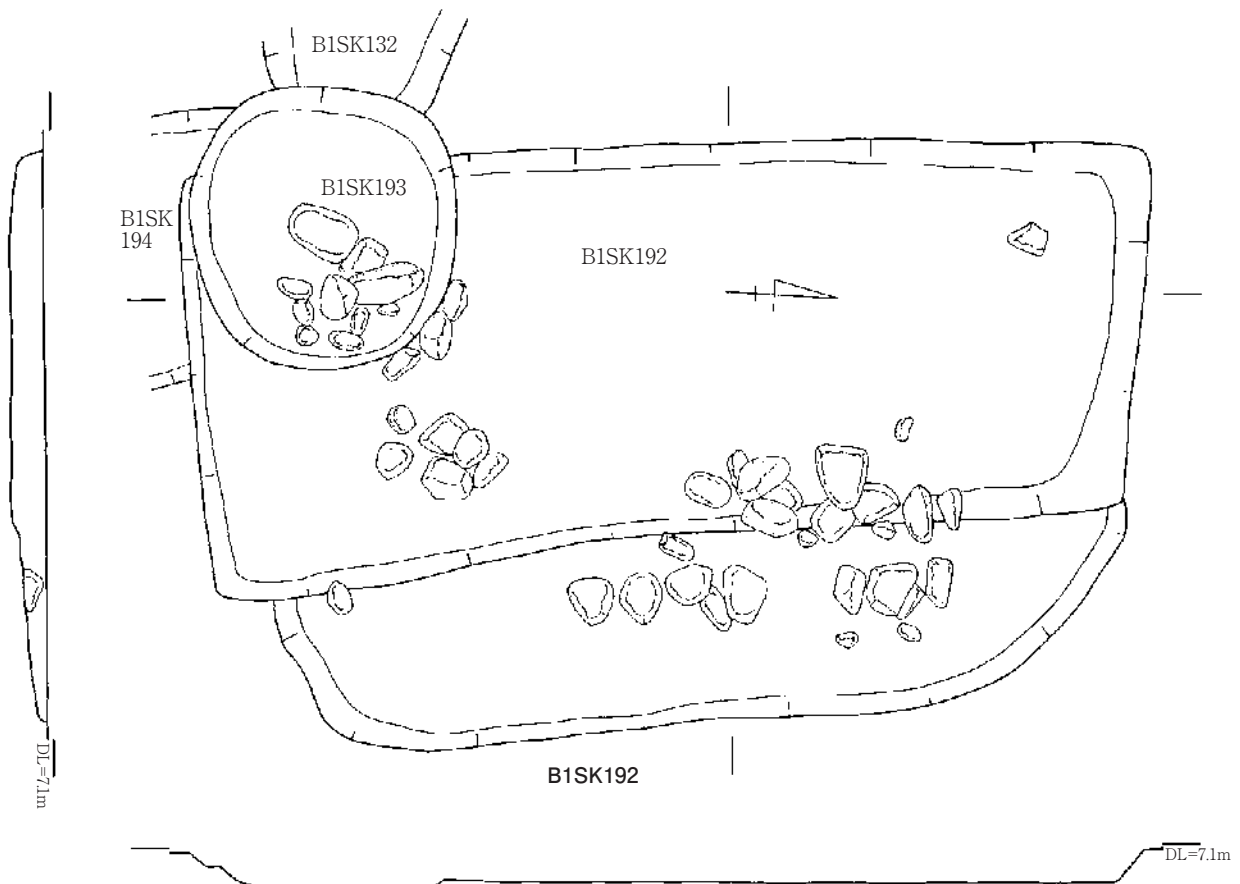
規模；5.10×2.06m **深さ**0.18m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色シルト

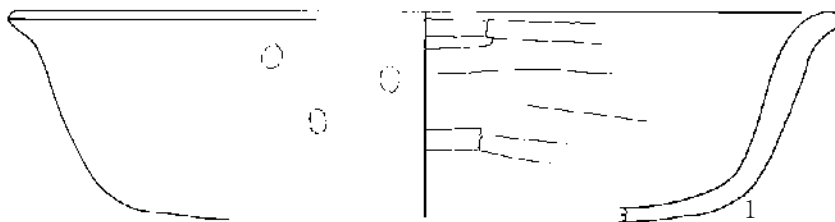
付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；無

所見；調査区中央部に位置する大型の長方形土坑である。又、切り合うB1SK194、円形土坑B1SK193との前後関係は不明である。B1SK192床面はほぼ平坦で、東部に浅いテラス状の張り出しを伴う。東部と南部の床面には拳大から人頭大の円礫が集中廃棄されている。出土遺物は皆無であ



B1SK195



B1-30 図 B1SK192・195・196 (B1SK195 : 1, B1SK196 : 2)

るが、埋土と円礫廃棄状況が周辺の中世遺構群に共通することから、ほぼ時期を同じくして16C末から17C初頭頃に廃絶された可能性が高い。

B1SK195 (B1-30図)

時期；16C末～17C前葉 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；0.70×0.68m 深さ0.06m **断面形態**；逆台形

埋土；褐灰色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；土師質土器（口縁部-鍋1）

所見；調査区南部に位置する土坑である。遺物は埋土中より在地系の土師質土器鍋（1）が出土している。

B1SK196 (B1-30図)

時期；15C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-19°-E

規模；1.52×1.20m 深さ0.22m **断面形態**；箱形

埋土；灰褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；土師質土器（完形-皿1）

所見；調査区南部に位置する土坑である。埋土中より京都系の土師質土器皿（2）が出土している。

(3) 溝跡

B1区では調査区を縦横に走る中世の区画溝B1SD105とB1SD106、B1SD110とB1SD112、B1SD101とB1SD104を検出した。これらは南北溝でN-6~12°-E、東西溝でN-77~84°-Wというほぼ共通した軸方向を保っており、これらの溝によって本調査区は数区画の中世屋敷地に分割される。このうち、二重の区画溝を形成するB1SD105とSD106については、外溝B1SD105がB4区のB4SD405に、内溝B1SD106がB4SD403に連続する。

一方、調査区東部ではN-35~50°-E前後の軸方向をもつ4条の溝群、B1SD102・103・107・108を検出している。

B1-4表 B1区中世溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
B1SD101	24×0.64×0.14	逆台形	N-80°-W		15C~17C初頭	屋敷地C・D区画溝
B1SD102	39×1.1×0.16	逆台形	N-35°-E		16C末以降	
B1SD103	20×0.60×0.10	皿状	N-41°-E		16C末以降	
B1SD104	8×0.50×0.12	皿状	N-70°-E		15C~17C初頭	屋敷地D区画溝
B1SD105	東西42・南北48×3.80×1.30	U字状・V字状	N-12°-E、 N-77°-W	B4SD405	15C~17C初頭	屋敷地A区画溝
B1SD106	東西36・南北43×1.15×0.54	U字状	N-12°-E、 N-77°-W	B4SD403	15C~17C初頭	屋敷地A区画溝
B1SD107	10×0.45×0.04	皿状	N-36°-E		不明。 16C末以降か	
B1SD108	13×0.45×0.07	皿状	N-36~ 55°-E		不明。 16C末以降か	
B1SD109	東西7・南北12×0.55×0.04	皿状	N-11°-E、 N-77°-W		15C~17C初頭か	屋敷地B・C区画溝
B1SD110	16×0.85×0.11	皿状	N-6°-E		15C~17C初頭	屋敷地B区画溝
B1SD112	8×0.60×0.18	皿状	N-84°-E		15C~17C初頭か	屋敷地B区画溝

B1SD101 (B1-31図)

時期：15C~17C初頭 方向：N-80°-W

規模：幅0.55~0.64m 深さ0.14m 断面形態：逆台形

埋土：灰褐色シルト

床面標高：6.92m 接続：—

出土遺物：陶器（底部-碗1）

所見：調査区南東部を東西方向に延びる区画溝である。検出長は24m。埋土は灰褐色シルトで、最下層への砂の堆積等は認められない。埋土中からは胎土目積みの肥前産灰釉陶器碗（1）が出土している。遺物量は僅少であるが、周辺遺構の機能時期と廃絶状況とも照合して、B1SD101は中世屋敷地C・Dの区画溝として機能し17世紀初頭をもって廃絶した可能性が高い。

B1SD102 (B1-31図)

時期：16C末以降か 方向：N-35°-E

規模：幅0.6~1.1m 深さ0.12~0.16m 断面形態：逆台形・皿状

埋土：灰黄褐色シルト・灰黄褐色粘土質シルト

床面標高：北部-7.04m、南部-7.00m

接続：不明

出土遺物：土師質土器（鍋）

所見：調査区を北東から南西方向に延びる溝であり、東西には共通した軸方向・規模・埋土をもつ B1SD103・SD107・SD108が並行する。切り合い関係では近世から近代のB1SX112・SX113に切られ、時期不明のB1SX107を切っている。又、区画溝B1SD109との切り合いは不明である。検出長は39m。断面形態は北部で皿状、南部では逆台形を呈する。埋土最下層には粗砂・礫混じりの灰黄褐色シルト層が堆積し、中層には灰黄褐色シルトと砂が互層堆積しており、引水・排水溝としての機能が想定できる。出土遺物は中世末の土師質土器鍋である。出土遺物が僅少で遺構廃絶時期の特定は困難であるが、並行するB1SD103の出土遺物とも照合して、中世末以降引水溝として機能した可能性が高い。

B1SD103 (B1-31図)

時期：16C末以降か 方向：N-41°-E

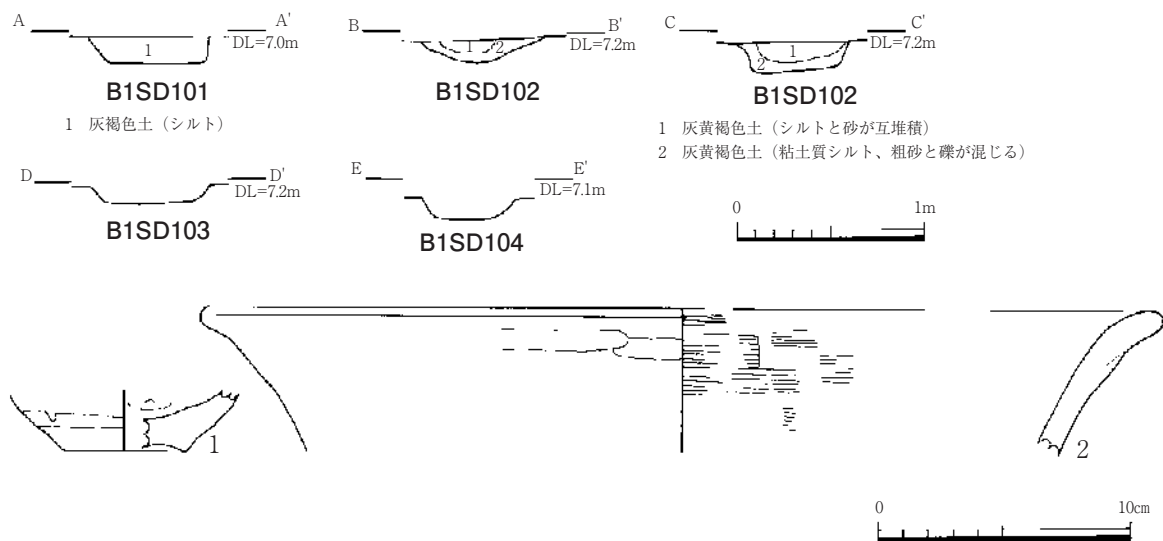
規模：0.45~0.60m 深さ0.10m 断面形態：皿状

埋土：灰黄褐色シルト

床面標高：7.08m 接続：不明

出土遺物：土師質土器（鍋）

所見：調査区を北東から南西方向に延びる溝である。東側には共通した軸方向・規模・埋土をもつ B1SD102・SD107・SD108が並行し、上面を近世から近代のB1SX111に切られる。検出長は20m、断面形態は皿状を呈する。16C末から17世紀初頭頃に比定できる土師質土器鍋（2）である。



B1-31図 B1SD101~104 (B1SD101 : 1, B1SD103 : 2)

B1SD104 (B1-31図)

時期；15C～17C初頭か **方向**；N-70°-E

規模；幅0.50m 深さ0.12m **断面形態**；皿状

埋土；灰褐色シルト

床面標高；6.88m **接続**；—

出土遺物；無

所見；調査区南部を南北方向に延びる溝であり、東西に延びるB1SD101とは同一の区画溝を形成する可能性がある。検出長は8mで、断面形態は皿状を呈する。出土遺物は無く、時期の特定は困難であるが、B1SD101及び周辺遺構の機能時期、廃絶状況とも照合させると、中世に屋敷地区画溝として機能し、17世紀初頭頃をもって廃絶した可能性がある。

B1SD105 (B1-32～37図)

時期；15C～17C初頭 **方向**；南北N-12°-E、東西N-77°-W

規模；幅2.3～3.8m 深さ0.82～1.30m **断面形態**；南北-U字状、東西-V字状、

埋土；灰褐色シルト・灰褐色砂質シルト・灰褐色シルト質砂

床面標高；西部5.76m、南部6.20m、角部6.20m

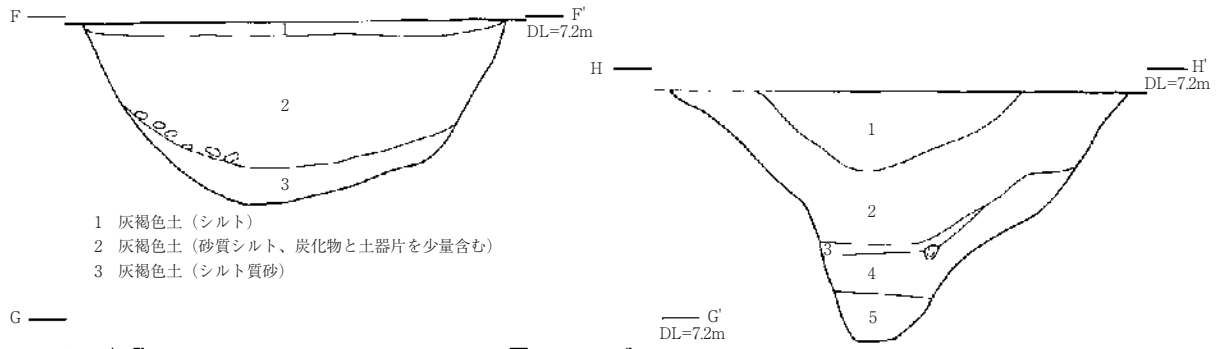
接続；B4SD405

出土遺物；青磁（碗・皿）、青花（皿）、陶器（甕・播鉢）、土師質土器（杯・皿・鍋）、瓦質土器（茶釜）

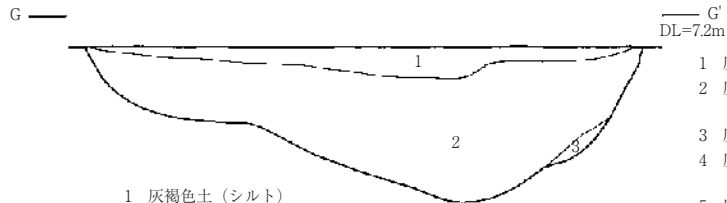
所見；調査区を南北方向と東西方向に延びる中世屋敷地の区画溝である。調査B1区以西ではB4区のB4SD405に連続し、同一の区画溝となる。又、B1SD105の内側にはB1SD106が並行して巡っており、本SDは二重の区画溝によって囲まれた中世屋敷地の外溝にあたる。切り合い関係では、弥生後期のB1SK79を切っている。検出長は東西42m、南北48m。断面形態は東西溝がV字状、南北溝がU字状を呈する。埋土は灰褐色シルト・灰褐色砂質シルトを主体とし、南北溝の最下層にはシルト質砂が堆積する。又、溝の埋め戻しに伴うとみられる第2層灰褐色砂質シルト層内には炭化物・小円礫とともに土器・陶磁器類が多く含まれる。

出土遺物は青磁碗・皿、青花皿、陶器播鉢・甕、土師質土器杯・皿・鍋、瓦質土器茶釜である。これらは特に第2層灰褐色砂質シルト層に出土が集中している。又、中世以外の遺物には弥生土器の混入が多く認められるものの、近世以降の遺物は全く含まれない。図示したものは龍泉窯系青磁碗（1～4・6～8）、龍泉窯系青磁皿（5）、景德鎮窯系青花皿（9）、備前焼播鉢（25～28）、備前焼甕（10・11）、在地系の土師質土器杯（12～18）、同皿（23・24）、京都系土師質土器皿（19～22）、播磨型鍋（29～51）、土師質土器鍋（53～55）、播磨・堺系の土師質土器鍋（56・57）、在地系の土師質鍋（58・59）、瓦質土器茶釜（60）である。

廃棄遺物は15世紀から16世紀代までの年代幅のもので構成されており、同一の区画溝となるB4区のB4SD405の出土遺物内容とも照合させて検討すると、B1SD405はその機能時期を15～16世紀代におくことができる。又、最終的な廃絶時期は16C末から近世初頭の間であり、埋土中に近世段階の遺物が全く認められないことから近世に引き続き区画溝として継続されたとは考え難く、中世末から近

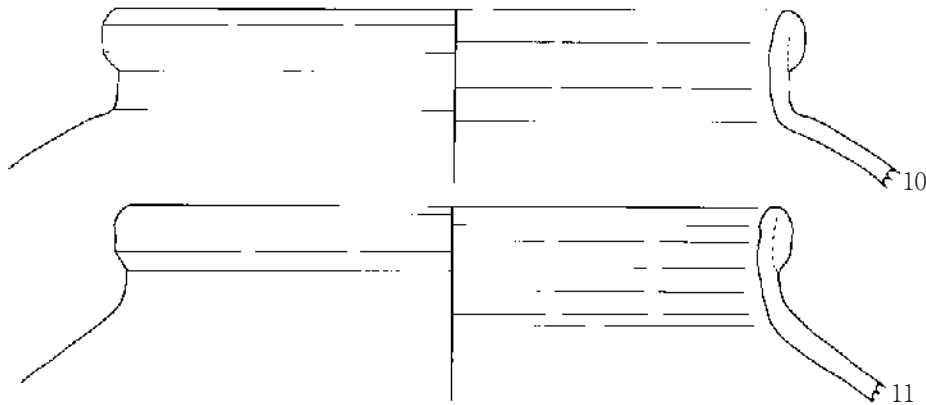
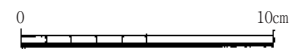
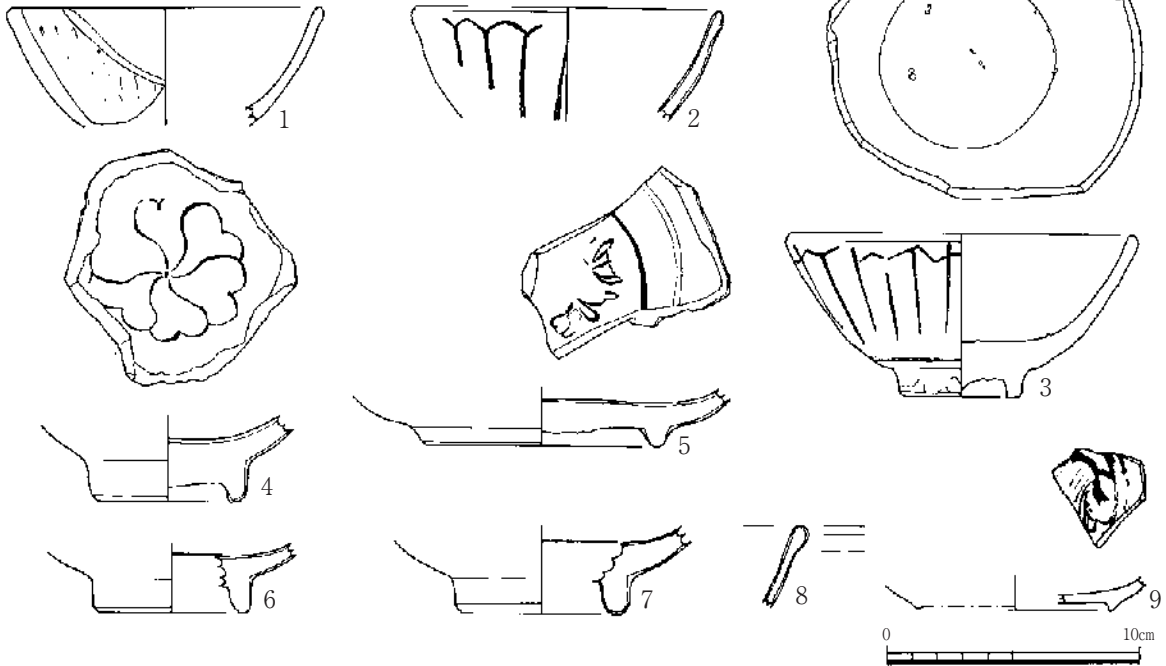


- 1 灰褐色土 (シルト)
- 2 灰褐色土 (砂質シルト、炭化物と土器片を少量含む)
- 3 灰褐色土 (シルト質砂)

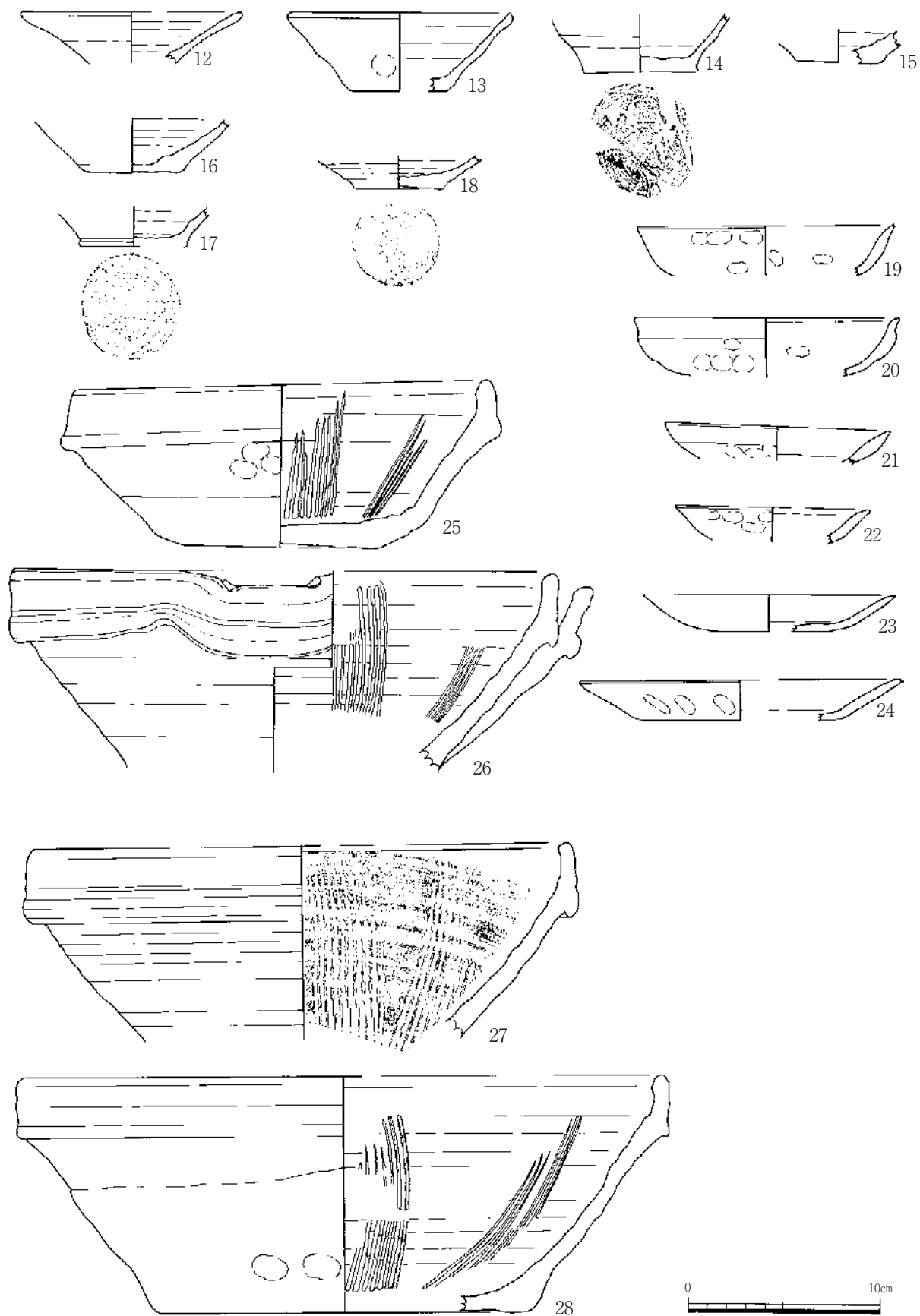


- 1 灰褐色土 (シルト)
- 2 灰褐色土 (砂質シルト、礫を少量含む、土器片を多量に含む)
- 3 灰褐色土 (粗砂)

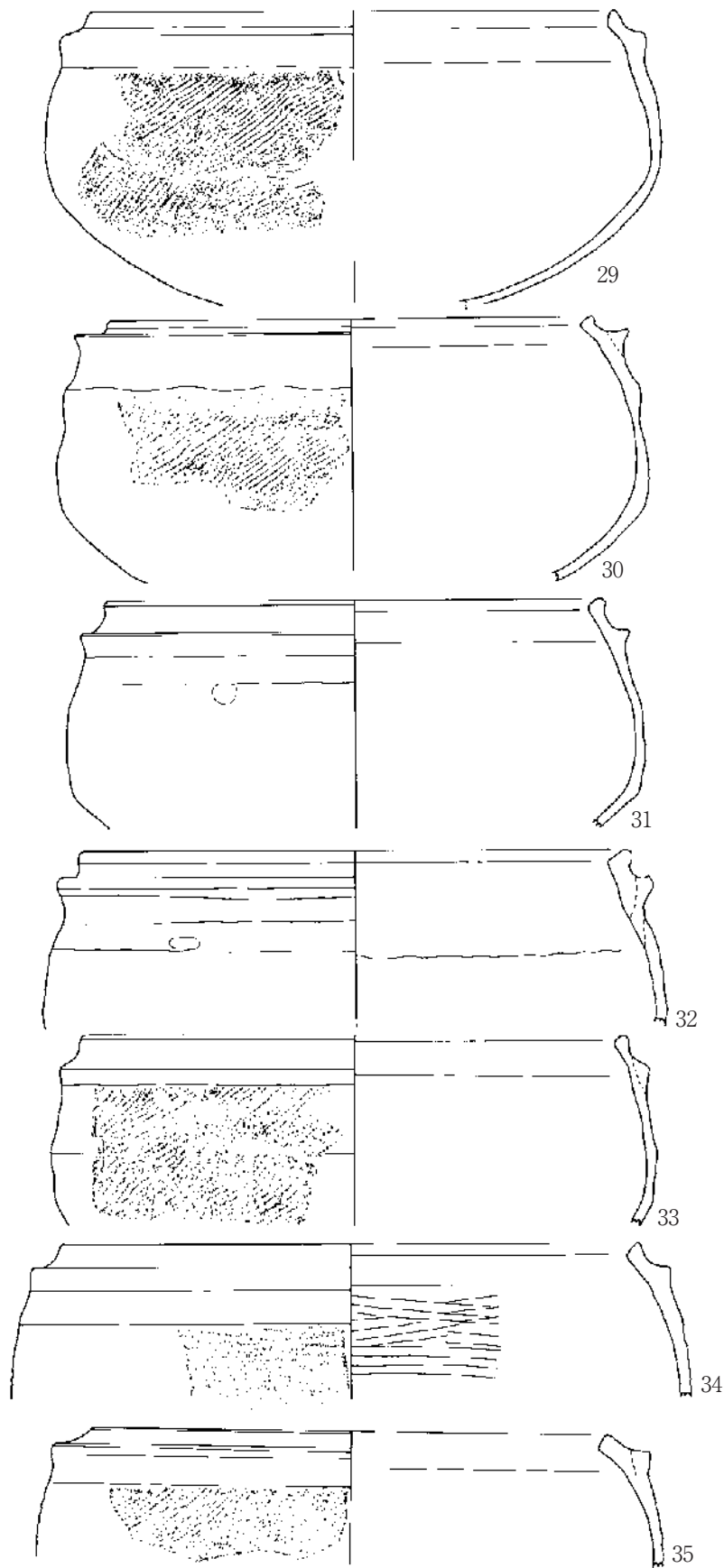
- 1 灰褐色土 (シルト、2~3cm大以下の円礫を少量含む)
- 2 灰褐色土 (砂質シルト、1cm大以下の円礫を少量含む、土器片を少量含む)
- 3 灰色土 (シルト砂)
- 4 灰褐色土 (シルト、1cm以下の円礫を多量に、3~4cm大の円礫を少量含む)
- 5 灰褐色土 (シルト、円礫を多量に含む)



B1-32図 B1SD105 (1)

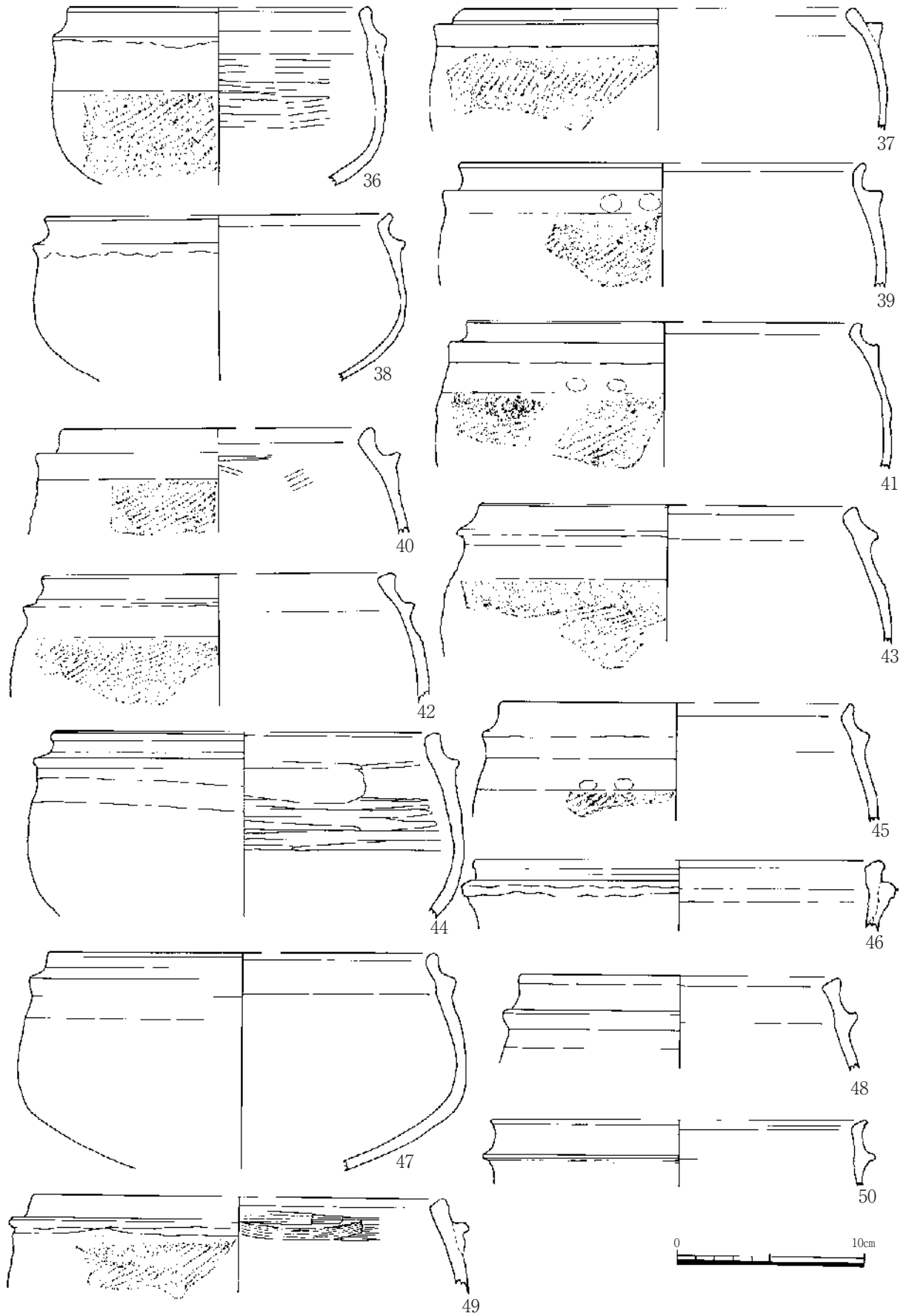


B1-33図 B1SD105 (2)

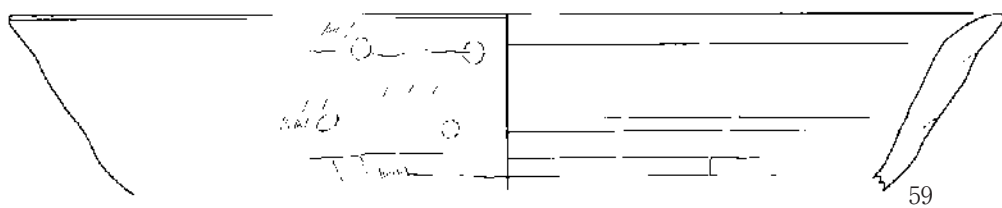
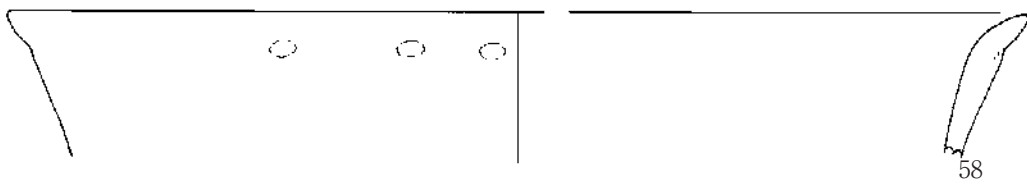
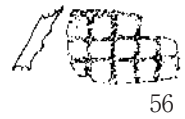
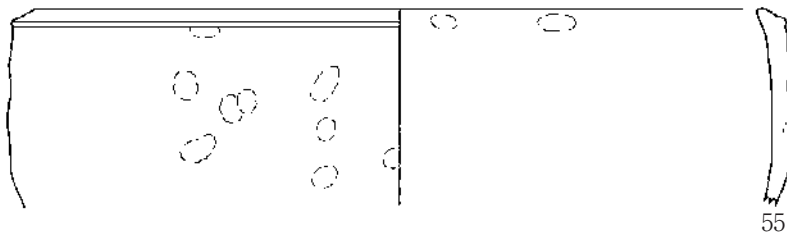
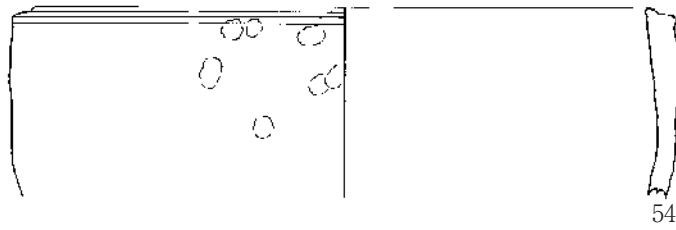
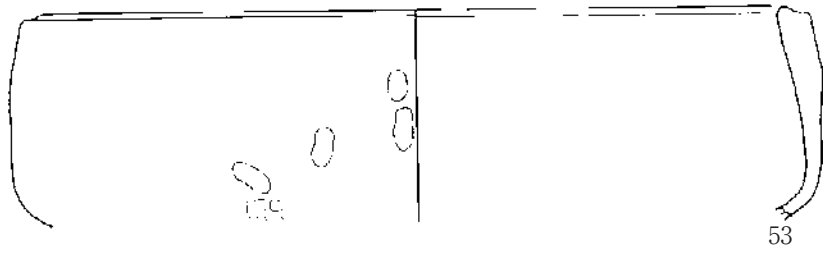
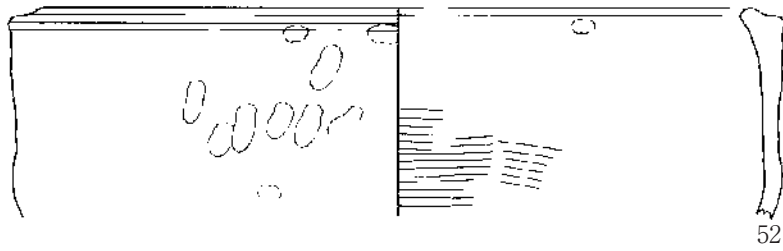
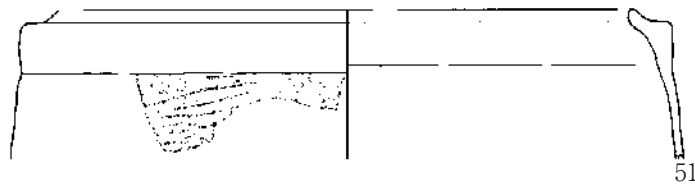


B1-34 图 B1SD105 (3)

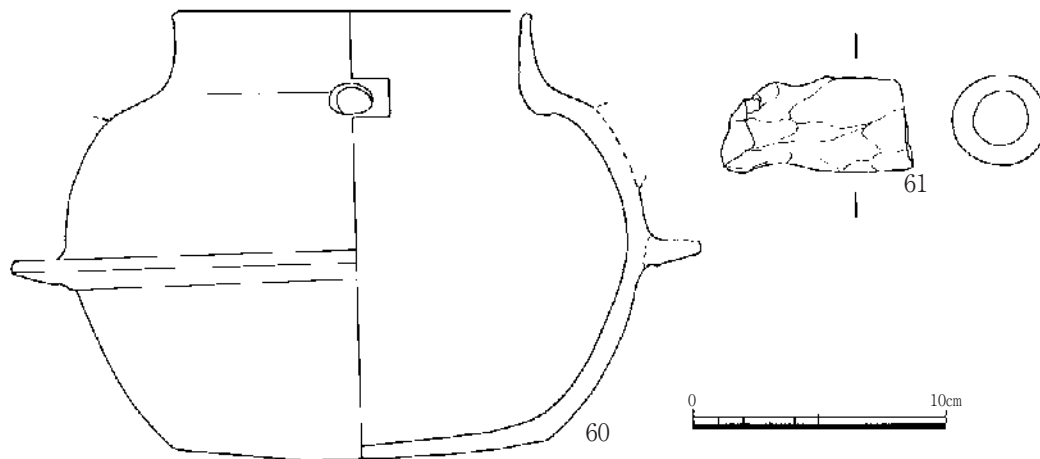




B1-35図 B1SD105 (4)



B1-36 图 B1SD105 (5)



B1-37図 B1SD105 (6)

世初頭の間には本屋敷地区画溝は完全に埋没に至ったものとみられる。

B1SD106 (B1-38図)

時期：15C～17C初頭 **方向**：南北N-12°-E、東西N-77°-W

規模：幅0.7～1.15m 深さ0.28～0.54m **断面形態**：南北-皿状、東西-U字状

埋土：灰褐色粘土質シルト

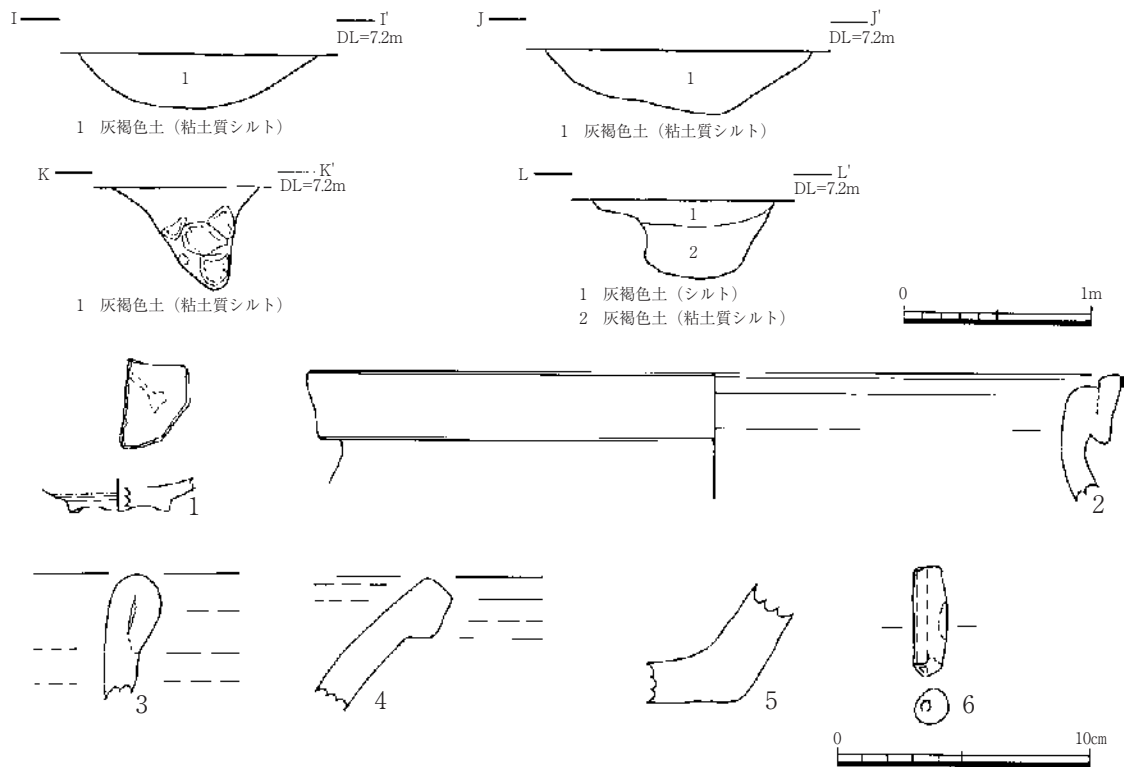
床面標高：西部6.64m、南部6.72m、角部6.58m

接続：B4SD403

出土遺物：白磁、常滑焼、備前焼他

所見：調査区を東西方向と南北方向に延びる中世屋敷地Aの区画溝である。調査B1区以西ではB4区
のB4SD403に連続し、同一の区画溝となる。又、B1SD106の外側には大溝B1SD105が並行して巡っ
ている。切り合い関係では、弥生のSK173・SK174を切り、中世末のSK149・SK148他に切られる。
検出長は東西36m、南北43m。断面形態は南北溝が皿状、東西溝がU字状でテラス状の段を有する。
埋土は灰褐色粘土質シルトを基調とし、下層への砂の堆積は認められない。又、溝が直角に方向を
変える北東端のコーナー部分には拳大から人頭大の礫を多量に投げ込んだ礫集中が存在する。

出土遺物は白磁、常滑焼、備前焼等である。又、中世以外の遺物では弥生土器の混入が多く認め
られるものの、近世以降の遺物は全く含まれない。図示したものは白磁D類皿(1)、15世紀代に比
定される常滑焼甕(2)、間壁IVB期の備前焼甕(3・5)、陶器甕(4)、土錘(6)である。B4SD403、
B1SD405の遺物内容とも照合させて検討すると、B1SD106はその機能時期を15～16世紀代におくこ
とができる。又、中世末から近世初頭の間には本SDは廃絶したものとみられる。



B1-38図 B1SD106

B1SD107 (B1-39図)

時期：16C末以降か 方向：N-36°-E

規模：幅0.45m 深さ0.04m 断面形態：皿状

埋土：灰褐色シルト

床面標高：7.14m 接続：無

出土遺物：無

所見：調査区を北東から南西方向に延びる溝であり、東西には共通した軸方向・規模・埋土をもつ B1SD102・103・108が並行する。切り合い関係では近世の土坑に切られているが、区画溝B1SD109との前後関係は不明である。検出長は10mで、断面形態は皿状を呈する。出土遺物は無く、時期及び性格の特定は困難であるが、並行する引水溝B1SD102・103・108とともに一連の引水溝として機能した可能性がある。

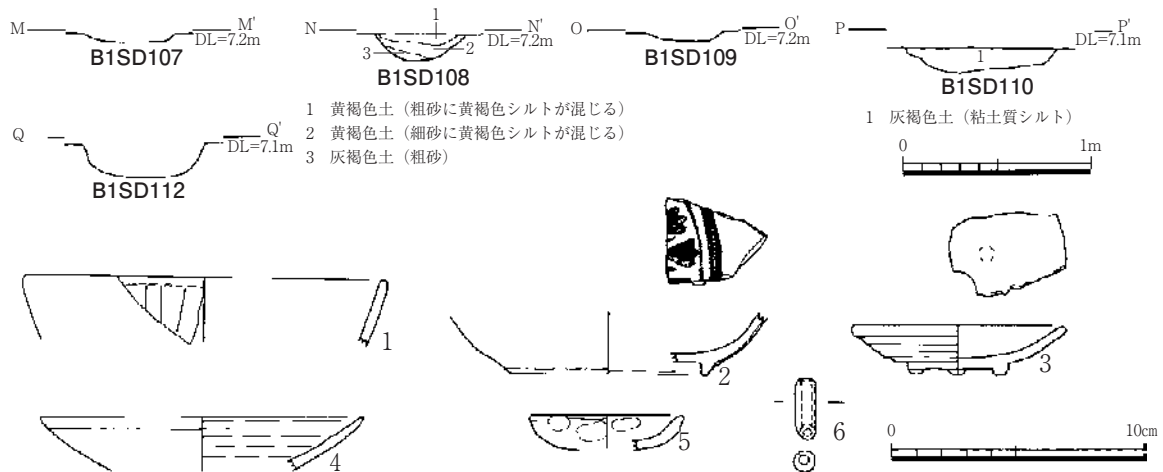
B1SD108 (B1-39図)

時期：16C末以降か 方向：N-36~55°-E

規模：幅0.45m 深さ0.07m 断面形態：皿状

埋土：黄褐色粗砂・灰褐色粗砂

床面標高：7.04m 接続：無



B1-39図 B1SD107~110・112 (B1SD110: 1~6)

出土遺物；無

所見；調査区を北東から南西方向に延びる溝である。西側には共通した軸方向・規模・埋土をもつ B1SD102・SD103・SD107が並行しており、上面を近世のB1SK51に切られる。検出長は13m。断面形態は皿状で、最下層には灰褐色粗砂層が堆積し、中～上層には細砂と粗砂が互層堆積している。出土遺物は皆無で時期の特定は困難であるが、埋土堆積状況の共通性からみて、並行する引水溝 B1SD102・103・107とともに一連の引水溝として機能した可能性がある。

B1SD109 (B1-39図)

時期；15C～17C初頭か **方向**；南北N-11°-E、東西N-77°-W

規模；幅0.3～0.55m 深さ0.04m **断面形態**；皿状

埋土；灰褐色粘土質シルト

床面標高；7.13m **接続**；無

出土遺物；無

所見；調査区を東西方向と南北方向に延びる溝である。切り合い関係では、近世から近代の B1SX117に切られ、中世区画溝B1SD102・B1SD107との切り合いは不明である。検出長は19m。断面形態は皿状で、埋土は灰褐色粘土質シルトである。出土遺物は皆無で機能時期の特定は困難であるが、周辺遺構との位置関係及び軸方向の共通性からみて中世の区画溝として機能した可能性が高い。

B1SD110 (B1-39図)

時期；15C～17C初頭 **方向**；N-6°-E

規模；0.85～0.65m 深さ0.11m **断面形態**；皿状

埋土；灰褐色粘土質シルト

床面標高；6.88m **接続**；無

出土遺物：青磁（碗1）、白磁（皿1）、青花（皿1）、土師質土器（杯1、皿1）他

所見：調査区を南北方向に延びる中世屋敷地の区画溝である。調査区北端を東西方向に延びるB1SD112とは同一の区画溝として機能した可能性が高いが、北西角部では両溝が接続せず、開口部が設けられている。切り合い関係では、弥生後期のB1SK169を切る。検出長は16m。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘土質シルトであり、最下層への砂の堆積等は認められない。

出土遺物は青磁碗、白磁皿、青花皿、土師質土器杯・皿等である。又、中世以外の遺物には弥生土器の混入が多く認められるものの、近世以降の遺物は全く含まれない。図示したものは龍泉窯系青磁碗（1）、白磁D類皿（3）、景德鎮窯系青花皿（2）、在地系の土師質土器杯（4）、京都系の土師質土器皿（5）、土錘（6）である。

これらの廃棄遺物は15世紀から16世紀代までの年代幅のもので構成されており、B1SD110はその機能時期を15～16世紀代におくことができる。又、埋土中に近世段階の遺物が全く認められないことから近世に引き続き区画溝として継続されたとは考え難く、中世末から近世初頭の間には本屋敷地区画溝は完全に埋没に至ったものとみられる。

B1SD112（B1-39図）

時期：15C～17C初頭か **方向**：N-84°-E

規模：幅0.50～0.60m 深さ0.18m **断面形態**：皿状

埋土：灰褐色粘土質シルト

床面標高：6.98m **接続**：無

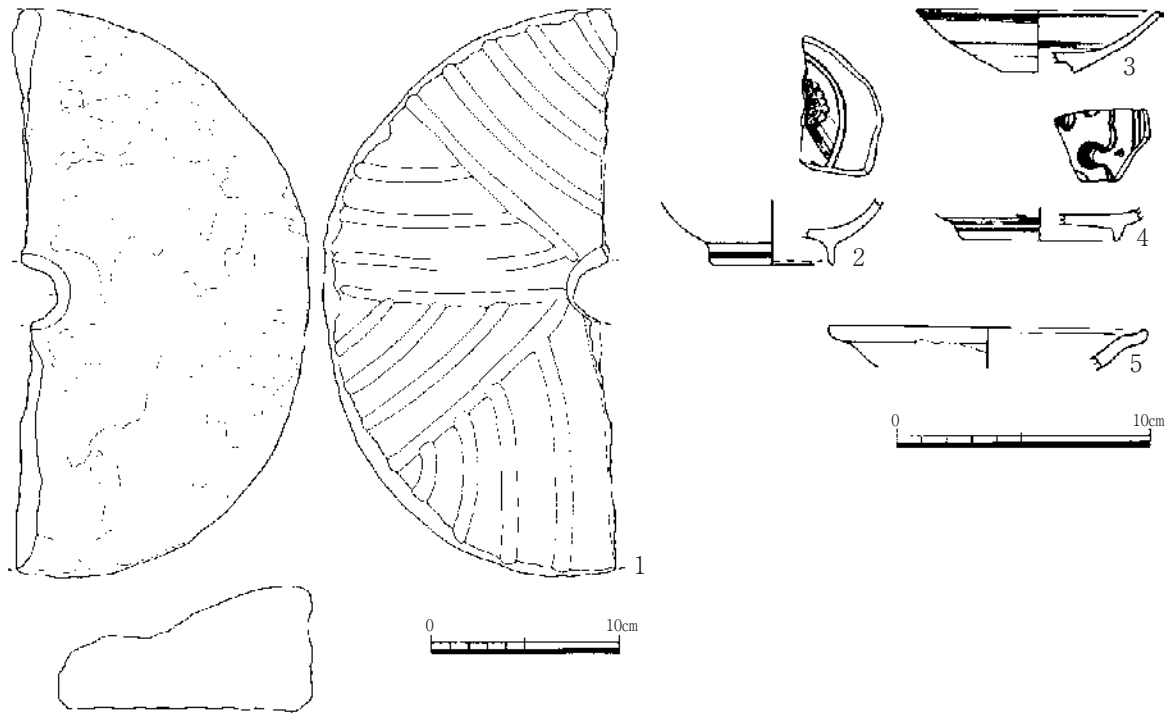
出土遺物：無

所見：調査区北端部を東西方向に延びる中世屋敷地の区画溝である。調査区北部を南北方向に延びるSD110とは同一の区画溝として機能した可能性が高いが、北西角部では両溝が接続せず、開口部が設けられている。検出長は8m。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色粘土質シルトであり、最下層への砂の堆積等は認められない。出土遺物は皆無であるが、同一の区画溝を形成するSD110との関連性からみると、B4SD112はその機能時期を15～16世紀代におくことができ、又、中世末から近世初頭の間には埋没に至った可能性が高い。

(4) ピット出土遺物と遺構外出土遺物 (B1-40図)

ここには、ピット出土の遺物 (1・2)、遺物包含層出土の遺物 (3~5) を図示している。

図示したものはB1P1001出土の砂岩製石臼 (1)、B1P1010出土の景德鎮窯系青花碗 (2)、遺物包含層出土の景德鎮窯系青花皿 (4)、漳州窯系青花皿 (3)、肥前産の灰釉溝縁皿 (5) である。



B1-40図 B1P1001・P1010、遺物包含出土遺物

4. B1区近世・近代の遺構と遺物

(1) 土坑

B1区ではB1SX101～104・111・113・117等の近世から近代までの遺物を含む大型規模の廃棄土坑が調査区東部に分布する。中でも幕末から明治初頭期の廃棄土坑B1SX113は、大型で遺物量も突出している。墓坑は調査区東部にて墓群を構成する19世紀代の墓坑8基（B1SK113～118・144・152）を検出している。この他に、埋土特徴からみて近世から近代の遺構とみられるものが調査区東部で多く検出されたが、無遺物のものが殆どで時期・性格とも不明である。

B1-5表 B1区近世土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
B1SK101	長方形	箱形	2.13	1.05	43	N-77°-W	灰黒色粘土質シルト	近世SK	18～19C	
B1SK102	円形	箱形	2.15	2.10	38		灰褐色粘土質シルト他	なし	近世	
B1SK103	楕円形	箱形	1.26	1.14	26		灰色粘土質シルト他	近世SK	18C後半～19C	
B1SK107	円形	箱形	0.98	0.86	14		灰黄褐色粘土質シルト	なし	近世	
B1SK109	方形	逆台形	1.86	1.84	36	N-79°-W	灰色粘土質シルト他	なし	19C前半～中葉	
B1SK113	長方形	箱形	1.86	0.50	46	N-15°-E	褐灰色粘土質シルト	なし	19C中葉～後半	墓坑
B1SK114	長方形	箱形	1.98	0.56	42	N-10°-E	褐灰色粘土質シルト	なし	19C中葉～後半	墓坑
B1SK115	長方形	箱形	1.80	0.60	4	N-15°-E	褐灰色粘土質シルト	なし	19C	墓坑
B1SK116	長方形	箱形	1.78	0.62	12	N-15°-E	褐灰色粘土質シルト	なし	19C	墓坑
B1SK117	長方形	箱形	1.80	0.64	8	N-11°-E	褐灰色粘土質シルト	なし	19C中葉	墓坑
B1SK118	長方形	箱形	1.86	0.56	12	N-11°-E	褐灰色粘土質シルト	なし	19C中葉	墓坑
B1SK144	長方形	箱形	1.68	0.60	50	N-15°-E	褐灰色粘土質シルト	なし	19C前半～中葉	墓坑
B1SK152	長方形	箱形	1.17	残0.44	16	N-9°-E	黒褐色粘土質シルト	なし	19C中葉か	墓坑
B1SK153	楕円形	皿状	2.40	0.60	36	N-7°-E	灰褐色シルト質粘土	なし	18C～19C	
B1SK155	楕円形	箱形	0.94	0.76	26		灰褐色粘土質シルト	なし	近世	
B1SX102	長方形	箱形	5.40	3.00	120	N-17°-E	灰褐色粘土質シルト他	なし	19C中葉	廃棄土坑
B1SX104	不整形	不整形	3.40	3.30	108		灰褐色粘土質シルト	なし	19C中葉	廃棄土坑
B1SX113	長方形	逆台形	10.60	3.30	210	N-75°-W	灰褐色粘土質シルト他	なし	19C中葉	廃棄土坑
B1SX115	円形	逆台形	2.48	2.30	82		灰色粘土質シルト他	なし	近世	廃棄土坑

B1SK101 (B1-41図)

時期：18～19C 形状：長方形 主軸方向：N-77°-W

規模：2.13×1.05m 深さ0.43m 断面形態：箱形

埋土：灰黒色粘土質シルト

付属遺構：無 機能：不明

出土遺物：磁器染付（体部-碗1）、陶器（底部-甕1、細片-3）

所見：調査区南東部に位置する土坑で、近世土坑B1SK102・103に近接する。遺物は少量であるが、肥前産の青磁染付碗の体部片、鉄釉甕の底部と体部細片、灰釉の陶器細片が出土している。

B1SK102 (B1-41図)

時期：近世 形状：円形 主軸方向：—

規模：2.15×2.10m 深さ0.38m 断面形態：箱形

埋土：灰褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト・灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁部－中碗1）、瓦片2

所見；調査区南東部に位置する円形土坑で、近世土坑B1SK101・103に近接する。床面はほぼ平坦で、床面周縁部を巡るリング状の落ち込みを部分的に検出している。出土遺物は少量で、灰釉丸碗の口縁部1点と瓦片のみである。

B1SK103（B1-41図）

時期；18C後半～19C **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

規模；1.26×1.14m **深さ**0.26m **断面形態**；箱形

埋土；灰色粘土質シルト・灰褐色粘土質シルト・暗灰黄褐色粘土質シルト・灰褐色砂

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；磁器染付（体部－皿1）

所見；調査区南東部に位置する土坑である。同質の埋土をもつ近世土坑と切り合うが前後関係は不明である。出土遺物は肥前産の染付小皿体部片1点のみである。

B1SK107（B1-41図）

時期；近世か **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；0.98×0.86m **深さ**0.14m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁部－小杯1）

所見；調査区南部に位置する小型の円形土坑である。出土遺物は灰釉端反形小杯の口縁部1点と瓦片1点のみである。

B1SK109（B1-41図）

時期；19C前半～中葉 **形状**；方形 **主軸方向**；N-79°-W

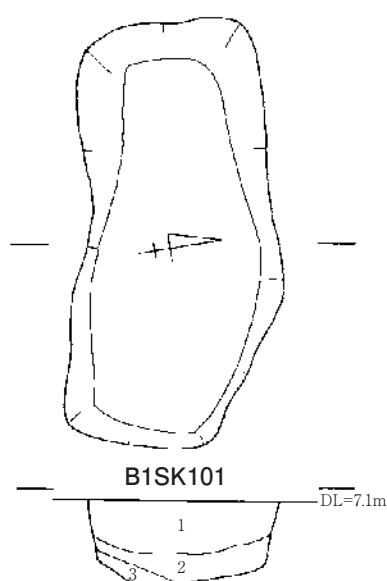
規模；1.86×1.84m **深さ**0.36m **断面形態**；逆台形

埋土；灰色粘土質シルト・灰黒色粘土質シルト

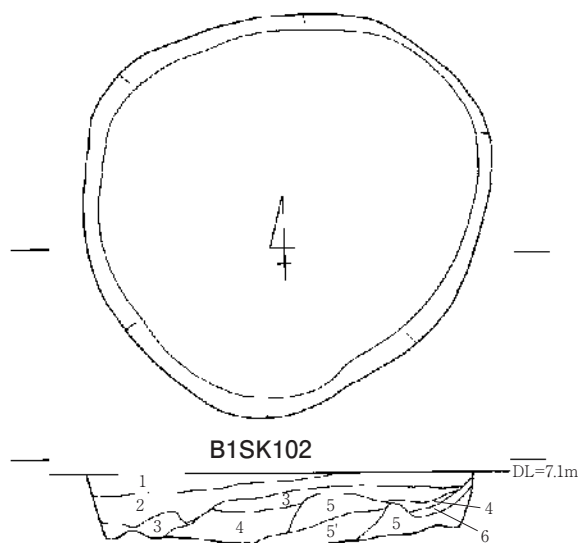
付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；磁器染付（口縁部－小杯1、体部－小瓶1）、陶器（口縁部－中碗1・播鉢1・灯明皿1、体部－甕1）、土師質土器（体部－焜炉1）

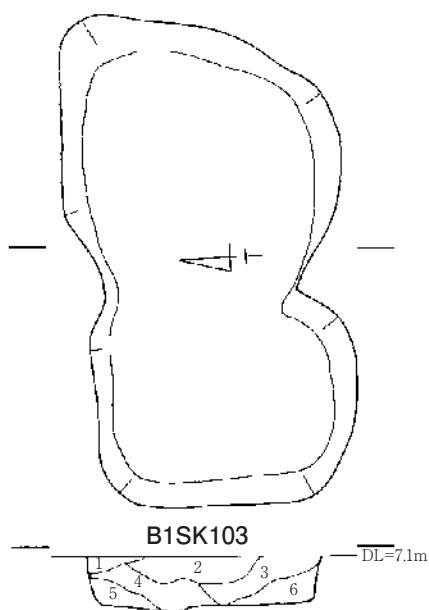
所見；調査区東部に位置する大型の方形土坑で、同じく大型の廃棄土坑B1SX102・SX104に近接している。出土遺物は肥前産の染付若松文小瓶、肥前産又は肥前系の灰釉丸碗、堺明石系播鉢、灰釉灯明皿、鉄釉甕の体部片である。



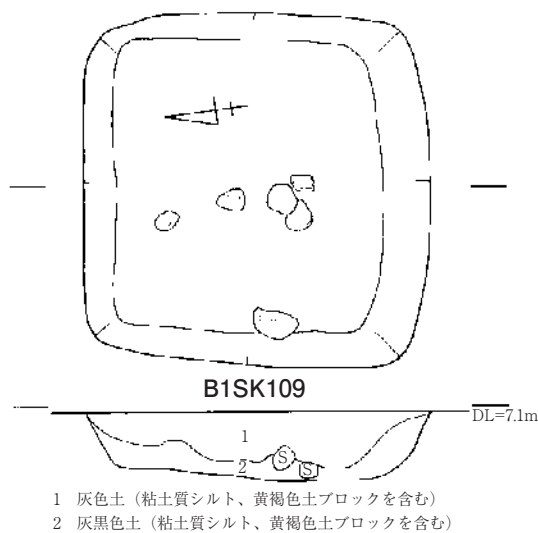
- 1 灰黒色土 (粘土質シルト、褐色土ブロックを含む)
- 2 暗灰黒色土 (粘土質シルト、褐色土ブロックを含む)
- 3 暗灰黒色土 (粘土質シルト、褐色土及び黒色土ブロックを含む)



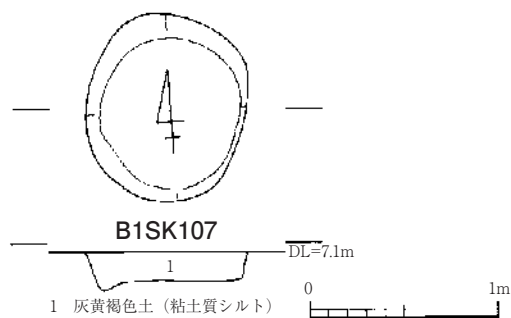
- 1 灰褐色土 (粘土質シルト)
- 2 灰褐色土 (粘土質シルト、褐色土ブロックを含む)
- 3 黒褐色土 (粘土質シルト)
- 4 灰黒褐色土 (粘土質シルト)
- 5 灰黒褐色土 (粘土質シルト、黒褐色土ブロックを含む)
- 5' 灰黒褐色土 (粘土質シルト、黒褐色土ブロックを少量含む)
- 6 灰黄褐色土 (粘土質シルト)



- 1 灰色土 (粘土質シルト)
- 2 灰褐色土 (粘土質シルト)
- 3 灰色土 (粘土質シルト、褐色土を含む)
- 4 暗灰黄褐色 (粘土質シルト、黒褐色土ブロックを含む)
- 5 灰色土 (粘土質シルト、黄褐色土を少量含む)
- 6 灰褐色砂

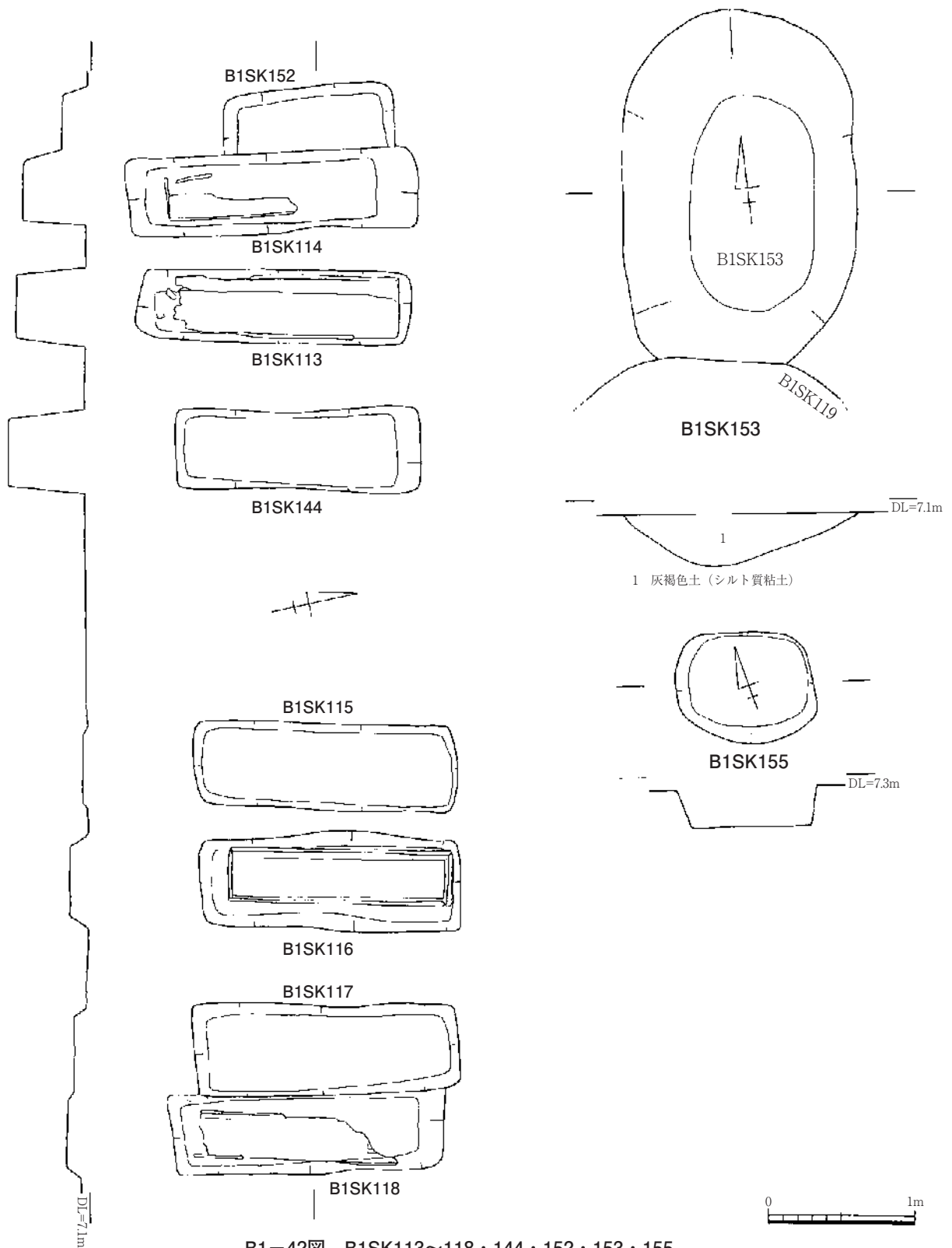


- 1 灰色土 (粘土質シルト、黄褐色土ブロックを含む)
- 2 灰黒色土 (粘土質シルト、黄褐色土ブロックを含む)



- 1 灰黄褐色土 (粘土質シルト)

B1-41図 B1SK101~103・107・109



B1SK113 (B1-42・43図)

時期：19C中葉～後半 形状：長方形 主軸方向：N-15°-E

規模：1.86×0.50m 深さ0.46m 断面形態：箱形

埋土：褐灰色粘土質シルト

付属遺構：無 機能：墓坑

出土遺物：磁器染付（完形-小杯1）

所見：調査区北東部に位置する土葬墓である。又、西に隣接するB1SK114と組をなし、東西に近接するB1SK114～118・SK144・SK152とは同じ墓群を構成している。土坑床面と側面には木棺の一部が残存しており、棺床直上から完形の染付小杯1点が出土している。図示したものは酸化コバルトによる染付草花文平形小杯（1）である。

B1SK114 (B1-42・43図)

時期：19C中葉～後半 形状：長方形 主軸方向：N-10°-E

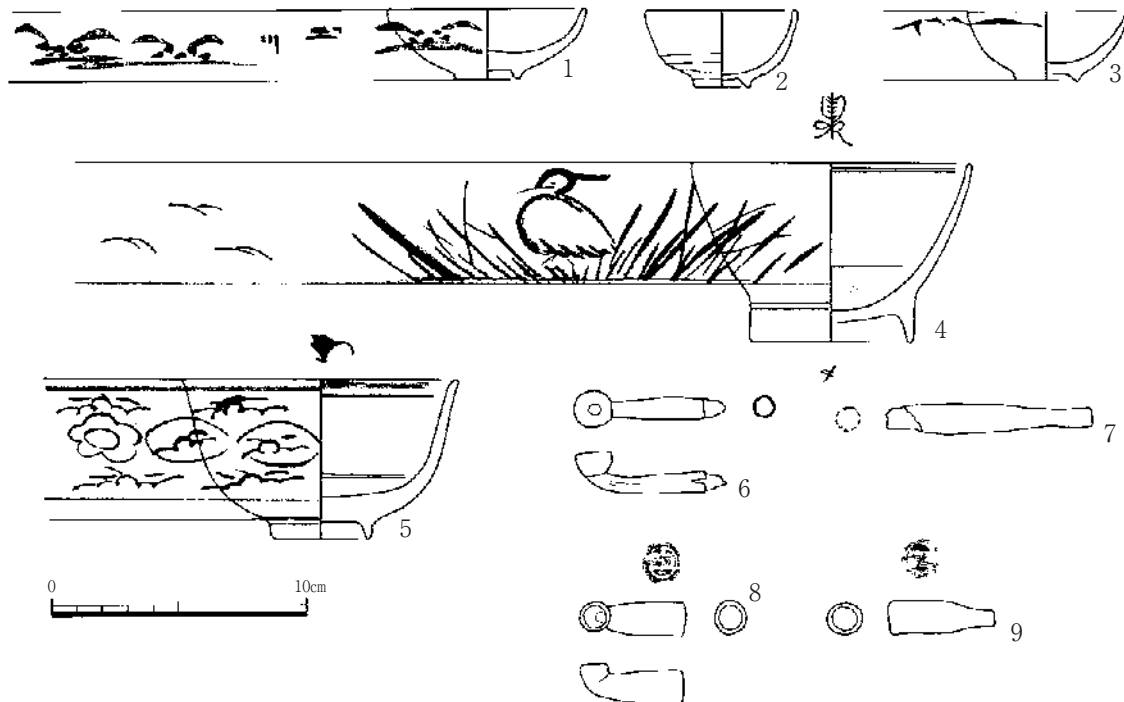
規模：1.98×0.56m 深さ0.42m 断面形態：箱形

埋土：褐灰色粘土質シルト

付属遺構：無 機能：墓坑

出土遺物：陶器（完形-小杯1）

所見：調査区北東部に位置する土葬墓で、土葬墓B1SK152を切っている。又、東に隣接するB1SK113と組をなし、東西に近接するB1SK152・SK113～118とは同じ墓群を構成している。土坑床



B1-43図 B1SK113・114・116・118・144

(B1SK113：1, B1SK114：2, B1SK116：6・7, B1SK118：3・4, B1SK144：5・8・9)

面と側面には木棺の一部が残存しており、床直上から完形の灰釉陶器小杯1点が出土している。図示したものは灰釉丸形小杯（2）である。

B1SK115（B1-42図）

時期；19C 形状；長方形 主軸方向；N-15°-E

規模；1.80×0.60m 深さ0.04m 断面形態；箱形

埋土；褐灰色粘土質シルト

付属遺構；無 機能；墓坑

出土遺物；無

所見；調査区北東部に位置する土葬墓で、東に隣接するB1SK116と組をなす。B1SK115は床面近くまで削平を受けているため出土遺物は皆無であるが、組をなすB1SK116との関連から19世紀頃に時期比定される。

B1SK116（B1-42・43図）

時期；19C 形状；長方形 主軸方向；N-15°-E

規模；1.78×0.62m 深さ0.12m 断面形態；箱形

埋土；褐灰色粘土質シルト

付属遺構；無 機能；墓坑

出土遺物；銅製品（煙管雁首1・々吸口1）、入歯

所見；調査区北東部に位置する土葬墓で、東に隣接するB1SK115と組をなす。上面を強く削平されるが、床面には幅38cm長さ152cmの木棺が残存する。出土遺物は床面出土の煙管雁首（6）、吸口（7）、入歯である。

B1SK117（B1-42図）

時期；19C中葉 形状；長方形 主軸方向；N-11°-E

規模；1.80×0.64m 深さ0.08m 断面形態；箱形

埋土；褐灰色粘土質シルト

付属遺構；無 機能；墓坑

出土遺物；無

所見；調査区北東部に位置する土葬墓で、東に隣接するB1SK118と組をなす。B1SK117は床面近くまで削平を受けているため出土遺物は皆無であるが、組をなすB1SK118との関連から19世紀中葉頃に時期比定される。

B1SK118（B1-42・43図）

時期；近世19C中葉 形状；長方形 主軸方向；N-11°-E

規模；1.86×0.56m 深さ0.12m 断面形態；箱形

埋土；褐灰色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；墓坑

出土遺物；磁器染付（完形－中碗1・小杯1）

所見；調査区北東部に位置し、西に隣接するB1SK117と組をなす。上面を強く削平されるが、床面には木棺の一部が残存する。遺物は棺床直上出土の染付中碗、染付小杯、鉄釘である。図示したのは能茶山産の染付鷲文広東形碗（4）、肥前産の染付笹文小杯（3）である。

B1SK144（B1-42・43図）

時期；19C前半～中葉 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-15°-E

規模；1.68×0.60m 深さ0.50m **断面形態**；箱形

埋土；褐灰色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；墓坑

出土遺物；磁器染付（完形－中碗）、白磁（煙管雁首1・ク吸口1）、寛永通寶1、鉄釘

所見；調査区北東部に位置する土葬墓で、東西に近接するB1SK113～118・SK152とは同じ墓群を構成している。遺物は北側床面から頭骨、完形の染付中碗、白磁煙管、寛永通寶1枚が、その他床面から鉄釘20数本が出土している。図示したものは肥前系の染付牡丹唐草文端反形碗（5）、刻印をもつ白磁煙管雁首（8）と吸口（9）である。

B1SK152（B1-42図）

時期；19C中葉か **形状**；長方形 **主軸方向**；N-9°-E

規模；1.17×残存0.44m 深さ0.16m **断面形態**；箱形

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；墓坑

出土遺物；無

所見；調査区北東部に位置する土坑で、土葬墓B1SK114に切られる。東に近接するSK113～118・SK144とは同じ墓群を形成する。出土遺物は皆無であるが、周辺遺構との前後関係からみて19C中葉頃の墓坑と考えられる。

B1SK153（B1-42図）

時期；18C～19C **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-7°-E

規模；残存2.40×1.60m 深さ0.36m **断面形態**；皿状

埋土；灰褐色シルト質粘土

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；磁器染付（口縁部－中碗1、底部－小碗1）、陶器（細片－1）

所見；調査区南部に位置する円形土坑である。出土遺物は肥前産の染付筒型碗の底部、染付端反形中碗である。

B1SK155 (B1-42図)

時期；近世 **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

規模；0.94×0.76m 深さ0.26m **断面形態**；箱形

埋土；灰褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁部-中碗1）

所見；調査区東部に位置する小型の楕円形土坑である。出土遺物は僅少で肥前又は肥前系の灰釉丸碗口縁部1点のみである。

B1SX102 (B1-44・45図)

時期；19C 中葉 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-17°-E

規模；5.40×3.00m 深さ1.20m **断面形態**；箱形

埋土；灰褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；廃棄土坑

出土遺物；陶磁器・土器磁器・陶器・土師質土器・瓦質土器・瓦片

所見；調査区東部に位置する大型の長方形土坑である。床面はほぼ平坦であるが、北部と西部にテラス状の高まりを有する。埋土は灰褐色粘土質シルトを主体とし、埋土中には木片と円礫が多く含まれる。

埋土中からは近世陶磁器、土器類が多量に出土しており、明治以降の遺物も少量含まれる。図示したものは、能茶山産の染付反端形碗（3・4）と染付猪口（2）、讃岐岡本系の焙烙（5・6）である。

B1SX104 (B1-44図)

時期；19C中葉 **形状**；不整形 **主軸方向**；—

規模；3.40×3.30m 深さ1.08m **断面形態**；不整形

埋土；灰褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；廃棄土坑

出土遺物；磁器・陶器・土師質土器・瓦質土器・瓦片

所見；調査区東部に位置する土坑である。床面は中央が落ち込み南部にテラス状の高まりを有する。埋土は灰褐色粘土質シルトを主体とし、埋土中に拳大の円礫が含まれる。出土遺物は近世陶磁器、土器類で、明治以降の遺物も少量含まれる。

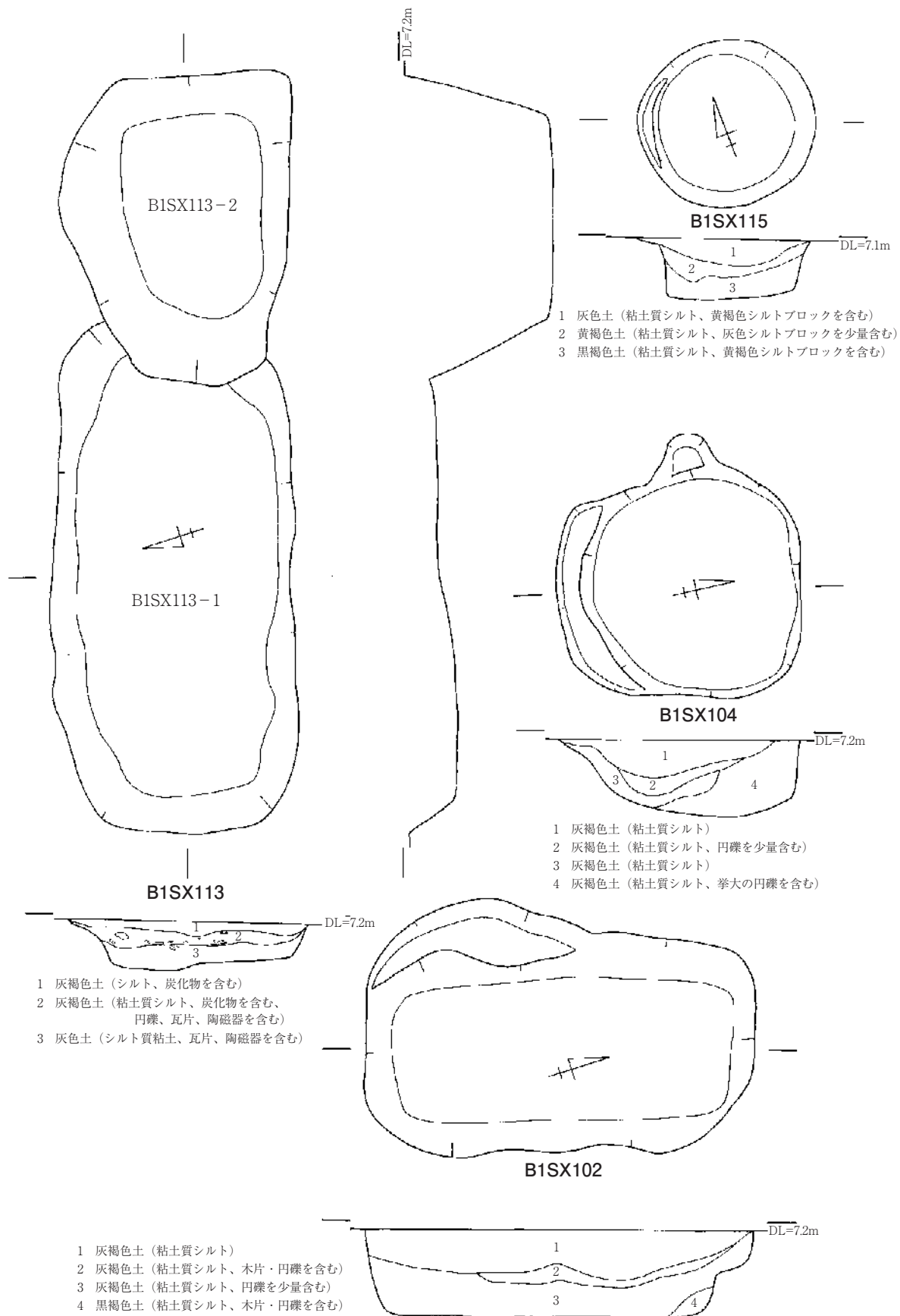
B1SX113 (B1-44・46～61図)

時期；19C中葉 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-75°-W

規模；10.60×3.30m 深さ西部0.68m、東部2.10m **断面形態**；逆台形

埋土；灰色シルト質粘土・灰褐色粘土質シルト

付属遺構；無 **機能**；不明



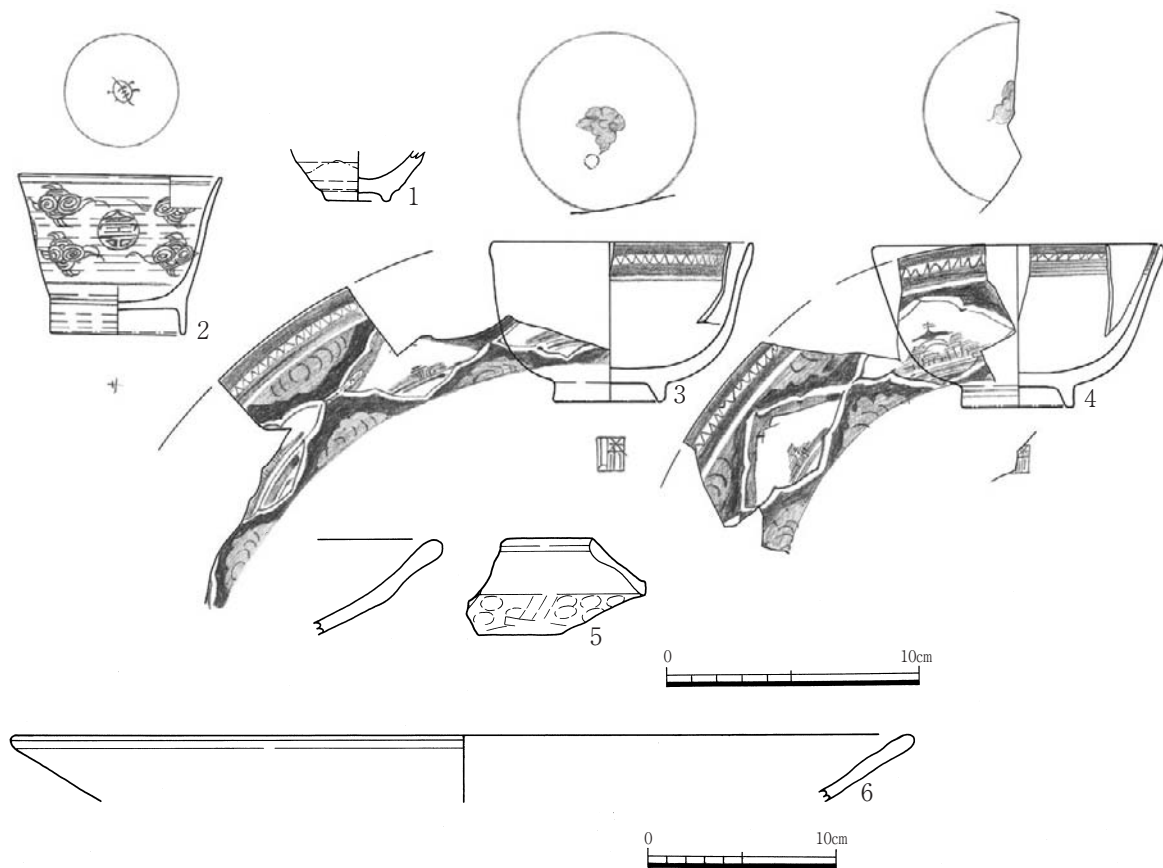
B1-44図 B1SX102・104・113・115



出土遺物：磁器（中碗143・小碗28・小杯30・碗蓋28・猪口16・小皿25・中皿大皿7・鉢24・瓶14・仏飯器3・香炉2・紅皿5・段重2・蓋物蓋1・火入れ2・水注1）、陶器（中碗25・小碗小杯20・小皿83・中皿7・鉢2・捏鉢9・鍋行平17・土瓶11・燗徳利14・徳利4・火入れ香炉7・瓶3・壺2・甕10・火鉢水鉢3・播鉢17・灯明皿々受皿34・鳥の水入れ1）、土師質土器（焜炉8・火消し壺1・々蓋3・火鉢1・焙烙7・釜6・かわらけ4・土人形片120）、瓦質土器（釜1）（数値は口縁部・底部点数から算出した推定個体数）、瓦片多数、貝殻、木片

所見：調査区北東部に位置する大型の廃棄土坑である。床面は東西で高低差をもち、浅いテラス状を呈する西側部分と深い落ち込み状を呈する東側部分に分かれる。なお、本遺構は現地調査段階には東西別遺構（B1SX113・SX118）として検出及び遺物取り上げ作業を行ったが、整理の進行に従って東西の出土破片間での接合が高い確立で成立することが明らかとなり、又、埋土も共通することから、ここでは東西を同一の廃棄土坑として報告している。埋土は灰色シルト質粘土と灰褐色粘土質シルトを主体とし、埋土中には炭化物、木片、貝殻とともに瓦片、土器・陶磁器類が多量に含まれている。

出土遺物は近世から明治初頭までの陶磁器・土器類である。遺物は18世紀後半から19世紀中葉ま



B1-45図 B1SX102・115 (B1SX102: 2~6, B1SX115: 1)

でのものが主体を占め、酸化コバルトを用いた明治以降の染付磁器も少量含まれる。この他、出土遺物中には、中世の混入遺物とともに、17世紀前半から中葉の遺物（50・63・101）、17世紀後葉から18世紀前半の遺物（48・54・56・57・58）も僅かに認められる。

図示したものは（1～205）である。能茶山窯産の磁器染付中碗（1～7・9～11・17～19・21～28）、小碗（29～31・36・37・41・42）、鉢（65・67・69・73・76）、猪口（78）、蓋（82）、小瓶（95）、陶器鉄釉小皿（114・115・118・119）、灰釉小皿（116・117）、灰釉餌猪口（130）、捏鉢又は片口（131・132・133）、行平（135・136）、鍋（138）、徳利（155・156）、水注（159）、鉄釉壺（163）、鉄釉甕（166～169）、灰釉甕（164・165）、灯明受皿（174・175）、植木鉢か（179）、器種不明（176・177）。尾戸窯産の灰釉碗（102～106・108）、灰釉皿（121・122）、土瓶蓋（140・141）、雲助形土瓶（145～147）、徳利（152）。尾戸窯又は能茶山窯の可能性をもつ灰釉小皿（120・123）、火入れ（178）。肥前産の染付中碗（12）、小碗（33）、色絵染付小碗（35）、色絵小杯（44・45）、青磁中碗（48）、染付皿（50・54・56・59・60・63）、色絵小皿（55）、糸切り細工による瑠璃釉小皿（57）、染付鉢（58）、蓋（86・89）、火入れ（91）、仏飯器（93）、青磁火入れ（94）、小瓶（95・98）、神酒徳利（96）、髪油壺（100）、灰釉碗（101）。瀬戸・美濃産の染付中碗（15・16）、染付小碗（39）、太白手皿（61）、馬の目皿（125）、灰釉徳利（153）、火鉢（180）。信楽産の灰釉小碗（109）、小杯（113）、灰釉蓋物（128・129）、カンテラ（162）。京・信楽系の色絵半球形小碗（111）。萩のビラ掛け碗（110）。鉛釉を施釉する陽刻型打成形の鉢で、志度焼（源内焼）の可能性をもつもの（111）、等を図示している。

B1SX113の遺物廃棄状況と遺物組成は、西に隣接するB4区の大型廃棄土坑B4SK442、及び周辺遺構の廃棄状況とも共通性がみられる。こうしたことから、B1SX113についても、明治初頭頃の一括遺物廃棄に伴う廃棄坑と捉えられる。

B1SX115（B1-44・45図）

時期：近世 **形状：**円形 **主軸方向：**—

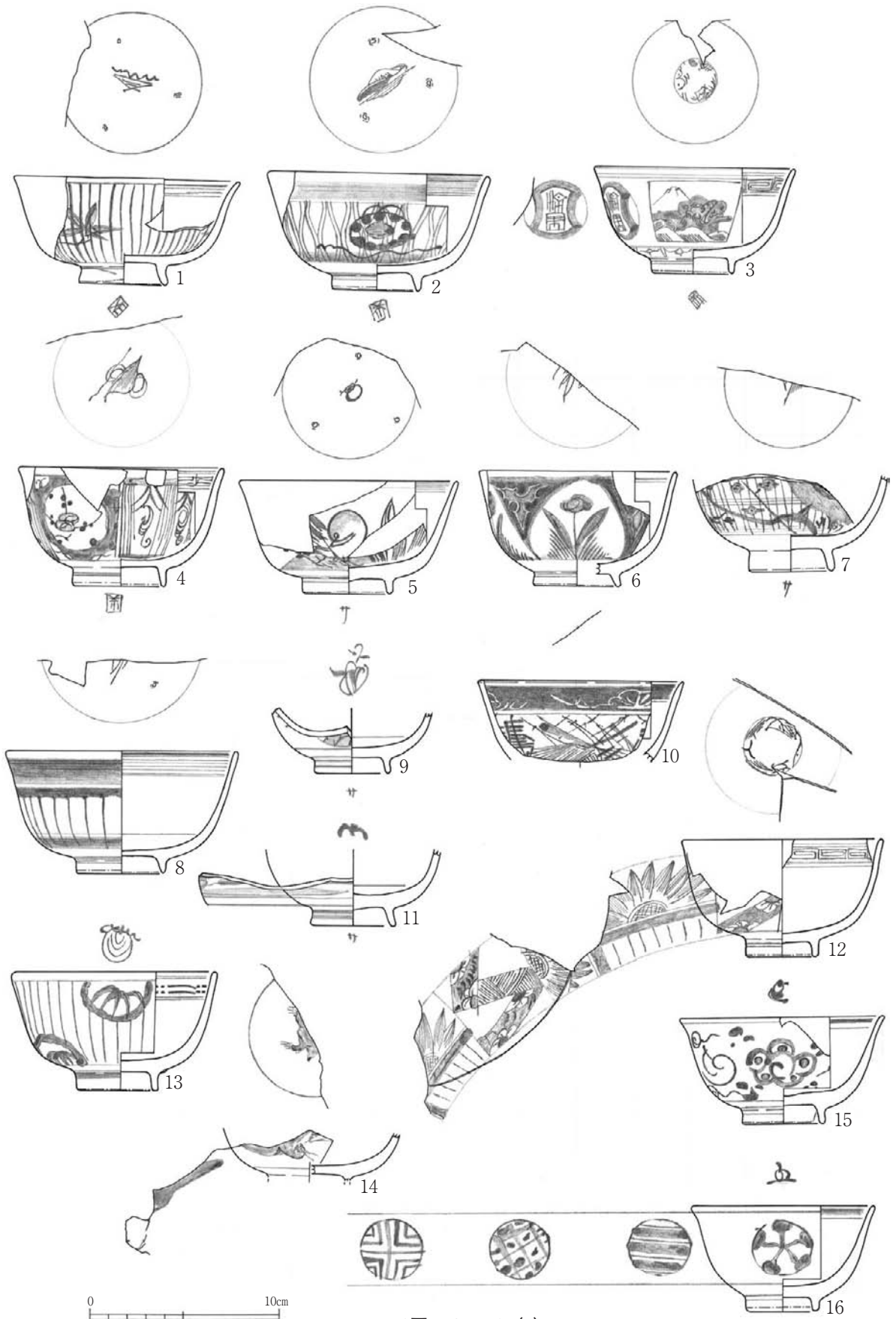
規模：2.48×2.30m **深さ**0.82m **断面形態：**逆台形

埋土：灰色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト

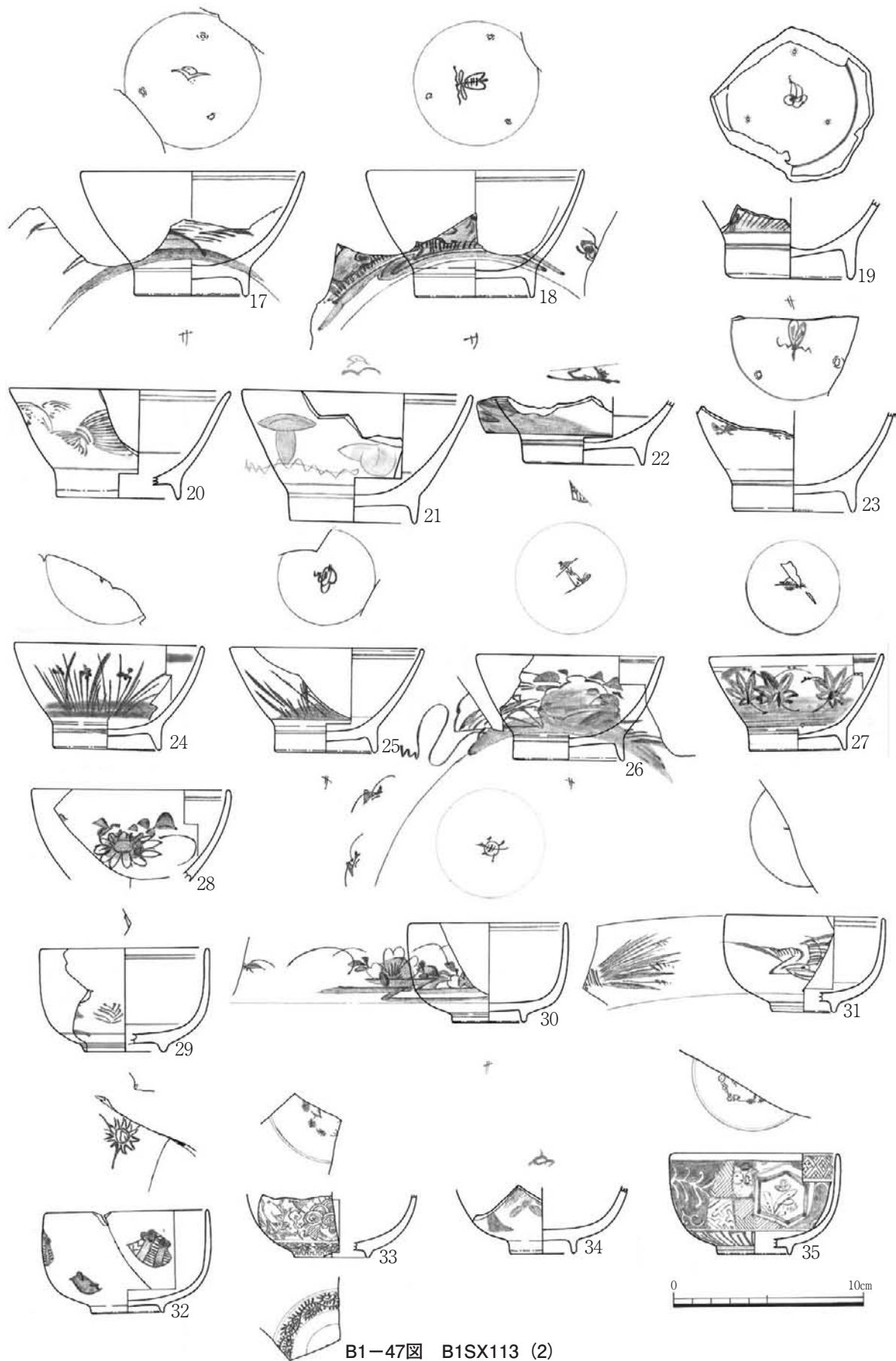
付属遺構：無 **機能：**不明

出土遺物：近世陶磁器・土器

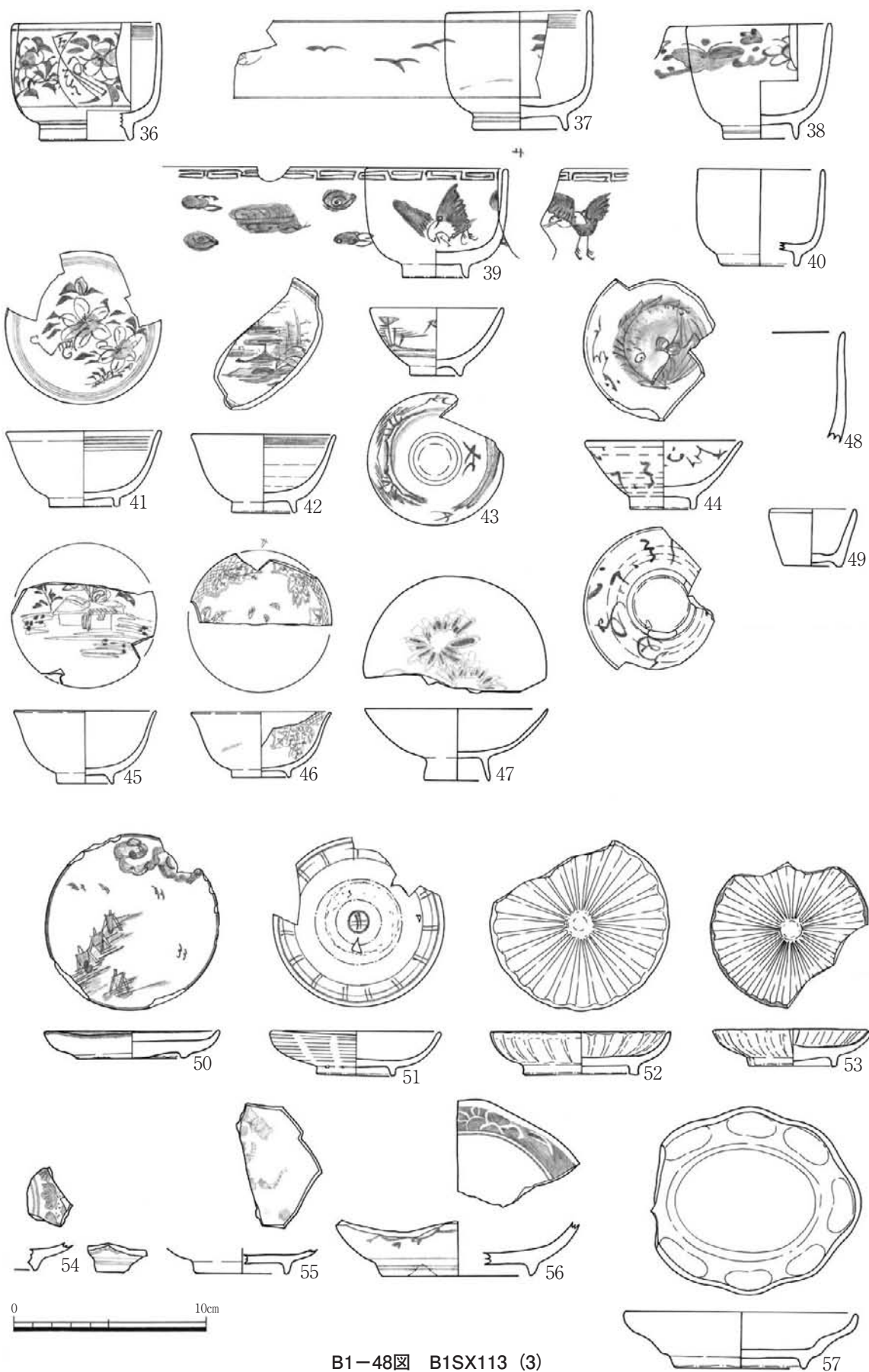
所見：調査区南部に位置する円形土坑である。断面形態は逆台形で、床面はほぼ平坦である。埋土中より、肥前産の白磁紅皿、18世紀代に比定される丹波焼甕、肥前又は肥前系の灰釉陶器皿、等の陶磁器・土器類が多量に出土している。



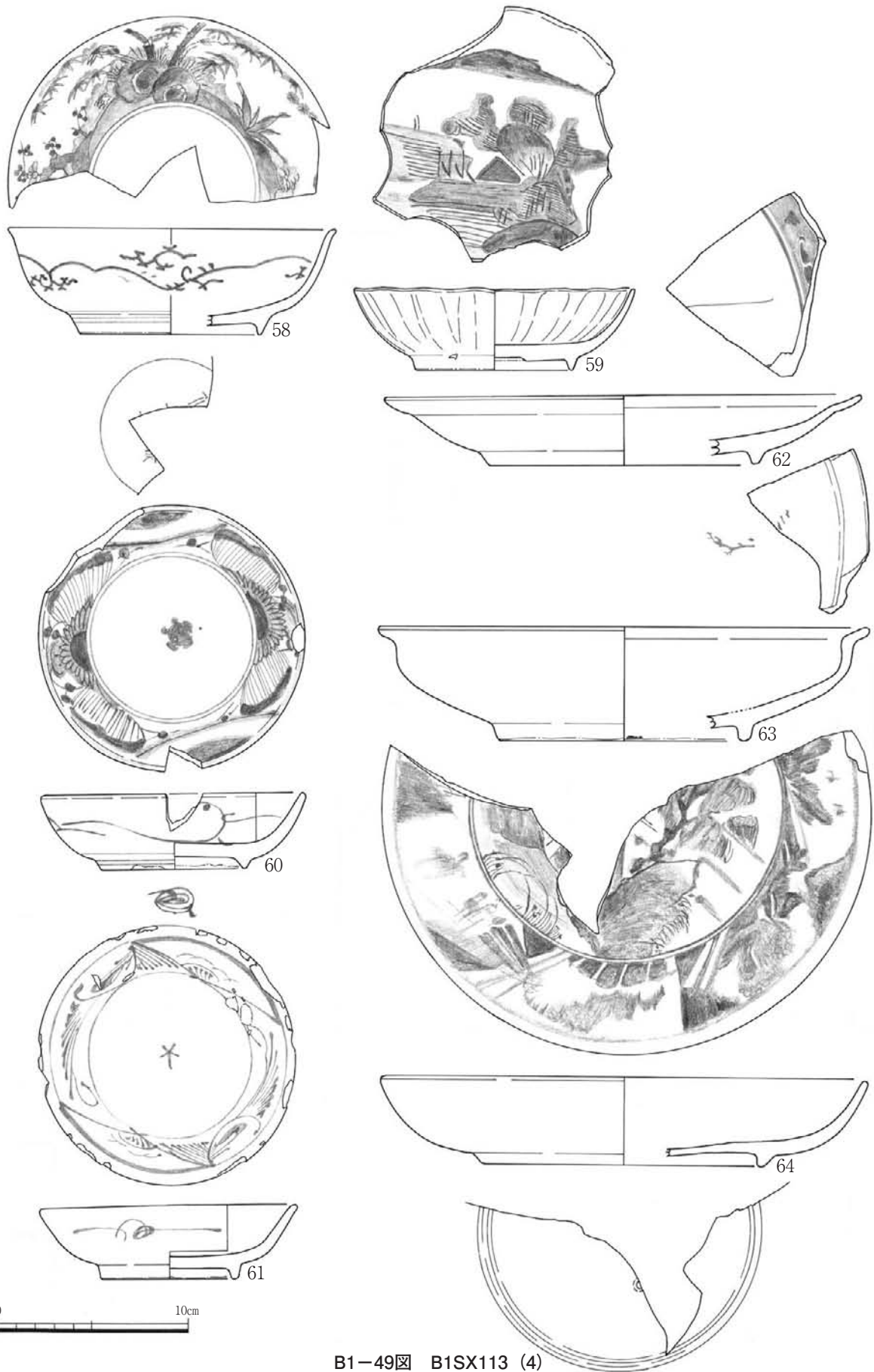
B1-46 B1SX113 (1)



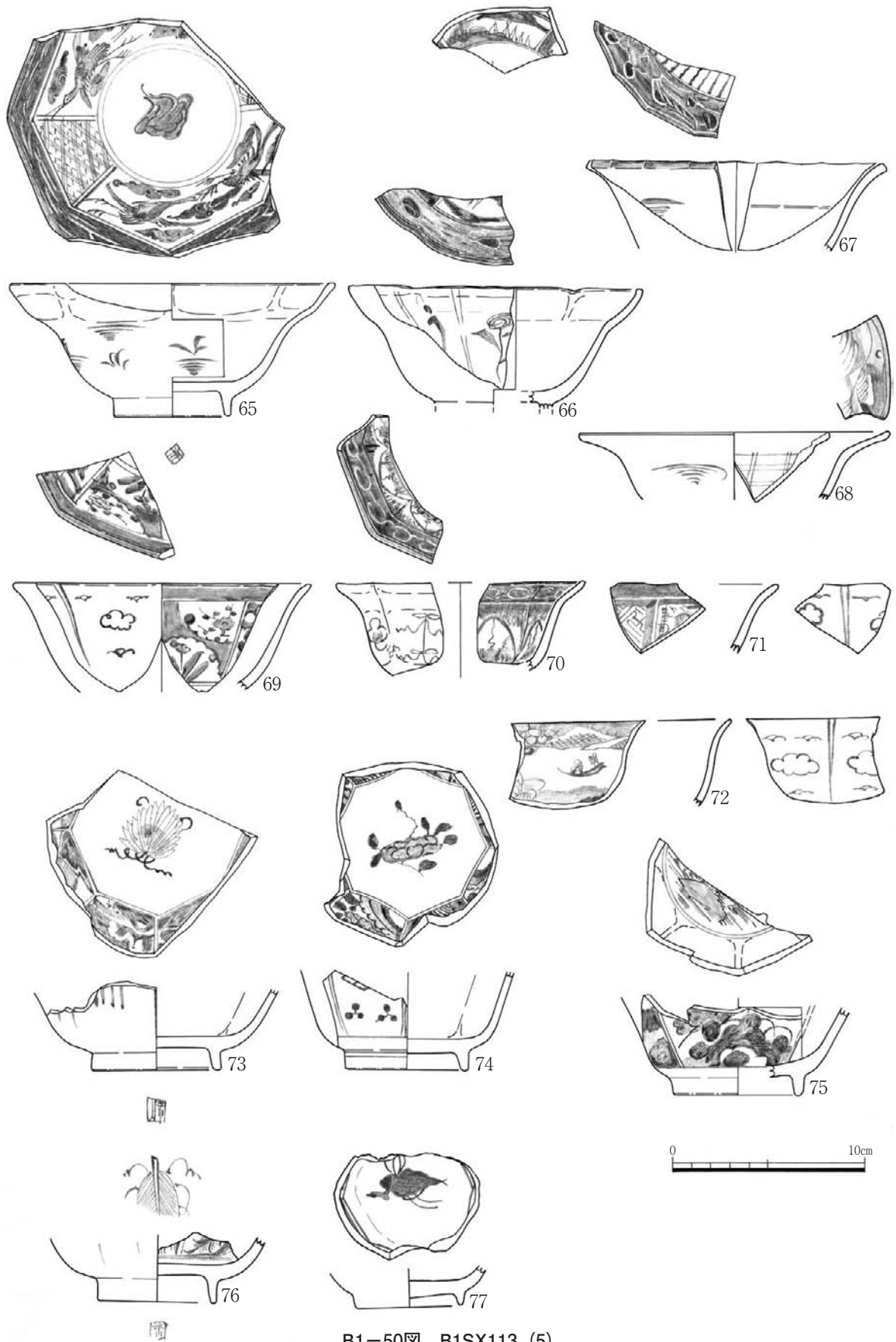
B1-47图 B1SX113 (2)



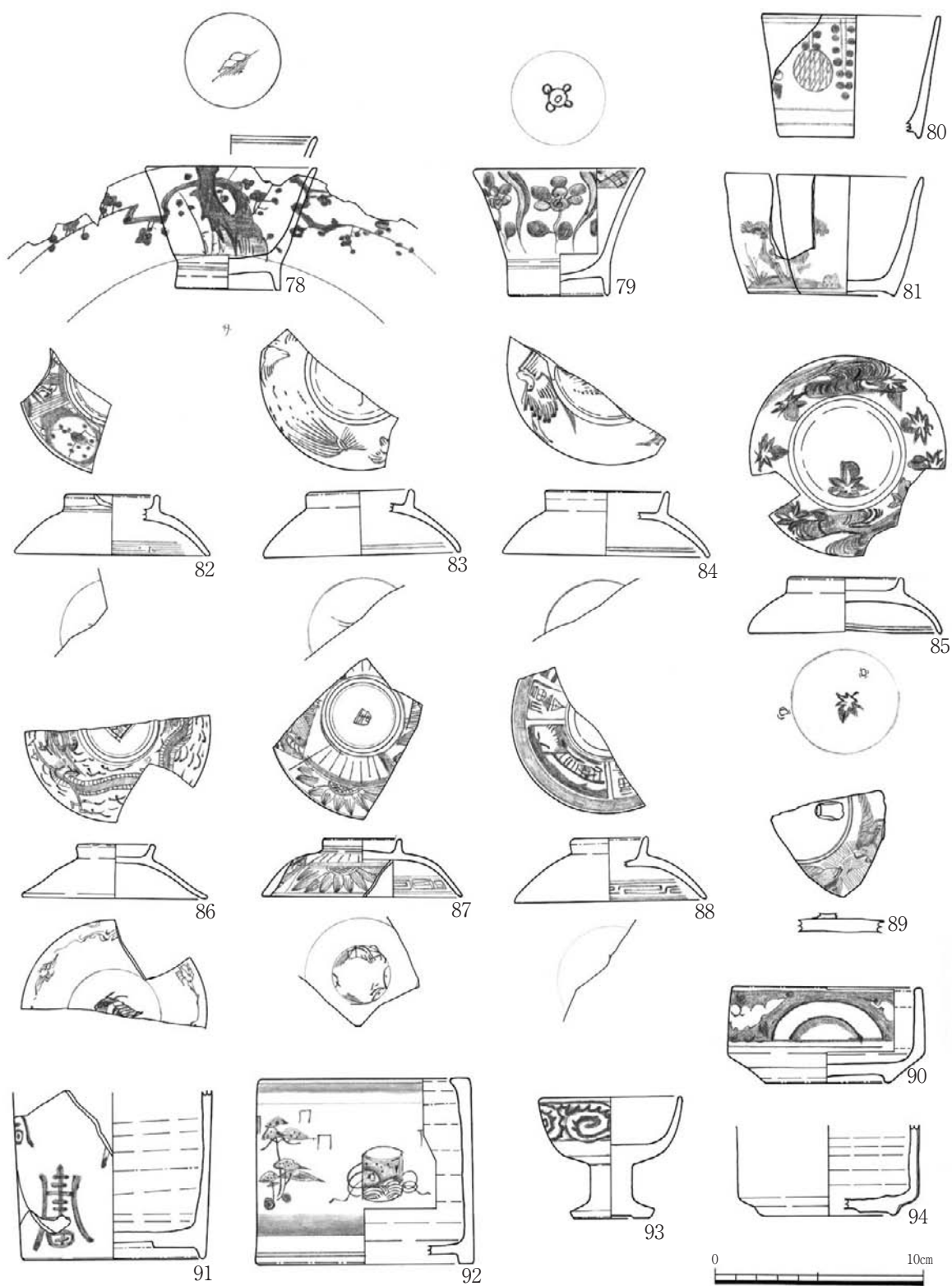
B1-48図 B1SX113 (3)



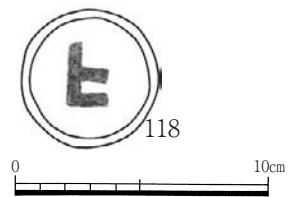
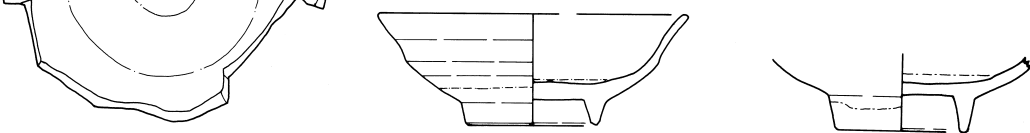
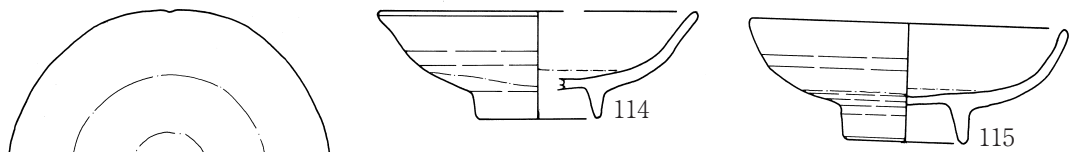
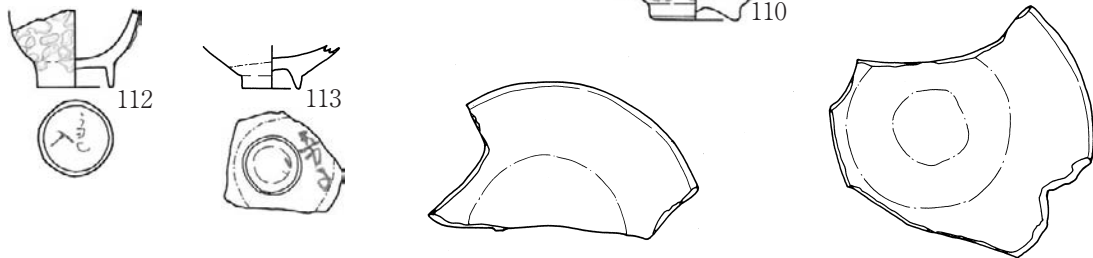
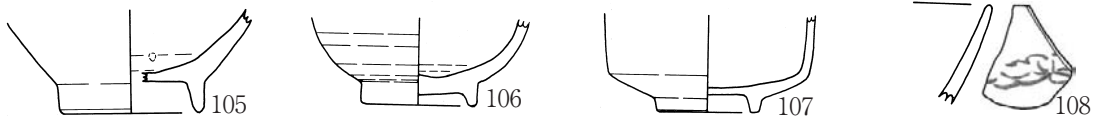
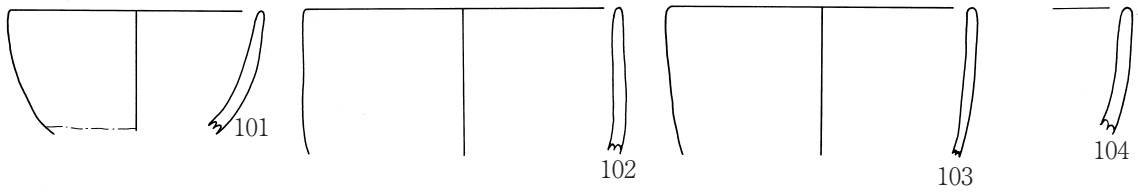
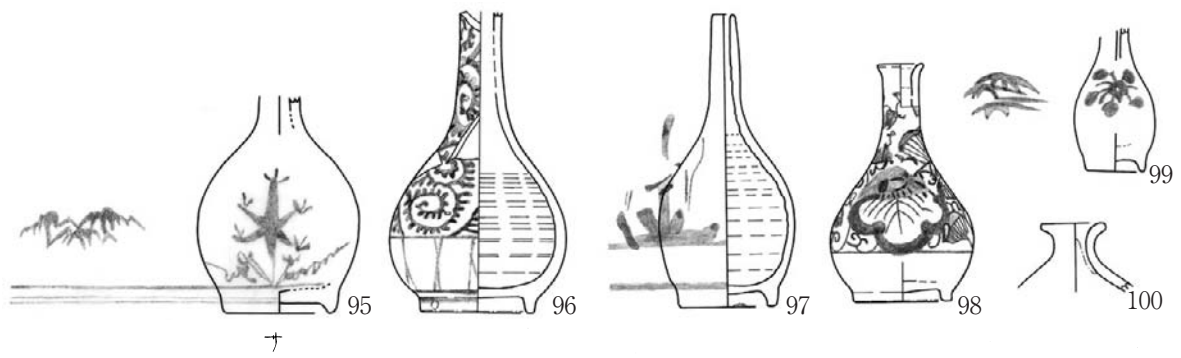
B1-49 B1SX113 (4)



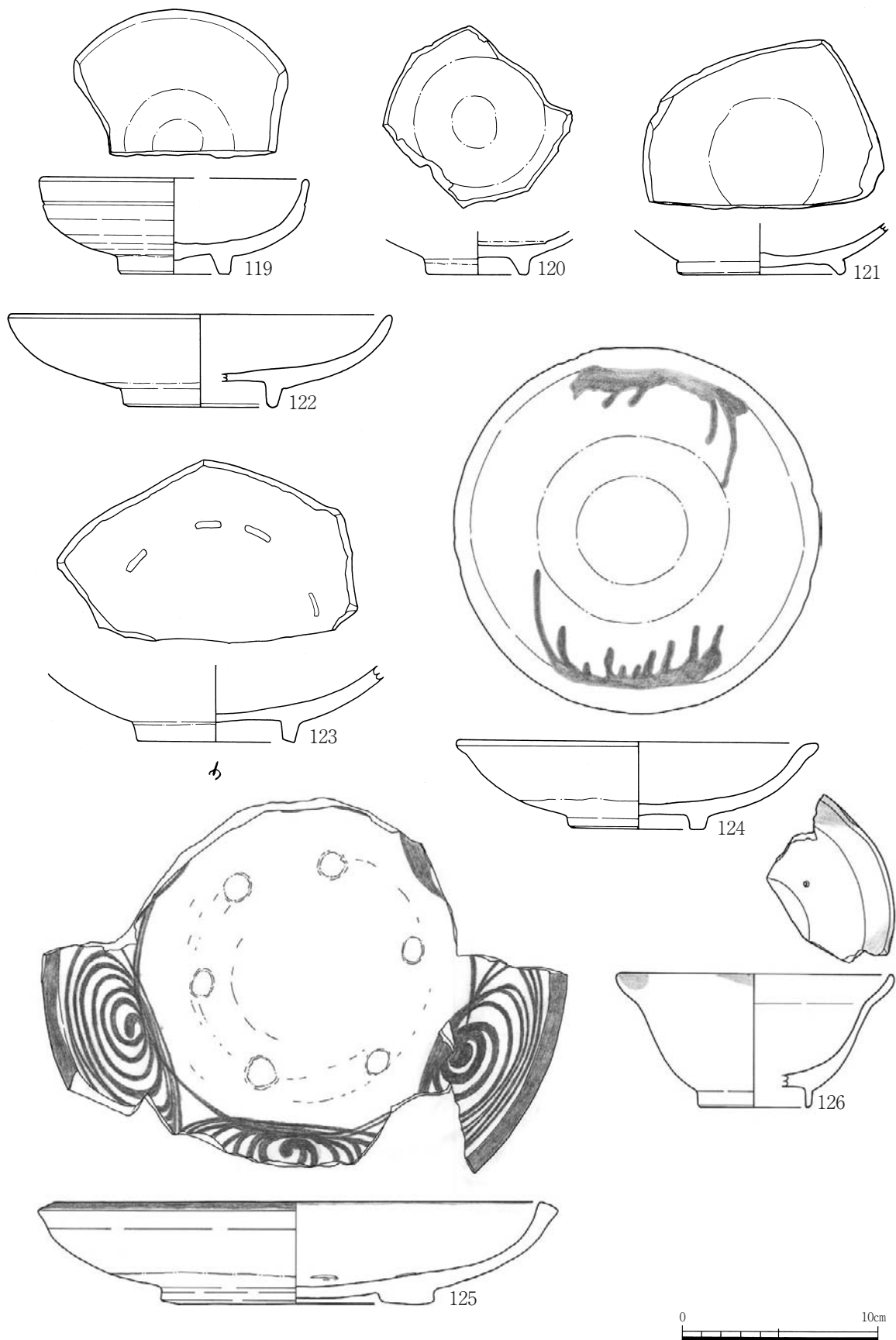
B1-50図 B1SX113 (5)



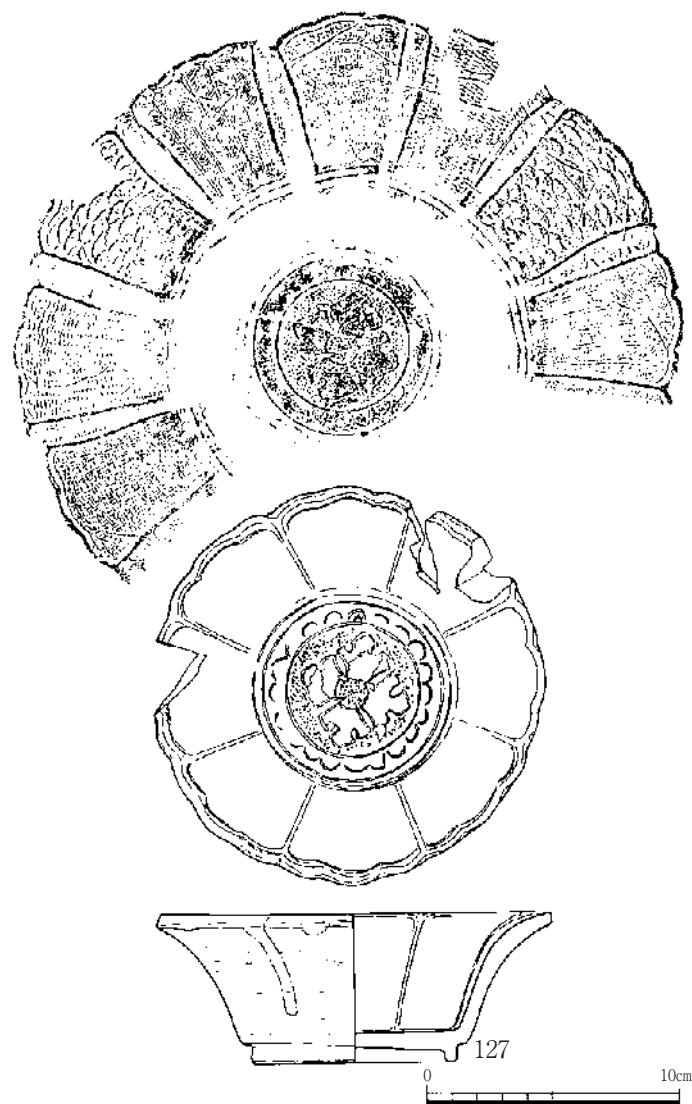
B1-51 图 B1SX113 (6)



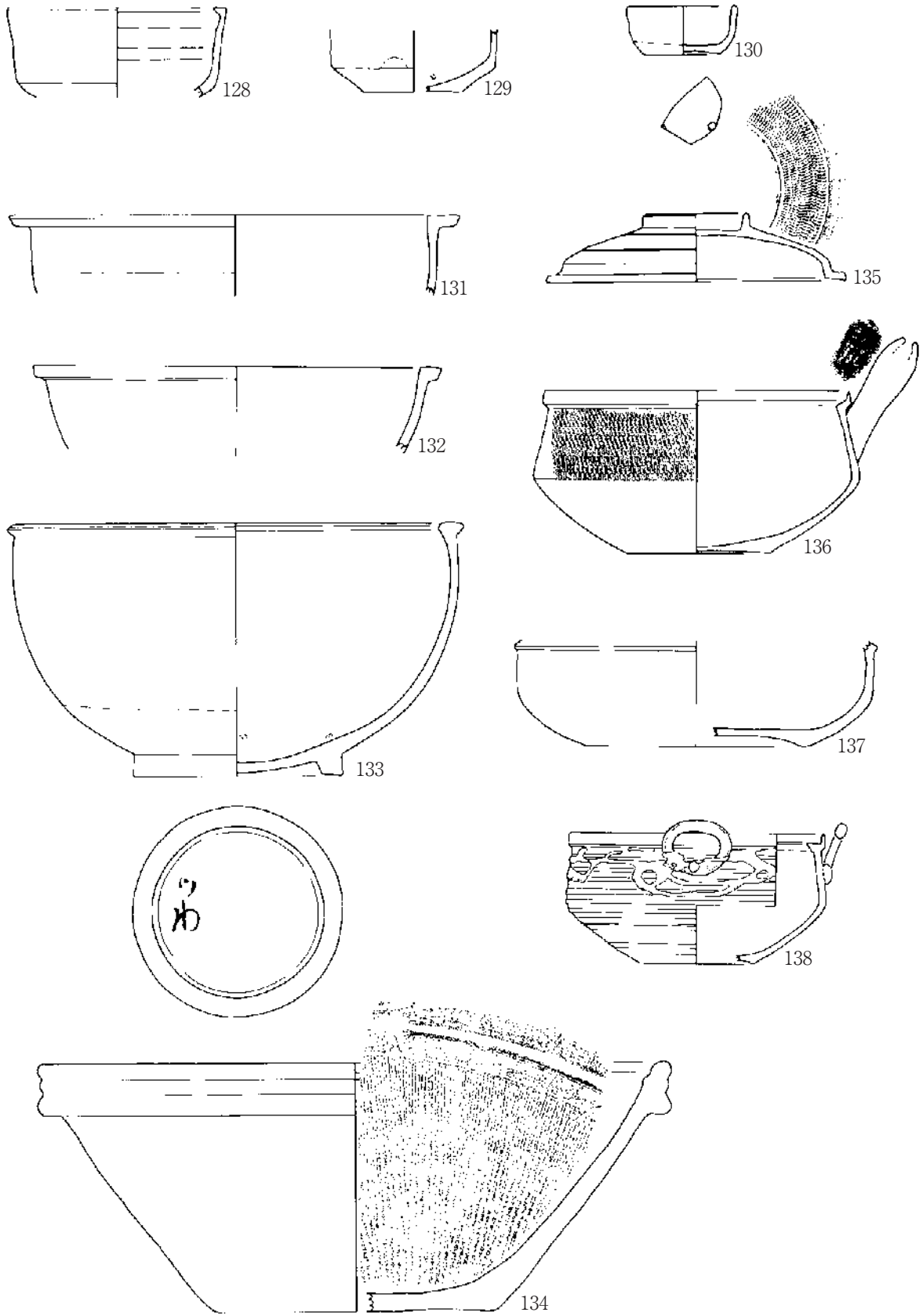
B1-52図 B1SX113 (7)



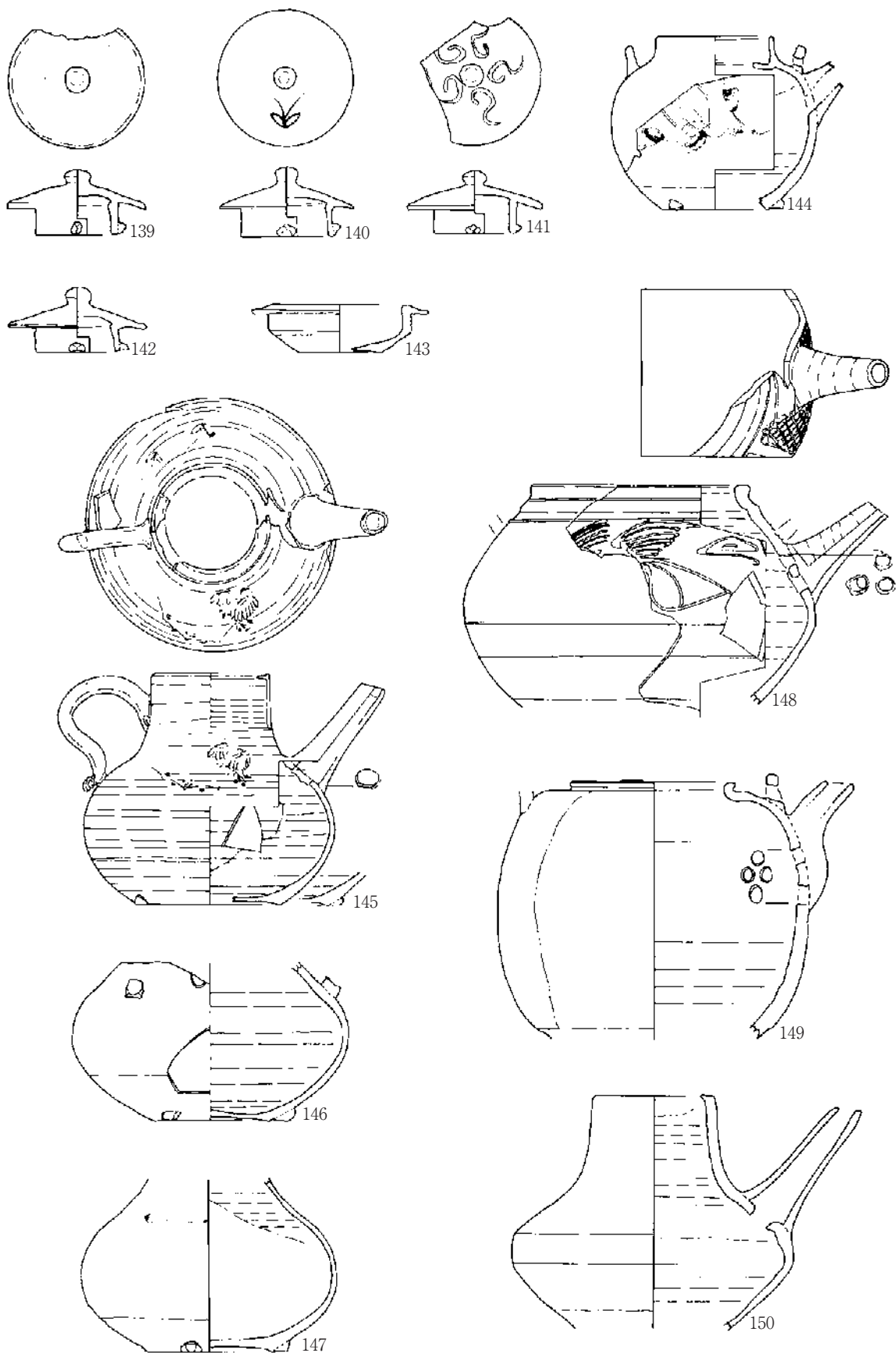
B1-53图 B1SX113 (8)



B1-54図 B1SX113 (9)

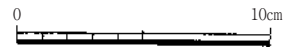
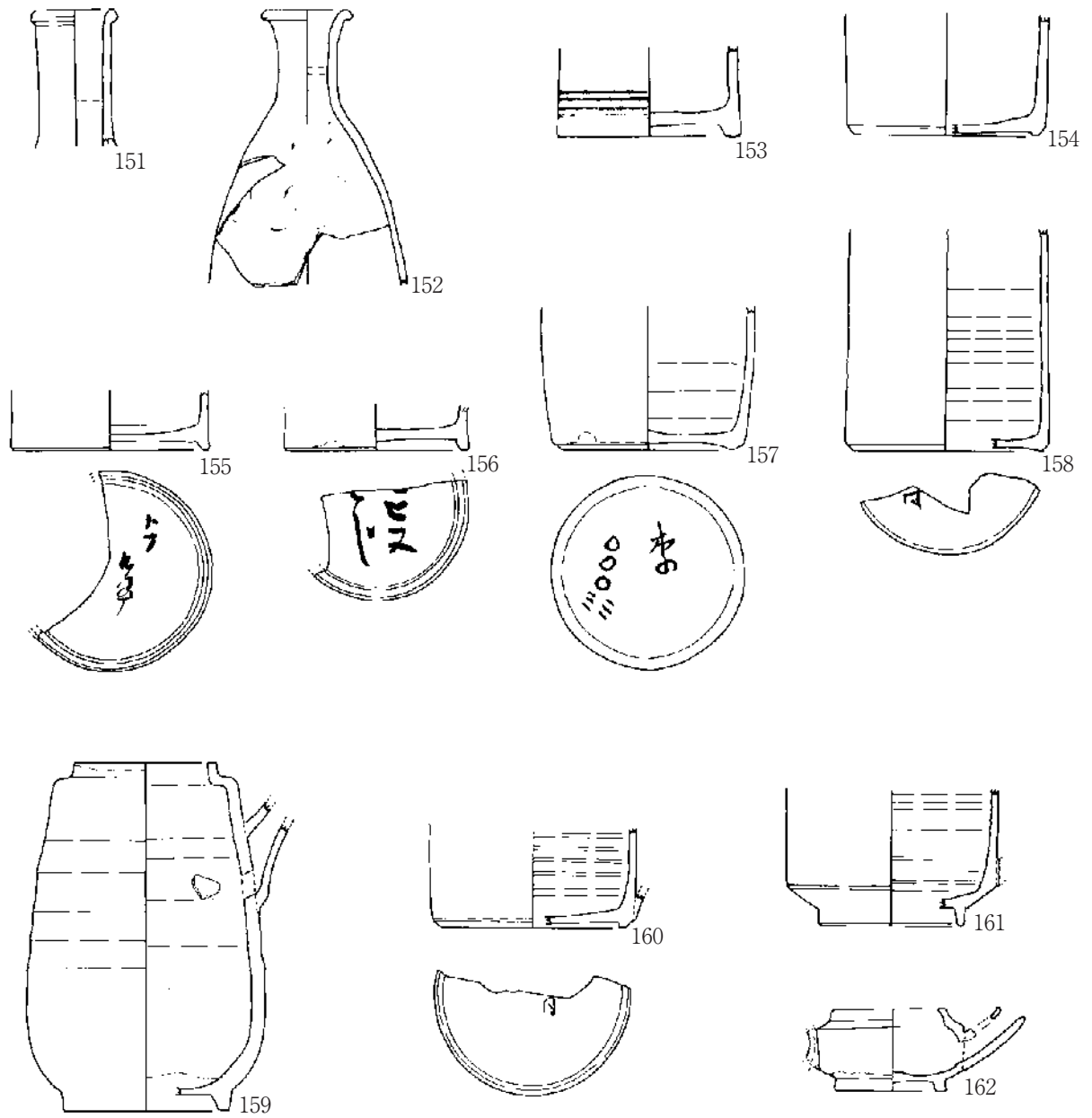


B1-55図 B1SX113 (10)

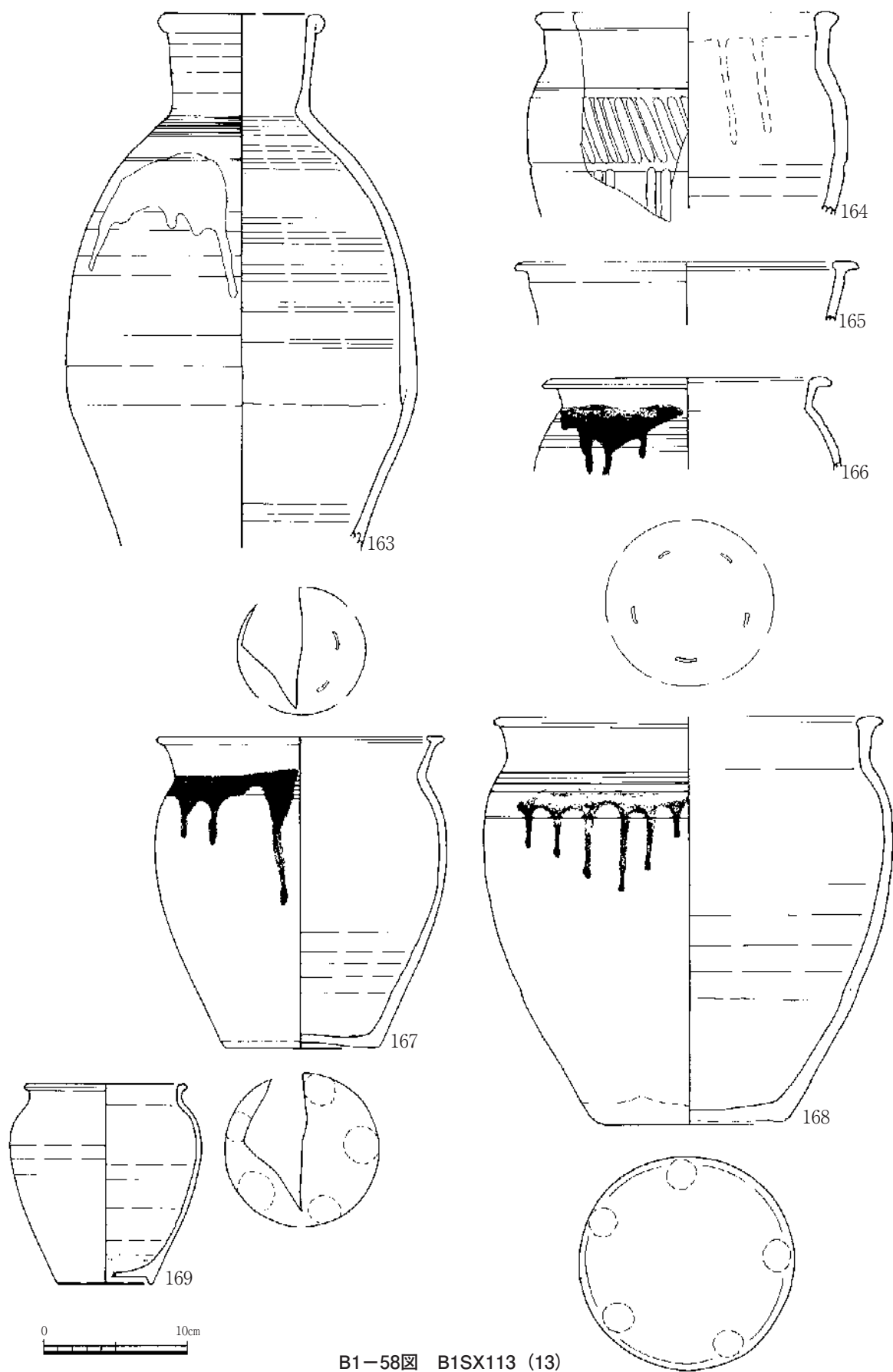


B1-56図 B1SX113 (11)

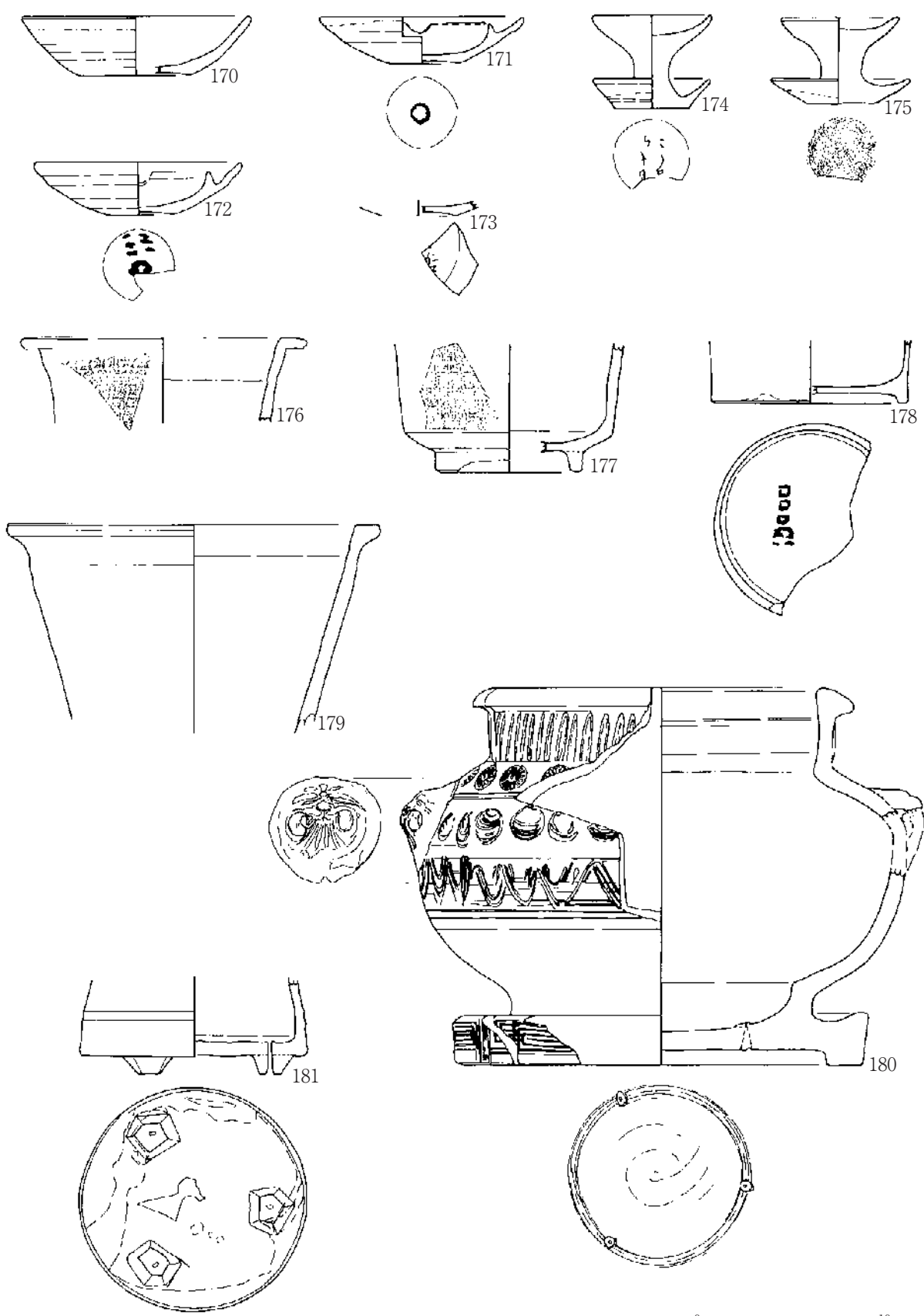




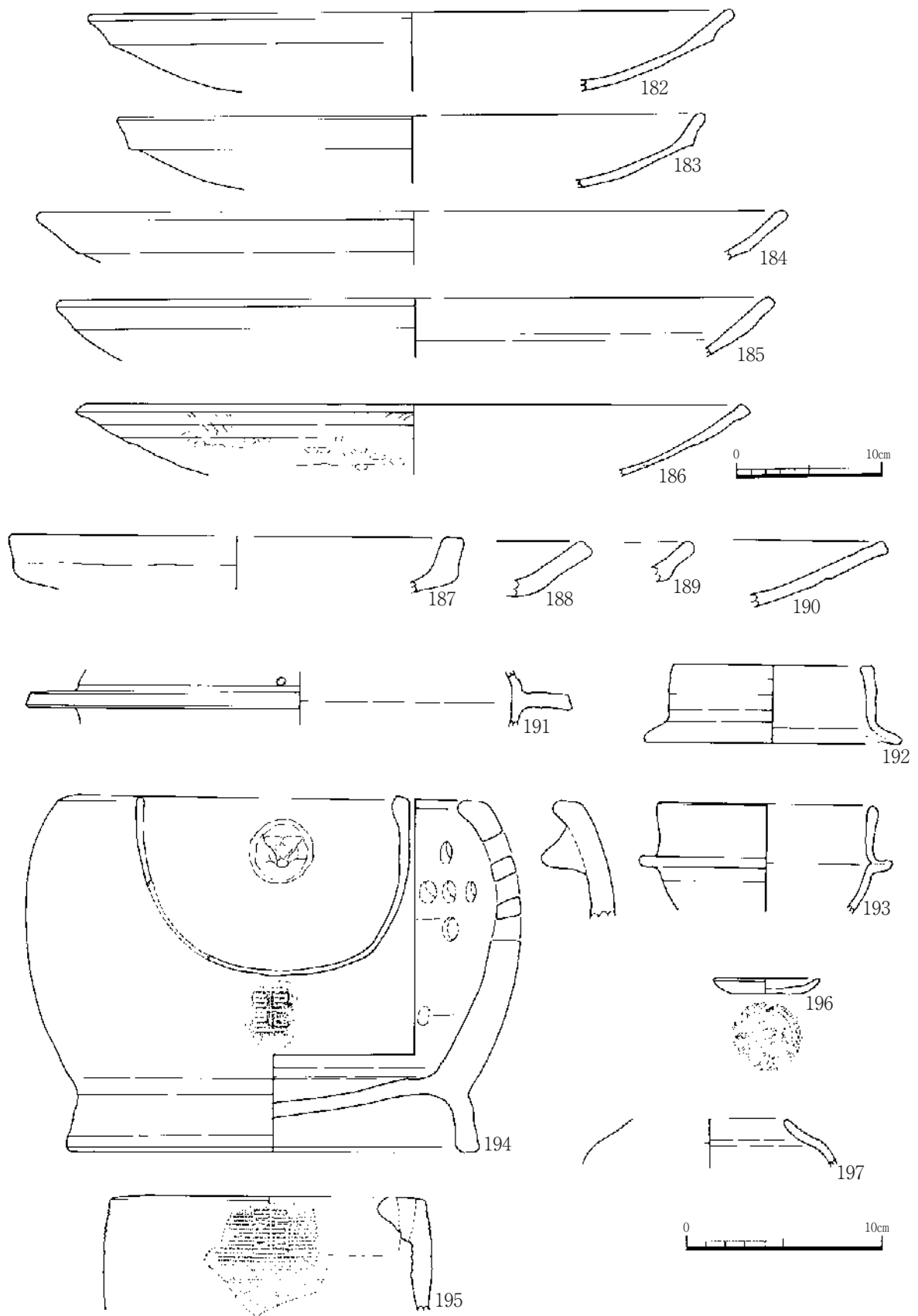
B1-57 图 B1SX113 (12)



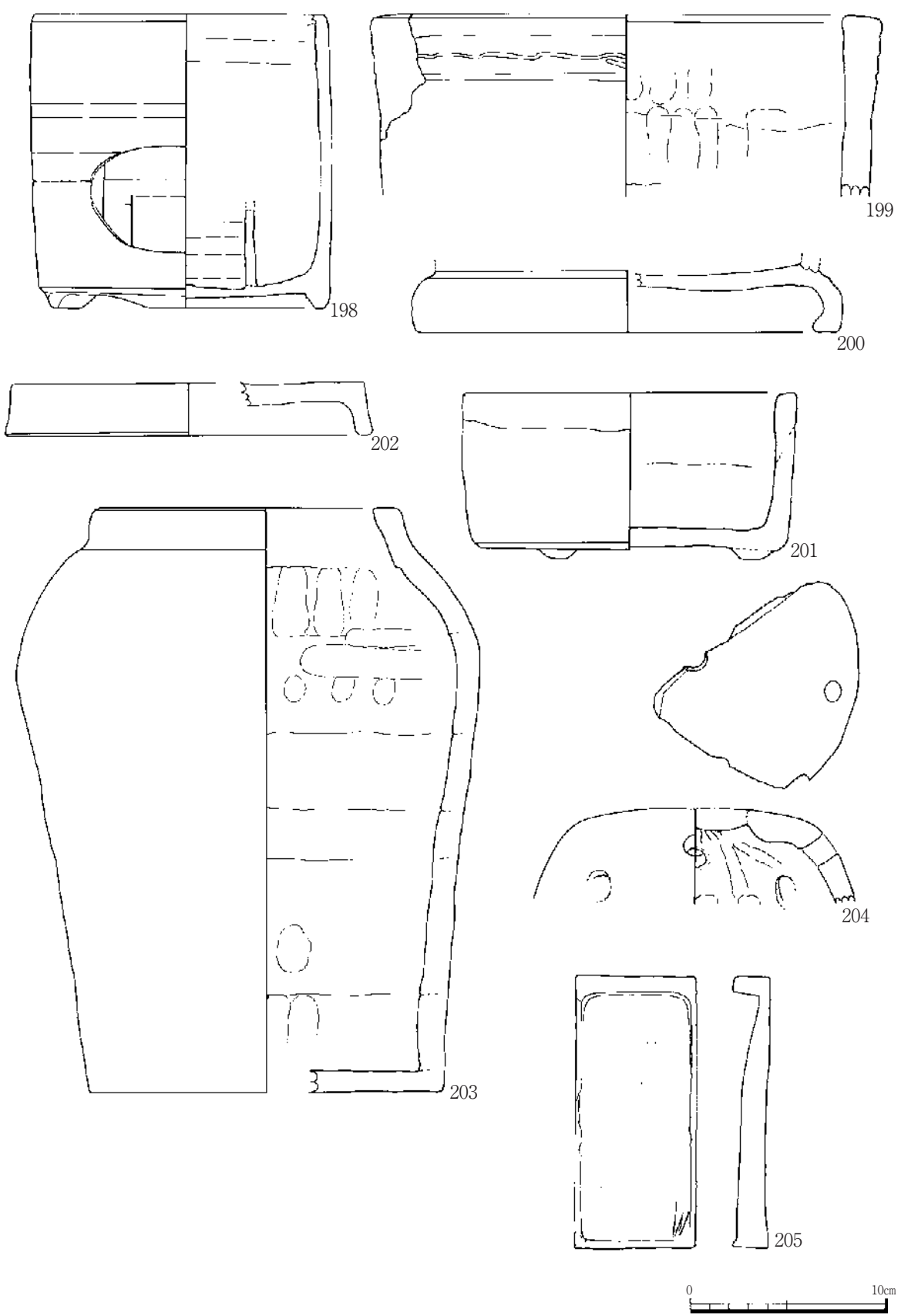
B1-58図 B1SX113 (13)



B1-59图 B1SX113 (14)



B1-60図 B1SX113 (15)



B1-61图 B1SX113 (16)

B2区の調査



1. B2区の概要

概要

今次調査対象地域の東側に位置し、1次調査で中世の環溝屋敷群が検出した寺の前地区の西側にあたり、田村城館の外濠の南外側である。今回の調査においても中世の遺構が確認されることが予想されていた。

調査により検出された遺構は土坑、ピット、井戸跡、性格不明遺構、墓墳であるが、中世の遺構と確認できたものはなく、近世幕末以降、19世紀から明治までがその中心であった。

今回の調査では、建物跡と考えられる遺構は小屋と見られる掘立柱建物跡1棟を検出したのみであるが、井戸跡が検出され、屋敷に伴うと考えられる墓墳群が検出されているため、当調査区は近世に屋地であったと考えられる。屋地は墓墳群が中央部と北側の2群見られることや、検出されたピット群も2～3群に分けられることから2区画が存在した可能性が考えられる。調査区から検出された廃棄土坑からは、幕末から明治までの陶磁器が出土しており、屋敷は明治年間に廃棄され、耕作地になったと考えられる。

調査担当者 坂本憲昭、山田和吉

執筆担当者 坂本憲昭

調査期間 平成8年5月19日～平成8年5月30日

調査面積 4,980㎡

時代 弥生時代中期～後期、中世

検出遺構 井戸跡1基、土坑49基、ピット329個、墓墳23基、流路跡とみられる性格不明遺構1

2. B2区近世以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

当調査区では、ピットが約330個を検出しており、建物跡に関係したものと考えられるが、建物跡と確認できたものは、SB201の1棟のみであった。

B2SB201 (B2-2図)

時期；近世以降 **棟方向**；N-7°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.4m×桁行3.9m 面積7.4㎡

柱間寸法；梁間2.4m 桁行1.9m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

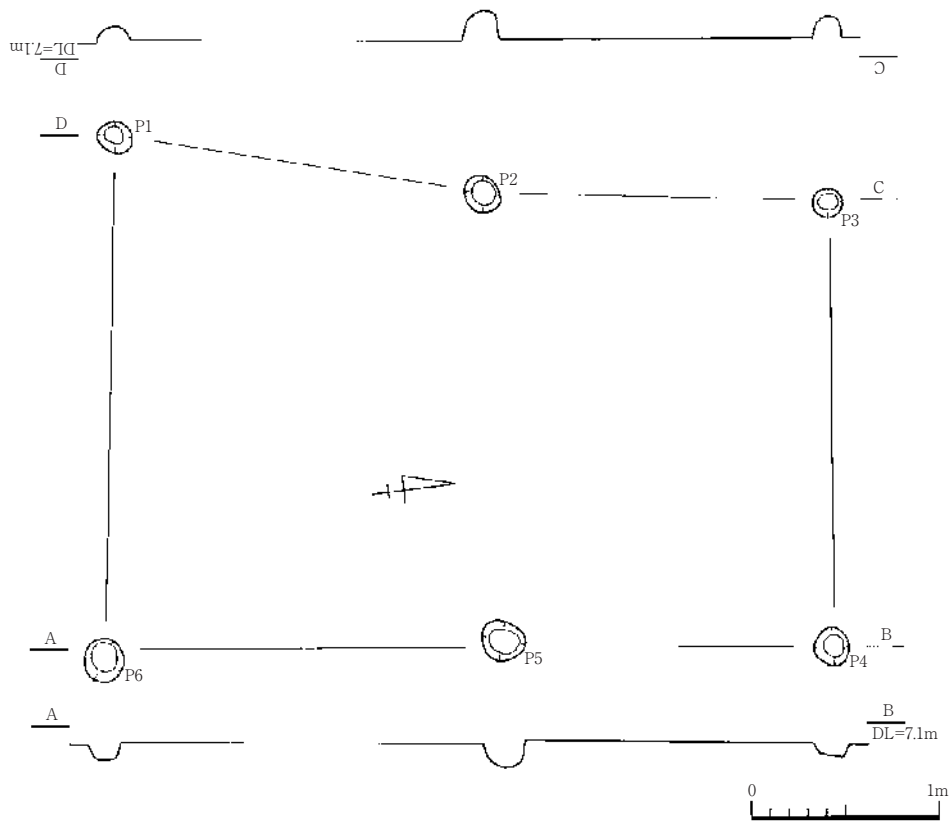
性格；— **付属施設**；—

出土遺物；—

所見；調査区の北側に位置する。ピットを多く検出した部分で検出したが、建物跡と確認できたのは、

この掘立柱建物跡のみである。建物の規模は1間×桁行2間で、南西隅の柱穴はややずれた位置で検出された。検出したピットはいずれ円形で直径は15cm～20cmで、深さは10cmから15cmと小規模なものであった。

調査区は近世、屋地であったと考えられ、検出された建物は長軸方向が現況の地割り方向に一致していることから、この一部であったと考えられる。



B2-2図 B2SB201

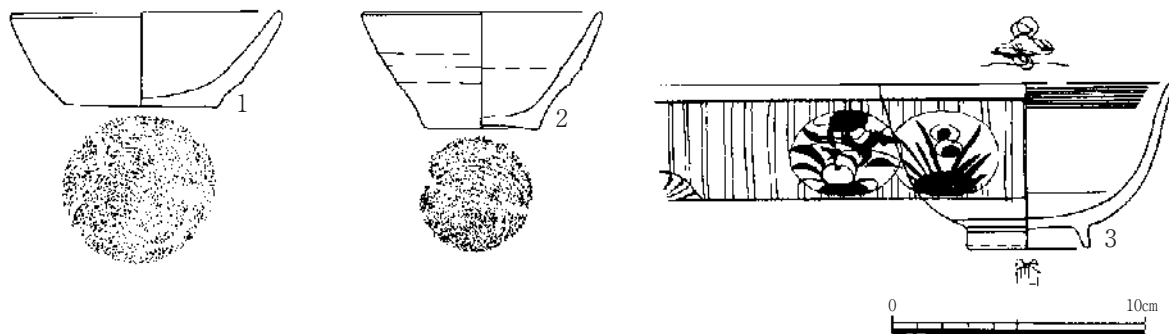
(2) 土坑

B2区で調査時検出した土坑は49基であるが、この他に検出時から近現代の墓壙と確認できた土坑を19基検出している。

検出した土坑はほとんどが近世以降、近現代が中心と考えられ、埋土中に瓦、近世陶磁器が含まれるものが多く見られた。特に、長方形の規模の大きな土坑では近世陶磁器や瓦などが一括して廃棄された状態で出土している。

長方形の土坑は幕末～明治の遺物しか出土していないため、それ以前の屋地であったものを廃棄した際の廃棄土坑と考えられる。円形のプランのものは埋土中から漏水防止に使用農業用に使用された可能性が高く、屋地から耕作地へと変わった後のものと考えられ近現代のものと考えられる。

墓壙として確認できた土坑は23基で、特に調査区中央部で現況墓地と並んだ状態で墓壙群が検出されており、田村地域では地境に墓地が営まれる例が見られ、この部分が区画境であった可能性が高く、屋地に伴う可能性が考えられる。また、SK215 (B2-3図) は墓壙群からやや離れ、検出時墓壙と確認できなかったが完形の土師質土器が出土しており、墓壙と考えられ墓壙群と同一のものと考えられる。また、調査区北側で墓壙が確認されており、調査区中央部の墓壙群とは別区画に伴う可能性が考えられ、SK248はこの墓壙群に伴うと考えられる墓壙である。



B2-3図 B2SK215出土遺物

B2-1表 B2区土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
B2SK201	円形	箱形	1.3		13		灰白色に橙色土入る	SD201を切る		
B2SK202	長方形	箱形	3.1	1.2	59	N-73°-W	灰黄褐色土		19世紀以降	
B2SK203	不整形	箱形	6.7	1.4	14	N-77°-W	黒褐色土に灰色土入る		近世	近現代なし
B2SK204	楕円形	皿状	4.3	1.9	11	N-7°-W	黒褐色土に灰色土入る		19世紀以降	
B2SK205	円形	皿状	1.2		5		灰色土			
B2SK206	楕円形	箱形	[0.7]	[0.45]	58	N-70°-W	灰黄褐色土	SK207と切り合う		
B2SK207	円形	箱形	0.95	0.9	42			SK206と切り合う		
B2SK208	円形	箱形	1.5		40		灰白色に橙色土入る		近世以降	
B2SK209	円形	箱形	2.0		45		灰白色に橙色土入る	SD208が切る	19世紀	
B2SK210	円形	箱形	1.6		34		灰白色に橙色土入る		16世紀末~ 17世紀初頭	
B2SK211	長方形	箱形	2.1	1.0	27	N-7°-E	暗灰色土ハンダ混じる	SK228を切る		
B2SK212										消滅
B2SK213										消滅
B2SK214	楕円形	箱形	1.0	0.8	5	N-67°-W	灰白色に橙色土入る			検出時円形
B2SK215	長方形	箱形	1.9	1.3	17	N-13°-E	灰黄褐色土	SK214に切られる		近世墓の可能性
B2SK216	円形	箱	0.95	0.9	28		灰色土			
B2SK217	不整形楕円	皿状	0.75	0.45	3		灰白色に橙色土入る			
B2SK218	楕円形	箱形	1.7	1.3	40		黄褐色土に灰色土入る	SK219を切る	近代	瓦多くはいる
B2SK219	円形	箱形						SK219に切られる	幕末以降	完掘時消滅
B2SK220	楕円形	皿状	1.2	0.7	20	N-73°-W				
B2SK221	長方形	箱形	1.5	0.9	17	N-70°-W	黒褐色土			
B2SK222										消滅
B2SK223	長方形	皿状	1.6	1.3	13	N-13°-E				
B2SK224										欠番
B2SK225	長方形	箱形	1.3	0.4	18	N-86°-W	灰白色に橙色土入る			
B2SK226	不整形楕円形	皿状	0.9	0.4	10	N-86°-W	灰白色に橙色土入る			
B2SK227	円形	箱形	1.0		34		灰白色に橙色土入る		近世以降	
B2SK228	円形						灰白色に橙色土入る	SK211に切られる		消滅
B2SK229	不整形	皿状	4.7	2.0	14	N-82°-W	灰褐色土			2つの土坑の切り 合いの可能性
B2SK230	方形 円形		4.6 1.9	4.0 —		N-82°-W	灰黄褐色土に黒褐色土 混じる			井戸跡
B2SK231	長方形		1.6	0.75	26	N-9°-E				墓壇の可能性
B2SK232	円形	箱形	1.0				黒褐色土			
B2SK233	長方形	箱形	1.6	2.4	8	N-81°-W	灰褐色土			
B2SK234	方形	箱形	1.25	1.2	15	N-85°-W	灰色土に黒褐色土混じる			
B2SK235	楕円形	皿状	1.1	0.9	11	N-25°-E	灰白色土			
B2SK236	長方形		1.65	1.5	9	N-82°-W	淡褐色土			
B2SK237	A方形 B方形	箱形	2.0 2.1	1.3 2.3	8 5	N-13°-E N-0°-E	灰黄褐色土			2つの土坑の切り 合い
B2SK238	長方形	箱形	2.7	1.45	9	N-82°-W	灰白色に橙色土、黒褐色土入る			
B2SK239	円形	箱形	1.2		10		灰色土		近現代	ハンダ残存
B2SK240	不整形	逆台形	1.3	0.85	35	N-82°-W	黄褐色土、ハンダ入る		近現代	検出時長方形 1.6m×1.1m
B2SK241	長方形	箱形	5.75	1.45	40	N-84°-W	灰黄褐色土に黒褐色土混じる		幕末以降	
B2SK242	長方形	箱形	2.6	1.7	48	N-10°-E	淡褐色土		近世	近世墓
B2SK243										欠番
B2SK244	長方形	2段	0.9	0.7	40	N-63°-W	灰白色に橙色土、黒褐色土入る			一部円形
B2SK245	円形	箱形	1.0	0.9	25		灰黄褐色土に黒褐色土混じる			
B2SK246	長方形	箱形 東に傾く	10.8	2.8	100	N-70°-W	灰色土		幕末以降	廃棄土坑
B2SK247	不整形	U字状	0.85	0.7	8	N-32°-E	灰褐色土			
B2SK248	不整形		1.6	1.75	34	N-6°-W	灰色土		中世の溝跡の 一部の可能性	溝跡と連結、埋土 中に大きな川原石
B2SK249										消滅
B2SK250	円形	U字状	1.9		55		灰黄褐色土			調査区に切られる
B2SK251	長方形		[1.8]	[0.4]	—	N-81°-W	灰褐色土			調査区に切られる

B2-2表 B2区墓壙一覧

遺構番号	形態	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
B2墓壙1	長方形	箱形	1.8	0.7	56	N-20°-E				
B2墓壙2	長方形	箱形	1.8	0.7	49	N-20°-E				
B2墓壙3	長方形	箱形	1.8	0.5	47	N-20°-E				
B2墓壙4	長方形	箱形	1.8	0.5	22 54	N-20°-E				北側部分円形に深い
B2墓壙5	長方形	箱形	0.5	1.9	45	N-24°-E				北側部分深い
B2墓壙6	長方形	箱形	0.5	1.9	58	N-23°-E				
B2墓壙7	長方形	箱形	1.0	0.7	30	N-39°-E				
B2墓壙8	長方形	箱形	1.1	0.6	29	N-18°-E				
B2墓壙9	長方形	箱形	2.0	0.7	22	N-29°-E				不整形、改葬後または墓壙でない可能性もあり
B2墓壙10	長方形	箱形	1.7	0.6	31	N-29°-E				不整形、改葬後または墓壙でない可能性もあり
B2墓壙11	長方形	箱形	2.2	1.1	22	N-25°-E				
B2墓壙12	長方形	箱形	1.3	0.6	18	N-8°-E				
B2墓壙13	長方形	箱形	1.8	0.4	7	N-14°-E				
B2墓壙14	長方形	箱形	1.9	0.5	29	N-14°-E				
B2墓壙15	長方形	箱形	1.9	0.6	34	N-13°-E		墓壙16を切る		16と切り合う
B2墓壙16	長方形	箱形	1.5	0.5	7	N-21°-E		墓壙15に切られる		15と切り合う
B2墓壙17	長方形	箱形	2.0	0.8		N-2°-E				
B2墓壙18	長方形	箱形	1.9	1.3	17	N-13°-E	灰黄褐色土	SK214に切られる		SK215
B2墓壙19	長方形	箱形	1.5	0.9	12	N-11°-E				型が崩れた部分 幅1.2m
B2墓壙20	長方形	箱形	2.3	0.7	14	N-28°-E				
B2墓壙21	長方形	箱形	2.1	0.6	3	N-5°-E				
B2墓壙22	長方形	箱形	2.5	1.7	47	N-11°-E				2基以上の切り合いの可能性
B2墓壙23	長方形	箱形	1.6	0.75	26	N-9°-E				SK231

(3) ピット

B2区ではピットは約330個が確認されている。その内ピット番号を付けたものは25個である。ピットは調査区全域で検出されるが、畦畔または地境とみられる部分から東側では散漫な状態であった。西側ではピットは南端部、中央部、中央部からやや北よりの3群程度に大別でき、それぞれ屋地に関係すると見られるが、掘立柱建物跡として確認できたのは一棟のみであった。

検出したピットの規模はいずれも小規模なもので直径約20cm程度、深さ約10cm～20cmのものが最も多い状況であった。埋土は6種類が見られるが、褐色系のものと灰色系のものに大きく分かれ、褐色系のものは、弥生時代の可能性が考えられ、灰色系のもの中世以降、近世～近代と考えられるが埋土中から出土した遺物はほとんどなく、出土したのも細片のみであったため各ピットの時期は不明である。

B2-3表 B2区ピット一覧

遺構番号	柱穴形	直径 (cm)	深さ (cm)	埋土	柱根/ 有・無	出土遺物 (点数)	遺物内容 出土状況	時期	特記事項
B2P201	円形	35	10	灰白色土に橙色土混じる	無	1	弥生土器細片		
B2P202	円形	34	13	淡褐色砂質土	無		土師質土器		
B2P203	楕円形	40×36	8	灰白色土に橙色土混じる	無	3	弥生土器細片		
B2P204	円形	30	7	淡褐色砂質土	無	4	弥生土器細片		
B2P205					無				
B2P206					無				
B2P207	円形	63	28	淡褐色砂質土、黒褐色土混 じる	無		古代以降不明		
B2P208	円形	44×32	19	灰色粘質土	無		備前焼播り鉢	近世	
B2P209	円形	34	25	灰白色土に橙色土混じる	無	1	弥生土器細片		
B2P210	円形	26	18	灰白色土に橙色土混じる	無	1	弥生土器細片		
B2P211	楕円形	61×48	35	灰白色土に橙色土混じる	有				柱痕18cm
B2P212	円形	51	37	灰白色土に橙色土混じる	無	1	チャート剥片		
B2P213	円形	28	10	灰白色土に橙色土混じる	無	2	チャート剥片		
B2P214	円形	22	20	灰白色土に橙色土混じる	無	3	チャート剥片		切り合い有り
B2P215	円形	22	10	灰白色土に橙色土混じる	無	5	弥生土器細片		
B2P216	円形	39	31	灰黄褐色粘質土	無	1	弥生土器細片		
B2P217	円形	47	14	灰黄褐色粘質土	無		須恵器細片 弥生土器細片		
B2P218	円形	25	18	黒褐色土粘質土	無		土師器細片		
B2P219	円形	30	16	淡褐色砂質土に暗褐色ブ ロック混じる	無				
B2P220	円形			淡褐色砂質土	無		土師質土器		
B2P221	円形	29	4	淡褐色砂質土	無	4	時期不明		
B2P222	円形	26	9	淡褐色砂質土	無	5	弥生土器細片		SK236に切られる
B2P223	楕円形	73×51	16	黒褐色粘質土	無				
B2P224	楕円形	40×27	4	橙色土に灰白色土混じる	無		陶磁器碎片		
B2P225	楕円形	34×25	37	黒褐色粘質土	無		弥生土器細片		

(4) 井戸跡

B2SE201 (B2-4図)

時期；近世 **形状**；円形

規模；掘方5m×3.7m 井戸枠1.4m 深さ3.0m **断面形態**；円筒状で下部が小さくなる

埋土；暗灰褐色土

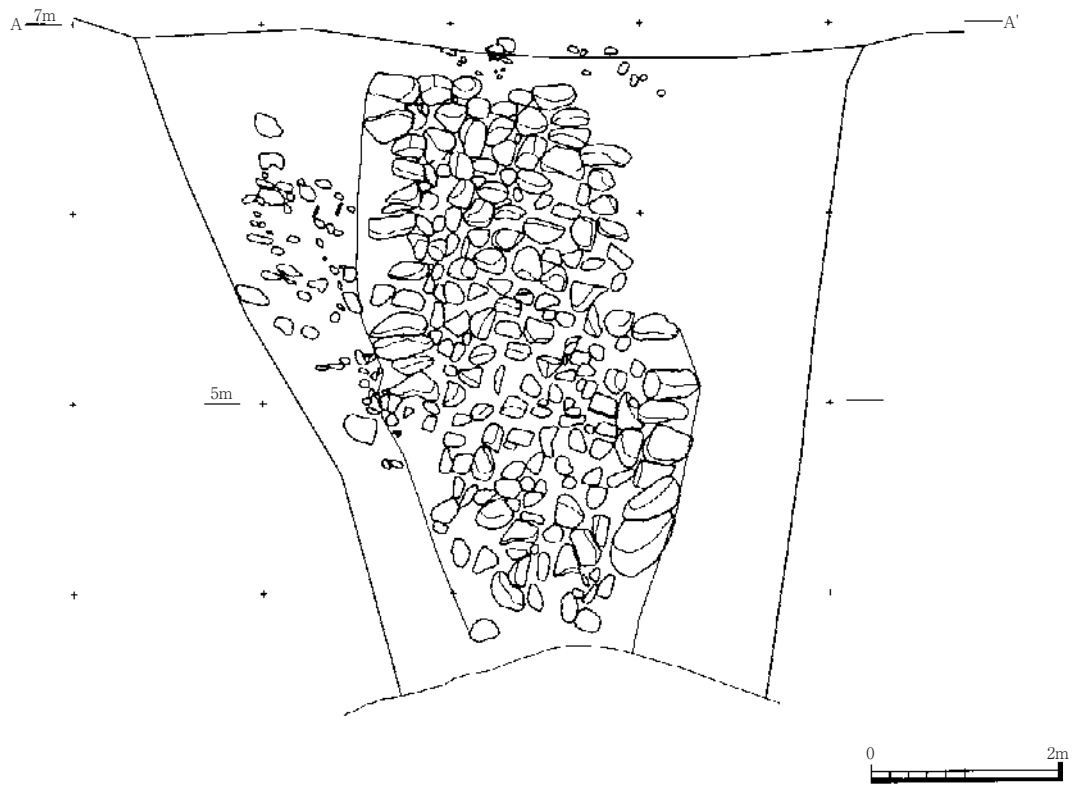
付属遺構；— **機能**；—

出土遺物；土師質土器細片

所見；調査区中央部からやや北側部分から検出した。検出時は5m×3.7mの長方形の土坑を直径約1.4mの円形の土坑が切る様な状況であった。円形部分を掘削すると、上面は大きな河原石が入り、壁が崩れているが約20cm位掘削すると玉石の壁が検出し井戸跡と確認した。外側の長形状の土坑は井戸を掘削した際の掘方と考えられる。井戸の壁には約25cm前後の人頭大より少し小さな楕円形の河原石が使われていた。井戸内側の埋め戻し土は黄褐色の粘質土で埋土中には井戸枠に用いられる石より大きなものが入っていた。

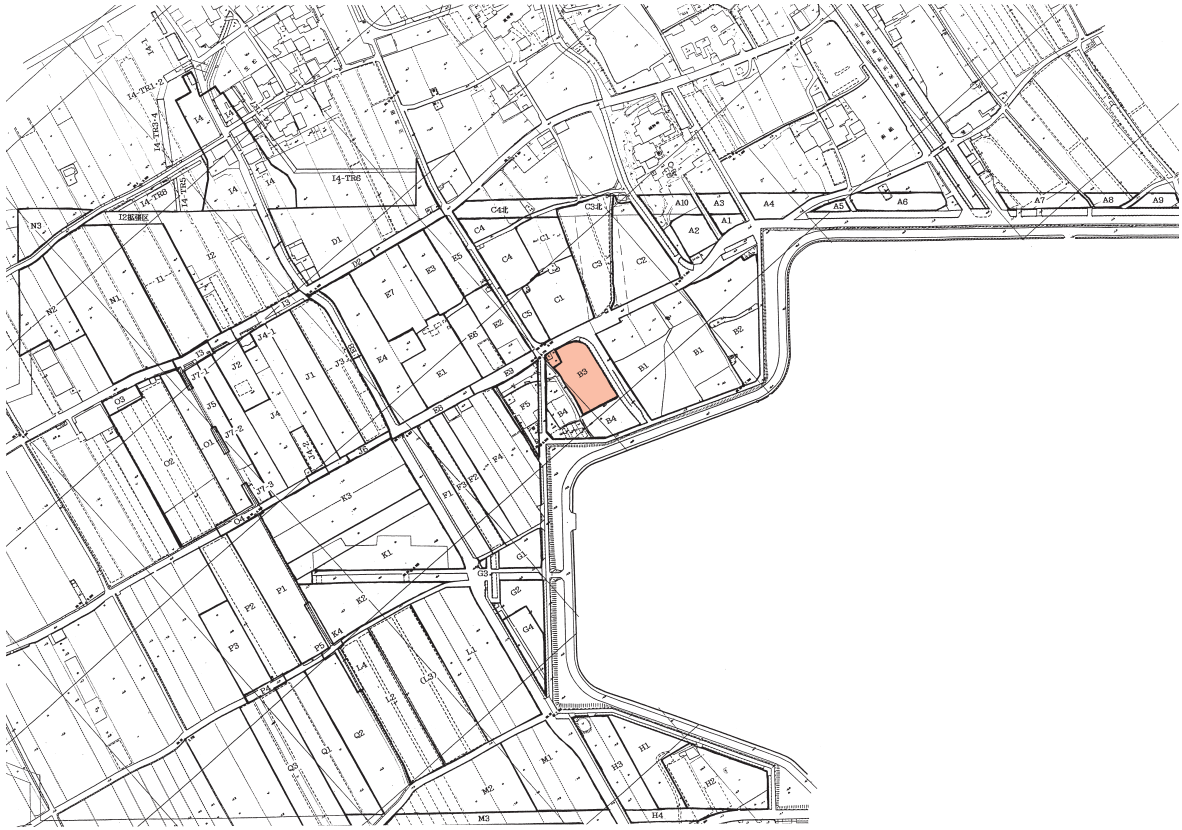
井戸枠石積みは一部積み石がはずれた部分がみられ、井戸内側からの掘削は危険を伴うため人力掘削を中止し、掘方部分を、重機による機械掘削で半截を行った。掘削の結果、地表下約3.5m、標高約3.0mで湧水がみられ、湧水部は粘土化し、桶を井筒に用いていた。

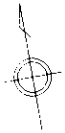
井戸跡の時期であるが、埋土中からは土師質土器細片が出土しており、中世の可能性も考えられるが、他に中世の遺構が確認されていないため時期は確定できなかった。



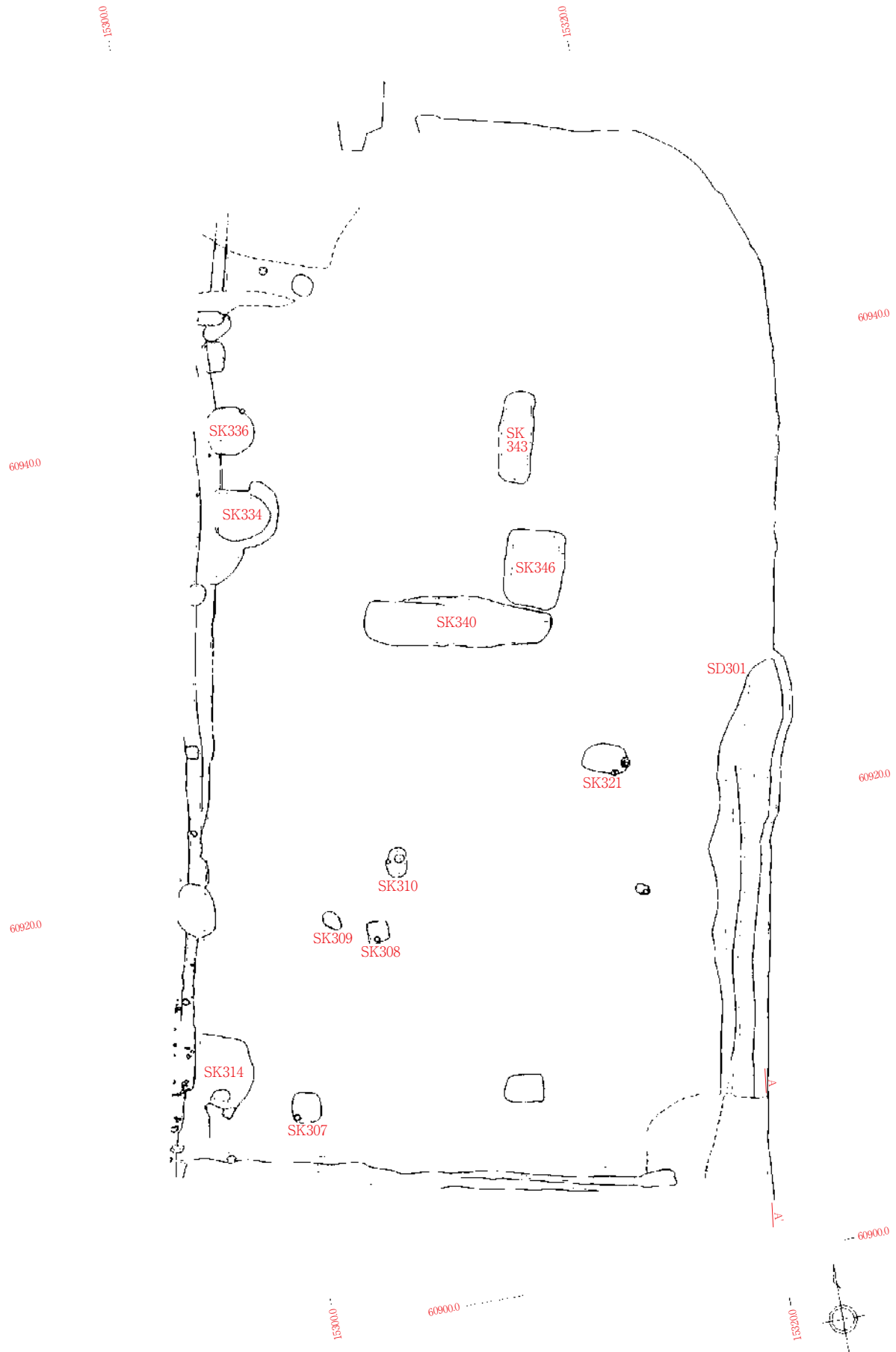
B2-4図 B2SE201側面図

B3区の調査





B3-1図 弥生時代遺構全体配置図 S : 1/250



B3-2図 B3区中世以降遺構全体配置図 S : 1/250

1. B3区の概要

概要

今次調査区の北東部分に位置し、B1・B4区に隣接する。現況は畑で、調査区北西には移設されたお宮が鎮座しており、調査区の北東には、中世の守護代細川氏の居館跡とされる田村城館跡がある。北側は、弥生時代前期の環濠と土坑群を検出しているC区が展開する。

当調査区の遺構検出面は耕作土直下であり、標高7.2～7.3m前後で検出したが、後世の削平が著しく、遺構の残存状況は不良である。弥生時代前期の土坑、中～後期にかけての竪穴住居と土坑、中・近世の土坑・溝等を検出した。この内、中世の溝については、東側に隣接するB1区で検出された環濠の一部であり、中世環濠屋敷の規模を確定することができた。弥生時代では調査区北側のC区に展開する前期土坑が当調査区内においても検出され、土坑群の拡がり確認された。竪穴住居は中～後期にかけてのものが主体であり、ST309など8mを越える大型住居も検出されており、中央ピットから県下初の銅釧が出土した。掘立柱建物は14棟確認されているが、調査区南部に集中が見られ、焼土・炭化物を含む土坑、ピットを伴うと考えられる建物も検出している。他に溝状土坑、ピット等も検出された。

調査担当者 吉成承三、三橋麻里

執筆担当者 吉成承三

調査期間 平成9年5月19日～8月12日

調査面積 1055㎡

時代 弥生時代前期・中期～後期、中世、近世

検出遺構 本調査区での検出遺構は、弥生時代竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡14棟、土坑61基、ピット420個、性格不明遺構1基、中世溝1条、石組1基である。

2. B3区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

B3区では竪穴住居跡は10軒検出している。調査区南部、中央部に切り合いが認められるが、大半が削平を受け、残存状況は不良である。平面形プランは全て円形であり、規模は直径5.3m～5.8mまでのものと、7.35m～8.15mの大きいものに分かれる。大きいものでは推定復元規模が直径10mを越えるB3ST309も見られ、この住居の中央ピットからは銅釧が出土した。また、調査区南部のB3ST301 (B4ST409) の住居の貯蔵穴と考えられるピットからガラス製の勾玉が出土している。

どの住居も中央ピット、壁溝が認められ、ST303・304については、同位置での拡張が認められる。主柱穴は5本柱から8本柱以上の多角形のものまでがある。出土遺物は削平の影響で量的には僅少であるが、竪穴住居跡の検出面上、及びピットから出土している。B3ST306・309では、チャートの剥片と叩石、砥石、石包丁など石器が集中して出土が見られた。これら竪穴住居跡の時期についての詳細は不明であるが、弥生時代中期末葉から後期初頭を中心とし、B3ST305については、弥生時代中期中葉～後半期の遺物が見られた。

B3-1表 B3区竪穴住居跡一覧

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(m ²)	平面形	主軸方向	時期	備考
B3ST301							B4ST409
B3ST302	5.3	0.12	22.05	円形	N-0°	弥生IV～V	
B3ST303	7.35	0.03	42.4	円形	N-27°-E	弥生IV	
B3ST304	8.15	0.03	52.14	円形	N-62°-W	弥生IV～V-1・2	
B3ST305	5.4	0.08	22.89	円形	N-60°-E	弥生III～IV	
B3ST306	7.65	0.2	45.94	円形	N-62°-W	弥生IV	
B3ST307	5.8	0	26.4	円形	N-85°-W	弥生III	
B3ST308	[4.6]	0.18	16.61	円形	N-36°-W	弥生IV～V	
B3ST309	[10.6]	0.15	88.2	円形	N-18°-E	弥生IV～V-1	
B3ST310	不明	不明	不明	不明	N-7°-W	不明	

B3ST302 (B3-3図)

時期：弥生IV～V 形状：円形 主軸方向：N-0°

規模：(2.8) × 5.3m 深さ0.12m 面積22.05m²

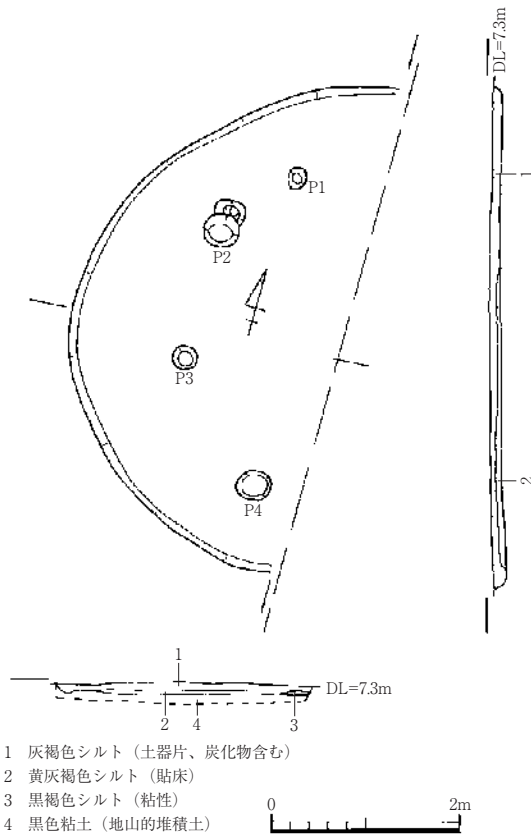
埋土：灰褐色シルト

ピット：数4 主柱穴数4 主柱穴 P1～4

床面：1面 貼床：1

出土遺物：弥生土器71点（胴部細片）

所見：調査区南東部で検出した。住居東半部は現況水路により切られており、全容は不明である。遺構検出面は標高7.2mを測り、地山的堆積土である黑色粘土層面で検出した。遺構埋土は灰褐色シルトの単一層であり、炭化物を含む。床面は黄灰褐色を呈した粘性シルトの貼床が認められる。遺構深度は12cmと浅く、削平を受けているものと思われる。出土遺物は全体で弥生土器細片71点が出土し、P2・P3より甕の胴部片と思われる細片が出土した。



B3-3図 B3ST302

住居であるST304の中央ピットと共有している。長軸方向がN-68°-Wを向く中央ピットがST304であり上層埋土を占める。拡張段階に長軸の向きを変えている。埋土は上層が黄灰褐色シルトで、下層は灰褐色シルトであり黄色シルトをまだらに含む。いずれも焼土・炭化物を含む。埋土の下層から(5)の壺が出土している。住居全体では削平されているため、埋土がほとんど認められず、検出面上において弥生土器胴部細片19点が出土しているのみである。

B3ST304 (B3-4図)

時期：弥生IV～V-1・2 形状：円形 主軸方向：N-62°-W

規模：8.15m 深さ0.03m 面積52.14㎡

埋土：黄灰褐色シルト

ピット：数29 主柱穴数8 主柱穴P1～8

床面：1面

中央ピット：形状楕円 規模143cm 深さ15cm 埋土黄灰褐色シルト

壁溝：1条 幅20cm 深さ10.2cm

出土遺物：弥生土器胴部細片42点、有茎石鏃

所見：調査区中央部に位置する。遺構検出標高は7.2m前後を測る。ST303の拡張住居である。住居の東部は壁溝を共有し、西側に拡張が見られる。また、中央ピットも長軸方向がN-62°-Wと向きが変わり、深さ15cmを測る。主柱穴は多角形であり8本柱で構成される。壁溝埋土に炭化物・焼

B3ST303 (B3-4図)

時期：弥生IV 形状：円形 主軸方向：N-27°-E

規模：7.35m 深さ0.03m 面積42.4㎡

埋土：暗褐色シルト

ピット：数29 主柱穴数7 主柱穴P1～7

床面：1面

中央ピット：形状楕円形 規模1.2×1.45cm 深さ48cm 埋土灰褐色シルト

壁溝：1条 幅30cm 深さ10.6cm

出土遺物：弥生土器胴部細片19点

所見：調査区中央部に位置する。遺構検出標高は7.2m前後を測る。後述のST305を切る。削平を受けており、壁溝と床面のピットしか残存していない。主柱穴は7個であり、直径25～30cm、深さ11～20cm前後を測る。埋土は灰褐色シルトであり、P3から甕胴部片と細片、それと焼成後穿孔が認められる壺底部(6)が出土している。また、B3SK311に切られる中央ピットは楕円形で、一方が膨らむ。ST303の拡張

土が多く含まれる。遺構検出面で有茎石鏃（8）が出土した。住居全体では、削平されているため埋土がほとんど認められず、検出面上において弥生土器胴部細片42点が出土しているのみである。B3ST304P1から凹線文の甕（4）と、蓋（7）が出土している。4の甕はなで肩の胴部から、口縁部はくの字状に外反し端部に凹線文が施される。内面は胴部中位以下にヘラ削りが認められる。遺物量が僅少で詳細は不明であるが、ST303・304の出土遺物全体を見てみると、凹線文の甕、口縁部外面に細い微隆起帯が付く胎土の粗い甕の一群等、中期末葉の時期と、長頸壺口縁、外反する高杯口縁等、後期に比定できる一群が認められ、この期間、機能していたものと思われる。

B3ST305 (B3-4図)

時期：弥生Ⅲ～Ⅳ **形状**：円形 **主軸方向**：N-60°-E

規模：5.4m **深さ**0.08m **面積**22.89㎡

埋土：暗黄褐色シルト（僅かに炭化物・焼土含む）

ピット：数11 **主柱穴数**5 **主柱穴**P1～5

床面：1面 **貼床**：1面

中央ピット：形状楕円形 **規模**60cm **深さ**12.5cm **埋土**灰褐色シルト（炭化物・焼土含む）

壁溝：2条 **幅**20cm **深さ**6.7cm

出土遺物：弥生土器胴部片137点

所見：調査区中央部に位置する。住居プラン中央部から南部はST303・304に切られる。遺構検出標高は7.2m前後を測り、上面は削平されている。床面上面には、直径5mm～1cmの砂利を含む灰褐色シルトが低いところに充填されており貼床を呈する。主柱穴は5本柱で構成される。壁溝は周縁部に1条、内側の住居北東部の一部に1条認められる。外側の壁溝に沿って直径15～20cmの小ピットが部分的に存在する。中央ピットは上部をST304に切られ、埋土には炭化物・焼土を含む。断面形は皿状を呈する。出土遺物は弥生土器の胴部細片が137点出土しているが、いずれも細片で図示し得るものはなかった。胴部片の中に断面三角形の凸帯が付くもの、櫛描沈線が施されたものなどが見られる。

B3ST306 (B3-5・6図)

時期：弥生Ⅳ **形状**：円形 **主軸方向**：N-62°-W

規模：7.65m **深さ**0.2m **面積**45.94㎡

埋土：暗褐色シルト、明赤灰褐色シルト（焼土含む）

ピット：数16 **主柱穴数**6 **主柱穴**P1～6

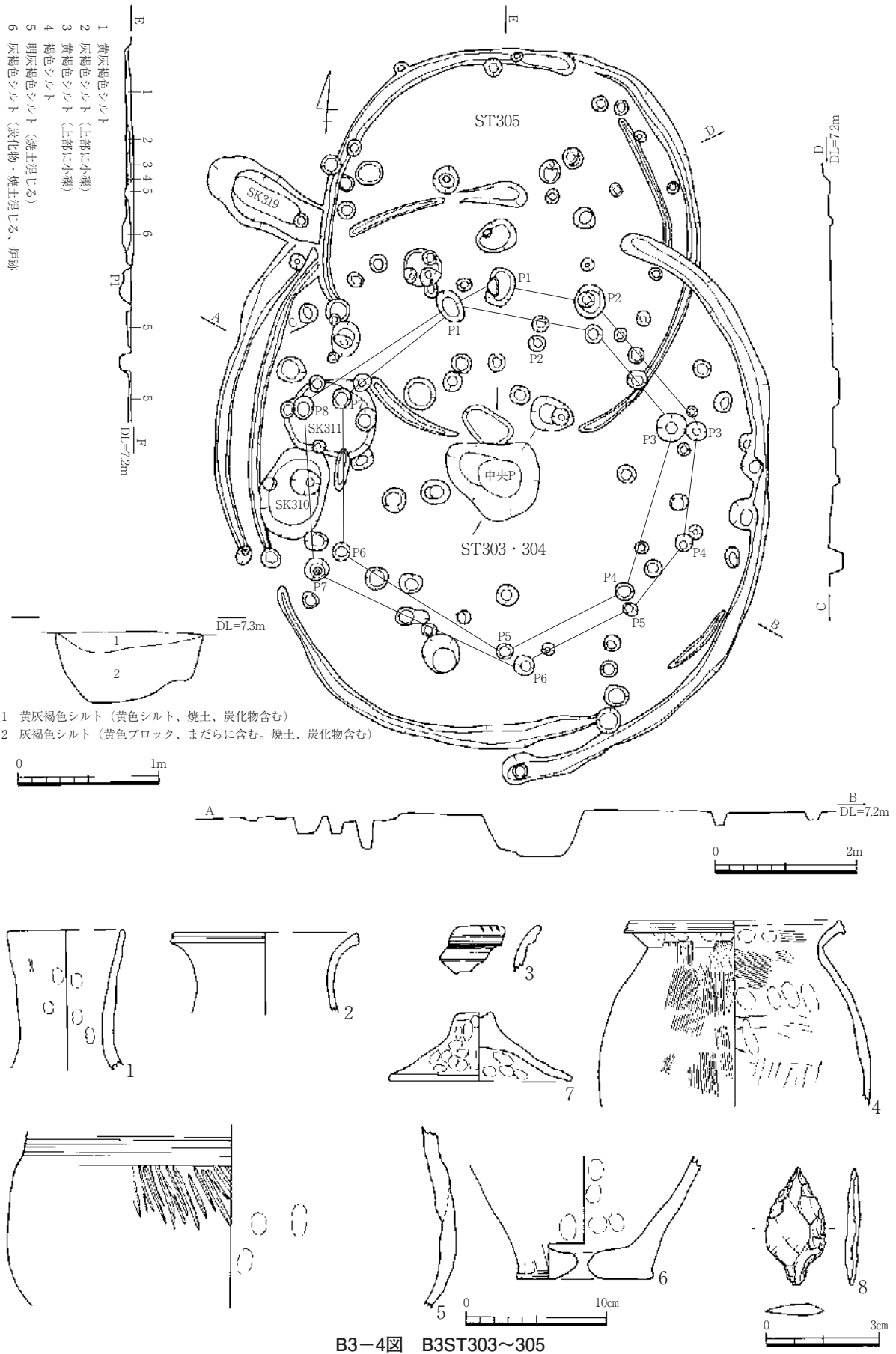
床面：1面

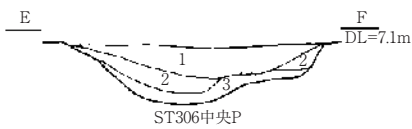
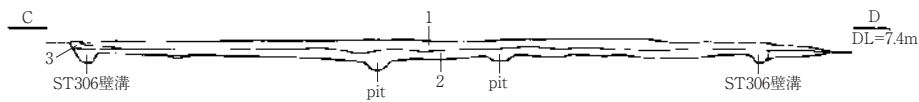
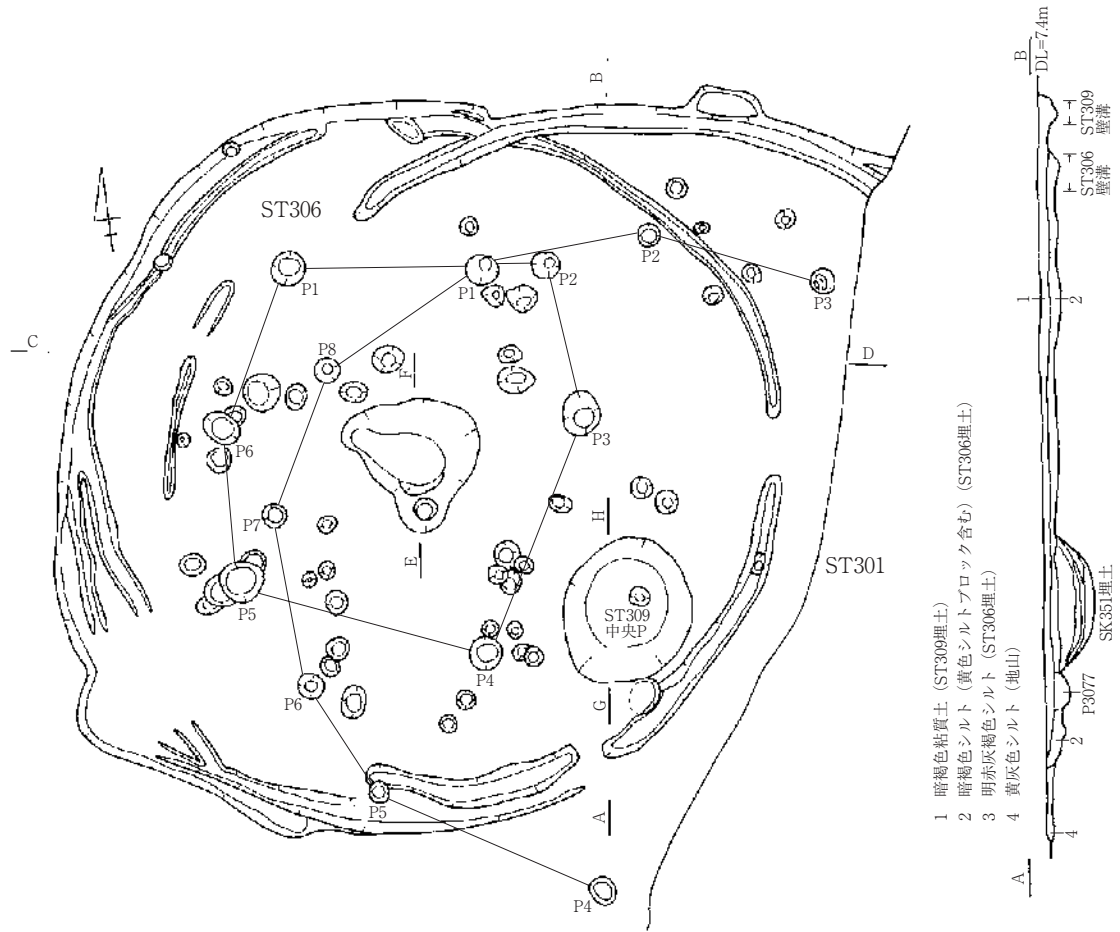
中央ピット：形状楕円 **規模**1.45cm **深さ**33.4cm **埋土**1灰褐色シルト、2灰褐色粘土質シルト（1・2層とも炭化物・焼土含む）、3暗灰褐色砂（5mm大の小礫混じる）

壁溝：1条 **幅**30cm **深さ**25cm

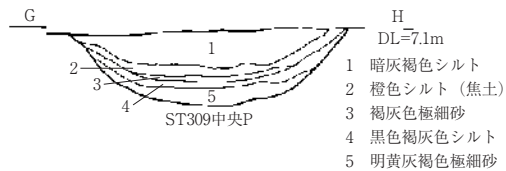
出土遺物：弥生土器細片404点

所見：調査区中央東部に位置する。ST309に切られる。住居プランの南西では方形土坑のSK360を切

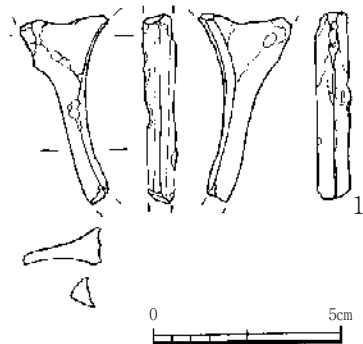




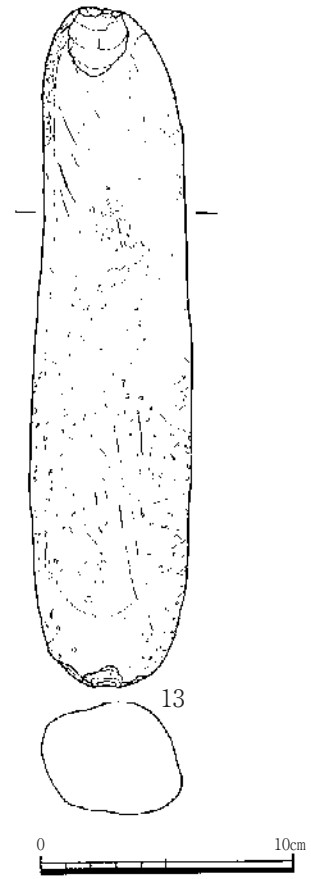
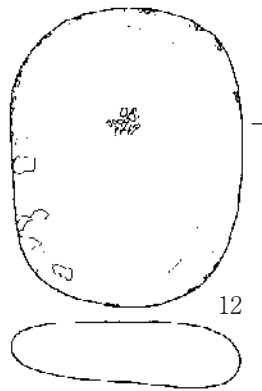
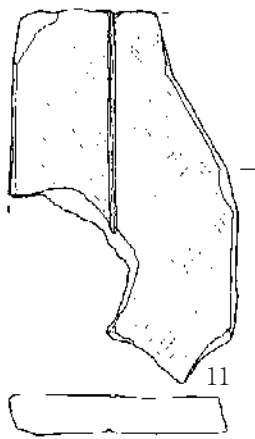
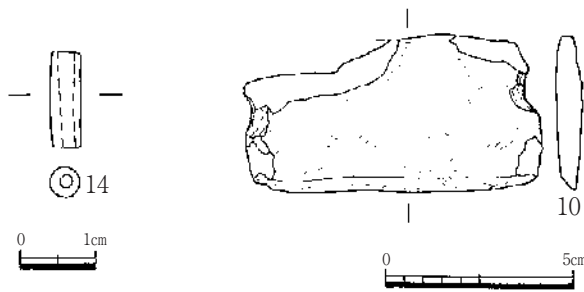
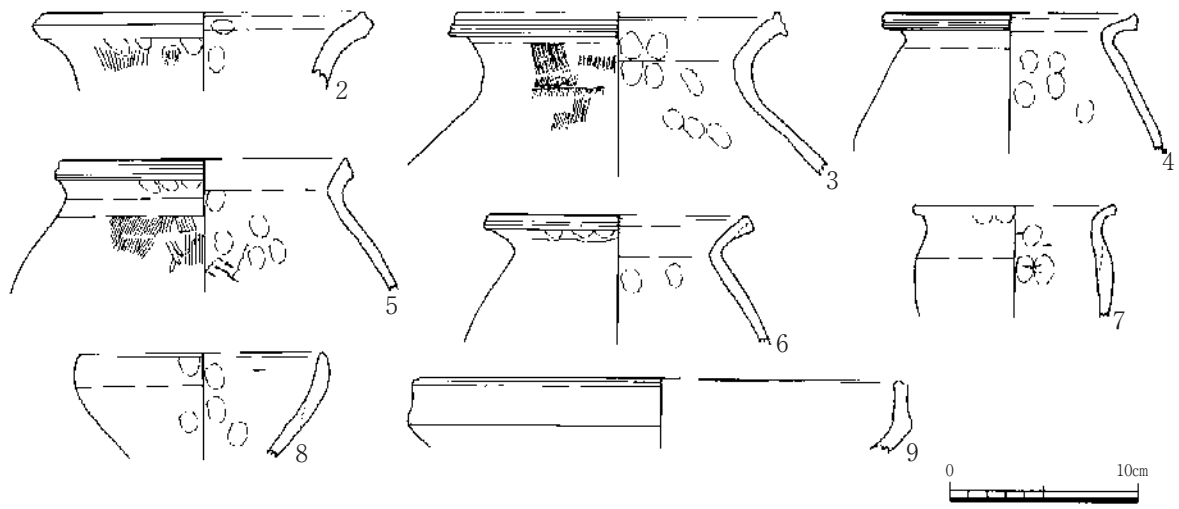
- 1 灰褐色シルト (炭化物・焼土・土器混ざる)
- 2 灰褐色粘質土 (炭化物・焼土含む)
- 3 暗灰褐色細砂 (小礫・直径5mmが混ざる)



- 1 暗灰褐色シルト
- 2 橙色シルト (焦土)
- 3 褐灰色極細砂
- 4 黒色褐灰色シルト
- 5 明黄灰褐色極細砂



B3-5図 B3ST306・309 (1)



B3-6図 B3ST306・309 (2)

る。遺構検出標高は7.2mであり、遺構上層部は削平を受けているものと思われる。遺構埋土は1層暗褐色粘土質シルト、2層暗褐色シルト（黄色シルトブロックで含む）で構成されているが、上層（1層）はST309の埋土である。床面でピットは多数検出されているが、主柱穴以外のピットはST306と309の判別は不明である。主柱穴は6本柱で構成され、P1・2から弥生土器片の出土が見られた。中央ピットはテラスを有する緩やかなU字状である。埋土は灰褐色を呈した粘性のあるシルト層であり、炭化物・焼土を含み、レンズ状に堆積が認められる。また、住居床面直上、及び壁溝からチャート剥片、サヌカイト剥片が出土した。

B3ST307 (B3-7図)

時期；弥生Ⅲ **形状**；円形 **主軸方向**；N-85°-W

規模；5.8m **深さ**0m **面積**26.40㎡

埋土；暗灰褐色シルト（ピット埋土）

ピット；数18 **主柱穴数**4 **主柱穴**P1～4

中央ピット；**形状**楕円形 **規模**116cm **深さ**32cm **埋土**暗灰褐色シルト（黄色シルトブロック炭化物含む）

壁溝；1条 **幅**25cm **深さ**7cm

出土遺物；弥生土器56点

所見；調査区北西部に位置する。遺構は削平を受けており、埋土は無い。住居プラン西側は、一部、中世の土坑S K334に切られる。また、床面では多数ピットを検出しているが、主柱穴はP1～4と、北東部では未検出であるが、5本柱で構成されるものと考えられる。中央ピットは床面に集石が認められた。中央ピットの長軸方向両端には直径20～30cmのピットが付属する。出土遺物は胴部細片が56点出土しているが、図示し得るものはなかった。

壁溝から壺の胴頸部片が出土しているが、細い櫛描直線文と断面三角形の凸帯が見られる。B3SB313に切られる。

B3ST308 (B3-7図)

時期；弥生Ⅳ～Ⅴ **形状**；円形 **主軸方向**；N-36°-W

規模；(4.6) m **深さ**0.18m **面積**16.61㎡

埋土；暗褐色シルト（黄色シルトブロックを含む）

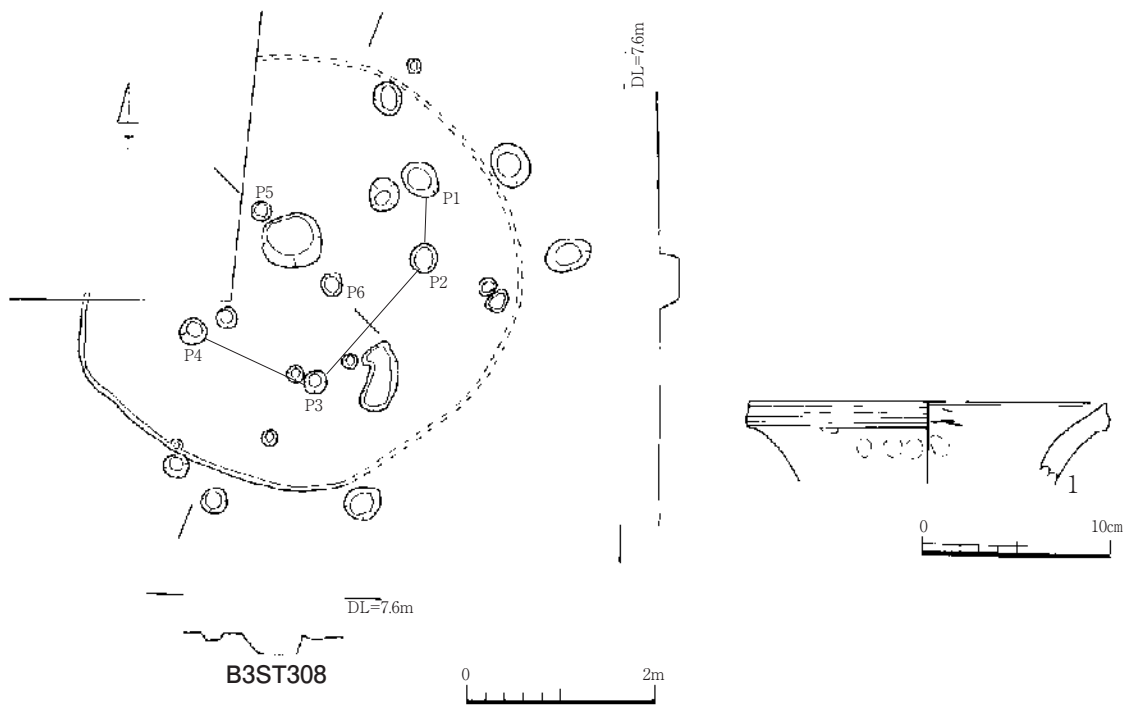
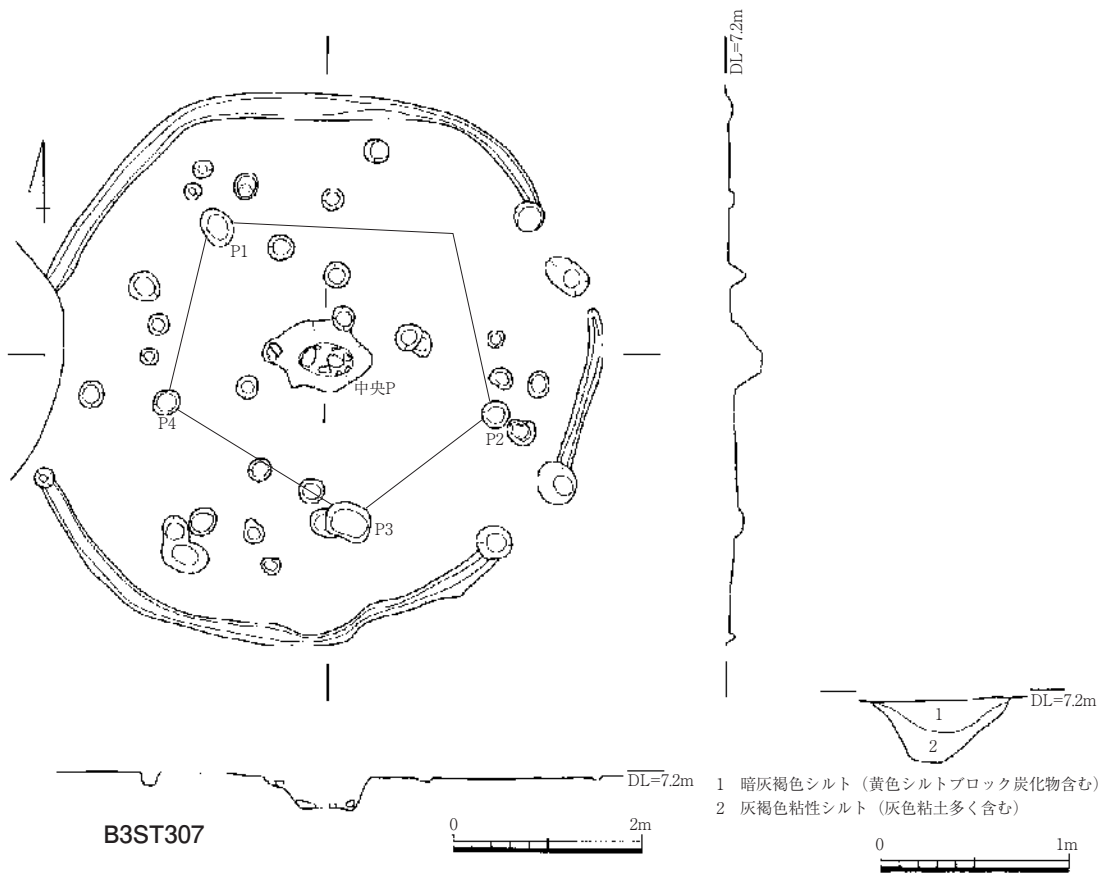
ピット；数15 **主柱穴数**6 **主柱穴**P1～4

床面；1面

中央ピット；**形状**不整円形 **規模**32cm **深さ**12cm **埋土**暗褐色シルト

出土遺物；弥生土器細片61点

所見；調査区北東部に位置する。住居プランの北西部は調査区外にあたる。遺構検出標高は7.3mであり、プランの北東部は削平を受けている。全体的な形状は不明であるが、円形を呈するものと考えられる。中央ピットは不整円形を呈し、埋土は暗褐色シルトであり、断面形は逆台形状を呈する。



B3-7図 B3ST307・308

中央ピット両端には直径20cm前後を測る小ピット（P5・6）が付属する。主柱穴の全体的な配置は不明であるが、主柱穴と考えられるピットは4個である。出土遺物はピットから凹線文の壺（1）が出土した。他には胴部細片が61点出している。

B3ST309（B3-5・6図）

時期；弥生Ⅳ～Ⅴ-1 **形状**；円形 **主軸方向**；N-18°-E

規模；(10.6) m **深さ**0.15m **面積**88.20㎡

埋土；暗褐色粘土質シルト

ピット；数18 **主柱穴数**8個以上 **主柱穴**P1～8

床面；1面

中央ピット；**形状**円形 **規模**160cm **深さ**80cm **埋土**暗灰褐色シルト

壁溝；1条 **幅**30cm **深さ**7cm

出土遺物；弥生土器404点、石包丁、叩石、有溝砥石、管玉

所見；調査区中央東部に位置する。住居東部は、調査区外にあたり、中世のSD301に切られ、南部もST306と同様に削平を受け全体的なプランは不明である。ST306を切る。遺構埋土は暗褐色シルトを主体とする。中央ピットの埋土は、1層の暗灰褐色シルト（下部に炭化物を層状に含む）を除去すると焼土が厚さ5cmで面的に見られ、上面で銅釧（1）が出土した。鉤手状部分以外は欠損している。下層は細砂層とシルト層の互層堆積であり、断面形はU字状を呈する。主柱穴は8個以上で構成されるものと思われるが、壁溝は南部では削平され、柱穴の配列等も詳細は不明である。出土遺物は凹線文系の壺（2・3）、凹線文系の甕（4～6）、鉢（7・8）、高杯（9）、石器では石包丁（10）、有溝砥石（11）、叩石（12・13）等の出土が見られた。また、床面直上で碧玉製の管玉（14）が出土した。これらの遺物はB3ST306・309全体から見ると時期差はほとんどなく、弥生時代中期末葉～後期初頭にかけて同地点において継続して機能していたものと思われる。

B3ST310（B3-8図）

時期；弥生 **形状**；不明 **主軸方向**；N-7°-W

規模；不明

埋土；不明

ピット；数5 **主柱穴数**5 **主柱穴**P1～5

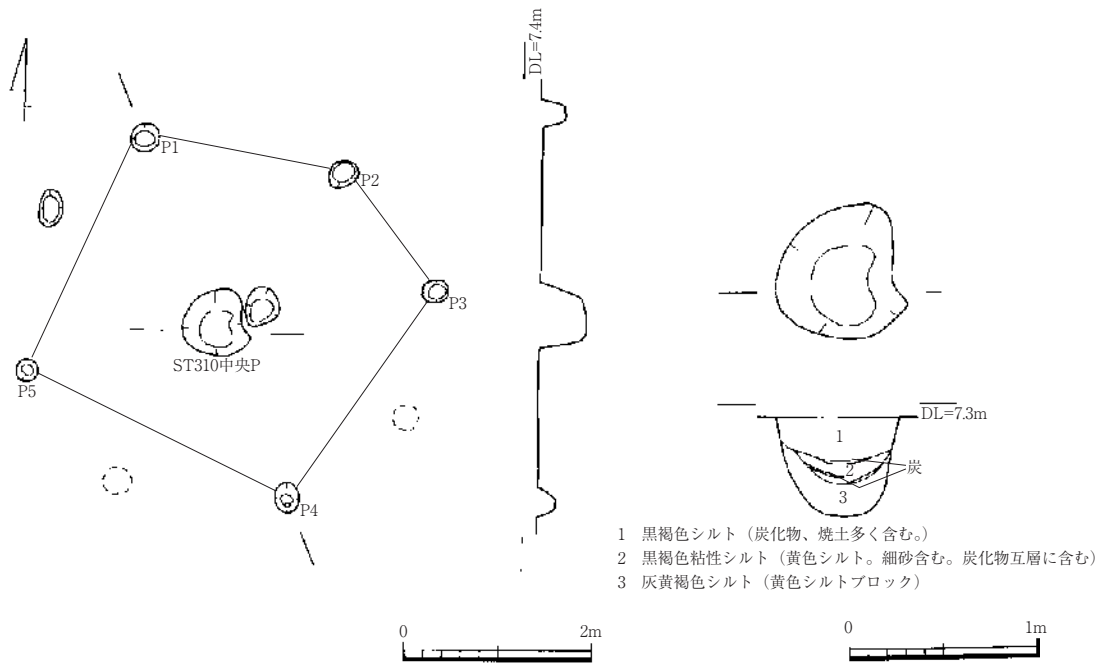
床面；1面

中央ピット；**形状**楕円形 **規模**70cm **深さ**53cm **埋土**黒褐色シルト

出土遺物；弥生土器細片

所見；調査区南部に位置する。遺構プランは削平を受け、規模等は不明であるが柱穴間から推定して直径5～6mの円形住居であると思われる。中央ピットは不整楕円形を呈し、埋土に炭化物・焼土を含む。埋土中層に炭化物が層状に認められる。主柱穴は中央ピットから2mの距離間で五角形状に並ぶものと考えられる。平地住居の可能性も考えられるが、周辺遺構の検出状況からみて削平を受

けているものと思われる。支柱穴と思われるピットから弥生土器細片が僅少出土しているが時期等の詳細は不明である。



B3-8図 B3ST310

(2) 掘立柱建物跡

B3区では掘立柱建物を14棟検出している。主に調査区南部、中央部に集中が見られる。南部では、HV-ナー7グリッド周辺に集中している。1間×1間と、1間×2間のプランが主であるが、焼土・炭化物を含んだ土坑・ピットもHV-ナー7グリッド周辺に集中が見られ、これらの遺構も掘立柱建物に伴う可能性が考えられる。調査区南部には、ガラス製の勾玉が出土した大型住居B3ST301 (B4ST409)があり、中央部にはB3ST303~305の竪穴住居跡が切り合う地点があるが、B3区の掘立柱建物跡の南部集中地点はこの中間に位置する。これらの竪穴住居跡に関連する施設であった可能性が高い。

掘立柱の規模を見ると6.6㎡以下のものが7棟、6.7㎡以上のものが7棟であり、大型と小型とに二分される。主軸方向は、N-8°以下と、N-80°を越える現グリッドラインに沿うものが多い。また、N-60~72°前後を測る一群も見られる。時期についての詳細の不明なものが多いが、概ね竪穴住居跡等の切り合い、柱穴埋土から見て、竪穴住居以前と、同時期、住居廃絶後の3時期にわたるものと思われる(弥生時代中期中葉~後期初頭~後期前半)。

B3-2表 B3区弥生掘立柱建物跡一覧

遺構名	梁間×桁行(間)	梁間×桁行(m)	柱間寸法 梁間×桁行(m)	主軸方向	付属遺構	時期
B3SB301	1×1	1.5×1.82	1.5×1.82	N-0°	P3001	弥生
B3SB302	1×1	1.78×3	1.78×3	N-78°-W		弥生
B3SB303	1×2	3.4×3.5	3.4×1.6~1.9	N-77°-W	SK304	弥生
B3SB304	2×2	3.3×4.1	1.4~1.9×1.94~2.16	N-76°-W	SK304	弥生
B3SB305	1×2	2.2×3	2.2×1.46~1.6	N-80°-W		弥生
B3SB306	1×1	1.56×1.92	1.56×1.92	N-80°-W		弥生
B3SB307	1×1	2.2×3.4	2.2×3.4	N-80°-W	SK304	弥生V-1
B3SB308	1×2	2.6×3.45~3.78	2.6×1.55~1.98	N-85°-W		弥生
B3SB309	1×2	1.7×2.74	1.7×0.84~1.9	N-62°-E		弥生Ⅲ
B3SB310	1×3	2.4×4.42	2.4×0.9~1.82	N-87°-W		弥生
B3SB311	1×1	1.8×2.7	1.8×2.7	N-8°-E	SB312	弥生
B3SB312	1×3	1.4×3.84	1.4×0.84~1.8	N-8°-E	SB311	弥生
B3SB313	1×3	2.2×6.36	2.2×1.22~2.2	N-72°-E		弥生Ⅳ
B3SB314	1×2	2.54×3.04	2.54×0.96~2.02	N-86°-E		弥生

B3SB301 (B3-9図)

時期：弥生 棟方向：N-0°

規模：梁間1間×桁行1間 梁間1.5m×桁行1.82m 面積2.73㎡

柱間寸法：梁間1.5m 桁行1.82m

柱穴数：5 柱穴形：円形

性格：— 付属施設：P3001

出土遺物：弥生土器

所見：調査区南部に位置する。検出標高は7.2mであり、棟方向はほぼ真北を向く。建物の中央北寄りに、直径42cm、深さ43cmを測る不整形円形のピットがある。埋土は黒褐色シルトであり、黄色シルトと焼土をブロック状に含み炭化物も認められる。炉跡と考えられる。弥生土器が出土している。

B3SB302 (B3-9図)

時期；弥生 **棟方向**；N-78°-W

規模；梁間1間×桁行1間 梁間1.78m×桁行3.00m **面積**5.34㎡

柱間寸法；梁間1.78m 桁行3.00m

柱穴数；4 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器細片4点

所見；調査区南部に位置する。検出標高は7.2mであり、東西棟である。柱穴形は円形で直径30cm前後、深さ10～32cmを測る。埋土は灰褐色シルトである。P1より弥生土器細片が4点出土している。

B3SB303 (B3-9図)

時期；弥生 **棟方向**；N-77°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間3.4m×桁行3.5m **面積**11.9㎡

柱間寸法；梁間3.4m 桁行1.54～1.9m

柱穴数；7 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；B3SK304

出土遺物；弥生土器細片1点

所見；調査区南部に位置する。検出標高は7.2mであり、東西棟方向である。北側桁行の中間柱は中世のピットに切られており未検出である。梁にはピットP7・P8が付属し、棟持柱の可能性がある。柱穴形は円形で直径16～20cm、深さ18～24cmを測る。埋土は灰褐色シルトである。建物内東端には、直径1.2m、深さ22cmの不整形円形の土坑B3SK304が存在するが、B3SB304に伴う遺構の可能性もあり、付属施設として捉えるかは検討を要する。埋土は暗灰褐色シルトであり、焼土、炭化物を含む。断面形は逆台形状を呈する。弥生土器の胴部細片が1点出土した。

B3SB304 (B3-9図)

時期；弥生 **棟方向**；N-76°-W

規模；梁間2間×桁行2間 梁間3.3m×桁行4.1m **面積**13.12㎡

柱間寸法；梁間1.4～1.9m 桁行1.94～2.16m

柱穴数；8 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；B3SK304

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南部に位置する。前述した、B3SB303と重なり、棟方向も1°しか変わらず同一方向である。B3SB303の棟持柱に対して、柱通り中央にピットが付くタイプである。柱穴形は円形で直径16～28cm、深さ8～26cmとまばらである。埋土はSB303と同じ灰褐色シルトである。建物内中央東端に位置するB3SK304は共有している可能性も考えられる。建て替えかどうかは不明である。

B3SB305 (B3-9図)

時期；弥生 **棟方向**；N-80°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.2m×桁行3.0m **面積**6.6㎡

柱間寸法；梁間2.2m 桁行1.46～1.6m

柱穴数；5 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；—

所見；調査区南部に位置する。前述したSB303・304の内側に位置する。東西棟であり、SB304と同一方向である。南西隅角のピットは未検出である。柱穴形は円形で、直径18～26cm、深さは8～25cmを測り、P3・4が比較的深い。柱穴埋土はSB303・304と同じ灰褐色シルトである。柱穴からの出土遺物はない。

B3SB306 (B3-9図)

時期；弥生 **棟方向**；N-80°-W

規模；梁間1間×桁行1間 梁間1.5m×桁行1.86～1.92m **面積**2.8㎡

柱間寸法；梁間1.5～1.56m 桁行1.86～1.92m

柱穴数；4 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区南部に位置する。前述したSB303・304の内側に位置する。柱穴形は円形で、直径40cm、深さ42cm前後を測り、他の掘立柱建物に比べ規模が大きい。埋土は灰褐色シルトであるがP1では焼土が認められる。望楼的建物か。

B3SB307 (B3-9図)

時期；弥生V-1 **棟方向**；N-80°-W

規模；梁間1間×桁行1間 梁間2.2m×桁行3.4m **面積**7.48㎡

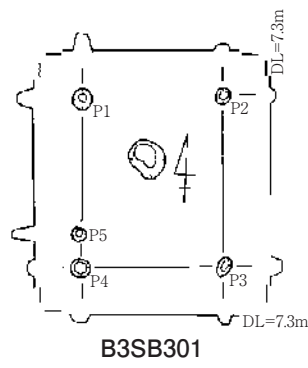
柱間寸法；梁間2.2m 桁行3.4m

柱穴数；4 **柱穴形**；円形

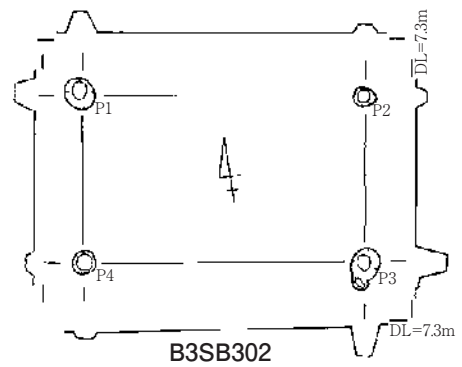
性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器11点（甕口縁1点、胴部細片10点）

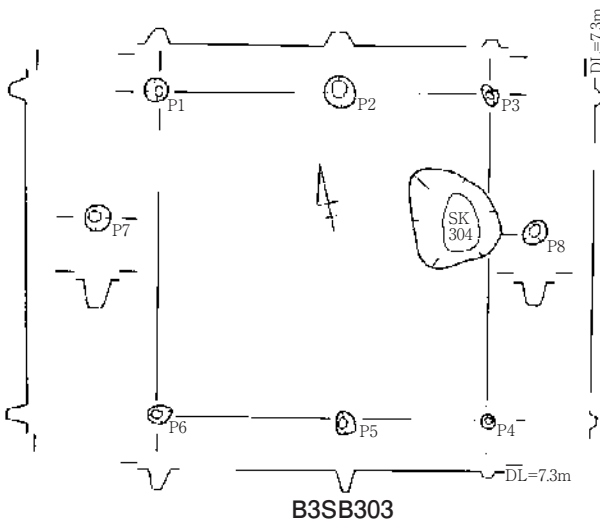
所見；調査区南部に位置し、SB302と並存する。桁行も3.4mとSB302に比べ大きく、P2はSB302P3と切り合う。柱穴の大きさは38～46cmと大きく、P3では黒褐色シルト埋土に黄色ブロック、炭化物、焼土混じる。弥生土器胴部細片10点と甕口縁部が1点出土している。V-1期。



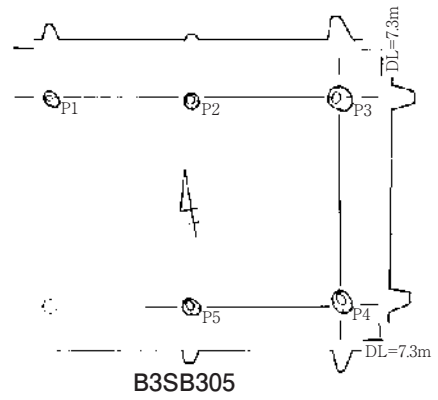
B3SB301



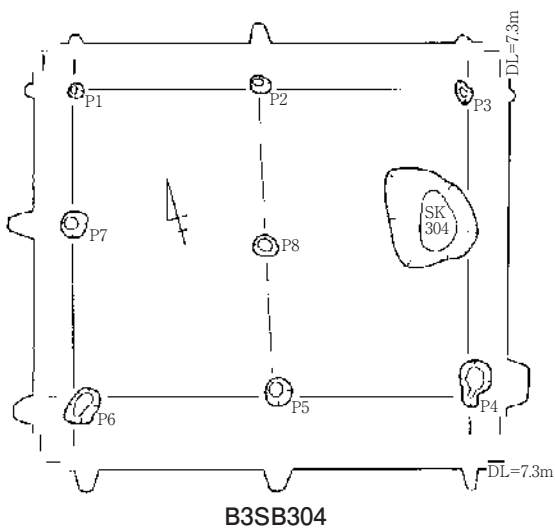
B3SB302



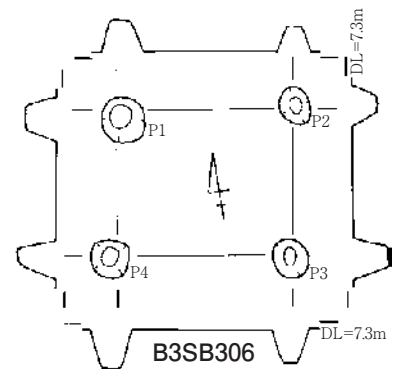
B3SB303



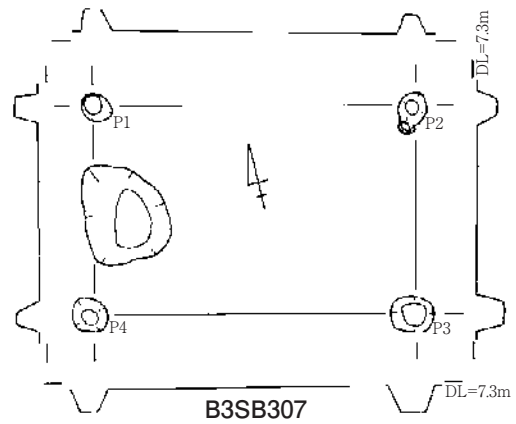
B3SB305



B3SB304



B3SB306



B3SB307

B3-9図 B3SB301~307



B3SB308 (B3-10図)

時期；弥生 **棟方向**；N-85°-W

規模；梁間1間×桁行2間 梁間2.6m×桁行3.45～3.78m **面積**9.82㎡

柱間寸法；梁間2.6m 桁行1.55～1.98m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区中央部に位置する。B3ST303・304内で検出した。東西棟であり、桁行は1.55～1.98mとややばらつきが認められる。P4～P6は柱穴径30～32cmを測るのに比べ、P1～P3は38～40cmと大きい。B3ST303・304を切る。

B3SB309 (B3-10図)

時期；弥生Ⅲ **棟方向**；N-62°-E

規模；梁間1間×桁行2間 梁間1.7m×桁行2.74m **面積**4.65㎡

柱間寸法；梁間1.7m 桁行～1.9m

柱穴数；6 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；弥生土器

所見；調査区中央部に位置する。ST305床面で検出した。桁行は0.84～1.9mとばらつきがある。柱穴形は円形で、直径18～32cm、深さ18～28cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。柱穴から遺物は出土が見られなかったが、検出面上で櫛描直線文、断面三角形の凸帯が付く胴部片などが出土しており、柱穴埋土等から見てⅢ期と考えられる。

B3SB310 (B3-10図)

時期；弥生 **棟方向**；N-87°-W

規模；梁間1間×桁行3間 梁間2.38m×桁行4.24～4.42m **面積**10.52㎡

柱間寸法；梁間2.38m 桁行0.9～1.82m

柱穴数；8 **柱穴形**；円形

性格；— **付属施設**；—

出土遺物；—

所見；調査区中央東部に位置する。地形的に東に向かって落ちる。東西棟であり、ほぼ調査グリッドに直交する。桁行東端の柱間距離が両側とも0.9mと狭い。柱穴形は円形で、直径16～30cm、深さ10～20cmを測り、埋土は灰褐色シルト層である。北西隅角のP1では床面に根石が認められる。柱穴からの遺物の出土は見られなかった。ST303・304、及びSK316・330を切る。

B3SB311 (B3-10図)

時期；弥生 **棟方向**；N-8°-E

規模：梁間1間×桁行1間 梁間1.8m×桁行2.7m **面積**4.86㎡

柱間寸法：梁間1.8m 桁行2.7m

柱穴数：4 **柱穴形**：円形

性格：— **付属施設**：—

出土遺物：弥生土器細片6点

所見：調査区中央西部に位置する。南北棟であるが、西側に隣接するSB312と南の梁のラインが一致しており、棟方向も同じであることから同一時期の建物になる可能性がある。柱穴形は円形で、直径20～30cm、深さ8～30cmを測る。埋土は黒褐色シルトである。P1より弥生土器細片が出土している。

B3SB312 (B3-10図)

時期：弥生 **棟方向**：N-8°-E

規模：梁間1間×桁行1間 梁間1.4m×桁行3.84m **面積**5.38㎡

柱間寸法：梁間1.4m 桁行0.84～1.8m

柱穴数：8 **柱穴形**：円形

性格：— **付属施設**：—

出土遺物：—

所見：調査区中央西部に位置する。南北棟であり、西側の桁行柱間寸法は0.84～1.8mとばらつきがある。柱穴形は円形～楕円形で、直径16～28cm、深さ12～26cmを測り、埋土は黒褐色シルトである。ピットからの遺物出土はなかった。前述したSB311の両梁側のラインとSB312P3・P5が並ぶことから同一の建物になる可能性がある。この場合SB312は底部分にあたり、北に1間の張出しを持つ構造になる。

B3SB313 (B3-10図)

時期：弥生Ⅳ **棟方向**：N-72°-E

規模：梁間1間×桁行3間 梁間2.2m×桁行6.36m **面積**13.99㎡

柱間寸法：梁間2.2m 桁行1.22～2.2m

柱穴数：9 **柱穴形**：円形

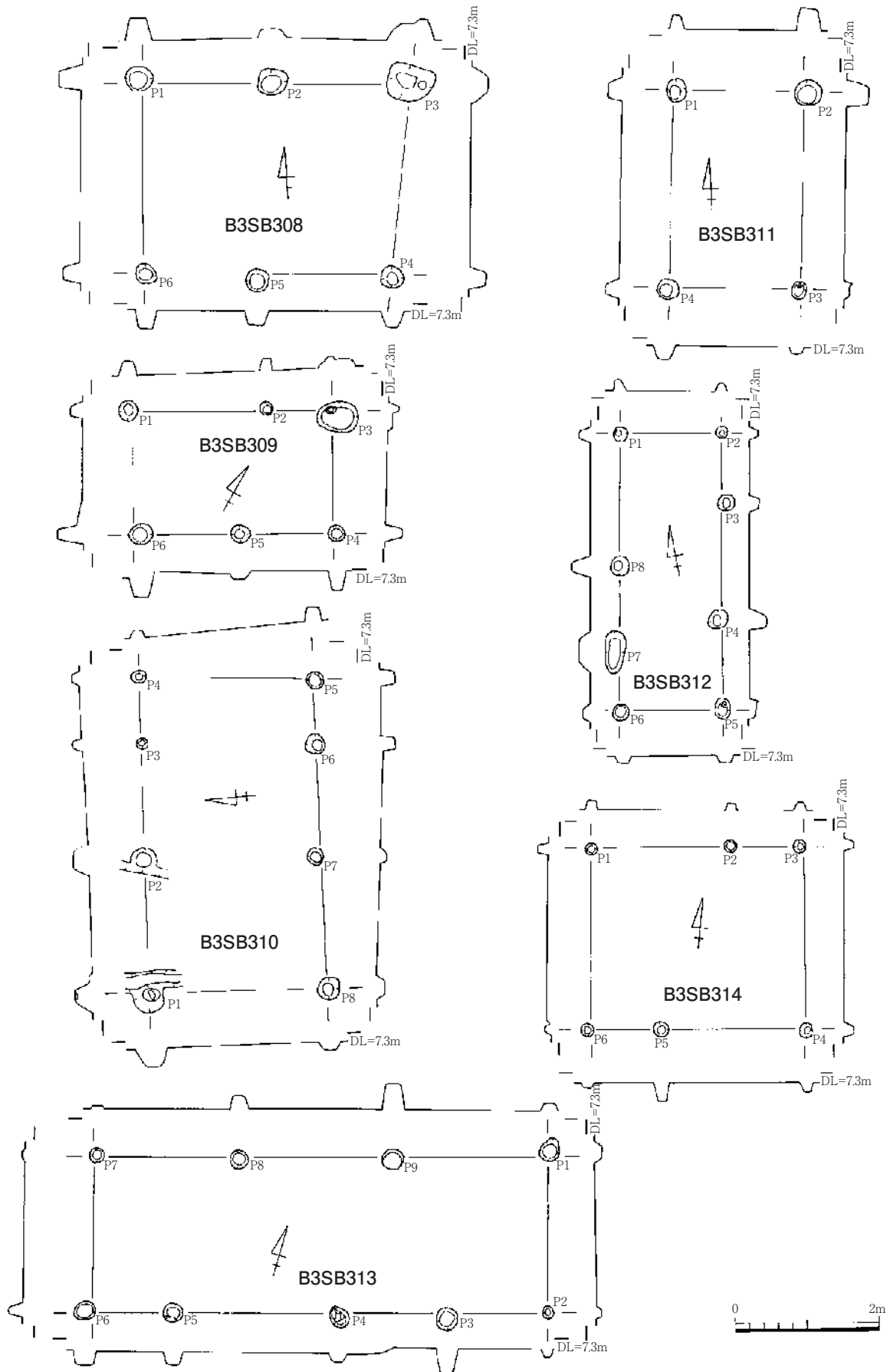
出土遺物：弥生土器2点（甕）

所見：調査区北西部に位置する。B3ST307を切る。東西棟であり、桁行の柱間が南側4間、北側3間と不規則であり、柱間寸法も1.22～2.2mとばらつきがある。柱穴は直径20～30cmの円形で、深さ4～36cmを測る。東から1間目のP3とP9が深さ32～36cmと深いが、その他は18～20cmが平均である。埋土は黒褐色～灰褐色シルトであり、P4・P5には根石状のものが認められる。P4から甕の底部片、P9からは胴部細片が1点出土した。

B3SB314 (B3-10図)

時期：弥生 **棟方向**：N-86°-E

規模：梁間1間×桁行2間 梁間2.54m×桁行3.04m **面積**7.72㎡



B3-10 図 B3SB308~314

柱間寸法：梁間2.54m 桁行0.96～2.02m

柱穴数：6 **柱穴形**：円形

出土遺物：—

所見：調査区北西部に位置する。東西棟であり、桁行北東側と南西側の隅角から1間の柱間が0.96～1.02mと狭く、変則的な1間×2間の建物である。柱穴形は円形で直径18～20cmを測り、深さは14cmを平均とする。埋土は黒褐色シルトである。出土遺物はない。

(3) 土坑

B3区では土坑を61基検出している。この内、弥生時代の土坑は43基である。中には規模が小さく、ピットに分類できるものや、竪穴住居の中央ピットに相当するものがある。ここでは、現地調査時の遺構番号をそのまま踏襲し述べる。弥生時代の土坑では前期の土坑5基、中期初頭～中葉の土坑4基、中期末～後期初頭にかけての土坑19基を検出した。平面プランは楕円形、隅丸方形、長方形、溝状を呈するもので占められる。前期のプランは円形と長方形、楕円形、溝状を呈するものであり、土坑の主軸方向がN-52°～63°-Eと、ある一定方向を指す。埋土は黄灰褐色～灰褐色を呈した砂質シルトのものが多い。中期初頭～中期中葉にかけての土坑は隅丸方形と楕円形、溝状を呈するものであり、主軸方向はまとまりがない。遺構埋土は灰褐色～黒褐色を呈したシルト層である。中期末～後期初頭にかけては土坑プランのバリエーションも豊富であり、大きく溝状を呈するものと、長方形、隅丸長方形に分類され、これらプランに因って主軸方向も異なった方向を指す。

出土遺物は、まとめて遺物が出土する土坑は少なく、時期の詳細が判別できるものは少なかった。大半が細片のものが多く、まったく出土が見られない土坑もあった。土坑の埋土で判別できる可能性もあるが、地形的に流路が近い場所にあたるため堆積が異なり、判別の基準には至らなかった。今回は時期の詳細が判別できるものについてのみ取り上げた。

B3SK301 (B3-8図)

時期：弥生V-1 **形状**：楕円形 **主軸方向**：N-22°-W

規模：0.7×0.6m **深さ**0.52m **断面形態**：U字状

埋土：黒褐色シルト

出土遺物：弥生土器35点（甕3、壺1）

所見：調査区南部に位置する。B3ST310の中央ピットと考えられる。埋土の上層は炭化物と焼土を含んだ黒褐色シルトであり、下層は黄色シルトをブロック状に含む灰黄褐色シルトである。上層と下層の間に炭化物が層状に見られる。出土遺物は弥生土器細片が35点出土している。内容は壺の底部片1点、甕口縁部2点、底部1点、胴部細片が31点である。

B3-3表 B3区弥生土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	付属遺構	埋土	切合関係	時期	備考
B3SK301	楕円形	U字状	0.7	0.6	52	N-22°-W		黒褐色シルト		V-1	ST310中央ピット埋土中に炭化物・焼土含む
B3SK302	楕円形	皿状	1.08	0.55	26	N-25°-W		灰黄色シルト(黒褐色シルトブロック)			埋土から見て時期不明
B3SK303	円形	皿状	0.85	0.83	24	N-0°		黄灰褐色シルト黒黄褐色シルト(炭化物土器含む)		I-3	中央ピット?
B3SK304	不整形	U字状	1.05	0.85	56	N-15°-W		暗灰褐色シルト(焼土・炭化物含む)焼土層あり			中央ピット?
B3SK305	円形	U字状	0.55	0.5	37	N-0°		黒褐色シルト(炭化物・焼土含む)		V-1	中央ピット?
B3SK306	長方形	皿状	1.7	0.88	12	N-73°-W		灰褐色シルト			
B3SK311	楕円形	皿状	1.32	1.1	10	N-84°-W		灰褐色砂質シルト	B3ST303切る。	V-1	薄手土器片
B3SK312	正方形	皿状	2	1.76	25	N-9°-E		黄灰褐色砂質シルト		V-1	
B3SK313	隅丸長方形	皿状	1.28	0.72	12	N-24°-E		黒褐色シルト(炭化物・焼土含む)	B3ST301切られる	III	
B3SK315	円形	U字状	0.48	0.48	25	N-0°		黒褐色シルト(炭化物・焼土含む)			
B3SK316	溝状	逆台形	5.5	0.43~0.52	30	N-15°-E		黒褐色粘土	B3SK317に切られる	III-2	SK330と並行
B3SK317	溝状	U字状	5.45	0.42~0.64	29~36	N-77°-W		1灰褐色シルト2暗褐色シルト	B3SK316を切る	IV-1	
B3SK319	不整楕円形	U字状	[1.82]	0.76	21	N-67°-W		灰褐色砂質シルト	B3ST303・304切る。B3ST305に切られる	II・III	
B3SK320	不整形	逆台形	1.4	0.96	32	N-74°-W		暗褐色砂質シルト(黄褐色ブロック)		IV	
B3SK325	楕円形	U字状	1	0.65	24	N-21°-E		灰褐色粘質シルト		IV~V	
B3SK326	円形	皿状	1.46	1.46	20	N-0°		黄灰色シルト(炭化物含む。褐色シルト少量ブロックで含む)	B3SK326に切られる。		
B3SK328	楕円形	皿状	1.83	0.53~0.84	4~16	N-63°-E		1黄灰色シルト(炭化物含む)、2灰褐色砂礫(3~5cm大の礫)、3黒褐色砂質シルト	B3P3024・3040に切られる。	I-3	
B3SK329	隅丸長方形	逆台形状	1.44	1.2	28	N-11°-E		1灰褐色シルト(黄色シルトブロック。焼土僅かに含む)、2黄灰色シルト			
B3SK330	溝状	U字状	5.3	0.49~0.51	19~25	N-12°-E		灰褐色シルト(黄色シルトブロック炭化物少量含む)	B3SK317に切られる。		SK316と同時期
B3SK332	溝状	U字状	1.72	0.32	17	N-54°-W		灰褐色シルト(僅かに焼土含む)		IV	中央部に礫集中
B3SK333	楕円形	皿状	1.08	0.9	10	N-0°		灰褐色シルト(炭化物・焼土僅かに含む)		I-3	
B3SK335	隅丸方形	逆台形	1.2	0.8	12	N-18°-E		黄灰褐色シルト(焼土・炭化物含む)	B3ST309を切る	V	床面ST309床と同一面
B3SK338	不整形		1.1	0.4	11	N-11°-E		灰褐色砂礫(2~3cm大の砂利)			ピットか?
B3SK339	不整楕円形	皿状	0.96	0.7	12	N-43°-W		黒褐色シルト			
B3SK341	不明	皿状	[1.2]	1	8~9	N-84°-W		灰褐色シルト	B3SK346に切られる		遺構西半分はB3SK346に切れ形態は不明
B3SK342	溝状	U字状	3.28	0.49	23	N-54°-W		黒褐色シルト	B3SK347に切られる	IV	
B3SK344	楕円形	皿状	2.66	1.44	22	N-13°-E		黄灰色シルト			
B3SK345	溝状	逆台形状	6.25	0.55	15	N-59°-E		暗灰褐色砂質シルト		I-3	
B3SK347	不整形	逆台形	2.48~1.7	0.96	15~29	N-0°		灰黄色シルト			複数遺構の切り合いか北部U字状に落ち込む埋土は新しい(近世)
B3SK348	楕円形	U字状	1.45	0.94	48	N-65°-W		黄灰褐色シルト(焼土・炭化物含む)		III~IV	ST303・304中央ピットII時期にわたる利用か?
B3SK349	楕円形	皿状	0.65	0.55	18	N-88°-E		黄灰褐色シルト(炭化物筋状に含む)		III	ST308中央ピット両端に小ピット付く。
B3SK350	不整楕円形	U字状	1.46	1.04	18~31	N-70°-W		1灰褐色シルト(炭化物・焼土含む)、2灰褐色粘土質シルト(炭化物・焼土含む)、3暗灰褐色砂(小礫5mm含む)		IV-2	ST306中央ピット

B3SK351	楕円形	U字状	1.58	1.4	0.38	N-23°-E	1暗灰褐色シルト、2橙色シルト(焼土)、3褐灰色シルト質砂、4黒褐灰色シルト、5明黄灰褐色シルト質砂	V-1	ST309中央ピット埋土の焼土層上面から銅釧出土	
B3SK352	不整楕円形	V字形	1.16	0.76	0.34	N-76°-W	1暗灰褐色シルト(黄褐色シルトブロック炭化物含む)、2暗灰褐色シルト(灰色粘土多く含む)	IV	ST307中央ピット埋土中に10~15cm大の礫含む。	
B3SK353	楕円形	U字状	0.64	0.32	25	N-65°-W	黒褐色シルト			
B3SK354	溝状	皿状	1.04	0.28	5	N-60°-E	灰褐色シルト	I-3	SK345に並行。規模は小さい。	
B3SK355	楕円形	皿状	0.88	0.64	15	N-83°-E	暗灰褐色シルト	IV-2	検出プランは不整形。遺構の切り合いか?北部P3115と切り合い。	
B3SK356	隅丸長方形	逆台形状	1.92	1.36	44	N-24°-W	暗灰褐色シルト	IV-2		
B3SK357	長方形	逆台形状	[1.1]	1.08	13	N-52°-E	灰褐色砂質シルト(黄色シルトブロック)	I-3	東部は調査区外に続く	
B3SK358	溝状	U字状	2.16	0.38	10	N-39°-W	灰褐色シルト	IV		
B3SK359	不整形	U字状	1.24	0.64~0.88	70	N-10°-E	黄褐色シルト	IV		
B3SK360	方形	逆台形	[1.04]	[0.88]	21	N-20°-E	黄褐色シルト	B3ST306に切られる	IV	
B3SK361	円形	U字状	1.64	1.6	53	N-0°	暗褐色シルト		西よりに集石	

B3SK303 (B3-11図)

時期：弥生 I-3 形状：円形 主軸方向：N-0°

規模：0.85×0.83m 深さ0.24m 断面形態：皿状

埋土：1.黄灰褐色シルト、2.黒黄褐色シルト(炭化物含む)

出土遺物：弥生土器12点(甕底部2点、胴部細片10点)

所見：調査区南部に位置する。埋土の上層は黄灰褐色シルトで、下層は黒黄褐色シルト層で炭化物・黄色ブロック含む。埋土中より、弥生土器の胴部細片10点が出土し、甕の底部と考えられる破片2点が出土した。土器胎土からみて弥生前期のものと考えられる。

B3SK304 (B3-11図)

時期：弥生 形状：不整形 主軸方向：N-15°-W

規模：1.05×0.85m 深さ0.56m 断面形態：U字状

埋土：暗灰褐色シルト(焼土・炭化物含む)

出土遺物：弥生土器1点、石斧1点

所見：調査区南部に位置する。SB303~305に付属する可能性がある土坑である。断面形は東側が垂直に近く立ち上がり、西側が挿鉢状に立ち上がる。埋土には焼土・炭化物が含まれており、上層と下層の間に、厚さ5~7cmの焼土層が見られる。弥生土器の胴部細片が1点と打製石斧(2)が出土している。

B3SK305 (B3-11図)

時期：弥生 V-1 形状：円形 主軸方向：N-0°

規模：0.5×0.55m 深さ0.37m 断面形態：U字状

埋土；黒褐色シルト

出土遺物；弥生土器11点（甕）

所見；調査区南部に位置する。埋土は炭化物・焼土を含む黒褐色シルトの単一層である。柱痕は認められないが、規模がB3SB307を構成する他のピットとほぼ同じであり、位置的な配置から見てB3SB307の南東隅のピットにあたると思われる。

出土遺物は弥生土器11点であり、内容は甕口縁部1点、胴部細片10点である。1は小型の鉢であり、斜上方に直線的に立ち上がり、口縁部はやや内湾、端部は横位のナデにより尖り気味に仕上げる。内外面とも体部はハケ調整が施される。

B3SK311 (B3-11図)

時期；弥生V-1~2 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-84°-W

規模；1.32×1.1m **深さ**0.1m **断面形態**；皿状

埋土；灰褐色砂質シルト

出土遺物；弥生土器33点（甕口縁2点、胴部細片31点）

所見；調査区中央部に位置し、ST303P7・304P8、SB306P6を切る。断面形は皿状を呈し、埋土は灰褐色シルトである。出土遺物は細片ばかりで詳細は不明であるが、薄手の甕の口縁部片などからV-1~V-2の時期が考えられる。

B3SK316 (B3-12図)

時期；弥生Ⅲ-2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-15°-E

規模；5.5×0.43~0.52m **深さ**0.3m **断面形態**；逆台形

埋土；黒褐色粘土

出土遺物；弥生土器101点（壺底部2、鉢1、高杯1、胴部細片97）、石斧

所見；調査区東部に位置する。平面プランは溝状を呈し、東側に同じ溝状プランのB3SK330が並行する。遺構中央部は直交する同様の溝状プランのB3SK317に切られる。断面形は逆台形を呈し、埋土は炭化物を少量含んだ黒褐色粘土であり、黄色シルトをブロック状に含む。

出土遺物は貼付口縁の鉢（1）、裾がラップ状に開く円柱状の底部片（2）などが出土しており、石器では頁岩の小型のノミ状加工斧が出土している。

B3SK317 (B3-13図)

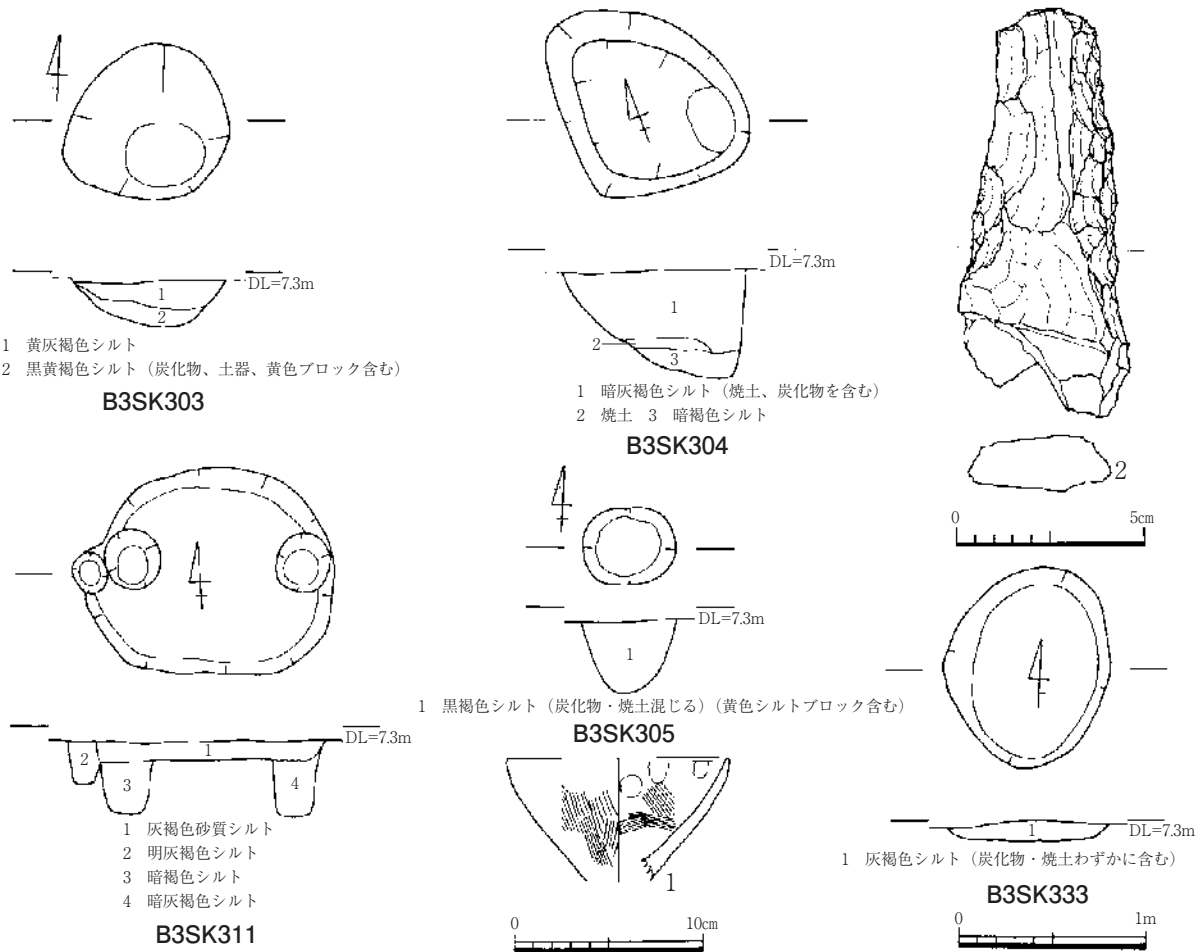
時期；弥生Ⅳ-1 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-77°-W

規模；5.45×0.42~0.64m **深さ**0.29~0.36m **断面形態**；U字状

埋土；1.灰褐色シルト、2.暗褐色シルト

出土遺物；弥生土器151点（甕2、壺2、鉢2、高杯1、胴部細片145点）、石包丁

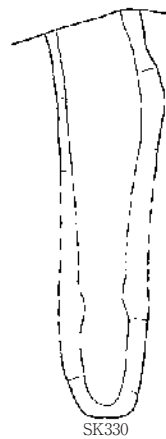
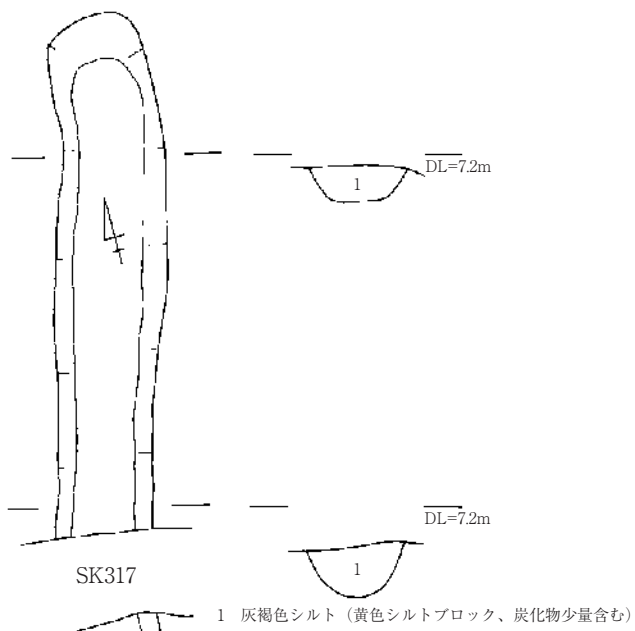
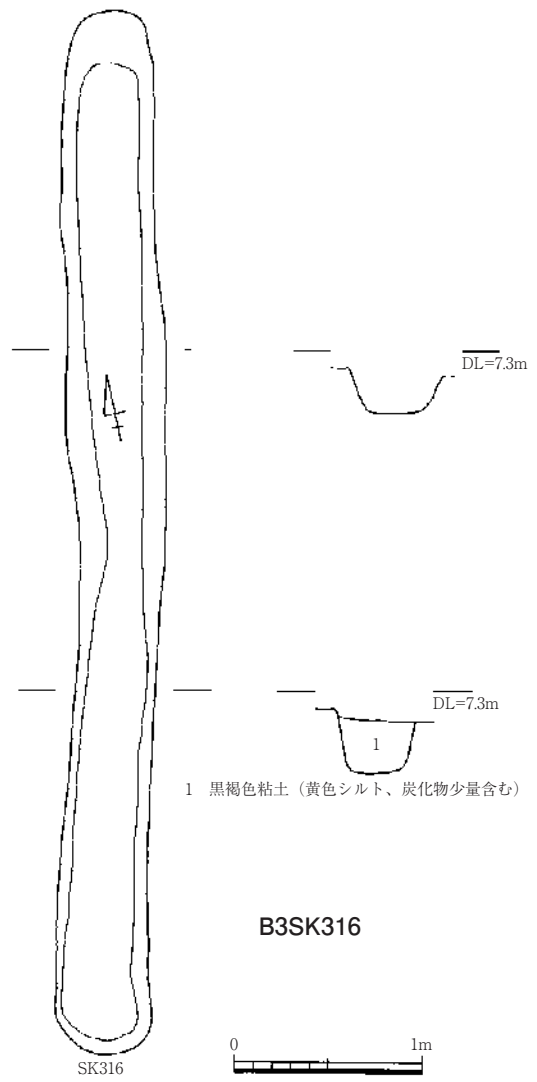
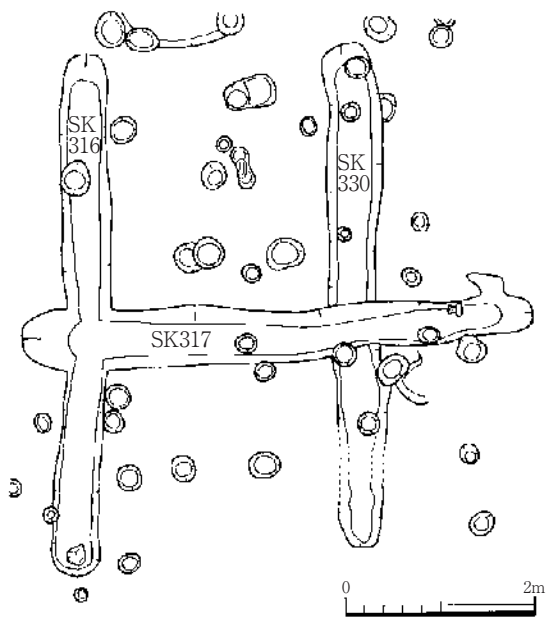
所見；調査区東部に位置する。前述のSK316を切る。断面形態はU字状を呈し、東側は幅がやや狭くなり、逆台形状を呈する。埋土は灰褐色シルトを主体とするが、遺構西半分では下層に暗褐色粘土



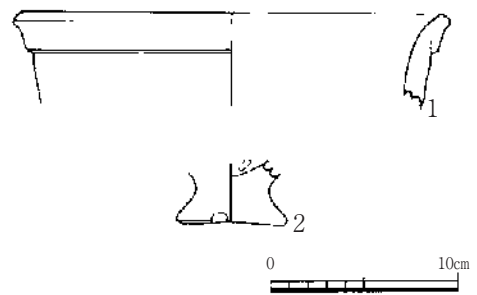
B3-11図 B3SK303~305・311・333

質シルトの堆積が認められる。

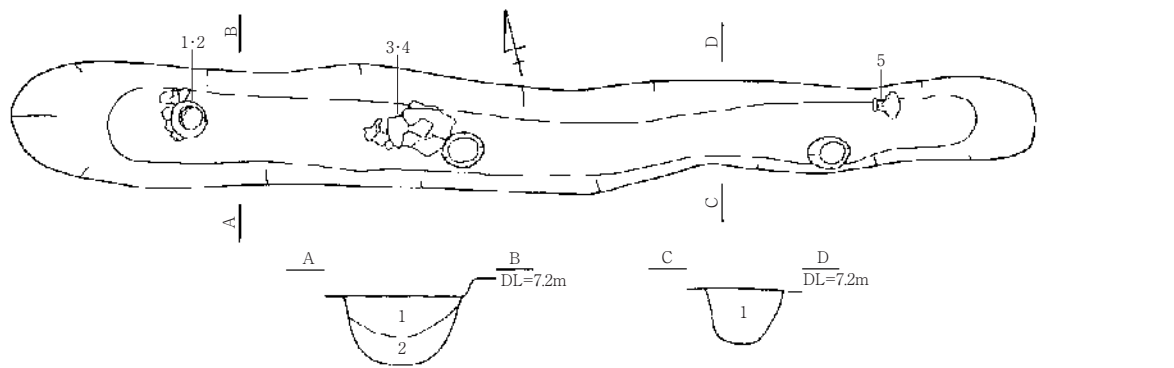
1層の灰褐色シルト層から1~5がほぼ完形で出土が見られた。1は壺である。最大径が胴部上位にあり、頸部は上方に延び口縁部は外反する。貼付口縁であるが横位のナデが施され、外面に貼付帯の段は残っていない。端部は上方に拡張され面を成す。胴部外面はハケ調整、内面は板状工具によるナデが施される。頸部下端に斜状の刻みが施される。2も壺である。胴部中位から上は欠損する。外面胴部下半にヘラミガキ、内面はナデが施される。3・4は鉢である。内湾する胴部から口縁部は短く外反する。端部は面を成し、凹線文が施される。外面ハケ調整、内面は胴部上位の一部に横位のケズリが認められる。5は高杯である。脚部から杯部は斜上方に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部は横位のナデ、体部は内外面とも井桁状のミガキが施される。脚部は4~5条の沈線が施され、下位に円孔が配される。内面はヘラ削り。その他、図示し得なかったが、土佐西部型甕の口縁部片も出土が見られた。石器は打製石包丁図6が出土している。



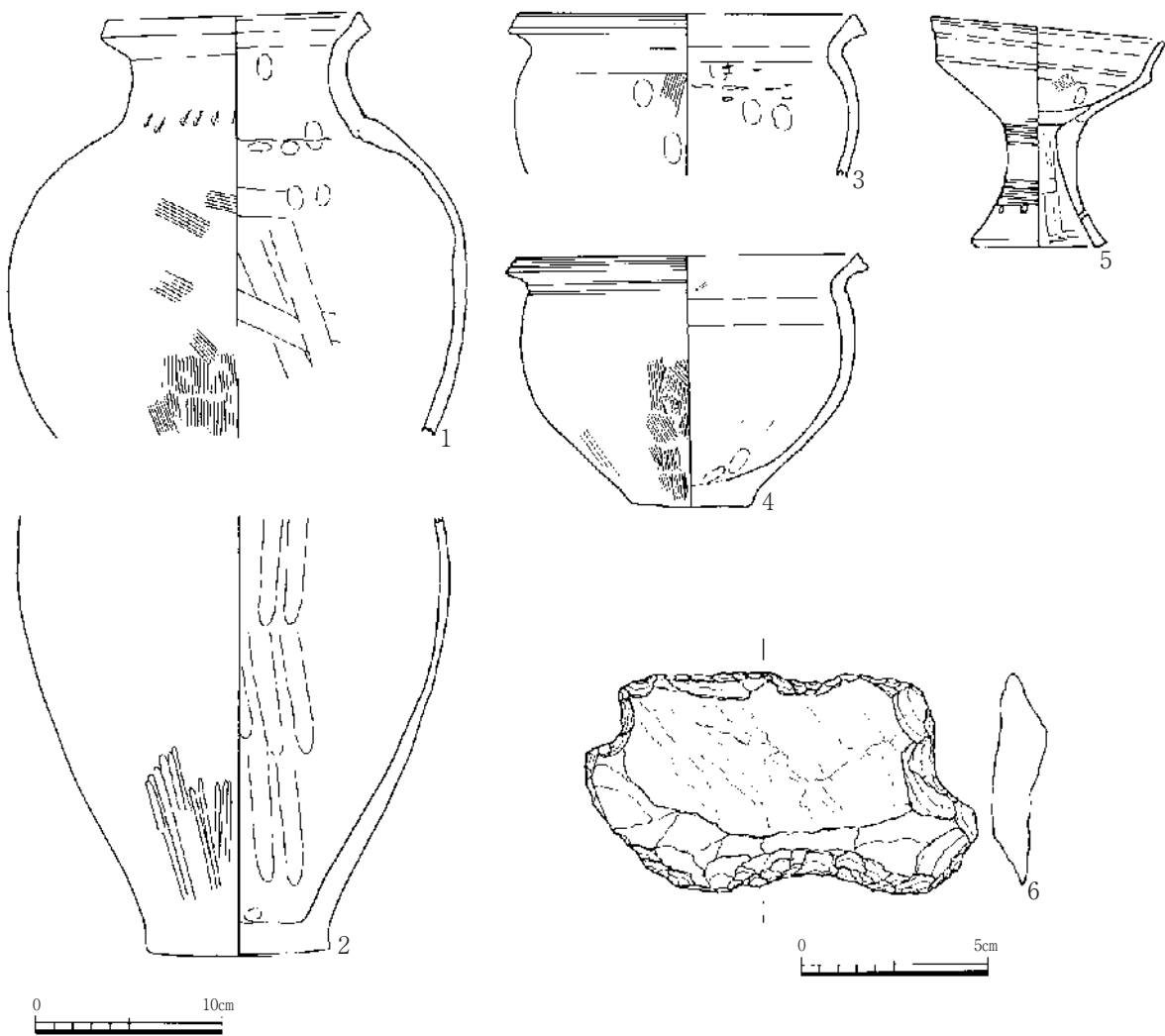
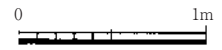
B3SK330



B3-12図 B3SK316・317・330



- 1 灰褐色シルト (黄色シルトブロック混入、炭化物含む②セクション部)
- 2 暗褐色粘性シルト (黄色ブロック、黒褐色ブロック)



B3-13図 B3SK317

B3SK328 (B3-14図)

時期；弥生Ⅰ-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-63°-E

規模；1.83×0.53～0.84m **深さ**0.04～0.16m **断面形態**；皿状

埋土；1.黄灰色シルト（炭化物含む）、2.灰褐色砂礫（3～5cm大の礫）、3.黒褐色砂質シルト

出土遺物；弥生土器73点（甕9、壺3、蓋1、胴部細片62）

所見；調査区中央西部に位置する。P3024・3040に切られる。平面形は楕円形であるが、西側部分は幅が狭く方形状を呈し、テラスを有する。埋土は上層に炭化物を含む黄灰色シルト層が面的に堆積しており、土坑中央部では2層目に灰褐色を呈した砂礫層、北側肩部に黒褐色砂質シルトが認められる。土坑中央床面に直径14cmの扁平な円礫が1個認められる。

出土遺物は弥生前期土器の細片を中心に73点が出土している。1～4は甕である。4は有段の甕であり、段部下は強いナデにより凹む。口縁端面と有段部に刻みが施される。1～3は如意状の口縁部であり、端部に刻みが施される。

B3SK330 (B3-12図)

時期；弥生Ⅲ-2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-12°-E

規模；5.3×0.49～0.51m **深さ**0.19～0.25m **断面形態**；U字状

埋土；灰褐色シルト

出土遺物；弥生土器20点（胴部細片20点）

所見；調査区中央東部に位置する。西側にB3SK316が並行する。中央部はB3SK317に切られ、南部は上面で検出された土坑B3SK323に切られる。断面形は北側が逆台形状を呈し、中央部から南部にかけてはU字状である。遺構埋土は黄色シルトと炭化物を少量含む灰褐色シルトであり、埋土中から弥生土器の胴部細片が20点出土した。時期の詳細は不明であるが、プランの長軸方向がB3SK316とほぼ同一方向であることから同時期であると考えられる。

B3SK333 (B3-11図)

時期；弥生Ⅰ-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-0°

規模；1.08×0.9m **深さ**0.1m **断面形態**；皿状

埋土；灰褐色シルト

出土遺物；弥生土器31点（甕口縁2、底部片1）

所見；調査区北部に位置する。断面形皿状を呈した浅い土坑であり、埋土は灰褐色シルトで炭化物・焼土を含む。弥生前期の甕口縁部片や細片31点が出土している。

B3SK345 (B3-14図)

時期；弥生Ⅰ-3 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-59°-E

規模；6.25×0.55m **深さ**0.15m **断面形態**；逆台形

埋土；暗灰褐色砂質シルト

出土遺物；弥生土器175点（甕口縁7、底部3・壺底部2・胴部細片163）

所見；調査区北東部に位置する。検出標高は7.26mであり、上層は削平を受けているものと思われる。平面プランは細長い溝状を呈し、北東端部はピット状に落ち込む。断面形は逆台形状を呈し、埋土は暗灰褐色を呈した砂質シルトである。

埋土中から弥生時代前期の甕・壺の細片が出土しているが完形復元できるものはなかった。6・7は甕の口縁部片である。6は口縁端部の下端に刻みが施され、7は面を成す端部全面に刻みが施される。6の外面にはヘラミガキが認められる。性格は溝の可能性も考えられるが、ここではSKとして取り上げた。

B3SK357（B3-14図）

時期；弥生 I - 3 **形状**；長方形 **主軸方向**；N - 52° - E

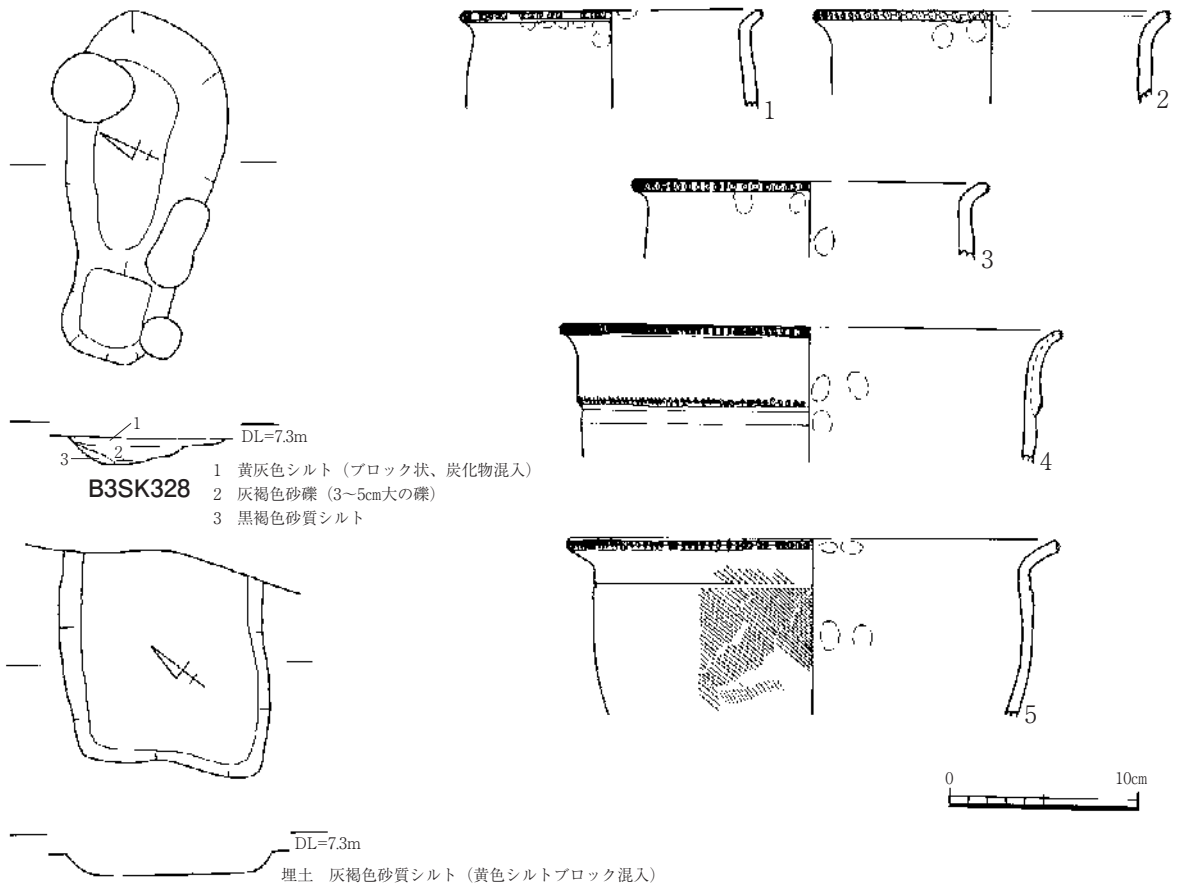
規模；(1.1) × 1.08m **深さ**0.13m **断面形態**；逆台形状

埋土；灰褐色砂質シルト（黄色シルトブロック）

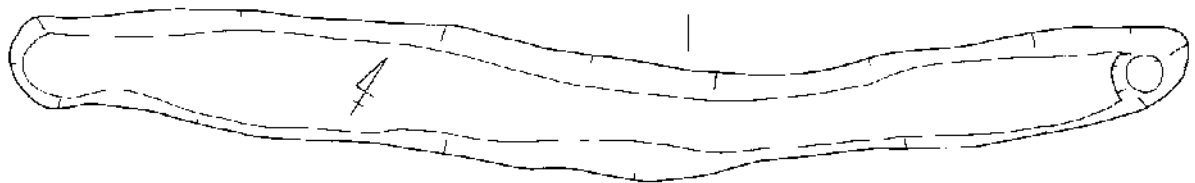
出土遺物；弥生土器46点（甕1点・胴部細片45点）

所見；調査区北東部に位置する。断面形は長方形を呈するが、北東側は調査区外に延び全体の規模は不明である。断面形は緩やかな逆台形を呈し、埋土は黄色シルトのブロックを含む灰褐色砂質シルトである。

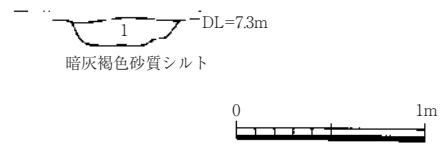
埋土中から弥生前期の土器片が出土しているが完形復元できるものは無かった。5は甕である。口縁部は外反が強く、端部は面を成し、全面に刻みが施される。外面は口縁直下に1条の沈線が見られ、全面ハケ調整が施される。



B3SK357



B3SK345



B3-14図 B3SK328・345・357

3. B3区中世以降の遺構と遺物

(1) 土坑

B3区では中世の土坑8基、その他、時期の詳細は不明であるが土坑の形態・規模・埋土からみて近世以降と思われる土坑5基、古代末の土坑1基を検出した。B区には中世の遺構が多く確認されており、B3区の東側に隣接するB1区で環濠屋敷が検出されている。一辺が50mを測る溝で囲まれた屋敷であり、西側を囲む溝の一部がB3区の東端でも確認された。この大規模な環濠屋敷の外側にあたる部分であるが、B3区においても当該期における土坑を検出した。プランは不整形なものが多く、性格も不明なものが多い。出土遺物も破片が多く、弥生土器片の混入もあり、時期の詳細は不明であるが、今回検出された土坑の時期は概ね16世紀末～17世紀初頭に比定できる。隣接する環濠の時期からは後続するが、南部調査区のB4区にも当該期の遺構が散見でき、近世に至るまで屋敷地が展開していたものと思われる。

B3-4表 B3区中世土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	付属遺構	埋土	切合関係	時期	特記事項(機能)
B3SK307	正方形	皿状	1.44	1.28	26	N-6°-E		黄灰色シルト(褐色シルトブロック)	ST301切る	中世	
B3SK308	正方形	皿状	0.96	0.88	26	N-0°		黄灰色シルト(褐色シルトブロック)		中世	埋土・形態から見てSK307と同時期か?
B3SK309	楕円形	皿状	0.96	0.64	12	N-35°-W		灰色粘土(炭化物含む)		中世	
B3SK310	楕円形	逆台形状	1.32	0.96	20	N-13°-E		灰色粘土(黄褐色シルト褐色シルトブロック)	ST303切る	近世	埋土三毛色
B3SK314	不整形		3.14	[2.26]	42	N-10°-E		黄灰色シルト(焼土・炭化物含む)		中世	
B3SK321	不整形	皿状	1.84	1.26	22	N-71°-W		灰褐色シルト		中世	土師質土器混入
B3SK322	不整形楕円形	皿状	2	0.98	8~12	N-84°-W		灰色シルト(黒褐色・黄色シルトブロック)			埋土から見て中近世
B3SK323	不整形円形	皿状	0.96	0.96	18~20	N-0°		灰色粘土(黒褐色・黄褐色シルトが斑点状に混じる)	SK330を切る		埋土から見て中近世。弥生前期~中後期遺物混入
B3SK324	長方形	逆台形	1.69	1.24	18	N-80°-W		灰褐色シルト(焼土含む)	SK326を切る	平安末	
B3SK336	不整形	逆台形	5.06	[0.86]~[1.62]	12~42	N-0°		1黄灰褐色シルト(焼土・炭化物含む)、2灰色粘土(褐色シルトブロック)		中世16世紀	弥生土器片混入。土坑中央部は溝状を呈する。
B3SK340	長方形	皿状	8.24	1.92~2.16	24	N-76°-W		1黄灰色シルト(褐色ブロックまじら含む)、2灰色粘土			埋土は近世以降か?
B3SK343	隅丸長方形	逆台形	4.08	1.52	21	N-14°-E		黄灰色シルト		中世	弥生土器片混入
B3SK346	長方形	皿状	3.44	2.56	25	N-15°-E		灰色シルト		中世	弥生土器片混入
B3SK347	不整形	逆台形	2.48~1.7	0.96	15~29	N-0°		灰黄色シルト			複数遺構の切り合いか北部U字状に落ち込む埋土は新しい(近世)

B3SK310 (B3-15図)

時期：近世 形状：楕円形 主軸方向：N-13°-E

規模：1.32×0.96m 深さ0.20m 断面形態：逆台形状

埋土：灰色粘土(黄褐色シルト、褐色シルトをブロック状に含む)

出土遺物：弥生土器12点(甕底部2点、胴部細片10点)

所見：調査区中央部に位置し、ST303を切る。埋土は灰色粘土で、黄褐色シルトをブロック状に含

み三毛状を呈する。この埋土からみて近世以降のものと考えられる。出土遺物は弥生土器の細片が13点出土しているが混入と考えられる。

B3SK314 (B3-16図)

時期；中世(16C後半) **形状**；不整形 **主軸方向**；N-10°-E

規模；3.14×(2.26)m **深さ**0.42m **断面形態**；逆台形状

埋土；黄灰色シルト(焼土・炭化物含む)

出土遺物；青花皿1点、弥生土器28点(壺口縁2、胴部細片26)

所見；調査区南西部に位置する。平面プランは一部B4区側に拡がっており全体は不明であるが、南に向かって溝状に延びる。埋土はやや粘性のある黄灰色シルトであり、炭化物と焼土を若干含む。出土遺物は弥生土器の細片28点と、青花皿(1)が1点出土している。口縁部外面に波濤文、内面に界線が巡る。陶胎染付で呉須の釉調はくすんだコバルトを呈する。漳州窯系である。弥生土器については混入と思われ、青花皿等からみて16C後半～末葉にかけての遺構と考えられる。

B3SK334 (B3-15図)

時期；中世(16世紀) **形状**；不整形 **主軸方向**；N-0°

規模；4.2×(2.7)m **深さ**0.47m **断面形態**；皿状

埋土；灰色粘性シルト

出土遺物；土師質土器5点、陶磁器1点、弥生土器18点(混入)

所見；調査区北西部に位置する。プランは調査区西壁に切られ全容は不明であるが、北部は円形状を呈し、上層、検出面で直径20～40cmの礫の集中が見られる。北東部はテラス状の張出しを持つ。埋土は粘性のつよい灰色粘土であり、集石下部にも堆積が認められる。

出土遺物は土師質土器鍋、茶釜、備前焼小壺などが出土している。2は在地の土師質土器の鍋であり、体部は直立し、口縁部は尖り気味に仕上げる。内外面ともナデ調整が施され、底部外面にタタキ目残る。内面におこげ付着。1は土師質土器の茶釜で胴部鏝上部の両端に把手が付く。把手取付け部には円孔が見られる。

B3SK336 (B3-16図)

時期；中世(16世紀) **形状**；不整形 **主軸方向**；N-0°

規模；5.06×(0.86)～(1.62)m **深さ**0.12～0.42m **断面形態**；逆台形

埋土；1黄灰褐色シルト(焼土・炭化物含む)、2灰色粘土(褐色シルトブロック)

出土遺物；土師質土器5点、陶磁器1点、弥生土器18点(混入)

所見；調査区北西部に位置する。プランは調査区西壁に切られ、全体は不明であるが、北部は楕円形、南部は円形を呈するものと考えられ、中央部は溝状を呈する。遺構の深さは南部の方が深く、溜り状を呈する。埋土は黄灰褐色シルトで炭化物・焼土を含む。出土遺物は土師質土器の杯2点、鍋3点、内面見込みに玉取り獅子の文様が施された青花皿(2)などが出土している。

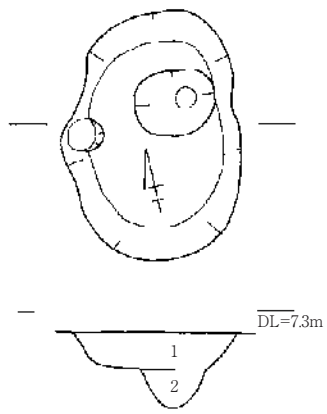
(2) 溝跡

B3SD301 (B3-17・18図)

調査区東壁にあたる部分で中世の溝の一部を検出した。B1区で検出された環濠 (B1SD105) の西側にあたる部分である。南部は攪乱を受け不明であるが、環濠の北西隅角にあたる部分を検出した。B3区においては検出長23.5mを測る。上層部は調査区東側の水路の影響で工事の際、影響を受けており攪乱されているが、西側の肩のラインは攪乱の影響を受けていない。環濠の北西隅角部にあたるB3SD301の北部では、直径20～40cm大の礫の集石が認められた。断面で観察すると人為的に埋められた状況を呈しており、土塁の根石及び裾石に使われた石材と考えられる。埋土は隣接する水路の影響で還元されており、青灰色～明灰色のシルト～砂層であり、最下部は砂の堆積が認められる。遺物は1層の暗青灰色シルト層と5・6層の灰色シルト層で比較的まとまって出土が見られた。

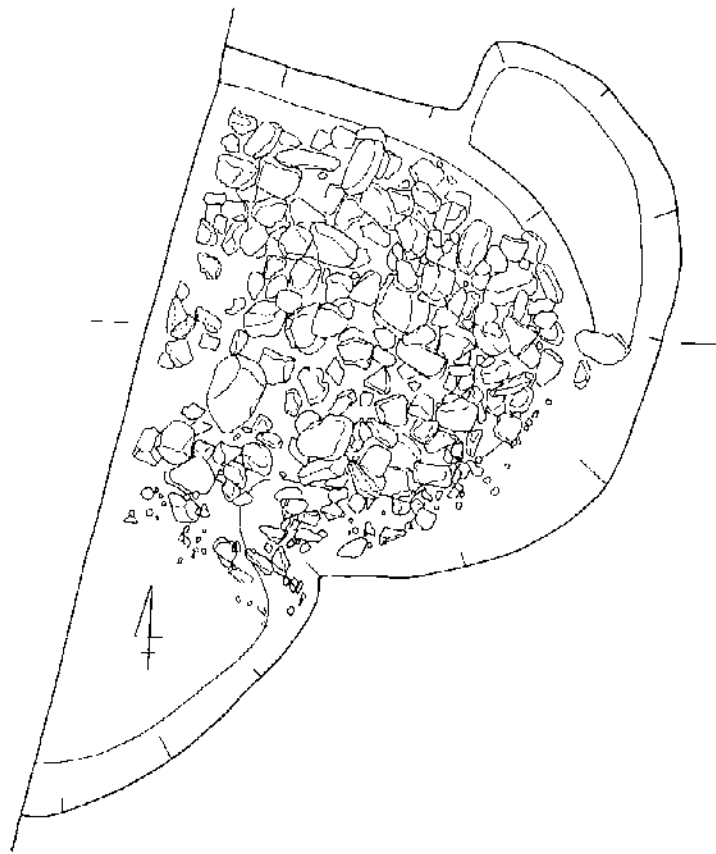
主な出土遺物は土師質土器鍋5、備前焼播鉢1・2、甕3・4、羽口6などである。この内、土師質土器鍋5は播磨型鍋であり、B1SD105で比較的まとまって出土しているタイプである。備前焼の播鉢は15世紀後半～16世紀末のものである。これらの遺物から機能時期を見れば、溝の埋められる時期は16世紀後半～末にかけてと考えられる。

その他、西側肩口の黄褐色シルト層から縄文後期の土器片7が出土している。7は鐘崎式の浅鉢と思われるが口縁上部は欠損する。口縁部外面に沈線で区画される原体RLの磨消縄文が施され、一部、赤彩が認められる。



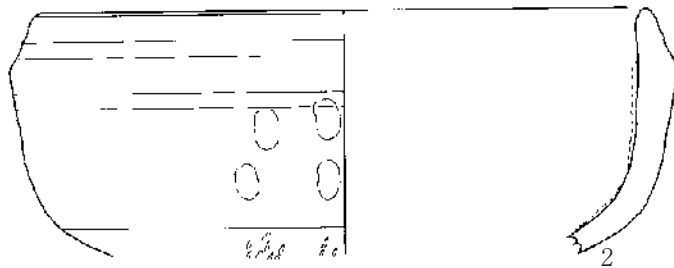
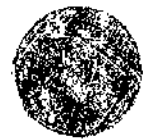
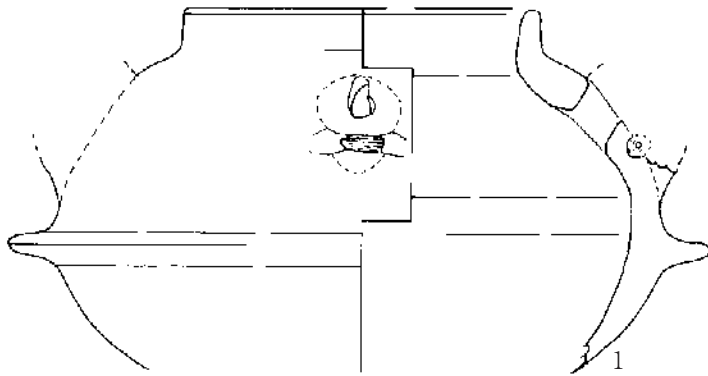
B3SK310

- 1 灰色粘土 (黄褐色シルト、褐色シルトブロック状に含む)
- 2 暗褐色シルト (ST306 pit埋土)

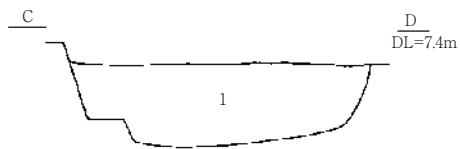
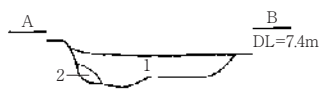
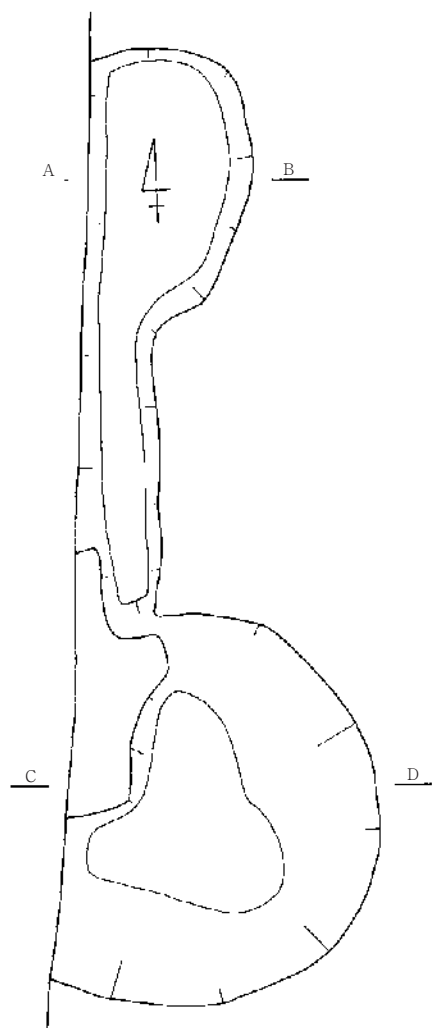


B3SK334

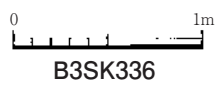
1 灰色粘性シルト



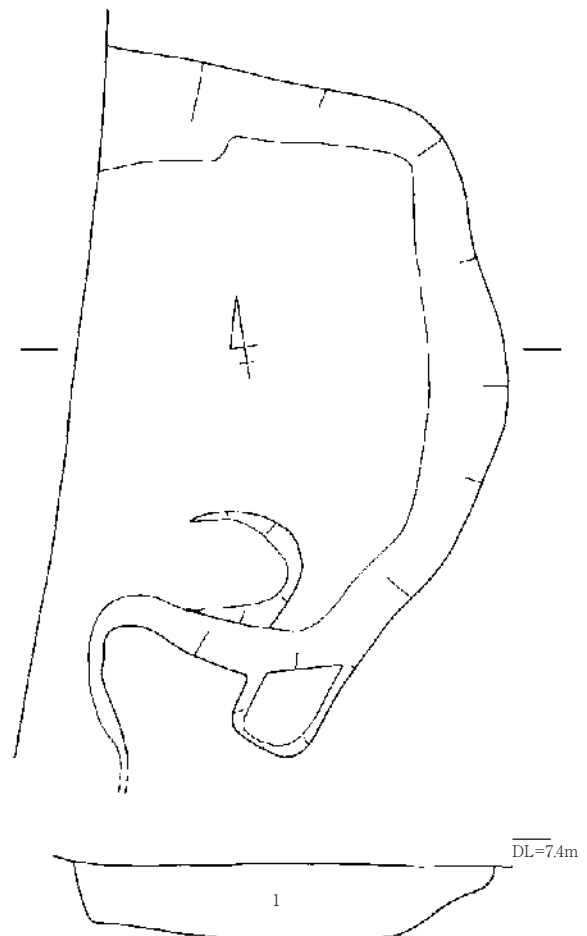
B3-15図 B3SK310・334



- 1 黄灰褐色シルト (炭化物・焼土含む)
- 2 灰色粘土 (褐色シルトブロックで含む)



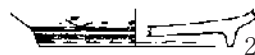
B3SK336



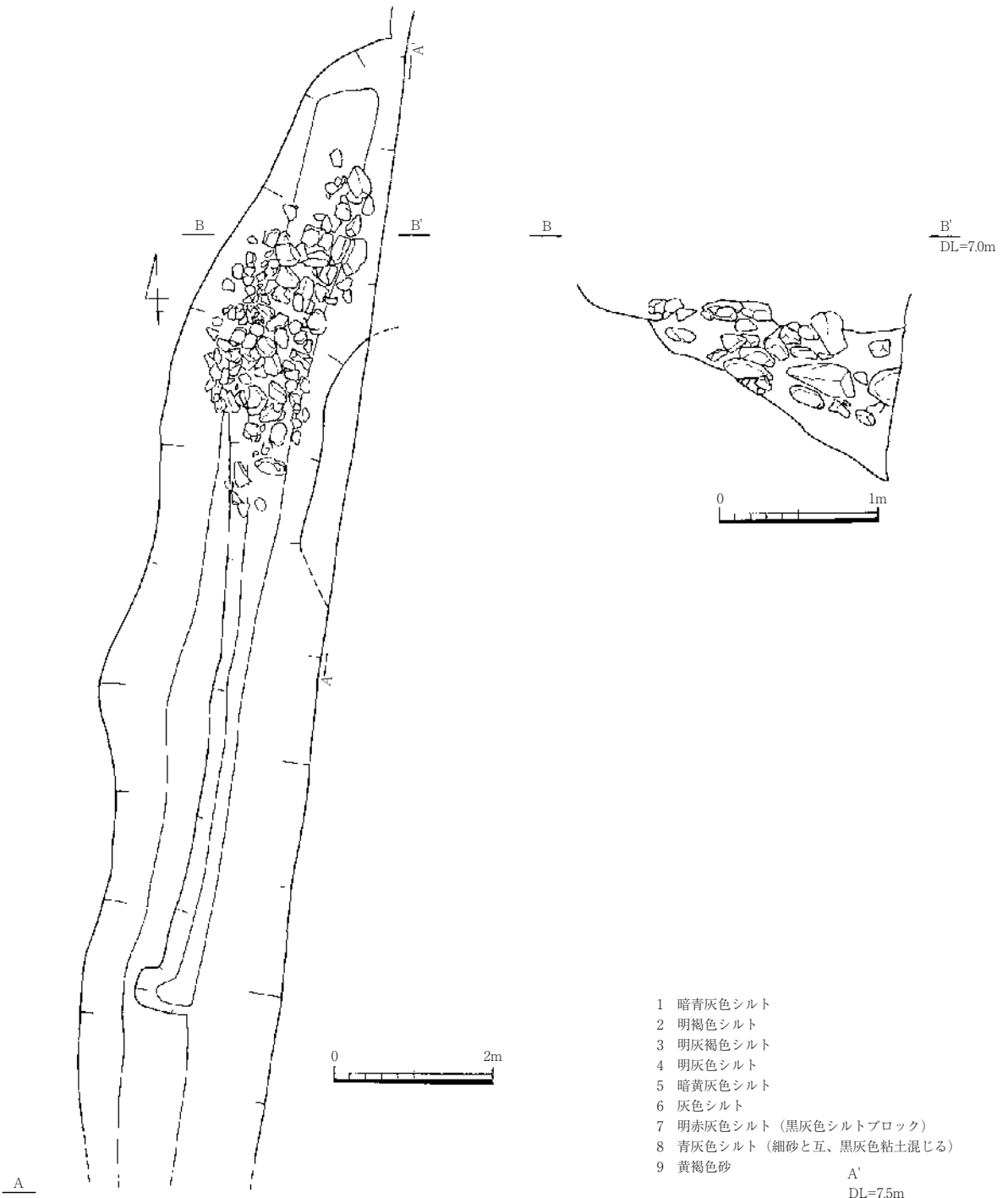
- 1 黄灰色シルト (焼土・炭化物を含む)



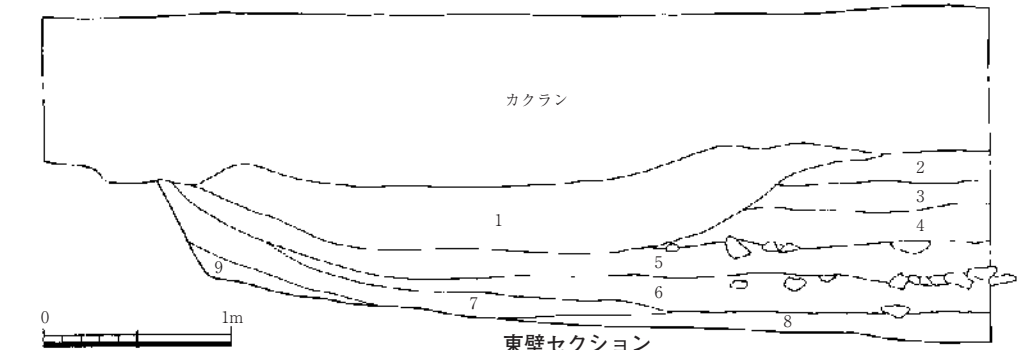
B3SK314



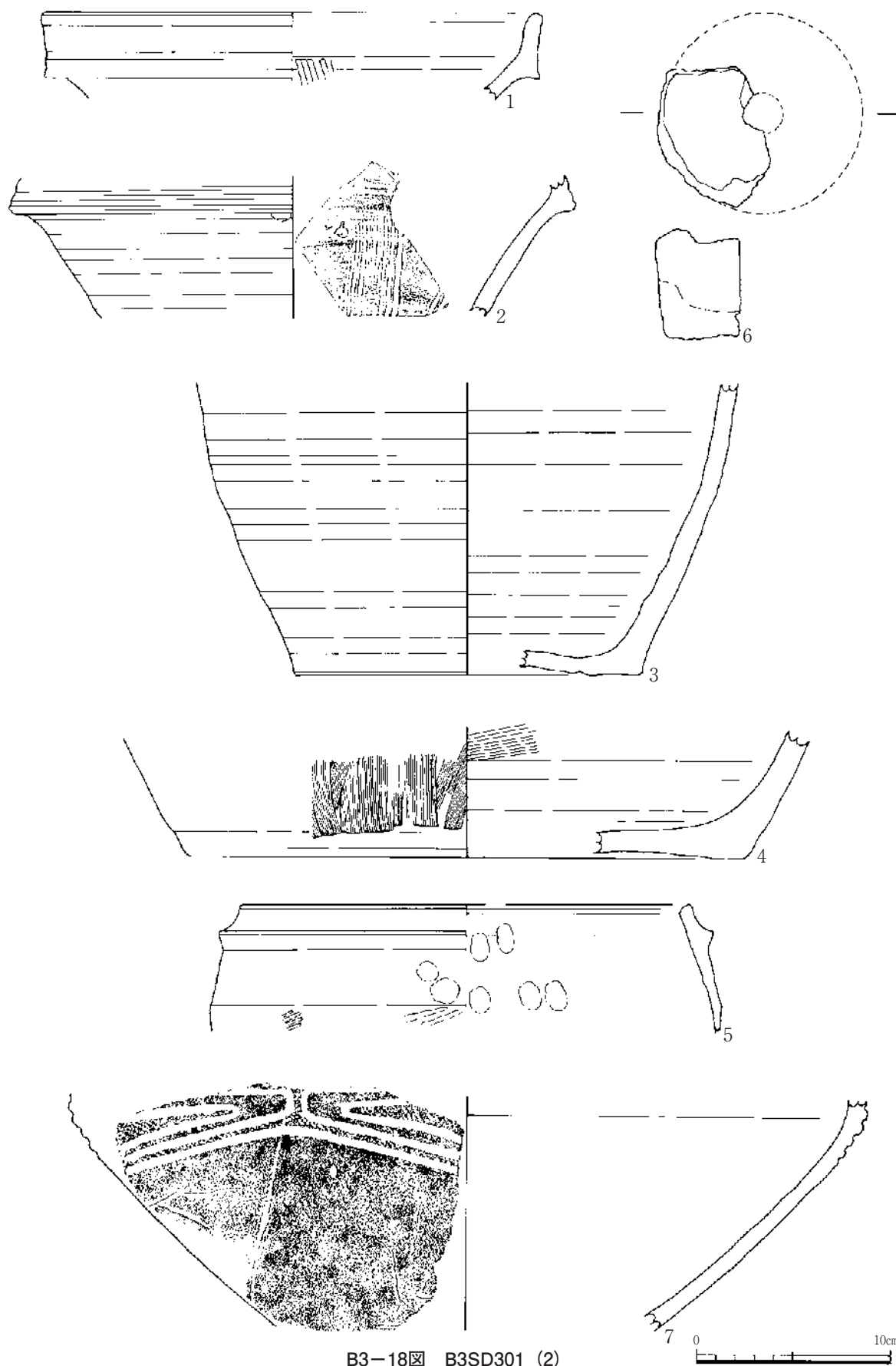
B3-16図 B3SK314・336



- 1 暗青灰色シルト
- 2 明褐色シルト
- 3 明灰褐色シルト
- 4 明灰色シルト
- 5 暗黄灰色シルト
- 6 灰色シルト
- 7 明赤灰色シルト (黒灰色シルトブロック)
- 8 青灰色シルト (細砂と互、黒灰色粘土混じる)
- 9 黄褐色砂



B3-17図 B3SD301 (1)



B3-18図 B3SD301 (2)

1. B4区の概要

概要

B4区は今次調査区間の南端部分に位置している。

弥生時代の検出遺構は、竪穴住居跡と竪穴状の性格不明遺構10棟、溝8条、自然流路1条、土坑約18基、及びピットである。B4区では調査区東部を南北方向に走る自然流路B4SR101、弥生前期末から後期初頭に機能したとみられる2条の大溝B4SD420・421が検出されており、その他の遺構は大きく弥生前期前葉のもの、弥生中期末から後期初頭のものに分かれる。

弥生前期の遺構は、調査区北西から南東へ向かって大きくカーブを描いて延びるB4SD411、北東から南西へ向い延びるB4SD418・419・426。調査区西部に展開する竪穴状の遺構B4ST410、B4SX408・409、及びその周辺に分布する土坑B4SK557・559等である。

一方、弥生中期末から後期初頭の遺構は、調査区南東部に展開する竪穴住居群B4ST401～409、及び土坑、ピット等である。これら竪穴住居跡の分布範囲は北側のB3区にまで広がりを見せるものの、自然流路B4SR401を境に東側のB1区では全く確認できていない。こうしたことから、B4区は弥生時代居住区の東端にあたるものとみられる。

中世については、調査区東部を縦横に走る中世の区画溝B4SD403・405と、それによって区画された中世屋敷地が確認できる。この屋敷地は、東に隣接するB1区まで広がりをみせており、B1区側での検出長も含めると外溝（B1SD405、B4SD405）の東西検出規模は約80mを測る。B1区での検出状況も考慮すると、この屋敷地の主たる機能時期は15～16世紀末の間におくことができる。

近世から近代の遺構は調査区全域に広がっており、近世から近代の墓21基、近世から明治初頭の区画溝6条、埋め桶やハンダを伴う円形土坑、大型の遺物廃棄土坑B4SK442など約100基が検出されている。又、調査区南東部では現代の防空壕跡B4SX402が検出されている。

調査担当者 吉成承三、泉幸代、浜田恵子

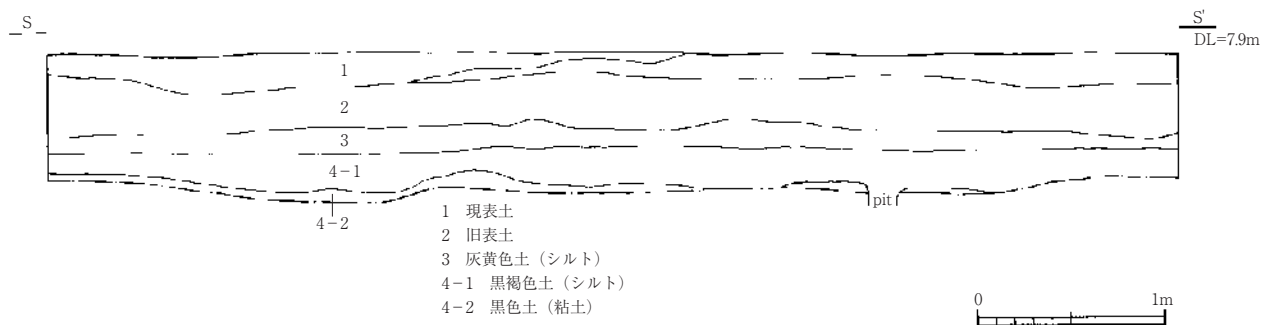
執筆担当者 古銭観察表を泉幸代、その他は浜田恵子が行った。

調査期間 平成11年6月～平成11年12月

調査面積 1,721㎡

時代 弥生時代前期～後期、中世、近現代

検出遺構 弥生時代竪穴住居跡・性格不明遺構10棟、土坑18基、溝8条、自然流路1条。中世土坑19基、溝2条。近世～近代土坑103基。弥生時代～近世ピット約1000個



B4-3図 B4区南壁基本層準

2. B4区弥生時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

B4区では、弥生中期末から後期初頭の竪穴住居跡9軒、弥生前期前葉の竪穴住居跡と性格不明遺構3棟を検出している。

弥生中期末から後期初頭の竪穴住居跡は、直径8～9m前後の規模をもつ大型の円形住居B4ST408・409、直径5～6m前後の規模をもつ中型の円形住居B4ST401・402・407、小型の方形住居B4ST403・404・405、小型の円形住居B4ST406である。このうち、小型のB4ST405・406は著しく小型で、且つ中央ピット柱穴とも未検出であることから、周辺の住居に追随する付属施設であった可能性がある。大型の円形住居B4ST408・409はいずれも支柱穴の建て替えと床面の拡張が行われたもので、複数の貯蔵穴を伴う。

弥生前期前葉の住居B4ST410は、中央ピット、柱穴とも未検出である。また、性格不明遺構としたB4SX408・409は、規模や壁の立ち上がりなどの遺構形態が弥生前期住居B4ST410やF4ST413に類似しており、弥生前期の住居として機能した可能性ももつ。

B4-1表 B4区竪穴住居一覧表

遺構名	規模(m)	深さ(m)	面積(㎡)	平面形	主軸方向	時期	備考
B4ST401	6.64	0.23	30.37	円形		弥生IV-2～V-1・2	
B4ST402	5.02	0.24	19.54	円形		弥生IV-2～V-1・2	
B4ST403	残2.36×2.26	0.20	不明	方形	N-11°-W	弥生V-1・2	
B4ST404	3.52×2.30	0.10	8.09	隅丸長方形	N-30°-E	弥生IV-2～V-1・2	
B4ST405	2.70×2.49	0.23	6.72	方形	N-38°-W	弥生中期か	
B4ST406	復2.28	0.17	4.08	円形		弥生IV-2～V-1・2	
B4ST407	4.8	0.11	18.08	円形		弥生IV-2～V-1・2	
B4ST408	7.88	0.12	48.74	円形		弥生IV-2～V-1・2	
B4ST409	復9.32	0.12	68.18	円形		弥生IV-2～V-1・2	火災焼失
B4ST410	7.16×5.16	0.32	36.94	隅丸方形	N-97°-E	弥生I-3	中央ピットを伴わない
B4SX408	8.52×6.52	0.40	44.39	不整楕円形	N-13°-E	弥生I-3	中央ピット無し
B4SX409	復9.40×残3.04	0.28	不明	楕円形	N-17°-E	弥生I-3	中央ピット無し

B4ST401 (B4-4図)

時期；弥生Ⅳ-2～Ⅴ-1・2 形状；円形 主軸方向；不明

規模；6.64×5.80m 深さ0.24m 面積30.37㎡

埋土；暗灰褐色シルト、黒褐色粘土質シルト

ピット；数5 主柱穴数4か 主柱穴P1・2・5・未検出

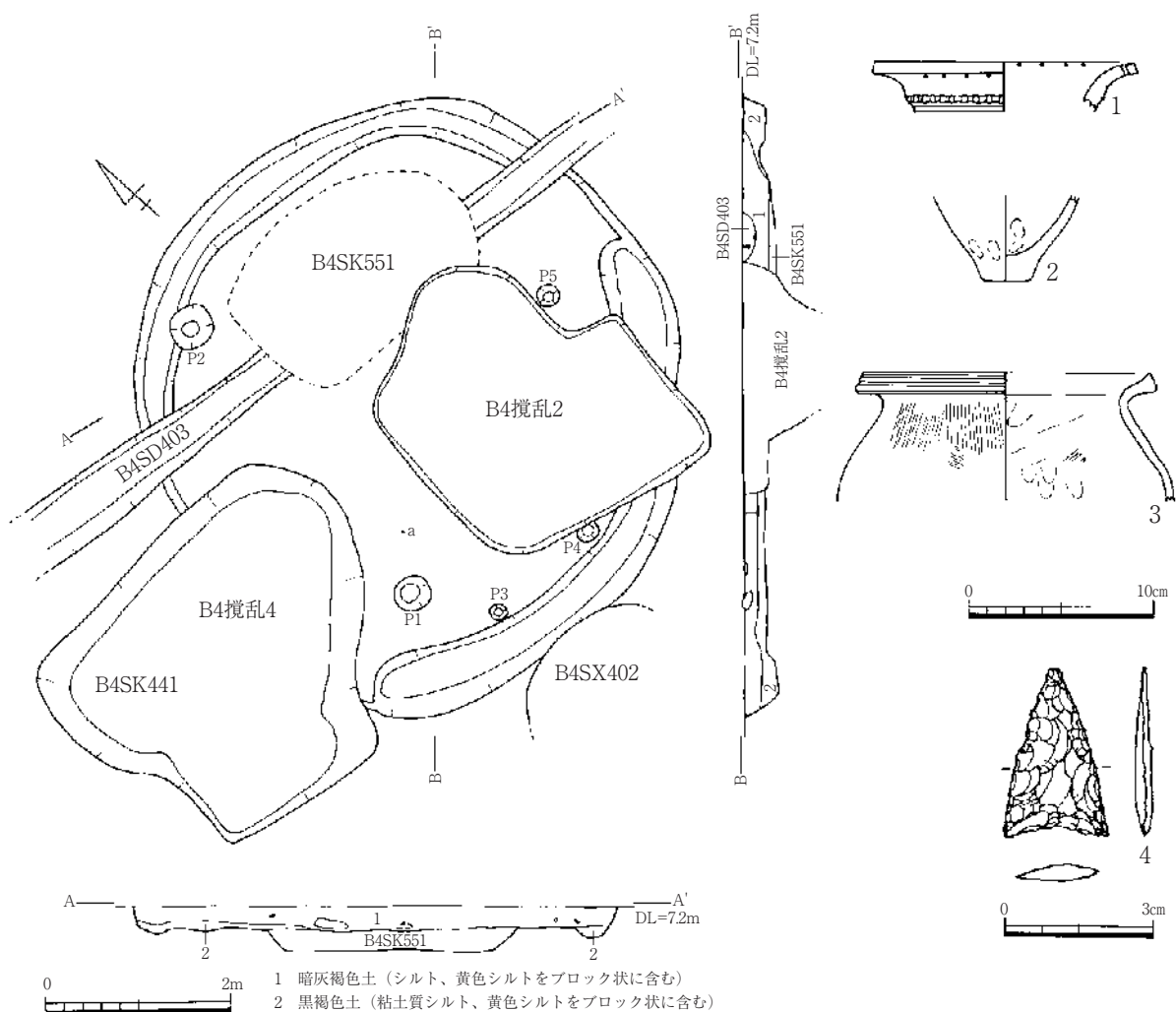
床面；1面 貼床；なし 焼失；なし

中央ピット；未検出

壁溝；1条 幅32～36cm 深さ7～10cm

出土遺物；弥生土器（口縁部点数-壺7・甕40・鉢2、底部点数-25）、石器2点（石鏃1・小型石斧1、石斧未製品1）、ガラス玉2点

所見；調査区東部に位置する中型の住居跡で、弥生のB4SK551を切り、中世のB4SD403、近代の攪乱2・攪乱4によって切られている。床面の大部分が削平を受けるため、中央ピットと主柱穴の一部が未検出であるが、柱穴規模と位置関係からみてP1・2・5を含む4本柱を想定している。深さはP1-25cm、P2-28cm、P5が35cm、P3・4は5～8cm、埋土は何れも黒褐色シルトである。



B4-4図 B4ST401

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯である。このうち壺は全て広口壺で口唇部を拡張させ擬凹線文を施すもの1点、同刻み目を施すもの4点、同竹管文を施すもの1点、面取りし無文のもの1点からなり、甕は口唇部を拡張させ凹線文を施すもの1点、同擬凹線文のもの9点、同無文のもの5点、面取るもの18点、素口縁4点であり、その他は弥生前期末遺構からの混入である。この他床面からガラス玉 (a)、また、石器は床面から頁岩製の石鏃 (4) と刃部を破損し叩石に転用された御荷鉾緑色岩製の石斧未製品が出土している。図示したものは壺 (1)、床面出土の甕 (3)、埋土中出土の底部 (2)、頁岩製石鏃 (5)、小型石斧 (4) である。

B4ST402 (B4-5図)

時期；弥生Ⅳ-2~Ⅴ-1・2 **形状**；円形 **主軸方向**；不明

規模；5.02×4.96m **深さ**0.22~0.24m **面積**19.54㎡

埋土；黒褐色シルト

ピット；16 **主柱穴数**1次住居-4 2次住居-5 **主柱穴**1次住居-P7・9・14・未検出 2次住居-P6・8・11・15・未検出

床面；2面 **貼床**；あり **焼失**；あり

中央ピット；1・2次住居-形状楕円形 **規模**残存54×36cm **深さ**15cm **埋土**黒褐色シルト

壁溝；1条 **幅**10~14cm **深さ**4cm

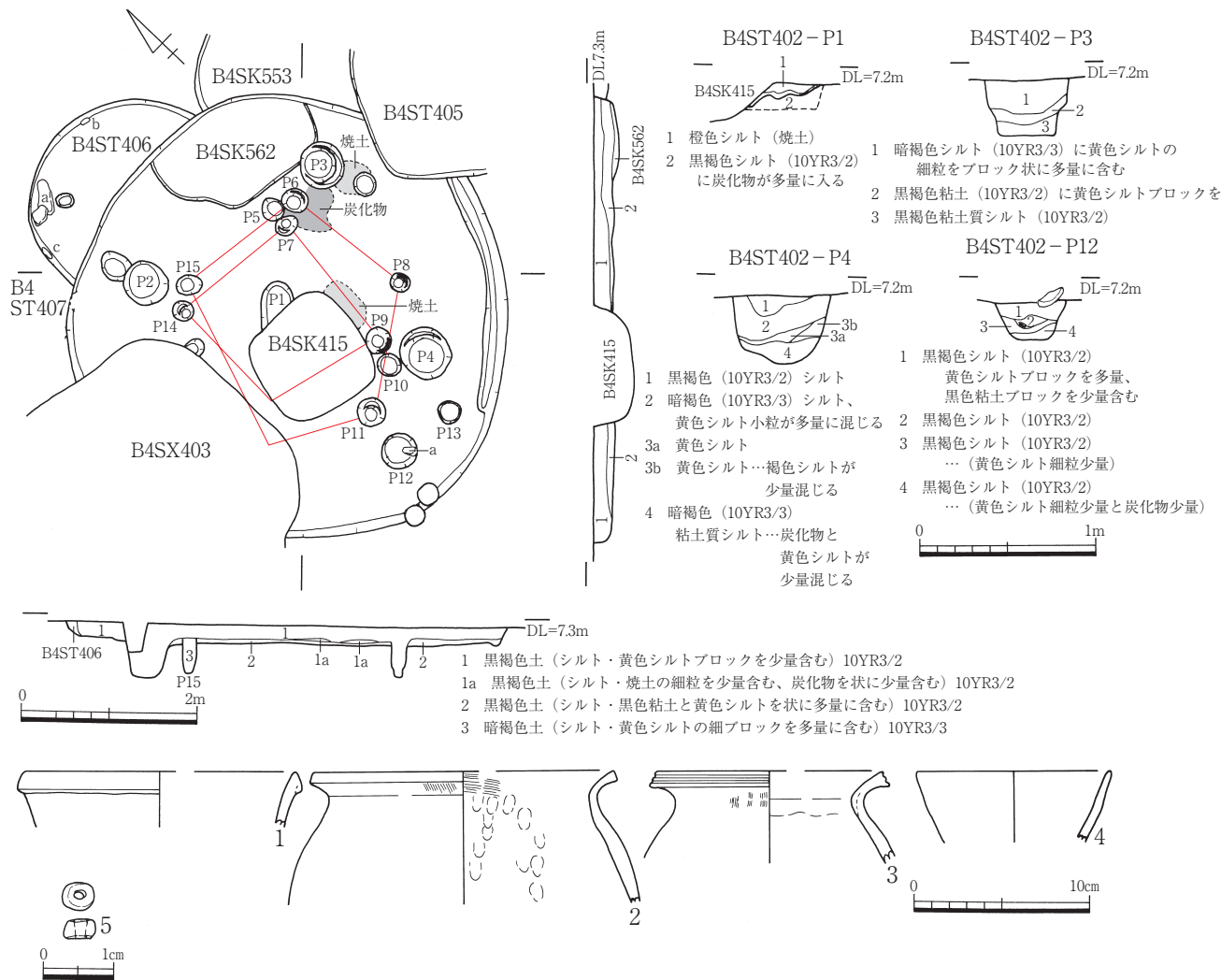
出土遺物；弥生土器 (口縁部点数-壺5・甕33・鉢2・高杯3、底部点数-25・高杯脚部4)、石器 (砥石1)、ガラス玉1点

所見；調査区南部に位置する中型規模の住居跡である。弥生中期のB4ST405・B4SK562、時期不明のB4ST406・B4ST407・B4SK553を切り、近世のB4SK415・近代のB4SX403によって切られている。

主柱穴の配置と貼床の構造からみて本住居は2段階の床面が認められるが、特に建て替えに伴う床面積の大幅な拡張は認められない。2次住居の床面は黒色粘土と黄色粘土が層状に入る版築状の貼床によって3~4cm程の嵩上げが行われている。また、2次住居床面は最終段階に火災焼失しており、直上に焼土と炭化物の堆積が認められる。

2次住居に伴う中央ピットは南側を削平されており、最下層に炭化物と焼土が堆積する。1次住居中央ピットは未確認であるが同位置に存在したかまたは1・2次共通であった可能性が高い。主柱穴は1次住居主柱穴P7・9・14が貼床埋土下面で、2次住居主柱穴P6・8・11・15が貼床埋土上面で検出されている。径は21~30cm 深さは16~45cmを測り、埋土は黄色シルト細粒を含む黒褐色粘土質シルトである。このうちP6~9・11・14では灰褐色粘土からなる柱痕が検出されており、柱痕径はP11で11cm、P6~8は径13~15cmを測る。また、P11は床面に砂岩製円礫の根石を伴っている。この他、2次住居床面では貯蔵穴とみられる大型ピットP2~4が検出される。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯である。このうち壺は広口壺で口唇部を拡張させ擬凹線文を施すもの1点、口縁部外面に粘土帯を貼付するもの3点、短頸壺1点からなり、甕は口唇部を拡張させ凹線文を施すもの2点、同擬凹線文のもの6点、同無文のもの7点、面取るもの14点、素口縁1点であり、その他は弥生前期末遺構からの混入である。これら土器は小破片のものが多く完形の状態を保って出



B4-5図 B4ST402・406 (B4ST402: 1~5)

土するものはない。また、石器はP12から砥石 (a) が埋土上層に半分潜り込んだ状態で出土しており、その他、床面直上からガラス玉 (5) 1点が出土している。

図示したものは、P12出土の鉢 (4)、埋土下層出土の甕 (2・3)、上層出土の貼付口縁壺 (1) である。

B4ST403 (B4-6図)

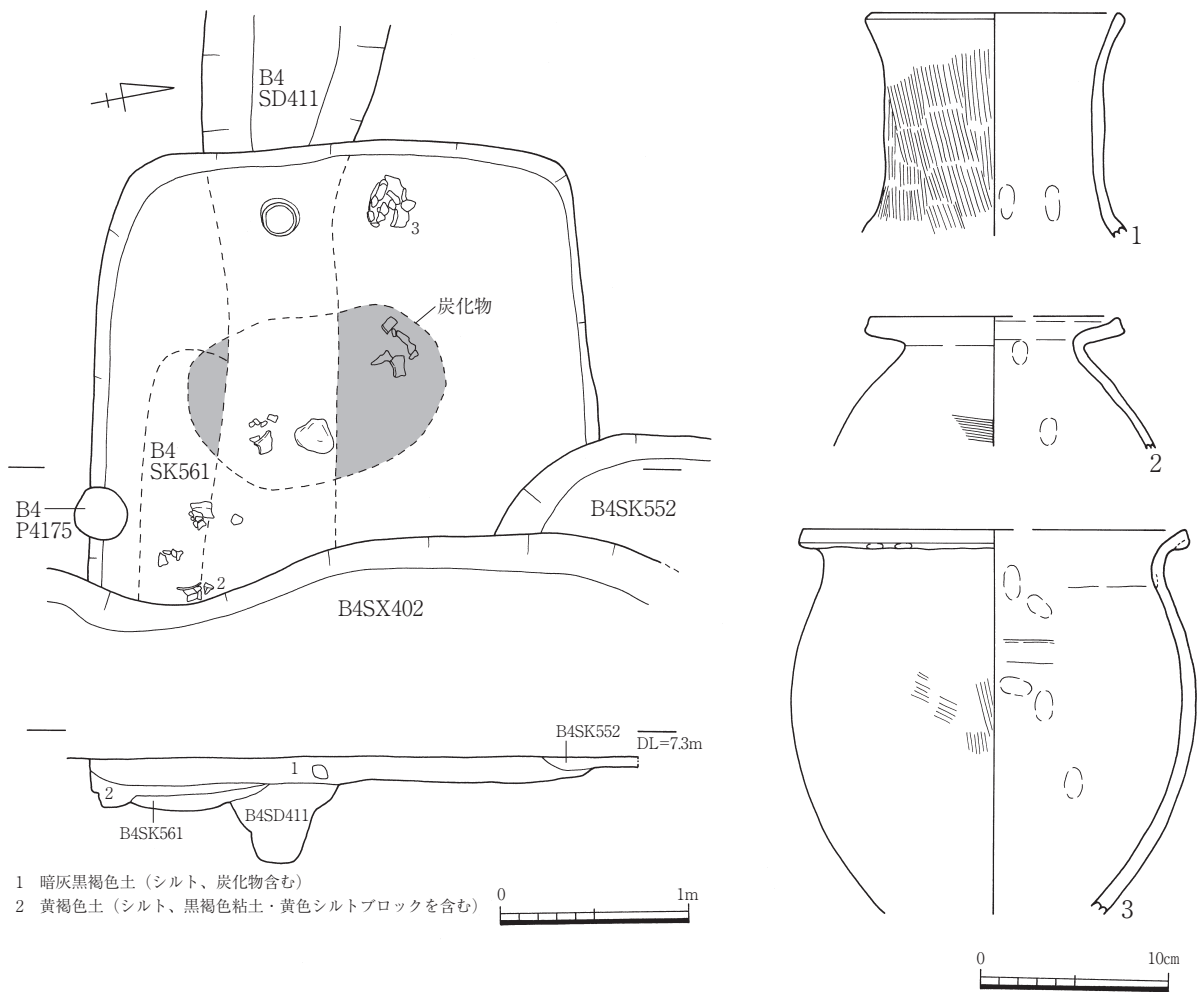
時期：弥生V-1・2 形状：方形 主軸方向：N-11°-W

規模：残存2.36×2.26m 深さ0.20m 面積残存6.27㎡

埋土：黒褐色シルト・黄褐色シルト

ピット：数2 主柱穴数不明 主柱穴不明

床面：1面 貼床：なし 焼失：なし



B4-6図 B4ST403

中央ピット：未検出

壁溝：なし

出土遺物：弥生土器（口縁部点数-壺3・甕15・鉢1、底部点数-3・高杯脚部3）

所見：調査区南部に位置する小型方形の住居跡である。弥生前期のB4SD411、時期不明のB4SK561を切り、時期不明のB4SK552、近代のB4SX402に切られる。中央ピットの特定は困難であるが、床面中央部南寄りに僅かな落ち込みが認められ、周囲床面に焼土粒を含む炭化物層が広がる。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯である。このうち壺は広口壺で口唇部を面取るもの1点、直口壺1点、短頸壺1点からなり、甕は口唇部を拡張させ擬凹線文を施すもの2点、同無文のもの2点、面取るもの8点、口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付するもの2点、南四国型甕1点である。出土状況を見ると甕（3・10）が住居西壁際から完形に近い状態を保って出土しており、他は床面各所に甕口縁部片が散在している。また、床面中央部では大型の扁平な砂岩礫が出土している。図示したものは壺（1）、甕（2・3）である。

B4ST404 (B4-7図)

時期；弥生 IV-2~V-1・2 形状；隅丸長方形 主軸方向；N-30°-E

規模；3.52×2.30m 深さ0.10~0.30m 面積8.09㎡

埋土；黒褐色シルト

ピット；数8 主柱穴数不明 主柱穴不明

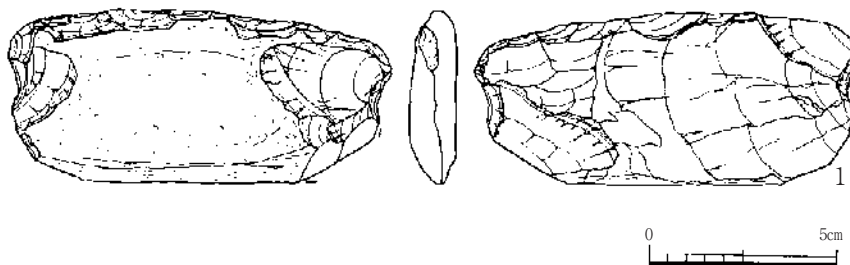
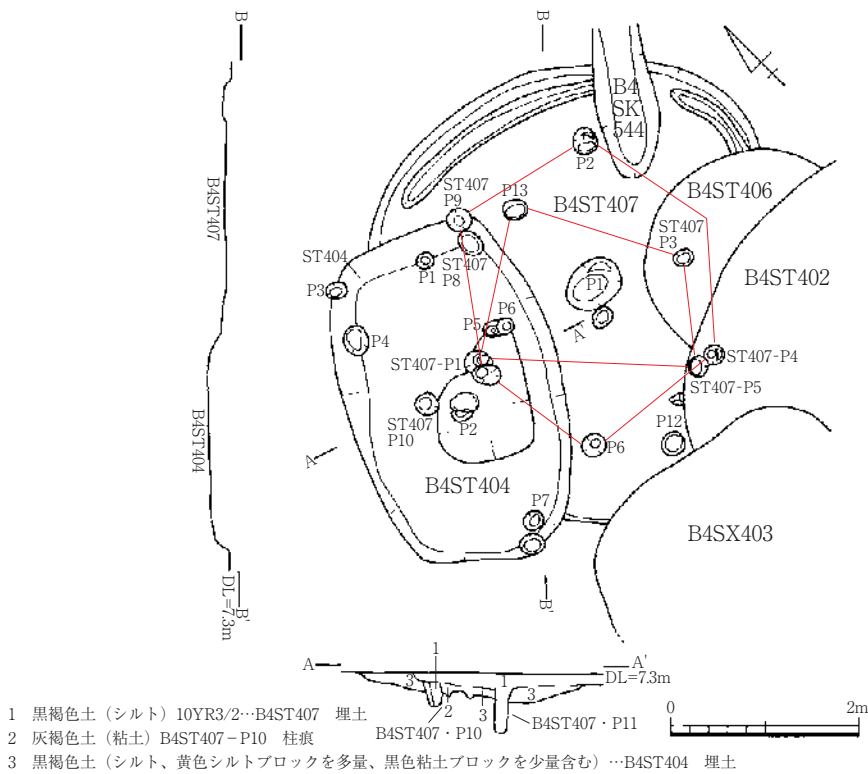
床面；1面 貼床；なし 焼失；なし

中央ピット；形状楕円形 規模30×20cm 深さ6cm 埋土黒褐色シルト

壁溝；なし

出土遺物；弥生土器（口縁部点数-壺2・甕3、底部点数-3）、石器1点（打製石包丁1）

所見；調査区南部に位置する小型長方形の住居跡で、上面を弥生後期初頭のB4ST407に切られている。



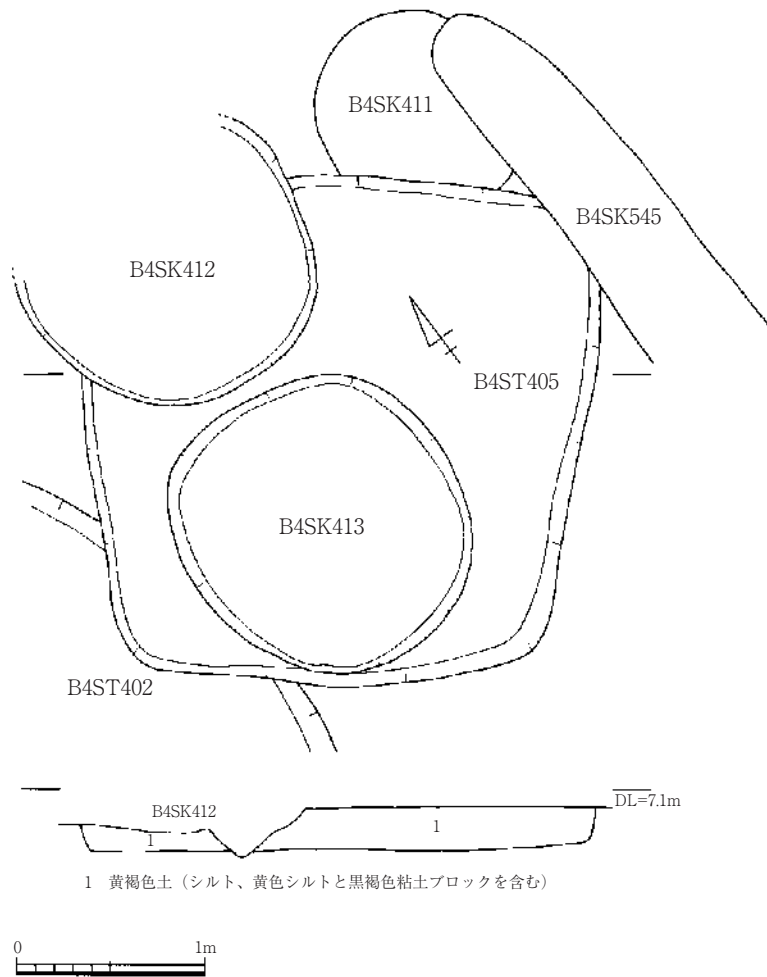
B4-7図 B4ST404・407 (B4ST404:1)

床面は中央に向かって緩やかに落ち込んでいる。支柱穴は特定が困難で、壁際四隅に位置するP3・9・7が支柱穴となる可能性をもつが、深さはP3が5cm、P9が10cm、P7が12cmと浅い。他の床面検出ピットは深さP1-25cm、P4-8cm、P5-19cm、P6-28cmを測る。柱穴埋土は何れも黄色シルトブロックを含む黒褐色シルトである。中央ピットは床面中央部やや南寄りの地点で検出される。断面形態は浅い皿状で、特に炭化物の堆積等は認められない。

出土遺物は壺、甕である。このうち壺は広口壺で口唇部を面取り斜格子文を刻むもの1点、口縁部外面に厚味のある粘土帯を貼付し口唇部に斜格子文を刻むもの1点からなり、甕は口唇部を拡張させ擬凹線文を施すもの1点、同無文のもの1点、面取るもの1点である。これら土器は何れも小破片での出土であり、図示できるものはない。この他には、埋土中から頁岩製の打製石包丁(1)、床面では中央ピット上面を覆うような状態で大型の扁平な砂岩礫が出土している。

B4ST405 (B4-8図)

時期：弥生中期か 形状：方形 主軸方向：N-38°-W



B4-8図 B4ST405

規模：2.70×2.49m 深さ0.23m 面積6.72㎡

埋土：黄褐色シルト

ピット：未検出

床面：1面 **貼床**：なし **焼失**：なし

中央ピット：なし

壁溝：なし

出土遺物：弥生土器（口縁部点数－壺1・甕3、底部点数－1）

所見：調査区南部に位置する小型方形の住居跡で、弥生中期末から後期初頭のB4ST402・B4SK545、弥生のB4SK412、中世のB4SK413、近世から近代のB4SK411に切られている。また、B4ST405は床面の半分以上が削平を受けるため、中央ピット・柱穴等の有無は確認できていない。

出土遺物は壺、甕であるが、口縁部以下の形態を明らかにできる個体はない。壺は口縁部外面に厚味のある粘土帯を貼付するもの1点からなり、甕は形態不明で口唇部を面取るもの1点、南四国型甕とみられるもの2点からなり、南四国型甕には口縁部外面に粘土帯を貼付するもの、口縁部下に断面三角形の小突帯を巡らせ突帯上下にヨコナデを加えるもの、の各タイプが1点ずつ含まれる。この他、微隆起帯と櫛描波状文を施す胴部片、弥生前期末遺構からの混入とみられる薄手の南四国型甕胴部片が確認できる。土器は何れも小破片で埋土中から出土したもので、弥生前期末と中期の遺物が混在し、遺物量も少量であることからB4ST405の廃絶年代は特定し難い。周辺遺構との切り合い関係からみて弥生中期から後期初頭の間に時期比定できる。

B4ST406（B4-5図）

時期：弥生Ⅳ-2～Ⅴ-1・2 **形状**：円形 **主軸方向**：—

規模：復元2.28×0.92m 深さ0.17m 面積復元4.08㎡

埋土：黒褐色シルト

ピット：未検出

床面：1面 **貼床**：なし **焼失**：なし

中央ピット：未検出

壁溝：なし

出土遺物：弥生土器（細片－10）、石器（叩石1・石斧1）

所見：調査区南部に位置する小型円形堅穴状の遺構である。規模が著しく小さいため住居跡として位置付けられるものかどうか判断できないが、現地での遺構番号をそのまま踏襲しSTの項に掲載している。B4ST406は弥生中期末から後期初頭のB4ST407と時期不明のB4SK562を切り、同じく弥生中期末から後期初頭のB4ST402に切られ南東側半分以上を削平されている。床面は平坦で床面レベルも周辺のST群とほぼ同レベルを示している。床面でのピットは未検出である。

出土土器は体部細片のみである。石器と石材では、床面西壁際で大型の扁平な砂岩礫2個（a）が床面から壁に掛かるように、砂岩円礫を使用した叩石（b）と石斧（c）もやはり壁に立て掛ける様な状態で出土している。

B4ST406は時期を特定できる出土遺物はないが、周辺遺構との切り合い関係からみて弥生中期末から後期初頭に時期比定できる。性格は不明であるが、床面での石器の出土状況や床面形態等からみて周辺STに付随する付属施設であった可能性も考えられる。

B4ST407 (B4-7図)

時期；弥生Ⅳ-2～Ⅴ-1・2 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；4.80×復元4.80m **深さ**0.06～0.11m **面積**18.08㎡

埋土；黒褐色シルト

ピット；数13 **主柱穴数**1次住居-4 2次住居-6 **主柱穴**1次住居-P3・5・11・13 2次住居-P2・4・6・7・9・未検出P

床面；2面 **貼床**；なし **焼失**；なし

中央ピット；形状楕円形 **規模**60×43cm **深さ**25cm **埋土**黒褐色シルト

壁溝；1条 **幅**30～36cm **深さ**3～4cm

出土遺物；弥生土器（口縁部点数-甕2）、石器（穿孔具1・砥石1）

所見；調査区南部に位置する中型規模の住居跡である。弥生中期末から後期初頭のST404を切り、同じく弥生中期末から後期初頭のB4ST402・B4ST406・B4SK544、近代のB4SX403によって切られる。主柱穴の配列からみて1度の建て替えが考えられるが、貼床はなく、また、建て替えに伴う床面の拡張も認められない。

中央ピットは断面形態皿状で、下層には灰と炭化物が層状に堆積する。各柱穴の規模は1次住居主柱穴で深さP3-16cm・P5-32cm・P11-36cm・P13-27cm、2次住居主柱穴で深さP2-27cm・P4-53cm・P6-53cm・P7-46cm・P9-48cm、その他のピットではP8-34cm・P10-24cm・P12-38cmを測る。ピット埋土は黄色シルト細ブロックを含む黒褐色粘土質シルト、または黒褐色粘土質シルトであるが、この内、P4・P6・P7では中より径11～15cmの灰褐色粘土からなる柱痕を検出している。

出土遺物は甕である。甕は口唇部を上下に拡張させるものが1点、他は弥生前期遺構からの混入である。石器は床面から砂岩製砥石、北部壁際の埋土中から砂岩製穿孔具が割られた多量の砂岩礫と共に出土している。また西部床面では大型の砂岩角礫が出土している。

B4ST408 (B4-9・10図)

時期；弥生Ⅳ-2～Ⅴ-1・2 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；2次住居-復元7.88×7.88m **深さ**0.12～0.16m **面積**48.74㎡

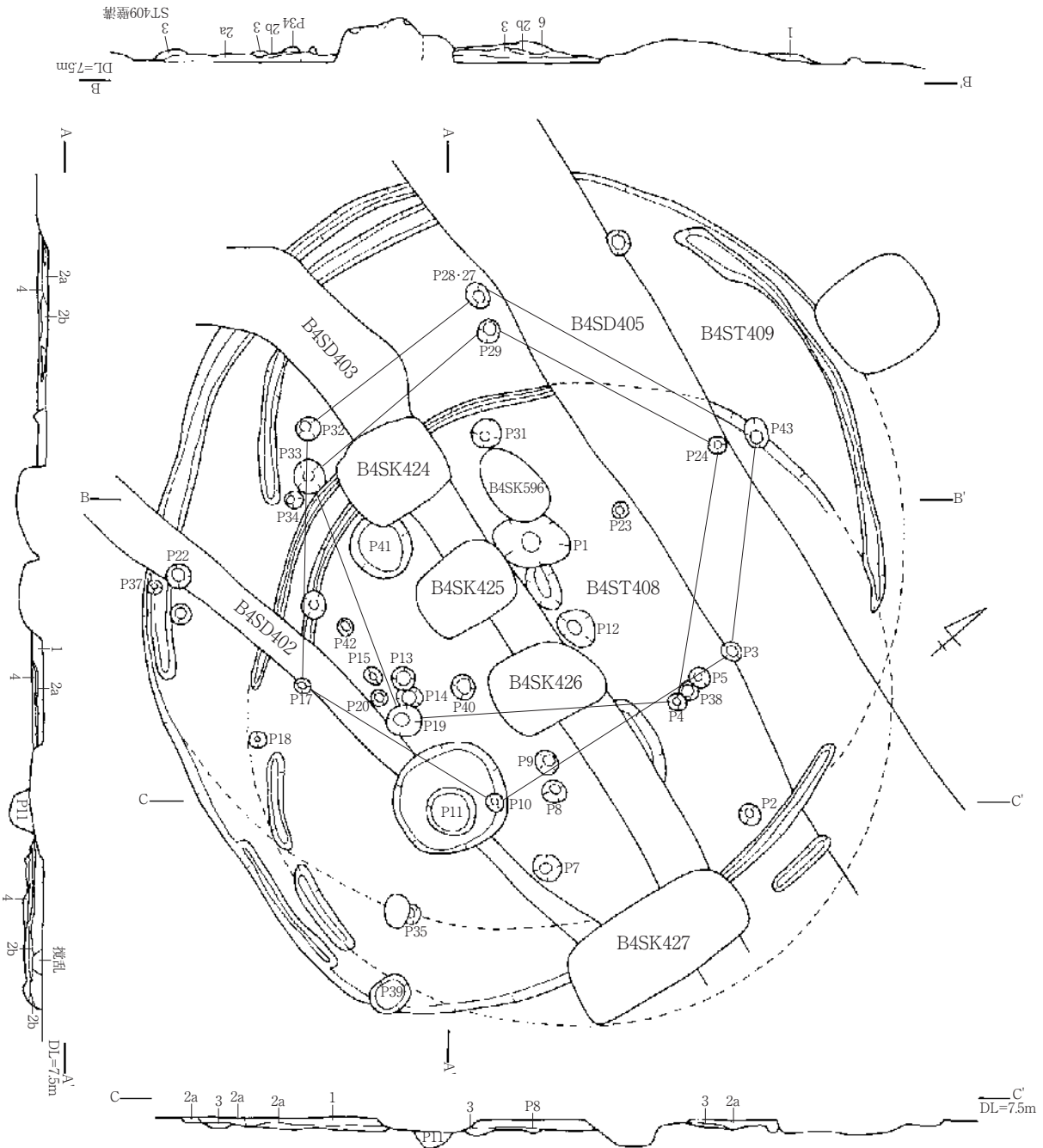
埋土；黒褐色シルト

ピット；数特定不可能 **主柱穴数**1次住居-4 2次住居-4 **主柱穴**1次住居-P3・7・13・未検出P
2次住居-P2・15・23・未検出P

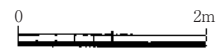
床面；2面 **貼床**；なし **焼失**；なし

中央ピット；未検出

壁溝；2条 **壁溝1-幅**12～16cm **深さ**1～2cm **壁溝2-幅**12～16cm **深さ**4cm



- 1 黒褐色土 (シルト、炭化物と焼土を少量含む) …ST408 埋土
- 2a 黒褐色土 (シルト、炭化物と焼土を少量含む)
- 2b 黒褐色土 (シルト、炭化物と焼土を多量に含む)
- 3 黒褐色土 (シルト、黄色シルトをブロック状に多量に含む)
- 4 黄色土 (シルト、黒褐色シルトが層状又はブロック状に入る) …ST409 貼り床 埋土

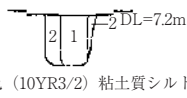


P1 (ST409中央pit) DL=7.3m



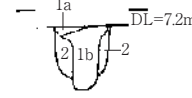
- 1 黒褐色 (10YR3/2) シルト (炭が多量に含まれる)
- 2 黄色シルト
- 3 黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルト (焼土、炭多量)

P4 DL=7.2m



- 1 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト
- 2 黄色シルト (10YR3/2ブロックを少量含む)

P7 DL=7.2m



- 1a 黒褐色 (10YR3/2) シルト (焼土と炭化物を少量含む)
- 1b 黒褐色 (10YR3/2) 粘土質シルト
- 2 黒褐色 (10YR3/2) シルト (黄色シルトをブロックで多量に含む)



B4-9図 B4ST408・409 (1)

出土遺物；弥生土器（口縁部点数－壺2・甕29・高杯2、底部点数－8）、石器（打製石包丁1・石鏃1・石斧1・叩石2）

所見；調査区南部に位置する中型規模の住居跡で、弥生中期末から後期初頭の火災焼失住居B4ST409・弥生のB4SK596を切り、中世のB4SK424・B4SK425・B4SK426・B4SD403・B4SD405、近世のB4SK427・B4SD402に切られる。B4ST408とB4ST409は重なるようにして切り合い床面もほぼ同レベルであったため、床面検出ピット中には両住居のいずれに伴うか判別のつかないものが多く含まれている。このため、検出ピット名は両住居で共通した通し番号を用いて報告している。

壁溝及び柱穴の配列からみてB4ST408は1度の建て替えが考えられ、2次住居床面は外方へ僅かに拡張している。中央ピットは後続遺構の削平を受け残存しない。主柱穴は1次・2次住居とも4本柱を想定できるが、各々1個が未検出である。深さは1次住居の主柱穴P3が43cm、P7が33cm、P13が40cm、2次住居主柱穴P2が36cm、P15が40cm、P23が25cmを測る。埋土は全て黒褐色シルトで、このうちP3・7・13・2・15では褐灰色粘土からなる径13～15cmの柱根を検出している。

出土遺物は壺、甕、高杯である。このうち壺は広口壺で口唇部を拡張させ擬凹線文を施すもの1点、長頸壺1点からなり、甕は口唇部を拡張させ凹線文を施すもの4点、同擬凹線文のもの3点、同無文のもの8点、面取るもの12点であり、その他は弥生前期遺構からの混入である。高杯は口縁部が直立気味に立ち上がり外面に凹線文を施すものと、口縁部が外反するものが各1点ずつ出土している。石器は床面から頁岩製打製石包丁（10）、頁岩製石鏃（13）、小型石斧（11・12）が、壁溝内から砥石2点が出土している。図示したものは、床面出土の長頸壺（11）、甕（3）、下層出土の甕（2）、高杯（4）である。

B4ST409（B4-9・10図）

時期；弥生Ⅳ-2～Ⅴ-1・2 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；2次ST-復元9.32×9.32m **深さ**0.12m **面積**68.18㎡

埋土；黒褐色シルト

ピット；数42 **主柱穴数**1次住居-5 2次住居-6 **主柱穴**1次住居-P4・19・24・29・33 2次住居-P5・10・17・28・32・43

床面；2面 **貼床**；あり **焼失**；あり

中央ピット；1次住居-**形状**楕円形 **規模**残存60×40cm **深さ**23cm **埋土**黒褐色シルト・黒褐色シルト（炭化物と焼土を多量に含む） 2次住居-**形状**楕円形 **規模**96×60cm **深さ**57cm **埋土**黒褐色シルト・暗灰黒色粘土質シルト（炭化物と焼土を多量に含む）

壁溝；2条 壁溝1-幅18～20cm **深さ**4～6cm 壁溝2-幅12～18cm **深さ**4～7cm

出土遺物；弥生土器（口縁部点数－壺4・甕36・鉢2、底部点数－7）、石器（叩石3）

所見；調査区南部に位置する大型の住居跡である。B4ST409は弥生のB4SK596を切り、弥生中期末から後期初頭のB4ST408、中世のB4SK424・425・426・B4SD403・405、近世のB4SK427・B4SD402によって床面の大部分を切られている。

壁溝と柱穴の配列からみてB4ST409は1度の建て替えがあったものと考えられ、建て替えに際して

2次住居床面は外方へ僅かに拡張している。2次住居は最終段階に火災焼失しており、床面全面に焼土と炭化物が広がるが、床面の大部分はB4ST408によって削平されている。

中央ピットは1次住居中央ピット（P36）、2次住居中央ピット（P1）が検出され、P1がP36を切っている。各中央ピットは共に断面形が浅い皿状を呈するもので、埋土下層には炭化物と焼土が多量に含まれる。支柱穴は埋土と位置関係からみて、1次住居ではP4・19・24・29・33の5個、2次住居ではP5・10・17・28・32・43が想定でき、深さは20～41cmを測る。このうち1次住居のP4・24・33、2次住居のP5・10・32では径13cm前後の灰褐色粘土または褐灰色粘土からなる柱根が確認されている。

検出ピットのうち、火災焼失段階に機能したとみられる2次住居の支柱穴P5とP32の上層、支柱穴P17の最下層、2次住居北部壁寄りに配置される深さ13cm規模の浅い小ピットP25の下層には多量の炭化物と焼土ブロックが含まれる。また、南東壁際に位置する袋状の断面形態をもつ大型のP39も周囲の焼土が埋土中に連続して流れ込んでいることから火災時に機能していた2次住居貯蔵穴と考えられる。他に、住居南西部中央付近に位置するP41も径50cm 深さ64cmの規模をもち断面形態が袋状を呈する大型ピットで、最下層に焼土が堆積し埋土中にも炭化物と焼土が多く含まれることから、B4ST409の2次住居に伴う可能性が高い。しかし、P41については位置関係からみて後続するB4ST408に所属する可能性も否定できず、所属の特定は難しい。

出土遺物は壺、甕、手捏土器である。このうち壺は広口壺で口唇部をやや拡張させ擬凹線文を施すもの1点、同面取るもの3点からなり、甕は口唇部を拡張させ擬凹線文を施すもの1点、同無文のもの13点、面取るもの15点、素口縁6点であり、その他は弥生前期遺構からの混入である。石器は床面から砂岩円礫を使用した叩石3点が出土している。この他注目すべきものとして、貯蔵穴P41の中層壁際から下半を欠損したガラス製勾玉1点が出土している。P41からはガラス製勾玉とともに埋土中より弥生後期初頭頃に比定できる広口壺口縁部1点と甕口縁部5点、底部2点と体部片約100点が出土するが何れも小破片での出土である。

図示したものは埋土中出土の甕（6・9）、下層の炭化物内から出土した壺（5）、床面出土の底部（7）、P22出土の手捏ね土器（8）、P41出土のガラス製勾玉（14）である。

B4ST410（B4-11～13図）

時期：弥生Ⅰ-3 形状：隅丸方形 主軸方向：N-97°-E

規模：7.16×5.16m 深さ0.28～0.32m 面積36.94㎡

埋土：暗褐色シルト・暗褐色粘土質シルト

ピット：数1 支柱穴数不明 支柱穴不明

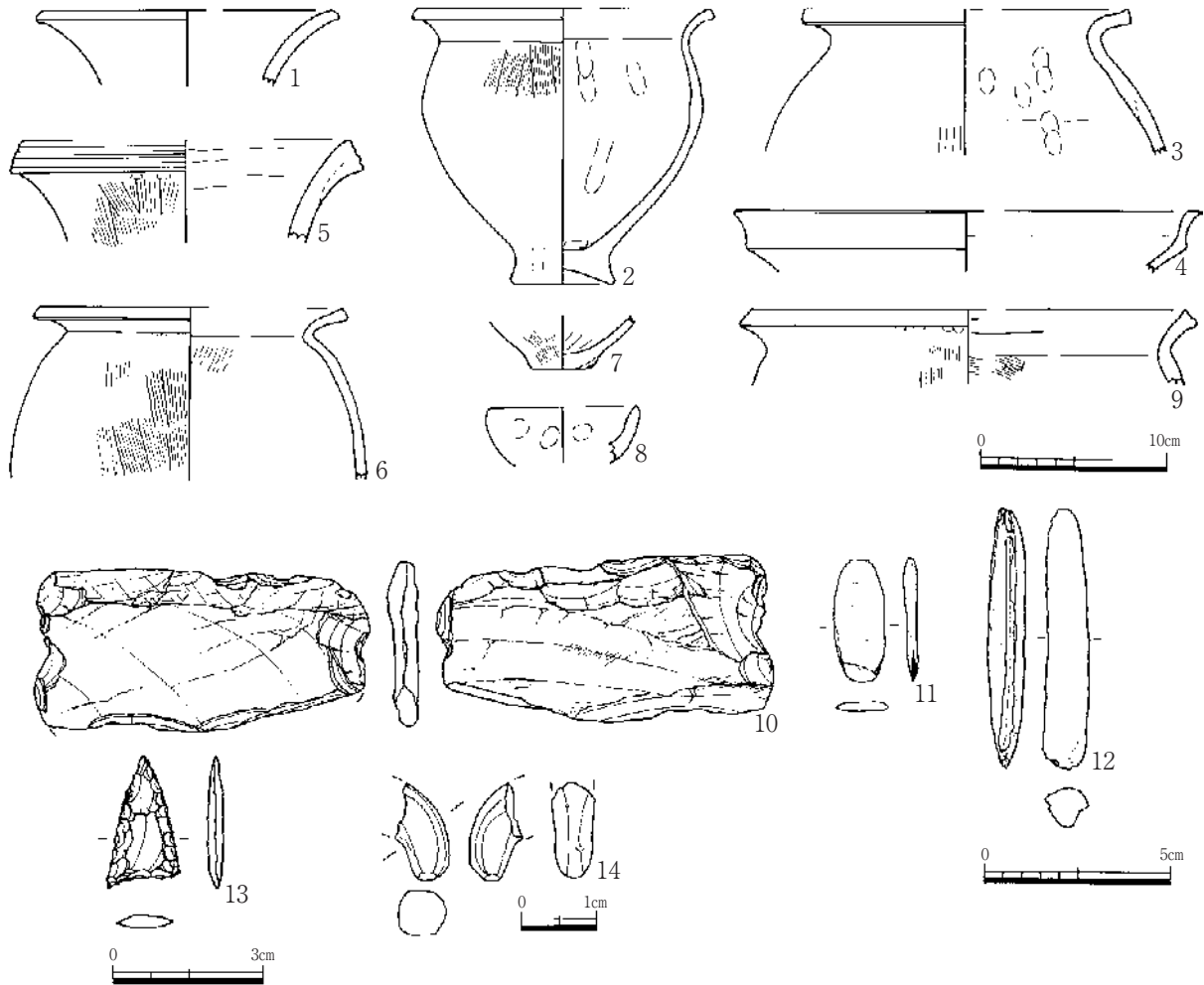
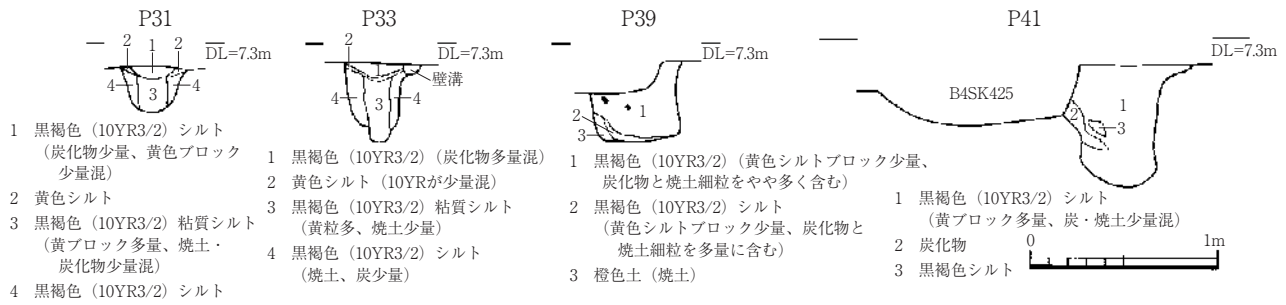
床面：1面 貼床：なし 焼失：なし

中央ピット：不明

壁溝：なし

出土遺物：弥生土器（口縁部点数-壺26・甕134・鉢5・手捏土器2、底部点数-102）、石器（石鏃1・石斧未製品1・砥石3・叩石7・扁平叩石3）

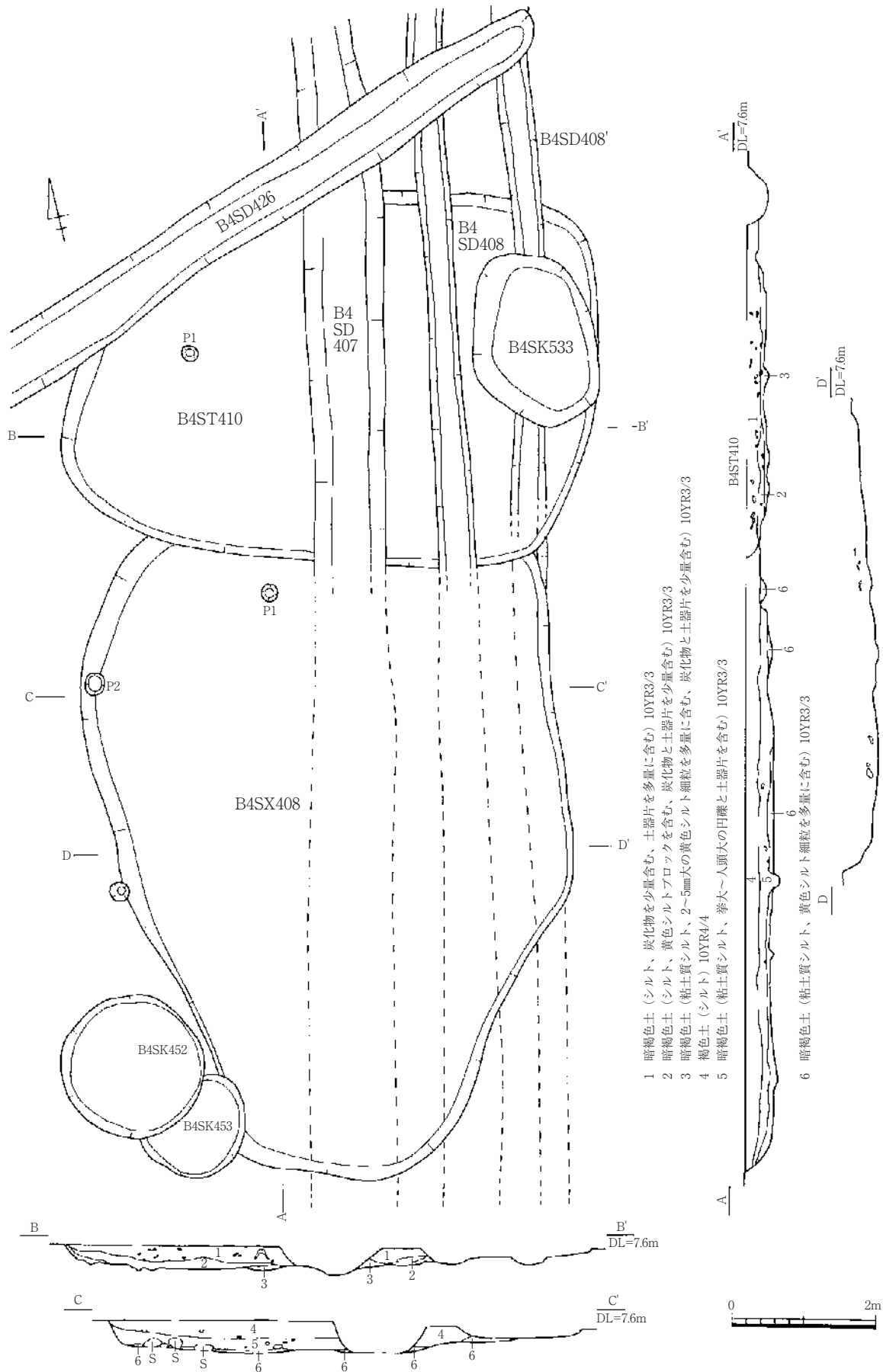
所見：調査区南部に位置する平面形隅丸方形の緩やかな落ち込み状の遺構で、弥生前期のB4SX408



B4-10図 B4ST408・409 (2) (B4ST408 : 1~4・10~13・B4ST409 : 5~9・14)

を切り、弥生前期のB4SD426、中世のB4SK533、近世のB4SD407とB4SD408に切られる。B4ST410は床面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。ピットは西部床面にて径20cm 深さ9cmの規模をもつP1を検出したのみである。中央ピットについても床面中央部付近を後続遺構によって削平され有無は不明である。

出土遺物は壺・甕・鉢・手捏土器である。このうち壺は頸部まで残存するもののうち、口縁部下に段を有するものが6点、口縁部下に1条のヘラ描沈線を施すものが3点、2条沈線を施すものが1点、



B4-11図 B4ST410・SX408

無文のもの4点である。また、甕は全て遠賀川式土器で胴部上半まで残存するもののうち、上胴部に段を有するものが2点、上胴部に1条ヘラ描沈線を施すものが5点、2条沈線を施すものが5点、2条沈線間に刺突文や刻目を施すものが2点、無文38点、である。また甕は口唇部全面に刻目を施すもの56点、下端に施すもの29点、無刻みのもの49点であった。底部は102点が出土するが、このうち復元径が10cmを越す大型品は5点のみである。B4ST410では床面から下層にかけて拳大の礫が多量に投げ込まれ、土器片は礫間に混じって出土していることから、遺構廃絶に伴い土器片・礫の一括廃棄が行われたものとみられる。また、土器はほとんどが小破片での出土で、接合後完形に近い状態まで復元できたもの（9・15～17）についても、各破片は各所に散在した状態で出土している。

石器も土器と共に一括廃棄の状態で出土しているが、特に東部から南東部にかけて分布する土器集中内に多い。ここからは、頁岩製石鏃（21）、破損し叩石として転用した緑色片岩製の石斧未製品、曲線状の強い擦痕を残す大型の砂岩製砥石、砥石、鋳形状の強い凹みをもつ砂岩礫、砂岩円礫と角礫を使用した叩石・凹石6点、打割った扁平な砂岩礫の縁辺部を使用した叩石が出土している。この他、西部床面直上で大型の扁平な礫、埋土中から扁平砂岩礫を使用した叩石2点が出土している。

図示したものは、大型壺（1）壺（1～9）、甕（10～15）、鉢（16・17）、底部（19・20）、手捏土器（18）、打製石鏃（21）、頁岩製石鏃（22）である。

B4SX408（B4-11・14図）

時期：弥生I-3 **形状**：不整楕円形 **主軸方向**：N-13°-E

規模：8.52×6.52m **深さ**0.40m **面積**44.39㎡

埋土：褐色シルト・暗褐色粘土質シルト

ピット：数2 **主柱穴数**不明 **主柱穴**不明

床面：1面 **貼床**：なし **焼失**：なし

中央ピット：不明

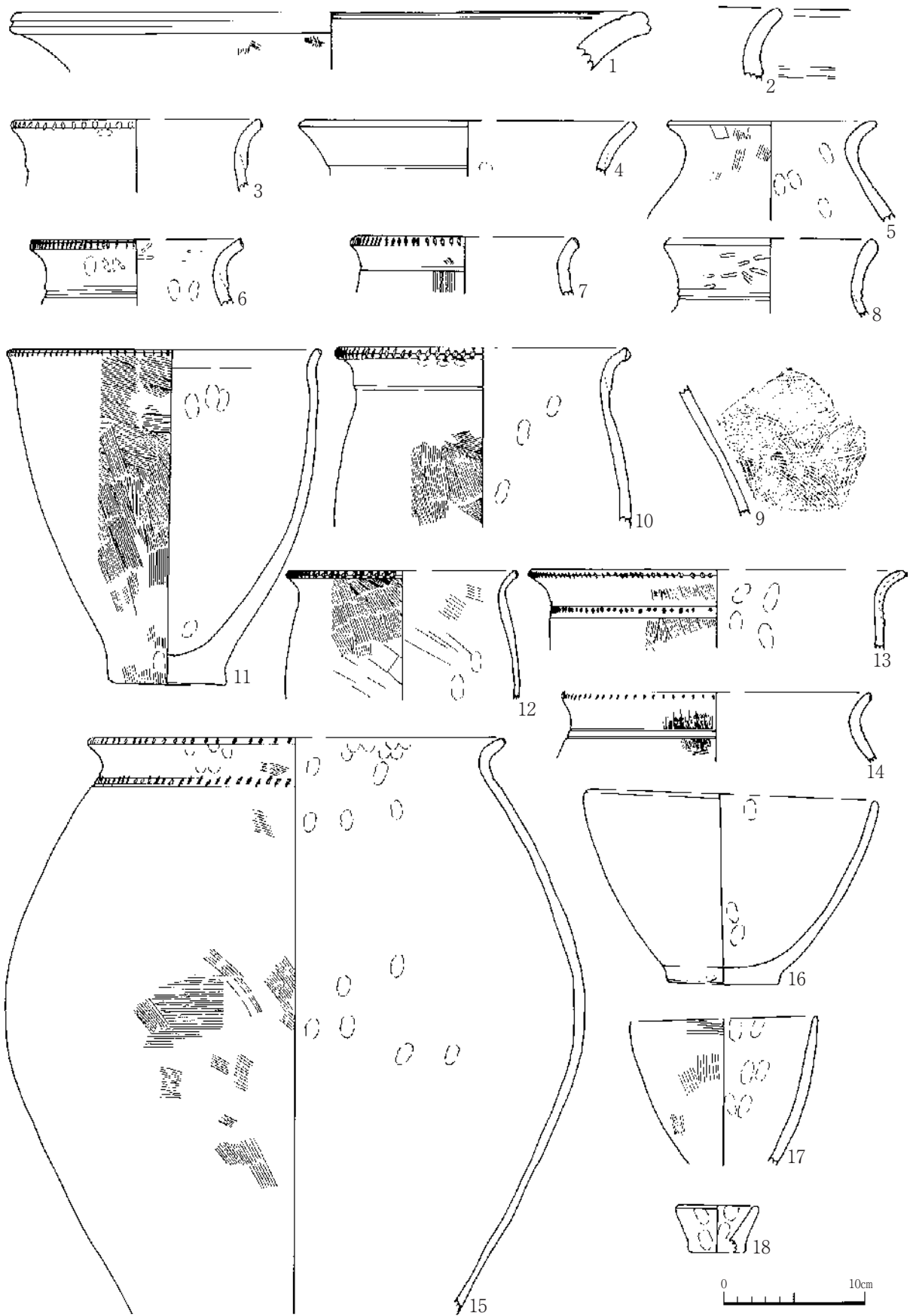
壁溝：なし

出土遺物：弥生土器（口縁部点数-壺10・甕44・手捏土器1・紡錘車1・用途不明土製品1、底部点数-99）、石器（石鏃1）

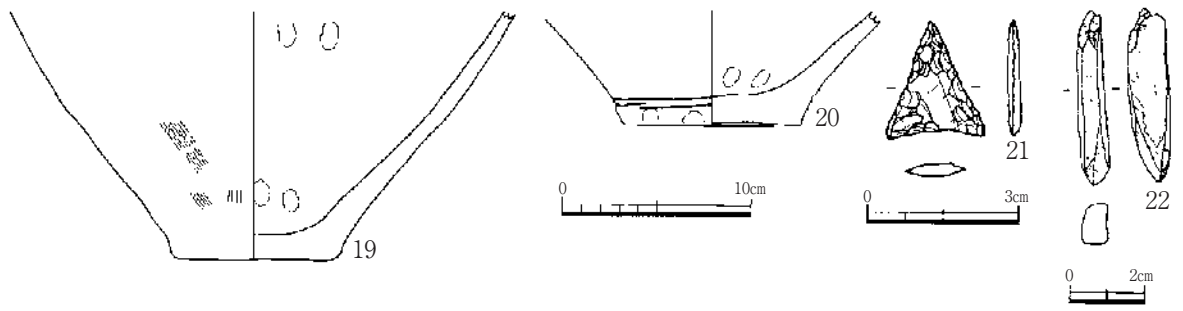
所見：調査区南部に位置する平面形楕円形の緩やかな落ち込み状の遺構で、弥生前期のB4ST410、近世から近代のB4SK453・B4SD407・SD408・SD408'に切られる。

B4SX408は床面が平坦で壁は緩やかに立ち上がる。中央ピットの有無と主柱穴については床面中央部付近のほとんどが削平を受けるため不明である。また、ピットは北部床面と北東部壁立ち上がりで2個を検出するが、P1が深さ4cm、P2が2cmと何れも浅い。

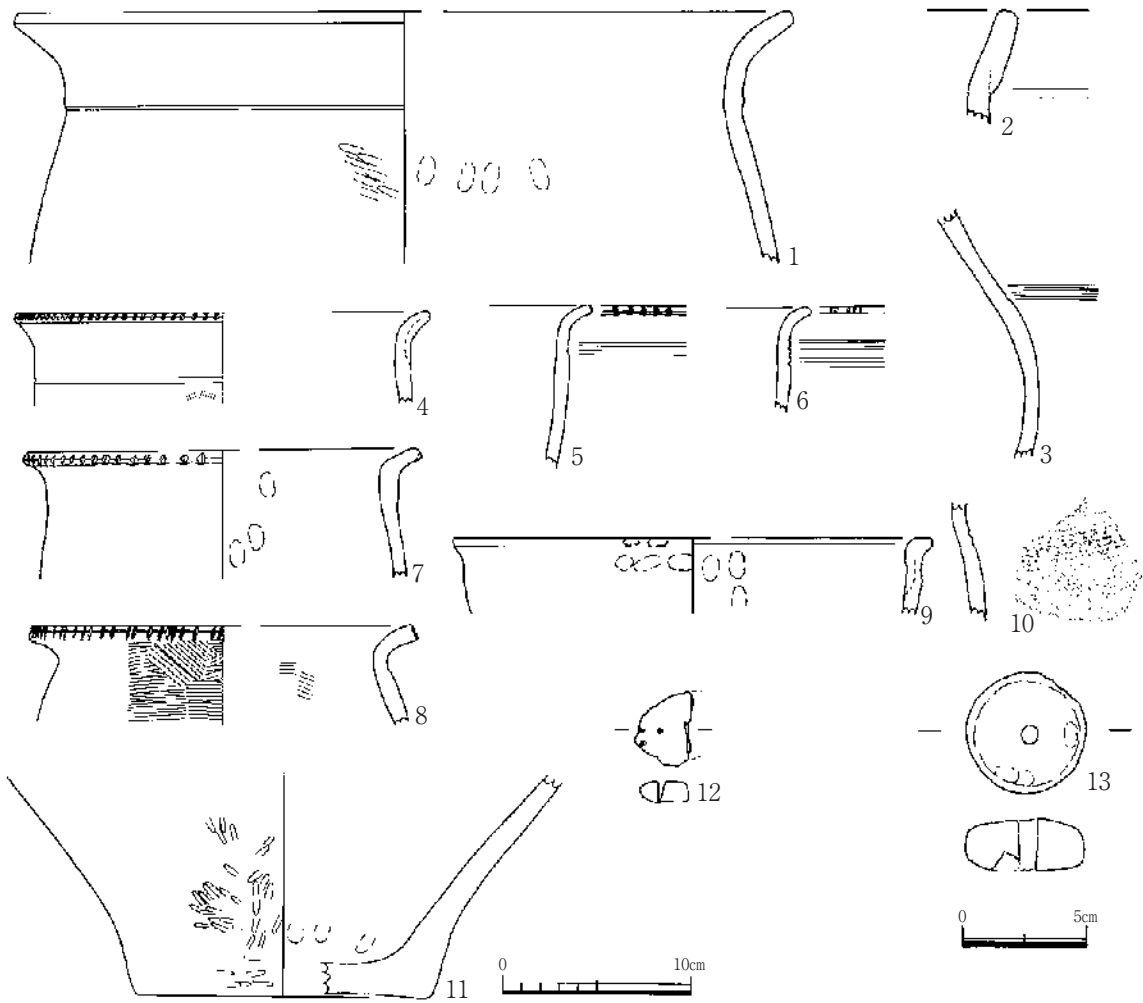
出土遺物は壺・甕・手捏土器・土製紡錘車・用途不明土製品である。壺は頸部まで残存するもののうち、口縁部下に段を有するもの3点、無段のもの1点であった。甕は全て遠賀川式土器で、胴部上半まで残存するもののうち上胴部に1条沈線を施すものが1点、2条沈線を施すものが2点、4条沈線を施すものが1点、無文のもの7点である。また、甕口唇部では全面に刻目を施すものは17点、下端に施すもの11点、無刻みのもの16点であった。この他に、甕上胴部片には2条沈線間に刺突文を1段



B4-12図 B4ST410 (1)



B4-13图 B4ST410 (2)



B4-14图 B4SX408

巡らすもの、3条沈線間に刺突文を2段巡らすもの、壺上胴部片にはケズリ出し突帯風の段をもつもの等が認められる。また、石器では石鏃1点が出土している。これら土器・石器の出土状況を見ると、床面から埋土下層にかけて円礫と土器が一括廃棄の状況を呈して多量に投げ込まれており、特に南東部に集中が強い。

図示したものは壺（1～3・11）、甕（4～8・10）、鉢（9）、紡錘車（13）、用途不明土製品（12）である。

B4SX409（B4-15図）

時期；弥生Ⅰ-3 形状；楕円形 主軸方向；N-17°-E

規模；復元9.40×残存3.04m 深さ0.28m 面積不明

埋土；灰褐色砂質シルト・黒褐色粘土質シルト

ピット；未検出

床面；1面 貼床；なし 焼失；なし

中央ピット；なし

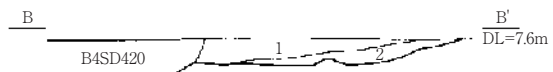
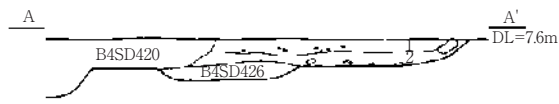
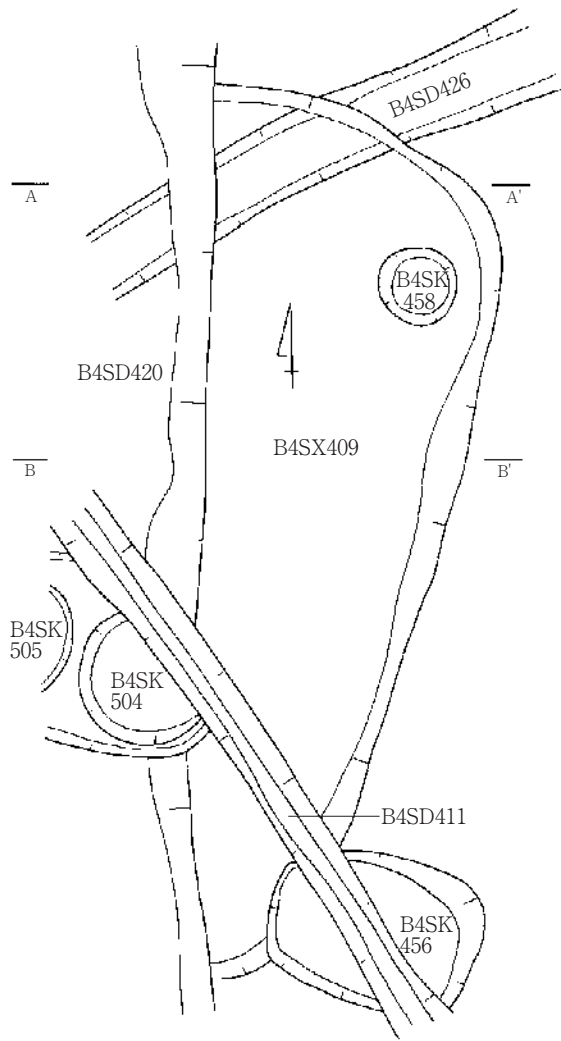
壁溝；なし

出土遺物；弥生土器（口縁部点数-壺9・甕27・鉢2・蓋1・紡錘車1・不明4、底部点数-45）、石器（垂飾品1）

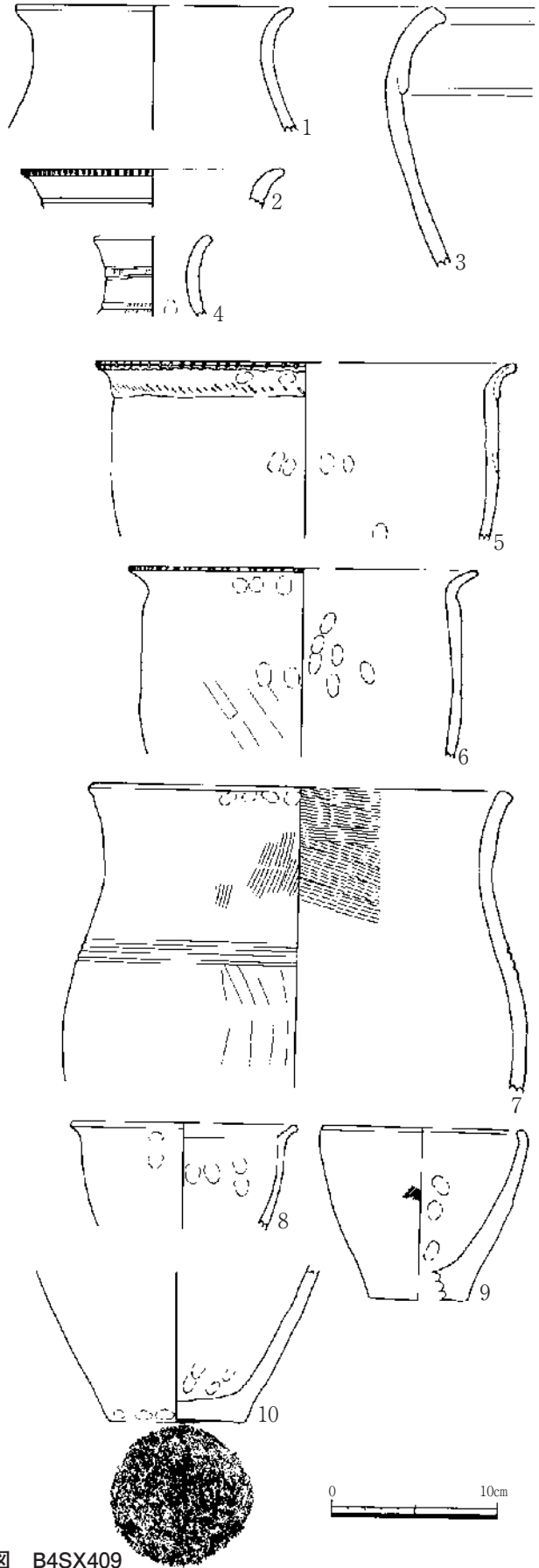
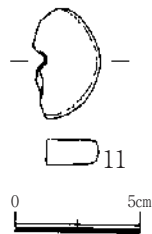
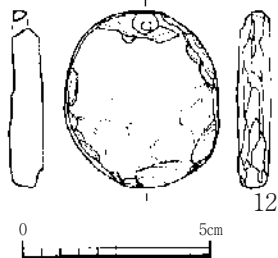
所見；調査区南部に位置する緩やかな落ち込み状の遺構である。弥生前期のB4SD426を切り、弥生中期から後期の大溝B4SD420、近世から近代のB4SK456・SK458・SK504・B4SD411に切られる。B4SX409は西側の半分以上をB4SD420によって削平されるが、復元形態は先述のB4SX408と同様の大型楕円形の堅穴状遺構であったものと推察される。B4SX409床面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。ピットは未検出である。

出土遺物は壺、甕、鉢、蓋、土製紡錘車である。大型壺は4個体が確認されており、壺は頸部まで残存するもののうち、口縁部下に段を有するものが4点、無段のものが2点、多段の文様帯を有するものが1点である。また、甕は全て遠賀川式土器で、胴部上半まで残存するもののうち、上胴部に段を有するものが1点、上胴部に1条沈線を施すものが1点、無文のものが10点である。土器は西部床面から下層に特に土器集中が認められる。

図示したものは壺（1～4）、甕（5～7）、鉢（8・9）、外底に靨痕を残す底部（10）、紡錘車（11）、垂飾品（12）である。



- 1 灰褐色土 (砂質シルト、3~5mm大の礫を含む、炭化物を少量含む)
- 2 黒褐色土 (粘土質シルト、炭化物を含む)



B4-15図 B4SX409

(2) 土坑

弥生時代の土坑は18基を確認した。弥生前期の土坑は、楕円形土坑B4SK446・550・557・559・607・618・619等7基である。この他に、弥生中期のB4SK546・562、弥生中期末から後期初頭の溝状土坑B4SK544・545・547・613等を検出している。

このうち、自然流路B4SR401内にて検出されたB4SK546・550・618・619は流路川底での取水土坑と考えられる。

B4-2表 B4区弥生土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
B4SK446	隅丸方形	袋状	1.40	1.30	30	N-23°-E	黒褐色粘土質シルト	B4SD408に切られる	弥生 I-2	
B4SK544	溝状	U字状	3.83	0.54	26	N-38°-E	暗褐色シルト他	B4ST407を切る	弥生IV-2 ~V-1・2	
B4SK545	溝状	U字状	5.40	0.56	48	N-0°-E	暗褐色シルト他	B4ST410・411に切られる	弥生IV-2 ~V-1・2	
B4SK546	溝状	U字状	残5.60	1.50	116	N-43°-E	暗灰色砂礫他	B4SK550を切る	弥生 III	取水土坑
B4SK547	溝状	皿状	2.44	0.52	6	N-41°-E	暗褐色シルト	B4ST403に切られる	弥生V-1・2	
B4SK550	楕円形	皿状	不明	1.06	8	-	暗灰色砂	B4SK546に切られる	弥生 I-5	取水土坑
B4SK551	楕円形	逆台形	2.68	1.74	20	N-73°-E	暗褐色シルト	B4ST401・SD403に切られる	弥生V-1・2	
B4SK553	円形	皿状	1.64	残0.90	11	-	黒色粘土	B4ST402に切られる	弥生	
B4SK555	隅丸長方形	箱形	残1.30	残0.70	18	N-29°-E	黒褐色シルト他	B4SD411を切りSD408に切られる	弥生 V-3か	
B4SK557	楕円形	皿状	2.80	1.12	12	N-29°-E	灰黄褐色シルト	B4SD419を切りSD408に切られる	弥生 I	
B4SK559	楕円形	皿状	残1.48	1.16	25	N-53°-W	黒褐色粘土質シルト	B4SK558・530に切られる	弥生 I-2	
B4SK562	楕円形	皿状	1.87	1.16	14	-	黒褐色シルト	B4ST402に切られる	弥生 IIIか	
B4SK591	隅丸方形	皿状	1.13	0.60	30	N-39°-W	黒褐色シルト	なし	弥生 I-5 ~II	
B4SK607	楕円形	皿状	1.13	残0.78	20	N-53°-E	黒褐色粘土質シルト	なし	弥生 I	
B4SK611	楕円形	U字状	0.88	0.64	52	N-87°-W	暗褐色粘土質シルト他	B4SD408に切られる	弥生V-3	
B4SK613	溝状	U字状	2.36	0.53	24	N-72°-E	黒褐色粘土質シルト	B4SD408に切られる	弥生IV-2	
B4SK618	楕円形	U字状	1.24	0.86	43	N-42°-E	褐灰色砂礫	なし	弥生 I-5	取水土坑か
B4SK619	楕円形	袋状	1.56	1.10	62	N-38°-E	灰色粗砂他	なし	弥生 I-5	取水土坑か

B4SK446 (B4-16図)

時期：弥生 I-2 形状：隅丸方形 主軸方向：N-23°-E

規模：1.40×1.30m 深さ0.30m 断面形態：袋状

埋土：黒褐色粘土質シルト

付属遺構：なし 機能：不明

出土遺物：弥生土器（口縁部点数-壺1・甕4）

所見：調査区南部に位置する土坑で、近世のB4SD408に切られる。B4SK446は床面が平坦で、壁は下位が外方に張り出す袋状の形態を呈している。また、埋土中位では炭化物が堆積し、炭化物層下から下層にかけて土器の集中廃棄が認められる。

出土遺物は壺、甕であり、壺は口縁部下に段を有する大型壺1点、甕は上胴部無文の遠賀川式土器甕4点からなる。図示したものは大型壺(1)、甕(3・5)である。

B4SK544 (B4-16図)

時期；弥生Ⅳ-2～Ⅴ-1・2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-38°-E

規模；3.83×0.54m **深さ**0.20～0.26m **断面形態**；U字状

埋土；暗褐色シルト・黒黄灰褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺1・甕1、底部-5）

所見；調査区南部に位置する溝状土坑で、弥生後期のB4ST407を切っている。

出土遺物は壺、甕である。壺は細頸壺1点、甕は口唇部に擬凹線文を施すもの1点からなり、他に上胴部に列点文を施す壺または甕の胴部片等が認められる。これらは何れも埋土下層から散在して出土したものである。

B4SK545 (B4-16図)

時期；弥生Ⅳ-2～Ⅴ-1・2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-0°-E

規模；5.40×0.56m **深さ**0.48m **断面形態**；U字状

埋土；暗褐色シルト・黒黄灰褐色粘土質シルト・灰褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺6・甕3）

所見；調査区南部に位置する溝状土坑で、B4ST410・B4ST411に切られる。遺物は壺・甕が出土しており、このうち壺では貼付口縁のもの5点、素口縁1点、甕では貼付口縁1点、口唇部が僅かに上方に肥厚するもの1点、素口縁1点が出土している。図示したものは壺（4・6）、甕（2）である。

B4SK546 (B4-18図)

時期；弥生Ⅲ **形状**；溝状 **主軸方向**；N-43°-E

規模；残存5.60×1.50m **深さ**0.60～1.16m **断面形態**；U字状

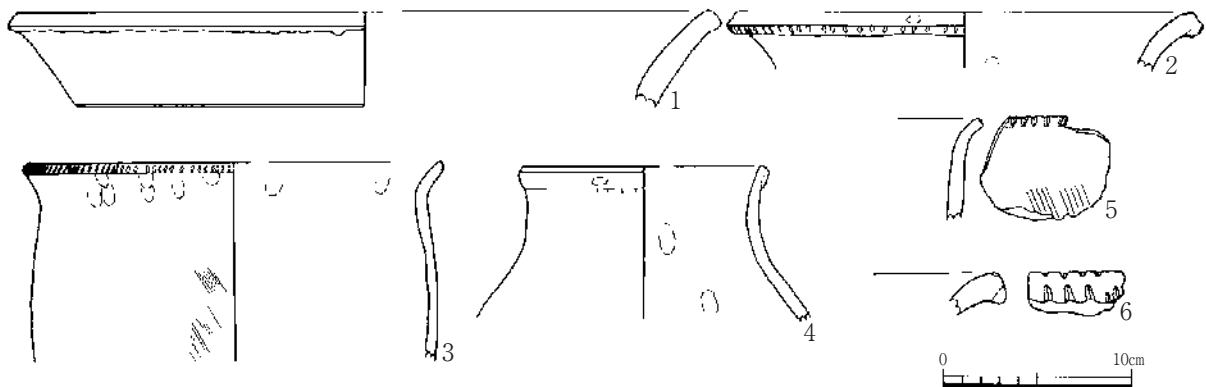
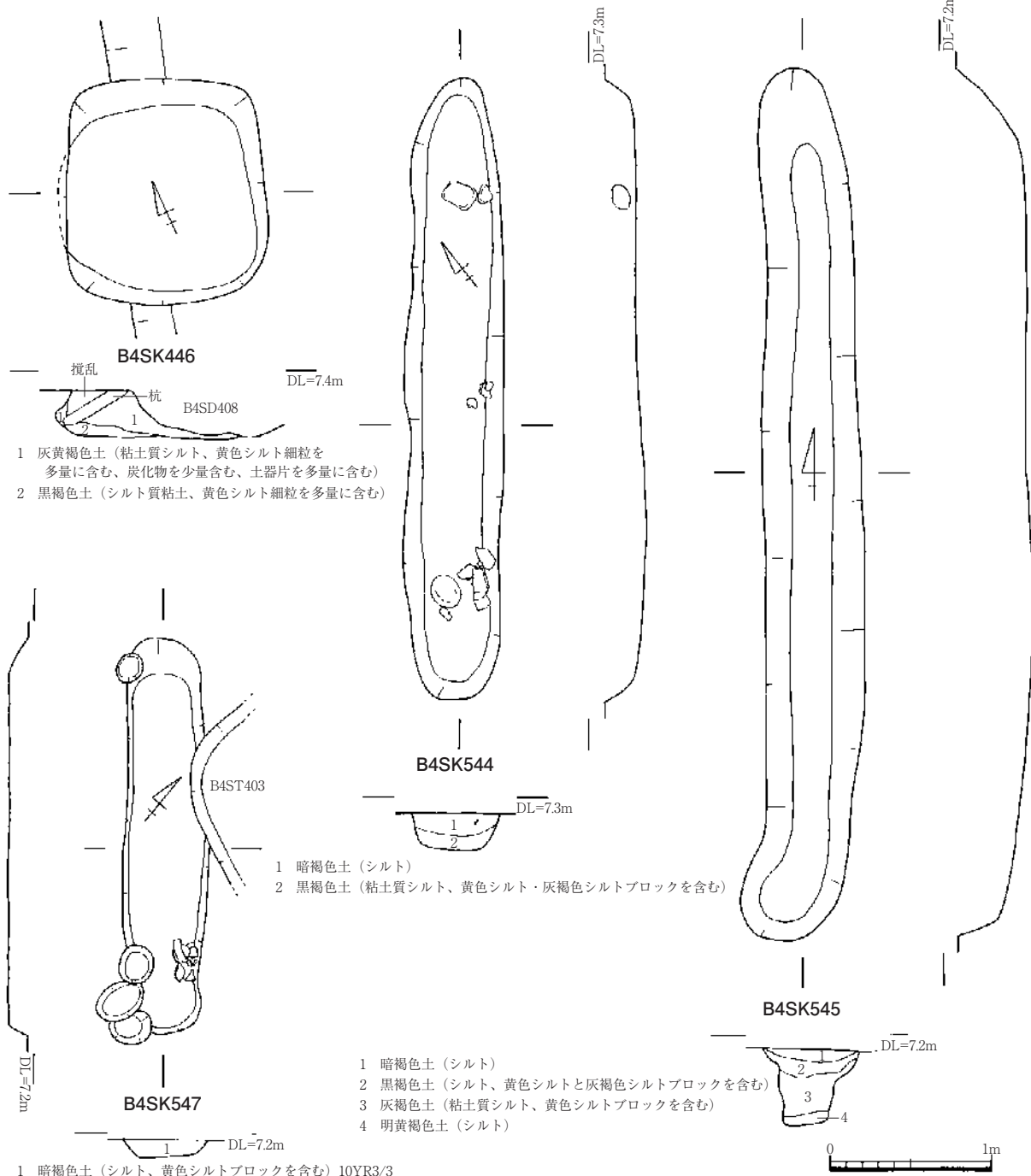
埋土；暗灰色砂礫・褐灰色砂礫・褐灰色粘土・灰赤褐色砂・灰色砂

付属遺構；なし **機能**；取水土坑

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺13・甕11、底部-15）、石器（磨製石包丁2）

所見；調査区南部、自然流路B4SR401の弥生中期の堆積層最下面より掘り込まれた溝状土坑で、南端部は調査区外まで延びる。切り合い関係では弥生前期末のB4SK550を切り、また、SR下位堆積層内の前期末土器集中を切り込む様に深く掘削している。床面の深さは一定ではなく、南部が深さ約60cm、北部では約120cmと北部が楕円形プランの落ち込みをみせる。B4SK546は流路川底渇水時の取水坑として機能した可能性があり、下層（5層）には炭化物を多く含む粘土混じりの細砂が堆積する。また、中層（4層）から上層（1～3層）にかけては砂礫と砂が互層堆積しており、遺構廃絶後は自然埋没に至ったものとみられる。

土器は主に下層（5層）から弥生中期中葉の土器片が出土している。また、B4SK546が周辺の弥生前期末の土器集中を切り込む様に掘削しているため、自然埋没時の堆積層である中層から上層（1～



B4-16図 B4SK446・544・545・547 (B4SK446: 1・3・5, B4SK545: 2・4・6)

4層)には、弥生前期末から中期初頭の土器片が多く混入している。図示したものは5層出土の短頸壺(3)、無頸壺(1)、広口壺(2)、南四国型甕(4)、及び、1層から5層出土の壺(5~9)、磨製石包丁(10)である。このうち5~9については弥生前期末~中期前葉土器の特徴を示しており、混入の可能性はある。この他、石器は粘板岩製の磨製石包丁2点が出土している。

なお、無頸壺(1)は焼成後口縁部を打ち欠きさらに端部を磨いて丸くおさめるもので、外面には櫛描簾状文と櫛描直線文を描き、赤彩を施す。1は出土時完形の状態を保っており、堆積層5層の最上位、北部落ち込み部分の南壁に掛かる様に上向きで置かれていたことから祭祀的色彩が強く、川底湯水時に取水土坑内での祭祀が行われていた可能性が高い。

B4SK547 (B4-16・17図)

時期；弥生V-1・2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-41°-E

規模；2.44×0.52m **深さ**0.06m **断面形態**；皿状

埋土；暗褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器(口縁部-壺1・甕8・高杯2、底部-3、高杯脚1)

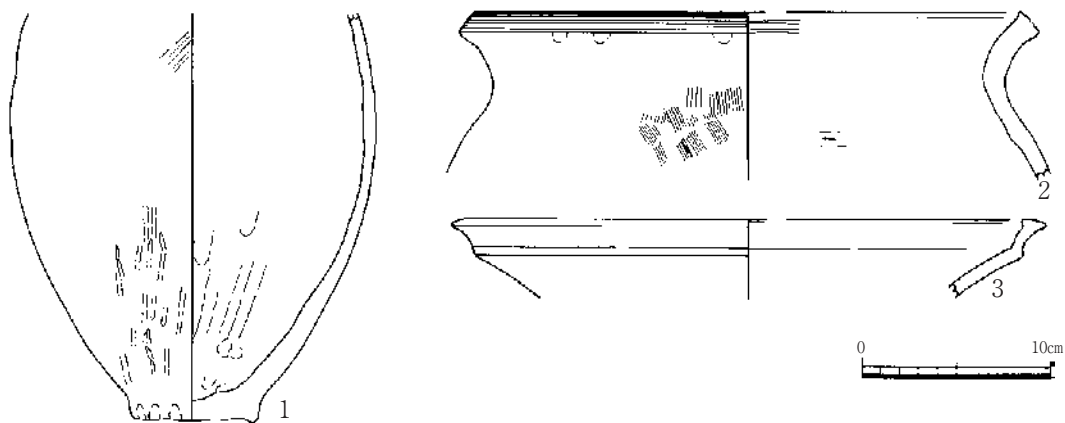
所見；調査区南部に位置する溝状土坑で、弥生後期のB4ST403に切られる。

B4SK547では床面から下層にかけて土器片が一括廃棄の状況で出土しており、このうち壺では口唇部を面取るものが1点。甕では擬凹線文のもの1点、面取るもの2点、素口縁5点、高杯は擬凹線文のもの1点、端部を肥厚させるもの1点が出土している。図示したものは壺または甕の胴部(1)、口唇部に擬凹線文を巡らす甕(2)と高杯(3)である。

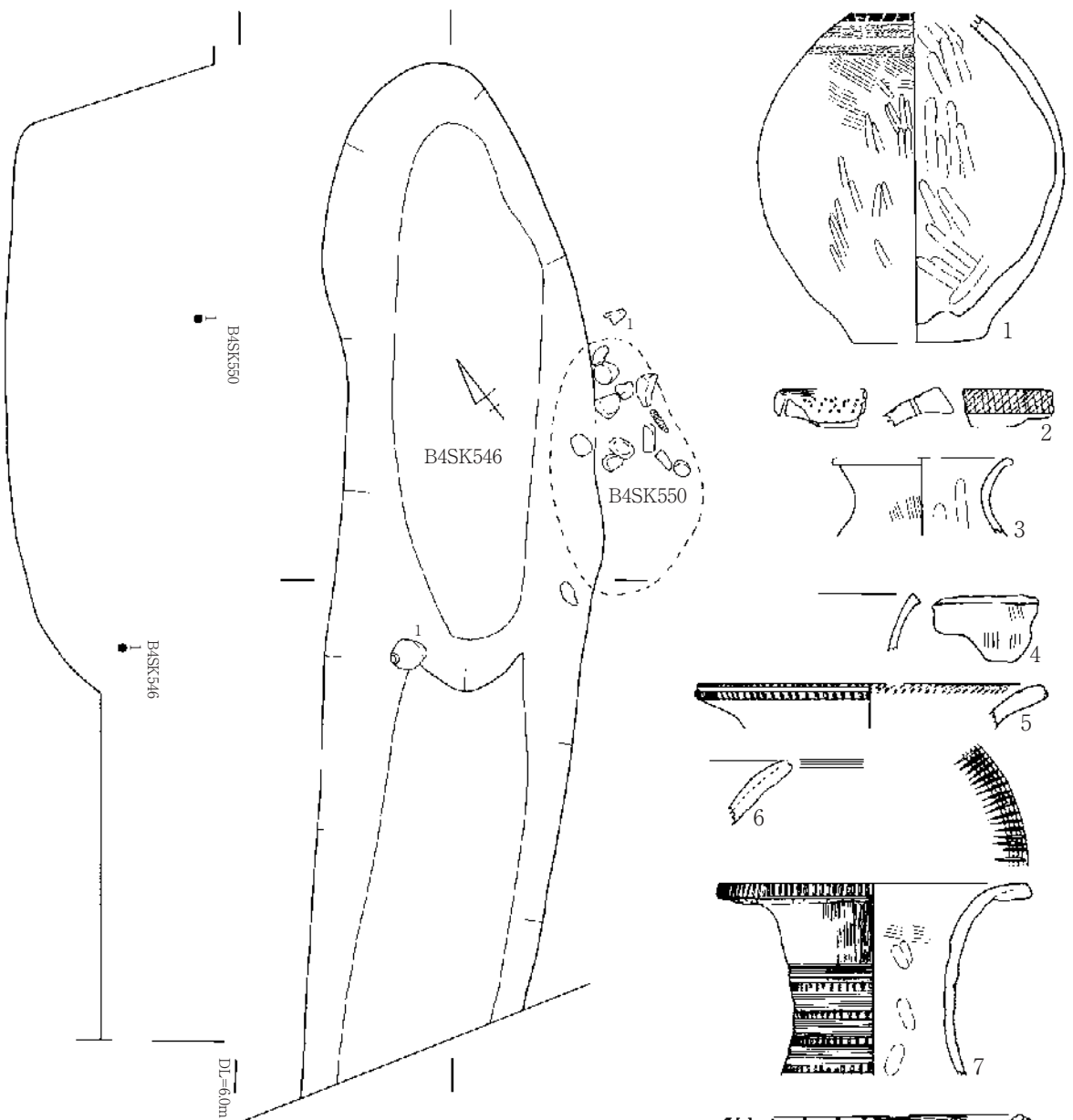
B4SK550 (B4-18・19図)

時期；弥生I-5 **形状**；楕円形 **主軸方向**；—

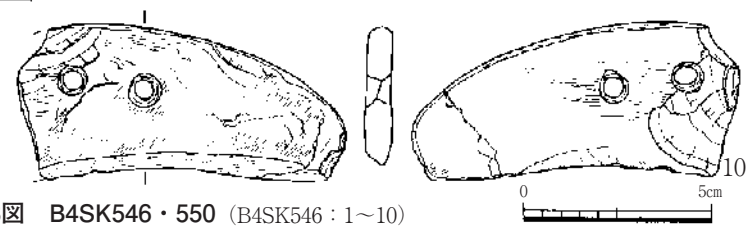
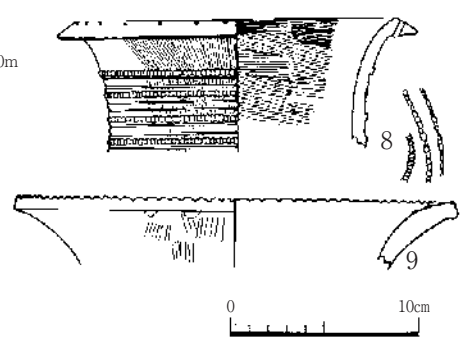
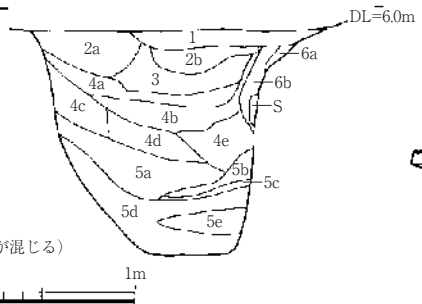
規模；不明×1.06m **深さ**0.08m **断面形態**；皿状



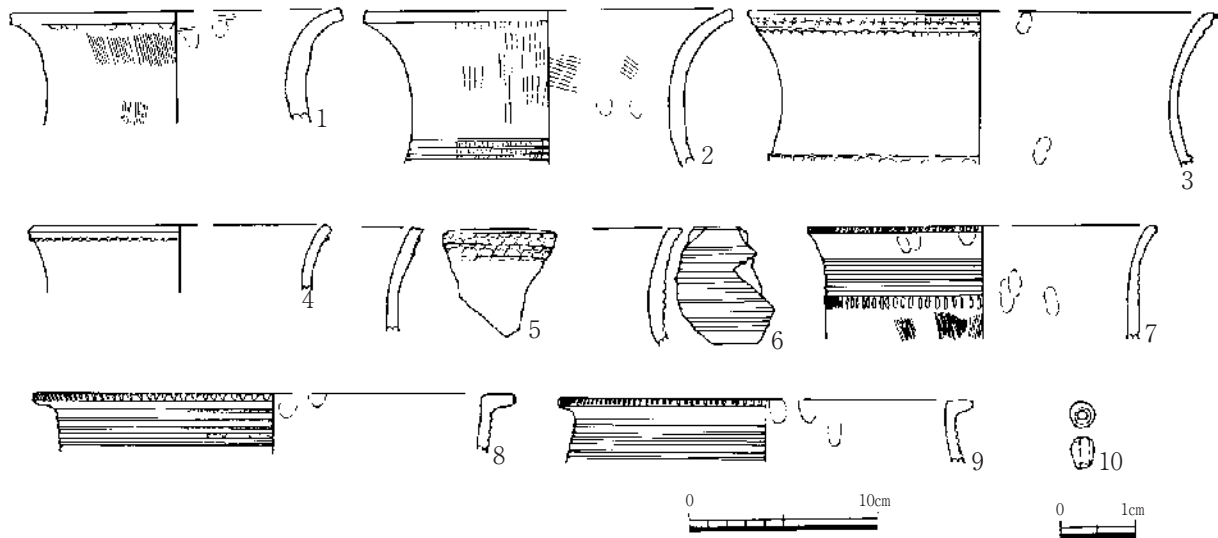
B4-17図 B4SK547



- 1 暗灰色土 (砂、灰色粘土が混じる、炭化物を含む)
- 2a 褐灰色土 (砂礫、3-5cm大の礫を含む)
- 2b 暗灰色土 (礫、5mm-1cm大の礫を含む)
- 3 褐灰色土 (灰色粘土と褐色粗砂が互堆積)
- 4a 赤褐色土 (粗砂)
- 4b 灰色土 (粗砂、5mm大の礫が混じる)
- 4c 灰色土 (粗砂、5mm-2cm大の礫を含む)
- 4d 暗灰色土 (粗砂)
- 4e 明灰色土 (粗砂、灰色粘土と1cm大の礫が混じる)
- 5a 青灰色土 (細砂)
- 5b 明褐色土 (細砂、粘土が混じる)
- 5c 暗灰色土 (細砂、粘土が混じる、上部にFe・Mnが沈殿)
- 5d 明灰色土 (細砂)
- 5e 暗青灰色土 (細砂、粘土が混じる)



B4-18図 B4SK546・550 (B4SK546: 1~10)



B4-19図 B4SK550

埋土；暗灰色砂（粘土が混じる）

付属遺構；なし **機能**；取水土坑

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺2・甕8、底部-1）

所見；調査区南部、自然流路B4SR401の弥生前期末から中期の堆積層最下面（川底）にて検出された浅い皿状の土坑で、B4SK546に切られ、B4SK546肩部東側にて検出されている。B4SK550は炭化物粒を多量に含む粘土混じりの砂が浅い皿状の落ち込みに堆積するもので、上面からは炭化物片と多数の円礫、円礫間に混じって土器片が出土している。

出土遺物は壺・甕であり、このうち甕は5点が弥生前期末段階の南四国型甕、2点が逆L字口縁甕である。図示したものは壺（1）、南四国型甕（2～5）、多段のヘラ描き沈線を巡らす逆L字口縁の甕（8・9）、多段のヘラ描き沈線を巡らす甕（6・7）、ガラス玉（10）である。

B4SK551（B4-20図）

時期；弥生V-1・2 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-73°-E

規模；2.68×1.74m **深さ**0.20m **断面形態**；逆台形

埋土；暗褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺2・甕6・高杯1、底部-5）

所見；調査区東部に位置する土坑で、上面を弥生後期のB4ST401、中世のB4SD403に切られる。土器は素口縁の直口壺が1点。甕では口唇部擬凹線文のもの1点、面取るもの1点、素口縁4点。高杯は端部を面取るもの1点が出土している。

B4SK553（B4-20図）

時期；弥生 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.64×残存0.90m **深さ**0.11m **断面形態**；皿状

埋土：黒色粘土

付属遺構：なし **機能**：不明

出土遺物：弥生土器（なし）

所見：調査区南部に位置する円形土坑で、弥生後期のB4ST402に切られる。埋土は黒色粘土で黄色シルトが層状に入る。遺物は土器・石器とも出土していない。

B4SK555 (B4-20図)

時期：弥生V-3か **形状**：隅丸長方形 **主軸方向**：N-29°-E

規模：残存1.30×残存0.70m **深さ**0.18m **断面形態**：箱形

埋土：黒褐色シルト・灰褐色シルト

付属遺構：なし **機能**：不明

出土遺物：弥生土器（口縁部-甕3・鉢1、底部-2）

所見：調査区南部に位置する土坑で、弥生I-2期のB4SD411を切り、近世のB4SD408に切られる。土器は甕・鉢が出土しており、このうち甕は1点が口唇部擬凹線文のもの、2点が素口縁である。底部はタタキ目を僅かに残す平底2点が出土している。

B4SK557 (B4-20図)

時期：弥生I **形状**：楕円形 **主軸方向**：N-29°-E

規模：2.80×1.12m **深さ**0.12m **断面形態**：皿状

埋土：灰黄褐色シルト

付属遺構：なし **機能**：不明

出土遺物：弥生土器（口縁部-甕2）

所見：調査区南部に位置する楕円形土坑で、時期不明のB4SD419を切り、近世のB4SD408によって切られる。土器は甕が出土しており、2点とも遠賀川式土器甕である。

B4SK559 (B4-20・21図)

時期：弥生I-2 **形状**：楕円形 **主軸方向**：N-53°-W

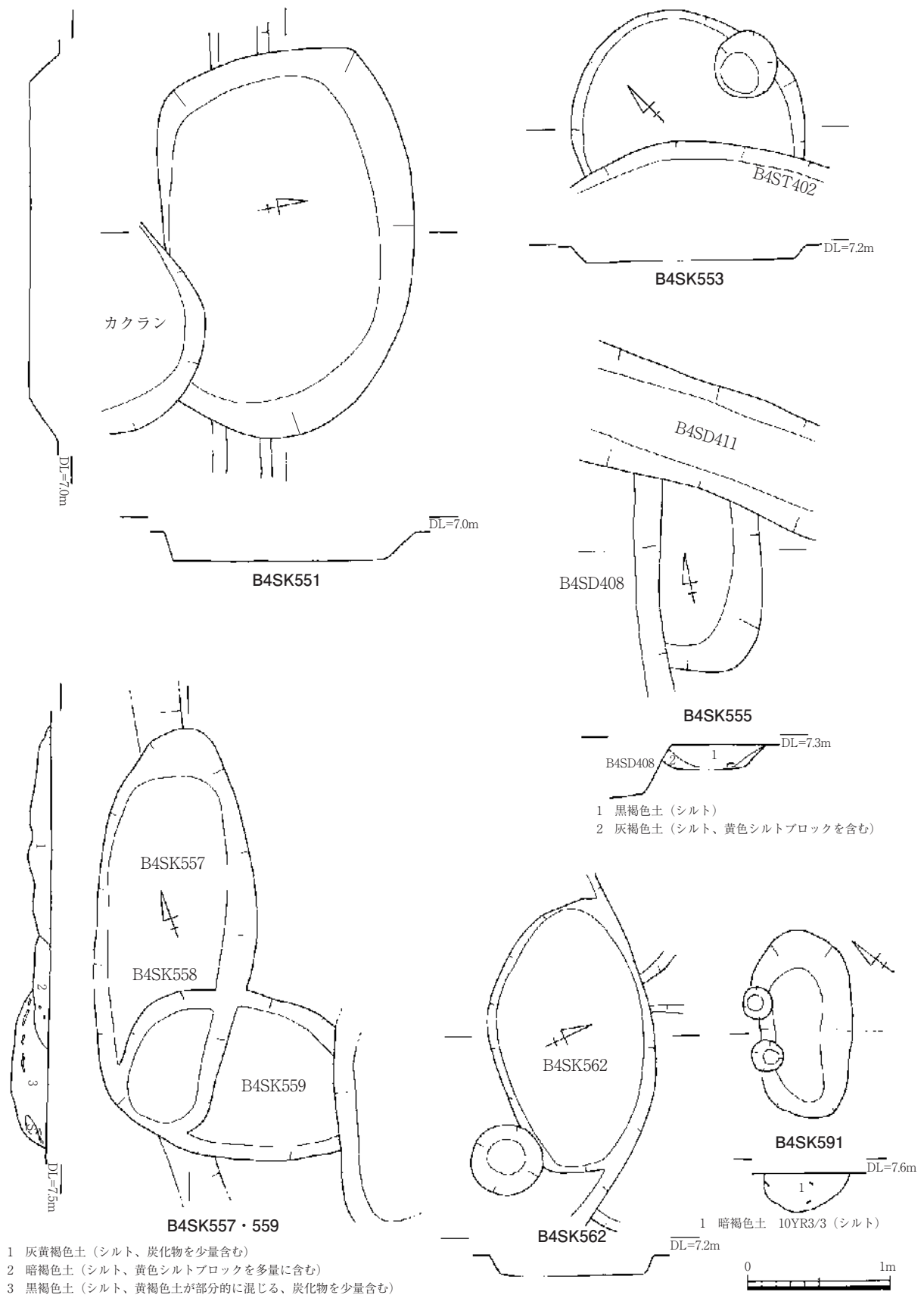
規模：残存1.48×1.16m **深さ**0.25m **断面形態**：皿状

埋土：黒褐色粘土質シルト

付属遺構：なし **機能**：不明

出土遺物：弥生土器（口縁部-壺5・甕11・不明1、底部-4）

所見：調査区南部に位置する土坑で、弥生前期のB4SK558、近世のB4SK530に切られる。土器は床面から下層にかけて一括廃棄の状況を呈して壺・甕が出土している。このうち壺については口縁部5点のうち口縁部下有段のものが1点、無段のもの4点。また、大型壺は1点が含まれている。甕は全て遠賀川式土器甕で、頸部まで残存するもののうち無文のもの4点、施文のもの0点である。図示したものは壺（1~7）、甕（8・9）である。



B4-20図 B4SK551・553・555・557・559・562・591

B4SK562 (B4-20図)

時期；弥生Ⅲか 形状；楕円形 主軸方向；—

規模；1.87×1.16m 深さ0.14m 断面形態；皿状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器（細片-38）

所見；調査区南部に位置する浅い楕円形土坑で、弥生後期B4ST402に切られる。出土遺物は土器細片のみであるが、櫛描波状文と櫛描直線文を施すものが含まれている。

B4SK591 (B4-20・21図)

時期；弥生Ⅰ-5～Ⅱ 形状；隅丸方形 主軸方向；N-39°-W

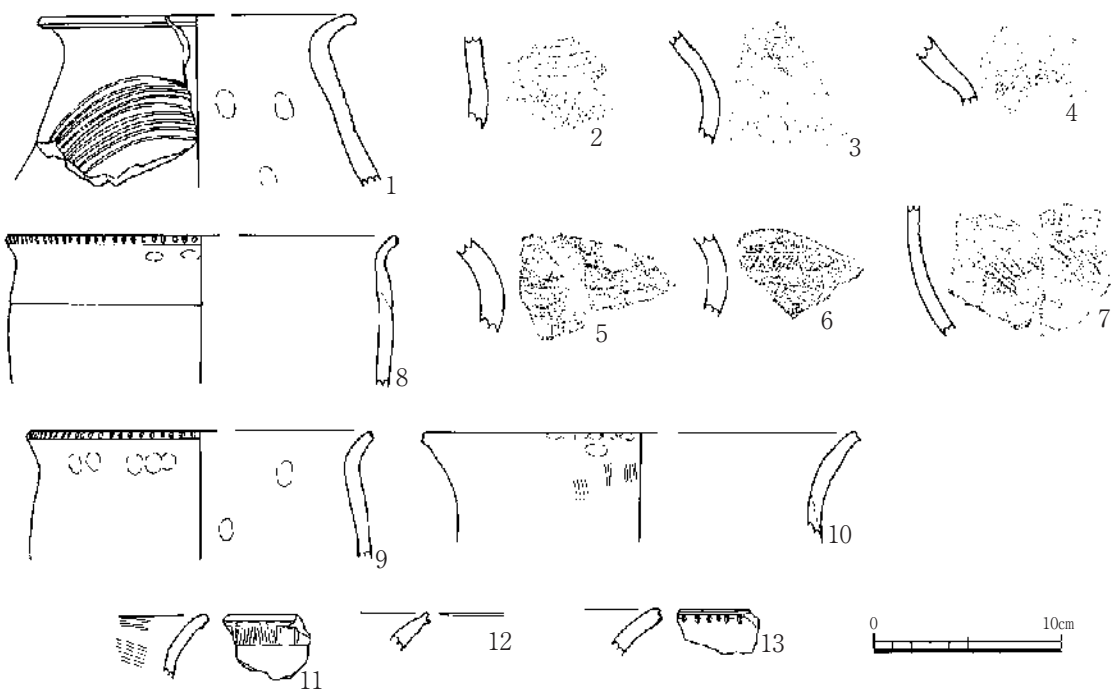
規模；1.13×0.60m 深さ0.30m 断面形態；皿状

埋土；黒褐色シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺1・甕3、底部-4）

所見；調査区中央部に位置する楕円形土坑である。土器は壺、甕が出土しており、甕3点は全て南四国型甕で占められる。図示したものは口唇部中央にヘラ描き沈線を巡らす壺（13）、薄手の南四国型甕（10・11）、器種不明（12）である。



B4-21図 B4SK559・591 (B4SK559：1～9, B4SK591：10～13)

B4SK607 (B4-22図)

時期；弥生Ⅰ **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-53°-E

規模；1.13×残存0.78m **深さ**0.20m **断面形態**；皿状

埋土；黒褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-甕2、底部-1）

所見；調査区北部に位置する楕円形土坑である。土器は遠賀川式土器甕口縁部2点とヘラ描きによる格子文を施す壺胴部片1点、底部等が出土している。図示したものは甕（2）である。

B4SK611 (B4-22図)

時期；弥生Ⅴ-3 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-87°-W

規模；0.88×0.64m **深さ**0.52m **断面形態**；U字状

埋土；暗褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト・暗褐色砂質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺1・甕4、底部-4・高杯脚部1）、石器（石鏃1・叩石1）

所見；調査区北部に位置する楕円形土坑で、近世のB4SD408に切られる。下層から床面にかけて土器片が一括廃棄の状況を呈して出土しており、埋土中には焼土塊を含む。土器は壺・甕・高杯が出土しており、甕は口唇部面取りのものまたは素口縁のもので占められる。また、体部細片にはタタキ目を伴うものが含まれる。図示したものは甕（3）である。石器は頁岩製石鏃（1）1点、砂岩円磔を使用した叩石1点が出土している。

B4SK613 (B4-22図)

時期；弥生Ⅴ-2 **形状**；溝状 **主軸方向**；N-72°-E

規模；2.36×0.53m **深さ**0.24m **断面形態**；U字状

埋土；黒褐色粘土質シルト

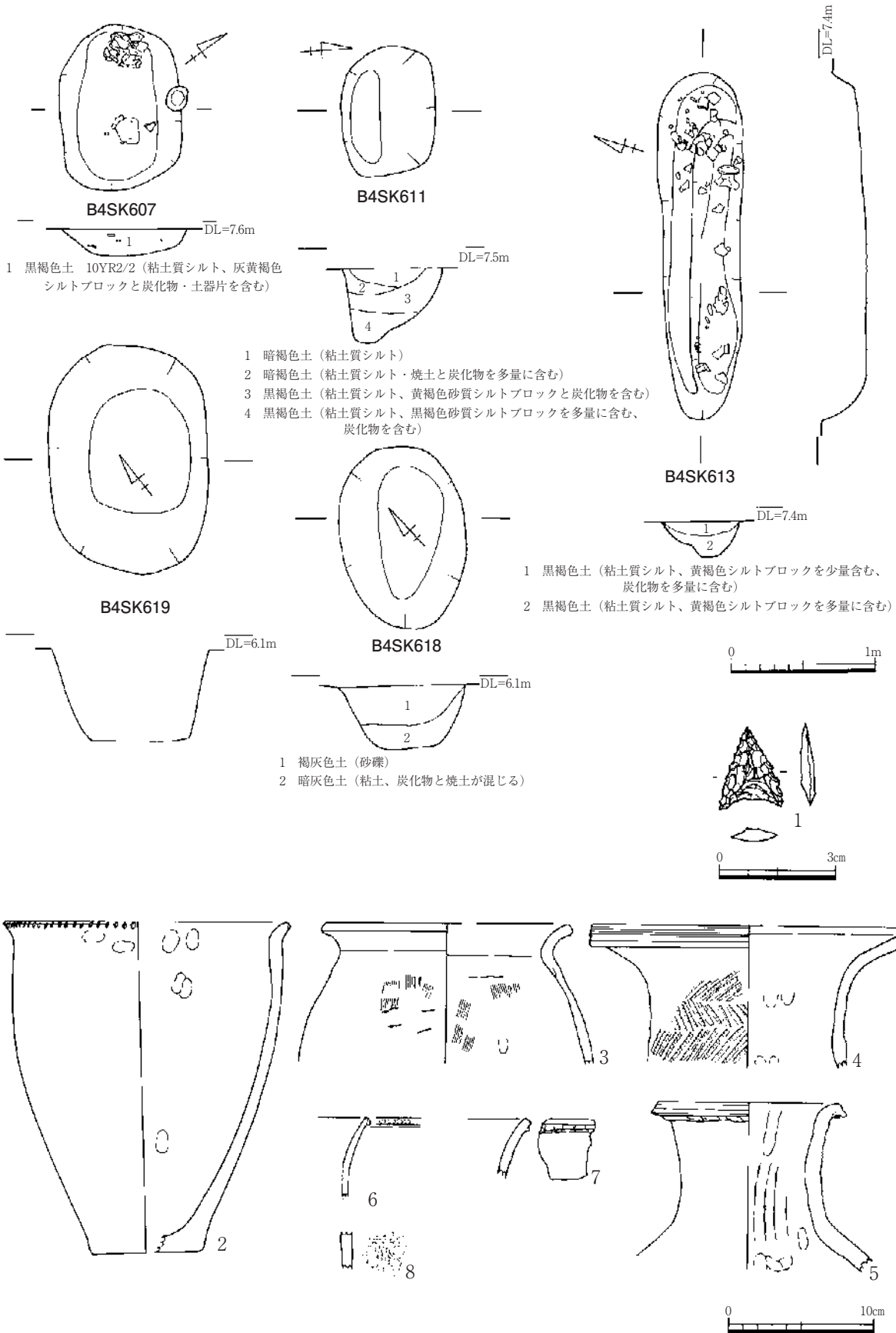
付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺7・甕5、底部-9）

所見；調査区北部に位置する長楕円形の土坑で、近世のB4SD408に切られる。埋土中からは多量の土器片が一括廃棄の状況で出土しており、埋土中に炭化物片も多く含まれる。土器は壺・甕が出土している。壺は口唇部擬凹線文の長頸壺1点（4）、口縁部に幅の広い粘土帯を貼付し楕円形浮文を配する神西式長頸壺1点、その他の粘土帯貼付口縁のものが3点、素口縁が2点。甕では口唇部擬凹線文のものが1点、面取るものが3点、粘土帯貼付口縁の南四国型甕が1点である。図示したものは壺（4・5）である。

B4SK618 (B4-22図)

時期；弥生Ⅰ-5 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-42°-E



B4-22図 B4SK607・611・613・618・619

(B4SK607 : 2, B4SK611 : 1・3, B4SK613 : 4・5, B4SK618 : 6, B4SK619 : 7・8)

規模：1.24×0.86m 深さ0.43m 断面形態：U字状

埋土：褐灰色砂礫・暗灰色粘土

付属遺構：なし 機能：取水土坑か

出土遺物：弥生土器（口縁部-壺1・甕1、底部-3）

所見：調査区東部、自然流路B4SR401の弥生中期の堆積層最下面より掘り込まれた楕円形土坑で、B1SK546に類似する流路川底渇水時の取水坑として機能した可能性がある。下層には炭化物を少量含む粘土混じりの細砂が、また、上層には粗砂が堆積する。土器は粘土帯貼付口縁の壺1点、薄手の南四国型甕（6）1点、その他底部が出土している。

B4SK619（B4-22図）

時期：弥生I-5 形状：楕円形 主軸方向：N-38°-E

規模：1.56×1.10m 深さ0.62m 断面形態：袋状

埋土：灰色粗砂・灰色砂礫・褐灰色砂礫

付属遺構：なし 機能：取水土坑か

出土遺物：弥生土器（口縁部-甕1、底部-1、赤彩土器細片-1）

所見：調査区東部、自然流路B4SR401の弥生中期の堆積層最下面より掘り込まれた楕円形土坑で、近接するB4SK618・B4SK546に類似する流路川底渇水時の取水坑として機能した可能性がある。断面形態は袋状で、最下層には土器片を多量に含む礫混じりの粗砂が堆積し、その上面には10~20cm大の円礫が多量に入れられている。さらに中層から上層には灰色粗砂が堆積している。土器は床面から壺・甕が出土している。図示したものは床面出土の南四国型甕（7）と壺（8）である。この他、最下層よりヘラ描き8状沈線を描き赤彩を施した胴部細片が出土している。

(3) 溝跡

弥生時代の溝は8条を検出している。

弥生前期前葉の溝は調査区北西から南東へ向かって大きくカーブを描いて延びるB4SD411、北東から南西へ向い延びるB4SD418・419・426である。又、弥生前期末から後期初頭まで機能したとみ

B4-3表 B4区弥生溝跡一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
B4SD411	44.00×1.00×1.70	逆台形・V字状	N-22~68°-W	不明	弥生I-2	
B4SD414	4.00×0.35×0.07	皿状	N-57~58°-E	不明	弥生IV~V-1・2	
B4SD418	16.00×0.54×0.17	皿状	N-27°-E	不明	弥生I-2・3	
B4SD419	2.00×0.50×0.14	皿状	N-40°-E	不明	弥生I	
B4SD420	32.00×2.66×0.52	皿状	N-3°-W	不明	弥生I-5~V-1・2	
B4SD421	27.00×3.50×0.80	皿状	N-3°-W	不明	弥生I-5~V-1・2	
B4SD426	21.00×1.12×0.42	逆台形	N-68°-E	不明	弥生I-2	
B4SD427	9.00×0.44×0.18	逆台形	N-66°-E	不明	弥生	

られる大溝B4SD420・421が調査区西部を南北方向に延びる。この他に弥生後期のB4SD414、時期不明のB4SD427が検出されている。

なお大溝B4SD420・421、及び自然流路B4SR401は別分冊にて詳細を述べることとする。

B4SD411 (B4-23~27図)

時期；弥生I-2 **方向**；東部N-68°-W、西部N-22~37°-W

規模；幅0.82~1m **深さ**0.3~0.7m **断面形態**；東部逆台形、西部V字状

埋土；黒褐色シルト、黒褐色粘土、暗灰色粘土

床面標高；南東部6.66m、中央部6.94m、北西部6.66m

接続；—

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺8・甕52・鉢3・蓋2、底部-56、高杯1、甑1）

所見；調査区西部から南東部に向かい緩やかなカーブを描いて延びる溝である。検出長は44m。切り合い関係では、B4SD411は弥生I-3期のB4SX409、弥生前期のB4SD418、弥生前期末から後期前葉のB4SD420・B4SD421・B4SR401、弥生後期前葉のB4ST403・B4SK555、弥生のB4SK561、古代のB4SD415、近世のB4SK429・B4SK430、近世から近代のB4SK504・B4SX406、B4SD402・B4SD406・B4SD407・B4SD408・B4SD410、現代のB4SX402によって切られる。

床面標高は西端部と東端部で高低差は殆ど認められないものの、中央部付近ではやや高く、床面レベルは一様ではない。又、断面形態についても中央部以北では鋭いV字状、南東部付近では逆台形を呈する等、断面形も地点によって異なった様相をみせる。鋭いV字状の断面プランを示す中央部以北では、床面から約20cm上位までの部分が幅20cm程に狭まった逆台形の掘り込み状を呈し、黄色シルトブロックや褐色粘土ブロックを多量に含む暗灰色粘土、埋土4・5層が堆積する。砂の堆積が認められるのは溝幅が広がる埋土2層の直下であり、3層砂層の他、4層上位埋土中にかけても砂が少量混じる。こうした堆積状況からみてB4SD411には2段階の埋没時期があったとみられる。すなわち、狭い掘り込み部分が埋土4・5層によって人為的に埋められた後も、再び3層を床面として機能し、最終的には多量のシルトブロックを含む埋土2層によって人為的に埋め戻された後、1層の堆積により完全に埋没に至ったものと考えられる。

出土遺物は壺、甕、鉢、蓋である。壺は口縁部下まで残存するもののうち口縁部下に段を有するもの（1・5・7）が4点、無段のもの（4）が1点であり、大型壺は2点が確認されている。甕は口縁部の外反の弱いもの（8~12・15・16・18）が目立つ。口唇部への刻み目をみると無刻みのもの7点、口唇部下端を刻むもの30点、口唇部全面を刻むもの14点であり、又、口縁部下は全て無文である。鉢は大型品（32）1点、中型品（33）2点である。壺・甕の施文は殆ど認められないが、施文の例としては、横方向の2条沈線下に8から10条を単位とする縦方向の短い沈線を組み合わせる小型甕（35）、横方向の3条ヘラ描き沈線に複線山形文を組み合わせる壺胴部片（6）が確認されている。

これらの遺物はいずれも埋土1・2層内から出土したもので、埋土4・5層からの出土遺物は殆ど認められない。土器の廃棄は東部から西部まで溝全域に認められるが、土器の集中廃棄にはいくつかの廃棄ブロックが認められ、特に中央部以西でブロックの規模、土器出土量とも大きくなる。中で

も廃棄ブロックAでは、南側の強い集中内から、接合後完形又はほぼ完形まで復元出来た甕8点（12・14・21・22・24～27）、胴部施文を施した完形の小型甕1点（35）、壺1点（7）、鉢1点（33）がまとまって出土しており、これらは廃棄時に完形の状態で溝内へ意識的に配置されていた可能性が高い。又、このブロックAの北側からは完形に近い高杯（34）、大型鉢（32）も出土している。ブロックA地点以外では、完形の土器がまとまって出土する箇所は少なく、各ブロック内に破碎された土器片が一括廃棄の状況を呈して廃棄されている。各ブロックとも土器の出土レベルはおよそ6.8～7.4mの間で、埋土2層の下位から1層まで連続して土器が重なっている。

図示したものは壺（1～7）、甕（8～21・35）、鉢（32・33）、高杯（34）、甑（36）、底部（37～39）、打製石鏃（40）、打製石斧（41）である。

B4SD414（B4-28図）

時期；弥生Ⅳ～Ⅴ-1・2 **方向**；N-57～58°-E

規模；幅0.28～0.35m **深さ**0.07m **断面形態**；皿状

埋土；灰褐色砂

床面標高；7.39m

接続；—

出土遺物；弥生土器（口縁部-壺2・甕6、底部-7）

所見；調査区中央部を北西から南東方向に向い延びる溝である。検出長は約4mで、調査区以西及び以東の進路は不明である。切り合い関係では弥生Ⅰ-3期のB4SX408・B4SX409を切り、近世から近代のB4SK458・B4SD406に切られる。弥生前期末から後期のB4SD420との切り合いは不明である。出土遺物は壺、甕である。壺は口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付するもの1点、及び弥生中期前葉遺構からの混入品1点、甕は口唇部擬凹線文のもの1点、口唇部を面取るもの1点、口縁部外面に扁平な粘土帯を貼付するもの2点、及び弥生前期遺構からの混入品2点からなる。遺物は小破片のものが多く、図示したものは無い。

B4SD418（B4-28図）

時期；弥生Ⅰ-2・3 **方向**；N-27°-E

規模；幅0.54m **深さ**0.16～0.17m **断面形態**；皿状

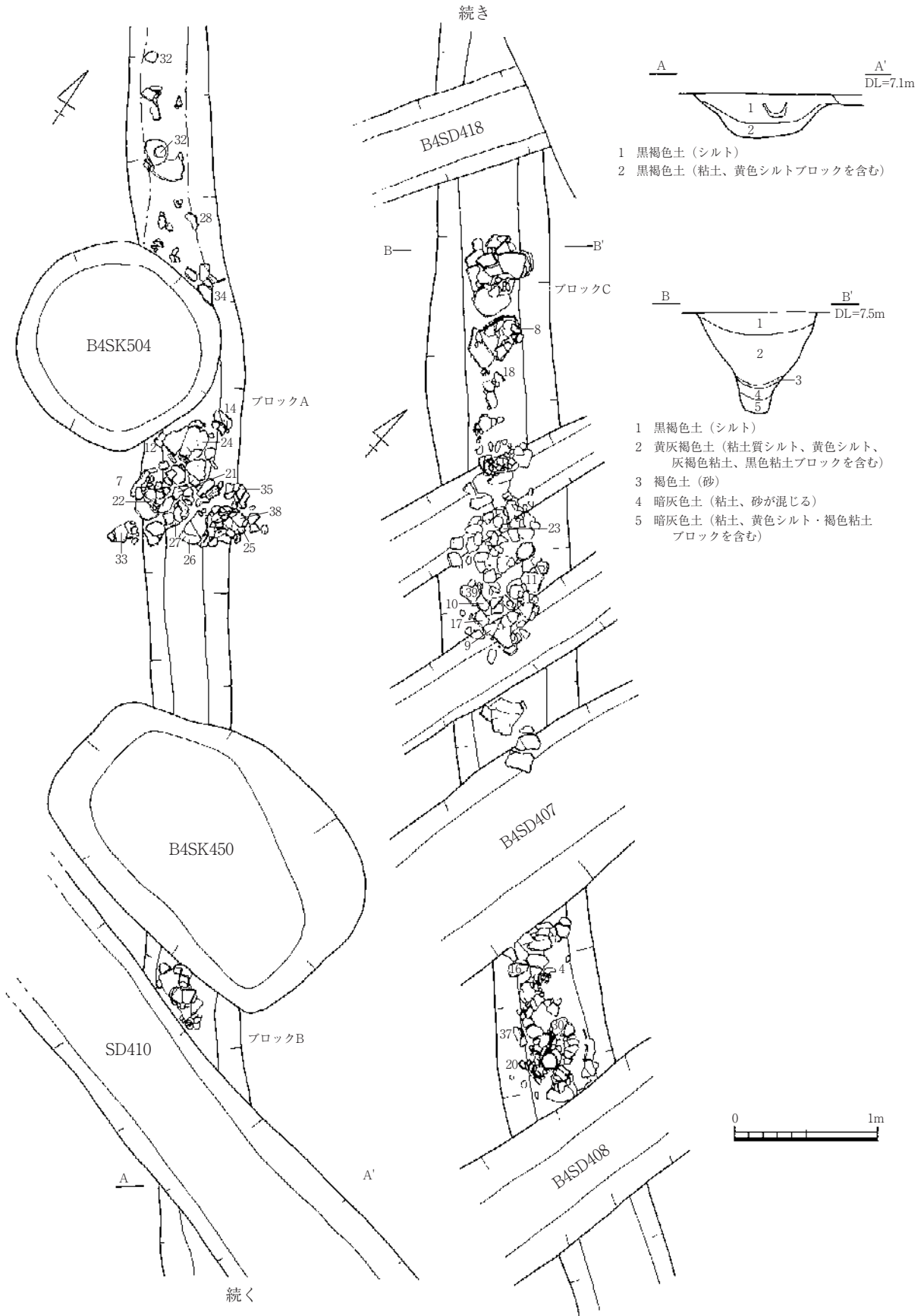
埋土；黒褐色シルト・灰黄褐色シルト

床面標高；7.29m

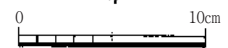
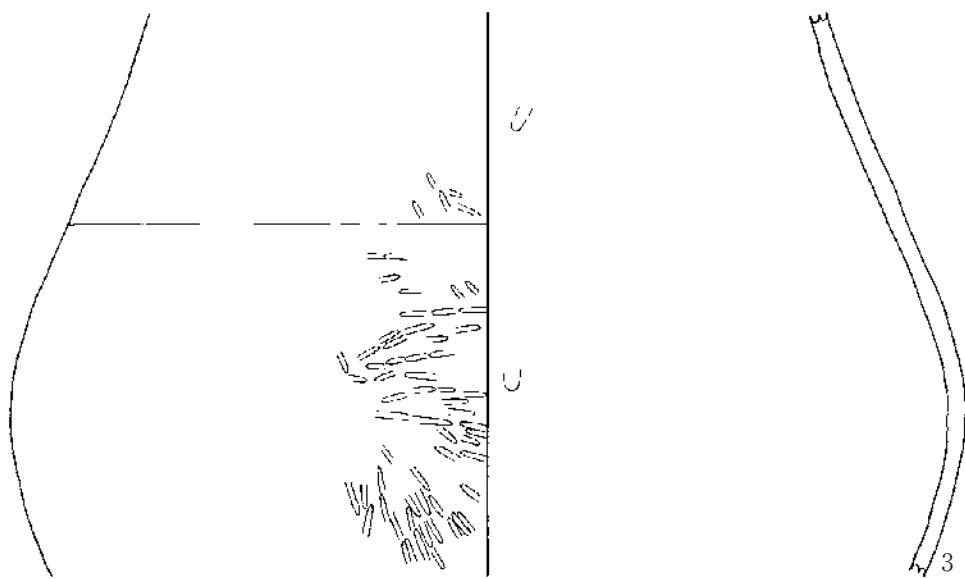
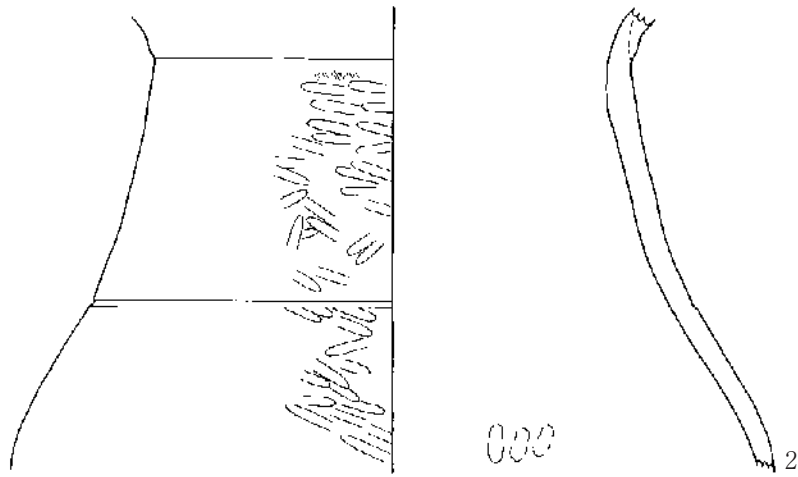
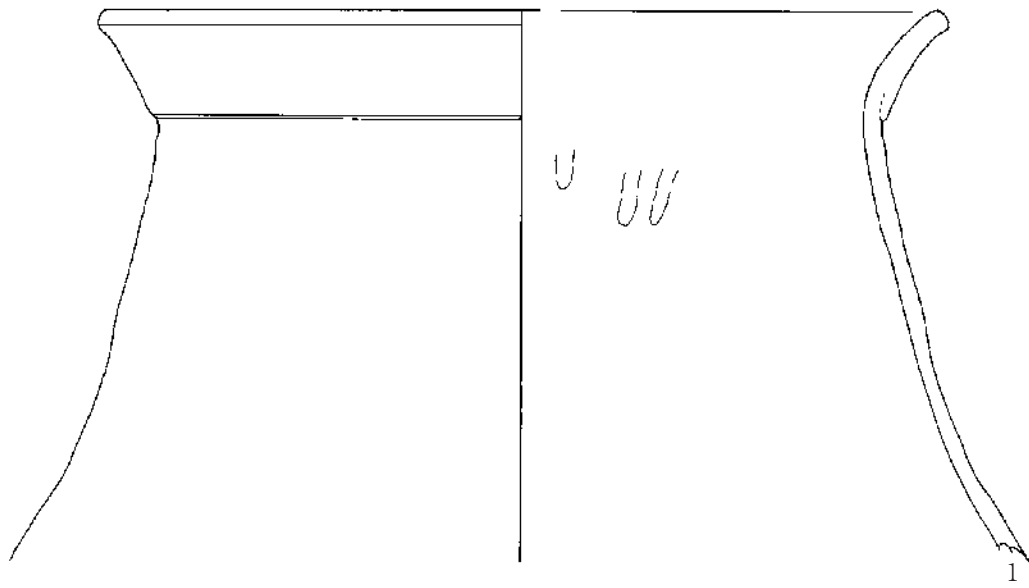
接続；—

出土遺物；弥生土器（口縁部-甕1、底部-1）

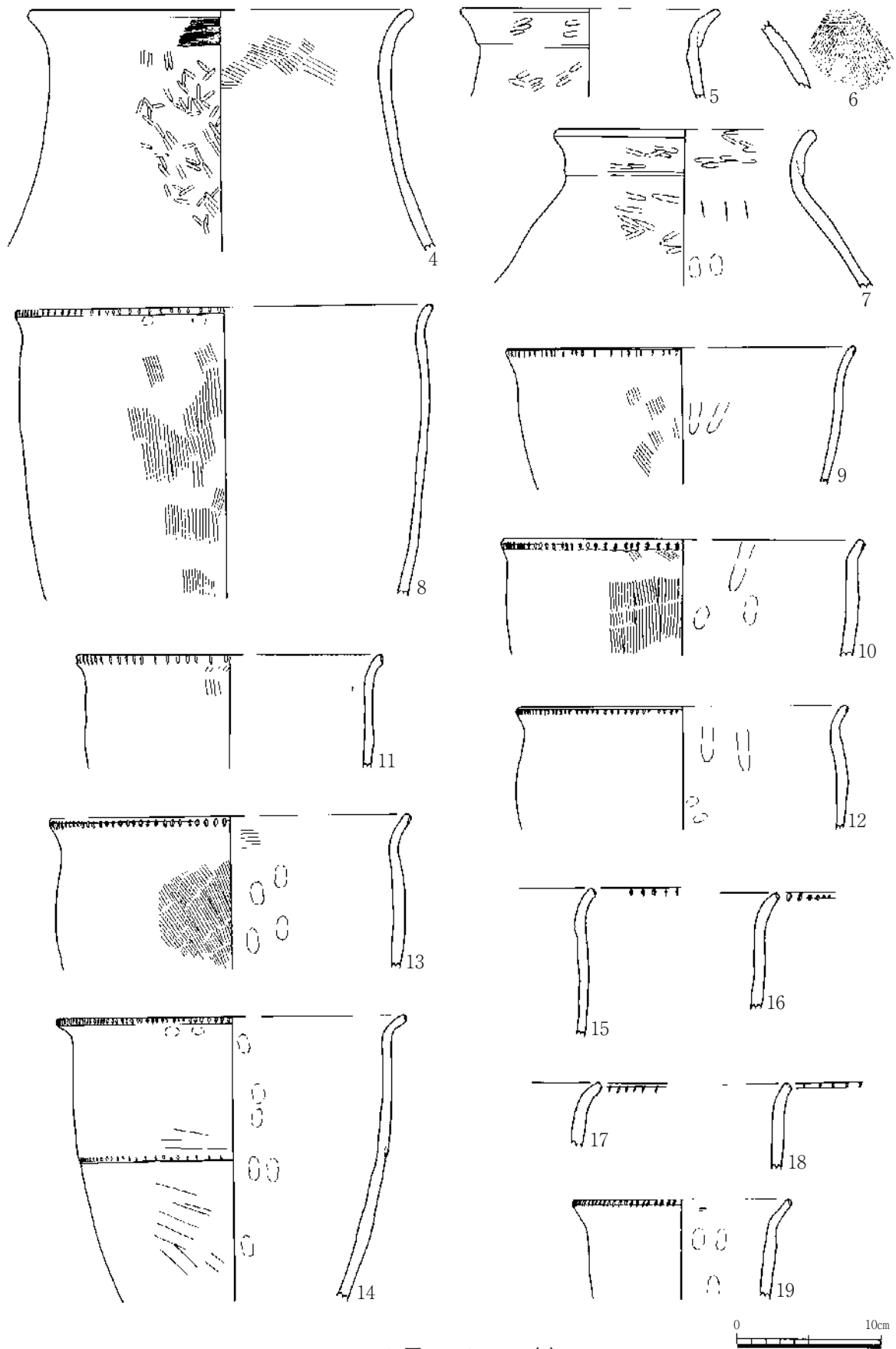
所見；調査区中央部を北北東から南南西方向に向かって延びる溝である。検出長は16m。溝は北北東方向に隣接する調査B3区から南進してきた可能性があるが、上面の削平が著しくB4区以北のプランは残存しない。切り合い関係では弥生Ⅰ-2期のB4SD411を切り、弥生Ⅰ-3期のB4SX408、近世から近代のB4SK433・B4SK452・B4SD409・B4SD410、時期不明のB4SK564・B4SD422に切られて



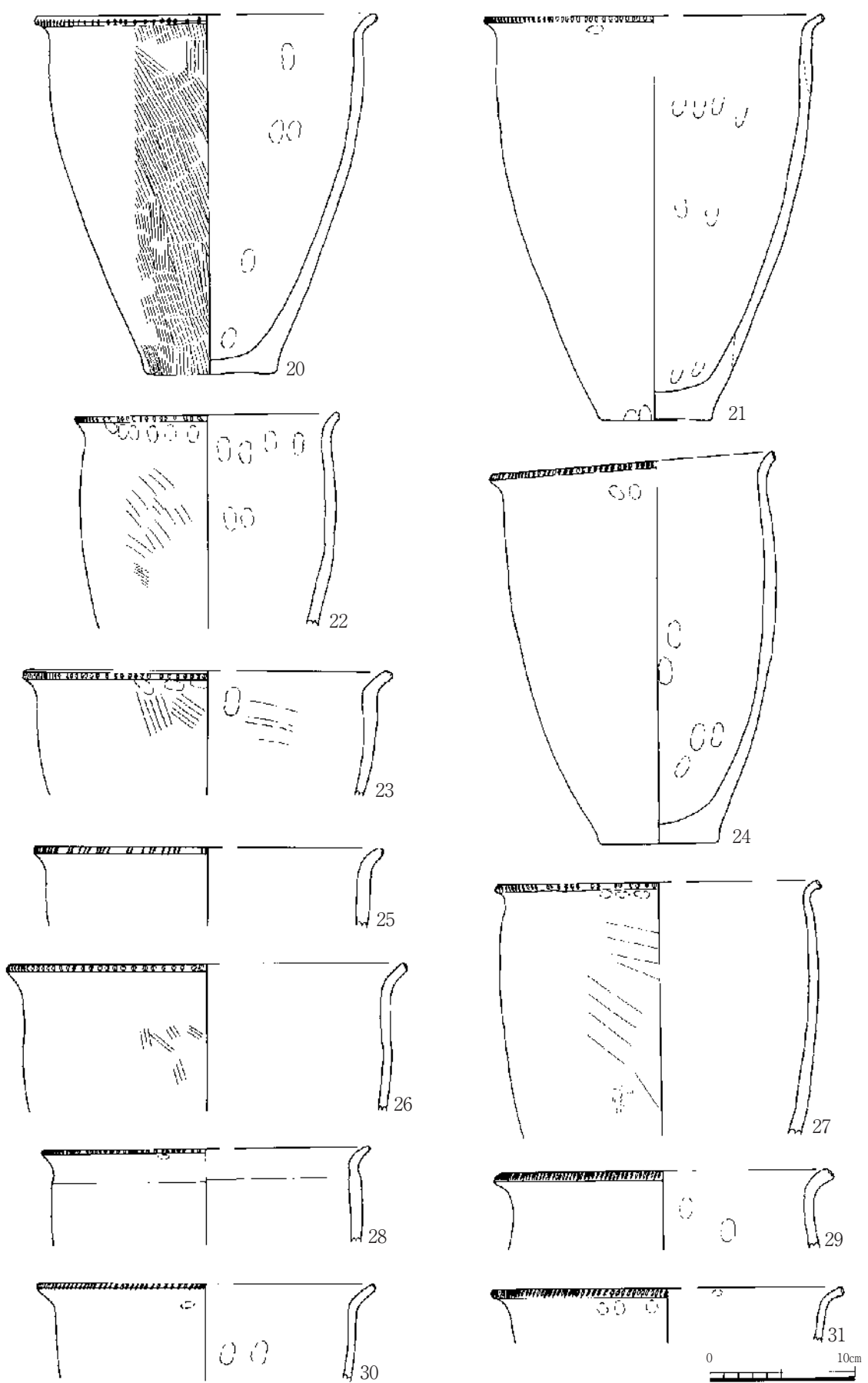
B4-23図 B4SD411 (1)



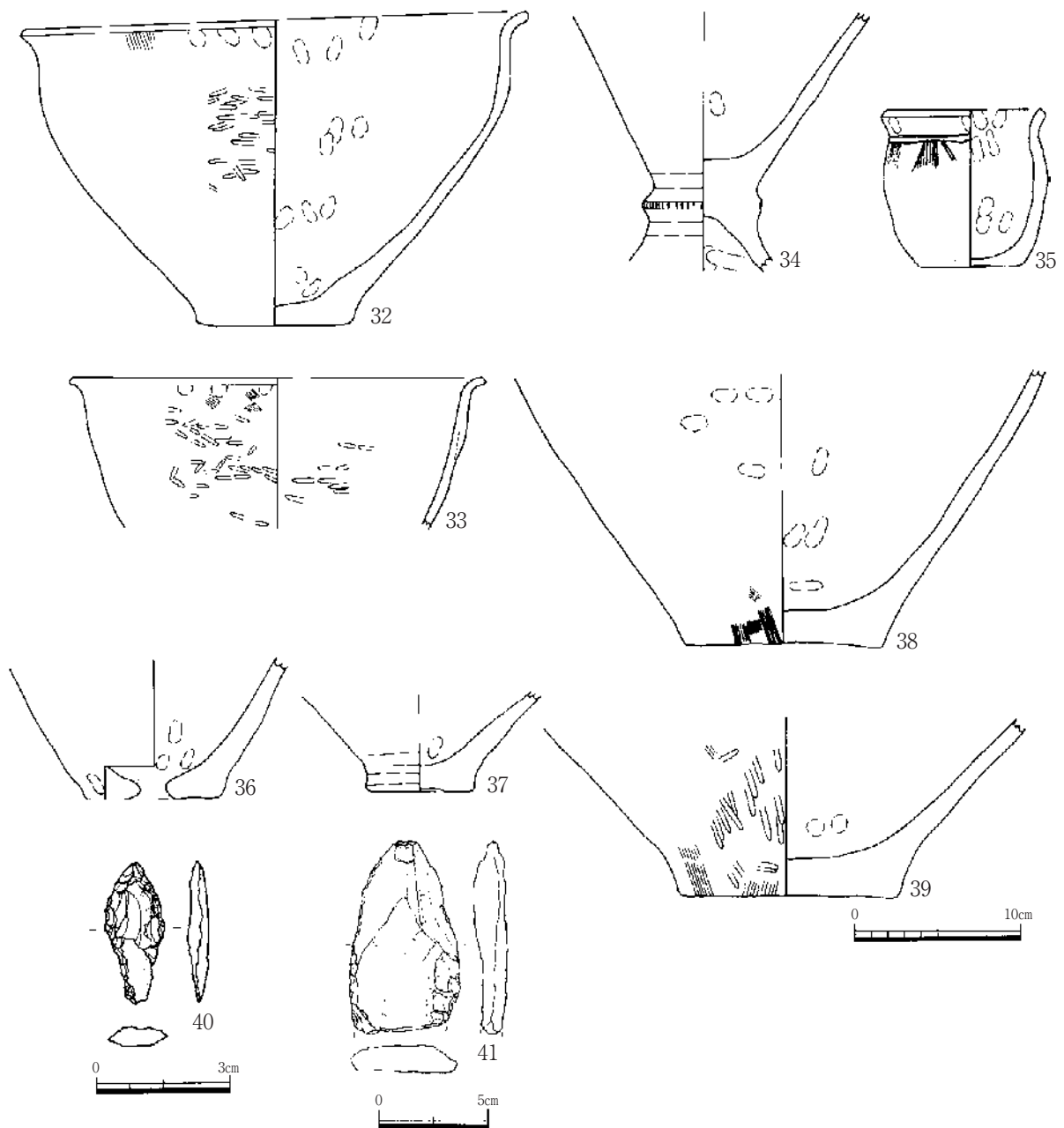
B4-24 匣 B4SD411 (2)



B4-25図 B4SD411 (3)



B4-26图 B4SD411 (4)



B4-27図 B4SD411 (5)

いる。出土遺物は弥生前期の胎土特徴をもつ甕口縁部、底部、細片10数点であるが、何れも小片で図示できるものは無い。B4SX408との切り合い関係からみて、B4SD418は弥生前期に位置付けられる。

B4SD419 (B4-28図)

時期：弥生 I 方向：N-40° -E

規模：幅0.43～0.50m 深さ0.10～0.14m 断面形態：皿状

埋土：灰黄褐色砂質シルト

床面標高：7.34m

接続：—

出土遺物：無し

所見：調査区中央部を北北東から南南西方向に向かって延びる溝である。検出長は2m。B3区南部以北では上面の削平が著しく未検出である。切り合い関係では、弥生I期のB4SK557、中世のB4SD405に切られる。出土遺物は無いが、B4SK557との切り合い関係からみて、B4SD419は弥生前期に位置付けられる。

B4SD426 (B4-28図)

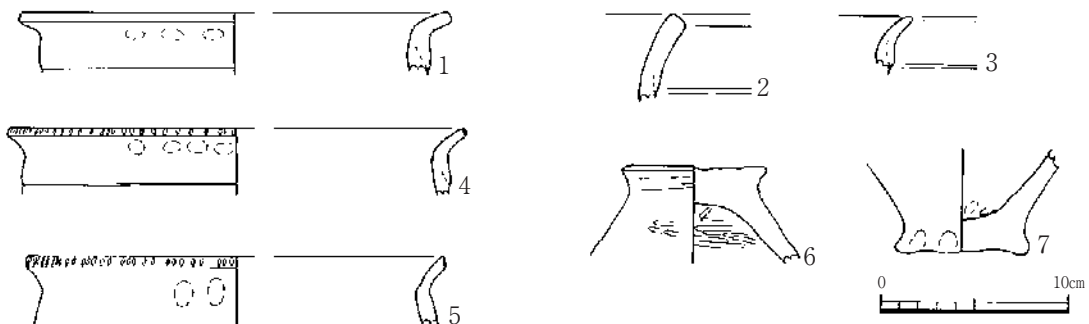
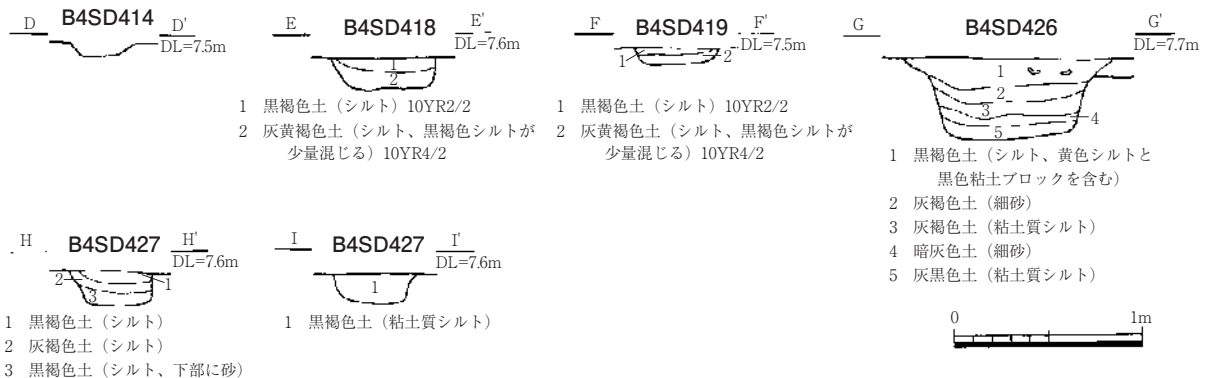
時期：弥生I-2 方向：N-68°-E

規模：幅1.12m 深さ0.42m 断面形態：逆台形

埋土：黒褐色シルト・灰褐色細砂・灰褐色粘土質シルト・暗灰色細砂・灰黒色粘土質シルト

床面標高：7.13～7.15m

接続：—



B4-28図 B4SD414・418・419・426・427 (B4SD426: 1~7)

出土遺物：弥生土器（口縁部－壺9・甕18・鉢4、底部－11、蓋1）

所見：調査区中央部を北東から南西方向に向かって延びる溝である。検出長は21m。溝は北東方向に隣接する調査B3区にも延びる可能性があるが、B4区以東では未検出である。切り合い関係では弥生I－3期のB4ST410・B4SX409、弥生前期末から後期のB4SD420・B4SD421、近世から近代のB4SD406・B4SD407・B4SD408に切られる。断面形態は逆台形で、粘土質シルト層と砂層が相互に堆積している。

出土遺物は壺、甕、鉢、蓋であるが、各器種とも小片での出土でありプロポーシオンを把握できる個体は少ない。壺は口縁部下まで残存する4点は全てが口縁部下有段のものからなる。甕は遠賀川式土器甕16点を確認し、他は端部片で形態が不明である。口縁部下が確認できるものは全て無文であり、又、口唇部への刻みは無刻みのもの3点、口唇部下端を刻むもの4点、口唇部全面を刻むもの9点である。鉢には口縁部下に段を有するもの1点を確認されている。図示したものは壺（1～3）、甕（4・5）、蓋（6）、底部（7）である。このうち壺（3）、甕（4）が埋土1層、他は埋土中からの出土である。

B4SD427（B4－28図）

時期：弥生 **方向**：N－66°－E

規模：幅0.44m 深さ0.16～0.18m **断面形態**：逆台形

埋土：黒褐色シルト・灰褐色シルト・黒褐色シルト質砂

床面標高：7.31m

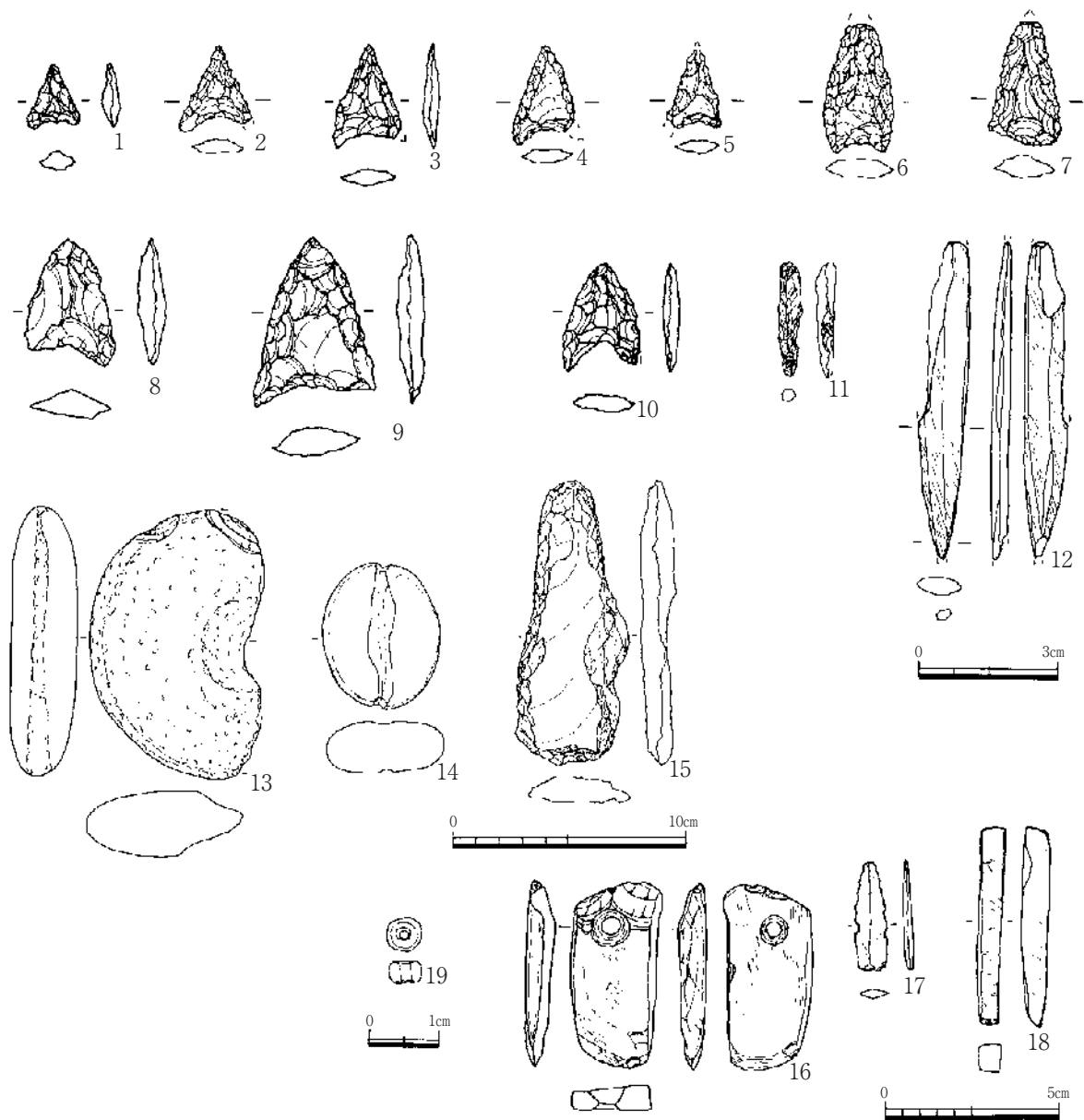
接続：—

出土遺物：弥生土器（底部－1）

所見：調査区中央部を北東から南西方向に向かって延びる溝である。検出長は9m。溝は北東方向に隣接する調査B3区にも延びる可能性があるが、B4区以東では未検出である。又、調査区以西の接続状況も不明である。切り合い関係では弥生前期末から後期のB4SD420・B4SD421、近世のB4SK466・B4SK513・B4SK589に切られる。出土遺物は底部1点と体部片のみであり、遺構廃絶時期の詳細は不明である。

(4) ピット・遺物包含層出土遺物とその他の遺物（B4－29図）

ここにはピット出土（9・14・16）、遺物包含層出土（2）の遺物、及び、古代・中近世遺構への混入（1・3～8・10～13・15・17～20）の遺物を図示している。図示したものは、打製石鏃（1～10）、磨製石鏃（12）、磨製石包丁（16）、石錐（11）、石斧（15・18）、環状石斧未製品（13）、石錘（14）、銅鏃（17）、ガラス小玉（19）である。



B4-29図 遺物包含層及びその他の遺物

(包含層：2, SK472：10, SK543：8, SK589：3, SD406：13, SD407：15・18・19, SD410：11,
SD415：1・4~7・12・17, P4029：9, P4033：14, P4145：16)

3. B4区古代の遺構と遺物

(1) 溝跡

古代の検出遺構は調査区中央部を南北方向に延びる溝1条である。溝B4SD415は軸方向N-11°-E前後と、古代条里にはほぼ沿っており、また、西方に存在し時期をほぼ同じくするF4区掘立柱建物群とも軸方向が一致している。

B4SD415 (B4-30図)

時期：8C後半～9C前半 **方向**：N-10～11°-E

規模：幅0.52～0.64m **深さ**0.11～0.18m **断面形態**：皿状

埋土：褐色砂礫

床面標高：南部7.23m

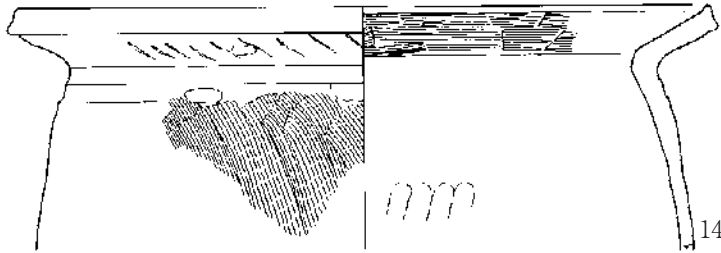
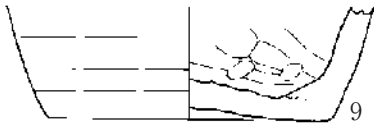
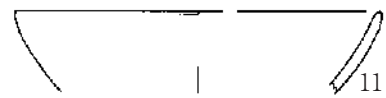
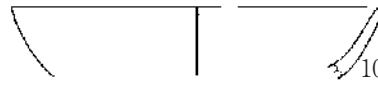
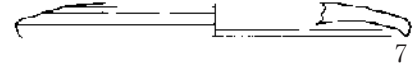
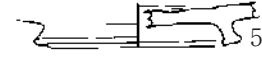
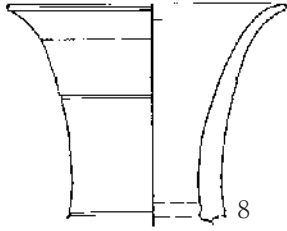
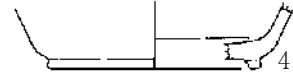
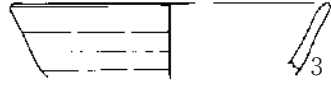
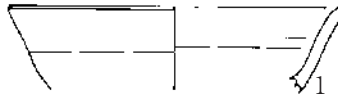
接続：—

出土遺物：土師器（口縁部-杯2・皿2・高杯1・甕1、脚部-高杯1）、赤色塗彩土師器（口縁部-杯1、体部-杯1）、須恵器（口縁部-杯3・蓋3・壺1、底部-杯5・皿1、体部-壺11・甕40、他細片）、製塩土器（口縁部-3、体部-12）、弥生土器（混入）

所見：調査区中央部を南北方向に延びる溝である。上面はかなり削平を受けており、最も良好に残る南部で検出規模は幅50～60cm 深さ18cm前後を測る。また調査区中央部以北に至ると削平が著しく僅かに床面の堆積層を確認するのみであった。埋土は褐色砂礫土で、埋土中に2～5mm前後の角礫を多量に含んでいる。

出土遺物は土師器杯、皿、高杯、甕、赤色塗彩土師器皿、須恵器杯、皿、蓋、壺、甕、製塩土器である。このうち製塩土器体部片には内面に布目圧痕を伴うもの2点が含まれる。また、赤色塗彩を施す土師器杯（10・12）・皿は、赤色顔料の剥離が著しい。これらの遺物はほとんどが南部の埋土中から出土したもので、中央部以北については削平が著しく遺物はほとんど残存していない。図示したものは土師器杯（10～12）、土師器高杯（13）、須恵器杯（1～5）、須恵器蓋（6・7）、須恵器壺（8・9）、土師器甕（14）、製塩土器（15・16）である。

J B4SD415 J
DL=7.4m



B4-30图 B4SD415

4. B4区中世の遺構と遺物

(1) 土坑

中世の土坑は18基を確認した。B4区ではこの他にも、中世遺構に埋土が共通する土坑が多く検出されたが、無遺物で時期の特定が出来ないものが殆どであった。

このうち、調査区南東部に位置するB4SK408・412・413・541は、15～16世紀代の遺物を含み、円礫の廃棄状況がB4SD405・B1SD405に共通することから、区画溝B4SD403・405によって囲まれた中世屋敷地Aに伴う土坑群であった可能性が高い。この他、調査区北西部において検出されたB4SK463・585・587・597についても15～16世紀末の遺物を含み、同時期頃に機能した屋敷群の関連遺構であったとみられる。

一方、調査区東部寄りでは15世紀代の遺物を伴う中世の土葬墓3基（B4SK424～426）が検出されている。これらについては区画溝B4SD403によって切られるため、2重の溝を伴う中世屋敷地Aが展開し始める以前の段階のものであったと考えられる。

B4SK408 (B4-31図)

時期：15C 形状：隅丸方形 主軸方向：N-20°-E

規模：1.34×1.44m 深さ0.52m 断面形態：箱形

埋土：褐色シルト

付属遺構：なし 機能：不明

B4-4表 B4区中世土坑一覧

遺構番号	形態	断面形	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	主軸方向	埋土	切合関係	時期	備考
B4SK408	隅丸方形	箱形	1.34	1.44	52	N-20°-E	褐色シルト	B4SK414に切られる	15C	
B4SK412	円形	箱形	1.46	1.40	58		灰黄褐色砂礫他	B4ST405を切る	中世か	
B4SK413	円形	箱形	1.56	1.53	64		灰黄褐色砂礫他	B4ST405を切る	15～16C	
B4SK424	長方形	箱形	1.24	0.92	45	N-15°-W	黄灰色シルト	B4ST409・B4SK532を切る、 B4SD403に切られる	15C	中世墓
B4SK425	長方形	箱形	1.14	0.93	49	N-8°-E	黄灰色シルト	B4SD403に切られる	15C	中世墓
B4SK426	長方形	箱形	1.23	0.85	29	N-8°-E	黄灰色シルト	B4SD403に切られる	15C	中世墓
B4SK463	楕円形	逆台形	残1.34	2.10	48		灰黄褐色粘土質シルト	B4SK466・B4SK499に切られる	16C末～ 17C初頭	
B4SK469	長方形	箱形	3.16	1.92	10	N-6°-E	灰黄褐色シルト	B4SK470に切られる	15C	
B4SK479	長方形	箱形	0.90	0.54	8	N-74°-W	褐灰色シルト	B4SD418を切る	16C末	
B4SK510	長方形	箱形	0.80	0.82	22	N-15°-E	灰褐色シルト	B4SK512・B4SK509・B4SD406 に切られる	15C	
B4SK511	長方形	皿状	1.70	0.72	28	N-67°-E	暗褐色砂質シルト		中世末 か	
B4SK518	方形	逆台形	1.44	残1.10	34	N-6°-E	灰褐色シルト	B4SD406に切られる	16C末	
B4SK533	楕円形	皿状	2.40	残1.52	44	N-3°-W	灰黄褐色粘土質シルト	B4攪乱8に切られる	16C末	
B4SK541	楕円形	皿状	0.65	0.52	20	N-13°-E	暗褐色シルト	B4SR401を切る	中世	
B4SK513	隅丸方形	皿状	2.50	残2.10	50	N-18°-E	暗灰褐色粘土質シルト	B4SK519を切る。B4SK512・ 406に切られる	中世～ 近世初頭	
B4SK575	方形	皿状	1.86	1.76	30	N-80°-W	灰黄褐色シルト		中世末	
B4SK585	楕円形	皿状	2.06	1.26	28	N-80°-W	灰黄褐色シルト	B4SD420、B4SK587を切り、 B4P4205に切られる。	16C末	
B4SK587	不明	皿状	残0.36	0.96	20	不明	褐灰色砂礫	B4SD420を切り、B4SK585に切られる。	15C	
B4SK597	長方形	箱形	1.74	1.12	36	N-13°-E	灰黄褐色シルト	B4SK476、B4P4103に切られる。	中世	

出土遺物；土師質土器（口縁～底部－杯1）、瓦質土器（口縁部－羽釜1）

所見；調査区東部ア－17グリッドに位置する土坑で、時期不明のB4SK414に切られる。埋土中より在地系の土師質土器杯（1）、瓦質羽釜（2）、混入とみられる打製石包丁1点が出土している。

B4SK412（B4－31図）

時期；不明（中世か） **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.46×1.40m **深さ**0.58m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色砂礫・褐色シルト・黄灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；弥生土器混入のみ

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、弥生のB4ST405を切る。また、南側には円形土坑B4SK413が隣接して並んでいる。壁は垂直気味に立ち上がり、床面は平坦である。埋土上層には灰黄褐色砂礫層が堆積する。

出土遺物は弥生土器の混入のみであり、遺構廃絶時期は不明であるが並列するB4SK413とは同時期に機能した可能性をもつ。

B4SK413（B4－31図）

時期；15C～16C **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.56×1.53m **深さ**0.64m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色砂礫・灰黄褐色粘土質シルト・暗灰黄色シルト質粘土・他

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；瓦質土器（口縁部－鍋1）

所見；調査区南部に位置する円形土坑で、弥生のB4ST405を切る。また、北側には円形土坑B4SK413が隣接して並んでいる。壁は垂直気味に立ち上がり、床面は平坦である。埋土上層には2～10cm大の円礫を多量に含む灰黄褐色砂礫層が堆積する。出土遺物は15C頃に比定できる瓦質土器鍋（3）1点のみである。

B4SK424（B4－31図）

時期；15C **形状**；長方形 **主軸方向**；N－15°－W

規模；1.24×0.92m **深さ**0.45m **断面形態**；箱形

埋土；黄灰色シルト

付属遺構；なし **機能**；中世墓

出土遺物；土師質土器（完形－杯1・皿1）

所見；調査区東部地点に位置する中世墓で、3基の中世墓B4SK424・425・426が並列する。切り合い関係では、弥生後期のB4ST409・B4SK532を切っており、中世の区画溝B4SD403によって切られている。土器は床面直上から完形の土師質土器皿（4）が伏せた状態で、埋土中から土師質土器杯底部

が出土している。

B4SK425 (B4-31図)

時期：15C 形状：長方形 主軸方向：N-8°-E

規模：1.14×0.93m 深さ0.49m 断面形態：箱形

埋土：黄灰色シルト

付属遺構：なし 機能：中世墓

出土遺物：土師質土器（完形-杯1・皿1）

所見：調査区東部に位置する中世墓で、中世の区画溝B4SD403によって切られている。中世墓B4SK424・426とは同群を構成している。土器は床面直上から完形の土師質土器杯（5）が上向きの状態で、埋土下層から土師質土器皿が出土している。

B4SK426 (B4-31図)

時期：15C 形状：長方形 主軸方向：N-8°-E

規模：1.23×0.85m 深さ0.29m 断面形態：箱形

埋土：黄灰色シルト

付属遺構：なし 機能：中世墓

出土遺物：土師質土器（完形-杯1・口縁-皿1）

所見：調査区東部に位置する中世墓で、中世の区画溝B4SD403によって切られている。中世墓B4SK424・425と同群を構成する土葬墓である。土器は半分を欠損した土師質土器杯（6）が北壁際の床面直上から横向きの状態で出土している。

B4SK463 (B4-32図)

時期：16C末～17C初頭 形状：楕円形 主軸方向：不明

規模：残存1.34×2.10m 深さ0.48m 断面形態：逆台形

埋土：灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構：なし 機能：不明

出土遺物：青花（口縁部-漳州窯系青花小皿1）、土師質土器（体部-鍋1）

所見：調査区中央部に位置する楕円形土坑で、近世のB4SK466・B4SK499に切られる。遺物は埋土中より漳州窯系青花小皿（1）、土師質土器鍋体部片が出土している。

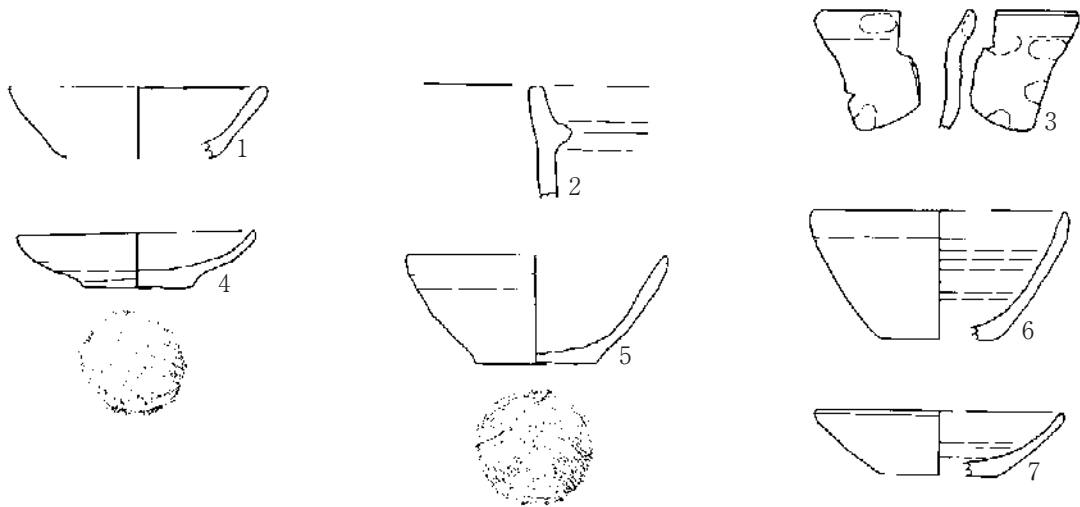
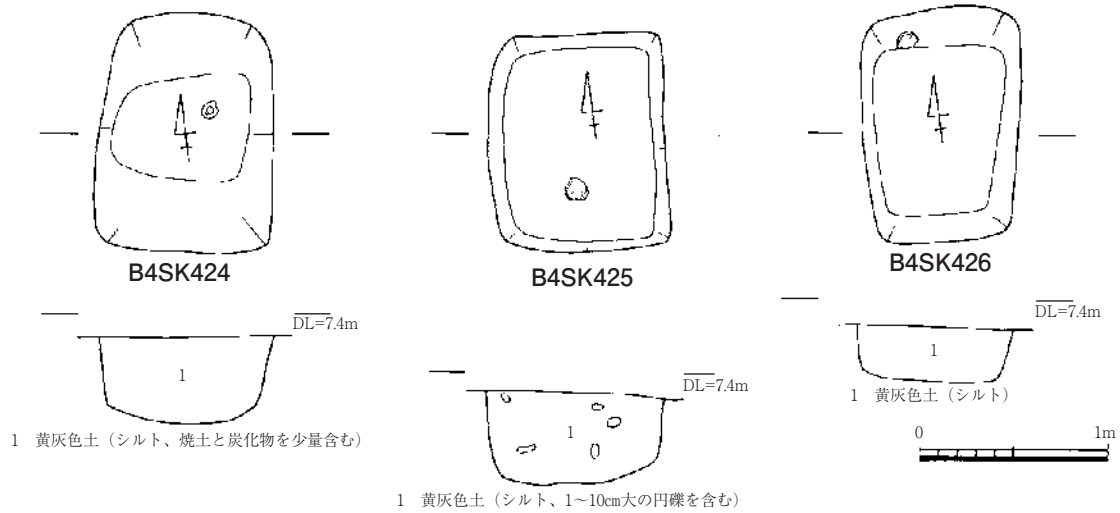
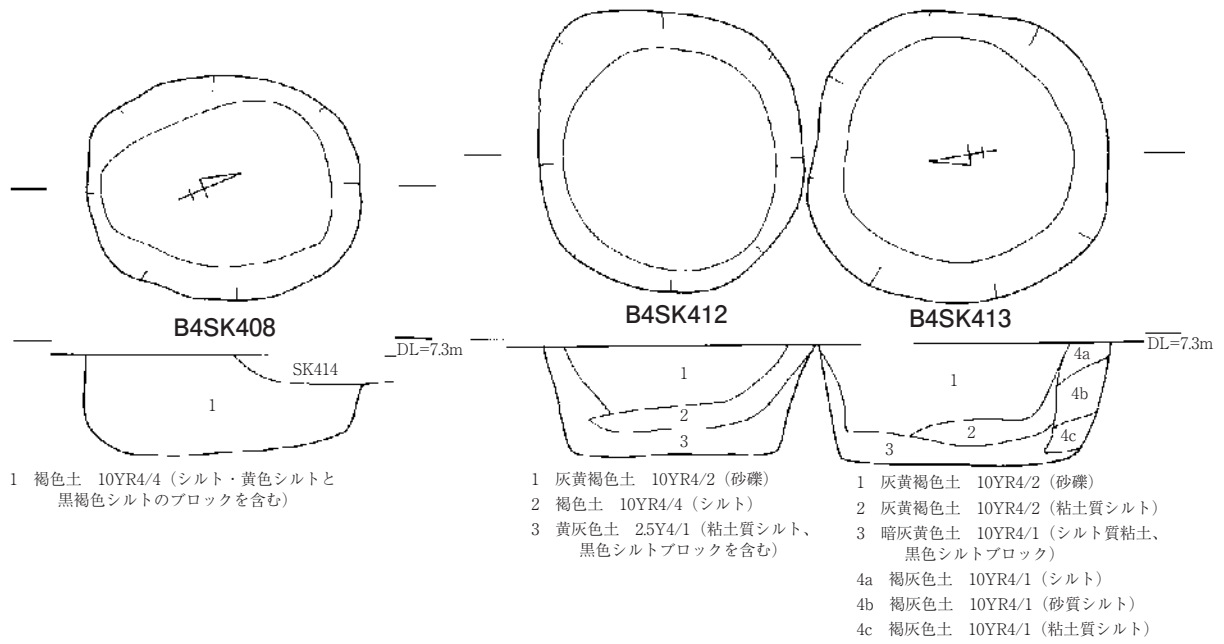
B4SK469 (B4-32図)

時期：15C 形状：長方形 主軸方向：N-6°-E

規模：3.16×1.92m 深さ0.10m 断面形態：箱形

埋土：灰黄褐色シルト

付属遺構：なし 機能：不明



B4-31図 B4SK408・412・413・424~426
(B4SK408 : 1・2, B4SK413 : 3, B4SK424 : 4, B4SK425 : 5, B4SK426 : 6・7)

出土遺物；陶器（口縁部－備前焼甕1）

所見；調査区北部に位置する浅い大型長方形の土坑で、北西端を近世のB4SK470によって切られている。土器は埋土中より、間壁編年Ⅳ期の備前焼甕（9）が出土している。

B4SK479（B4-32図）

時期；16C末 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-74°-W

規模；0.90×0.54m **深さ**0.08m **断面形態**；箱形

埋土；褐灰色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁部－瀬戸美濃産灰釉小皿1）

所見；調査区中央部に位置する浅い小型長方形の土坑で、弥生のB4SD418を切っている。遺物は埋土中より瀬戸美濃産の灰釉折縁削ぎ皿（6）が出土している。

B4SK513（B4-32図）

時期；中世～近世初頭 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-18°-E

規模；2.50×残存2.10m **深さ**0.50m **断面形態**；皿状

埋土；暗灰褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；青花（底部－碗1）、染付（体部－中碗1）、石器（砥石1）

所見；調査区中央部に位置する土坑で、時期不明のB4SK519を切り、近世のB4SK512・B4SD406に切られる。B4SK513埋土下層には人頭大の円礫が多量に廃棄される。図示したものは、景德鎮窯系青花碗（3）で、見込みに如意頭の組み合わせ文様を描く。

B4SK541（B4-32図）

時期；中世 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-13°-E

規模；0.65×0.52m **深さ**0.20m **断面形態**；皿状

埋土；暗褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；埋め甕遺構

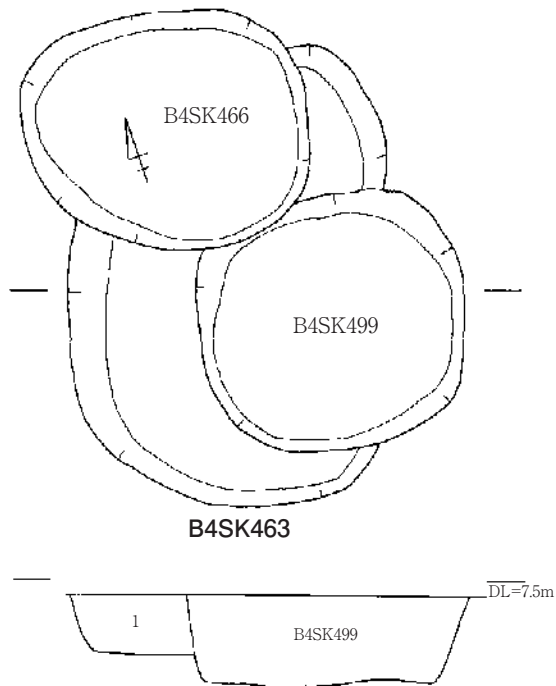
出土遺物；陶器（体部～底部－備前焼甕1）

所見；調査区東部に位置する埋め甕を伴う土坑で、弥生のB4SR401上面を切っている。B4SK541内には備前焼甕の底部から胴部片が出土するが、上半部は失われている。この他、片面中央に打痕を伴う径35cm大の割られた扁平な大型礫が床面から出土している。

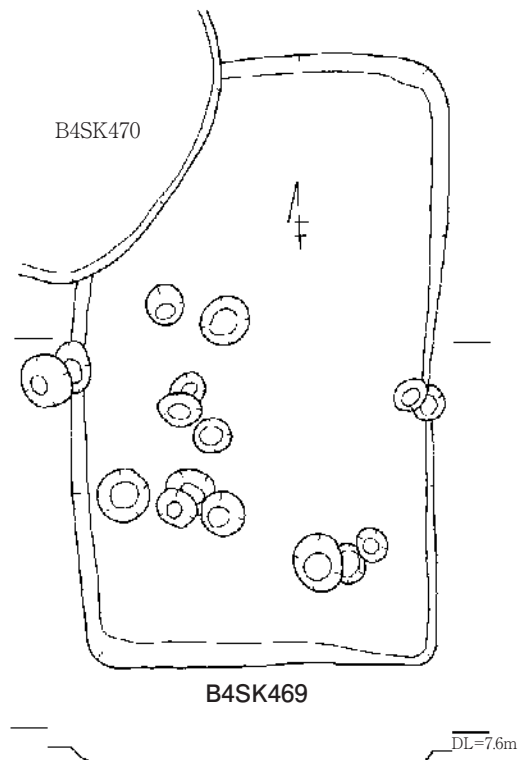
B4SK585（B4-33図）

時期；中世16C末 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-80°-W

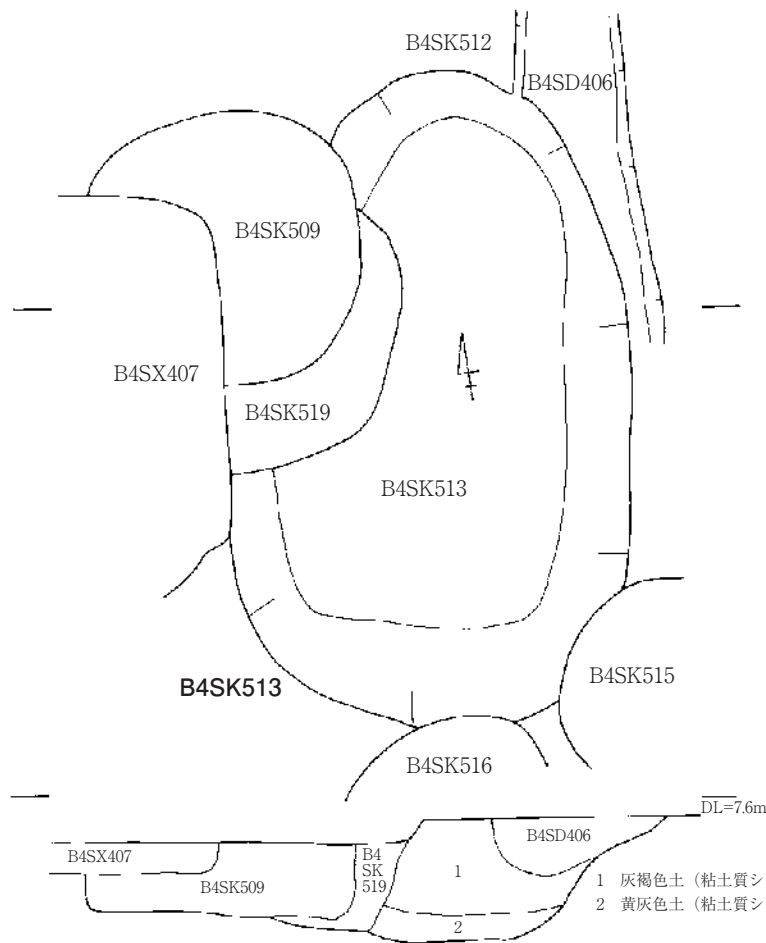
規模；2.06×1.26m **深さ**0.28m **断面形態**；皿状



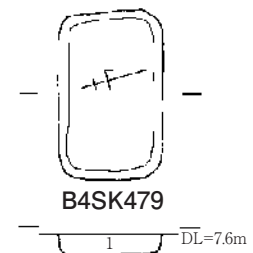
1 灰黄褐色土 10YR5/2 (粘土質シルト・黄色シルトブロックを多く含む)



B4SK469

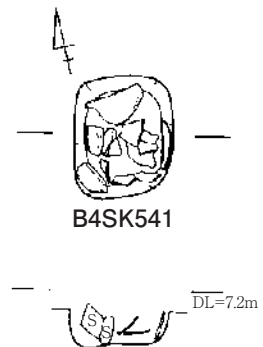


1 灰褐色土 (粘土質シルト)
2 黄灰色土 (粘土質シルト)



B4SK479

1 褐灰色土 10YR4/1 (シルト・暗褐色シルトブロックを少量含む)



B4SK541



B4-32図 B4SK463・469・479・513・541

埋土；灰黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；青花（口縁部－皿1）土師質土器（口縁部－茶釜1、底部－杯1）

所見；調査区西部に位置する楕円形皿状の土坑で、弥生のB4SD420、中世のB4SK587を切り、B4P4205に切られる。埋土中から漳州窯系青花（2）、土師質土器杯（7）、土師質土器茶釜（8）が出土している。2は外面に列点文と芭蕉葉の変形文様を描く。

B4SK587（B4-33図）

時期；中世15C **形状**；不明 **主軸方向**；不明

規模；残存0.36×0.96m **深さ**0.20m **断面形態**；皿状

埋土；褐灰色砂礫

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；青磁（口縁部－碗1）

所見；調査区西部に位置し、弥生のB4SD420を切り、中世のB4SK585に切られる。埋土中より青磁碗の口縁部（4）が出土している。4は龍泉窯系青磁碗で、外面に片切り彫りによる蓮弁文を描く。

B4SK597（B4-33図）

時期；中世 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-13°-E

規模；1.74×1.12m **深さ**0.36m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；青磁（口縁部－碗1）

所見；調査区南部に位置し、時期不明のB4SK476、近世初頭のB4P4103に切られる。遺物は外面にヘラ彫りによる蓮弁文を描く龍泉窯系青磁碗（5）が出土している。

B4SS401（IBB4SK448）（B4-34図）

時期；中世末 **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-77°-E

規模；4.74×1.30m **深さ**0.28m **断面形態**；皿状

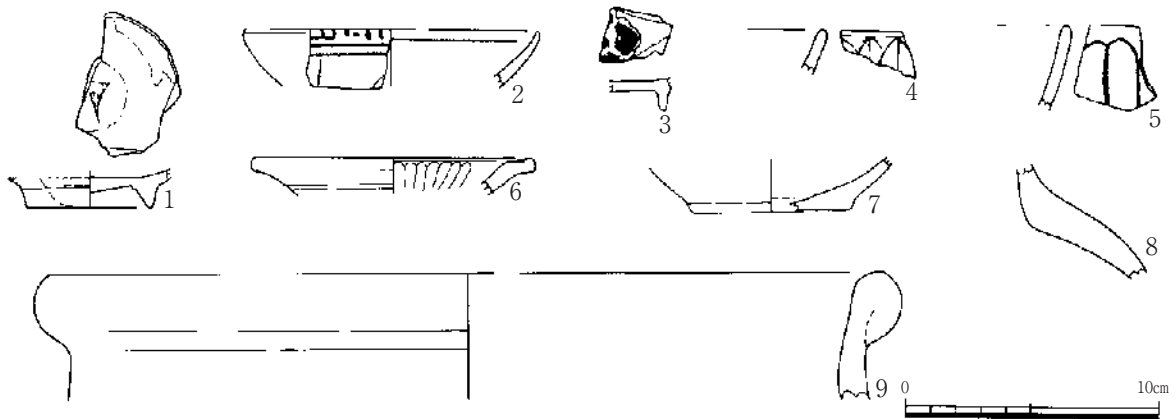
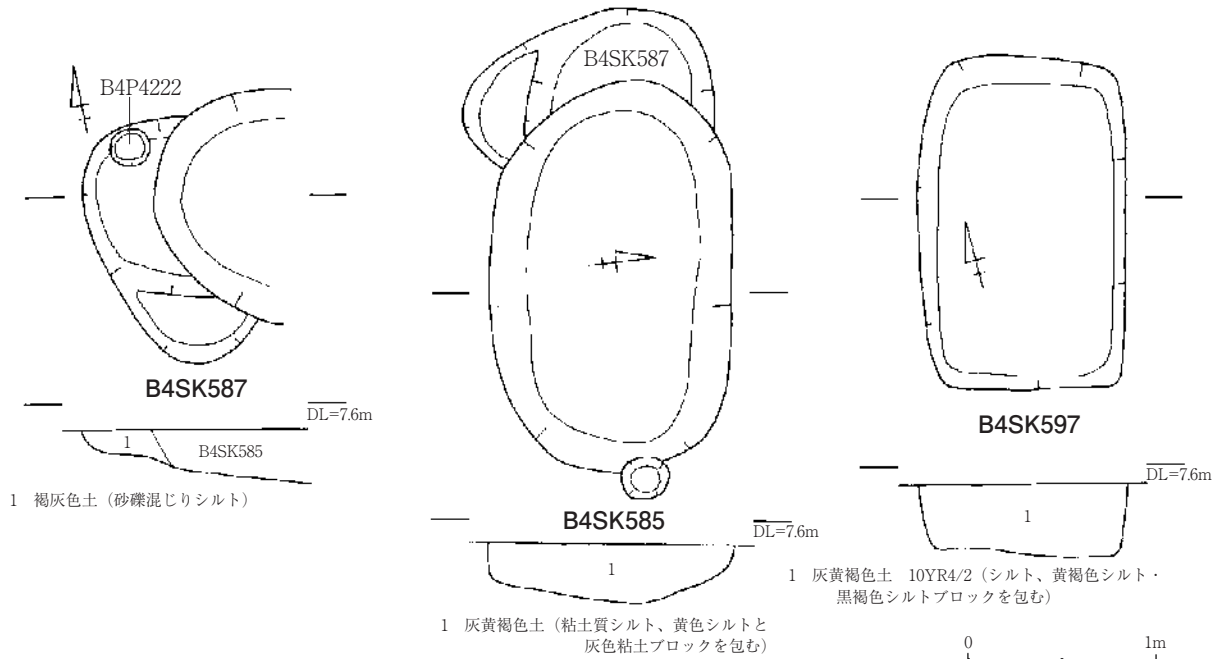
埋土；褐灰色シルト

付属遺構；なし **機能**；環濠廃絶に伴う礫一括廃棄

出土遺物；土師質土器（口縁部－鍋1）

所見；調査区東部の北端に位置する。B4SS1は中世末まで機能した中世屋敷地の区画溝B4SD405の北西角部にあたっており、B4SD405埋土中層に拳大から人頭大の円礫が楕円形の浅いまとまりをなして多量に投げ込まれているものである。この区画溝は調査B1区側の北東コーナー部（B1SD105）においても同様の円礫廃棄が認められることから、本集石も同様の溝埋め戻しに伴う礫と遺物の一括廃棄として捉えられる。

遺物は礫間に混じって、16世紀後半から末頃に比定される土師質土器鍋 (3) が出土しているが、B4SD405の廃絶年代も考え合わせ、B4SS401は中世末から近世初頭頃のものとして捉えておきたい。



B4-33 図 B4SK585・587・597 (B4SK463 : 1、SK585 : 2・7・8、SK587 : 4、SK597 : 5)

(2) 溝跡

B4区では調査東部区を縦横に走る中世の区画溝B4SD103とB4SD405を検出した。これらは南北溝でN-10°-E、東西溝でN-80°-Wという軸方向を保っており、これら二重の溝によって中世屋敷地Aが区画される。このうち、外溝B4SD105は隣接するB1区のB1SD405に、内溝B4SD103はB1SD406に連続する。

B4-5表 B4区中世溝一覧

遺構名	長さ×幅×深さ(m)	断面形	主軸方向	接続	時期	備考
B4SD403	38.00×0.68×0.34	U字状	N-80°-W、N-10°-E	B1SD106	15~16C	区画溝
B4SD405	24.00×1.28×0.22	皿状	N-80°-W	B1SD105	15~16C	区画溝

B4SD403 (B4-34図)

時期：中世15~16C **方向**：東西溝N-80°-W、南北溝N-10°-E

規模：幅0.68m 深さ0.34m **断面形態**：U字状

埋土：灰黄褐色シルト

床面標高：東端部6.83m、南端部6.89m、西角部6.89m

接続：B1SD106

出土遺物：土師質土器（口縁部-鍋1、底部-小皿1）、瓦質土器（体部-碗2）、陶器（底部-播鉢1）、青磁（口縁部-碗1、体部-2）

所見：調査区東部を東西方向と南北方向に延びる中世屋敷地の区画溝である。確認長38m。調査B4区以東ではB1区のB1SD106に連続し、同一の区画溝となる。また、B4SD403の外側には大溝B4SD405が並行して巡っており、本B4SD403は二重の区画溝によって囲まれた中世屋敷地の内溝にあたる。切り合い関係では、弥生のB4ST401・408・409・B4SK551、中世15Cの土坑墓B4SK424・425・426を切り、近世17C後半のB4SK430、近世墓B4SK530、427、近代のB4SK420・B4SX404、時期不明のB4SK429に切られる。

断面形態はU字状で、溝が直角に方向を変える北西端のコーナー部分は僅かに溝幅が拡張されている。埋土は灰黄褐色シルトであり下層への砂の堆積は認められない。

出土遺物は土師質土器鍋、外底に回転糸切り痕を残す土師質土器小皿、瓦器碗、備前焼播鉢、龍泉窯系青磁碗である。龍泉窯系青磁碗は3点が出土しており、細線刻によるもので蓮弁幅の広いタイプが2点、蓮弁幅が著しく狭まり先端部を山形に連続させて描くタイプ1点が含まれる。また、備前焼播鉢は16C代に比定されるものである。これらの出土遺物は小破片のものが多く、何れも埋土中から散在して出土したものである。また、中世以外の遺物では弥生土器の混入が多く認められるものの、近世以降の遺物は全く含まれない。

調査B4区以東に連続し同一の区画溝となるB1SD106の遺物内容とも照合させて検討すると、B4SD403はその機能時期を15~16世紀代におくことができる。また、最終的な廃絶時期は16C末から近世初頭の間であり、埋土中に近世段階の遺物が全く認められないことから近世以降引き続き区画

溝として継続利用されることはなく、中世末から近世初頭の間には本屋敷地区画溝は完全に埋没したものとみられる。

B4SD405 (B4-34図)

時期：15～16C 方向：N-80°-W

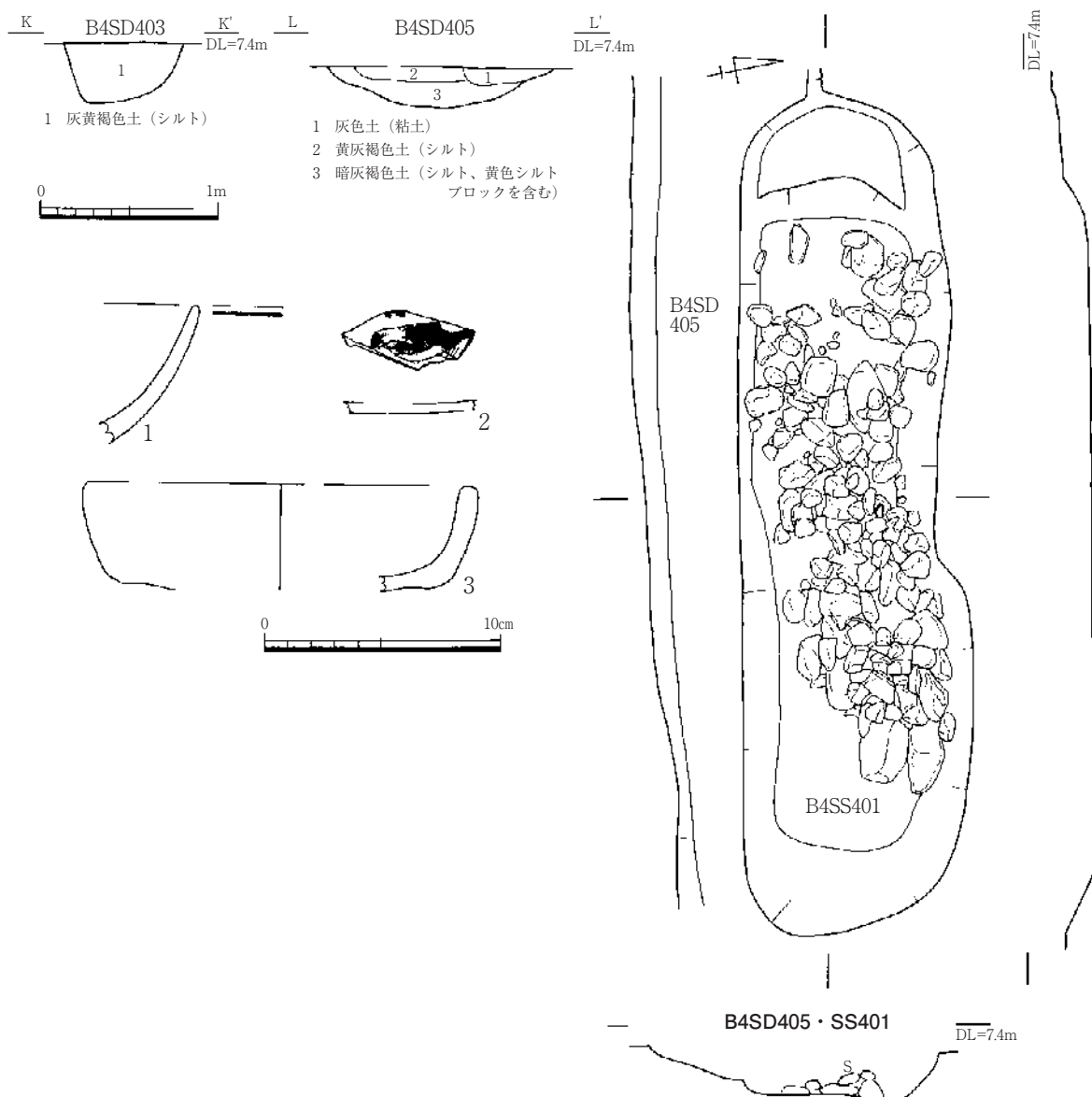
規模：幅1.28m 深さ0.22m 断面形態：皿状

埋土：灰黄褐色シルト・暗灰褐色シルト

床面標高：東端部7.04、西角部7.00m

接続：B1SD105

出土遺物：瓦質土器（細片-碗1）、陶器（体部-壺1）、青磁（口縁部-碗1）、青花（細片-皿1）



B4-34図 B4SD403・405・SS401 (B4SD405: 1・2, SS401: 3)

所見：調査区東部を東西方向に延びる中世屋敷地の区画溝である。確認長24m。SD405はおそらく北西端のコーナー部分から方向を変え、南北方向の溝に続いていたものと考えられるが、南北溝は近世以降の区画溝の削平を強く受け残存しない。調査B4区以東ではB1区のB1SD105に連続し、同一の区画溝となる。また、B4SD405の内側には溝B4SD403が並行して巡っており、本B4SD405は二重の区画溝によって囲まれた中世屋敷地の外溝にあたる。切り合い関係では、弥生前期のB4SD419、弥生後期のB4ST408・409を切り、上面を近現代の区画溝（攪乱406）によって削平される。

埋土は灰黄褐色シルト・暗灰褐色シルトで、砂層の堆積は認められない。また、西角コーナー部内壁際の床面には、集石(B4SS401)が存在する。B4SS401は拳大から人頭大の円礫の集中が長さ約4.7m幅1.5mの長楕円形のまとまりをなして検出されたもので、同様の集石は北東端コーナー部(B1SD105)においても認められている。この礫間に混じって、16世紀後半から末頃に比定される土師質土器鍋(3)が出土しているが、B4SD405廃絶年代も考え合わせ、B4SS401は中世末から近世初頭頃のものと考えられる。

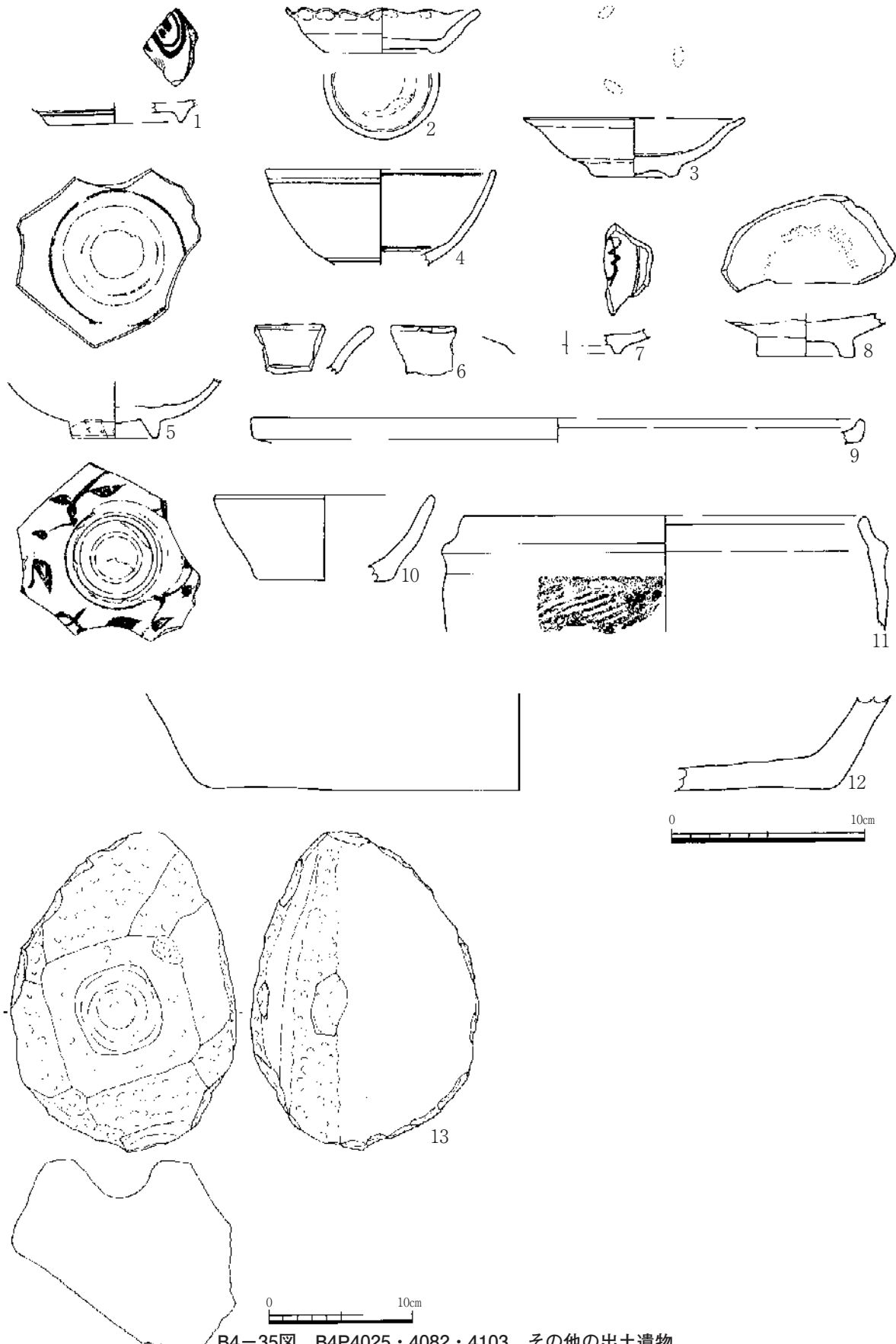
出土遺物は瓦質土器碗、備前焼壺、龍泉窯系青磁碗、景德鎮窯系青花皿、土師質土器鍋である。このうち土師質土器鍋(3)は集石SS401の礫間に混じって出土したもので、その他は、何れも埋土中より散在して出土したものである。また、中世以外の遺物では弥生土器の混入が多く認められるものの、近世以降の遺物は全く含まれない。

図示したものは青磁碗(1)、青花皿(2)、土師質土器鍋(3)である。龍泉窯系青磁碗(1)は口縁部外面に沈線を施すもので釉はオリーブ灰色に発色する。2は薄手の作りで、内面に花鳥文を描き呉須は青色に発色するものである。土師質土器鍋(3)は16世紀後半から末頃に比定される。

調査B4区以東に連続し同一の区画溝となるB1SD105の遺物内容とも照合させて検討すると、B4SD405はその機能時期を15～16世紀代におくことができる。また、最終的な廃絶時期は16C末から近世初頭の間であり、埋土中に近世段階の遺物が全く認められないことから近世に引き続き区画溝として継続されたとは考え難く、中世末から近世初頭の間には本屋敷地区画溝は完全に埋没に至ったものとみられる。

(3) ピット・土坑出土遺物とその他の遺物 (B4-35図)

ここには、中世のピット出土遺物(1～3)、土坑出土遺物(10～13)、及び近世遺構への混入の遺物(4～9)を図示している。図示したものは、景德鎮窯系青花(1)、漳州窯系青花(5・4)、青花(7)、龍泉窯系青磁(6・9)、瀬戸・美濃産陶器皿(2)、肥前産陶器皿(3・8)、備前焼甕(12)、土師質土器杯(10)、播磨型鍋(11)、五輪塔(13)である。花崗岩製の五輪塔(13)は破損し、砥石として転用されている。



B4-35図 B4P4025・4082・4103、その他の出土遺物

(P4025:2, P4082:1, P4103:3, SK452:6, SK497:7・8, SK510:10~12, SK515:4, SK565:9, SK575:13, SX403:5)

5. B4区近世以降の遺構と遺物

(1) 土坑・性格不明遺構

近世から近・現代の土坑は103基を確認した。この中には、大型の遺物廃棄土坑B4SK442、貯蔵施設として機能したとみられる埋め桶痕跡をもつ円形土坑（B4SK454・495・497・507）、及びハンダ土坑（B4SK418・419・420・435・452・471・483・542・582）等が含まれる。又、近世墓21基は、調査区北部と中央部に展開しており、墓群を構成している。

この他、調査区南東部では昭和期の防空壕跡B4SX402が検出されている。

※B4-6表 B4区近世土坑等一覧表は、別添CDに収録

B4SK406（B4-36図）

時期；近世18C末～19C 形状；不整形 主軸方向；—

規模；1.36×1.30m 深さ0.17m 断面形態；箱形

埋土；にぶい黄褐色シルト・灰色シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；陶胎染付（底部-碗1）、陶器（口縁部-灯明皿1）

所見；調査区東部に位置し、弥生のB4SR401を切る。遺物は埋土中より瀬戸美濃産の陶胎染付広東形碗、尾戸焼の可能性をもつ灰釉灯明皿（1）が出土している。

B4SK407（B4-36図）

時期；近世 形状；長方形 主軸方向；N-78°-W

規模；1.48×0.82m 深さ0.17m 断面形態；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；陶器（完形-皿1）、土師質土器（口縁部-焙烙1）

所見；調査区東部に位置し、弥生のB4SR401を切る。遺物は埋土中より讃岐岡本系焙烙（3）、鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿が出土している。

B4SK427（B4-36図）

時期；近世19C 形状；長方形 主軸方向；N-12°-E

規模；2.31×1.08m 深さ0.28m 断面形態；逆台形

埋土；灰色シルト

付属遺構；なし 機能；不明

出土遺物；白磁（口縁部-碗1）、染付（口縁部-碗2）、土師質土器（体部片-土人形1）

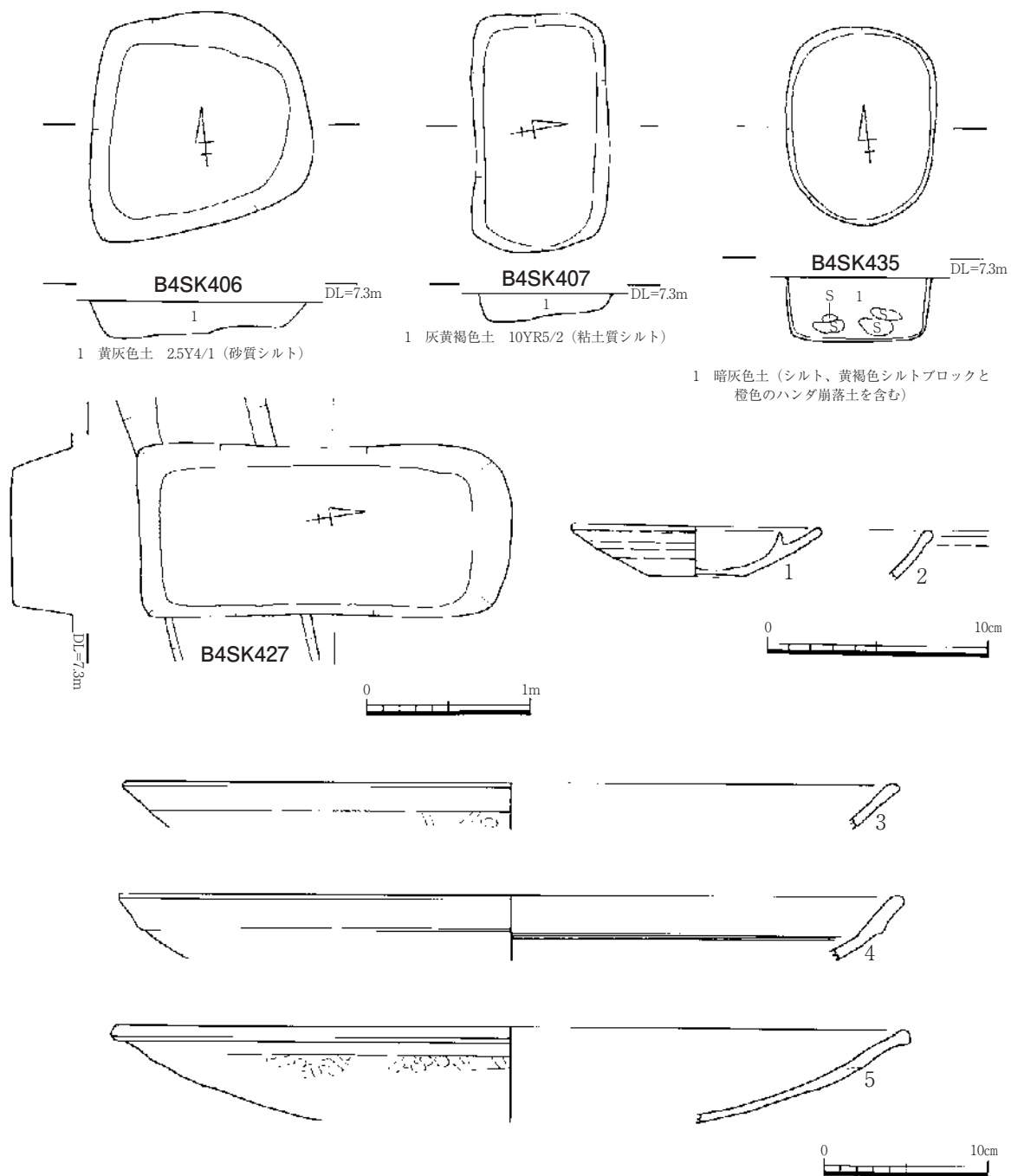
所見；調査区東部に位置する土坑で、弥生のB4ST408、中世のB4SD403、近世のB4SD402を切り、攪乱405に切られる。遺物は染付広東形碗、能茶山産の可能性をもつ染付端反形碗、口縁部下までを

外型成形する焙烙(4)、土人形未製品、中世包含層からの混入とみられる白磁碗森田分類Ⅱ類(2)が出土している。

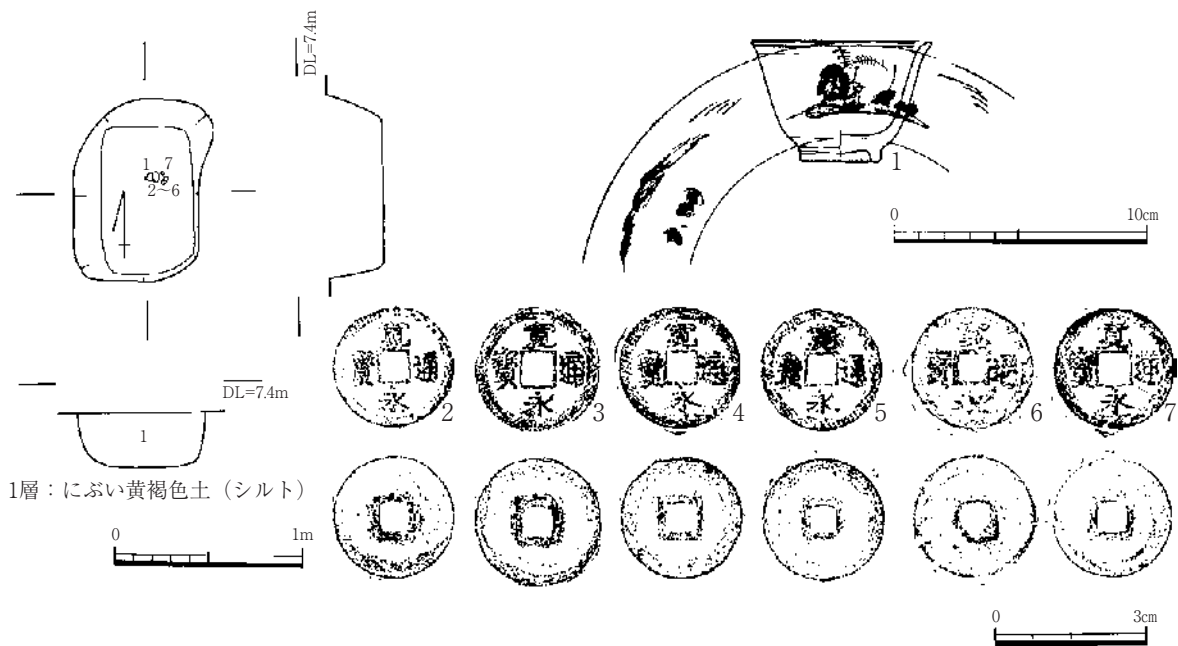
B4SK430 (B4-37図)

時期；近世 17C後半 形状；長方形 主軸方向；N-3°-E

規模；0.96×0.66m 深さ；0.29m 断面形態；皿状



B4-36図 B4SK406・407・427・435 (B4SK406：1, SK407：3, SK427：2・4, SK435：5)



B4-37図 B4SK430

埋土：にぶい黄褐色シルト

付属遺構：なし **機能：**近世墓

出土遺物：磁器染付（完形-小杯1）、古銭（寛永通宝6）

所見：調査区中央部に位置する近世墓で、弥生のB4SD411、中世のB4SD403を切り、近世のB4SK429・B4SD402に切られる。また、B4SK430の北側には近世墓B4SK530が近接しており、両者が同じ墓群を形成するものとみられる。遺物は床面中央部から染付小杯（1）、5枚重ねと1枚を組にした寛永通宝6点が出土している。図示したものは肥前産17C後半の染付山水文小杯（1）、寛永通宝（2～7）である。

B4SK435（B4-36図）

時期：近世19C～近代か **形状：**楕円形 **主軸方向：**N-12°-E

規模：1.20×0.90m **深さ：**0.38m **断面形態：**箱形

埋土：暗灰色シルト

付属遺構：なし **機能：**貯蔵施設（ハンダ土坑）

出土遺物：白磁（口縁部-猪口1）、磁器染付（底部-碗1）、陶器（完形-壺1、底部-甕1）、土師質土器（口縁部-焙烙1）

所見：調査区南部に位置するハンダ土坑で、弥生のB4SD421を切る。B4SK435は壁面に橙色粘土を叩き締めたハンダ枠が残存し、埋土中にはハンダ枠崩落に伴う橙色粘土ブロックと円礫が混じる。遺物は埋土中より染付広東形碗、白磁猪口、鉄釉小壺、鉄釉甕、讃岐岡本系焙烙（5）が出土している。

B4SK442 (B4-38~45図)

時期；近世末～明治初頭 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-72°-W

規模；6.70×2.22～1.30m **深さ**0.39～1.09m **断面形態**；U字状

埋土；灰色粘土

付属遺構；なし **機能**；廃棄土坑

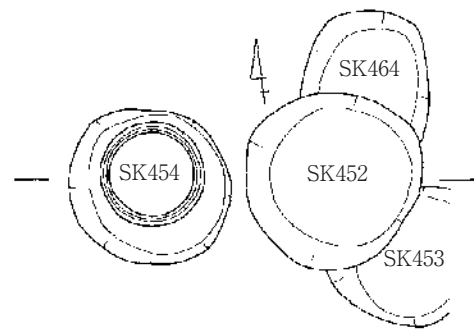
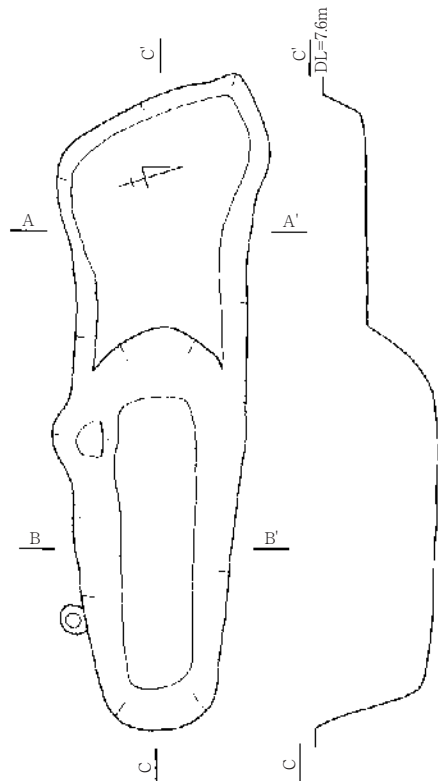
出土遺物；磁器染付（口縁部-中碗24・小碗小杯7・中皿1・小皿21・鉢1・猪口4・碗蓋2・蓋物蓋1・水注1、底部-瓶1）、白磁（口縁部-薄手小杯12）、磁器色絵（口縁部-小杯7）、磁器銅板転写（口縁部-小杯12）、陶器（口縁部-中碗1・小碗1・小皿16・片口2・捏鉢2・播鉢5・行平3・土瓶3・急須2・壺2・甕4・德利2・瓶1・灯明皿2、底部-中碗2・小皿1・瓶1）、土師質土器（口縁部-かわらけ1・焙烙6・涼炉4）、瓦質土器（口縁部-底部-火鉢4）、瓦（コンテナ2箱）

所見；調査区南部に位置する大型の廃棄土坑で、弥生中期～後期のB4SD420・421を切る。B4SK442は西半分が浅いテラス状をなし、東半分が深く落ち込むという床面構造をなすが、西部・東部間で出土遺物の接合が成り立つことから、遺物の一括廃棄と埋め戻しが行われたものと考えられる。

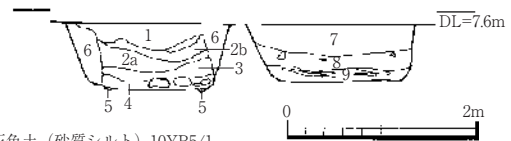
磁器では、能茶山産染付端反形碗（3）、肥前産・肥前系の端反形碗（1・2・4）が出土している。出土した染付中碗は全て端反形であり、確認できた24個体のうち5点（1・2）が酸化コバルトを使用する明治期以降のものであった。また、これらの碗については5点組とみられる揃いのもの（1・2）が含まれている。この他、瀬戸美濃産の染付小杯（6）、染付の肥前系端反形小碗、型作りによる白磁の薄手酒杯、色絵小杯（5）、色絵酒杯、薄手酒杯、肥前系の丸形小杯、能茶山産の中皿（7）、能茶山産の輪花形小皿、肥前系丸皿、瀬戸美濃産の染付手塩皿（9）・白磁手塩皿（8）、肥前系の染付八角鉢（11）、能茶山産の染付碗蓋（12）、肥前系碗蓋、肥前系猪口（10）、肥前産の蓋物蓋、水注、瓶底部、が出土している。

陶器では、碗（13）、能茶山産の鉄釉小皿（15）・灰釉小皿（14）鉄釉片口（21・22）・鉄釉捏鉢・白濁釉捏鉢・行平鍋（25）・堺産播鉢（24）、尾戸窯産の可能性をもつ灰釉土瓶（18）、土瓶（17・19・20）、土瓶蓋（16）、能茶山産の鉄釉甕（32・34・35）と甕蓋（31）・関西系の鉄釉甕（33）・能茶山産の鉄釉壺、鉄釉砧德利、灰釉德利（28・29）、瓶（30）、油差し、瓶底部、灯明皿（26・27）。また、土器ではかわらけ、土師質土器焜炉（44）、土師質土器涼炉（46～49）、さな（45）、土師質羽釜（42）、土師質に近い軟質焼成の素地に橙色を帯びる透明の低温度釉と白化粧土イッチン掛けによる文様を施す土瓶。瓦質火鉢（43）、炭入れ、讃岐御厩系の焙烙（36～41）、讃岐岡本系焙烙が出土している。

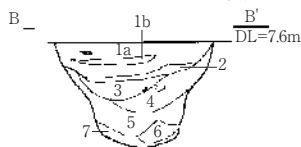
B4SK442の時期については、磁器94個体のうち酸化コバルトや銅板転写を使用する明治期以降の製品が、中碗に5点、薄手酒杯に12点含まれていることから、遺物の一括廃棄は明治初頭頃に行われたものと考えられる。



B4SK454・452

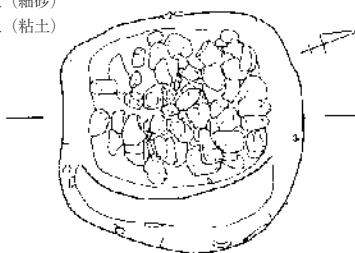
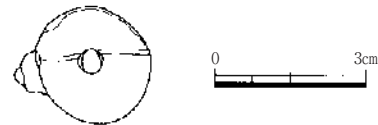


- 1 褐灰色土 (砂質シルト) 10YR5/1
- 2a 灰黄褐色土 (シルト、黄色シルトブロックを少量に含む) 10YR5/2
- 2b 灰黄褐色土 (シルト) 10YR5/2
- 3 褐灰色土 (粘土質シルト) 10YR5/1
- 4 灰黄褐色土 (シルト、黄色シルトブロックを多量に含む、円礫多量) 10YR5/2
- 5 灰色土 (粘土) ※桶痕
- 6 黄色土 (シルト、褐灰色粘土と褐色シルトブロックを多量に含む)
- 7 灰黄褐色土 10YR5/2 (粘土質シルト、黄色シルトブロックを多量に含む)
- 8 灰黄褐色土 10YR5/2 (粘土質シルト)
- 9 灰黄褐色土 10YR5/2 (粘土質シルト、床面に黄色粘土、ハンダが敷かれる)

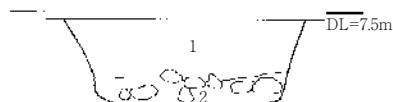


B4SK442

- 1a 灰色土 (シルト、橙色シルトの小ブロックを含む)
- 1b 明黄灰色土 (シルト)
- 2 灰褐色土 (シルト質砂)
- 3 明灰色土 (砂質シルト、黄色シルトブロックを含む)
- 4 暗灰褐色土 (砂質シルト)
- 5 灰色土 (粘土)
- 6 灰色土 (細砂)
- 7 灰色土 (粘土)



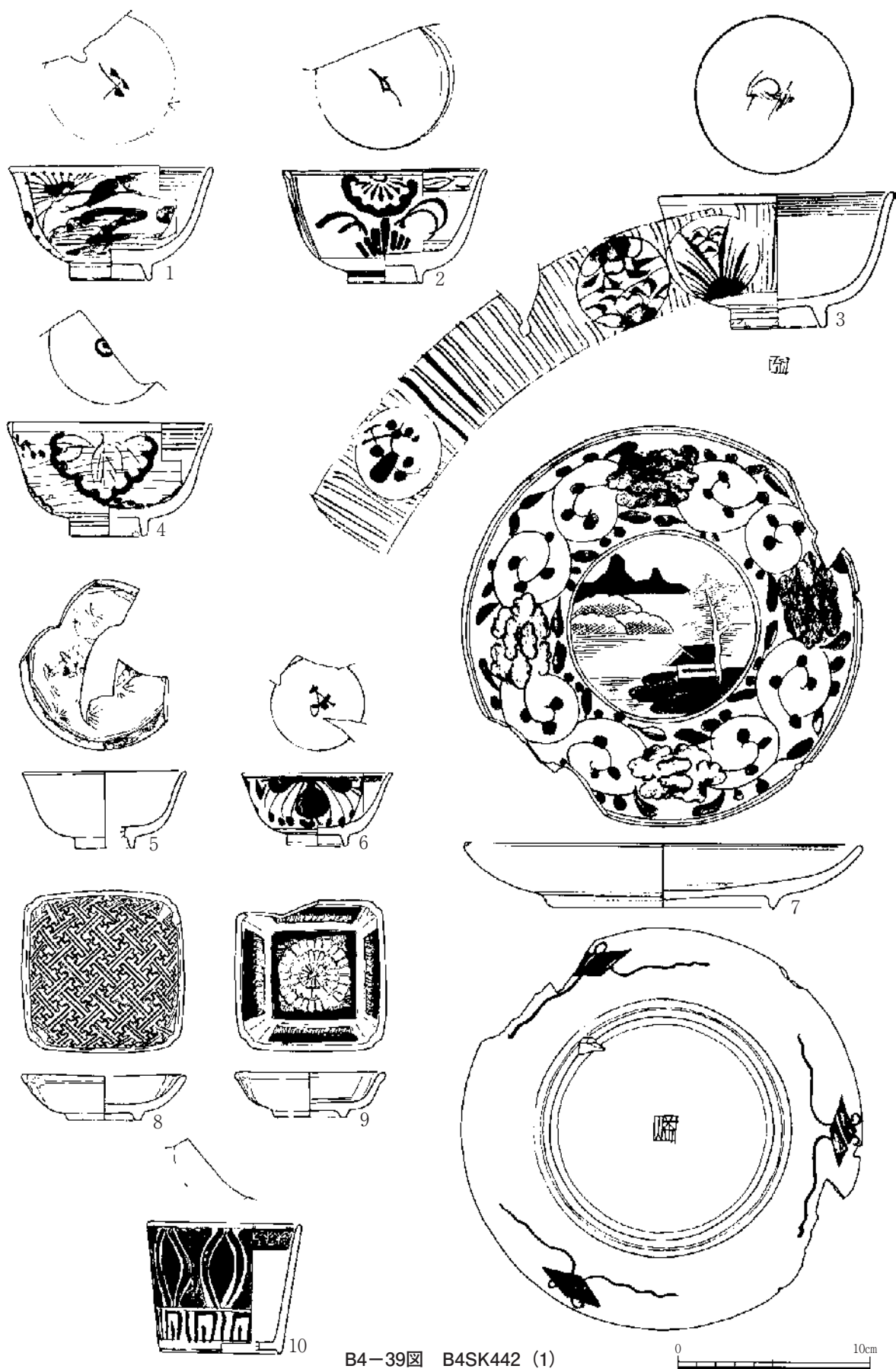
B4SK451



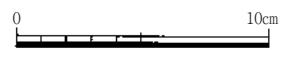
- 1 褐灰色土 10YR4/1 (粘土質シルト、褐色シルトブロックを含む)
- 2 褐灰色土 10YR4/1 (粘土質シルト、円礫を多量に含む)

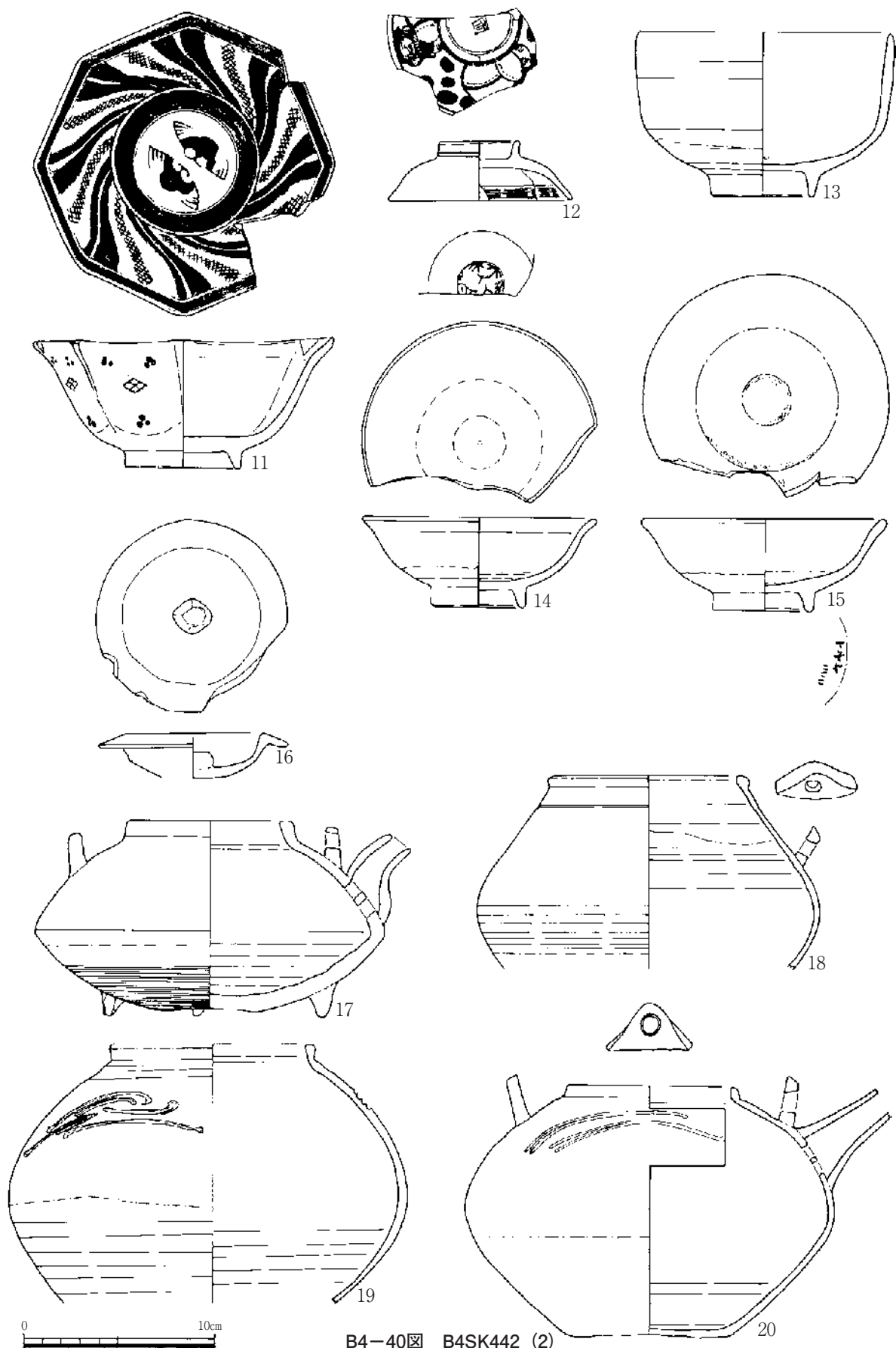


B4-38図 B4SK442・451・452・454 (B4SK454:1)

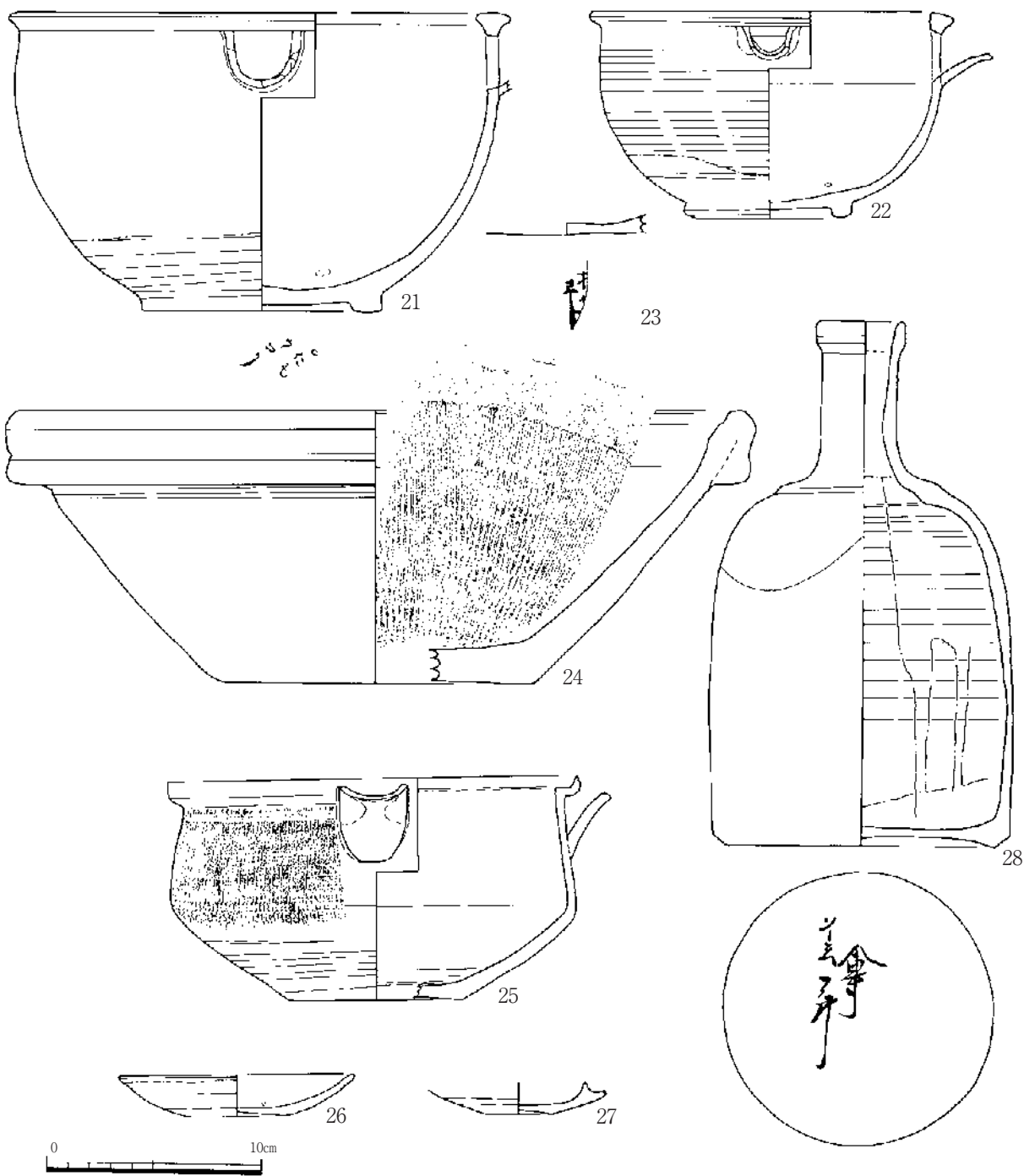


B4-39图 B4SK442 (1)

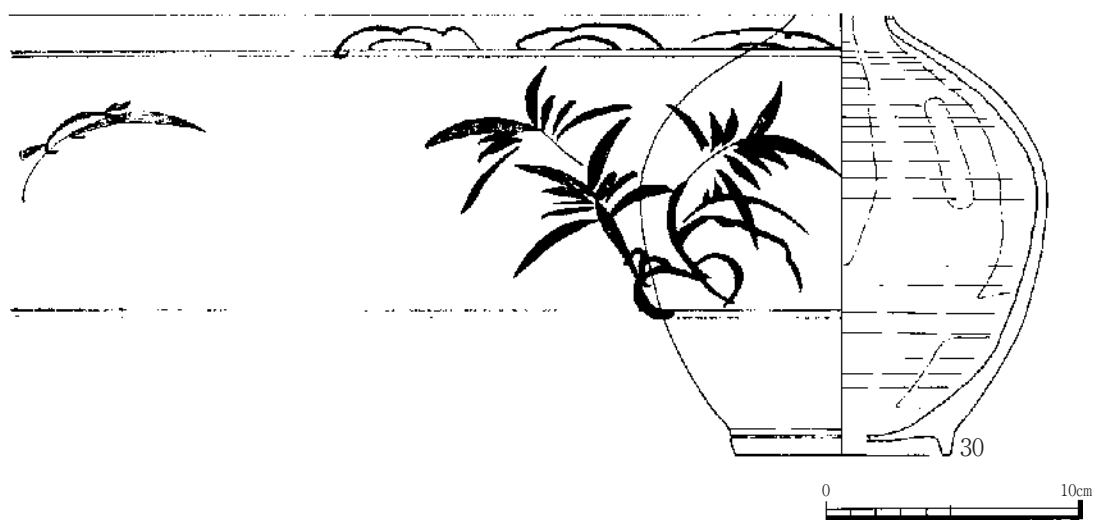




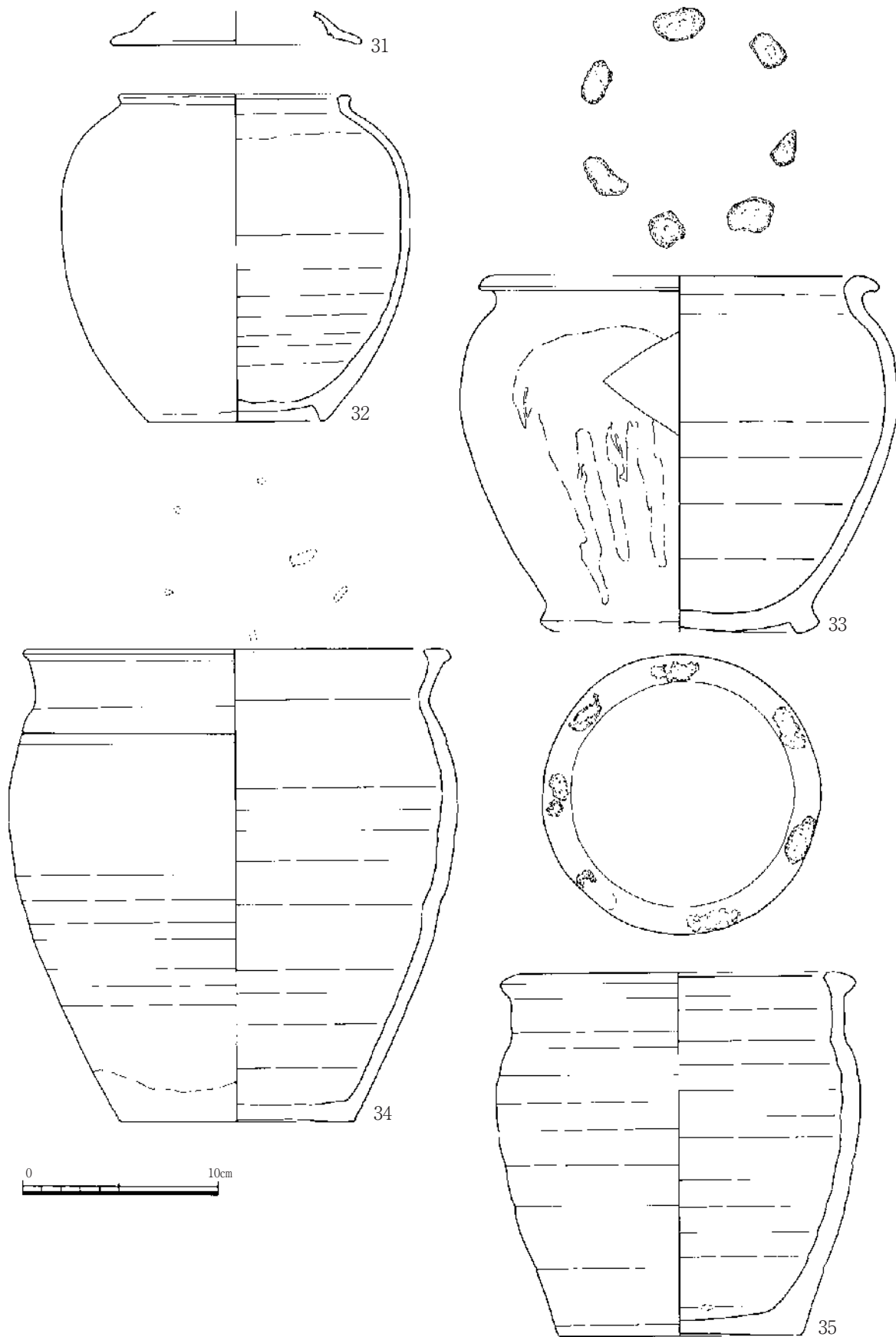
B4-40図 B4SK442 (2)



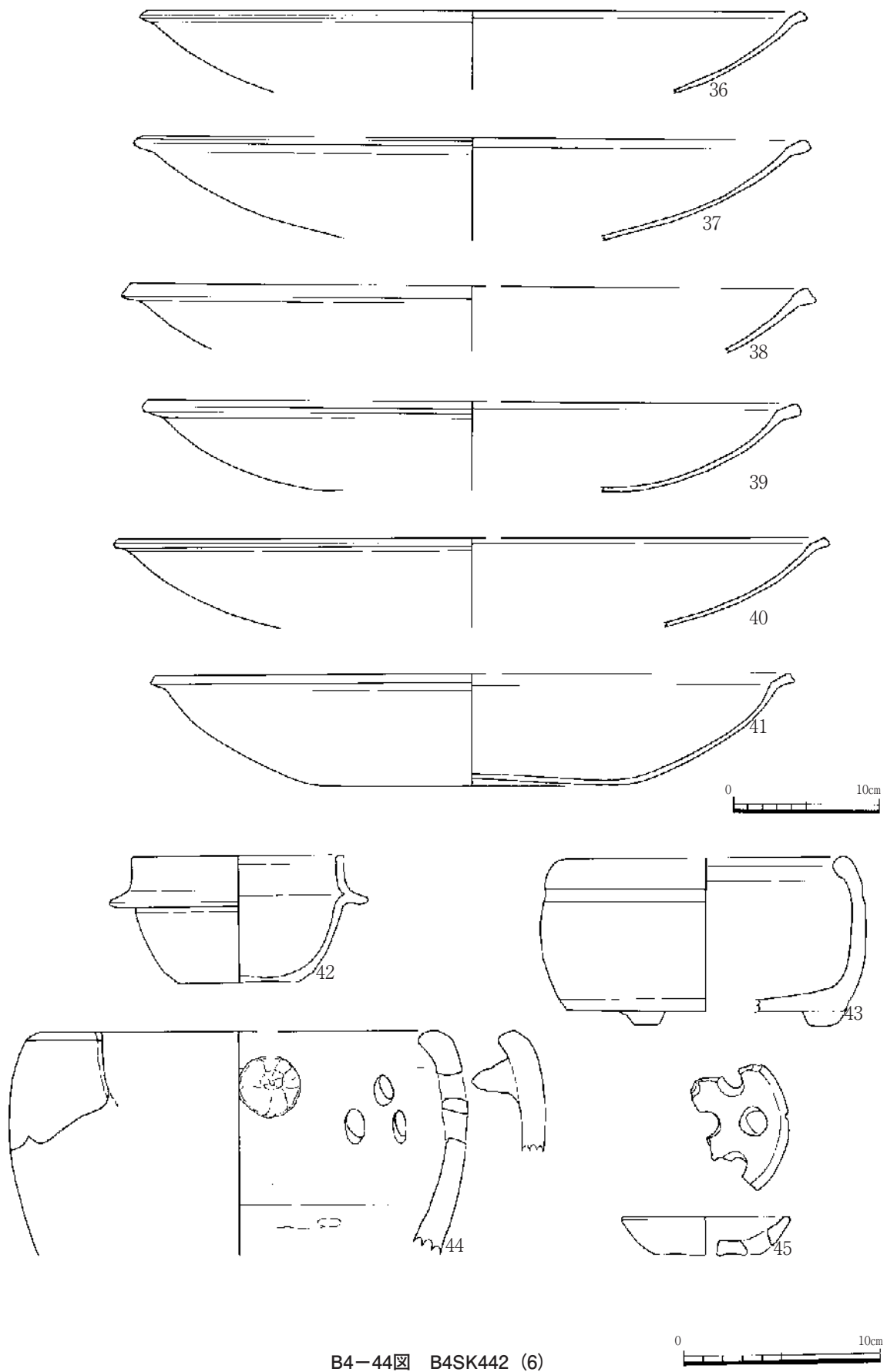
B4-41 図 B4SK442 (3)



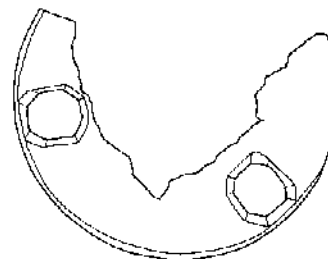
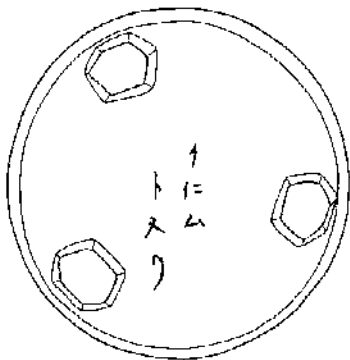
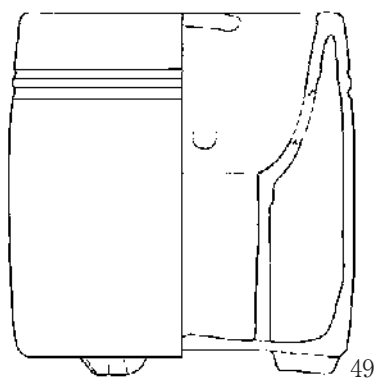
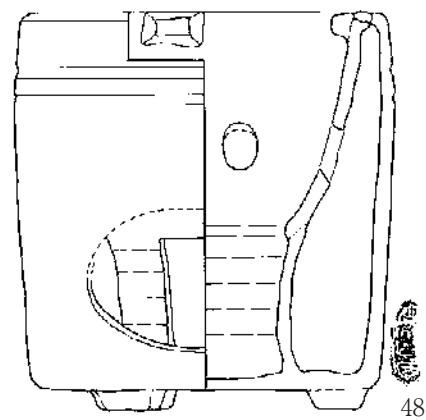
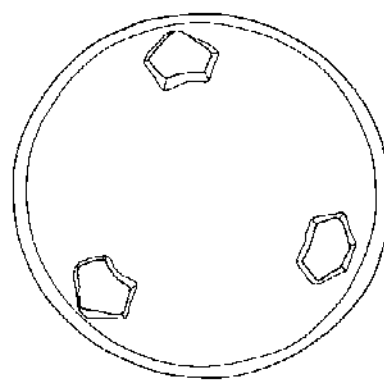
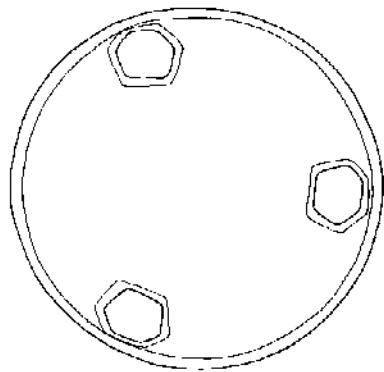
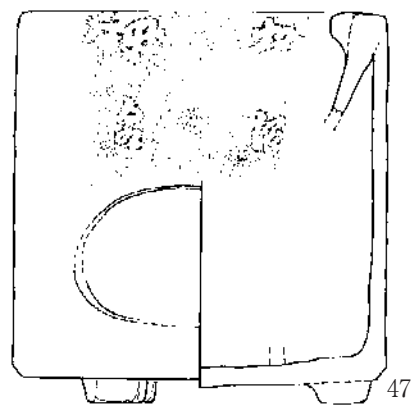
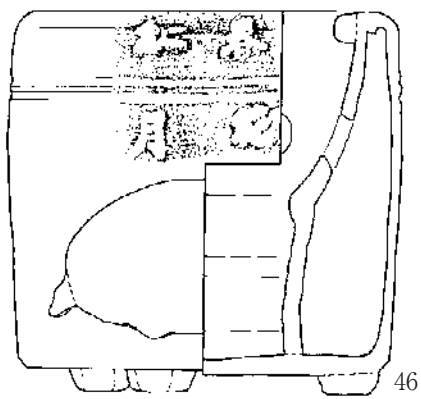
B4-42図 B4SK442 (4)



B4-43图 B4SK442 (5)



B4-44図 B4SK442 (6)



B4-45図 B4SK442 (7)

B4SK451 (B4-38図)

時期；近世 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-70°-W

規模；1.28×1.24m **深さ**0.46m **断面形態**；箱形

埋土；褐灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁～底部-碗1）

所見；調査区南西部に位置する円形のハンダ土坑で、弥生のB4SD421、近世のB4SD409を切っている。床面はほぼ平坦で、東部にテラス状の段を有する。床面から埋土下層にかけては拳大の円礫が多量に廃棄されている。

B4SK452 (B4-35・38図)

時期；近世 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；残存1.54×1.76m **深さ**0.60m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト・暗灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（ハンダ土坑）

出土遺物；磁器染付（口縁部-小皿1）、陶器（口縁部-鉢1）

所見；調査区中央部に位置する円形のハンダ土坑で、時期不明のB4SK464・453を切る。B4SK435は壁面に黄色粘土を叩き締めたハンダ枠が残存し、埋土中にはハンダ枠崩落に伴う黄色粘土ブロックと円礫が混じる。遺物は埋土中から染付小皿、肥前産の刷毛目陶器鉢、中世混入とみられる龍泉窯系稜花形皿（35図6）が出土している。

B4SK454 (B4-38図)

時期；近世18C前半 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.84×1.62m **深さ**0.70m **断面形態**；箱形

埋土；褐灰色砂質シルト・灰黄褐色シルト・褐灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（埋め桶土坑）

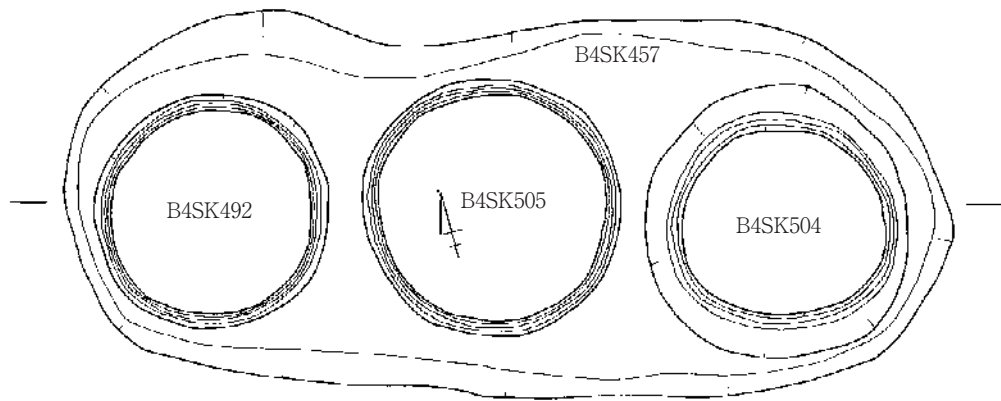
出土遺物；磁器染付（口縁部-小杯1）土師質土器（完形-人形1）

所見；調査区中央部に位置する円形の埋め桶土坑で、時期不明のB4SK455を切る。B4SK454床面においては直径1.1mのリング状をなす灰色粘土化した桶底のプランが検出されており、また、遺構の形状が周辺のハンダ土坑に共通することから、液体物の貯蔵を目的とする一連の貯蔵施設であったと考えられる。遺物は埋土中より、雨降り文と型紙刷りによる花文を描く染付小杯が出土している。また、床面から5cm程浮いた地点から土人形（1）が出土している。

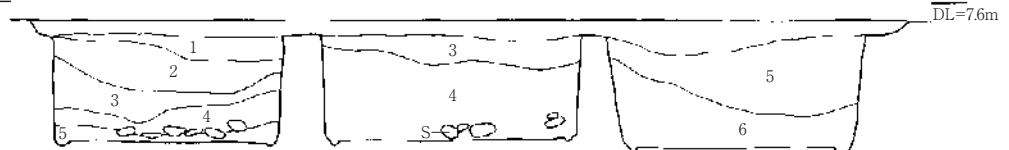
B4SK457 (B4-46図)

時期；近世17～18Cか **形状**；楕円形 **主軸方向**；N-16°-E

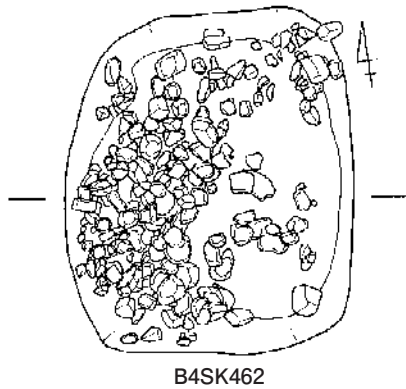
規模；4.68×2.00m **深さ**0.08m **断面形態**；皿状



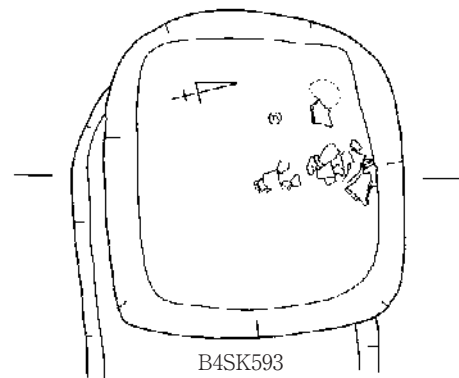
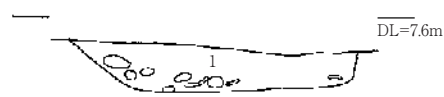
B4SK492・505・504



- 1 暗灰色土 (シルト)
- 2 灰黄褐色土 (粘土質シルト)
- 3 褐灰色土 (粘土質シルト)
- 4 褐灰色土 (粘土質シルト、砂が混じる)
- 5 灰色土 (粘土)
- 3 灰褐色土 (粘土質シルト、灰色シルトブロックを含む)
- 4 褐灰色土 (粘土質シルトと砂礫が混じる)
- 5 灰黄褐色土 (粘土質シルト)
- 6 褐灰色土 (粘土質シルトに粗砂、礫が混じる)



B4SK462



B4SK471



- 1 明灰色土 (粘土質シルト、黄色シルト・褐色シルトブロックを含む)



B4-46図 B4SK457・462・471・492・504・505

埋土：黄灰色砂質シルト

付属遺構：埋桶土坑3基 **機能**：貯蔵施設

出土遺物：なし

所見：調査区中央部に位置する皿状の大型楕円形土坑で、弥生のB4SD411・420・421を切り、近世のB4P4087・P4088に切られる。床面には3基の埋桶土坑SK492・505・504が設けられており、B4SK457は組をなす3基の貯蔵施設の上部構造として機能したとみられる。3基の埋桶土坑が人為的に埋め戻された後、その上面を覆う状態でB4SK457埋土黄灰色砂質シルトが堆積している。

出土遺物はないが、付属施設B4SK504の年代観からみてその廃絶時期は近世17～18C頃と考えられる。

B4SK462 (B4-46・47図)

時期：近世末～明治初頭 **形状**：楕円形 **主軸方向**：—

規模：1.54×1.36m **深さ**0.14m **断面形態**：皿状

埋土：灰黄褐色粘土質シルト

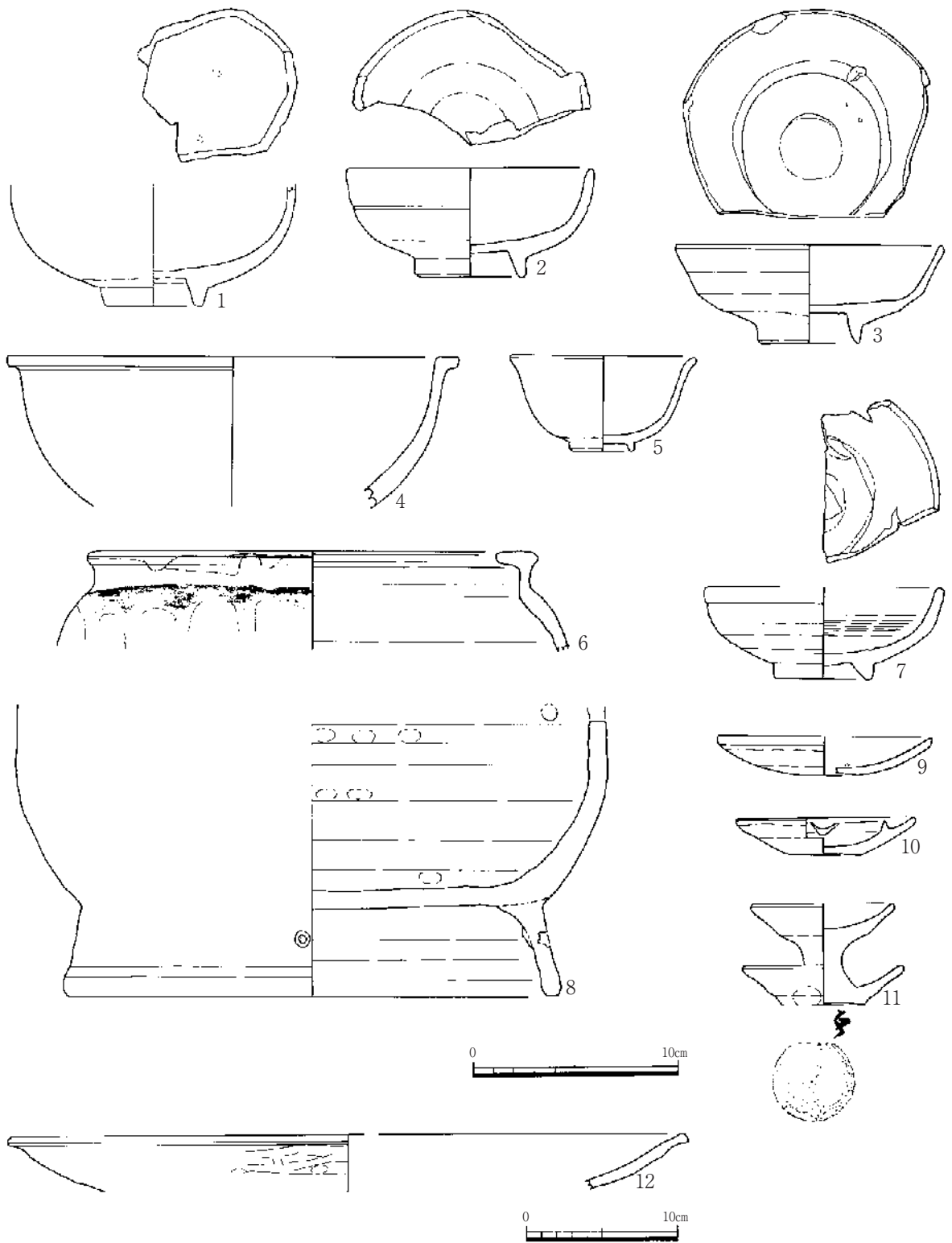
付属遺構：なし **機能**：廃棄土坑

出土遺物：磁器染付（口縁・底部－中碗6・小碗1・皿1・鉢1・仏飯器1・段重1、体部－仏花瓶1）、白磁（口縁・底部－小碗1・小杯1・瓶1）、色絵（口縁・底部－仏花瓶1）、陶器（口縁・底部－碗2・皿3・鉢1・捏鉢2・搦鉢2・急須土瓶蓋2・瓶3・油差し・甕1）、土師質土器（口縁・底部－かわらけ7・火鉢2・焜炉1）、石製品（硯1）、古銭（寛永通宝1）、瓦片

所見：調査区中央部に位置する楕円形土坑で、弥生のB4SX408、古代のB4SD415・近世のB4SD410を切る。B4SK462では下層に多量の円礫が投げ込まれており、礫間より瓦片・陶磁器類が多く出土している。

磁器では、能茶山産の染付端反形碗、瀬戸美濃産の染付小碗、瀬戸美濃産の陶胎染付広東形碗と皿、肥前系の染付広東形碗・鉢・段重・仏飯器、また、17世紀初頭の高台無釉肥前産白磁小杯が出土している。陶器では、尾戸窯または能茶山産の可能性をもつ灰釉碗（1）、能茶山産の灰釉蛇の目釉剥ぎ小皿（2・3）と鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿、能茶山産の白濁釉捏鉢（4）・能茶山産の鉄釉捏鉢、堺産搦鉢、急須蓋、灰釉瓶、丹波産甕、関西系甕、瀬戸美濃産の灰釉油差し、土瓶蓋、瓶類、灰釉灯明皿。土師質土器では土師質火鉢・焜炉、かわらけ。その他、硯、多量の瓦片、寛永通宝が出土している。

本遺構の廃棄遺物群には酸化コバルトや銅板転写等の明治期以降に下る磁器類は認められず陶磁器組成の大半が近世のもので構成されるが、B4SD410との切り合い関係や、円礫・瓦を伴う廃棄の状況がB4SK442等の周辺遺構の廃棄状況に共通する点からみて、周辺遺構とはほぼ同時期に行われた幕末から明治初頭段階の一括廃棄とみるほうが妥当であろう。



B4-47 图 B4SK462 · 471 (SK462 : 1~4, SK471 : 5~12)

B4SK471 (B4-46・47図)

時期；近世末 **形状**；隅丸方形 **主軸方向**；N-72°-W

規模；1.73×1.58m **深さ**0.54m **断面形態**；箱形

埋土；明灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；廃棄土坑

出土遺物；磁器染付（口縁・底部-中碗3・皿1・碗蓋1）、陶器（口縁・底部-小皿1・灯明皿4・播鉢1・甕3）、土師質土器（口縁・底部-かわらけ1・風炉1・焙烙1）、木製品（漆器碗1）、瓦片

所見；調査区北寄りに位置する隅丸方形の土坑で、近世のB4SK593を切る。B4SK471は下層に10～20cm大の円礫が多量に廃棄されており、礫間より瓦片、土器・陶磁器、漆器等が出土している。

図示したものは讃岐岡本系焙烙（12）、灰釉灯明皿（9・10）、能茶山産の鉄釉台付灯明皿（11）、能茶山産の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿（7）、灰釉小杯（5）、染付広東形碗、関西系の鉄釉甕（6）、土師質土器風炉（8）、漆器碗である。この他、肥前系の染付広東形碗、瀬戸美濃産の陶胎染付碗、肥前産染付くらわんか手皿、肥前系染付碗蓋、関西系甕が出土している。

本遺構の廃棄遺物群には酸化コバルトや銅板転写等の明治期以降に下る磁器類は認められず陶磁器組成の大半が近世のもので構成されるが、円礫・瓦を伴う廃棄の状況がB4SK442等の周辺遺構の廃棄状況に共通する点からみて、周辺遺構とほぼ同時期に行われた幕末から明治初頭頃の遺構廃絶と一括廃棄とみるほうが妥当であろう。

B4SK478 (B4-48図)

時期；近世 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.28×1.20m **深さ**0.26m **断面形態**；箱形

埋土；灰色粘土質シルト・灰黄褐色粘土質シルト

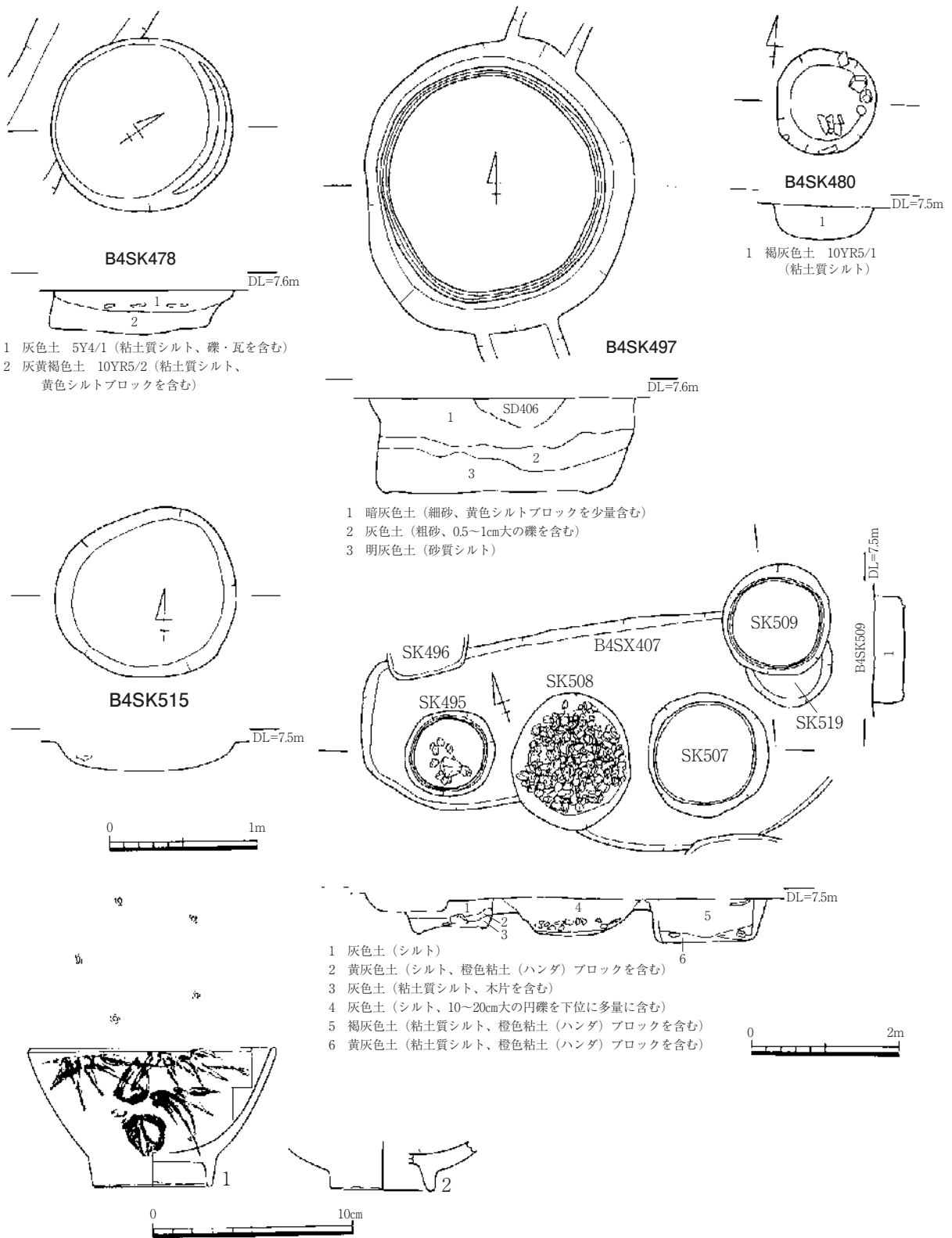
付属遺構；なし **機能**；廃棄土坑

出土遺物；磁器染付（口縁・底部-中碗1、体部-仏花瓶1）、陶器（口縁・底部-碗1・甕1・灯明皿1）、瓦片

所見；調査区北寄りに位置する浅い皿状土坑で、古代のB4SD415、近世のB4SD406を切る。中層には多量の円礫が廃棄され、混じって瓦片、土器・陶磁器類が出土している。

図示したものは肥前系の灰釉呉器手碗（2）である。この他、肥前系の染付端反形碗、肥前産の染付若松文仏花瓶、能茶山産の鉄釉甕、能茶山産の鉄釉台付灯明皿が出土している。

本遺構の廃棄遺物群には明治期以降に下る磁器類は認められないが、B4SD406との切り合い関係や円礫・瓦を伴う廃棄の状況がB4SK442等の周辺遺構の廃棄状況に共通する点からみて、周辺遺構とほぼ同時期に行われた幕末から明治初頭頃の一括廃棄とみられる。



- 1 灰色土 5Y4/1 (粘土質シルト、礫・瓦を含む)
2 灰黄褐色土 10YR5/2 (粘土質シルト、黄色シルトブロックを含む)

- 1 暗灰色土 (細砂、黄色シルトブロックを少量含む)
2 灰色土 (粗砂、0.5~1cm大の礫を含む)
3 明灰色土 (砂質シルト)

- 1 灰色土 (シルト)
2 黄灰色土 (シルト、橙色粘土 (ハンダ) ブロックを含む)
3 灰色土 (粘土質シルト、木片を含む)
4 灰色土 (シルト、10~20cm大の円礫を下位に多量に含む)
5 褐灰色土 (粘土質シルト、橙色粘土 (ハンダ) ブロックを含む)
6 黄灰色土 (粘土質シルト、橙色粘土 (ハンダ) ブロックを含む)

B4-48図 B4SK478・480・495・497・507・508・515 (SK478:2, SK480:1)

B4SK480 (B4-48図)

時期；近世末 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；0.71×0.66m **深さ**0.20m **断面形態**；皿状

埋土；褐灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁・底部－中碗1）、土師質土器（口縁・底部－鍋1）

所見；調査区中央部に位置する浅い円形土坑で、弥生前期のB4ST410、近世のB4SD406を切る。埋土中には円礫が多く廃棄される。図示したものは尾戸窯産の鉄絵笹文灰釉広東形碗（1）である。この他、埋土中より土師質土器鍋が出土している。

本遺構はB4SD406との切り合い関係や円礫を伴う廃棄の状況がB4SK442等の周辺遺構の廃棄状況に共通する点からみて、周辺遺構とほぼ同時期に行われた幕末から明治初頭頃の一括廃棄とみられる。

B4SK492 (B4-46図)

時期；近世17～18C **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.22×1.22m **深さ**0.56m **断面形態**；箱形

埋土；暗灰色シルト・灰黄褐色粘土質シルト・褐灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（埋桶土坑）

出土遺物；弥生土器混入のみ

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、東側に埋桶土坑B4SK505・504が隣接して並んでいる。また、組をなす3基の土坑はB4SK457とする浅い楕円形の掘り込み内に設けられている。B4SK492床面外周には灰色粘土化した木桶底部痕がリング状に検出されることから、埋め桶を伴う貯蔵施設であったものと推察される。また、床面には拳大の礫が多量に廃棄される。さらに、B4SK492上面にはB4SK457埋土である黄灰色砂質シルトが堆積しており、組をなす3基の埋桶土坑が人為的に埋め戻された後にその上面をB4SK457埋土が覆ったものとみられる。

出土遺物は混入の弥生土器片のみであるが、B4SK504の年代観からみてその廃絶時期は近世17～18C頃と考えられる。

B4SK495 (B4-48図)

時期；近世19C **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.24×1.20m **深さ**0.40m **断面形態**；箱形

埋土；灰色シルト・黄灰色シルト・灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（埋桶土坑）

出土遺物；陶器（口縁部－中碗1・捏鉢1）

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、時期不明のB4SX407を切っている。また、東側には埋桶土坑B4SK509が近接し、ハンダ土坑B4SK507・508が隣接して並んでいる。

B4SK495床面では直径1.05mのリング状を呈する灰色粘土化した木桶底部痕が検出され、さらに床面からは板状の木片が出土することから、埋め桶を伴う貯蔵施設であったものと推察される。また、床面には人頭大から拳大の礫が少量廃棄され、下層埋土中にはハンダ土坑に伴うとみられる橙色粘土ブロックが含まれる。B4SK495は床と側面にハンダ壁の痕跡が全く認められないことから、近接するハンダ土坑の廃土が本遺構内に廃棄されたと考えられ、特に下層への礫廃棄の状況が共通するB4SK508の壁土が混入した可能性が高い。

出土遺物は能茶山産の灰釉陶器捏鉢1点、肥前系の灰釉呉器手風丸碗である。能茶山産捏鉢の出土からみてB4SK495廃絶年代は19世紀前葉以降と考えられる。また、埋土中へのハンダブロックの混入、礫廃棄状況の共通性からみて、直線的に配列された3基の円形土坑B4SK495・508・507が同時期に遺構廃絶された可能性が高い。

B4SK497 (B4-35・48図)

時期；近世17C～18C前 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；2.02×1.90m **深さ**0.66m **断面形態**；箱形

埋土；暗灰色砂・灰色砂礫・灰色砂質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（埋桶土坑）

出土遺物；青花（底部-皿1）、磁器染付（口縁・底部-中碗1・瓶1）、陶器（口縁・底部-中碗1・皿2・瓶1）

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、近世のB4SD406に切られる。B4SK497床面ではリング状を呈する灰色粘土化した木桶底部痕が検出されている。また、遺構形態が周辺のハンダ土坑に共通することから、埋め桶を伴う貯蔵施設であったものと推察される。

図示したものは砂目積みの唐津系灰釉小皿（35図8）、青花皿（35図7）である。この他、肥前産の染付二重網目文碗、染付瓶、灰釉瓶、緑灰色の灰釉を施す肥前系灰釉呉器手碗が出土している。

B4SK504 (B4-46図)

時期；近世17～18C **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.42×1.40m **深さ**0.60m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト・褐灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（埋桶土坑）

出土遺物；陶器（口縁部-鉢1）、土師質土器（口縁部-かわらけ3）

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、西側に埋桶土坑B4SK492・505が隣接して並んでいる。また、組をなす3基の土坑はB4SK457とする浅い楕円形の掘り込み内に設けられている。B4SK504床面外周には灰色粘土化した木桶底部痕がリング状に検出されることから、埋め桶を伴う貯蔵施設であったものと推察される。また、埋土下層には拳大の礫と粗砂が混じる。さらに、B4SK504上面にはB4SK457埋土である黄灰色砂質シルトが堆積しており、組をなす3基の埋桶土坑が人為的に埋め戻された後にその上面をB4SK457埋土が覆ったものとみられる。

出土遺物は肥前産の刷毛目二彩手鉢、かわらけである。

B4SK505 (B4-46図)

時期；近世17～18C **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.32×1.36m **深さ**0.56m **断面形態**；箱形

埋土；灰褐色粘土質シルト・褐灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（埋桶土坑）

出土遺物；弥生土器混入のみ

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、東西に埋桶土坑B4SK492・504が隣接して並んでいる。また、組をなす3基の土坑はB4SK457とする浅い楕円形の掘り込み内に設けられている。B4SK505床面外周には灰色粘土化した木桶底部痕がリング状に検出されることから、埋め桶を伴う貯蔵施設であったものと推察される。また、床面には拳大の礫が少量廃棄される。さらに、B4SK505上面にはB4SK457埋土である黄灰色砂質シルトが堆積しており、組をなす3基の埋桶土坑が人為的に埋め戻された後にその上面をB4SK457埋土が覆ったものとみられる。

出土遺物は混入の弥生土器片のみであるが、B4SK504の年代観からみてその廃絶時期は17～18C頃と考えられる。

B4SK507 (B4-48図)

時期；近世19C **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.69×1.62m **深さ**0.58m **断面形態**；箱形

埋土；褐灰色粘土質シルト・黄灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（埋桶土坑）

出土遺物；磁器染付（底部－中碗1・小瓶1、体部－小碗1）、白磁（口縁～底部－紅皿1）、青磁（体部－鉢1）、陶器（底部－土鍋1）

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、時期不明のB4SX407を切っている。また、西側には埋桶土坑B4SK495とハンダ土坑SK508が隣接して並んでいる。B4SK508は壁が垂直に立ち上がり、床面外周には灰色粘土化した木桶底部痕がリング状に検出されることから、埋桶を伴う貯蔵施設であったものと推察される。また、床面には人頭大から拳大の礫が少量廃棄され、埋土中にはハンダとみられる橙色粘土ブロックが多量に含まれる。B4SK507は床と側面にハンダ壁の痕跡が全く認められず廃絶に伴って側壁を剥ぎ取った痕跡も認められないことから、近接するハンダ土坑の廃土が本遺構内に廃棄されたと考えられ、特に隣接するB4SK508の壁土が混入した可能性が高い。

出土遺物は肥前産の染付梅花文辣蕈形小瓶・染付筒形小碗・白磁紅皿、肥前系の染付広東形碗、青磁鉢、陶器土瓶である。

埋土中へのハンダブロックの混入関係と礫廃棄状況の共通性、直線的な配列関係からみて、3基の円形土坑B4SK495・508・507が同時期に遺構廃絶された可能性が高い。

B4SK508 (B4-48図)

時期；近世19C **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.66×1.60m **深さ**0.51m **断面形態**；不整形

埋土；灰色シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（ハンダ土坑）

出土遺物；なし

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、時期不明のB4SX407を切っている。また、西側に埋桶土坑B4SK495、東側にB4SK507が隣接して並んでいる。B4SK508は断面形態不整形であるが、平坦な床面部分では橙色粘土を叩き締めた厚さ3cm程のハンダが検出されることから、本来は外側や床にハンダを伴う貯蔵施設であったものと推察される。また、本来は壁はほぼ垂直に立ち上がっていたと思われ、遺構廃絶にともなって壁が破壊され側面部のハンダが失われたものとみられる。また、遺構廃絶に際して人頭大から拳大の礫が大量に廃棄されている。

出土遺物はないが、埋土中へのハンダブロックの混入関係と礫廃棄状況の共通性、直線的な配列関係からみて、3基の円形土坑B4SK495・508・507が同時期に遺構廃絶された可能性が高い。

B4SK509 (B4-48図)

時期；近世 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.50×1.48m **深さ**0.40m **断面形態**；箱形

埋土；黄灰色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；貯蔵施設（埋桶土坑）

出土遺物；なし

所見；調査区中央部に位置する円形土坑で、時期不明のB4SK519・B4SX407を切っている。また、南側には埋桶土坑B4SK497、ハンダ土坑B4SK507・508が近接して並んでいる。B4SK509床面では直径1.18mのリング状を呈する灰色粘土化した木桶底部痕が検出されており、また遺構形態が周辺のハンダ土坑に共通することから、埋め桶を伴う貯蔵施設であったものと推察される。出土遺物は皆無で、時期の詳細は不明である。

B4SK515 (B4-35・48図)

時期；近世末 **形状**；円形 **主軸方向**；—

規模；1.10×1.12m **深さ**0.12m **断面形態**；皿状

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；青花（口縁部-碗1）、土師質土器（口縁部-焜炉1）

所見；調査区中央部に位置する円形の浅い皿状土坑で、近世のB4SD406を切る。混入とみられる漳州窯系青花碗（35図4）である。埋土中より土師質土器焜炉が出土している。B4SK515はB4SD406との切り合い関係からみて、幕末から明治初頭のものと考えられる。

B4SK517 (B4-49図)

時期；近世19C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-14°-E

規模；1.83×0.52m **深さ**0.11m **断面形態**；箱形

埋土；にぶい黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（口縁・底部-中碗1・小杯1）、白磁（煙管雁首1・煙管吸口1）、古銭（寛永通宝5）

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK517は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と遺物内容からみて西に隣接する近世墓B4SK522と組になるものとみられる。遺物は上層から染付中碗（1）と5枚重ねの寛永通宝、下層から染付小杯（2）・煙管（5・6）・人骨が出土している。2は肥前系の端反形中碗で外面に龍文を描く。肥前系の小杯（2）は外面に笹文を描く。型作りによる白磁製の煙管雁首（5）と吸口（6）は共に印銘をもつ。寛永通宝は3枚が鉄銭、2枚が銅銭（新寛永）からなる。いずれも錆着と腐蝕が著しく図化不能であった。

B4SK520 (B4-49図)

時期；近世19C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-29°-E

規模；1.70×0.54m **深さ**0.90m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色シルト・にぶい黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（口縁・底部-小杯1）、陶器（口縁部-甕1）、土師質土器（口縁部-焙烙1）、銅製品（煙管1）、鉄釘9・鉄銭（観察不能約5~6枚）

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK520は14基の墓から構成される近世墓群に属しているが、組をなさず、また他の墓群とは軸方向が僅かにずれる。床面からは完形の染付小杯（3）と煙管（a）、鉄銭（6）、鉄釘が出土し、この他埋土中から焙烙、灰釉甕が出土している。図示したものは、肥前系の染付笹文小杯（3）、讃岐岡本系焙烙（7）である。鉄銭は5~6枚重ねとみられるが、錆と溶着が著しく観察不可能であった。

B4SK521 (B4-50図)

時期；近世19C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-16°-E

規模；1.71×0.57m **深さ**0.66m **断面形態**；箱形

埋土；にぶい黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（口縁・底部-小杯1）、陶器（口縁部-甕1）、土師質土器（口縁部-焙烙1）、銅製品（煙管雁首1・煙管吸口1）、鉄製品（釘9）、古銭（寛永通宝5）

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK521は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と遺物内容からみて東に隣接する近世墓B4SK531と組になるものとみられる。遺物は床面から完形の肥前系染付笹文小杯（1）、煙管、5枚重ねの寛永通宝（5・6）、木棺の底板が出土

している。古銭3枚と煙管は雁首・吸口ともに破損が著しく観察不可能であった。

B4SK522 (B4-49図)

時期；近世 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-14°-E

規模；1.70×0.41m **深さ**0.22m **断面形態**；箱形

埋土；黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（完形-小杯1）、土師質土器（底部-かわらけ）、銅製品（煙管雁首1）、木製品（釘1）

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK522は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と遺物内容からみて東に隣接する近世墓B4SK517と組になるものとみられる。遺物は床面から完形の染付小杯（4）と煙管（a）人骨が、埋土中からは木製釘、かわらけ底部が出土している。図示したものは肥前系の染付笹文小杯（4）である。

B4SK523 (B4-51図)

時期；近世18C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-2°-W

規模；1.68×0.50m **深さ**0.24m **断面形態**；U字状

埋土；灰黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；白磁（完形-小杯1）、銅製品（煙管雁首1・煙管吸口1）、鉄製品（釘38）、人骨・歯

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK523は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と遺物内容からみて西に隣接する近世墓B4SK536と組になるものとみられる。遺物は床面から完形の白磁小杯（1）、煙管雁首（a）と吸口（b）、鉄釘（c）、人骨と歯が出土している。図示したものは肥前産18Cの白磁小杯（1）である。煙管は腐蝕が著しく図示・年代鑑定とも不可能であった。

B4SK525 (B4-51図)

時期；近世 19C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-11°-E

規模；1.68×0.48m **深さ**0.59m **断面形態**；箱形

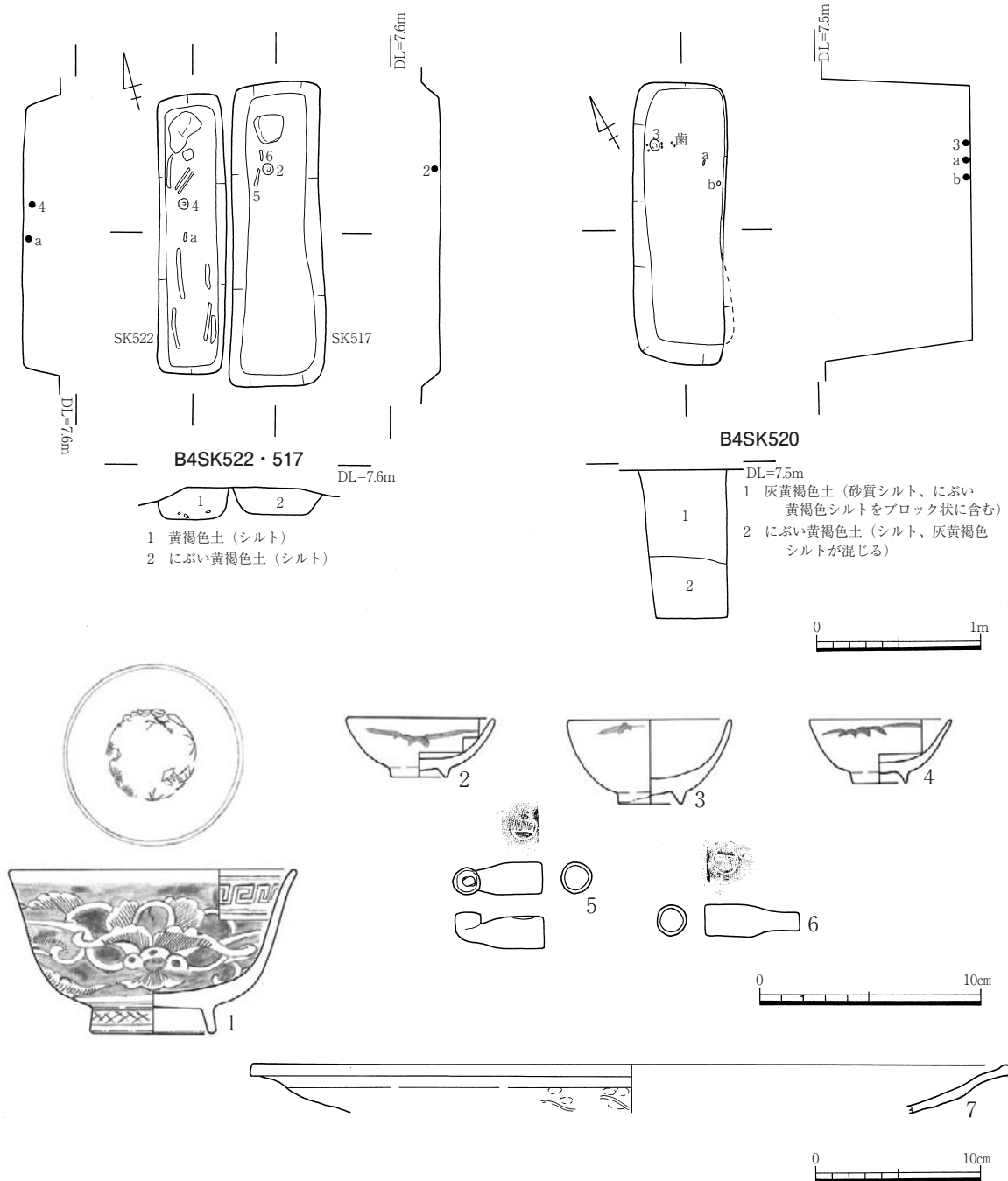
埋土；灰黄褐色粘土質シルト・黄褐色砂質シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（完形-小杯1）、陶器（完形-中碗1、体部-火鉢1）、土師質土器（口縁・底部-かわらけ2）、古銭（寛永通宝6）、鉄製品（釘23）、人骨、木棺片

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK525は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と遺物内容からみて東に隣接する近世墓B4SK529と組になるものとみられる。遺物は床面から陶器中碗、磁器小杯、6枚重ねの寛永通宝、木棺片、人骨が出土している。図示したものは尾戸窯産の可能性をもつ鉄絵笹文の灰釉広東形碗（2）、肥前系の染付草文小杯（3）、寛永通宝（8

~11) である。



B4-49 図 B4SK517 · 520 · 522 (SK517 : 1 · 2 · 5 · 6, SK520 : 3 · 7, SK522 : 4)

B4SK527 (B4-52図)

時期；近世19C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-14°-E

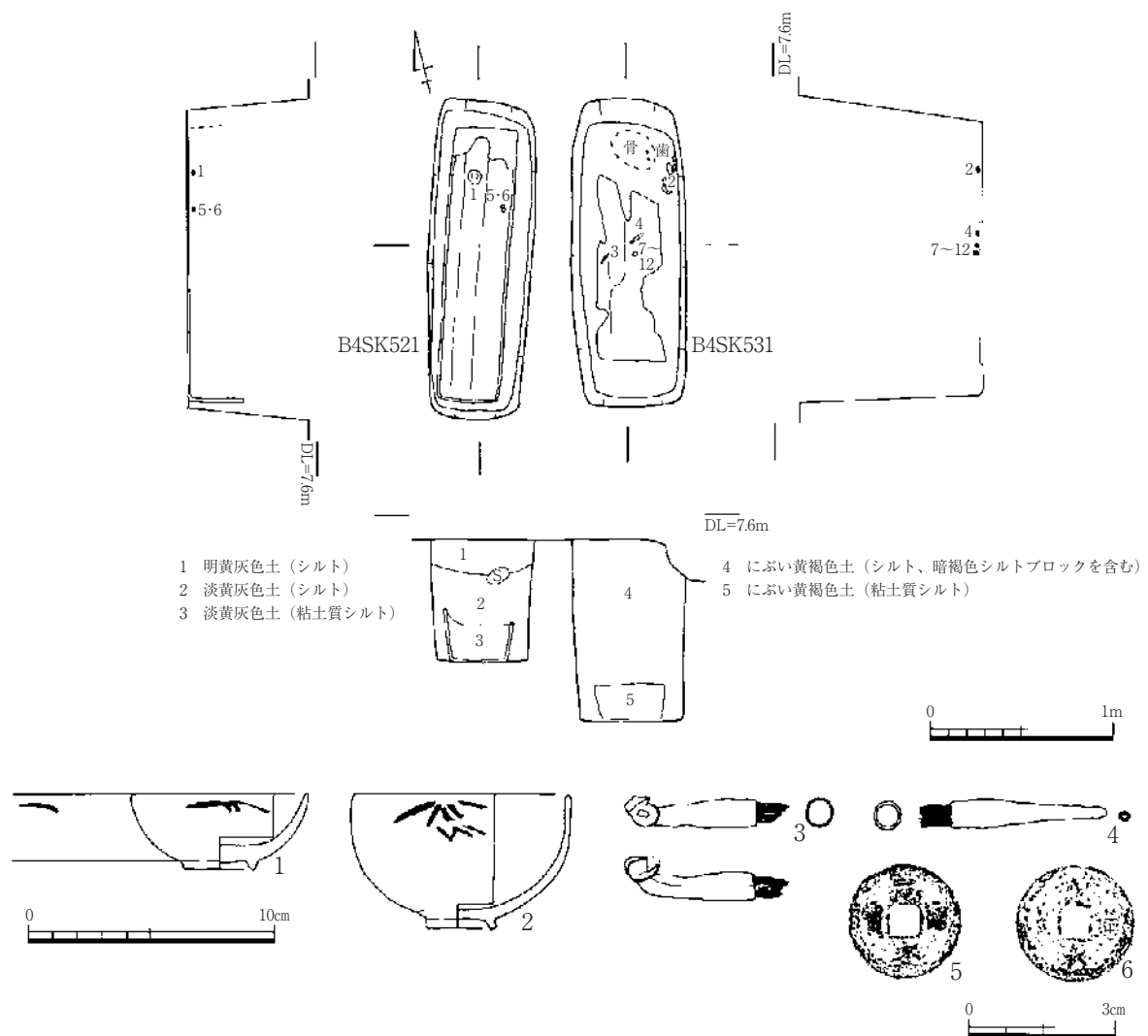
規模；1.42×0.56m **深さ**0.40m **断面形態**；箱形

埋土；暗灰褐色シルト・灰黄褐色砂質シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（完形-中碗1・小杯1）、陶器（口縁部-小碗1）、銅製品（煙管雁首1・煙管吸口1）、古銭（寛永通宝6）、鉄製品（釘5）

所見；調査区北部に位置する近世墓で、攪乱13に切られる。B4SK527は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と遺物内容からみて東に隣接する近世墓B4SK528と組になるものとみられる。遺物は床面から磁器碗と磁器小杯、煙管雁首 (a) と吸口 (b)、6枚重ねの寛永通宝 (c)、鉄釘 (d) が、この他、埋土上層から京・信楽系の灰釉半球系小碗が出土している。図示したものは能茶山産の染付草花文端反形碗 (1) と肥前系の染付笹文小杯 (2)、煙管雁首 (3) である。煙管吸



B4-50図 B4SK521・531 (SK521：1・5・6, SK531：2~4)

口と寛永通宝（新寛永）は破損が著しく図示できなかった。

B4SK528 (B4-52図)

時期；近世以降 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-14°-E

規模；1.89×0.50m **深さ**0.48m **断面形態**；箱形

埋土；黄灰褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；青花（口縁部-小皿1）、銅製品（煙管雁首1・煙管吸口1）、鉄製品（釘4）

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK528は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と遺物内容からみて西に隣接する近世墓B4SK527と組になるものとみられる。遺物は床面から煙管、棺に伴うとみられる鉄釘が出土するが、古銭、碗類は確認できなかった。図示したものは、中世包含層からの混入とみられる漳州窯系青花皿（4）、煙管雁首（5）、煙管吸口（6）である。

B4SK529 (B4-51図)

時期；近世18C末～19C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-13°-E

規模；1.72×0.60m **深さ**0.42m **断面形態**；箱形

埋土；にぶい黄褐色シルト・にぶい黄褐色砂質シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（完形-中碗1）、陶器（完形-小杯）、銅製品（煙管雁首1・煙管吸口1）、鉄銭（寛永通宝5～6枚か。）

所見；調査区北部に位置する近世墓で、近世墓B4SK535に切られる。B4SK529は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と遺物内容からみて西に隣接する近世墓B4SK525と組になるものとみられる。床面からは完形の陶胎染付碗（4）と陶器小杯（5）、煙管（6・7）、鉄銭が出土している。鉄銭は5～6枚が重ねられたものとみられるが、錆と溶着が著しく観察不可能であった。この他、埋土中より肥前産の刷毛目二彩手大皿の口縁部片が出土している。

図示したものは灰釉酒杯（5）、瀬戸美濃産の太白手広東形碗（4）、煙管雁首（6）と吸口（7）である。

B4SK530 (B4-53図)

時期；近世18C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-34°-E

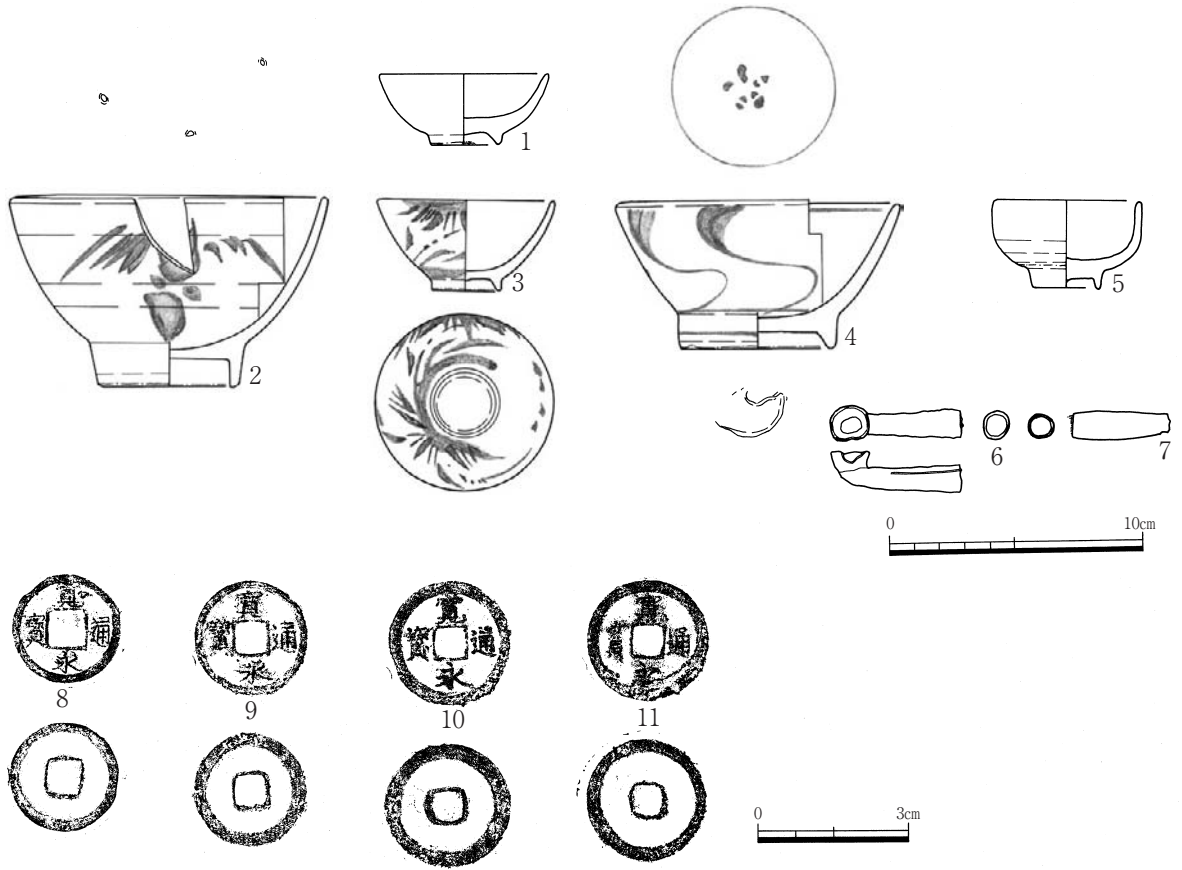
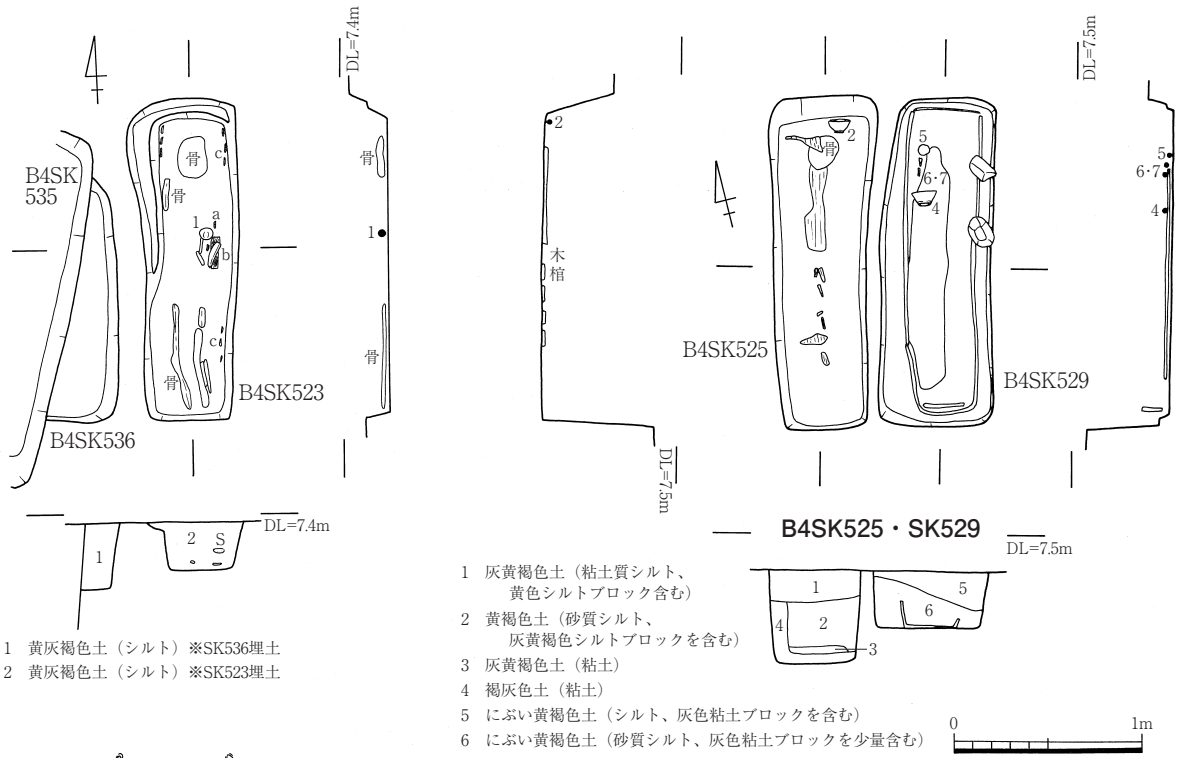
規模；1.86×0.72m **深さ**0.47m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

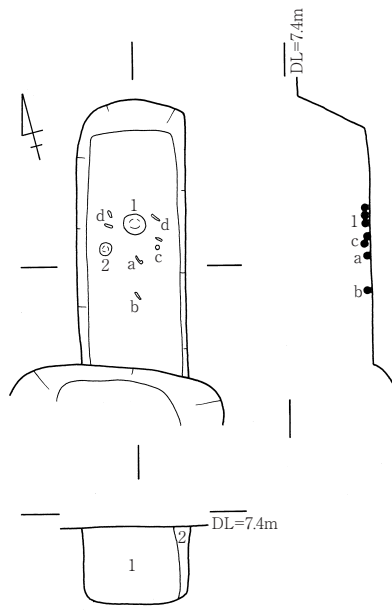
付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；土師質土器（底部-かわらけ1）銅製品（煙管雁首1・煙管吸口1）、古銭（寛永通宝6）、鉄製品（釘）

所見；調査区中央部に位置する近世墓で、弥生のB4SK559・B4SD411、中世のB4SD403を切る。また、

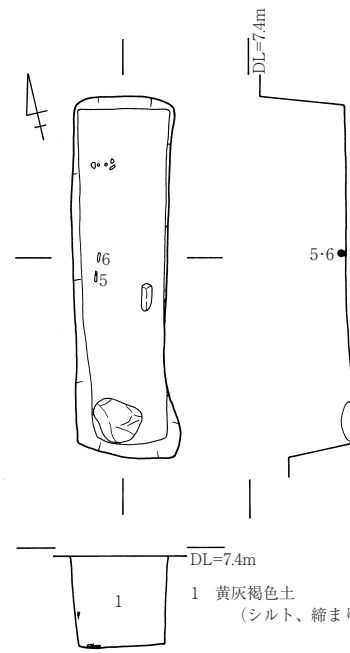


B4-51 図 B4SK523・525・529・536 (SK523 : 1, SK525 : 2・3・8~11, SK529 : 4~7)



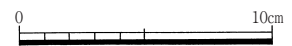
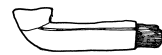
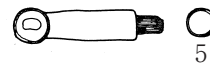
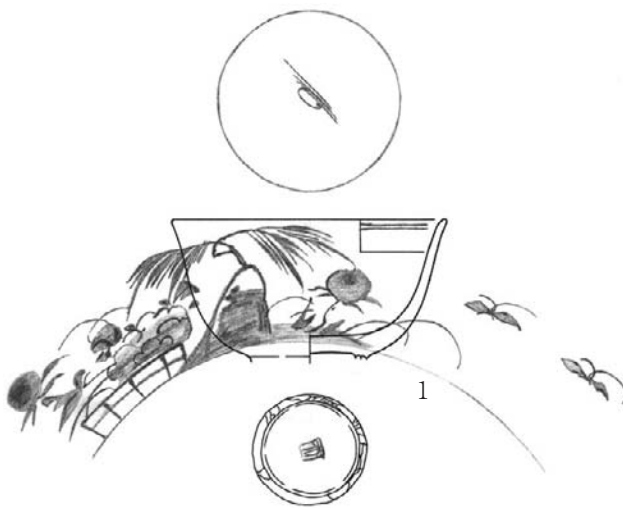
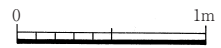
- 1 暗灰褐色土 (シルト、暗褐色・黄褐色シルトブロックを含む)
- 2 黄灰褐色土 (砂質シルト)

B4SK527

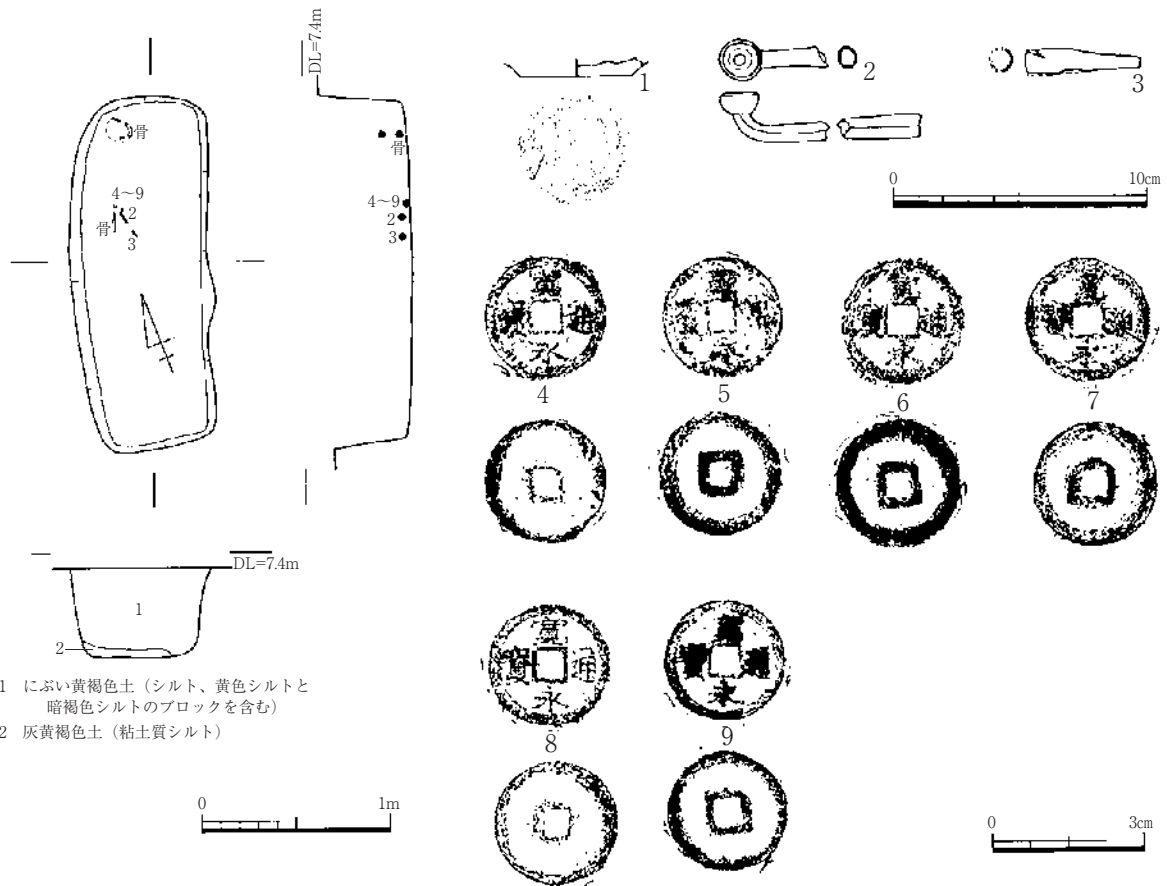


- 1 黄灰褐色土 (シルト、縮まりなし)

B4SK528



B4-52図 B4SK527・528 (SK527: 1~3, SK528: 4~6)



B4-53図 B4SK530

南には近世墓B4SK430が近接し、同じ墓群を形成するものとみられる。遺物は床面から煙管雁首（2）と吸口（3）、6枚重ねの寛永通宝（4～9）が、また、埋土上層からはかわらけ底部（1）が出土している。

B4SK531（B4-50図）

時期；近世18C後葉～19C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-7°-E

規模；1.68×0.62m **深さ**0.98m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；陶器（完形-小碗1）、土師質土器（底部-かわらけ1）、銅製品（煙管雁首1・煙管吸口1）、古銭（寛永通宝6）

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK531は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、西に隣接する近世墓B4SK521と組になるものとみられる。遺物は床面から完形の陶器小碗（2）、煙管雁首（3）と吸口（4）、6枚重ねで置かれた寛永通宝が、その他埋土中から、かわらけ底部が出土している。京・信楽系の灰釉半球形小碗（2）は鉄絵による略化された笹文を描く。又、寛永通宝（新寛永）6枚は錆着し図化不能であった。

B4SK534 (B4-54図)

時期；近世 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-26°-E

規模；0.68×0.44m **深さ**0.36m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；白磁（完形-ミニチュア1）

所見；調査区北部に位置する近世墓である。B4SK534は14基の墓から構成される近世墓群に属しているが、南西端に単独で位置する。本SKは墓坑が著しく小さく、出土遺物の様相等からみて、小児を葬った墓であった可能性がある。遺物は床面からミニチュアの白磁小杯（1）が出土している。

B4SK535 (B4-54図)

時期；19C中葉 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-13°-E

規模；1.88×0.59m **深さ**0.98m **断面形態**；箱形

埋土；にぶい黄褐色砂質シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（完形-中碗1・小杯2）、陶胎染付（完形-小杯1）、陶器（底部-土鍋1）、白磁（煙管雁首1・煙管吸口1）

所見；調査区北部に位置する近世墓で、14基の墓から構成される北部近世墓群内に属する。切り合い関係では18C末～19Cの近世墓B4SK529・18Cの近世墓B4SK536を切る。出土遺物は床面から完形の状態で出土した染付中碗（2）、染付小杯（5・6）、陶胎染付小杯（7）、煙管雁首（8）と吸口（9）、2枚重ねの寛永通宝（3・4）、また、埋土中から出土した能茶山産の陶器土鍋底部である。

図示したものは2～9である。能茶山産の染付広東形碗（2）は高台内に「サ」銘が入る。陶胎染付小杯（7）は呉須による魚文と格子文を描き、高台内には呉須による「道八」銘が入る。型作りによる白磁製煙管雁首（8）と吸口（9）は、ともに印銘をもつ。

B4SK536 (B4-51図)

時期；近世 18C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-2°-E

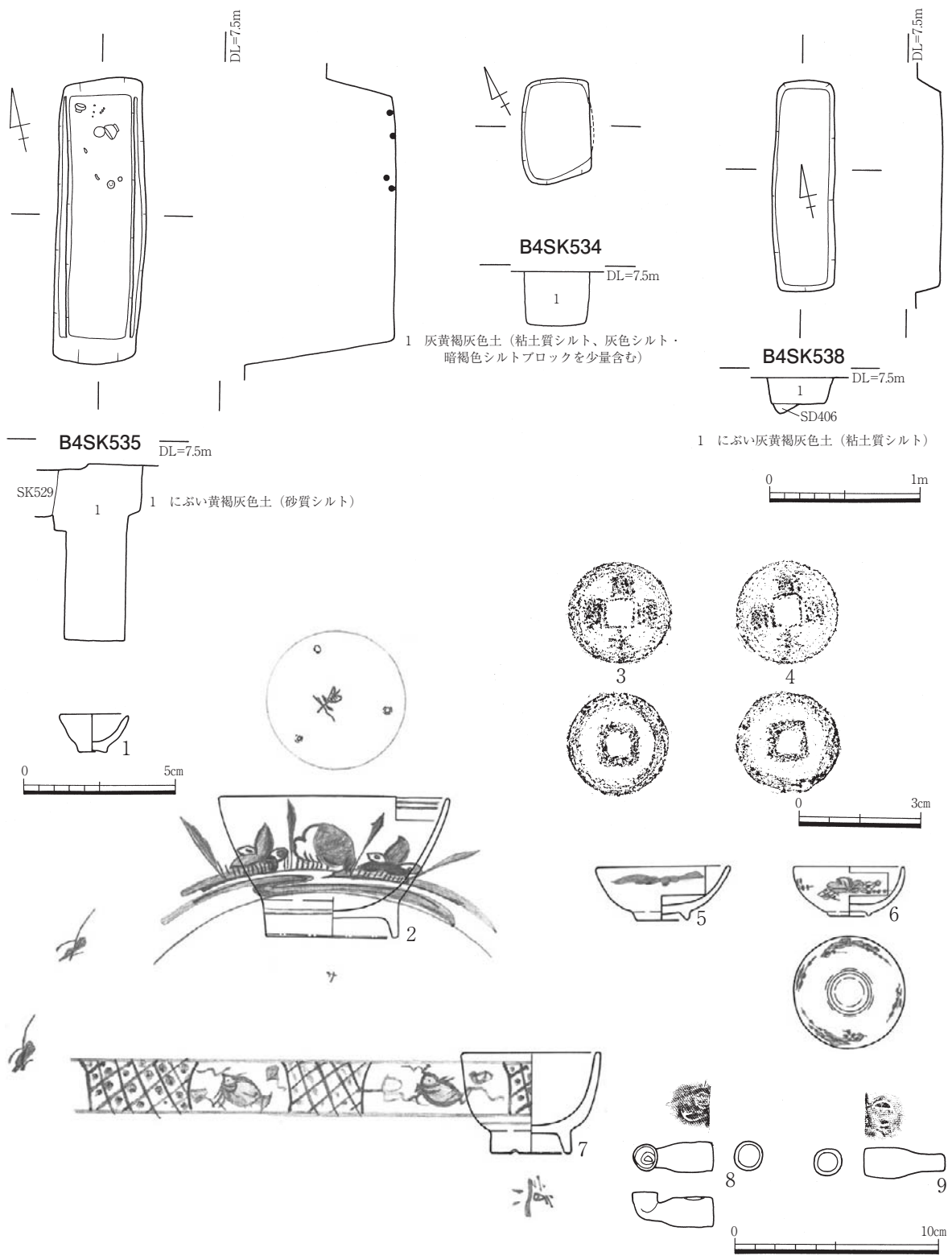
規模；残存1.30×残存0.38m **深さ**0.36m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；なし

所見；調査区北部に位置し、B4SK535に切られる。B4SK536は14基の墓から構成される近世墓群に属しており、位置関係と軸方向からみて東に隣接する18Cの近世墓B4SK523と組になる可能性が高くほぼ同時期頃のものと考えられるが、床面のほとんどをB4SK535によって削平されており、出土遺物等は確認できていない。



B4-54図 B4SK534・535・538 (SK534:1, SK535:2~9)

B4SK538 (B4-54図)

時期；近世 形状；長方形 主軸方向；N-14°-E

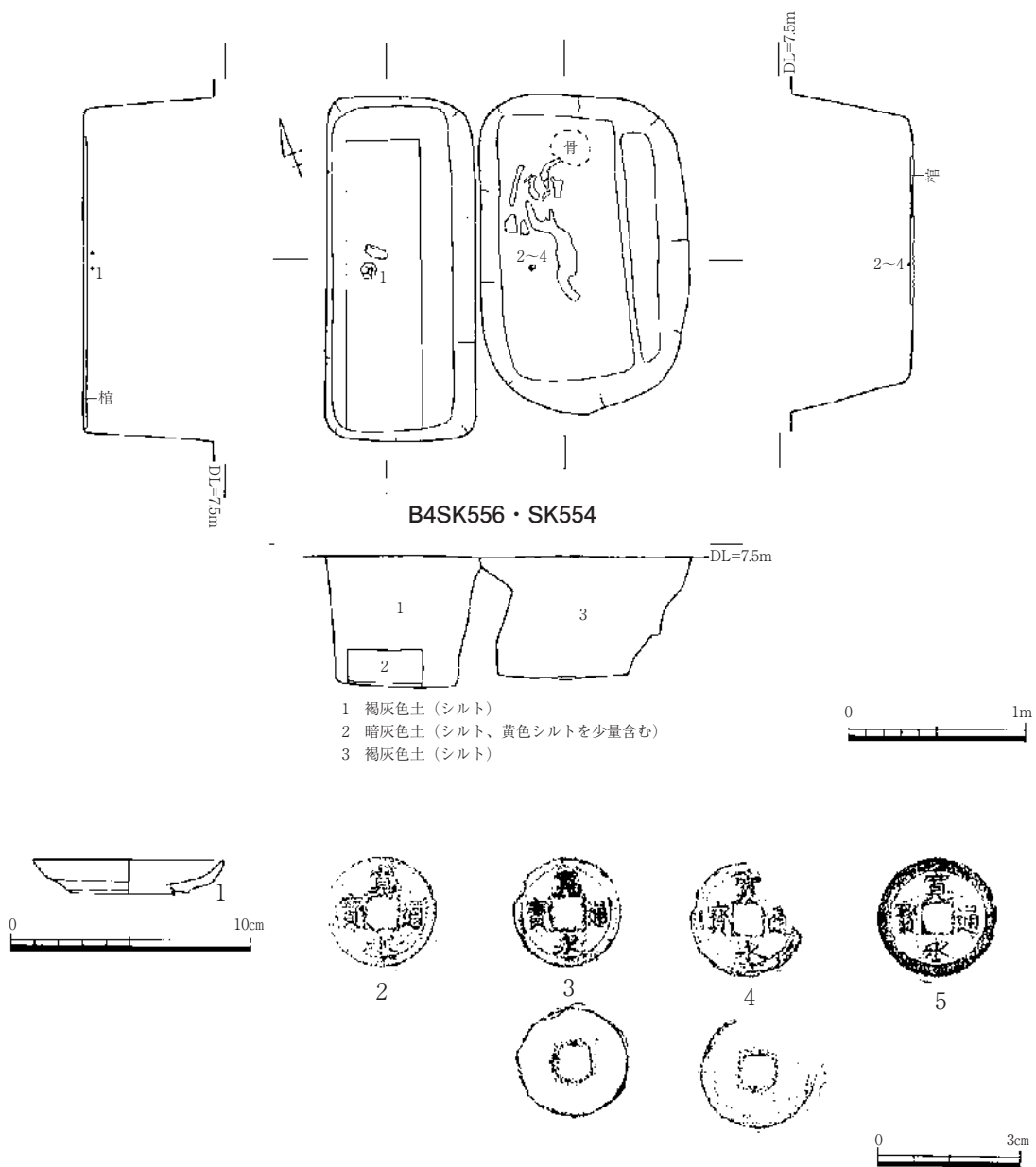
規模；1.38×0.41m 深さ0.18m 断面形態；箱形

埋土；にぶい灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；なし 機能；近世墓

出土遺物；なし

所見；調査区北部ソ-24グリッドに位置し、近世のB4SD406を切る。B4SK538は14基の墓から構成される近世墓群内に位置しているが、組をなさず、南東端に単独で存在する。位置関係と形態からみて近世墓である可能性が高いが出土遺物は確認できていない。



B4-55図 B4SK554・556 (SK554：2~4, SK556：1・5)

B4SK554 (B4-55図)

時期；近世17C後半～18C前半 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-17°-E

規模；1.78×1.16m **深さ**0.68m **断面形態**；逆台形？

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；古銭（寛永通宝4）、人骨

所見；調査区南部に位置する近世墓で、近世のB4SD409に切られる。B4SK554は4基の墓から構成される近世墓群に属しており、西に隣接する近世墓B4SK556と組になる。遺物は床面から4枚重ねの寛永通宝（2～4）と人骨、木棺片が、棺の掘方部分からは中世包含層からの混入とみられる杯底部が出土している。B4SK554は同墓群を構成するB4SK566が17C末～18C前半頃に時期比定できることから、本SKについてもほぼ同じ時期頃のものと考えられる。

B4SK556 (B4-55図)

時期；近世17C後半～18C前半 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-17°-E

規模；1.92×0.84m **深さ**0.72m **断面形態**；箱形

埋土；褐灰色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；土師質土器（完形-かわらけ1）、古銭（寛永通宝2）

所見；調査区南部に位置する近世墓で、近世のB4SD409に切られる。B4SK556は4基の墓から構成される近世墓群に属しており、東に隣接する近世墓B4SK554と組になる。遺物は床面からほぼ完形のかわらけ（1）、2枚重ねで出土した寛永通宝（5）が出土している。B4SK556は同墓群を構成するB4SK566が17C末～18C前半頃に時期比定できることから、本SKについてもほぼ同じ時期頃のものと考えられる。

B4SK565 (B4-35・56図)

時期；近世17C末～18C前半 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-16°-E

規模；2.27×0.70m **深さ**0.52m **断面形態**；箱形

埋土；にぶい黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；土師質土器（完形-かわらけ1）、古銭（寛永通宝6）、鉄製品（釘8）

所見；調査区南部に位置する近世墓で、弥生のB4SD420を切り、B4P4180に切られる。B4SK565は4基の墓から構成される近世墓群に属しており、西に隣接する近世墓B4SK566と組になる。遺物は床面からほぼ完形のかわらけ（3）、寛永通宝（4～8）、木棺片が出土しており、寛永通宝は5枚重ね（4～8）と1枚（9）を並べた状態での出土である。この他、埋土中から龍泉窯系青磁皿（35図9）が出土している。B4SK565は組をなすB4SK566が17C末～18C前半頃に比定できることから、同SKもほぼ同じ時期頃のものと考えられる。

B4SK566 (B4-56図)

時期；近世17C末～18C前半 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-16°-E

規模；2.12×0.85m **深さ**0.78m **断面形態**；箱形

埋土；にぶい黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；近世墓

出土遺物；磁器染付（完形-中碗2）、土師質土器（底部-皿1）、須恵器（底部-1）、歯、石器（砥石1）

所見；調査区南部に位置する近世墓で、弥生のB4SD420を切る。B4SK565は4基の墓から構成される近世墓群に属しており、東に隣接する近世墓B4SK565と組になる。遺物は床面から完形の中碗2点（1・2）と歯が、埋土中から混入とみられる中世土師質土器皿底部、古代須恵器杯底部、砂岩製砥石1点が出土している。

図示したものは肥前産17C後半の染付蔓草文中碗（1）、肥前産17C後半の染付草花文丸形中碗（2）である。

B4SK593 (B4-57図)

時期；近世 17～18C **形状**；長方形 **主軸方向**；N-81°-W

規模；4.36×1.50m **深さ**0.18m **断面形態**；皿状

埋土；灰黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；不明

出土遺物；陶器（口縁部-中碗1・皿1）、土師質土器（底部-かわらけ1）

所見；調査区北寄りに位置する浅い大型長方形の土坑で、近世のB4SK471・472・483・488に切られる。埋土中より尾戸窯産の可能性をもつ灰釉碗（2）、肥前産17C前半の三島手皿（1）、かわらけ底部が出土している。

B4SX403 (B4-35・57図)

時期；近代 **形状**；不整形 **主軸方向**；—

規模；3.20×3.14m **深さ**1.64m **断面形態**；箱形

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

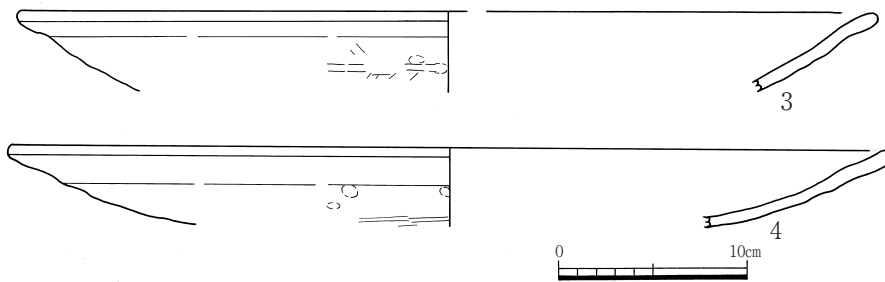
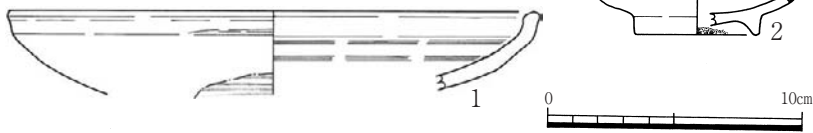
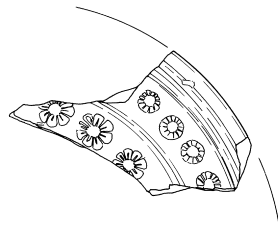
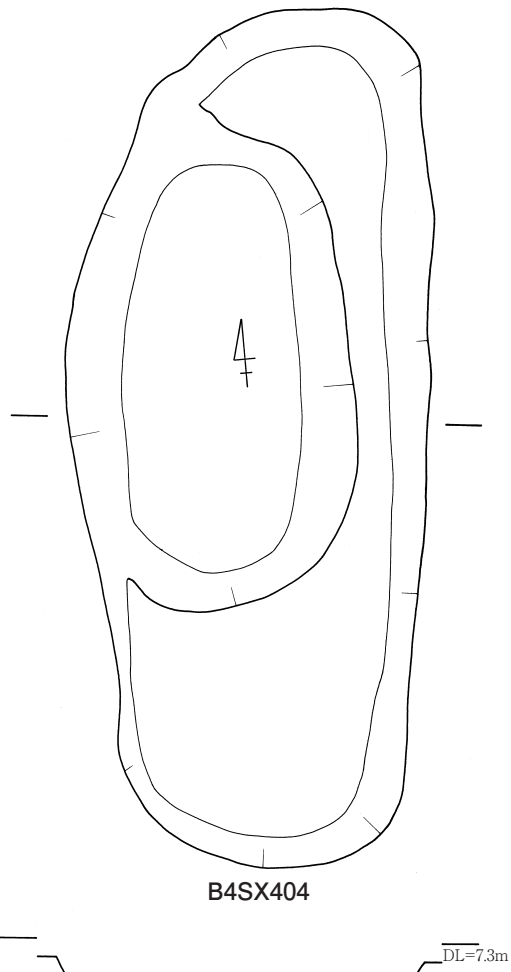
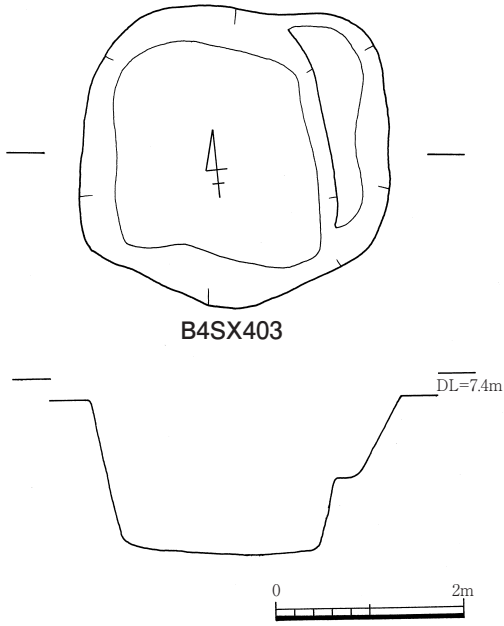
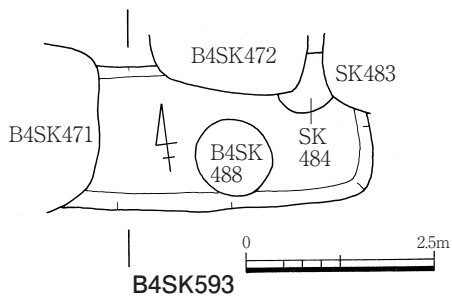
付属遺構；なし **機能**；廃棄土坑

出土遺物；青花、近世陶磁器、近代～現代陶磁器、土師質土器、瓦

所見；調査区南部に位置する大型の廃棄土坑である。平面形態は隅丸方形に近い不整形で、床面は平坦でなく東部にテラス状の高まりをもつ。

出土遺物は近・現代の陶磁器類と瓦片であり、中世の遺物も少量含まれる。出土状況を層位別にみると、現代遺物の混入は埋土上層までにとどまっており、中層から下層にかけて江戸後期から明治期の陶磁器類と瓦片が出土している。図示したものは尾戸窯の灰釉陶器碗、肥前系の灰釉呉器手碗、讃岐岡本系の土師質土器焙烙（3）。中世遺構からの混入とみられる漳州窯系青花碗（35図5）、間壁編年Ⅴ期前半の備前焼播鉢である。

1 灰黄褐色土(シルト、礫)層
DL=7.5m
(号きを含む)



B4-57図 B4SK593・SX403・404 (SK593 : 1~2, SX403 : 3, SX404・405 : 4)

B4SX404 (B4-57図)

時期；近代 **形状**；楕円形 **方向**；N-6°-E

規模；4.54×1.92m **深さ**0.70m **断面形態**；不整形

埋土；灰色シルト質粘土

付属遺構；なし **機能**；廃棄土坑

出土遺物；近世陶磁器、近代～現代陶磁器、土師質土器、瓦

所見；調査区南部に位置する大型の廃棄土坑である。平面形態は楕円形で、床面は平坦でなく中央部に楕円形の落ち込みをもつ。出土遺物は江戸後期から明治期の陶磁器類と瓦片である。図示したものは讃岐岡本系の土師質土器焙烙(4)である。

B4SX402 (B4-58図)

時期；現代 **形状**；長方形 **主軸方向**；N-3°-W

規模；6.65×1.82～3.26m **深さ**1.46～1.68m **断面形態**；箱形

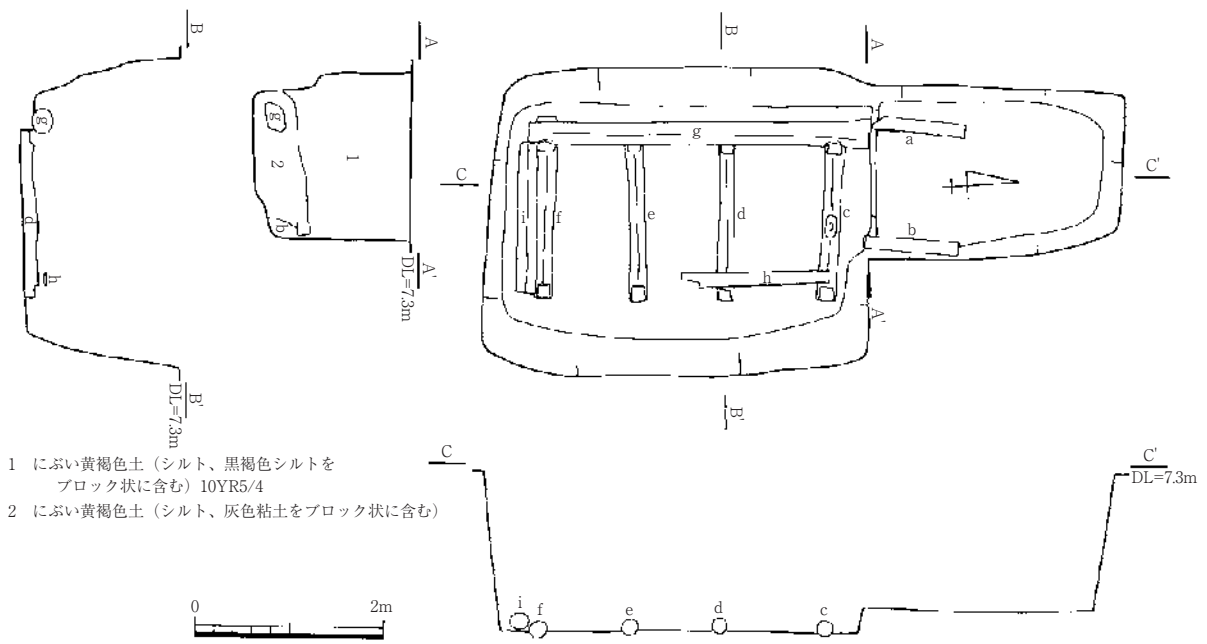
埋土；にぶい黄褐色シルト

付属遺構；なし **機能**；防空壕

出土遺物；なし

所見；調査区中央部に位置する大型土坑で、弥生のB4ST403・B4SK561・B4SD411・B4SR401・B4SK543、近世のB4SK409を切る。

構造は幅3.26m、長さ4.00m、深さ1.68mの規模をもつ主体部と、幅1.82m、長さ2.65m、深さ1.46m規模の出入口からなり、胴木とみられる丸木材(c～i)と板材(b)が主体部床面から、角材(a・b)が出入口床面壁際から出土している。出土遺物は皆無であるが、内部構造と規模、周辺住民からの聞き取り等からみて、SX402は昭和期の防空壕として機能していたものとみられる。



B4-58 図 B4SX402

(2) 溝跡

調査区を縦横に走る近世・近代の区画溝5条と近世溝1条を検出している。いずれも19世紀中葉に一旦埋め戻され、廃絶する。埋土の中には土器・陶磁器類・瓦等が多量に廃棄されているが、近接するB4SK442等の廃棄土坑群出土の破片と接合されるものが多い。こうしたことから、各区画溝と周辺遺構は、幕末から明治初頭頃に同時に廃絶され遺物の一括廃棄が行われたと考えられる。B4SD406・409はこれをもって近世区画溝としての機能を終焉させるが、B4SD407・408・410についてはその後改修され、区画溝B4攪乱408・409・410として現代まで継続していく。

※B4-7表 B4区近世溝一覧表は、別添CDに収録

B4SD402 (B4-59図)

時期：近世～明治初頭 方向：N-81°-W

規模：幅0.80～0.98m 深さ0.11～0.14m 断面形態：皿状

埋土：灰色シルト

床面標高：7.11m

接続：—

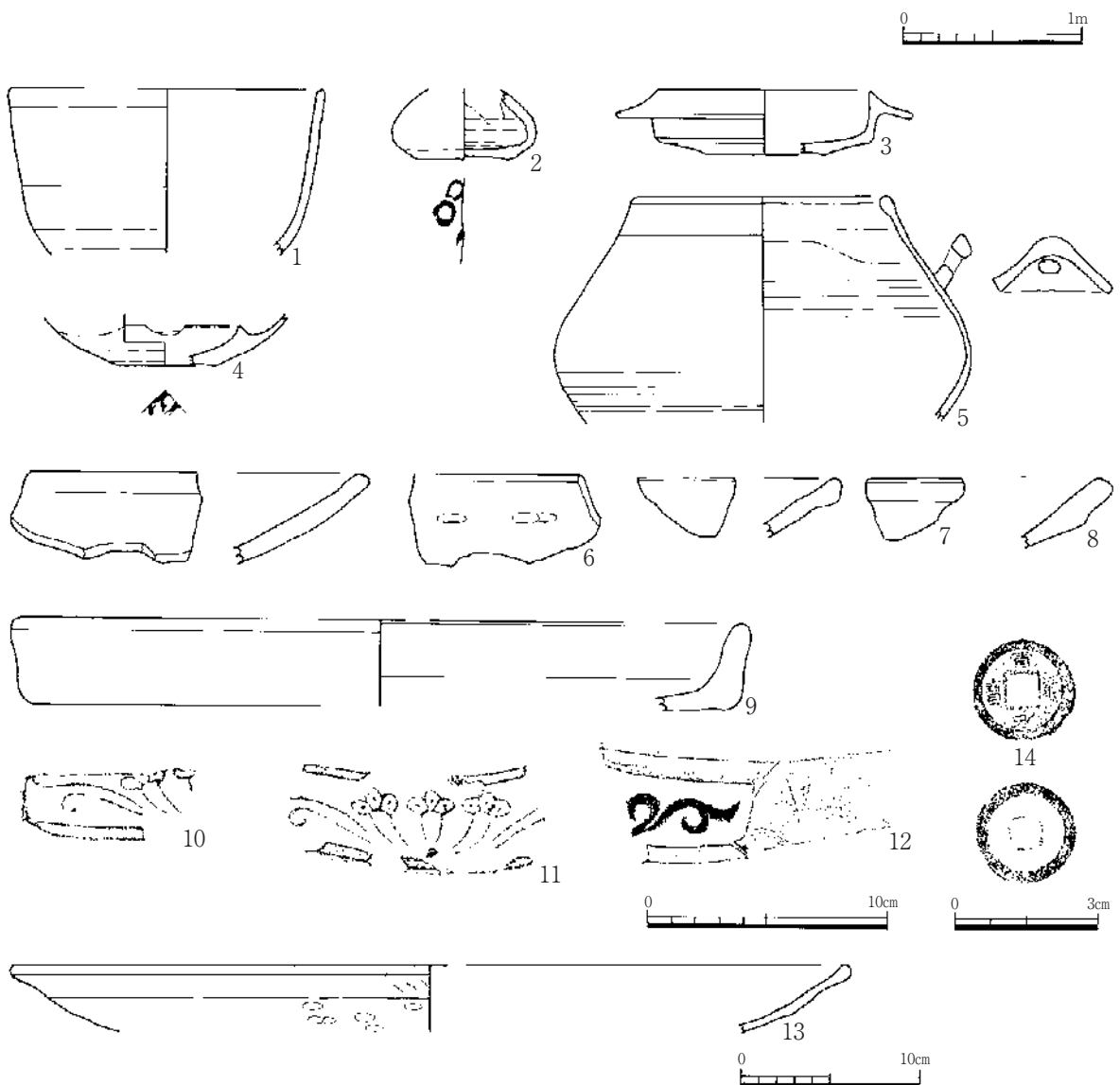
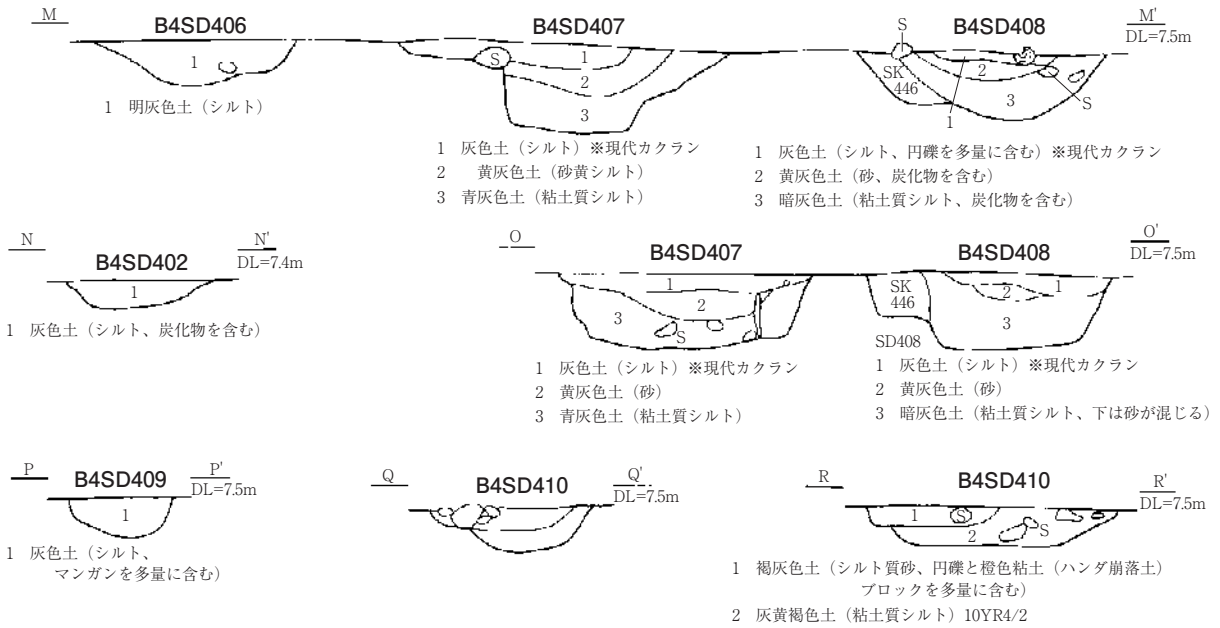
出土遺物：磁器染付（口縁部-中碗1、底部-中碗1・酒杯1）、磁器色絵（底部-酒杯1）白磁（口縁～底部-小杯1）、陶器（口縁部-播鉢1、底部-碗2・鉢1、体部-甕多数）、土師質土器（口縁部-焙烙1、体部-焙烙1・土人形1）、瓦質土器（口縁部-焜炉または火鉢1、脚部-火鉢1、体部-焙烙1）、瓦（約40）

所見：調査区南部に位置し、北東から南西方向に向かって延びる溝である。検出長は12m。切り合い関係では弥生前期のB4SD411、弥生後期初頭のB4ST401・408・409、中世のB4SD403、近世のB4SK429を切り、近代のB4SK427、近代～現代の区画溝攪乱408と攪乱409に切られる。また、近世の溝B4SD408との切り合いは不明である。埋土は灰色シルトで炭化物を多く含んでおり、下層への砂の堆積は認められない。肥前系の染付端反形碗・白磁小杯、関西系の色絵木盃形酒杯、灰釉碗、瀬戸美濃産大鉢、堺明石系の播鉢、関西系の鉄釉甕、讃岐岡本系焙烙、讃岐御厩系焙烙、土人形、瓦質の焜炉または火鉢、獸面を貼付する瓦質火鉢の脚部、及び瓦片である。生産年代19世紀前葉から中葉を主体とするこれらの遺物のうち、在地産の陶器・土器類については年代観の明らかでないものが多いが、確実に明治期に下ると把握できるものには酸化コバルトによる染付磁器碗1点がある。図示したものは讃岐岡本系の土師質土器焙烙（13）である。B4SD402は出土遺物の年代幅からみて、その機能時期は19C代であり明治初頭頃には廃絶したものとみられる。遺物廃棄の状況を見ると、遺構内に多くの瓦片が廃棄され、廃棄遺物の年代幅と内容が周辺のB4区近世区画溝と土坑群への廃棄遺物と共通しているところから、居住者転居に伴う遺構廃絶時の遺物一括廃棄が行われたものと捉えることができる。

B4SD406 (B4-59図)

時期：近世～明治初頭 方向：N-11°-E

B区の調査



B4-59図 B4SD402・406~410 (SD402: 13, SD407: 6~9, SD408: 10~12, SD409: 2~5, SD410: 1)

規模；幅0.52～0.65m 深さ0.16～0.35m **断面形態**；皿状

埋土；明灰色シルト

床面標高；南端部7.23m、中央部7.30m

接続；—

出土遺物；磁器染付（口縁部－中碗7・小杯1・碗蓋1、底部－中碗3・小碗1・小皿1）、陶器（完形－灯明受皿1、口縁部－中碗3・小碗2・小皿3・大皿1・播鉢1、底部－中碗1・小碗1・火入れ1・灯明受皿1・土鍋1・播鉢1、体部－火鉢1・甕1）、土師質土器（口縁部－かわらけ1・焜炉1、底部－焙烙）、石製品（硯1）、瓦片（多量）、中世混入（播鉢1）

所見；調査区を南北方向に延びる区画溝である。B4SD406の東側にはほぼ同時期頃に機能したとみられる区画溝B4SD407・408が並行し、また、これらの南北溝に垂直に交差して区画溝B4SD410・409が西方向に延びる。切り合い関係では弥生前期のB4ST410・B4SX408、古代のB4SD415、中世15CのB4SK510、近世17～18CのB4SK497、近世19CのB4SK431・498・512・513を切り、近世19CのB4SK480、時期不明のB4SK511・514・515に切られている。

断面形態は皿状で壁は緩やかに立ち上がり、壁際への円礫の配置や柵列等の護岸施設は伴わない。埋土は明灰色シルトであり、下層への砂の堆積等は認められない。

出土遺物は、磁器では肥前系の染付広東形碗と端反形碗・小碗・小皿・碗蓋、肥前産雨降り文碗、酸化コバルトによる染付端反形碗と小杯。陶器では、在地能茶山窯または尾戸窯の灰釉蛇の目釉剥ぎ小皿、能茶山窯の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿・灰釉台付灯明皿、肥前産の刷毛目皿、肥前系の灰釉呉器手風丸碗、京信楽系の灰釉半球形小碗・灰釉灯明皿、丹波産の甕、瀬戸美濃産火鉢、備前播鉢、生産地不明の灰釉火入れ、土鍋。土師質土器では讃岐岡本系焙烙、かわらけ、胴丸形焜炉。石製品では凝灰岩製硯が出土している。

これらの中には中世遺構からの混入とみられる16C代の備前播鉢、肥前18C前半の染付雨降り文碗、肥前17C後半から18世紀前半代の刷毛目皿等、年代の古い遺物も含まれるが、これら混入品の可能性を含む3点以外は全て18C後半から19世紀中葉までのもので占められる。在地産の陶器・土器類については年代観の明らかでないものが多いが、確実に明治期に下ると把握できる酸化コバルトによる染付磁器は2点含まれている。また、出土した碗、小杯、小皿には近接する大型廃棄土坑B4SK442出土遺物と組をなす揃いの製品が多く認められ、同一所有者の所有遺物が両遺構内に廃棄されたことを示している。

B4SD406は近世土坑B4SK431・498・512・513との切り合い関係、及び出土遺物の組成からみて、その機能時期は19C以降であり明治初頭頃には廃絶したものとみられる。また、遺物廃棄の状況を見ると、遺構内に瓦片が廃棄され、廃棄遺物の年代幅と内容が周辺の本4区近世区画溝と土坑群への廃棄遺物と共通しているところから、居住者転居等に伴う遺構廃絶に際して遺物の一括廃棄が行われたものと捉えることができる。さらに、本区画溝は明治初頭の廃絶をもって完全に機能を失うことから、個人所有地に所属する私的性格をもった近世区画溝であった可能性が高い。

B4SD407 (B4-59図)

時期；近世～明治初頭 方向；N-11°-E

規模；幅1.04～1.47m 深さ0.40～0.46m **断面形態**；逆台形

埋土；黄灰色砂質シルト・青灰色粘土質シルト

床面標高；南端部6.82m、中央部7.10m、北端部7.06m

接続；—

出土遺物；磁器染付（完形－仏飯器1、口縁部－中碗6・小碗1・小皿4・大皿1・鉢1・碗蓋1・瓶1・徳利1、底部－中碗8・小杯1・五寸皿1・猪口3）、陶胎染付（底部－中碗1）、磁器色絵（口縁部－小碗1、底部－酒杯2）、白磁（口縁部－紅皿1・鉢1、底部－小杯1・瓶1）、青磁（底部－瓶1、体部－香炉1）、陶器（口縁～底部－灯明受皿1、口縁部－中碗4・小皿7・行平2・瓶1・甕3、底部－小碗1・捏鉢6・播鉢1・土鍋1・甕1・瓶1・灯明受皿1）、土師質土器（口縁部－焙烙6、底部－かわらけ4、細片－土人形1）、瓦質土器（火鉢1）、瓦片、中世混入（土師質土器鍋3・羽釜1・陶器瓶1）

所見；調査区を南北方向に延びる区画溝である。SD407の東西にはほぼ同時期頃に機能したとみられる区画溝B4SD406・408が並行し、また、これらの南北溝に垂直に交差して区画溝B4SD410・409が西方向に延びる。切り合い関係では、弥生前期のB4ST410・B4SX408・B4SD426を切っており、近代～現代まで機能したとみられる区画溝（攪乱409）に上面を切られている。また、近世18C後半のB4SK526との切り合いは攪乱409によって削平を受け前後関係は不明である。

断面形態は逆台形で、最下層にあたる埋土3層青灰色粘土質シルト層内には近世の遺物を多量に含んでいる。また、その上位を切る様に皿状に堆積する2層黄灰色砂層と1層灰色シルト層は近代以降の遺物を含んでいることから、近代から現代まで機能した区画溝（攪乱409）の埋土にあたる。B4SD407・攪乱409の両岸には石列、東岸には丸木材を使用した胴木と柵列からなる護岸施設を伴うが、胴木が埋土1層内から検出されていることからこれら胴木と柵列、石列の一部については近代以降整備された可能性が高い。

出土遺物は、磁器では能茶山産の染付広東形碗と端反形碗、肥前系の広東形碗と端反形小碗・染付小杯・白磁小杯・染付五寸皿、肥前産のくらわんか手碗と皿・角鉢・猪口・仏飯器・辣蕪形小瓶・色絵酒杯・白磁紅皿、瀬戸美濃産の碗蓋、関西系の色絵酒杯、三田焼の陽刻青磁香炉、産不明の白磁鉢、白磁瓶、青磁瓶、色絵小碗、酸化コバルトによる中碗、徳利、大皿。陶器では、能茶山産の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿・鉢・土鍋・飛鉋を施す錆釉行平鍋・鉄釉甕・鉄釉灯明受皿・鉄釉瓶、瀬戸美濃産の太白手広東形碗、信楽産の灰釉小杯、丹波産甕、関西系の鉄釉甕、堺明石系播鉢、肥前系の呉器手風灰釉丸碗、イッチン掛けによる灰釉碗、灰釉瓶。土器では讃岐岡本系焙烙（7）、関西系焙烙（9）、土佐在地系の可能性をもつ焙烙（6・8）、灯芯油痕を残すかわらけ、土人形、刻印を伴う瓦質土器火鉢、瓦片である。出土遺物の中には瀬戸美濃産梅瓶、播磨型鍋、羽釜、備前焼播鉢等、混入品とみられる中世から近世初頭の遺物が少量混入するが、他は全て18C後半から19世紀中葉までのもので構成される。在地産の陶器・土器類については年代観の明らかでないものが多いが、確実に明治期に下ると把握できる酸化コバルトによる磁器は3点含まれている。また、出土破片は近接する大型廃棄土坑B4SK442、調査区北部寄りに位置するB4SK586出土破片と接合されるものがあり、また、B4SK442

出土遺物と組をなす揃いの碗・皿も含まれている。

B4SD407は出土遺物の年代幅からみて、その機能時期は18C後半頃から19世紀代であり明治初頭頃には廃絶したものとみられる。また、遺物廃棄の状況を見ると、遺構内に瓦片が廃棄され、廃棄遺物の年代幅と内容が周辺のB4区近世区画溝と土坑群への廃棄遺物と共通しているところから、明治初頭頃の居住者転居に伴う遺構廃絶に際して遺物の一括廃棄が行われたものと捉えることができる。さらに、本区画溝は明治初頭期の埋め戻し後も再び近現代まで区画溝として継続して機能し、砂層堆積や護岸施設等を認めている。こうしたことから、B4SD407～攪乱409は集落の南北方向への引水排水溝として、また畔道の側溝としての機能も合わせ持つ区画溝として近現代まで機能した可能性が高い。

B4SD408 (B4-59図)

時期；近世～明治初頭 **方向**；N-11°-E

規模；0.90～1.00m **深さ**0.36m **断面形態**；皿状・逆台形

埋土；黄灰色砂・暗灰色粘土質シルト

床面標高；南端部7.10m、中央部7.15m、北端部7.20m

接続；—

出土遺物；磁器染付（口縁～底部－小碗1・小皿1、口縁部－中碗6・鉢1・猪口2・蓋物1・火入1、底部－中碗6・五寸皿1・酒杯1）、白磁（口縁部－小碗1・小皿1）、陶器（口縁部－中碗・播鉢・行平1・土瓶蓋1・甕1、底部－中碗1・小碗1・小皿1・土鍋1・甕1・瓶1）、土師質土器（完形－かわらけ1）、瓦片、中世混入（備前播鉢）

所見；調査区を南北方向に延びる区画溝である。SD408の西側にはほぼ同時期頃に機能したとみられる区画溝B4SD406・407が並行し、また、これらの南北溝に垂直に交差して区画溝B4SD410・409が西方向に延びる。切り合い関係では弥生前期のB4SK446・555・557・559・B4SD411・426を切り、近代のB4SX404に切られる。さらに近代～現代まで機能した区画溝（攪乱408）には上面を切られている。また、上面を攪乱408に削平されるため近世溝B4SD402との前後関係は不明である。断面形態は逆台形または皿状で、最下層にあたる埋土3層暗灰色粘土質シルト層内には炭化物と近世の遺物を多量に含んでいる。また、その上位を切る様に皿状に堆積する2層黄灰色砂層と1層灰色シルト層は近代以降の遺物を含んでおり、近代から現代まで機能した区画溝（攪乱408）の埋土にあたる。B4SD408・攪乱408の西岸には石列、東岸の一部には丸木材を使用した胴木と柵列からなる護岸施設を伴うが、胴木が埋土1層内から検出されていることから、胴木・柵列及び石列の一部については近代以降整備された可能性が高い。

出土遺物は、磁器は肥前産の染付丸碗・コンニャク印による丸碗・中皿、肥前系の広東形碗・染付端反形碗・小皿・猪口・八角鉢・蓋物・火入れ、関西系の染付小碗・白磁酒杯、関西または瀬戸美濃系の白磁陽刻小皿。陶器では、能茶山産の飛鉋行平・鉄釉甕・鉄釉土瓶蓋、肥前内野山産の銅緑釉小皿、在地産の可能性をもつ高台施釉の灰釉丸碗（ジ451）、産不明の灰釉小碗、灰釉土鍋。土師質土器では灯芯油痕を残すかわらけ。その他、瓦片である。出土遺物の中には中世の備前播鉢、

18世紀前半の肥前内野山産銅緑釉小皿1点が含まれるが、他は全て18C後半から19世紀中葉までのもので構成される。在地の陶器・土器類については年代観の明らかでないものが多いが、確実に明治期に下ると把握できる酸化コバルトによる磁器は2点含まれている。また、出土した碗・皿には近接する大型廃棄土坑B4SK442出土遺物と組をなす揃いの碗・皿も含まれている。図示したものは軒平瓦（10～12）、寛永通宝（14）である。

B4SD408は出土遺物の年代幅からみて、その機能時期は18世紀後半頃から19世紀代であり明治初頭頃には廃絶したものとみられる。また、遺物廃棄の状況を見ると、遺構内に瓦片が廃棄され、廃棄遺物の年代幅と内容が周辺のB4区近世区画溝と土坑群への廃棄遺物と共通しているところから、明治初頭頃の居住者転居に伴う遺構廃絶に際して遺物の一括廃棄が行われたものと捉えることができる。さらに、本区画溝は明治初頭期の埋め戻し後も再び近現代まで区画溝として継続して機能し、砂層堆積や護岸施設等を認めている。こうしたことから、B4SD408～攪乱408は集落の南北方向への引水排水溝として、また畔道の側溝としての機能も合わせ持つ区画溝として近現代まで機能した可能性が高い。

B4SD409（B4-59図）

時期；近世18C後半～明治初頭 **方向**；N-80°-W

規模；幅0.54m 深さ0.20m **断面形態**；U字状

埋土；灰色シルト

床面標高；西端部7.31m、東端部7.37m

接続；—

出土遺物；磁器染付（口縁部-中碗2、底部-中碗1）、白磁（口縁部-猪口1）、陶器（口縁部-中碗1・小碗1・小皿1・片口鉢1・小甕1・土瓶1・土瓶蓋2、底部-小碗1・小瓶1）、土師質土器（口縁～底部-かわらけ1）、瓦質土器（口縁部-火鉢1）、瓦片、中世混入（陶器甕1）

所見；調査区西部を東西方向に延びる区画溝である。B4SD409の南側にはほぼ同時期頃に機能したとみられる区画溝B4SD410が並行し、また、これらの東西溝に垂直に交差して区画溝B4SD406・407・408が南北方向に延びる。切り合い関係では、弥生前期のB4SD411、弥生前期末から後期のB4SD420・421、弥生のB4SD418、近世17C後半の近世墓B4SK554・556、時期不明のB4SK564を切り、時期不明のB4SK447・451に切られる。

断面形態はU字状で、壁際への円礫の配置や柵列等の護岸施設は伴わない。埋土は灰色シルトであり、下層への砂の堆積等は認められない。

出土遺物は肥前系の染付端反形碗・白磁猪口、信楽産の半球形小碗・灰釉端反形小碗、肥前系の灰釉呉器手風丸碗、能茶山産の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿・鉄釉片口・鉄釉小甕、灰釉小瓶、鉄絵を描く土瓶蓋、尾戸焼の可能性をもつ土瓶と土瓶蓋、かわらけ、瓦質土器火鉢、瓦片である。

出土遺物の中には中世遺構からの混入とみられる15C代の常滑産甕1点が含まれるが、他は全て18C後葉から19世紀中葉までのもので構成される。在地の陶器・土器類については年代観の不明なものが多いが、確実に明治期に下ると把握できる酸化コバルトによる磁器は1点含まれている。また、

他遺構出土破片との接合、揃いの製品は確認できていない。また、近接する大型廃棄土坑SK442とSD409間には出土破片の接合が成り立っており、また、組をなす揃いの碗・皿も含まれており、同一所有者の所有遺物が両遺構に廃棄されたことを示している。

図示したものは陶器土瓶(5)と土瓶蓋(3)、瓶(2)、灯明皿(4)である。

B4SD409は17C後半の近世墓B4SK554・556との切り合い関係、及び出土遺物の組成からみて、その機能時期は17C後半以降、特に18C代から機能した可能性が高く、明治初頭頃には廃絶に至ったものとみられる。また、遺物廃棄の状況を見ると、遺構内に瓦片が廃棄され、廃棄遺物の年代幅と内容が周辺のB4区近世区画溝と土坑群への廃棄遺物と共通しているところから、居住者転居に伴う遺構廃絶に際して遺物の一括廃棄が行われたものと捉えることができる。さらに、本区画溝は明治初頭の廃絶をもって完全に機能を失うことから、個人所有地に所属する私的性格をもった近世区画溝であった可能性が高い。

B4SD410 (B4-59図)

時期；近世～明治初頭 **方向**；N-75°-W

規模；0.88～1.33m **深さ**0.20～0.22m **断面形態**；皿状

埋土；灰黄褐色粘土質シルト

床面標高；西端部7.20m、中央部7.14m

接続；—

出土遺物；磁器染付（口縁部-小碗1・鉢1、体部-髪油壺1）、白磁（口縁部-小杯1、底部-小碗1・小瓶1）、陶胎染付（口縁～底部-中碗2）、陶器（口縁部-中碗1・小皿2・中皿1、底部-捏鉢1・小瓶1）、瓦質土器（底部-火鉢1）、中世混入（播鉢1・羽釜1）

所見；調査区西部を東西方向に延びる区画溝である。B4SD410の北側にはほぼ同時期頃に機能したとみられる区画溝SD409が並行し、また、これらの東西溝に垂直に交差して区画溝B4SD406・407・408が南北方向に延びる。切り合い関係では弥生前期のB4SD411・418、弥生前期末から後期のB4SD420・421、古代のB4SD415を切り、近代～現代まで機能した区画溝（攪乱410）に上面を切られる。また、上面を攪乱410に削平されるため近世溝B4SD406との前後関係は不明である。

断面形態は逆台形または皿状で、最下層にあたる埋土2層灰黄褐色粘土質シルト層内には近世の遺物を多量に含んでいる。また、その上位を切って堆積する1層褐灰色シルト質砂層は近代以降の遺物を含んでおり、近代から現代まで機能した区画溝（攪乱410）の埋土にあたる。また、B4SD410の南岸と攪乱410の西側には石列による護岸施設が設けられている。

出土遺物は磁器は肥前産の陶胎染付碗・染付筒形碗・白磁小瓶・白磁小杯。陶器では能茶山産の鉄釉蛇の目釉剥ぎ小皿・灰釉鏝縁中皿・鉄釉捏鉢・鉄釉小瓶、尾戸窯産の灰釉半筒形碗(1)、瀬戸美濃産の太白手広東形碗、産不明の灰釉碗。その他、瓦質土器火鉢である。出土遺物の中には16C前半の備前播鉢、16世紀の土師質土器羽釜等中世遺構からの混入とみられるものの他、18世紀前半の肥前産陶胎染付碗、18世紀の肥前産染付髪油壺、染付半菊文筒形碗等18世紀代に遡る遺物3点が含まれるが、他は全て18世紀後葉から19世紀中葉までのもので構成される。在地の陶器・土器類につ

いては年代観の不明なものが多いが、確実に明治期に下ると把握できる酸化コバルトによる磁器は確認できない。また、他の明治初頭期廃絶遺構出土破片との接合、揃いの製品は確認できておらず、他の明治初頭期廃絶遺構群に共通する瓦の廃棄も認められない。図示したものは尾戸窯産の灰釉半筒形碗（1）である。

B4SD410は出土遺物の年代幅からみて、その機能時期は18世紀から19世紀代であり幕末期頃に一時廃絶し遺物廃棄が行われたものとみられる。この後、本区画溝は改修され近現代まで引水溝として機能している。

報告書抄録

ふりがな	たむらいせきぐん							
書名	田村遺跡群Ⅱ							
副書名	高知空港再拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第1分冊							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 85 集							
編著者名	前田光雄							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たむらいせきぐん 田村遺跡群	こうちけん 高知県 なんこくし 南国市 たむら 田村 あざにほんまつ 字二本松 南土居の前他	39204	040234	33° 33′ 8″	133° 39′ 48″	平成8年8月～ 平成13年12月 A・B区調査期間 平成8年12月～ 平成12年8月	154,167m ² A区総面積 2,369m ² B区総面積 14,757m ²	高知空港 再拡張整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
田村遺跡群 A・B区	集落跡	弥生時代 前期 中期～ 後期	竪穴住居跡12棟 土坑476基 溝4条 流路	弥生土器 石器 鉄器 銅釧		弥生時代前期の 遺構の拡がりを 確認した。		
	集落跡	中世 近世	環濠屋敷1 土塁（田村城館） 掘立柱建物跡 土坑 墓 ピット 溝	土師質土器 瓦質土器 貿易陶磁器 近世陶磁器 石器 鉄器		中世～近世の集落の 拡がりを確認		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第85集

田村遺跡群Ⅱ

第1分冊

2004年3月31日

編集 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社